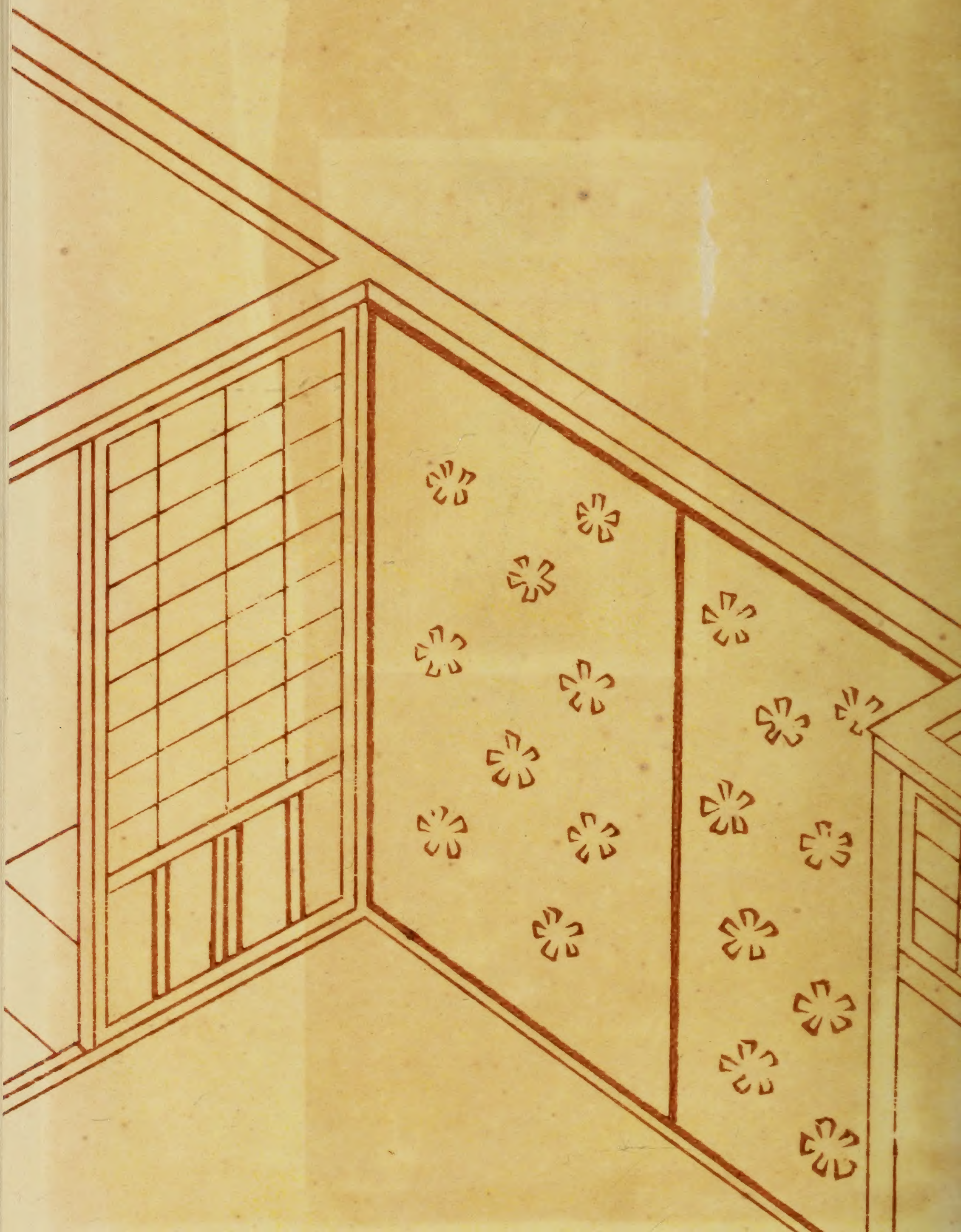
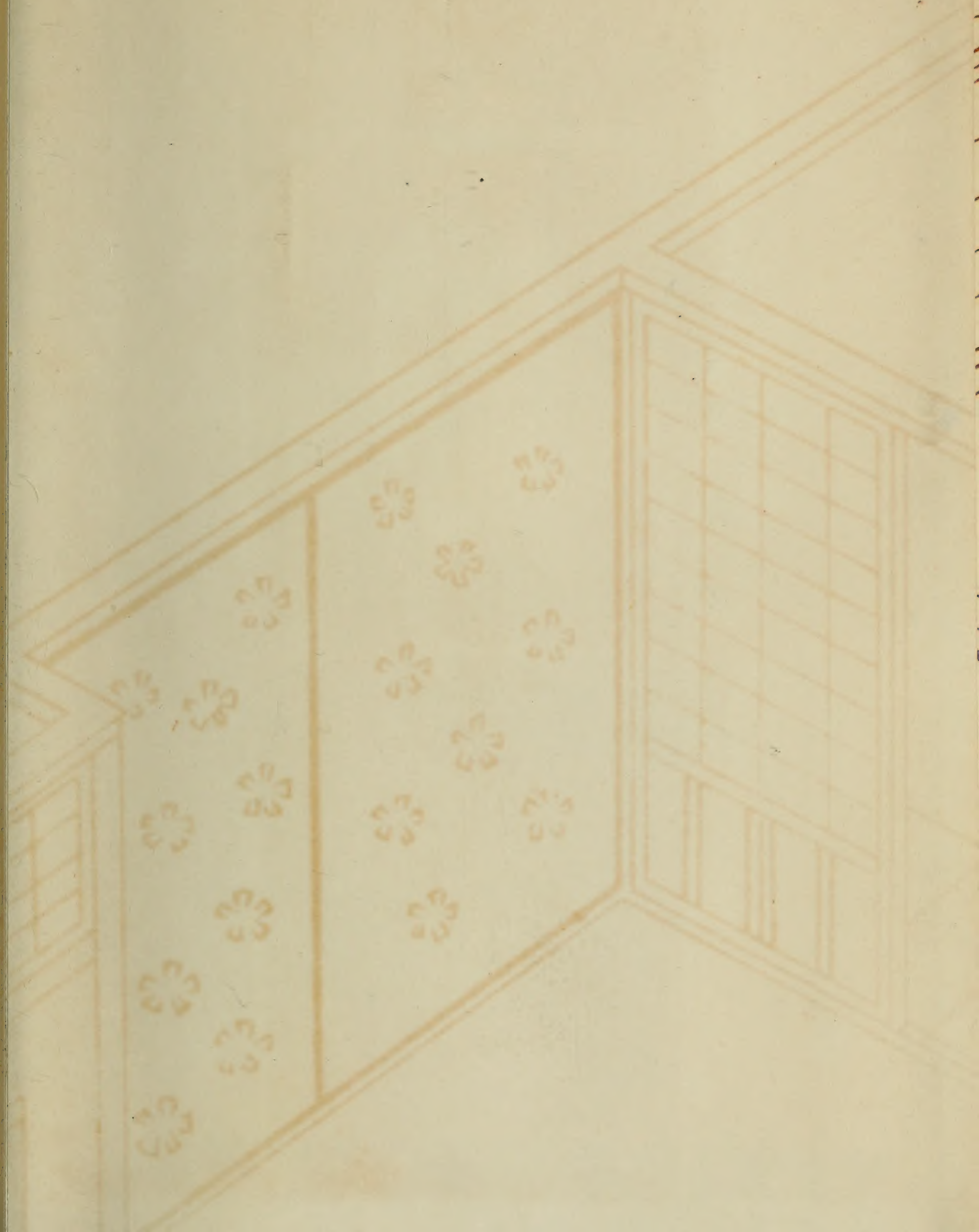






大南北全集

第十一巻

大南北全集 第十一卷

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

東京 春陽堂刊行

大南北全集 第十一巻 目次

挿繪目次

口繪解説

■卷頭に大きく入れた、斧渡しの錦繪は、「藤川船艤話」の「双子斧渡し」の場であるが、本文解説にも記した通り、この狂言が上演されるまでには、非常に迂餘曲折があつたらしく、南北の腹案と實際とは餘程違つて來たので、從つて、發兌早きを急ぐところから、作者の腹案を聞いて執筆する錦繪は、實際と大分違つて來たのである。この「斧渡し」も、實際は袖助であるべきが、お妻といふ、脚本中に現はれぬ役になつてゐるのは、最初の南北の腹案に依つたからである。「回向院」の場も、金五郎とお松が並んでゐて、しかも御叮嚀に臺詞まで入つてゐるが、脚本とは大變な相違である。これで見ると、脚本まで出來たのが、上演に際しては改竄されたらしい。いづれも俳優の都合からであらう。「返り討」の場だけは、人物は違はないが、場面が海邊になつてゐるなぞ、少々變である。錦繪と實際と違つてゐる事は折々あるが、斯くまで念の入つた違ひやうは珍らしい。錦繪だけを信じてゐると、とんだ誤解を起す譯である。筆者は三種とも五渡亭國貞である。

■「靈驗龜山鉾」の錦繪は、法臺院外のだんまりで、同じく國貞の筆であるが、これは本文とは違

はない。また仇討の場へ入れた初代豐國筆の錦繪は、この時のではなく、文化二年四月市村座上演の「花菖蒲浮木龜山」といふ違つた龜山仇討の大詰なのであるが、水右衞門が同じ幸四郎であるし、場面は殆んど同じであるから、身替りに入れて置いたのである。初代もこの時分は立派なものである。

■「鬼若根元豪」の錦繪は、お染久松道行の場が發見されながら、印刷が間に合はなかつたので入れなかつた。繪本番附は例によつて各狂言の場面へ挿入して置いたが、「靈驗龜山鉾」だけは無かつたので、櫓下番附をコロタイプ版で挿入して置いた。



市川團十郎
岩井紫若
五渡亭国貞画
五渡亭国貞画

解說及年表

本卷には、南北の作の「龜山仇討」のうちで、代表的な二篇を並べ收めて見た。南北の「龜山仇討」は、この外に、第一卷に收めた「靈驗曾我籬」と、第十五卷に入れる「獨道中五十三驛」とがあるが、前者は何れかといへば長兵衞權八の筋が中心であり、後者は龜山氣分が餘り稀薄である。純粹の龜山仇討を取扱かつたものは、本卷收錄の二篇である。

大阪城代青山因幡守の家臣、石井宇右衞門は、友人赤堀遊閑の一子源五右衞門を預かつてゐたが、源五右衞門は生來傲慢で、劍道の事から恩人の宇右衞門に恨みを含み、宇右衞門を暗討ちにして逐電した。宇右衞門のみならず、その長男兵右衞門までを、後に騙つて返り討にした。その下の源藏半藏兄弟は、未だ幼少であつたが、成人してから千辛萬苦して源五右衞門の行くへを探すと、源五右衞門は水之助と改めて、勢州龜山の城主、板倉周防守の家臣となつてゐる事が解つた。兩人は若黨に身をやつして家中に入込み、遂に機を得て水之助を討取り、父兄の仇を報じた。それは元祿十四年五月九日の朝であつた。元祿曾我と謳はれて、この事件は有名になつた。

この「龜山仇討」は、翌元祿十五年九月には、はや戯曲に脚色された。それは竹本座の淨瑠璃で、「道中評判敵討」といふ、ごく短かいものであつた。これは「一心五界魂」の切淨瑠璃になつてゐるので、作者も同じく近松だらうといふのが一斑の說であるが、確乎たるところは解らない。その後、淨瑠璃としては、「道中龜山噺」（近松半二、安永七年）や、「敵討優曇華龜山」（司馬芝叟、寛政六年）が出來て相應に流行し、歌舞伎では大阪に「敵討千手助太刀」（年月作者不明）江戸には「楓錦龜山通」（安永五年）が上演されたが、中にも「敵討千手助太刀」は非常に喝采を博し、「龜山仇討」といへば、先づこの狂言といふ程になつて、上方は勿論、江戸でも盛んに演じられ、明治以後までも上演を絶たなかつたものである。この二者以外、上方にも江戸にも、數種の書替へ狂言が作られてゐる。

藤川船艙話

文政九年五月、中村座に上演された通し狂言である。藤川水右衛門の役は、五世幸四郎獨得ときまつてゐたのだが、それを七代目團十郎にやらせて見たのである。七代目團十郎は、實惡の方面に於ては、すべてを幸四郎寫しに演じて好評を博したもので、この水右衛門もスッカリ和泉町張りで、その憎々しさを見せた譯である。

この狂言の上場までには、何か事情があつて、餘ほど迂餘曲折を極めたらしい。南北の腹案と實際の舞臺とは、可成り違つてゐたり、拔けたりしてゐるらしいのである。それは、卷頭や本文に挿入した錦繪を見てもわかる。「畚渡しの場」の繪面でも、實際は袖介といふ下郎であるのが、お妻といふ、脚本には單にたつた一言、端役の口から云はれるだけで、てんで出もせぬ女の役に描かれてゐる。水右衛門にしても、まだ源吾と改名せぬ前から、旣に赤堀源吾と記してある。「回向院の場」の繪面を見ても、力持ちの金五郎に、仲居のお松が逢ふやうに描いてあつて、しかも御叮嚀にも二人のセリフまでも入つてゐるが、本文ではお松は大詰へ出るばかりで、金五郎とは顔が合つてゐないのである。錦繪ばかりでなく、本文の中でも、前記のお妻を始め、明石屋兵助、濱田瑞軒、なぞといふ役名は、口にされるばかりで一向に出て來ない。それから、小さん金五郎に關する二幕が、あまりに唐突で、前後と關係が無さ過ぎるのもをかしい。櫓下番附を見ると、「田邊文藏實ハ掛塚伴五郎」なぞといふ役名があるところから考へると、伴五郎が金五郎の本名をかりて、本國へ乘りこむといふ一幕が慥かにあつた筈なのである。要するに、南北の腹案は、もつと複雜に、もつと面白く出來てゐたらしいのであるが、俳優の故障か時間の都合か、何等かの事情があつて、本文のやうに變へるべく餘儀なくされたに違ひなからう。本文中にも、その變へ方があまりに急であつたので、腹案と筋が衝突し、矛盾と知りつゝ直す事も出來ないで、

其まゝになつたらしい個所が盛んに出てくる。錦繪なぞは、興行と同時に發兌する必要から、作者の腹案を聞いて直ぐに執筆するものであるから、斯ういふ場合には、實際の舞臺と相違する繪面が現はれてくるのも、是非がないのである。イヤ、腹案ばかりではない、一旦出來あがつた脚本まで、改竄させられたかも知れぬ。「回向院の場」の錦繪の傍へ記したセリフなぞは、畫工が勝手に執筆の出來るものではないから、慥かに一度は、あのセリフも出來たに違ひないのだ。それが本文中で發見されないのは、書きあげた脚本が無事に通過せず、急いで書き直した結果としか思はれぬ。これは主として俳優に關係した事情からであらう。本文中にも云はせてゐるが、立女形の岩井粂三郎は、大病後の初出勤なのであつたから、體の都合で、南北の腹案よりも、樂な役に廻してもらつたといふ事もあつたらう。又岩井半四郎は、市村座に出勤してゐる人で、この月も「鏡山」に、大姫とお初を勤めてゐて、それを濟まして中村座へ駈けつける順序になつてゐるのだから、たとへ「回向院の場」へ出るやうな筋に脚本が出來ても、時間が許さぬといふ事情もあつたのである。岩井紫若は又、半四郎の代りに、中村座を濟まして市村座へ駈けつける人であつたから、二番目に役があつても、勤めやうが無かつたであらう。斯うした俳優の都合から、いろ〳〵にもつれて、脚本も止むを得ず最初の腹案と變つて來たのだらうと思ふ。

それにしても、岩井半四郎と、その二人の子の粂三郎紫若が同座するといふのが面白い。この頃は半

四郎の威勢が盛んで、宛然女王の觀があつたさうであるが、それといふも、親子揃つて三座の立女形を勤めるだけの、技倆を備へてゐた爲にもよるのであつたらう。

役割りは左の通りであつた。

袖介妹、お松（五世岩井半四郎）石井下部、袖介（二世關三十郎）石井源之丞。古鐵買ひ、中野藤助（ニヤク三桝源之助）掛塚伴五郎。馬士、蝮の大六（ニヤク中村芝樂）右内妻、おらい。大六娘、お才（ニヤク吾妻藤藏）卜庵女房、早苗。臑切り眼六（ニヤク大谷門藏）香川帶刀。浪人、北向きの桶直（ニヤク岩井喜代太郎）浪人、割下水のこけ安（市川染五郎）宿役人、太郎八（市川男の藏）所化、通門（市川門三郎）名越時次郎。人足、箱根の權（ニヤク市川宗三郎）名越淺次郎（關三太郎）石井右内。濱田瑞軒（ニヤク成田屋宗兵衛）名越後室、篠原（市川おの江）藤田卜庵（澤村しやばく）帶刀娘、お時（岩井粂若）右内娘、藤川。女輕業師、小さん（ニヤク岩井粂三郎）藤川水右衛門 後ニ赤堀源吾。力持ち、金五郎 實ハ田邊文藏（ニヤク七世市川團十郎）藤川下部、九介（中村傳九郎

この狂言は再演されなかつた。

靈驗龜山鉾（れいけんかめやまほこ）

文政五年五月、河原崎座に上演の筈で、出來あがつてゐた狂言なのであるが、初日の二三日前、同座

は自火で燒失したので、新築落成後の七月二十九日を初日に、秋狂言として興行したのである。昔から、仇討狂言は五月と極まつてゐたのであるが、斯うした譯から秋に延びたので、番附にもその斷わり書が記してある。本來こんな場合には、大抵新らしく作るのが習慣なのであるが、番附に斷わつてまで秋に出したのは、充分稽古をした後であつた所爲もあらうが、又一つはこの作を捨てかねた所から來てゐやうと思ふ。南北の仇討狂言としては、慥かに傑作の部に屬する物である。

「藤川船」に小さん金五郎を點出して、仇討狂言の武張つた中へ色氣を附けたと同じく、これにはお妻八郎兵衞の書替へを加へて、全體に世話狂言味を增したところに、南北獨特の味と手腕とが見える。所詮、南北は世話物作者なので、どうしても世界を世話に引直さなければ、充分な技倆がふるへなかつたのであらう。

水右衞門の姓が、江戸では大抵藤川とするのが普通なのに、この脚本に限つて藤田と名乘らせてあるのは、どういふ譯なのか、何か特別な理由があるやうにも推される。或ひは、當時の當込みがあつたのではないか。五幕目に出てくる「龜山の化け物」といふセリフは、文政八年の「盟三五大切」にも出て來て、いまだにその意味が通じないのであるが、何かこの詞と、藤田といふ姓とに、關係はあるまいか、と疑られる。

初演の役割は、左の通りであつた。

藤田水右衞門。同父、藤田卜庵。湯灌場八郎兵衞（三ヤク五世松本幸四郎）明石の縮屋、お松。二丁町の藝者、お妻（二ヤク三世市川門之助）大岸主税之助（尾上三朝）法臺寺了善和尙。林伴左衞門（二ヤク中島三甫右衞門）掛塚官兵衞（大谷門藏）藤田下部、伴助。大岸の足輕、權平（二ヤク阪東善次）卜庵の箱持ち、左兵衞。石井下女、おとら（二ヤク松本虎藏）胴腹權九郎。天狗小兵衞（二ヤク尾上斧藏）刀屋源吉（松本半十郎）常磐津の與八。縮買ひ才兵衞（二ヤク市川の助）石井源次郎（市川高麗藏）おとぼれ六藏。雲津鄕助（二ヤク市川染五郎）若黨、神崎與三（松本錦吾）水右衞門云ひ號け、お才（中村芝友）若黨、轟金六。明石家中、石井六之進（二ヤク尾上多見藏）石井兵助。中野藤兵衞。丹波屋後家、おりき（三ヤク尾上蟹十郎）六之進女房、お浪（尾上菊次郎）三木十左衞門。お松父、佛作助（二ヤク荻野伊三郎）大岸賴母。若黨、武井文藏（二ヤク關三十郎）奥女中、藤川　實ハ兵助女房白綾。石井母、貞林尼。大岸女房、月の戸（三ヤク中村大吉）石井源之丞。岩淵萬五郎實ハ石井下部袖助（二ヤク三世尾上菊五郎）

この狂言は、明治六年十月の中村座に、珍らしくも再演された。この時は、序幕の「石和川」三幕目の「二丁町揚屋」四幕目の「返り討と燒場」五幕目の「石井屋敷とお松の內」四幕だけを上場したのであつた。名題を「讐討龜山新聞」と變へたところが、いかにも明治初年らしくて面白い。

この時の役割は左の通りであつた。

水右衞門。八郎兵衞。文藏（三ヤク五世尾上菊五郎）源之丞（澤村訥升）おつま。お松（二ヤク八世岩井半四郎）石井源藏（中村仲藏）金六。六之進（二ヤク中村鶴助）おりき（中村鶴藏）お浪（岩井染之助）おつれ（岩井しげ松）官兵衞（大谷萬作）

このうち、源藏といふのは貞林尼を、おつねといふのは作助を、共に俳優の都合で變へた役名である。

その後、中島座で一度上演されたぎり、今日まで打絶えてゐる。

鬼若根元臺

文政八年、中村座の顏見世狂言である。世界は「伊豆日記」で、これにお染久松を摛交ぜてある。顏見世狂言へ世話物の別世界を混合するといふ手法は、矢張り南北が流行らせた事なので、これも自己の便宜の爲であらう。それにしても、賴朝の世界へお染久松を配するとは、放膽すぎたやり方で、南北でなければ出來ない仕事である。さうして、「源平橋の場」は、世話から時代へ戻る顏見世特有の無理な形式に隨ひながら、しかもあゝいつた當時の下層生活を、活き〳〵とスケッチしてゐる手際なぞは、これも南北ならではと思はせる。

全體は名題も示す通り、鬼若丸の辨慶が中心で、最初は稚兒姿で出て、大詰には七ッ道具を脊負つた姿を見せてゐる。三建目には例によつて「だんまり」があり、大詰は「鏡山の巖窟」で、鏡の宿の遊女が窟へ立籠るなぞといふ奇拔な趣向もある。五建目には、近松の「平家女護島」鬼界ヶ島の場を加へてある。そして、あの海女千鳥を、更に「關川宿の場」でも使つてゐる。

脚本は、一番目の小幕と、二番目全部だけしか發見されなかつた。併し、お染久松に關する件は、これだけで充分である。清元の淨瑠璃の本體が解つただけでも愉快である。淨瑠璃「道行浮塒鷗」は、清元としても重要な曲であり、その振りは、芝居を放れて、踊の師匠に傳はり、今日でもお浚ひの席では、きつと見せられるが、無論あり來りの道行に、たゞ猿曳が搦むだけで、頗る平凡と思はれてゐたのが、この脚本を見ると、どうして中々複雜な芝居である事がわかる。尤も、今日傳はつてゐる清元の詞章は、本文記載のそれの半分位の長さしかない。これは素淨瑠璃として行はれるやうになつてから、今のやうにカットされたものであらう。

役割りは左の通りであつた。

鬼門の喜兵衛（實ハ江田源三廣綱）猿廻し、山谷の桃太（七世市川團十郎）鏡の宿の遊女、染川（後ニ喜兵衛女房、お六）油屋丁稚、久松（岩井粂三郎）源の牛若丸。鬼界ヶ島の海女、千鳥。清兵衛女房、根曳。油屋娘お染（岩

井紫若）順禮、清兵衞 實ハ越中前司盛次（關三十郎）龜王丸。右兵衞佐源頼朝（三桝源之助）長田の後家、内海（澤村しやばく）女乞食、お捨（大谷門藏）鏡の宿の長九郎。家主、左四郎（阪東彦左衞門）庵崎の百姓、久作（惣領甚六）油屋手代、善六（三桝森藏）晒屋次郎八（成田屋宗兵衞）娘、お光（岩井春次）

天保十四年二月中村座では、伊達の狂言の大切へ、「道行浮塒鷗」の一幕だけ附けた。淨瑠璃の幕だけなので、勿論顔見世臭味は少しもなく、お染久松が心中しようとするところへ、山の宿の仁三といふ鳶の者が現はれて救ふといふやうな幕切れに改めた。この時は

お染（尾上榮三郎）久松（岩井紫若）猿廻し（澤村訥升）仁三（市川高麗藏）

の役割りであつた。この以後は、舞臺には現はれず、單にお浚ひものとして、それも子供の初心向きな踊としてのみ殘つてゐた。

大正十二年二月の市村座に、珍らしくこの淨瑠璃が中幕に出た。

お染（尾上榮三郎）久松（市川男女藏）猿廻し（六世尾上菊五郎）

その後、芝居では一度も出ない。

渥美清太郎識

藤山船鱔話

ふぢかはぶねのりあひばなし

藤川船𦨞話

第一番目　三建目

遠州濱松八幡の場
犀ヶ崖念佛堂の場

役名――石井下部、袖介。石井源之丞。右內妻、おらい。卜庵女房、早苗。香川帯刀。舞坂林藏。曾根川官兵衛。神職、次山丹下。非人、根ッ子の虎。同、狼の音。名越淺次郎。名越時次郎。雲津鄕助。菊川良助。石井右內。名越後室、篠原。藤川下部、九介。久保川山藏。板橋八平。右內娘、藤川。藤川水右衛門。

本舞臺、三間の間、高足の石段。正面、一面の石の玉垣、上へ寄せて石の鳥居。平舞臺、上の方、一間の障子屋體。これに注連繩を張り、御供所の體。下の方、一間の番小屋、幕を張り、突棒刺股なぞ並べ、よき所に誂らへ松の立ち樹。すべて濱松八幡社の模樣。爰に篠原、裲襠衣裳、切下げ髮、後室の拵らへ、床几にかゝり、帯刀、麻上下、老けたる拵らへ。良助、上下大小にて扣へ、腰元三人、鳩

の入つたる鳥籠を持ち、篠原に附添ひ居る。平舞臺上手に早苗、襠補形、局の拵らへにて、三方に竹刀を二本載せ、これを持ち、下手に丹下、神主にて、皆々を出迎ひの體。若侍ひ二人　絹羽織にて番小屋に扣へて居る。皆々よろしく、大拍子にて賑やかに幕明く。
ト直ぐに靜かなる大拍子になり

丹下　ハツ、當國の御城主、名越家の後室樣、御忌明けとあつて、當社八幡宮へ御參詣、いづれも方にも、御苦勞千萬に存じまする。
帶刀　これは〳〵、出迎ひとして神職次山丹下、大儀々々。
腰一　卽ち今日は、大殿樣の御忌明け。それゆゑ後室篠原さま。
腰二　このお社へ御參詣も、殿樣の御武運を祈りの爲。
腰三　奥お表に至るまで、お供申して今日の參詣。
帶刀　介添へとして香川帶刀、これまでお供仕る。
良助　新參ながら菊川良助、萬事麁略なきやう、警固仕つてござります。
篠原　今日當社へ參詣は、忌明けの神詣でのみにあらず、先達て大殿樣歿り給ひし後、未だ御家督定まらず、それといふも、義理ある先の奥方の子、時次郎どの、又自らが悴たる淺次郎、いづれに家

督を繼がせんと、一家中の評議まち〲。心苦しきは妾一人、折も折とて力に思ふ、家老田邊文太夫は病氣。この上は兎にも角にも、氏神のお心に任せし上の家督定めと、それゆゑの今日の參詣。

早苗　幸ひ當社の御寶前にて、御兄弟のお附き人、竹刀の勝負が家督の繼目。いづれも樣、隨分御信心なされませ。

良助　イカサマ、天安の相撲に習ひ、勝負によつての御家督定め、流石は奥方の御發明、驚き入りましてござります。

帶刀　その竹刀の勝負には、時次郎さまの方には藤川水右衛門どの、まつた御舍弟淺次郎さまの方には石井右内どの、双方役目定まりしに、折にふれてこの程より、右内どのには何とやらん病氣の由悴源之丞を、その名代と申せども、時次郎さまの仰せには、今さら名代にてはならぬと、一徹なる御仰せ。

早苗　左樣でござりまする。一度役目を申しつけし上は、代りでは濟まぬと、固意地な若殿樣……
イヤ、固意地と申せば、私しが夫、藤川卜庵こと、七年以前大殿樣の御病氣を伺ひしに、御病體を見違へしお咎めにて、お暇たまはり、もう浪人して七年。いかに堅いがお屋敷の風とは申しな

がら、あまりと申せば固意地な掟でござりまするなア。

良助　イヤ〳〵、それと申すも、大殿御病氣の折、卜庵老の藥をお用ひあつてより、次第に重り、遂には御落命。さるによつて、不首尾なは卜庵どの、時の廻り合せ、不運と申すものでござらうて。

帶刀　これにつけても、物堅いは石井右内どの、この度の試合ひの役目、蒙むらるゝと其まゝ、緣に引かされ、一家のよしみと云はれてはと、水右衞門どのへ娶合さんと遣はし置きたる、娘藤川どのを、この程取返したとの事、左樣でござるかな。

早苗　イヤモウ、お屋敷の風とは申しながら、寄るも觸るも堅い衆達。そのお堅いお守とあれば、淺次郎さまも、さぞかしと思ひやられますわいの。ホヽヽヽヽヽ。

篠原　その淺次郎も、今日の勝負次第にて、たとへ當家は繼がずとも、御分地たる勢州龜山の城主、近藤家へ養子となれば同じ事。何は兎もあれ、氏神の御心に任せし上は、當社へ納めるその白鳩、淺次郎が放生會。この場に於て、ソレ、腰元ども。

腰皆　畏まりました。

ト腰元三人、持つたる鳥籠を明ける。風の音になり、籠の中より白鳩大分出て舞ふ。この時風の音烈しく、日覆より鷹一羽飛んで來り、鳩と一緒に飛びかふ。一セイになり、向うより時次郎、若衆かつ

ら、半纏股引、ぶッ裂き羽織、鷹狩りの拵らへ。これに郷助、上下大小にて附添ひ、跡より林藏、山藏、半纏股引、大小にて附添ひ出る。東の口より淺次郎、若衆かつら、半纏股引、ぶッ裂き羽織、鷹野の拵らへ。八平、官兵衞、半纏股引、大小にて、鷹野の形。若黨四人ほど、鷹野の形にて双方へ附いて出て來て、この人數皆々、鳩を見て花道にとまり

時次　今日父の忌明にて、家督定めの手始めと、遊獵なして來かゝる折から

淺次　我が放したる白鳩に、共に飛びかふ鷹の振舞ひ。

林藏　今日の家督を横合ひより、妨げなすべき者あつてか。

山藏　八幡宮の告げなるか。

官兵　何は兎もあれ若殿には、少しも早く神前へ

皆々　御參詣あられませう。

ト三味線入り大拍子になり、この人數皆々本舞臺へ來り、時次郎淺次郎は石段の上眞中へ、皆々よろしく住ひ

帶刀　これは〱、御兄弟とも、御忌明のしるしとあつて、未明よりの御鷹狩り。殊には當社へ御參詣後室樣にも、御滿足でござりませう。

篠原　待ちかねし二人の衆、幸ひ今日、當社の神前にて、互ひに家督は竹刀の勝負、神慮に任せし家の繼目。申しつけたる天國の御劍は、神は非禮を受け給はず、たゞ正直を元となし、國を治める御器量なければ、名越家の相續は成り難しと、卽ち竹刀の勝負と決し、役目とあつて藤川水右衞門石井右內、後方までに出仕の手筈。

鄕助　そのお相手には石井右內どの、試合ひは卽ち未の上刻。

八平　八幡宮の神前が、卽ちお家分け目の勝負。

林藏　神は見通し、御惣領、たとへ試合ひの勝負はなくとも、お世繼は時次郎さま。

山藏　それ〳〵、兄を差おき御舍弟の淺次郎さま、どうして御家督思ひもよらず。

良助　アイヤ、左樣に非ず、いづれがそれと定まらぬ、御家老中の評議まち〳〵。

帶刀　殊に田邊文太夫どの病氣にて、未だ一決せざるゆゑ、後室樣の御計らひにて、それゆゑ今日の竹刀打ち。

官兵　して、お相手の右內さまは、最早出仕いたされましたか。

良助　アイヤ、右內どの儀は病後なれども、お家の繼目とござるゆゑ、未の刻までには出仕いたす筈。殊には源之丞どのも、天國の劍預かりの役目。拙者、源之丞どのより右の御劍は、持參仕つてご

ざりまする。

官兵　すりや、右内どのには後より御出仕とな。藤川氏と竹刀のお相手、我れ〳〵どもまで安堵仕る。

郷助　石井氏が御自身の立合ひとござらば、未の刻がお家の分け目。藤川水右衛門どのゝ出仕次第。

八平　左やう〳〵。我れ〳〵に至るまで、武藝の面目。この上は一刻も早く、右内どのゝ御出仕を待ちかねまする。

早苗　成る程、いづれも樣のさう思し召しまするも、皆面々のお附きの殿樣を、御代に立てたい身の勵み。おしつけこれへ右内さま見えられなば、早速に申しつけ、悴藤川水右衛門と竹刀の勝負。勝つも負けるも時の運、神の心が曇らぬ鏡。ナア、申し、後室樣。

篠原　いかにも其方の云やる通り、竹刀の勝負が卽ち鏡。

淺次　ハツ、母上樣へ申しあげまする。父上の忌明とは申しながら、未だ日柄も經たざれば、心ばかりの放生會、申しつけて下さりましたか。

腰一　ハツ、後室樣の仰せにて、持參いたせしあの白鳩。

腰二　先程この所にて、殘らず放ち

腰皆　遣はしましてござりまする。

良助　實に御心の優しきは、國を治める仁德と、幼なけれども名越の若殿、天晴れ感心仕つてござりまする。

篠原　この上は、未の上刻が家の繼目。いづれの道にも、右內が出仕次第、神前にて竹刀の勝負、その前方に家の重寶、繼目に用ゆる天國の御劍

良助　大切に守護仕り、卽ち持參いたしてござりまする。

帶刀　然らばその御劍、神前にてお家長久の御祈念、次山丹下、謹んで受取りめされい。

丹下　左樣ござらば神前にて、とくと祈念仕るでござりませう。

良助　イザ、お渡し申す。

ト良助、天國の入りし箱を渡す。丹下、其まゝ受取る。

ハツ、後室樣へ申しあげまする。家督定めは未の上刻、まだそれまでは余程の間。神職方へ

鄕助　右內どのゝ見えるまで、暫しが間

篠原　いかにも。殊に兄弟とも、鷹野の疲れを休める爲

時次　イヤ、某はこの場にて、藤川親子へ申しつける儀もござれば、後より參上。

早苗　すりや、私しに御用とな。

時次　いかにも。

良助　然らば若殿、後室様には、神職方へ

篠原　サア、淺次郎も一緒に。皆の者

皆々　まづ、お入りあられませう。

ト唄になり、篠原、淺次郎先に、帶刀、良助、鄕助、八平、山藏、林藏、官兵衞、附添ひ、丹下は劍の箱を持ち、腰元皆々、鳥居の內へ入る。あと早苗、時次郎殘り、思ひ入れあつて

早苗　若殿時次郎さま。

時次　コレ。

ト思ひ入れ。靜かなる大拍子になり

かねて其方へ賴み置きたる、毒藥の儀は如何いたした。

早苗　お氣遣ひなされまするな。今日試合ひの樣子を聞き、御舍弟淺次郎さまより、右內方へ遣はされしお菓子の中へ、毒を加へて拵らへさせ、それを右內へ送りしゆゑ、その毒氣廻りしや、この程は病氣との事。寂滅するは今のうち。

時次　して又、毒藥にて卽座に死なぬは。

早苗　サア、いま立ち所に死なねども、次第〳〵に毒氣の廻り、遲かれ早かれ死ぬるは必定。これと申すも夫卜庵が家の祕法。七年以前に、大殿の御病氣もこの藥方。そりやモウ、一時の内に命を取るは易けれど、稀代な事には卽座に殺し、二十四時の其うちに、天水咽喉へ入ると忽ち、平癒して毒氣を拂ふ、不思議な毒藥。それゆゑに手ッ取り早くは殺されませぬ……ほんに、天水と申せば、あの天國の劍が無い時には、家督讓りも叶はぬとの事。もしも試合ひに後れを取らば、あの劍を失うて、家督の妨げ。お心安く思しめしてお出で遊ばしませ。

時次　何から何まで、拔け目なき其方が計らひ、それ聞いて先づは安堵。

早苗　此やうに心を碎くも、あなたへお乳をあげました私し、云はゞ水右衞門とあなた樣とは乳兄弟。あなたの家督は忰が出世。

時次　オヽ、それと察して某も、家督とならば藤川卜庵、直さま取立て立身出世。その囑托は卽ち墨附

卜懷中より墨附を出して渡す。早苗、取って開き

早苗　ナニ〳〵……『其方の働きにて、殿を失ひ、家國を予が手に入れ、大望成就なすに於ては、恩賞として二千石を與へ、予が家老となして召使はん、相違なく囑托のしるし件の如し。藤川卜庵へ　時次郎判』。

ト讀み、思ひ入れあつて

すりや、この墨附にて夫卜庵

時次　歸參するのは其方が働き。悴水右衞門が勝となり、家督ときまらば、直さま屋敷へ。

早苗　それも竹刀の勝負が合圖。

時次　まづそれまでは

早苗　時次郎さま。

時次　吉左右待つぞよ。

ト唄になり、時次郎先に、早苗附いて入る。引違へて良助出てくる。唄のうち向うよりおらい、屋敷女房の拵らへにて出て來る。

良助　これは〳〵、右內どのゝ奧方、何ゆゑあつてこの所へ。

らい　サア、今日この所へ參りましたも、娘藤川が事につき、久しう逢はぬ聟の水右衞門どの、ちと折入つて賴みたい事もあり、また娘も何やら話したい事があるとて、最前より先へ參り、それから娘が跡を、わざ〳〵と參りましたわいなア。

良助　御參詣でござりまするか。これにつけても、物堅い石井右內どの、殊には御息女藤川どのとの、

仲を引分けられし御所存。ならう事なら、元々へ戻るやうに

らい　そりやお上まで御存じの夫婦仲。もと御前樣に御奉公の折、娘が名も藤川と、お呼び遊ばすその後、水右衞門どのへ嫁入りの砌り、聟どのゝ苗字も藤川氏、娘が名を改めませうと申したれば、後室樣の仰せには、召仕ひの藤川を、藤川水右衞門へ妻にとは、幸ひ合うたり叶うたり、矢張り其まゝ差おけと、有り難い仰せゆゑ、名も改めて藤川と、御前勤めの名を其まゝ。後室樣も御存じの夫婦が事、首尾よく今日の御家督きはまらば、元へ戻して變らぬ女夫。

良助　そりや右内どのゝ御心中、察し入つてはござれども、殊には今日聟舅の、晴れの立合ひ、お家の繼目、疎かならぬ今日の試合ひ。

らい　サア、わたしもその事について、水右衞門どのに逢うて、いろ〳〵話しが……さうしてアノ、お出でなさる所は。

良助　イヤ、試合ひの時刻は未の上刻、それゆゑ未だ見えられぬが、後方までには出仕の筈、神職方にてお待ちなされませ。

らい　そんなら、さうしませう。

良助　サア、御同道仕りませう。

ト大拍子、唄になり、おらい良助、下座へ入る。この唄のうち、上手より九介、中間の拵らへにて出て來り

九介　昨日までも藤川の下部の九介、心の悪さに暇が出て、今では主も何にもない渡り中間。それといふのも、この天國が欲しさ。

ト手拭にて巻いたる天國を出して

これさへあれば、出世は今の間。エヽ、有り難い。併し、この上は、娘御の藤川さまに、どうぞ逢ひたいものだが。

トあちこちを思ひ入れ。此うち下座より早苗出て來り

早苗　ヤ、そちや九介ぢやないか。

九介　あなたは早苗さま。

早苗　コレ九介、其方はマア、わしが頼んで盗ませたその劍、どこへ持つて行くのぢやぞいの。

九介　知れた事よ。どこぞへ賣つて金にするのだ。

早苗　其方も聞分けのない。わしが褒美はやると云ふに。そしてマア、他人がましい、其方とわしが仲ぢやないかいの。それぢやによつてその劍、此方へ渡しや。

トを手かけるを九介、振り拂つて

九介　なんの、お爲ごかし、御褒美もすさまじい。何をやるの、かをやるのと、くれた事もなくつて。よく／＼なりやこそ、こなたのやうな者を嫌らしい。褒美の金を寄越すまで、こりやアわしが預かつて置きませうよ。

トまた持つて行かうとするを引留めて

早苗　イヤ／＼、滅多にそれは渡されぬ。大事の劔。

九介　大事か何か知らないが、金目なこの品。

早苗　此方へ渡しや。

九介　イヽヤ、ならねえ。

早苗　渡しや／＼。

トまた手をかける。

九介　エヽ、放しやアがれ。

ト大拍子になり、兩人爭ふはずみ、思はず箱を早苗が脾腹へあてる。これにて早苗、タヂ／＼となる此うち九介、劔の箱を持ち、ちよつと下座へ小隠れする。早苗、心附き、起上がり

早苗　エヽコレ、九介イなう〳〵。

ト　あちこち尋ねるうち、バタ〳〵になり、下座より八平山藏出で來り

八平　天國の劍が紛失いたした。いづれも、お出合ひなされ〳〵。

ト大拍子になり、下座より帶刀、良助、鄕助、林藏、官兵衞、出で來り

帶刀　ナニ、御家督繼目に用ゆる天國の劍、紛失とな。

八平　いかにも。神前にて御祈念の其うちに、何者とも知れず

山藏　奪ひ取つてござりまする。

林藏　すりやアノ、預かりの役目は源之丞どの。

八平　卽ち證據といふはこの小柄。

ト小柄を出す。

林藏　箱の空から落ち散りし、場所にあつたるこの一品。

帶刀　ヤヽ。

八平　まだ〳〵怪しきはこの艶書。

ト封じ文を出す。

良助　ナニ、『源之丞さまへ、ときより』……こりやコレ慥かに。

ト讀むを

帶刀　アヽコレ……只今この場で不義の兩人、荒立つて詮議しようより、娘は勘當。

良助　すりや、不義の汚名に

帶刀　憎くき娘は勘當なし、また源之丞どのゝ身の上は、右内どのへ申し達して、二人はこれよりお館を

鄕助　幸ひ奥方さま、客殿にお入りあれば

林藏　直さまこれより追放を

帶刀　拙者は不義の兩人を、證據を以て糺した上

良助　ハテ、思ひもよらぬ源之丞どのゝ身の上。

ト小柄と文を取上げる。

林藏　たとへこの場に居合さずとも、證據を以て詮議めされい。

帶刀　いかにも、一まづ奥方へ。

トこの時、時計の音。



文政九、五月
役人替名

山藏　あれぞ未の上刻。
八平　竹刀打ちの刻限。
林藏　御家督定めに用ゆる天國。
帶刀　これより拙者は劍の詮議。
鄕助　然らば、帶刀どの。
帶刀　いづれも。

ト大拍子になり、この人數殘らず下座へ入ると、下の方より九介出て、あたりへ思ひ入れ。

九介　まづ人目にかゝらず、この劍を奪ひ取り、科は殘らず源之丞に塗りつけたれば、この身に障りはないといふもの。併し、小うるさいは卜庵が、女房のあの早苗め。同じ主人の女房でも、氣の惡いは藤川さま、どうぞ心に……なるは否なり、思ふはならずと、ハテ、よく云つたものだなァ。

ト思ひ入れ、大拍子になり、よろしくこの道具廻る。

本舞臺、三間の間、小高き石の玉垣、一段下には二重舞臺、石の上がり段。すべて濱松八幡境内のかかり、眞中に篠原、左右に時次郎淺次郎、平舞臺上の方に帶刀、良助、早苗。下の方に林藏、山藏、

官兵衛、腰元三人、丹下扣へたる見得。白囃子にて道具とまる。

ト爰に水右衛門、上下大小、股立ち。右内と竹刀打ちの立廻りよろしく、右内は病氣ゆゑ苦痛の體。これを水右衛門、たゝみかけて打つてゆく。この時、上の方より藤川出かゝる。下の方よりおらい出かゝり、兩人これを窺ふ。此うち水右衛門、右内を打込んで、勝にならうとする時分、藤川、手を合せて拜む思ひ入れ。

藤川　どうぞわたしが願ひを

ト思はず云ふを

水右　ヤ。

ト額見合せ、思ひ入れ。

らい　アコレ……もしもの時には

ト藤川へ思ひ入れあつて、自害せんといふ思ひ入れ。水右衛門は左右へ心遣ひ、苦しき思ひ入れ。水右衛門、如何はせんと少し弛みしうち、右内、水右衛門の竹刀を打ち落し、さん〴〵に打つ。立役女形、嬉しきこなし。敵役皆々あせる思ひ入れ。

帶刀　天晴れ右内どのゝお手の内

篠原 勝負はしかと見屆けた。

良助 いよ〳〵名越の御家督は

官兵 今よりして淺次郎さま。

時次 すりや、この時次郎には

早苗 無念ながらも晴れの勝負に、不覺を取つたる水右衞門、悴が不運、ハテ、是非もなき

トこなし。

山藏 水右衞門どのには

水右 面目次第もござりませぬ。

ト思ひ入れ。この時、藤川は喜ぶこなし。おらいも安堵して、兩人ツイと入る。

篠原 この上は、急ぎ時次郎には、勢州表へ罷り越し、名越の跡目は、いよ〳〵弟淺次郎。試合ひの勝負に家督も故なく納まれど、納まらぬは藤川水右衞門が身の上。日頃武藝に鍛練と、思ひの外なる今日の試合ひ、不覺を取りしは似合はぬ嗜み。一家中へ師範の者の、あるまじきその身の面目

山藏 よもやと思へどこの體裁。

篠原 今より時次郎が附き人の、暇を遣はし、屋敷を追放。

水右　ナニ、拙者めを
早苗　御追放とや。
水右　ハヽハッ。

ト平伏して思ひ入れ。

林藏　すりや、藤川氏には
山藏　御追放とな。
篠原　さはいへ、跡目に用ゆる家の重寶、天國は紛失。
良助　行くへ知れざる上からは、短刀出づるそれまでは
篠原　心休まらぬ自らは兎もあれ、名越の家の大事ゆゑ
右內　一家中の面々まで、疎かならぬ短刀の詮議。併し拙者と立合ひて、氣の毒なるは藤川氏。
良助　歸參願ひの叶ふまで、當時は流浪の水右衛門どの。
山藏　それにつけても、今日の立合ひ。
林藏　日頃に似合はぬ

ト兩人思ひ入れ。

帶刀　急ぎ短刀を尋ね出して、めでたう御代は淺次郎さま。

時次　思へば〳〵、拙き運の時次郎、せめて跡目の延引いたすが、まだしも腹癒せ。

林藏　まづそれまでは、我れ〳〵も

早苗　兎角に時節をお待ち遊ばせ。

時次　然らばこれより

ト打悄れて立ちかゝる。

篠原　淺次郎は自らが同道なし、家督定めるお禮の神樂。

帶刀　神職には、御武運長久の祈念怠りなく

丹下　ハツ……丹精ぬきんで、相勤めまするでござりませう。

良助　若殿の御歸館、お供廻りの用意めされい。

皆々　畏まりました。

淺次　イザ母上樣、御同道。

右內　拙者もお後より

時次　とはいへ弟に

ト立ちかゝるを

水右　ハテマア

ト引廻して

然らば、いづれも。

帶刀　若殿樣には神前へ

皆々　まづ、入らせられませう。

ト唄、かすめたる大拍子になり、淺次郎先に篠原、腰元二人、帶刀、良助、官兵衞附いて上手へ入る
時次郎に早苗、敵役と丹下附いて下座へ入る。水右衞門、右内殘る。あと合ひ方。下座よりおらい、
藤川、出て來り、水右衞門に一禮の心にて、兩人側へ寄り

らい　ヤレ〳〵、水右衞門どの、さぞかし今日のお役目。

藤川　どうなる事かと、わたしをはじめ、母樣のお心遣ひ。

らい　嬉しやこれで、落ちつきましたわいの。

ト兩人介抱する。

右内　イヤ〳〵、最前より病中の苦痛をいとひ、殊には大切なるお家の跡目。聟どのには思はぬおくれ

依怙あつてはと打つたる竹刀。定めて身内が
ト思ひ入れ。

らい　イエ〳〵、たとへ水右衛門どのゝ御身に、少し位な事は兎もあれ、娘が喜びこの上もない。早う娘の藤川を、水右衛門どのへ

藤川　サア〳〵、母様。父様にお願ひなされて

らい　サア、右内どの、今から早う娘をば

右内　いかにも、以前の如く聟舅。思ひ合うたる互ひの仲、娘藤川を、一旦水右衛門どのへ進ぜたれば松の千歳の變らぬ女夫、行く末長う添うてやつて下されい。

水右　改まつたる舅の詞、忝く存ずる。併し、拙者も時次郎さまの附き人ゆゑ、どうかかうかとは存ずれど、主人への忠義を捨て、この身を捨てゝ舅御に、勝を譲るも、あの藤川に……イヤサ、これも孝心に愛でゝ

らい　サア、その志しは娘より、この母が物蔭より見てゐました。なか〳〵武術といひ、心がらといひ何一つ不足のない聟を取つたは、娘の仕合せ。マア〳〵、なんであらうと娘が事は、これまでに變りなう。少しも早う水右衛門どのへ。

トおらい、喜ぶこなし。右内、思ひ入れあつて俯向いてゐるを、矢張りおらい、せり立てながら、

右内　サア〳〵、娘に早う支度させ、駕籠を迎へて、これより直ぐに。

らい　コリヤ〳〵、女房、何を差出た。身が指圖も待たずして、おのれが勝手に、いらざる事を。扣へて居やれ。

水右　でも、只今あなたのお詞ゆゑ、

らい　一旦身共へ得心して、妻にくれられた藤川を、この度の試合ひ、縁者のよしみある時は、互ひに依怙もあらんかと、得心づくにて貴殿方へ、預け遣はした藤川。今日の立合ひに、拙者が不覺を取つたゆゑ、又ぞろ娘御を元の通りの夫婦にして、添ひとげてくれいと、たつた今

藤川　喜ぶうちに様子變り、右内どのゝ心のうち

右内　こりや母様、何やら様子が

水右　イヤ、仔細はなけれど、右内が胸に

右内　すりや、拙者めに

水右　縁組み破談、不承知でござる。

ヤ、なんと。

ト思ひ入れ。

右内　只今は元の如く、娘を進上申すと申したれど、よく〳〵思へば、年よつても石井右内が眼力。貴殿の武藝が未熟ゆゑ。

らい　モシ、右内どの、あなたはなんで水右衞門どのへ

ト右内の袖を引く。

右内　イヤサ、女の際に又しても差出口。身共を差おき、いはれぬ事を。其方に用はない。これより娘を同道なし、早う屋敷へ歸つてよからう。

ト立腹の體にてキッと云ふ。水右衞門、ヂッと思案の思ひ入れ。

らい　そんならアノ私しに

藤川　わたしも共に母樣と

らい　打つて變つたお詞に、歸れとあれば是非なくも、娘を連れては行くけれど、何やら仔細が

藤川　そのお腹立ちを、見捨てゝ此まゝ

らい　お心背くは却つて又……併し、今日の試合ひに水右衞門どの、ようマア忠義を捨てゝ

水右　ヤ。

ト兩人、顏見合せて思ひ入れ。

らい　それも娘が爲ならば

右内　何をいらざる。まだ行かぬか。

藤川　それにつけても水右衛門さま。

ト寄るを

らい　アコレ……きつとお禮を

ト思ひ入れ。唄になり、おらい先に藤川を連れ、向うへ入る。跡、兩人殘り、思ひ入れあつて、右内ズツと立つて行かうとするを水右衛門、袖を押へて

水右　イヤ、舅御樣、右内どの、身が申し請けし娘御藤川、その女房を何ゆゑに

右内　女房とは誰れが事。一旦貴公へ遣はしてはござれども、この間より取戻し、親の家に歸りし藤川殊に只今申す通り、縁組みは破談いたしたれば、云はずと縁は切れてござる。その上只今、殿よりお暇の出た貴殿、何しに拙者が娘をば。

水右　舅どのには、異な事を仰せらるゝ。只今に至り、拙者とても武士でござれば、妻女を取戻されたと申しては、なに面目に人中へ

右内　御身は今日只今、御前に於て竹刀の勝負、何ゆゑ遅れを取らしつた。

水右　成る程、こりや其許には、その儀は御存じあるまいが、姑にも、まつた女房藤川も、さまぐ、心遣ひの仕り、身共への頼み。よんどころなう存ずるゆゑ、勝負は直さま

右内　これはしたり、水右衛門どの、姑や女房が、どのやうに申さうとも、遅れを取つては貴公、御主人たる時次郎さまへ對し、申し譯がござるか。イヤサ、拙者も今日は晴れの勝負と存じ、病中ながらも、主命もだしがたく、御若年の貴公との試合ひ、不承いたして立合ひましたを、只今のお詞では、其許には何とやら、拙者にわざと勝を讓り、遅れを取りしと云はぬばかりの詞。左樣ござつては石井右内、武士道が立ち申さぬ。ハテ、依怙があつてはと、緣組みの娘を取返した程の身共ぢやによつて、この上ともに、娘は取戻しまする。緣は切つてござるぞ。

トきつと云ふ。

水右　然らば、どうあつても女房ことは

右内　エヽ、くどいく。

水右　ムウ。

ト思ひ入れ。合ひ方になる。

その心ならモウよいワ。其許の事を思へばこそ、只今の立合ひ。この上は、聟舅の縁はいよ〳〵切れたれば、申す事も申さうが、貴殿は病中と申しながら、只今の立合ひ、ありや何でござる。惣身痛むか存ぜぬが、見苦しきあの立合ひ。勝つべき竹刀を。舅御と存ずるゆゑ、この水右衛門めは負けました。それも縁者のよしみでござる。身共が斯様申しても、定めし貴殿の耳には入るまい。ようござる。女房藤川も、浪人した水右衛門にくれはさつしやるまい。大事な娘御は申し請けずとも、此方から破談いたす。これからは一本立ち。縁もゆかりも、さらりと流して水右衛門、こんな所に長居しようより、ドレ、お暇いたさうか。

ト袴の塵を拂つて立ちかゝる。

右内　藤川氏、これまでは互ひに同家中のよしみ、貴殿の相役と存ずればこそ、……殿よりお暇の出た上は、アヽ、お立ちなされい。

ト水右衛門、ズツと立つて、花道の附け際まで行き、思ひ入れあつて

水右　思へば〳〵

ト右内を睨みつけ、拔きかけるを

右内　舅親に、聟のおてまへ刃向ふか。

水右　イヤ、縁は切つたと、お身が口から云つたぞよ。

右内　暇の狀を送らぬからは、未だに縁は

水右　ヤ。

ト思ひ入れ。

どうするものだ。この屋敷を追ひ拂はれても、まだ／＼日本は六十五國、爰ばかりに日は照らねえ。おのれ右内め、覺えてゐろ。

ト唄になり。水右衞門、思ひ入れあつて、向うへ入る。右内あと見送り

右内　彼れが胸中、心よからぬ奴と思ふゆゑ、一旦縁組みたる娘さへ、取戻したれども、いまだ心がゝりは暇の狀。アヽ、諺に云ふ、引かれ者の小唄とやら……うつけ者めが。

ト嘲笑ふ。唄になり、右内、下座へ入る。引違へて下座より時次郎、早苗、林藏、山藏、出て來り

時次　女に心引かされて、主人の大事を見捨てし水右衞門。

早苗　おのれが越度に母までも、申し譯なき憎くき悴め。

山藏　武士の風上にも置かれぬ藤川。

林藏　見下げ果てたる不忠の侍ひ。

時次 まだその上に、右内めに恥面かゝされ、家の跡目も彼れゆゑに……おのれ憎くき水右衛門。

ト行きかゝるを、早苗とめて

早苗 待つた若殿様、たとへ竹刀打ちに、悴が不覺は取つたりとも、御家督定めに、無くて叶はぬお家の重寶、天國の紛失。短刀出でぬ其うちは

時次 いかにも

早苗 その天國を人知れず、此方へ取り得る工風が肝腎。

時次 まだしも出かした。この上は

早苗 悴に代つてあの若殿、淺次郎どのゝ歸りを待ちうけ

林藏 併し女のその痩腕。

山藏 道に待伏せ討取るにも、女の手には心元ない。

林藤 もし手に合はぬその時は、我れ〳〵も加勢して

時次 かねて用意の一品は

ト懐中より小筒を出して

この種ケ島にて……併し、其方

早苗　女ながらも武藝の嗜み。

時次　然らば其方に

ト渡す。

早苗　たつた一打ち。

四人　やがて本望。

早苗　コレ……お聲が高い。

トこの見得、時の鐘の逧りにて、よろしく此まゝ、道具ぶん廻す。

本舞臺、うしろ淺黄幕、正面に本緣附きの辻堂、扉明けたて、念佛堂といふ額をかけ、左右の袖、玉椿の垣根、上の方に松の立ち樹、吊り枝を下ろし、いゝ、犀ヶ崖と書きたる傍示杭、尤も誂らへの通りにして時の鐘にて道具納まる。

ト爰におらい、以前の形にて、藤川を圍ひゐる。音、虎、非人にて取卷いてゐる。九介、面を隱せし非人にて、洒嵐を着て、同じく立ちかゝりゐる見得。

虎　コレ〳〵、お屋敷の女中さん、大勢ぢやアござりやせん。たつた二人

音　酒手をやつて

兩人　下さいよ。

らい　こりや其方達は、女子と侮り最前から、大勢よつて立ちふさがり、附きまとふのは、さては物取り。慮外をすると赦さぬぞ。

藤川　モシ、あなたのお腹立ちは御尤も。此やうな所へ來かゝりましたは、此方の不仕合せ。殊には道の妨げゆゑ、御料簡遊ばして

らい　イヤ〳〵、ねだり事云ひかけては、其まゝにも通すまい。して、その酒手とやらは

九介　たつた三人のこのお孤、この頃は好い鳥もかゝらず、その上夏の當り前、辻堂の藪蚊にせゝられ仕事の無いので乾上がつた。酒を飲ませて下さるなら、わづか二十三十の目くされ金、爰へ出して通らつしやい。

らい　すりや、大それた、いよ〳〵物取り。

九介　金の代りにその娘御、おいらが酒手に

三人　下さいよ。

らい　ヤア〳〵〳〵、そんなら其方達は


三立目


中村座

三人 オヽ、頼まれた。

らい エヽ。

ト愕り、こなし。

九介 面倒な。引ッかつげ。

ト禪のツトメになり、兩人、藤川にかゝる。おらい支へる。九介交り、ごつちやの立廻りにて、トヾおらい、三人を追うて下座へ入る。あと藤川殘る。

藤川 これいなア、母さん、長追ひして、怪我なされて下さりまするな。エヽ、誰れぞ來てはくれいで
どうしたらよからうぞいなア。

トあちこちする。此うち時の鐘。向うにて人音するゆゑ

アレ／＼、向うに人音。又も惡者が、もし來たなれば

ト辻堂を見て、幸ひといふこなしにて、この内へ入る。矢張り時の鐘、向うより早苗、高からげにて一腰を差し、走り出て來り、あたりへ思ひ入れあつて

早苗 爰は犀ヶ崖の山道、明神より歸りの若殿、たしかにこの道……さうぢや。

ト本舞臺へ來て、辻堂に向ひ、正面の額を見附け

ヤレ〳〵、幸ひのこの辻堂……念佛堂の地藏尊、我れらが願ひも叶ひ給へ。南無地藏尊。首尾よう淺次郎どのを討たせてたべ。どうぞ願ひをお叶へなされて。

ト拜む思ひ入れ。この時、藤川、ツツと出て、この聲を聞いて悔りこなし。

藤川　ヤヽ、あなたは姑、早苗さま。そんならアノ若殿樣を

ト思はず云ふを、早苗驚き、小筒を隱して

早苗　ヤヽ、壁に耳ある世の譬へ。人は知らじと思ひしが、其方は嫁の藤川ぢやないか。どうして爰に

藤川　エヽ、お情ない、あなた樣は。

ト合ひ方、木魚の音になり

あらう事か、あるまい事か、大それた、勿體ないお主樣を、殺す心か恐ろしい。今もお前の云はしやんす、壁に耳ある世の譬へ。わたしより外、誰れも知る人とても無いこの山道。どうぞ心を入れ替へて下さりませ。モシ、拜みますわいなア。

早苗　なんぼう其方がさう云やつても、一旦大望の思ひ立ち。荷擔なした上は、今更どうも……併し、これも矢ツ張り其方ゆゑ。二人が爲を思うて

藤川　そりや又なんで、わたしら二人が爲とわえ。

早苗　イヤ〳〵、他人へ明かさぬこの大事。悴水右衛門を世に立てんと、思ひ立つたる悪企み。其方も悴に連れそふからは、後々は玉の輿と、敬まはさせようばつかりに。

藤川　イエ〳〵、どうして、その玉の輿よりは、矢ッ張りわたしや、この身の御恩をうけたお主様。なんぼ姑様でも、若殿の大事とあれば、この事を

ト立ちかゝるを留めて

早苗　コリヤ〳〵、嫁女。他人に沙汰すりや、この母ばかりか、悴水右衛門も同類。其方は夫を科人に

藤川　ぢやというて。

早苗　でも、現在夫を

藤川　サ、それぢやによつて、どうぞ悪事を止まつて

早苗　イヤ〳〵、思ひ立つたる大望。邪魔すれば是非に及ばぬ。われから先へ。

ト種ヶ島を差しつける。藤川、悄りして

藤川　アヽモシ、滅多な事を。

早苗　邪魔をしやれば今爰で

藤川　サア、それは。

早苗　得心せねば、たつた一打ち。
藤川　サア
早苗　サア
兩人　サア〳〵〳〵。
早苗　エヽ、退きやいなう。
　　ト振り切り、行かうとする。此うち行列三重になり、東の口より箱提灯二張先に立ち、諸士侍ひ、乘り物、槍、挾み箱、供廻り大勢、間々へ箱提灯照らし、若殿淺次郎歸りの體。中の間のあゆみへかゝる。此うち舞臺の早苗、これを見て
さてこそ〳〵、あの乘り物こそ、正しく若殿淺次郎どの。
　　ト藤川、早苗に縋つて
藤川　エヽ、情ない。すりや、どうあつても
早苗　乘り物目當てに、たつた一打ち。
　　ト筒先を向けるを、藤川また縋つて引合ふはずみ、引金に藤川、手をかけて引ッ張る。火蓋は切れてドンと本鐵砲の音して、思はず早苗を貫く。早苗『アッ』と倒れる。此うち行列は揚げ幕へ入る。藤

川、この筒音に悑りして耳を押へる。

藤川　ヤヽ、思はぬ怪我に姑御を

ト早苗、苦しみながら起上がり

早苗　おのれはようも姑のわしを

ト聲を立て、立ちかゝるゆゑ藤川、早苗の持つたる刀を引取り、あちこちするはずみに、一刀切りつける。兩人立廻りのうち、下座より九介窺ひ出て、この様子を見てゐる。藤川、危ふくなるゆゑ、九介窺ひよつて、早苗を取つて押へ、のしかゝつて、持つたる件の短刀にて止めを刺す。この時、俄に大雷鳴り出す。一面に窯蓋下ろす。九介、藤川を見て

九介　ヤヽ、あなたは現在

藤川　エヽ。

ト悑り思ひ入れ。

九介　手にかけたるは、あなたの姑御。

藤川　思はず爰で

ト慄ふこなし。

九介　大事ござらぬ。この樣子を知つた者は、わし一人。その代りには、殊によつたら、わしが賴みを

　　トしなだれかゝるを

藤川　エヽ、惡い事を

　　ト振り切る。この時、虎、音、出て來り、窺ひゐて、囁き合ひ

兩人　ヤア、人殺し〳〵。

　　ト云ふゆゑ、これにて九介、愕りして兩人を見て思ひ入れ。虎、手早く短刀を取上げる。九介、やるまいと、ちよつと立廻り。音、支へて、短刀を奪ひ取り、一散に下座へ駈けて入る。九介、虎、同じく追つて入る。此うち禪のツトメ、蛙の聲、凄き合ひ方。

藤川　思はぬ難にてこの場の誤まり。とても姑打つたるわたし。その云ひ譯は淵川へ、この身を沈めて申し譯。人目にかゝらぬ其うちに……さうぢや。

　　トつか〳〵と行きかけ、また舞臺へ立戻り

せめては死骸に、御回向なりと。

　　ト死骸に向ひ、回向の思ひ入れ。靜かなる禪のツトメになり、この見得にて道具靜かに半分廻す。

本舞臺、筋かひに右辻堂の横手になる。塗り壁破れて、人の出入りある事。以前の玉椿の垣根、眞中へ仕切りになる。矢張り右の鳴り物。木魚の音。蛙の聲しきりにする。道具納まる。

ト爰に水右衞門、大小、股立ちにて、劍を持つて、右內の胸許を貫きゐる。右內の死骸は片手にて九介の襟髮を摑みゐる事。水右衞門、右內を殺し、思ひ入れあつて

水右　思ひつたよりは手剛い石井。どうやら斯うやら仕留めた上は

九介　思はず來かゝるこの場にて、下郎が持つたる短刀を、天國なり見極めし、右內が眼力。

水右　其方はその短刀、母人に人知れず

ト顏にて知らせる。

九介　すりや、この品を

水右　いかにも。

九介　成る程、そんならこれから直ぐに

ト短刀を腰へ差し、思ひ入れあつて

心得ました。

ト時の鐘になり、思ひ入れあつて、舌を出し、につたり笑つて向うへ入る。

水右　この上は、舅を殺せし水右衛門、せめては未來を助ける爲に……この辻堂の前にて、潔く切腹なし、石井一家へ我が存念を……ソレ。

ト本釣り鐘。生垣を破り、上の方へ行く。此うち回向の藤川、これを知らずして、堂に向ひ回向して直ぐに堂の破れより下の方へ出る。此うち堂の破れより下郎作助、隱れゐる體、ブルブル慄へ、最前よりこの體を見てゐる。水右衛門、思ひ入れあつて

まだ中間が一人、どこへか。

ト窺ふ。この聲を聞き

作助　ア、、御免なさい〳〵。

ト猶々慄へてゐる。水右衛門、これに構はず、窺ひ〳〵上の方へ行く。此うち作助は、腰の拔けたる思ひ入れて、ガタ〳〵慄へて、やう〳〵起上がり、向うへ駈けて入る。この崩れより藤川、探り〳〵拔けて出で、下の方へ來り、右内の死骸を見附ける。水右衛門は、早苗の死骸を見附け、窺ひ寄つて兩人恟りして、尤も双方途端にて

水右　ヤ、、母人。

藤川　父上には

兩人　こりや何者の仕業にて……ヤ、。

ト死骸に取りすがり、思ひ入れ。此うち向うより袖介、箱提灯を持ち、何心なく出て來り、眞中へ入り、血に辷りし思ひ入れ。雨車、時の鐘、合ひ方。兩人、窺ひながら、提灯の灯にて顏を見合せ

水右　そちや女房藤川。

藤川　水右衛門どの。

袖介　お二人樣。

水右　そちや袖介か。

藤川　モシ、父さんを、むごたらしう

水右　ナニ、右内どのを……ヤ、、こりやコレ、身が母人までを

袖介　ナニ、早苗さまを……ムウ、場所も一つに、親御樣。

水右　して〳〵、何ぞ手がゝりは。

袖介　證據は捨てある種ケ島。

藤川　さうぢや。

ト懷劍にて死なうとする。

水右　待て。そちや何ゆゑ自殺を

藤川　サ、これは。

水右　親の最期に血迷うたか。

藤川　さうぢや。一旦敵を討つたる上。

袖介　それが即ち親御へ孝行……併し相手は

水右　一人の業か。

袖介　どうしてこれは、二人の仕業。

水藤　ヤ。

ト思ひ入れ。

藤川　思へばわたしは父上の

水右　母の敵を尋ぬる水右衛門。

袖介　直ぐにこれより。

藤川　云はゞ竹刀の遺恨ある、夫に又ぞろ人々の

袖介　屋敷に居たら両方の、御主人方へ義理立ての、果は矢ッ張り敵討。

水右　夫婦揃うて親々の
藤川　敵々を
兩人　尋ぬるうち。
袖介　及ばずながらこの奴。
水右　然らば其方を
袖介　下郎は御供。
ト三人とも身繕ひして、向うへ行きかゝる。時の鐘、雨車、時鳥の聲。向うより源之丞、蛇の目の傘をさし、出て來り、何心なく、捨てありし早苗の還附を拾ひ
源之　何やら書き物。
兩人　ヤ。
水右　コレ。
袖介　慥かに、あなたは
藤川　どうやら兄さん。
トこの時、源之丞、右内の死骸を透かし見て

源之　ヤヽ、親人が

水右　コレ。

ト藤川を留める。袖介は提灯を吹き消す。双方途端の仕組み、よろしくあつて、ひやうし

幕

第一番目　四建目

駿州中島村の場
清見ケ關の場

役名――藤川水右衛門。小座頭、林彌。石井源之丞。源之丞妻、お時。袖介妹、お才。馬士、蝮の大六。荒井嘉藤次。大野武太夫。下男、作助。百姓、あば右衛門。同、うば作。水右衛門妻藤川。醫者、藤川卜庵。庄屋、茂次兵衛。馬士、勘太。藤川下部、九介。石井下部、袖介。

本舞臺、三間の間、平舞臺、藁葺きの世話屋體。正面、暖簾口、鼠壁。上の方、一間の反古貼り障子屋體。横手、誂らへの竹藪。下の方、軒口より馬の沓、草鞋など吊し、その外、ほくち取次、諸藥の札を貼り、この下に片蓋の馬部屋、その前に誂らへの草井戸。いつもの所に栗丸太の門口。すべてこ

の道具、駿州阿部川在、中島村神介故郷の體、馬士唄、かすめたる祭の鳴り物にて幕明く。

ト爰に大六、廣袖、腹掛け、三尺帶、親仁の馬士にて、咬へ煙管にて、馬の沓を作つてゐる。左右に茂次兵衛の庄屋。問屋場馬さしの勘太、詰めかけ、あば右衛門、うば作、百姓の拵らへにて立ちかかり、ワヤ／＼云うてゐるを、お才、やつし前垂れ形、顏に悲のある拵らへにて、皆々をなだめてゐる。

茂次　サア／＼大六、どうするのぢや／＼。

皆々　返事が聞きたい／＼。

さい　サア、一々お前方の云ふのが、御尤もでござりまするが、もそつと御料簡なされて下さりませ、下さりませ。

茂次　これサ、お才女郎、これがどうして料簡がなるものか。爰の親仁の大六は、年久しい馬追ひぢやが、よい年をして、惡い事にはまつて、この庄屋の茂次兵衛までが難儀をするのも、今度で幾度だと思はつしやる。

勘太　殊に今度の不埒は、餘の事とは違ふぞや。いつやら府中の問屋場で云ふには、養子にもらつた兄イの主人が、江戸へ下る途中で大病、よんどころなく内へ引取つて、それゆゑ物入りが多く、朝

夕の事に困ると、たつての無心ゆゑ、馬さし仲間で五百文づゝの、掛捨て無盡をしてやつたその時、コレ、あらう事か、あるまい事か

あば　その座にあつた年貢の金と、宿内入用の金が見えぬワ。

うば　それをよく〳〵穿鑿すれば、爰の親仁が仕業といふ事。

茂次　日頃身持ちのよくない上、其やうな大それた事仕出しては、捨てゝは置かれぬによつて、代官所へ願ふと云うたら、娘のお才や、兄の袖介が、もう二三日待つてくれろと、たつての頼みゆゑ、今日までは料簡したが、もう待たれぬぞ〳〵。

勘太　コレ、それとてもこなた、その金を辨まへるなら、料簡もしようが、今日中に金の才覺が出來るか。大六どの

皆々　サア、その返事が、聞きたい〳〵。

ト此うち大六、委細かまはず馬の沓を拵らへてゐて

大六　こなさん達も無理を云ふものぢや。此やうな貧乏世帶かまへてゐて、今日中にと云うては、鐚一文才覺がなるものかいの。アヽ、埒もない人達ぢや。

茂次　コレ大六、さうして、いつまで待てば才覺がなるのぢや。

皆々　それを聞かうわい〳〵。
大六　エヽ、ガヤ〳〵と耳やかましい。もう四五年も經つたなら、才覺してやらうわえ。
茂次　イヤ、呆れたものだ。サア、皆の衆、もう〳〵構ふ事はない。代官所へ行きませう〳〵。
勘太　いけッ太いも程のあつたものだ。
あば　今にひどい目にあふであらう。
茂次　ハテ、何も云はしやるな。白黑は解る所で解るワ。
皆々　サア〳〵、代官所へ持出しませう〳〵。
ト云うて行かうとするを、お才とめて
さい　アヽモシ、重々御尤もでござりますが、マア〳〵、ちよつとお待ちなされて下さりませ……モシ父さん、お詫びをしようとはせずに、却つて腹立てさすやうな事ばつかり。これがでんど沙汰になつてなら、外聞といひ、お前がどのやうな、憂目にあはしやんす事やら。もし、其やうな事になつたら、わたしやどのやうに悲しからうと
大六　ヤイ〳〵、ベラ〳〵と何ほざくのぢや。たとへでんど沙汰になつて、暗い所へ入らうが、木登りしようが、それが怖うてこの年まで、雲助がなるものかえ。エヽ、打ッちやつて置いて、あの手

合ひの勝手にさせろ／＼。

茂次 アレ、あの通りの口だものを。

皆々 サア／＼、構ふ事はない。代官所だ／＼。

さい モシ／＼、どうぞもそつと待つて下さりませ／＼。

皆々 イヤ／＼、成り申さぬ／＼。

さい どうぞお慈悲に、せめて兄さんの歸るまで

皆々 イヤ、もう聞かぬ／＼。

ト皆々、ワヤ／＼云うて出ようとするを、お才、捨ゼリフにて皆々を留めてゐる。てんつゝ、御輿太鼓になり、向うより袖介、やつし着流し、油注しを持ち出て來り、この體を見て、とつかはと内へ入り、皆々を留めて

袖介 これはしたり、お前方、マア／＼、靜かになされて下さりませ／＼。

さい 兄さん、よう戻つて下さんしたなア。

勘太 アヽ、そんならこなたが、以前この内へ養子に入つた

うば 兄の袖介どのとやらでござるかな。

袖介　左樣でござりまする……モシ、庄屋樣、こりや大方、妹のお才と私しめが、日延べを願うた、年貢の金の事でござりませうな。

茂次　オヽ、その事とも〳〵。今日が日限りぢやによつて催促すりや、スウ〳〵として不手勝手ばかり云うてゐるあの大六。もう料簡がならぬによつて、馬方の勘太と、小前の百姓の惣代に、この二人を連れて、直ぐに代官所へ訴へようと、出かける所でござるワ。

袖介　サアノヽ、それなれば、重々御尤もでござりまするが、モシ、庄屋樣、お前方も私しの云ふ事を、ちよつとお聞きなされて下さりませ。御存じもござりませうが、私しは久しい以前、遠州の名越家へ奉公稼ぎ、この程御主人のお供を致して、江戸へ下る途中にて、計らず旦那の御病氣ゆゑ、この奴が故鄕なり、この内へお連れ申して、御病氣の癒るまで、逗留いたさせまするうち、親仁どのゝ不しだら、大切な御年貢金を遣ひ込みましたは、申さうやうもござりましない、不屆きではござりまするが、この事代官沙汰になりましては、義理のある親仁どのが、一命にかゝはる事、養子の身として、おめ〳〵見ては居られませぬ。併し、此やうにお願ひ申せばとて、當ての無い事は申しませぬ。先達て、主人の路用金を、國許へ飛脚を立てゝ、取りに遣はしましたが、大方今日か明日は、その飛脚も歸るでござりませう。左樣いたしますると、旦那へお願ひ申

して、その路用の中から借りうけまして、濟み方を附けませうほどに、どうぞお情をもちまして

さい　ハイ〳〵、兄さんもあのやうに云うてぢやほどに、お情でござりまする、どうぞ一兩日のところを、

袖介、お待ちなされて下されば、親仁どのゝ身の上も、安穩で濟みまする。申さばお前方の御料簡次第で、年寄の一命助ける事、重々親仁どのゝ不しだらは、憎うも思し召しませうが、私しどもにお免じなされて、ハイ〳〵、どうぞ暫くのところを、お待ちなされて下さりませ。

ト袖介お才兩人して、皆々に詫びることなし。

茂次　なんと、皆の者も聞かしやつたか。ヤレ〳〵、こなさんは年は若いが奇特な孝行者。なんと勘太どの、大六はあの通りの者ぢやが、同胞の子供に免じて、長い事ではなし、今日か明日かといふ事なら

あば　それ〳〵、待つてやらうではござらぬか。

勘太　庄屋どのさへ得心なら、宿内入用の金は、わしが問屋場へ、よいやうに云つて置きませうよ。

袖介　そんなら得心して待つて下さりまするか。それはマア、忝うござりまする。モシ〳〵、親仁様庄屋樣はじめ皆の衆に、よう禮を云はつしやりませ。

大六　何を云ふぞい。おれが日延べしてもらふのぢやあるまいし、なんの禮云ふ事か。
袖介　エヘン〳〵。エヽ、コレ、お才、氣の附かぬ。皆の衆に茶でも汲まぬかえ。
さい　ハイ〳〵。

トとつかはと皆々へ茶を出し

ほんにマア、よう御料簡なされて、日延べを聞分けて下さんした。ハイ〳〵、有り難うござりますわいな。

茂次　アイ〳〵。なんと皆の衆、この大六が、お才女郎のやうな好い娘を持つといふのは、ほんに鳶が鷹とやら。併し、一つの疵は顔の痣ぢやが、これがほんに、玉に疵といふのでござらうて。
勘太　併し、あの疵が娘の仕合せかも知れませぬ。無疵な顔なら、疾にあの親仁が賣るでござらうて。
大六　ハヽヽヽ、成る程、こればかりは好う當てをつたわえ。
茂次　時に、わしはお上から、極内々のお尋ね者があるとの事で、阿部川の川役所に、お役人がござるによつて、ちよつと行かずばなるまい。
あば　そんなら、うば作、これから祭を見に行かうではないか。
うば　コレ、あば右衛門は知らないか。おらァ内の嬶ァと二人で、練子に出るワ。

勘太　ハヽア、そんなら夫婦連れで
うば　祭に出るによつて、嚊アと對の襦袢を張り込んだ。これ見てくれさつしやい。
　　　トうば作、肌を脱ぐと、桃色木綿、田舍染めの襦袢を着てゐる。
茂次　成る程。こりやァ奢りの沙汰だわえ。
袖介　モシ〳〵、今日はどこの祭でござります。
茂次　厚原村の曾我樣の祭だが、こなた衆も同胞連れで、見物に行けばよい。
勘太　コレ、おれも好い駄賃でも見附けようか。
袖介　これは皆の衆、大きに御苦勞をかけまする。
さい　左樣なら、明日の夕方まで。
皆々　ハイ〳〵。そんなら兄貴、きつと才覺さつしやい。
袖介　アイ〳〵。こりやどなたも、ようござりました。
　　　トてんつゝ、屋體囃子にて、四人は向うへ入る。三人殘る。お才、思ひ入れあつて
さい　モシ、兄さん、あのやうに云うてぢやが、いよ〳〵明日の晩までに
袖介　なんの返す當てがあらうぞい。ほんの一寸のがれ、出鱈目と云ふものぢや。あのやうに、心にも

ない嘘を吐くといふのも

ト大六の側へ坐り

モシ、親仁様、養子の私しといひ、血を分けさつしやつたこのお才が、此やうに苦勞するといふも、みんなこなさんの心から。モウ〳〵、この上ともに、惡い事はサラリとやめて、好きな酒なら酒ばかり。決して人様の物を

大六　オヽ、盗んでなりと、稼業にしようわえ。コレ、二人ともによう聞け。今日から改めてこの親仁は、ほんまの盗人になるぞよ。

袖介　エヽ、なんと云はつしやりまする。

大六　ハテ、年よつて樂をしようと思へばこそ、あの中間の作助から、おのれを養子にもらひ、行く〳〵は實の娘のこのお才と、娶合はさうと思つてゐた所を、奉公がしたいと云うて、遠州の殿様へ、徒中間の奉公。その先で、腰元とやら膝元とやらいふ女めと、乳繰り合つてすんでの事に、その笠の臺も飛んでしまふ所を、どこをどうしたか旦那どのが、その女めは上方へ上せて、縁を切らせて、二人の命を助けたとやら。そんなら早々この在へ歸つて來て、馬追ひなと、川越しなとして、義理あるこの親仁を、育まにやならぬ所を、ヤレ命の恩の禮奉公せにやならぬの何のと、矢ツ

張りべん／＼と二合半、ところに、この頃久し振りで戻つて來たによつて、ヤレ嬉しや、この親仁に、金の二三百兩も土産にくれるであらうと、喜んだ胸算用は、ガツタリと違うて、足腰立たぬ男と、ぞべら／＼した女を連れて戻つて、大切な御主人樣ぢやの何のと、瘦馬の手綱で世を渡るこの親仁に、二人三人食ひ潰しを縛しつけて、どうあがきが出來やうと思ひ居るぞいやい。コレ、この頃米は百に七合五勺するわいやい。盜みでもせいで、暮らされやうと思ふか。オヽ、この親仁は、これから盜人するわい／＼。

ト喚きちらす。袖介、術なきこなし。お才、聞きかねて

い　モシ、父さん、何ぢやぞいな。其やうな大きな聲をして、納戸には御病人も聞いてゐやしやんす袖介どのゝ爲には御主人なりや、お前やわたしが爲にも旦那樣、どのやうな事しても、お世話せにやならぬわいな。また袖介どのが、これまで內へ戻らしやんせぬのは、わたしが此やうに生れ附いての顏の疵、嫌はしやんすも、さら／＼無理とは思ひませぬほどに

袖介　コレ／＼、お才、おぬしに其やうに云はれては、この身は穴へも入りたい。何しにおぬしを嫌ふといふ譯ではないが……イヤ、親仁樣、こなさんの云ふのも、みんな尤もでござりまするが、何を云つても、御知行取りの若旦那、ちつとの內でも深切に、世話なされて下さると、やがてお禮

は、モシ、ずつしりでござりますぞえ。ハテ、養父を安樂に過さにやならぬ養子のわしが、こなさんの臑を嚙つて、よいものでござりますか。

大六　そんなら何と云ふ。ちつとの內でも世話して置けば、ずつしりと禮があると云ふのか。それなれば蝦で鯛ぢやが、コレ、嘘ぢやないかや。

さい　なんの袖介どのが、お前に嘘を云はうぞいな。ほんに袖介どの、昨日隣村の十作どのゝ云ふにはこの頃阿部川へ、好い醫者どのが來てゐるとの噂。あのお方をお見せ申しては

袖介　それは耳寄りぢやが、何を云ふにも旦那の御病氣は、隔疾風というて、むづかしい御病氣ぢやさうなが。

さい　モシ、ちよつと行つて、お醫者樣を呼んで來ようかいな。

袖介　そんならどうぞ大儀ながら、行て來てくれゝば、それ程の事はないが。

大六　なんの、役にも立たぬ。娘、打ツちやつて置け〳〵。

袖介　モシ、やがてれこさのお禮が、しつかりとござりまするワ。

ト仕方して見せる。

大六　オヽ、さうであつた〳〵。娘、そんなら行て來い〳〵。

さい　袖介どの、行てくるぞえ。

袖介　そんなら、大儀ながら頼まうかえ。

さい　なんのマア、ツイ一走りぢやわいな。

ト馬士唄になり、お才、向うへ入る。

大六　コレ、袖介、あの納戸にゐる、われが旦那といふ病人、同胞だと云ふが、それにしては、あんまり仲がよすぎるではないか。おりや夫婦かと思ふが。

袖介　どう致しまして〳〵、なんの御夫婦でござりませう。一體よい衆といふものは、親子兄弟、仲のよいものでござりまする。

大六　そりやさうでもあらうが、何ぢややら夜晝なしに、女が男の足を撫つたり、腰を叩いたりしてゐるが、どうも夫婦のやうぢやが。

袖介　ハテ、そこが今申す、どうかよい衆は、兄弟でも親子でも、病氣といふと、汗みづくになつて介抱をなされます。なんと結構な事ではござりませぬか。

大六　さう思ふなら、この親仁が、モシひよつと病氣と云うたなら、おぬしやよう介抱してくれる氣か

袖介　親ぢやもの、そりや身を粉に砕いても、介抱いたしませいでは。

大六　そんなら、足腰撫つてくれるな。

袖介　ハテ、わしはこなさんの子ではござりませぬか。

大六　アイタヽヽヽヽ、

トこなし。袖介、思ひ入れあつて

袖介　モシ、親仁様、どうなされました〳〵。

大六　アヽ、持病の疝氣が起つた。コレ、袖介、腰を叩いてくれ〳〵。

袖介　ハイ〳〵、爰でござりますか〳〵。

ト腰を揉む。

大六　エヽ、もつと強う揉んでくれぬかッ。それぢやきかぬ〳〵。アヽ、術ない〳〵。

トこなし。袖介、大肌脱ぎになり、腰を揉む。

袖介　親仁様、斯うでござりますか〳〵。

大六　アヽ、術ない〳〵。コレ〳〵、疝氣が肩へ上つた〳〵。

袖介　爰でござりますか〳〵。

大六　アレ〳〵、また頭へも來た〳〵。

袖介 ナニ、疝氣が頭へ上りましたか。爰かな〳〵。

大六 まだ足へ下がり居つた〳〵。

袖介 ハテ、まめな疝氣めぢやな。爰かな〳〵。

ト汗みづくになつて揉む。大六切なさうにうめきながら、方々揉ませる。馬士唄になり、向うより勘太、とつかはと走り出て來り、内へ入り

勘太 コレ〳〵、大六どの、よい駄賃が二駄あるワ。一駄はおれがやるが、一駄やつてくれないか。コレ、素敵な錢儲けだぜ。

大六 ナニ錢儲けだいや。

ト無暗に飛起きる。袖介、膽を潰す。

勘太 コレ、こなたと二人で、しつかり儲かる口だワ。

大六 イヤ、錢儲けなら、おれ一人で澤山ぢや。こなたは頼まぬ。

勘太 コレ、それでも、おれが拵らへた仕事だよ。

大六 エヽ、やかましいわえ。

ト勘太を思ふさま突き飛ばし、そこにある馬の沓と竹鞭をさらひ、屋體囃子になり、一目散に向うへ

入る。勘太、舞臺へころげて

勘太 ヤア、親仁め、おれが拵らへた仕事を、先へ廻つて取る積りだな……泥坊々々。

ト屋體囃子にて、勘太、逸散に向うへ走り入る。

袖介 なんの事ぢや。しつかい狂人の寄合ひぢや。何につけても、業慾な親仁どの。それに引替へ深切なお才、この袖介への恨み言。祝言して、女夫になつてやりたいものなれど、大事を抱へし主人のお供、殊には遠州に勤めるうち、云ひ交した腰元のお雪、子供儲けた二人の胚……ほんに、生れた子ももう六つになるであらう。矢ツ張りあれが在所の、播州明石にゐる事ぢややら。どうぞこの便りを聞きたいものだ。

トこなし。この時、障子の内にて手を打つ。袖介こなしあつて

ハイ〳〵。若旦那様、さぞお氣鬱でござりませう。

ト合ひ方になり、上の屋體の障子を開く。爰に水右衛門、病ひ鉢巻、木綿の夜具にもたれ、病氣の體

モシ、今日は少しは、お心よい方でござりまするかな。

水右 イヤ、矢張り同邊ぢやが、それと申すも此やうに、人目を憚り閉籠つてゐるといひ、この家の主大六へは、洪之丞なりと僞つて、厄介になる心配と申し、何かにつけて病氣も捗々しく……イヤ

袖介　ナニ袖介、女房藤川が、最前から見えぬが、どれへ參つた。

袖介　藤川さまは、あなたの御病氣、御全快あるやうにと、府中の淺間さまへ、御參詣でござりまするが、モシ、お喜びなされませ、爰の娘のお才めが、巧者な醫者があると申して、迎ひに參りました。もうおしつけ見えらるゝでござりませう。

水右　それは忝ない。何かといかい世話になるわえ。

ト思ひ入れ。馬士唄になり、向うよりト庵、老けたる惣髮、田舍醫者の拵らへ、日傘をさし、跡より九介、絲立てを脊負ひ、伊勢參りの形にて、兩人出で來り、花道にて、

ト庵　其方は悴水右衞門方に、中間奉公いたして居つた九介、何かそぼろな姿で、ハテ、變つた所で逢ふものぢやなア。

九介　ちと遠州には、居られぬ譯がござりまして、こんな形で出ましたが、して、お前樣は、當時どこにお出でなされまする。

ト庵　愚老も仔細あつて、七年以前、濱松を立退き、それより諸所方々遍歴いたして、この頃當所の阿部川へ參つて居るが、して、愚老が悴の水右衞門は、隨分堅固で居るかな。

九介　そんならお前は、あの樣子を知らつしやりませぬか。

卜庵　ナニ、あの様子を知らぬかとは。
九介　マア〳〵、爰は途中、詳しい譯は、お前のお宅へ參つて話しますよ。
卜庵　そんなら斯うしてくりやれ。愚老はあの家へ療治に參るが、少しの間、門口で待つてゐてはくれまいか。
九介　左樣なら斯う致しませう。私しはあの馬部屋にでも、待つて居りませうよ。
卜庵　そんなら、さうしてくりやれ。ア、、なんだか樣子を聞かぬうちは、心がゝりな事ぢや。
卜兩人、門口へ來り、九介はこなしあつて、下の馬部屋へ入る。卜庵こなしあつて
頼みませう。愚老を呼びに遣はされた病家は此方かな。
卜直ぐに內へ入る。袖介、立つて來り
袖介　これは〳〵、ようお出でなされて下さりました。御苦勞にござりまする。
サア、穢くとも、一つお上がりなされませ。
卜茶、莨盆を出し
卜庵　イヤ〳〵、構はつしやりますな。さて、一兩日は、めつきりと暑うなりましたな。
袖介　左樣でござりまする。段々きびしくなるでござりませう。ヤレ〳〵、ようこそ早速お見舞ひなさ

れて下さりました。

卜庵　して、御病人は、どれに居らるゝな。

袖介　卽ち、あれに居られまする。

水右、病人は拙者でござるが、膈疾風とか申す病氣ゆゑ、兎角歩行が叶ひませぬ。失禮ながら

袖介　あそこへお出でなされて、御覽じて下さりませ。

卜庵　ヤレ〳〵、それは難儀でござらう。ドレ〳〵、脈を見て進ぜませう。

水右　これは〳〵、見苦しい所へ、ようこそお見舞ひ下されました。

ト三人、捨ゼリフあつて、水右衞門の脈を見ようとして、兩人、顏見合せ

卜庵　ヤア、其方は

水右　ヤヽ、思ひがけない

卜庵　變つた所で

袖介　モシ、お知り人でござりますか。

水右　ヤ……イヤ、知る人ではなけれども……アイタヽヽヽ。

袖介　ハヽア、また痛んで參りましたか。ちと撫つて進ぜませう。

ト庵　イヤ／＼、こりや此やうに明け放して居るゆゑ、風が當るて

水右　成る程、それゆゑ風が當つて痛むのであらう。袖介、その障子を閉てやれ。

袖介　左様なら、お醫者様。

ト庵　もう決して構はつしやりますな。

袖介　ハイ／＼。よろしう御療治なされて下さりませ。

ト合ひ方になり、障子を閉めて水右衛門とト庵を隠し、思ひ入れあつて

ヤレ／＼、どうぞアノ醫者どのゝ手で、早く本復させて進ぜたいものぢやが……ほんに、今朝阿部川堤へ馬草苅りに行つた時、鎌が切れぬでホッとした。どうで親仁どのゝ手助けに、明日の朝も行かずばなるまい。ドレ／＼、この隙に、研いで置きませうか。

ト手桶と砥石を出し、鎌を研いでゐる。馬士頭になり、向うより林彌、旅がけ、小座頭の拵らへにて、杖を突き、跡より子供大勢、曾我祭の萬燈を持ち、はね吉、大きなる若衆にて、馬の沓、草鞋などを林彌に打ちつけ／＼、弄りながら出て來り、花道にて

はね　オヽイ／＼、盲目ッ子／＼、今度は騙しはしない。好い物やらう／＼。

林彌　イエ／＼、もう／＼、いりませぬ／＼。

はね　エヽ、好い物をやらうと云ふに、此奴が〳〵、太い盲目だ。ソレ、これをやるぞ。その代り、その杖は、おれが貰ふワ。

ト林彌の顏へ馬の沓の古いのを載せ、手早く杖を引ツたくる。

林彌　アヽ、申し〳〵、堪忍して下さりませ〳〵。

はね　ワアイ〳〵、よい氣味だ。囃してやれ〳〵……めく〳〵めくらッ子。

皆々　目を明いて見さいな〳〵。

ト林彌、泣き出すを、大勢よつて弄り、林彌、泣きながら門口へ來る。皆々、囃しながら附いて門口へ來る。袖介、これを聞きつけ、門口へ出て

袖介　これはしたり、見れば目かいも見えぬ子を捕へて、可哀さうに、其やうにいぢめるものではない

はね　べヽヽヽ……サア〳〵、よい事して遊ばう〳〵。

ト皆々、林彌をクルリと取卷き

皆々　中の〳〵子盲目は、なぜに脊が低いな。

ト皆々よつてたかつて林彌の頭をヒッシャリくらはせる。袖介見かねて、はれ吉を突きのけ、林彌を圍ひ

袖介　エヽ、この餓鬼め。大きな形をして、其やうな悪あがきすると、きく事ぢやないぞ。

はね　そんなに盲目の贔屓をすると、おれが又斯うしてやるワ。

ト林彌をくらはす。林彌泣き出す。

袖介　エヽ、又してもこの腕白めが。

ト袖介、はれ吉の頭をくらはす。

はね　エヽ、頭が割れた。ワアヽ。

皆々　サア〳〵、祭へ行かう〳〵。

トはれ吉大泣きに泣き、子供皆々、ワヤ〳〵云うて附き、向うへ入る。

袖介　イヤ、あの餓鬼も大きな形をして、いける奴ではない。サア〳〵、もう彼奴等は去なしてしまうたによつて、モウ〳〵、泣きやるな〳〵。

ト林彌を介抱して、内へ連れて入る。

林彌　どこの小父様か知りませぬが、有り難うござりまする。

袖介　父さんや母さんは一緒かな。

林彌　イヽエ。

袖介　ヤレ、おとなしい子ぢやな。此やうな子を、一人で旅をさせるといふ親は、どのやうな心であらう。コレ〳〵、小僧が國は、何といふ所ぢや。知つてゐるか〳〵。

林彌　アイ〳〵、國は播州明石といふ所。

袖介　ナニ、播州明石ぢや。フム。して、親の名は何と云ふ。

林彌　母樣の名はお雪、父樣の名は、袖介と云ひまする。

袖介　ヤヽ、そんならわれは

ト思ひ入れあつて

コレ〳〵、そのわれが母樣といふのは、國に殘したか。又は同道して來たのか。どうぢや〳〵。

林彌　アイ、母樣は、わしと一緒に、連れ立つて來ましたわいの。

袖介　オヽ、さうか〳〵。そんなら道ではぐれたのか知らん。

ト門口へ出て、捨ゼリフにて方々見る。

林彌　モシ、小父樣、母樣は、爰に居りまする〳〵。

袖介　この子は何を云ふぞい。どこに母が居るといふのぢや。

ト此うち林彌、守り袋より紙位牌を出し

林彌　母様は、これでござりまするわいの。

ト袖介に渡すを取つて

袖介　證譽貞操信女……そんなら嬶めは……ホヽホイ。

ト思ひ入れ。

林彌　父様と母様は、わしが腹にゐる時、別れたとやら。それゆゑわしが平常、父様に逢ひたい、顔見る事はならずとも、せめて聲なと聞きたいと、母様をせがんだゆゑ、それ程までに思ふなら、わしが連れ立つて行て逢はせてやらうと、親子二人で國を出て、この道中の坂の下といふ所で、母様は俄に持病の癪がさしこんで、つい死んでのけました。

袖介　そんなら嬶めはアノ途中で……南無阿彌陀佛々々々々々。

林彌　その時、母様の云はしやるには、父様に巡り逢うて、互ひに顔も知らぬ同士。この守は父様の、着る物の裂れぢやによつて、もし父様らしい人に逢うたなら、これを證據に親子の名乘りとやらを、せいと云うて死にましたわいなう。

ト林彌、泣き伏す。袖介、脊を撫り

袖介　チエヽ、可哀やな〳〵。南無阿彌陀佛々々々々々。

林彌　それで、母様に死なれて、さま〴〵悲しい思ひをして、濱松とやらへ尋ねて行きましたら、父様は旦那様のお供して、どこへ行つたやら知れぬと聞きましたが、どうぞして逢ひたいと、此やうに當途もなしに尋ねます。コレ、小父様、もし知つてなら、どうぞ教へて下さりませ〳〵。

ト袖介に縋つて泣く。袖介、ワナ〳〵こなしあつて

袖介　目かいも見えぬ身を以て、顏さへ知らぬ父親を、種々様々の艱難して、此やうに尋ねさまよふ子心を思へば、こりやモウいつそ

ト思ひ入れあつて

イヤ〳〵、大事を抱へし主人のお供。目かいの見えぬ子悴は足手まとひ。又この家へ頼み置かんにも、あの親仁どのゝ邪慳といひ、お才が思惑。こりやどう思案して見ても、心を鬼に

ト思ひ入れあつて

コレ〳〵、よい子ぢや。マア、泣かずと小父の云ふ事を、よく聞きませうぞ。コレ、おぬしが逢ひたう思うて尋ねる、その袖介といふ父様はナ、死んだ〳〵。死んでしまうた者を尋ねようより早く國へ歸るがよい。

林彌　そんならアノ父様は……ハアヽ。

ト泣き出し

母様には死に別れ、また父様も死なしやりましたか。そんなら小父様、どうぞお前の子にして下さりませ。わしはなぜか、お前の子になりたうござりまするわいなう。

ト袖介に縋つて泣く。袖介、こなしあつて

袖介　エヽ、こりやモウ胸が……コレ、よい子ぢや。もう〳〵、何にも云うてくれるな〳〵。

ト思ひ入れあつて、胴巻より用意の金を一兩取出し、紙に包み

願ひある身の嗜みに、遣はぬ金子も……コレ〳〵、小父がこの金をやる程に、よう聞き分けて、早う國へ歸りや〳〵。

林彌　イエ〳〵、この金はいりませぬ。どうぞお前の子にして下さりませ。

袖介　これはしたり、また其やうな事を。聞分けの惡い。其やうに無理を云ふとナ、死んだ母様が腹立つぞや。

林彌　アイ〳〵。そんならもう、歸りませう〳〵。

袖介　オヽ、ようく聞き分けた。おとなしい子ぢや〳〵。

ト林彌、門口へ出て

林彌　小父樣、もう日が暮れるさうでござりまする。今宵は泊めて下さりませぬか。

袖介　コレ、今宵ばかりを五年も十年と、泊めてやりたいものなれど……コレ〳〵、ツイそこに、阿部川といふ町がある。そこへ行て泊るがよいぞや。

林彌　アイ〳〵。そんならさう致しませう。ハイ〳〵、有り難うござりまする。

ト時の鐘、馬士唄の合ひ方ばかりにて、林彌、向うへかゝる。袖介、門口にてこれを見送り

袖介　アヽ、コレ〳〵、そこに木の根があるワ。もそつと右手の方へ。エヽ、また生憎あそこに大きな石が……アヽ、コレ〳〵、爪づくまいぞや。

トいろ〳〵捨ゼリフにて氣を揉む。林彌、揚げ幕へ入る。袖介、よろしくこなしあつて

アヽ、もう行てしまうたか。目かいも見えぬ身を以て、はる〴〵親を尋ねる道で、母親には死に別れ、今また尋ねる父親に、巡り逢ひは逢ひながら、名乘らぬ上は逢はぬも同然、よく〳〵因果なあの子の生れ。思へば不便な身の上ぢやなア。

トこなしあつて、内へ入り、林彌が落して行きし臍の緒の書附を拾ひ取り

「元祿元年辰の年辰の月辰の日誕生の男子德松」……こりやコレ慥かにあの子の臍の緒、アヽ、守り袋を明けるとて、落したのぢやな。まだ遠くは行くまい。追ひついて渡してやらうわえ。

卜行かうとする。この時、障子の内にて

水右　袖介々々。

袖介　ハイ／＼。

卜思ひ入れ。障子を開く。水右衞門、卜庵出て

卜庵　時にお若いの、この病人を見ましたが、決して命にかゝはる程の事ではござらぬが、何をいふにも、この足の立つやうに致すには、むづかしい事でござるが、併し各々の覺悟次第で、隨分全快も致すぢやて。

水右　コリヤ／＼、袖介、お醫者の云はるゝには、覺悟次第で全快いたすと申さるゝ。その仔細を承つてお見やれ。

袖介　イヤモウ、是非とも御本腹させねばなりませぬ。たとへどのやうな事でも致しまして

卜とつかはと立つて茶を汲む。此うち馬士唄の合ひ方になり、向うより藤川にお才附いて出て來り、門口を窺ふ。袖介、卜庵へ茶を出し

サ、ぬるくとも一つおあがりなされませ。時にお醫者樣、覺悟次第と仰しやるは

卜庵　まづ第一が、高金でござらうて。

袖介　エ。

ト庵　イヤサ、金がいりますて、

ト懷中より箱入りの藥を出し

コレ〳〵、この藥ぢやて。これは府中の藥種屋が、御城内のお屋敷へ見せてくれるやうにと頼まれた、ヘイサオバサオといふ物ぢやが、まづこれが一味いるぢやて。

袖介　して、その價の儀はナ。

ト庵　即ち百金ぢやが、愚老も大事の忰といひ……イヤ、大事の病人を全快させるには、その高金は是非もないが、爰に一つの得難い品といふは、辰の年月揃ひし男子の血汐が入用ぢやが、たとへ藥はあつても、右の血汐が手に入らねば、どうも全快は覺束なうござるが、なんに致しても、困つたものでござるて。

袖介　そんなら何と云はつしやります。辰の年月揃ひし男子の

ト思ひ入れあつて

モシ〳〵、御安堵なされませ。その血汐は少し此方に、心當りがござりまする。

水右　ナニ、取り得難いその血汐が、其方に心當りがあると申すか。それは耳寄りぢやが、何を申すも

大枚百兩と申す金子が
ト思ひ入れ。この時、門口より
藤川　その金も、出來まするわいなァ。
ト合ひ方になり、兩人、内へ入る。
水右　そちや女房の藤川。
卜庵　そんならこの女中が、今の話しの
水右　モシ。
ト思ひ入れ。
袖介　して又金子が出來ますとは。
藤川　わたしがやうな不束者でも、身を沈めてなと藥の役に
さいぢやと申して、どうしてマア、あなたが其やうな勤め奉公を
袖介　させましては私しどもゝ
水右　身共も武士が立たぬわえ。
藤川　身を捨てゝこそ浮かむ瀬と、つい一通りの女夫でさへ、夫の難儀のその折は、憂川竹に沈むとも

救はにやならぬが女夫の常。ましてわたしは外ならぬ、大事を頼みし大事の夫。また二つには淺ましい、怪我とはいへど、現在お前の……アイヤ、お前の爲なら、苦界に沈むはおろかな事、たとへこの身は矢がら責め、鐵砲責めのその上に、三尺高く木の空で、槍の穂先で苛なまれても、まだあきたらぬこの身の罪……サ、夫の爲なら其やうな、責苦にあつてもいとはぬ程に、わたしでお間に合ふ事なら、モシ、勤め奉公させて下さりませいなア。

ト こなし。水右衛門、思ひ入れあつて

水右　出かした女房。すりや、その身を沈めて夫の病氣を

藤川　アイ。

さい　これにつけても悲しいは、わたしが無疵の女子なら、何しにあなたを其やうな。エヽ、なぜに母さん、わたしをば、此やうな顏に産んで下さんしたぞいなア。

ト 我が手に顏を搔きむしつて思ひ入れ。

卜庵　女中がいよ〳〵その心なら、これから愚老が同道して、あの府中の二丁町へ。

藤川　アイ、どうなとして、少しも早うその金を

ト 思ひ入れ。よき時分より九介、馬部屋より窺ひ出て、門口に聞いてゐて

九介　その金は、この下郎めが、御用立て申しませう。

ト内へ入る。皆々思ひ入れ。

水右　そちや小者の九介でないか。

紬介　同じ仲間の二合半。そんならおぬしが

藤川　アノ大枚の百兩を

九介　いかにも御用立て申しませう。この場の樣子を立聞きして、見かねて爰へ入りましたは、假にも主人のお内儀樣、身賣りを見てもゐられませぬ。賣つたつもりで水右衞門さま、この藤川さまを奴めに下さりませ。御不承知ならお二人ながら、譯を詳しうぶちまけたら、互ひに御身の難儀と……サア、この奴めに御新造樣を、お預けなされてはどうでござります。モシ、兩方の藤川さま、よもや否とは云はれますまい。

ト水右衞門、藤川へこなしにて云ふ。

水右　下郎ながらも大丈夫。其方、水右衞門の身の大事を

藤川　否と云はれぬ詞詰め。この身のしがも、今日は夫に明かさうか、明日は打明け云はうかと

水右　ヤ。

藤川　サア、明日とも云はずお藥を、早うお前の手に入れて

卜庵　そんなら其方がその金を

九介　金は無けれど水右衛門さま、金より高い、ナ

ト天國の短刀を藁苞より出しかけ見せる。

水右　いかにもそれは誠に大金。イヤナニ御老醫、身共がきつと請合ひまする。あの一品にて御所持の一藥

卜庵　よそ外ならぬ御病人の、請合ひならば一品預かり、藥は其方へ。

ト水右衛門へ藥を渡す。

袖介　鹿を逐ふ獵師山を見ず。跡の始末は、それからそれまで

藤川　そのお藥さへ手に入らば

さい　やがてめでたう御本腹。

九介　藤川さまは下郎めが、金の代りのこの短刀……イヤ、この藁苞に

ト差出す。

卜庵　すりや、この藁苞が大枚百兩。

水右　アヽモシ、身共がきつと請合ひまする。只何事も
九介　云はぬ證據は、現在親子も
水右　知らぬ同士の
九介　他人と他人。
ト庵　心ありげなこの下部。然らば愚老が
　ト藁苞を取る。
袖介　いま一藥は下郎が胸に
藤川　一旦この身は苦界に沈み、夫の難病救ひし上にて、いづくの果に暮らすとも、果は夫の手にかゝり……サ、夫の手をかり助太刀を
水右　アヽコレ……隨分堅固で
藤川　お前も早う御本腹。とはいふものゝ、病氣の夫を振り捨てゝ
ト庵　ハテ、愚痴も大概
九介　淺黄の事サ。
　ト藤川の手を引き、門口へ出る。

さい　藤川さま、モシ。そのお心は汲み分けて

藤川　モシ。

ト水右衞門を見るを

袖介　アイヤ、やがてめでたう

ト門口をシヤンと閉めて

逢はせませう。

ト皆々よろしくこなし。唄になり、九介、藤川の手を引き、卜庵附き、向うへ、お才は水右衞門を介抱して障子の內へ入る。袖介殘り、こなしあつて、押入れより一腰を取出し、腰にぼツ込み

あの一藥の手に入る上は、いま一品の年度の生血。最前逢うた小悴の、丁度年月日時まで、生れ合うたが天の與へ。不便ながらも、跡追ひかけて

ト表へ駈け出す。入相の鐘、馬士唄になり、大六、駄賃馬を引出し、その馬に林彌を乘せて、袖介と行き違ひ

大六　カウ〳〵、わりやァ袖介ぢやァねえか。

袖介　エ、お前は親仁どの、いま戾らつしやりましたか。

ト云ひながら向うへ行くを

大六　コリヤヤイ、マア、何をキヨロ〳〵するぞ。内へ歸れ。

袖介　イエ、わしはちつと

ト又た行かうとするを

大六　エヽ、固意地な。おりや今夜は戻りに、好い仕事して來たわい。

トこれにて林彌を見て、思ひ入れ。

袖介　それはようござりました。それはさうと親仁樣、お前はどうした譯で、この小座頭を

大六　連れて戻つたは、日暮れに及んで、泊りにまごつくが不便さに、そこで親仁が

袖介　ハテ、日頃に似合はぬ……イヤ、よう連れてござりました。サア〳〵、小僧や、わしが内へ早う來い〳〵。

ト舞臺へ來り、馬より林彌を下ろし、内へ入れる。大六も、馬を馬部屋へ入れて、内へ入る。

サア〳〵、今宵は爰へ泊るのぢやぞ。嬉しいか〳〵。

林彌　アイ〳〵、嬉しうござりまする。

大六　イヤ、なか〳〵愛らしい小盲目ぢやわえ。

袖介　コレ、ひもじうはないか。どうぢや〳〵。
　　ト林彌、居眠る。
ハヽヽ、親仁様、見さつしやりませ。この子は、もう眠くなり居つたさうで、アヽ、居眠りをするワ。成る程、子供といふものは
大六　そこらへ押ころばして置くがいゝわえ。
袖介　サア〳〵、小父が寢さしてやりませう。モシ、親仁様、どうぞ行燈を
大六　オツト、合點ぢや〳〵。
　　ト袖介は蒲團を出し、林彌を寢かす。大六は行燈をともしながら、思ひ入れあつて
コレ〳〵、袖介、庄屋の醉倒れめを、あのやうに去なしては、また今の間に、割り込むであらうと思ふが。
袖介　左様でござります〳〵。なんと親仁様、御苦勞ながら、庄屋どのゝ内へ行て、しつかりと得心のゆくやうに、日延べをして來ては下さりませぬか。
大六　コレ、袖介、そりや何を云ふぞえ。おりやア又おぬしを頼んで、やらうと思うてゐたわえ。
袖介　そりや易い事でござりまするが、今宵はどうも私しは、外へは出られませぬ。親仁様、お前、御

苦労ながら

大六　イヤ〳〵、おぬしを外へ出して、この親仁が内に居れば、どうも勝手が……コレ、袖介、なんで又わりや、今宵は外へ出られぬ。

袖介　サ、これはなんでござります。オヽ、それ〳〵、持病の疝癪が起つて、どうも腰が吊つてなりませぬて。

大六　エヽ、なんのかんのと、もくをつけて、わりやこの親が云附けを背くのぢやな。

袖介　なんのマア、親仁様の云附けを

大六　イヤ〳〵、背くのぢや〳〵。コレヤイ、わりやア徒中間の作助が悴で、餓鬼の時分から、この大六が養子に貰うたりや、云はゞ義理のある養父ぢやないか。エヽ、こゝな恩知らずめが。

袖介　モシ〳〵、そのお腹立ちは、御尤もではござりますが

大六　御尤もなら、なぜ行かぬのぢややい。

袖介　サ、どうも持病の

大六　エヽ、どう云へば斯う云ふと、うぬ、どうするか見をれ。

ト袖介に立ちかゝる。この時、奥よりお才走り出て、大六を留めて

さい　モシ、父樣、お前もマア年甲斐もない、なんの事でござんす。ぬしが、ついぞお前の詞を背いた事はござんせぬが、よく〳〵の事なりやこそ、あのやうに云はしやんすものを。こりや斯うしようわいな。あの庄屋どのへは、わしが行て、よう合點ゆくやうに、日延べして來ようほどに、それで堪忍して下さんせえ。

大六　オヽ、われも内に居ぬ方が、此方の勝手

さい　エ。

大六　エヽ、どうなと勝手にしをれ。

さい　ホヽヽヽヽ、なんぢやいな。其やうに腹立つて。モシ、袖介どの、そんならわたしや、庄屋どのへ行てくるぞえ。

袖介　そんならどうぞ、大儀ながら。

さい　なんのマア。ツイ行つてくるわいなア。

ト馬士唄、かすめたる屋體囃子。お才、こなしあつて向うへ入る。大六、思ひ入れ。

大六　コレ、袖介、阿部川の越中屋に、それは〳〵よくきく、病氣の藥があるが、買うて來て服まぬかえ。おれが行つて來てやりたいが、年よつて日がな一日馬追うて、コレこの通り、足は棒になつ

て、一足も歩かれるものではない。サア、行て來ぬかえ〳〵。

袖介　有り難うはござりまするが、もう疝癪も癒りました。ほんに親仁樣、なんと寢酒に、二合半引ツかけてはどうでござりまする。

大六　成る程、孝行な悴ぢや。サア〳〵、買うて來てくれ〳〵。

袖介　モシ〳〵、お前自身に買うて來て、あがれといふ事でござりまする。

大六　ナニ、この親仁に自身に取つて來い。それよりおぬし、疝氣の藥買ひに行け。

袖介　ハテ、さう云はつしやらずと、寢酒を買ひに

大六　イヽヤ、疝氣の藥買ひに

袖介　行かつしやればよいになア。

ト思ひ入れ。

大六　コリヤヤイ、袖介、わりや又しても親仁が詞、背くのぢやな。

袖介　アヽモシ、何しに私しが

大六　そんなら疝氣の藥買ひに行け。

袖介　それは迷惑。その疝氣は、もう癒りましたよ。

大六　イヽヤ、おぬしが癒つても、この親仁が癒らぬワ。ヤイ、おれが云ふ事きかぬと、うぬ、どうするか見をれ。

トこなし。

袖介　アモシ、參ります〱……サ、行きは行きますが、合點のゆかぬは袖介を、兎角に外へ出したがゝる、親仁どのゝ胸中が

ト思ひ入れ。

大六　エヽ、行きをらぬかえ。

袖介　アイ、參りまするわえ。

ト思ひ入れあつて袖介、門口へ出て、花道へかゝる。此うち捨て鐘。大六、門口を明け、外を見廻し門の戸を閉める。袖介、ツカ〱と門口へ戻つて來り、尻をからげる。大六も最前の鎌を取つて口に咬へ、双方一度の見得。これをキツカケに時の鐘、誂らへの凄き合ひ方になり、大六は内にて、手桶の水にて、最前の砥石にて寢刃を合はせる。袖介は門口の草井戸より水を汲み、一腰を抜き、石にあて、双方寢刃を合はせるこなし。よき程に大六、行燈へおオの前垂れをかけ、暗闇にして、そろ〱林彌にかゝる。袖介もそろ〱内へ入り、探りよつて、兩人一緒に林彌に手をかけるとて、互ひに袖

を掴み合ひ、これにて兩人、悕りして飛びのくはずみに、行燈の前垂れ落ちて、兩人顔見合せ、思ひ入れあつて

袖介　ヤア、親仁樣。

大六　われは袖介か。年もゆかない小座頭を、こなた殺す氣ぢやな。

袖介　モシ、お前樣はなァ。最前も申します通り、惡い事はなされても、博奕や酒の惡飮みなら、どうでも跡の償ひやうもござりませうに、僅かな路用に目がくれて、あの小座頭を殺す心でござりませうがな。袖介が斯うしてゐるうちは、人も赦してくれもせう。可哀さうに、お前の血を分けた妹までが憂艱難。私しも御主人方のお供して、御先途を見屆けねばならぬ身の上。腹は立たつしやりますな。今までのやうでは、人はお前を赦しませぬぞえ。

大六　御意見、忝いわえ。成る程、おりや人間ぢやあるまい、畜生かも知れぬて……その畜生の臑を噛る、われは何ぢや。又しても〳〵、親に向つて出過ぎ者めが。

ト袖介を蹴飛ばす。

袖介　親仁樣、こりや又あんまり

トこの時大六、袖介の脇差を見附け

大六　こりや何ぢや。きめてゐるな……ハヽア、それで解つた。親を切る氣だな。
袖介　エヽ、勿體ない、なんのマア
大六　イヽヤ切る氣ぢや。サア、切れ〳〵。
　　ト體を附きつける。
袖介　サヽ、御尤もでござりまするが、何しに私しが親仁樣を殺す心が無いならば、コリヤヤイ、なぜ又一本きめて來た。イヤサ、その刀で誰れを切る氣ぢや
大六　只今までは隱しましたが、そのお疑ひを受けましては、仔細を打明け云はぬのも、却つて不孝。
袖介　ト思ひ入れあつて
モシ、奥にござる病人は、實は藤川水右衞門さまといふお侍ひ。私しが主人、藤川さまの卽ち連合ひ。譯を申せば長い事、お二人ながら、親の敵を尋ねる途中、計らず水右衞門さまの御難病。本復さする一藥は、辰の年月揃ひし男子の、血汐が無ければ叶はぬと、最前醫者の物語り。折に幸ひその小悴、辰の年度の揃ひし生れ、不便ながらも手にかけて、主人の娘の連合ひなる、水右衞門さまの難病を救はんと、さてこそ忍んでこの振舞ひ。モシ、この小悴こそ私しめが、濱松にて馴染みしお雪と、下郎が仲に儲けし悴。まつた、そのお雪と申す女が生國　播州明石の人丸の

神職の娘とやら。

大六　ヤア／＼、コレ／＼、袖介、そんならその子は、おれが爲にも、孫ぢやワ／＼。

袖介　ヤヽ、何と云はつしやります。

大六　コレ、その人丸の神主どのが、この國へ勸化に來た時、久離切つて養子にやつた女の餓鬼、その幼名はお雪と云うたが、そんならその子は親仁が初孫。殺さうなどゝは片腹痛い。手でも附けると、きく事ぢやないぞ／＼。今日はこの親仁が、福德の三年目、初孫を儲けた上に、また金儲けの口が出來たワ。コレ、先刻問屋場へお役人がござつて云はつしやるには、藤川水右衞門といふ侍ひを、內々にて訴人すれば褒美をやる。其方が內に浪人體の病人を、隱まひ置くといふ噂ぢやが、その名は何と聞かれたゆゑ、慥かに源之丞と申しましたと云うたれば、それでは相違と役人の詞。いま又其方が詞では、よし／＼、直さま訴人して、褒美をズッシリせしめにやならぬワ。

ト袖介、思ひ入れあつて

袖介　エヽ、親仁どのゝ又してもその惡心、と云うたところが直らぬ氣性。それは格別、どういふ仔細か知らねども、水右衞門さまをお尋ね者とは氣遣はしい。その噂を聞くにつけても、ちつとも早う水右衞門さまに、良藥與へ、本腹させて、片時も早う、この場を落すが上分別。こりやモウ悴

を一思ひに

ト林彌へこなし。大六、支へて

大六　ならぬ〳〵。親仁が初孫。手も附けさす事は、ならぬぞ〳〵。

ト爭ふ。この時、林彌、目を覺ましたるこなしにて、尋ね廻り

林彌　ヤヽ、そんなら尋ぬる父樣か。

ト袖介の方へ行くを、大六捕へて

大六　コリヤ〳〵、孫よ、寄るな〳〵。われが親は、其方を殺さうといふ、鬼のやうな親ぢやぞ。サア

サア、早う奧へ行け〳〵。

袖介　アモシ、この子はどうでも

ト寄るを

大六　エヽ、何しをる。サア〳〵、奧へ行けと云ふに、鈍な奴ぢや。

ト突きやり〳〵するゆゑ、林彌は探り〳〵思ひ入れ、障子屋體へ入る。

サア、この上は、水右衞門を訴人して、褒美の金にありつかうわえ。

ト行きにかゝるを、袖介とめて

袖介　イヤ、そりや成りませぬ。金輪奈落成りませぬぞ。
大六　ヤイ、おのれはマアこの親が、金儲けの邪魔ひろぐのぢやな。
袖介　サア、それぱつかりは、邪魔せにや成りませぬ。
大六　エヽ、この痴者めが。この親仁が訴人せぬうち、外から訴人がある時は、うぬが馬追して、他人に駄賃取られるやうなもの。エヽコレ、斯う云ふうちも氣がいらつ。うぬ、どうしても邪魔ひろぐのぢやな。
袖介　サア、これぱつかりは親仁樣、どうぞ御料簡なされて
大六　エヽ、アタ面倒な。さう云やおのれを
トそこにある鎌を取つて、袖介に打つてかゝるを、袖介、拔けつ潜りつ、立廻つてゐる。
袖介　これはしたり親仁樣、危なうござりまする。エヽ、刃物三昧は措かつしやりませ。
ト鎌をもぎ取らうとする。大六は袖介を切らうとするはずみに、大六誤まつて我が脇腹へ鎌を突き立て
大六　アイタヽヽヽヽ。
ト苦しみ、こなしあつて

ヤア〳〵、おのれはマア大それた。親仁を切つたな〳〵。

袖介　エヽ、また其やうにいたぶり事。何しにわしが親仁様を

ト大六を見て

ヤア、コリヤコレほんに、思はず知らず

大六、おのれは親を殺す氣ぢやな。

袖介　モシ〳〵、どうしてマア其やうな事。こりや、ほんの怪我でござりまする〳〵。

大六　イヽヤ、殺す氣ぢや〳〵。袖介が親を殺すわやい。親殺しぢや〳〵。

袖介　これはしたり、親仁様、なんでこの袖介が、大恩あるこなさんをば

大六　殺さぬ氣が、なぜ切つたのぢや。もう斯うなつては破れかぶれ、猶の事あの侍ひを訴人する。その邪魔ひろぐおのれは、おれが叩き切つて

ト切つてかゝるを、袖介とめて

袖介　コレ、親仁どの、わしを殺してこなさんの、腹が癒るなら殺されたいが、この袖介は旦那方のお供して、敵を討たにやならぬ身の上。モシ、お慈悲でござります。お情でござります。どうぞ、爰の道理を聞き分けて

大六　否ぢや〳〵。親に刄向ふおのれは、おれが殺さにやおかぬ。

ト切りつける。袖介、その手を捕へて

袖介　すりや、どうあつても親仁どの、わしを殺して、水右衛門さまの事に

大六　オヽ、訴人をするのぢや。

袖介　エヽ、あくまで凝つたる強慾非道。釋迦如來が再來して、百萬だら口說いても、所詮聞入れ無き根性。殊に怪我とはいひながら、急所をかけてのこの深手。長く苦痛をさせやうより、いつその事に

大六　ヤ。

袖介　こりやモウ是非に及ばぬわえ。

ト鎌をもぎ取つて捨て

ト手早く一腰を拔き、大六を一かせ切り下げる。これより馬士唄の合ひ方、誂らへ祭の鳴り物になり兩人立廻りよろしく、よき時分、向うより勘太走り出て、ちよつと內を窺ひ、下座へ忍ぶ。大六、よろぼひ〳〵門口の外へ出るを、袖介、追ひかけて出て、いろ〳〵立廻りあつて、大六を仕留め、息を

切り、ベツタリと下にゐる。この途端、時の鐘、誂らへの合ひ方になり、上の屋體の障子開く。内に水右衞門、林彌に猿轡をはめ、刀を持ちながら、思ひ入れあつて

水右　辰の年月揃ひし悴と、其方が詞を洩れ聞いて、命を取るも不便なれど、われが爲にも主人たる、石井右内が仇敵、討たねばならぬ聟の某、難病癒やす其ために

袖介　元より覺悟の下郎が心底。少しも早く悴めを、お役に立てゝ、あなたの難病。

水右　過分な心底。それのみならず、身に覺えなき無實の罪にて、われを詮議と今の取り沙汰。それを訴人の老人まで

袖介　手にかけましたも諺の、忠義ゆゑには親をも討つの、教へを守つて是非なくも

水右　天晴れ忠義の下郎袖介。とてもの事に、悴が命も

ト刀を抜き放す。

袖介　サヽ、御念にや及ばぬ。少しも早う。

水右　申しうけるぞ。

ト林彌の胸へ突き立てる。林彌、苦しむ。袖介思はず

袖介　モシ

ト駈けようとする。この途端、大六起上がつて、袖介が足へ縋るゆゑ

南無阿彌陀佛。

ト目を閉ぢて後手に止めをさし、また思はず林彌を見て「ムウ」と氣味合ひあつて、水右衛門こなし

ピツシャリ障子を閉て切る。本釣り鐘。袖介こなしあつて、大六の死骸を草井戸へ打込む。水の音。

この時、上の障子の内にて

勘太　お尋ね者の藤川水右衛門。この由注進。

水右　慮外な下郎め。

トばつたり音して、障子サツと開き、勘太、見事に中返りして投げ出される。起上がつて「うぬを」

トかゝるを水右衛門、勘太が腕を捻ぢあげて、ヅカ〳〵と出て、キツと思ひ入れ。袖介これを見て

袖介　ヤア〳〵、水右衛門さま、あなたはお足が立ちまするか。

水右　ヤヽ、誠に、我れを忘れてこの場の振舞ひ、さては難病平癒なしたか。

袖介　悴の血汐が、お役に立つたか。

勘太　うぬを

トかゝるを水右衛門、見事に切つて捨て

兩人　エヽ、忝い。

　　ト水右衞門、血汐を拭ふ。この時、所々にて早拍子木、竹法螺、かすめてドン／＼になる。兩人、思ひ入れあつて

袖介　合點のゆかぬあの物音。最前養父の詞といひ

水右　いま又下郎が詞の端。いかなる無實の災難か、この水右衞門を尋ぬる樣子。

袖介　人違ひにもせよ訴人あつて、この家へ捕り手の向ふ時は

水右　罪なきこの身の云ひ譯せんにも、牢屋へ下がつて日數を經なば

袖介　望みの妨げ、水右衞門さま。

水右　一先づ爰を、立退かうわえ。

　　ト支度する。袖介、手傳ひながら

袖介　跡に氣遣ひなされまするな。下郎が捕り手を騙つて、手間取るうちに、あなたをやす／＼。

　　ト思ひ入れ。此うち時の鐘、合ひ方にて、向うより、あば右衞門うば作案内して、嘉藤次、半纏股引大小にて、黒仕立ての捕り手大勢、十手を持ち、ひそ／＼と足早に出て來り、門口を窺ふ。

あば　袖介どの／＼、庄屋どのから急な用だ。

うば　爰を明けてもらはう〳〵。

袖介　オイ〳〵。

　ト袖介、門口を覗き見て

モシ、來ました〳〵。

水右　コレ。

　ト袖介に囁く。袖介、思ひ入れあつて

袖介　天下の網のかゝりし上は、水右衛門さま、こりやモウ覺悟さつしやりませ。

水右　云ふにや及ぶ。身共も一派の侍ひたる身。ナニおめ〳〵と繩かゝらうや。これなる一間に閉ぢ籠り、泥縞切り込む奴輩は、片ツ端から切り捨てくれう。

　ト袖介と目を見合はせ、頷いて、上の障子屋體に入り、障子を仰山にピッシヤリ閉め、直ぐに上の方へ抜けて、藪疊を押し分け、東の花道の附け際へ行き、思ひ入れ。袖介、ちつとも早くといふこなし

　この時、門口にて

おば　サア〳〵、どうする。爰明けた〳〵。

　ト袖介、時分はよしと門口を明ける。

嘉藤　ソレ踏んごめ。

捕手　動くな。

ト十手を構へ、袖介を取巻く。これを見て水右衛門、ニツタリと思ひ入れあつて、足早に東の揚げ幕へ入る。袖介、こなしあつて

袖介　こりやお役人様、何ゆゑあつて下郎めを、動くなやらぬと御意なされまする。

嘉藤　何ゆゑとは片腹痛い。其方が隠まふ藤川水右衛門、繩打つて、これへ出せ。

袖介　成る程、仔細ござりまして、水右衛門どのは下郎めが、隠まひましたに相違ござりませぬが、合點ゆかぬは何ゆゑあつて、藤川どのを其やうに、嚴しく御詮議なされまするな。

嘉藤　詮議いたすは外でもない。云はゞその身の舅たる、石井右内を殺害なし、まだその上に現在の、母まで殺せし重罪人。

袖介　イヤ〳〵、お役人樣、それは近頃御料簡違ひ。何しに水右衛門どのが、其やうな大罪を犯しませう、憚りながら御詮議が

嘉藤　エヽ、面倒な。ソレ、踏んごんで、召捕れ〳〵。

袖介　アヽ、モシ〳〵、滅多な事となされまするな。只今水右衛門どのが云はれまするには、侍ひたる

身が、無實の汚名に繩かゝるは、一世の恥辱と覺悟の上、あれなる一間へ籠りました。迂濶に踏んごむその時は、思はぬ不覺を取らつしやらうが。

嘉藤 ナニ、藤川水右衛門が閉ぢ籠つたとな。ハヽヽヽヽ、何程の事あらう。コリヤ、其方二人にて搦め捕れ。

あば モシ／＼、それは御無理でござります。先はお侍ひ。なか／＼百姓づれの身を以て

うば 大根や牛蒡を縛るやうに、どうして搦め捕られませう。

兩人 御免なされまし。

嘉藤 エヽ、流石は土ほぢりの役に立たずめ。コレ／＼、袖介とやら、其方搦め捕へ出せ。褒美は望み次第だぞ。

袖介 どう致しまして、モシ、牛若どのと荒木又右衛門を、丸呑みにした程、劍術手練の水右衛門どのなか／＼私し風情には。アヽ、怖い事／＼。

嘉藤 さう聞けば、身共もどうやら氣味が惡いが、ところをチツと辛抱するが、即ち役目。者ども、踏んごめ。

ト どん／＼になり、嘉藤次先に、怖々上の障子屋體へ踏みこむ事あつて、直ぐに出て來り

ヤイ／＼、藤川水右衛門め、一間には居らぬが、どこへ落した、白狀いたせ。

袖介　イエ／＼、私しは落しは致しませぬが、ハア、、聞えた、その一間へ閉ぢ籠ると、私しまで一ぱいはめて、さては裏口から阿部川堤の方へ、落ちたのだな。

ト思ひ入れ。

嘉藤　ナニ、裏口から落ちのびたとな。程は行くまい、跡追ッ駈けて

ト水右衛門の落ちし方へ行きにかゝるを

袖介　アモシ、裏口は、此方でござります／＼。

嘉藤　合點だ。者ども、續け／＼。

皆々　アリヤ／＼／＼。

トどん／＼になり、嘉藤次先へ捕り手、暖簾口へ入る。袖介ホッとこなしあつて

袖介　これでちつとは安堵したわえ。

ト胸撫でおろし、こなし。矢張りかすめてドン／＼、捨て鐘、向うバタ／＼にて、作助、走り出て來り、門口へ來り

作助　サア／＼、大事だ／＼。袖介は居ぬか、源之丞さま。袖介々々／＼。

トまご〳〵内をまごつく。

袖介　これはしたり、作助どの、袖介は爰に居ます。何をあわてゝ此やうに

作助　ヤレ、袖介か、よう内に居てくれたな。敵の水右衛門が厳しいお尋ね。お上のお手に入らぬうち早くお知らせ申したいが、源之丞さまの行くへは、知らぬか〳〵。

袖介　モシ〳〵、親仁様、變つた事を云はつしやりまする。藤川水右衛門どのなら、たつた今

作助　ナニ、水右衛門が居ると。コレ、袖介、そりや、どこに居る〳〵。

袖介　たつた今まで隱まひましたが、仔細あつて落しました。

作助　そんなら水右衛門はもう居ぬか。ホヽホイ。

ト思ひ入れ。

袖介　ハテ、合點のゆかぬ作助どの、なんでこなたは水右衛門どのを

作助　イヤ、合點のゆかぬは、おれより其方。なんで又水右衛門めを、隱まうて置いたのぢや。

袖介　ハテ、主人の娘の藤川さまと、縁組みあらば主人も同然。それゆゑ今まで、水右衛門どのを

作助　隱まひ置いたか。エヽ、どんくさい。コレ、御主人石井右内さまを殺したは、藤川水右衛門といふ事を、わりやそんなら知らないのぢやな。

袖介　すりや何と云はつしやります、御主人右内さまを手にかけたは、藤川水右衛門とな。

作助　いかにも水右衛門だ。

袖介　道理こそ今の役人が詞の端。モシ、親仁どの、いよ／＼敵は水右衛門といふ事は……イヤ／＼、こりや嘘ぢや／＼。なんぞの間違ひでござりませう。

作助　コリヤヤイ、それが矢ツ張り間違ひはない。

袖介　何か間違ひ。して又敵が水右衛門どのといふには、なんぞ慥かな

作助　證據といふは、おれがしつかり見て置いた。

袖介　そんならこなたが、その場の始末を

作助　オヽ、見たとも／＼。思ひ出してもゾツとする。お旦那右内さま、何心なくお歸りの、油斷を見濟まし騙し討。されども御手練、敵の足を一刀。併し初太刀は急所の痛手。

袖介　その時こなたは、どうなされた。

作助　サア、面目ないが非力のおれ、せめて敵の面體なりと、後の證據に見屆けて

袖介　エヽ、役に立たずとその場所に、在り合したら、ナニやみ／＼と。

作助　木の根の蔭で見る無念さ。

袖介　さすれば證據は

作助　右の金瘡。

袖介　隔疾風と僞つて

作助　あくまで其方を騙つたか。

袖介　ヤア〳〵、さうとは知らずたつた今まで、隱まつて落してやつた藤川水右衛門。親仁どの、こなたの知らせが、一足遲かつたわい〳〵。

ト思ひ入れ。

作助　尤もだ〳〵。

袖介　國を立退くその砌りも、女房藤川に助太刀なし、舅右内が仇敵を、討たねば武士が立ち難いと、侍ひらしい一言に、くらひ込んだが此方の誤まり。憂艱難のその中に、隱まつて置くのみならず難病治するの良薬とて、忰を殺しその上に、義理ある親まで手にかけたも、みんな彼奴に騙られて……思へば憎くき水右衛門。遠くは行くまい。跡追ひかけて

ト尻をからげる。

作助　その行く先は淸見ケ關。

袖介　先へ廻つて。おのれ、藤川。

作助　コレサ、あまり逸つて不覺を取るな。

袖介　氣遣ひなされな、この身は金鐵。

作助　オヽ、ちつとも早う。

袖介　心得ました。

トつか〳〵と花道の附け際まで行く。あば右衛門うば作出て來て

兩人　袖介、われを。

トかゝるを袖介、ちよつと立廻つて

袖介　親仁どの。

ト兩人を投げる。

作助　早く行け。

袖介　合點だ

トきつと見得。作助は兩人を引戻す。この見得よろしく

幕

本舞臺、三間の間、高さ三尺の喰ひちがひの土手、蹴込み張り物の裾は石垣、上へ草土手、この上に杉松を置き、上の方に駿州淸見ヶ關といふ石の傍示杭。下の方に藤川水右衞門の人相書を板に貼りつけ、立てあり。幕の内より山おろし、時の鐘、ドン〱、アリヤ〱の聲にて、引返して幕明く。

ト水右衞門、拔刀、大童になつて、眞中の石に腰かけゐる。左右に三階惣出の百姓、各白裸身、又は繻袢の形にて、鋤、鎌、鍬、六尺棒を持ち、ワヤ〱云うてゐる。あたりに生首、腕なぞちらばりある事。

皆々　お尋ね者の藤川水右衞門、縛れ〱。

同　ぶち殺せ〱。

ト水右衞門、拔刀を持つて立ちあがる。皆々「ソリヤ」と立つて花道の方へ逃げる。また此方へ來るト一群れは『ソリヤ』と東の花道へ逃げるゆゑ、水右衞門、また石へ腰をかけると、また捨ゼリフにて舞臺へ來る。水右衞門、こなしあつて

水右　いかにもわいらが云ふ通り、お尋ね者の藤川水右衞門ぢや。もう斯うなる上は是非がない。サア尋常に繩にかゝり、わいらが手柄にして遣はさうほどに、サ、身共を縛れ。

ト皆々の方へ行く。皆々「ワッ」と云うて花道の方へ駈けて行くゆゑ、また此方へ來る。

サア、縄かけぬかえ。

ト行く。又『ワッ』と云うて東の花道の方へ一群れ逃げて行き、ワヤ〱云うてゐるゆゑ、水右衛門嘲笑つて、莨入れと煙管を出して莨をのみ、その吹き殻を切り首の頭へ叩き

ハテサテ、口ほどにもない、臆病な奴等だな。

ト悠々と莨のみゐる。早太鼓、竹法螺の音になり、向うより武太夫、野袴、ぶッ裂き羽織、大小凛々しき身拵らへにて、件の嘉藤次、黒具の捕り手大勢を従へ、出て來り、花道にて

武太　コリヤ〱、百姓ども。身共が參つたからは、もう怖い事はないぞ。只今身共が狼藉者を召捕つて見せうワ。

ト事々しく身拵らへして、思ひ入れあつて

ヤア〱、重罪人の藤川水右衛門、天下の網のかゝつた其方、召捕りに向うたる、我れ〱を誰れとか思ふ。北條家の昵近にて、およそ天下に名を得たる武藝の達人、まづ劍術が鞍馬流、槍術が寶藏院流。弓が日置流、馬が大坪、體が不死身で天狗が八人、蔭身に附添ふ大野武太夫といふ名譽の侍ひ。サア、尋常に縄にかゝれ。

トぢり〱と本舞臺へ來る。水右衛門、こなしあつて

水右　願ふ所へお役人、所詮遁がれぬ天の網。身共も疾くより覺悟の身の上。サア、近寄つて繩かけ召されい。

ト武太夫の方へ行く。武太夫、ブル／＼慄へながら

武太　イヤ、卑怯者めが／＼。

トだん／＼跡じさりに花道の方へ行く。

水右　これサお侍ひ、其やうに後へばかり下がらずと、サア、爰へ來て繩かけさつしやい。どうだな。どうだな。

武太　イヤ、おのれが／＼、卑怯者めが、濱松に於て同家中の、石井右内を手にかけ

嘉藤　まだその上に其方が、現在母を手にかけし、重罪人の藤川水右衞門。

武太　まこと罪に服した上、繩かゝる心なら、白刃を納めをらぬか。イヤ、卑怯者めが。

嘉藤　サア、早く刀を鞘に、納めぬか／＼。

武太　イヤ、口ほどにもない卑怯者めが。

ト慄へ／＼云ふ。水右衞門、こなしあつて

水右　成る程、これは身共が誤まり。

ト白刃を納めて

サア、この通り白刃は納めた。氣遣ひなしに繩かけさつしやい。

武太 イヤ、その手は食はぬぞ〳〵。まこと繩かゝる心なら、武士のあるまじき、なぜ兩腰は帶して居る。イヤ、玆な卑怯者めが。

ト水右衞門、兩腰を拔きて、よき所へ置き、此方へ來り

水右 サア、おてまへの云はるゝ通り、大小はそこへ置いた。サア、氣遣ひなしに繩かけめされい。

ト思ひ入れ。武太夫、嘉藤次に目くばせする。嘉藤次、手早く大小を引ッ浚ふ。武太夫、思ひ入れあつて

武太 大野武太夫が計略をめぐらし、大小を取上げたれば、もう氣遣ひはない。サア、百姓ども、其方どもゝ折合つて、藤川水右衞門を、縛れ〳〵。

水右 手向ひは致さぬほどに、サア、近寄つて繩打つた。

武太 ソリヤ。

百皆 アリヤ〳〵〳〵。

ト百姓捕り手大勢、寄つてたかつて水右衞門に繩かける。武太夫、小躍りして

武太　ヤア〳〵、遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、鬼神と呼ばれし藤川水右衛門を
大野武太夫が召捕つたり。なんと膽が潰れたか。

ト力みかへつてゐる。バタ〳〵になり、向うより源之丞、お時、作助、走り出て來り、水右衛門を見

源之　ヤア、珍らしや藤川水右衛門、我が父右內を討つたる敵、今の今まで手がゝりとても知れざると
ころ、これなる下部の作助が訴人にて
とき　其方が仕業と知つたは初めて。わたしが爲には舅の仇。
作助　下郎が爲にも主人の敵。
源之　父の仇たる藤川水右衛門、サア尋常に
三人　勝負〳〵。

ト三人、水右衛門に詰め寄るを

武太　ヤア、藤川水右衛門は天下の囚人。
嘉藤　敵討とは私し事、近寄る事は叶はぬぞ。
捕手　下がれ〳〵。

ト制す事。

武太　ヤア〳〵家來ども、用意の網乘り物。

足輕　ハア。

ト後の喰ひちがひの蔭より足輕二人、六尺棒を持ち、二人は乘り物を舁き出し、よき所へ据ゑる。

武太　藤川水右衞門、定法なれば乘り物へ。

水右　心得てござる。

ト三人を尻目にかけ、悠々と乘り物へ入る。源之丞、お時、作助、ツカ〳〵と寄るを、足輕、棒にて留めて

足輕　下がれ〳〵、下がり居らう。

ト棒を組んでキツと留める。三人、無念の思ひ入れにて

源之　チエヽ、現在敵に逢ひながら、お上の手に入る囚人ゆゑとき近寄る事も叶はぬとは

三人　エヽ、口惜しい。

ト思ひ入れ。向うバタ〳〵にて、袖介、あば右衞門うば作を相手に立廻りながら出て來り、網乘り物を見て、兩人を投げのけ、ツカ〳〵と寄つて

袖介　ヤア、逢ひたかつた〳〵。主人の敵のその上に、種々樣々に恨み重なる藤川水右衛門、この袖介が無念の刃を
　　ト立ちかゝる。
武右　ヤア、又しても狼藉者。天下の網のかゝつた科人。
皆々　近寄る事は、叶はぬ〳〵。
足輕　下がれ〳〵、下がり居らう。
　　ト棒を組んでキツと留める。
袖介　すりやアノ、お上のお手に入る上は
源之　袖介、其方も身共も
とき　遲かつたわいの〳〵。
袖介　ヤ、源之丞さま、お時さま、こりやあなた方も……エヽ、コレ、敵は爰にありながら、手出しのならないこの場の仕儀、返す〴〵も
四人　チエヽ、口惜しいな。
　　ト思ひ入れ。この時、網乘り物より水右衛門、顏を出し

水右　ォヽ、尤もだ〳〵。殊に袖介。これまでは、長々の介抱、忝い。成る程、其方は奇特な者ぢや。たつた一人の悴の血汐、身共に與へしゆゑにこそ、足腰立たぬ難病も、忽ち平癒、こればつかりは、身共は一生恩に着るっ　また源之丞夫婦の者も、よく聞け。いかにも右内の老ぼれめは、遺恨あつて身共が討つた。ぶち放した。其方達が爲には敵なれど、天下にかゝる身は囚人。親殺しとの疑ひうけ、網乘物にて鎌倉へ、乘込むお上の囚人だワ。わいら如きがヂタバタしても、跪いても近寄る事は、どうして〳〵。近頃笑止千萬な。返す〴〵も下郎の袖介、主人の敵の水右衛門に、悴が命をくれるといひ、あれ程までにいたはるとは、成る程間抜けな、イヤ、わりや深切な者だなア。

ト嘲笑ひながら禮を云ふ。袖介、無念の思ひ入れ。

源之　ヤヽ、すりや、袖介は敵の藤川を、隱まうて置くのみならず、難病治する良薬とてときたつた一人の悴まで

作助　殺して血汐を與へたとか。

袖介　藤川さまに連れそふ水右衛門、よもや敵であらうとは、知らぬ凡夫の淺ましき。エヽ、思へば〳〵

ト思ひ入れ。

水右　その心根が不便さに、討たれてくれたいものなれど、氣の毒ながらこの水右衛門に、指でも附けると、その身ばかりか、主人の家までお咎めうけるヮ。それとても、たつて口惜しくば、サ、源之丞夫婦の者、袖介が親子、寄つてたかつて討たないか。サア、切らないか。どうして〳〵、藤川水右衛門に歯が立つものか。石井一家の大痴者めら。

トこなし。

源之　天下の掟は是非もない。敵を眼前に見ながらも

とき手出しのならぬこの場の仕儀。

袖介　いつまた敵に逢ふ事やら。

水右　どうして〳〵、これより身共は牢屋の住居、近寄る事は猶の事……イヤ、それとも身共に近寄りたくば、われをも牢舎させてくれう。この袖介は親殺し、馬士の大六殺した科人。

袖介　それも何ゆゑ、おのれゆゑ。

武太　何は兎もあれ、親殺しとあるからは

嘉藤　科は遁がれぬ。ソレ、袖介に繩を打て。

皆々　動くな。

ト袖介を圍む。この時、大勢の後よりお才、人数を押分け、ツカ〳〵と出て

さい　イヤ、お役人樣、その科人は、私しでござりまする。

袖介　ヤ、そちやお才、何ゆゑあつてこの所へ、

さい　サ、名乘つて出たは、まさかの時も、お主のお役に立たぬは女子。お前はお命全うして、あなた方の御先途を、ナ……モシ、お役人樣、酒の科にて思はずも、親を殺せし大膽女、私しに繩かけお引きなされて下さりませ。

武太　ナニ、すりや其方が親殺しとな。

嘉藤　疑はしいは自身の白狀。

作助　あの大六とは雪と墨、親子といへどこれ程も

さい　イヽヤ、不束なわたしゆゑ、袖介どのとこれまでも、一つ寐もせぬ因果なわたし。少しは不便と袖介どの。

ト袖介、思ひ入れ。

源之　樣子は詳しう知らねども

とき　ほんに健氣なあの女中。

袖介　現在科なき女房を

さい　嬉しうござんす、袖介どの。その女房との一言が、あの世へ土産。サ、お役人様、ちつとも早う

ト手を廻す。

武太　科人、捕つた。

トお才に繩かける。

とき　親の敵の藤川水右衛門、いづれへ引かれ行くとても、わたしらまでが側を離れず

袖介　敵の行く先、いづ方までも。

武太　イヽヤ、關所に女は叶はぬ。それとも通路の御判があるか。

皆々　サア、それは。

源之　すりやアノ、女は

とき　叶はぬなれば、わたしを爰に捨ておいて、大事の敵ぢや、お前は附添ひ

トお時、苦痛のこなし

折も折とて、どうやらわたしや

トこなし。作助、駈けよつてお時を押へて

作助 ヤヽ、こりやコレ慥かに。お産の氣ぢや〳〵。
源之 ハテ、折惡い。
袖介 モシ、お心慥かに。
　　ト三人、介抱する。
水右 然らばわいらは身共を見送り、敵水右衛門の供いたすか。
三人 イヽヤ、逃がさぬその用心。
武太 急いで關所を
皆々 科人、立たう。
　　ト足輕、網乘り物を舁きあげ、おオ、立上がる。
水右 身共は關を
さい わたしはあの世へ
源之 見す〳〵敵を
　　ト源之丞、水右衛門の方へ駈けよるを、足輕、棒にて制す。袖介、入れかはつて詰めよるを、水右衛門、袖介の顏へ唾を吐きかける。これを木の頭。この途端お時「ウム」と苦しむ。作助、駈けよつて

介抱する。源之丞、袖介「チエ、」と詰めよるを
水右ムヽ、ハヽヽヽヽヽ。
トこれをキザミにて、時の太鼓になり、この仕組み、よろしく

幕

第一番目 五建目

箱根地藏院の場
双子越畚渡しの場

役名――藤川水右衛門。石井源之丞。源之丞妻、お時。醫者、藤川卜庵。地藏堂西入和尙。大野武太夫。荒井嘉藤次。すね切り眼六。宿役人、太郎八。足輕、伴介。同、ねた助。同、勘次。人足、箱根の權。同荷瘤の六。狩人、富士右衛門。同、虹右衛門。湯女、宮城のおはた。同、塔の澤のお瀧。同、蘆の湯のおせん。石井下部、袖介。

本舞臺、正面、古寺の本堂、荒れ果てたる體。よき所に看經佛、爰に西入、山寺の和尙にて、麻の墨衣、後向きになり、木魚を打つて勤めの體。眞中に網をかけたる囚人駕籠を直し、武太夫、前幕の侍

ひにて、浴衣の形、大小にて、太郎八、袴羽織の宿役人にて、武太夫の肩を揉んでゐる。嘉藤次、浴衣、大小。伴介、ねた助、勘次、足輕の形にて、古き板にて將棋をさしてゐる。すべて箱根山中のあたり、地藏院の本堂。山おろし、木魚の合ひ方にて幕明く。

ト雨の音頻りにて、時鳥の聲する。

嘉藤、どうぢや〳〵、身共が勝ぢやぞ〳〵。

伴介　南無三、また旦那に勝たれました。

太郎　どうでもお前は、將棋は弱う見えまするわえ。

伴介　イヤ〳〵、將棋に負けても、碁では勝つて見せませう。

ねた　アレ〳〵、また降つて來ましたぞえ。

勘次　イヤモウ、この日和には困つたものだぞ。これではこの寺に、また逗留と見えるわえ。

武太　ナニ、また降つて參つたか。これは叉情ない。此やうな荒れ寺に、いつまで居られるものだ。コリヤ、宿役人、なんと、今宵は本陣へ宿を變へぬか。寺に居つては、用向きが方附かぬわえ。

太郎　ハイ〳〵、御尤もではござりまするが、何を申すもこの長雨で、三枚橋が落ちましたゆゑ、よんどころなう、この地藏院を頼みまして、この寺へお泊め申しまする。それと申しまするも、大切

な囚人を、お連れなされたあなた方ゆゑ、宿役人も大きに心配いたしまする。

武太　イカサマ、左樣でもあらうが、本海道と違ひ、物事に不自由勝ち。まづ差あたつて、按摩さへ無いではないか。

太郞　左樣でござりまする。私しの按摩がお氣に入らずば、今晩は療治のよいのを尋ねて參りませう。

トこれにて西入、此方を向き

西入　コレ〳〵、太郞八どの、按摩がお入用なら、この住持が代つて揉みませうか。

作介　イヤア、こなたはこの寺の和尙ではないか。

ねた　住持が按摩を揉むといふのか。

西入　左樣でござりまする。此やうな山寺に住ひましては、住持ばかりでは暮らしに困りまするゆゑ、隨分按摩を取りまする。

嘉藤　イカサマ、こりや、さうありさうなものぢや。時に宿役人、いかに山寺ぢやと申して、長々逗留の間、なぜ輕卒に取扱ふ。ちと酒でも、出さぬか〳〵。

作介　左樣でござりまする。あまり我れ〳〵を粗末に致しまする。サア〳〵

ねた　酒を出せ〳〵。

太郎　ヘイ／＼／＼、粗末には仕りませぬが、大切の囚人を、お預かりのあなた方ゆゑ、それゆゑ差扣へまして

西入　これはしたり、お前も野暮な事を云はずと、御酒でもあげさつしやい／＼。

太郎　ハイ／＼／＼、心得ました／＼。

武太　成る程、大切な役目を蒙むりし我れ／＼、酒でも飲まいで、この大役が勤まるものか。

西入　左様でござりませう。して、この囚人の駕籠は、何者でござりまするな。

武太　アヽ、住持はまだ存ぜぬか。駕籠の内なるは、遠州の城主名越の家中、藤川水右衛門と申す者。朋友の武士、右内と申す者を殺害なし、まつた實の母を殺したる由。さるによつて、武將よりの嚴しいお尋ね。身共この程召捕つて、鎌倉へ送るの道中、川々の出水にさへられ、この所に逗留。して又、外に山越しに參る道があるか。

西入　エヽ、ござります／＼。本海道は餘程の出水。これより箱根の山傳ひ、双子越えには、畚渡しがござります。これをお通りなさるがよろしうござります。

武太　アヽ、双子と申すに、渡しがあると申すか。

太郎　左様でござりまする。いづれ明日御案内仕り、その道をお通し申しまする。

作介　イカサマ、明日はその道へかゝりませう。
勘次　旦那、左樣なされませ。
太郎　然らば今晩、湯廻りをなされませぬか。
武太　これはしたり、毎日々々其やうに、入湯ばかり致さるゝものか。
嘉藤　あまり入湯いたして、我れ〳〵は身内が、半分溶けたやうぢや。
ねた　その上に、湯華の匂ひで、色男に匂ひが附いたワ。
三人　ハヽヽヽヽ。

トこれにて暮れ六ツの鐘鳴る。

西入　アヽ、もう暮れまするか。ドリヤ、佛前へ御灯を
太郎　私しも行燈の支度を

ト雨の音、暮れ六ツの鐘、驛路、馬士唄になり、西入、佛前へ灯をともす。太郎八、行燈を持ち來りよき所へ置く。この鳴り物にて向うより眼六、やつしの形、麻の羽織にて、番傘をさし、下駄がけ。おはた、お瀧、おせん、浴衣の形、湯女の拵らへにて、下駄がけ相合傘にて出てくる。富士右衞門、虹右衞門、狩人の形、蓑笠にて、鐵砲を腰に差し、六、權、浴衣形、人足の拵らへにて、五升樽と松

魚三本、その外、小魚大分籠に入れて、これを荷ひ、八丁笠にて出て來り、花道にて

權　モシ〳〵、眼六さん、お役人の逗留なさるゝ、地藏院はあの寺かえ。

六　寺へ魚を持込んでも、大事あるまいかな。

眼六　ナニ構ふものか。寺の住持は大の通り者だ。魚ばかりではない、此やうな生者を連れて來たワ。

富士　イカサマ、この子達は、蘆の湯の姐え達だの。

虹右　そんなら寺へ、この子達を連れてござるのかえ。

はた　この間からの長雨で、あの地藏院に逗留なされてゐなさんす、お侍ひ様のお座敷へ

たき　わたしらを連れてござんしたが、あのやうな山寺といひ、棲み荒れてあるとの事。モシ、怖い事はござんせぬかえ。

眼六　ナニ怖いものか。古寺だといつて、怪談事の氣遣ひはない。よしあつたところが化け物だワ。

三人　オヽ怖。また其やうな嚇しを云うて。

六權　化け物よりは、てまへ達が怖いワ。ハヽヽヽ。

ト馬士唄になり、皆々舞臺へ來り

皆々　ハイ〳〵、お頼み申しませう〳〵。

太郎　オイ〳〵、どれからござつた。

ト出かゝつて、皆々を見て

イヤア、貴様達は、蘆の湯の衆ではないか。

眼六　左やう〳〵、わしらは湯治場から、お役人樣へお見舞ひの爲、御酒と肴を持たせて參りました。その上に、田舍者ではござりまするが、湯女を三人連れて參りました。

六　この趣きをお役人樣へ

權　よろしうお頼み申しまする。

太郎　それは幸ひ。サア〳〵、此方へ入らつしやれ〳〵……モシ〳〵、お聞きなされましたか。

武太　承つた段ではない。何よりの品々、これは心の利いた事どもぢやな。

嘉藤　その上に、湯女まで連れて參つたとは、イヤ、誠に通り者ぢや。

眼六　サア〳〵、てまへ達は、あなた方のお側へ、行きなさい〳〵。

はた　アイ、そんならあなた方のお側へ行くのかえ。御免遊ばしませ。

たき　ほんに、さぞ御退屈でござんせうね。

ト武太夫の側へ寄り添ふ。二人の役人、夢中になつて

武太　これは〳〵、久し振りで婦人の側へ寄りました。イヤモウ、これではこの寺に、幾日でも逗留いたすぞ。
嘉藤　それがようござらう〳〵。
伴介　イエ〳〵、それで旦那は格別、私しどもは、どうして〳〵
勘次　何より早く、御酒になされませ。
太郎　松魚は私しが拵らへませう。和尙樣、庖丁があらば
西入　イヤ〳〵、魚は愚僧が拵らへませう……併し、俎板がないが……あるぞ〳〵。この經櫃に致さう
　　ト古き經櫃を出し、刺身庖丁を出し、松魚を拵へる。
皆々　刺身皿はござるまいの。
富士　コレ〳〵、爰に好い物がござる。これを洗つて使ひませう。
　　ト疵だらけなる鐃鉢を片々出して、この中へ刺身を作る。
權　おいらは酒の燗をしよう。
　　ト五升樽より酒を片口へ明け、大藥罐へ入れて七輪へかける。
太郎　モシ〳〵、御酒もお肴も出來ましたが、ちとこの子達に、三味線はどうでござりませう。

武太 成る程、こればかりは寺に、あるまい〳〵。
西入 ある段ではございませぬ。この寺に本尊はないが、三味の嗜みはございます。アレ、あの下段の下にあるね。
皆々 それは奇妙〳〵。
太郎 爰らにありませう。
　　ト本尊の前へ行き、打敷の下より古三味線を取つて來り
　サア〳〵、おはたぼう、聞きたい〳〵。
　　トおはたに渡す。
はた そんならわたしが三味線かえ。おせんさん、お前、踊りはどうだえ。
せん イエ〳〵、わたしの踊なぞは
たき 何もあなた方のお慰み。早う始めなさんせいなア。
西入 大事なし〳〵。この寺で念佛は法度だが、踊なぞは隨分いゝね。
皆々 サア〳〵、やらかせ〳〵。
　　トこれにておはた彈き、何にてもおせん踊る事。皆々ほめる事あつて

皆々　やんや〳〵、奇妙々々。

眼六　サア〳〵、これからあなた方は、蘆の湯へ入らつしやりませぬか。

太郎　お供いたしませう。サヽ、入らつしやりませ〳〵。

武太　それはよからうが、何を申しても、大切なこの囚人が……斯樣な時は大きな邪魔だ。

西入　イエ〳〵、この囚人は、愚僧が看經いたしながら、張り番を致しませう。あなた方は雨の霽れ間に、一風呂めしてお出でなされませ。

武太　成る程、左樣いたさうか。嘉藤次どの、お出でなさい〳〵。

嘉藤　然らば連れ立ちませうか。

權六　サア〳〵、あなた方、甚句で參りませう。

皆々　それはよからう。サア〳〵、甚句だ〳〵。

トこれより甚句の合ひ方になり、皆々大亂れにて、踊り〳〵奥へ入る。西入殘つて、跡見送り

西入　さて〳〵、騷々しい手合ひだ。併し、愚僧は囚人の番人、只もなるまい。看經のうち、ドリヤ、酒に致さう。

ト時の鐘。網乘り物の方へ行き、佛に向ひ、木魚を打つたり、酒を飲んだり、捨ぜりふにて、居眠り

ながら看經の體。これにて誂らへ、變つた合ひ方、時鳥の聲する。この時、向うより源之丞、黒の紋附きの小袖、股引、大小、着流し、裾をからげ、中拔き草履を腰に挾み、頬かむり、三度笠をかざして出て來り、花道にて跡先窺ひ

源之 親人右内さまを討つたる敵、妹に連れそふ藤川水右衛門、この寺に逗留なすと聞いたゆゑ、討たんずものと思へども、私しならぬ天下の囚人。さはさりながら此まゝに、鎌倉に差出だしとなる時は、牢舍は眼前。さある時には、近寄る事も叶はぬ敵。何卒この地に逗留の其うち、首尾よう親の敵を

ト思ひ入れあつて空を眺め

雨の小やみを幸ひに、さうぢや〳〵。

ト門口へ來り、そろ〳〵戸をしやくり明け、内を窺ひ、駕籠を見附け、思ひ入れあつて

網乘り物の据ゑあるは、あれぞ正しく水右衛門。人家稀れなるこの山寺、番の者も見えざるは、何とも以て心得ねど、網乘り物のあるからは

ト窺ひ〳〵、内へ忍び、西入が眠りゐるを見附け、こなしあつて駕籠に近寄り、下ろせし錠に手をかける。この時、内にて

水右　何者ぢや〳〵。

ト聲するゆゑ源之丞、悔りして駕籠を窺ひ

源之　ヤ。

トためらふ。時の鐘きびしく、乘り物の簾、仕掛けにて上がる。內より水右衞門、顏を出し、源之丞を行燈の灯にて、キッと見る事あつて

水右　そちや何者ぢや。

源之　盜人でござる。

ト水右衞門、思ひ入れあつて

水右　本海道に事かはり、かゝる深山の荒れ果てし、貧寺なれども武家の逗留、荷物あらんと目がけるか。ハテ、不機轉な夜働らき。コリヤヤイ、かゝる山路を尋ねずと、繁華の土地を稼いだなら

源之　イヤ、盜人とはいひながら、金銀衣類に望みはない。それゆゑわざ〳〵山寺へ、外に目がける品があつて

水右　そりや又何を、盜む心で

源之　網乘物の、こなたが欲しさに。

水右　ヤ。

源之　見忘れたるか水右衛門、よもや忘れは致すまい。

ト手拭を取つて、行燈の灯を差出し、手前の面を、よく〳〵見せる。水右衛門、キツと見詰め

水右　そちや源之丞……イカサマ、其方は來ずばなるまい。

源之　淸見ヶ關の捕はれより、叶はぬながらも父の仇、この海道を見え隱れ、窺ひ來る囚人駕籠、爰に逗留いたすと聞き、めぐり逢はんと忍びし今宵。思へば〳〵、おのれはなう。

ト無念の思ひ入れ。

水右　その胸中は尤も至極。敵と覘ふ者どもへ、討たれてやりたいものなれど、我が一命は我が身で我が身の、儘にもならぬ天下の科人。お上の仕置にあふべき某。氣の毒ながらこの仇討、とても叶はぬ。やめに致せ。

源之　そのお仕置はそりや承知。親卜庵に劣らぬ惡事、天のお咎めあるべき筈。

水右　して又身共が惡事の樣子、何を存じてさは申すぞ。

源之　イヤ、知るまいと思うてゐるか。家督の若殿失はんと、企みに企む其方が兩親、證據は即ちこの墨附。なんと覺えがあらうがな。

ト懐中より三建目の墨附を出し、行燈の灯にうつして見せる。水右衞門讀む事あつて

水右 すりや、その書き物を其方が

源之 お國表に勤めの間、八幡の社内にて、手に入る書き物、此まゝ置くはまだしも情、お上へ出せば其方ばかりか、親卜庵にも重き成敗。この品欲しくば渡してくれんが、この場に於ては渡されぬかゝる惡事の其方達親子、手延びになしては置かれぬ〳〵。近きに敵を討たねばならぬワ。

水右 身共もその由聞きしは今が初めて。かゝる大事を知つたら其方、助け置かれぬ源之丞、今宵のうちに返り討、その上書き物取り得んが、かゝる捕はれ、籠の鳥。

源之 その捕はれの惡鳥も、籠を放して放生會。この身の旅宿は山續き、往來稀れなる双子の峯越え。尋ね參らばこの品渡さん。さはいへ未練の其方が、よもや尋ねて參るまい。

ト思ひ入れ。水右衞門、こなしあつて

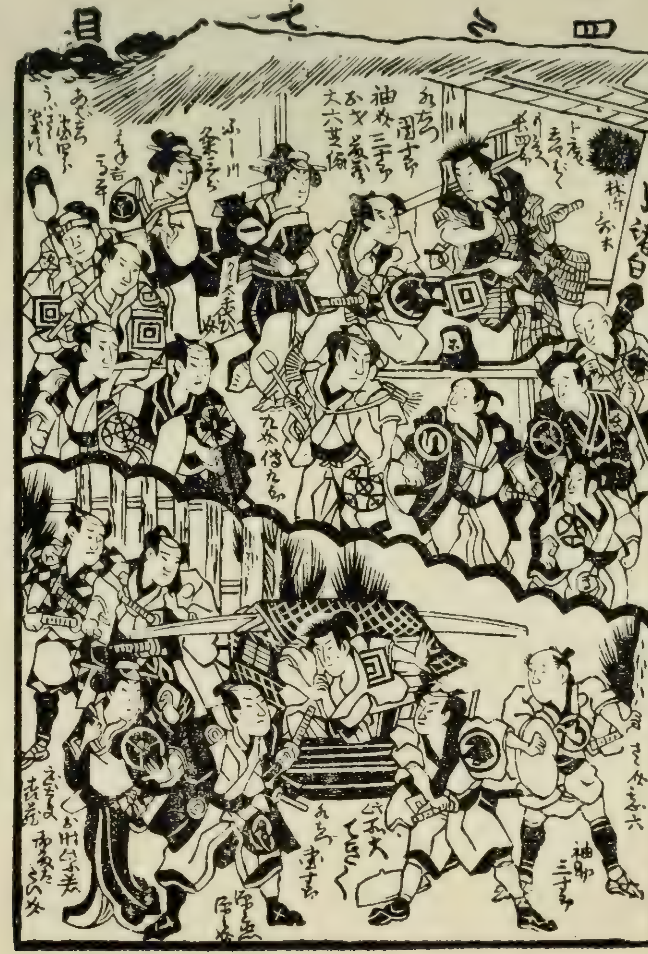
水右 イヽヤ、尋ねて參つて見せう。其方づれに何を恐れて、逢へば忽ち返り討。

源之 尋ね參らば敵討、出合ふ場所は双子の山間。

水右 勝負は時の運に任せて、討ち討たるゝは武士の常、籠を遁がれて尋ねて行かう。

源之 逃ぐるな藤川。命は互ひに





水右　詞つがうて今宵の面會、片時も早く

源之　先へ立越え、其方が來るを

ト門口へ出かゝる。

水右　口には云へど、よもや其方

源之　相待つ證據は

ト門口より思ひ入れあつて、小柄を手裏劍に打つ。誤またず乘り物のよき所へ立つ。水右衛門、見て

水右　アヽ、流石は石井の胤ほどあつて

ト思ひ入れあり

小柄の餞別、水右衛門、しかと

ト小柄を口にて咬へ拔き、駕籠の中へ落し、思ひ入れあつて

駕籠を破るは、これ屈竟。

源之　必らず首尾よう

水右　今宵のうちに

源之　相待ち申す。

ト時の鐘、山おろし、合ひ方。思ひ入れあつて、書き物を持つて向うへ入る。水右衞門、見送つて

水右 アヽ、思へば孝心。誰れしも武士は、斯くもあるべき

ト思ひ入れあつて、この時奥にて

武嘉 これはしたり、酩酊いたした〳〵。

ト人音するゆゑ水右衞門、顏を引く。奥より捨ぜりふにて、武太夫、嘉藤次、おはた、お瀧、おせん太郎八、伴介、ねた助、勘次、眼六、ワヤ〳〵云うて出て來り

武太 コリヤ〳〵、お身達は、どうあつても歸るのか〳〵。

せん 私しどもは、いつまでも居たうござんすけれど、夜更けると物淋しい。

たき 折角お留めなさんして下も、どうしてマアこの山寺に

はた あなた方は、明日は早く湯場へお出でなさんして、御逗留なされませいな。

嘉藤 どうして〳〵、天氣になると明日出立。

太郎 公用のお二人樣、其やうに御逗留は出來ぬワ……イヤ、それはさうとお住持は、囚人の番をしてゐるかの。

ねた 成る程、和尚が見えぬが

眼六　お尋ねなされませ〳〵。
勘次　住持は、どれにお居やる〳〵。
ト尋ねる。西入、酒に醉うて、寢てゐるを見附け
皆々　これはしたり、お住持〳〵。
ト搖り起す。西入うろたへ、目を覺まし、木魚の棒を持つて
西入　おのれ囚人、逃がしはせぬぞ〳〵。
トあたりを駈け歩く。皆々捕へて
皆々　これはお住持、どうしたのだ〳〵。
ト捕へる。西入心附き
西入　アヽ、そんなら夢か。愚僧が預かりの囚人が逃げるによつて、やう〳〵捕へたといふのは、アヽ夢だな。嬉しや、それで落ちついた。
武太　イヤ、呆れた住持ぢや……時に、わいらは歸るなら、明日早う、迎ひに來てくれよ〳〵。
ト醉うたるこなし。
たき　アイ、そりや合點ぢやわいな。

太郎　湯場までわしが送つてゆかう。
　ト念佛講中と書きし小田原をともして、先へ出る。
眼六　左樣なら旦那方は、お住持の小座敷へ御寢なされませ。あそこには蚊が居りませぬ。
嘉藤　左樣いたさう〳〵。
武太　コリヤ〳〵、家來ども、わいらはこの駕籠の番を致せ。大切な囚人ぢやぞ。
三人　畏まりました。
西入　コレ〳〵、爰に囚人の大小がござるぞや。
　ト絲立てにくるみし大小を出す。伴介受取り
伴介　私しが預かりませう。
女三　そんなら必らず、明日お出でえ。
武太　オヽ〳〵、參るぞ〳〵。
眼六　サア〳〵、御寢なされませ。
西入　斯うお出でなされませ。
太郎　サア、行きませう。

ト静かなる禪のツトメになり、武太夫嘉藤次西入眼六附いて奧へ入る。女三人に太郎八附いて向うへ入る。三人殘つて

伴介　コレ〳〵、旦那はあの湯女に、餘ッほど引ッかけられた樣子だの。

ねた　さうか〳〵。おへない間拔けだの。

勘次　主とはいへど、愛想が盡きるワ。

ねた　イヤ、さう云つても、おいらにばかり番をさせるな。

勘次　酒の醒めぬうち、寢るがよい〳〵。

伴介　サア〳〵、寢よう〳〵。エヽ、邪魔な物を預かつた。

ト捨て鐘、雨の音にて、件の大小を枕許へ置き、めい〳〵蒲團をかむり、蓙を敷いて寢かける。よき時分、三人とも酒機嫌ゆゑ、いびきをかいて眠る思ひ入れ。よき時分、駕籠の內、バッタリ音して凄き合ひ方、時鳥の聲、時の鐘。駕籠の窓より手を出し、件の小柄にて錠前を切り拔く思ひ入れ。錠は切れてバッタリ落ちる。この時、駕籠の戶をソッと明け、內より水右衞門、小柄を咬へ、そろ〳〵窺ひ出て、三人の寢息を考へ、あたりにありし大小を取つて腰に帶し、行燈を提げて、あたりを窺ひ窺ひ、忍び出んとして伴介に踏みかける。これにて目をさまし、窺ひ見て

伴介　ヤヽ、囚人か。

ト聲立てるを、見事に切り倒す。この音に、殘りの二人も目を覺まし

二人　ヤ、水右衛門か。

ト組みつくを、二人とも立廻つて、切つて捨てる。合ひ方になり、この時奥より眼六、西入、窺ひ出て

眼西　水右衛門さま、首尾よく駕籠を

トこれにて水右衛門、心得ぬ思ひ入れにて

水右　覺えなき兩人、何者なれば。

眼六　私しことは、卜庵さまに仕へし下郎、卽ちその名も眼六とて

西入　住持も親御のお頼みにて、出家といへどこの山寺、平常盜人集める寄せ場。サヽ、お召し替へなされませ。

眼六　警固の武士の雜物は、直ぐに物して網乘り物。

水右　して又、二人の侍ひは。

西入　氣遣ひなさるな。始末をつけて

ト思ひ入れ。奥、バタ〳〵になり、富士右衛門、虹右衛門、鐵砲を構へ、武太夫嘉藤次、寢卷の形にて、丸腰、圍まれ出る。後より權、六、明け荷と役人の大小を引ッ抱へ出て、二人を圍む。武太夫、慄へて

武太　身共が寢間へ踏みこみし、さてはわい等は

嘉藤　何ゆゑ狼藉。

皆々　盗人だワ。

武嘉　イヤア。

六權　卜庵さまが頼みの二人。

武嘉　そんなら、わいらは

水右　親卜庵が斯程まで、心を盡すも我が子の恩愛。然らば身共はこれより直ぐに、爰を立退き、時節を待たんが、路用の手番へ。定めて其許、貯へあらん。助力いたしやれ。さなきに於ては、火蓋を切つて

虹富　打拔きませうか。

ト筒先を向ける。武太夫、嘉藤次、慄へあがり

武嘉　アヽコレ、滅多な事を

ト　わな〱する。眼六、懐中より種ヶ島を出し

眼六　卜庵さまからこの小筒、あなたへ渡せと御書面あつて

ト　渡す。水右衛門取つて

水右　流石は親人、お心つかれしこの餞別。試みするは

ト　あちこち見廻し、武太夫に目をつける。これにて武太夫、察して慄へ出す。水右衛門、思ひ入れあつて

住持、料紙を持ちやれ。

ト　凄き合ひ方

西入　心得ました。

ト　硯箱を取つて差出す。眼六、行燈を持ちゆき、水右衛門、手早く狀を認める。此うち六と權は、役人の荷物を網乘り物へ入れる。水右衛門、狀を書きしまひ

水右　住持はこれを

ト　西入に渡す。

西入　愚僧がしかと

嘉藤　身共は爰を

　　ト逃げんとする。六と權は嘉藤次を引ッ捕へ、縛りあげ、口へ手拭を食ませ

六權　此奴は谷から

眼西　仕舞ひをつけて

六權　合點だ。

　　ト嘉藤次を雜物と一緒に駕籠の中へ打込み

皆々　そんなら、お先へ

水右　身共はこれより源之丞、夫婦の者を返り討。出合ふ場所は

皆々　双子の山道。

水右　行け〳〵。

　　ト額にて知らす。皆々呑みこみ、六と權は網乘り物を擔ぎ、狩人二人は鐵砲を抱へ、西入眼六は囁き合ひ、捨て鐘になり、皆々向うへ入る。水右衛門、跡見送り

これより道を變へ、彼れら二人を山中にて

ト頷く。武太夫、此うち慄へ〳〵、逃げんとするを見附け

コリヤ、其許は何れへござる。

ト聲かけられ、悔りして

武太　ハイ、ちよつと手水に

水右　たはけた事を……併し此まゝ助けなば、慥かに口外いたすは必定。幸ひ爰で小筒の試み。武士の鴈的、こなたの胸許。

ト頷いて小筒を出す。

武太　エヽ。

ト慄へて逃げんとするを引ツ捕へ

水右　コレ、武士に生れた身の冥加、小筒の稽古に使はれて、討死ならぬ打たれ死、性根を定めて向うへ立ちやれ。的にするのぢや。

武太　エヽ。

ト慄ふ。水右衛門、火縄を出し

水右　火を移しやれ。

ト火繩を渡す。武太夫、夢中になつて、行燈の灯にて火繩をつけんと、手先慄ふを水右衛門見て、ニツタリ笑うて

こりや尤もぢや。

トこれをキツカケに、知らせあつて、舞臺一ぱいに黒幕を振り落す。

時の鐘、禪のツトメになり、向うより卜庵、頭巾をかむり、松明を持ち、天國を差して出てくる。これに雲助四人、めい〳〵息杖を持ち、附いて出て來り、直ぐに舞臺へ來り、皆々思ひ入れあつて

卜庵　そんなら、いま道々も云つた通り、悴の加勢に、わいらを頼むぞ。

雲一　そりや氣遣ひさつしやりますな。高の知れた雲助でも　武士にも負けぬわしらが根性。

雲二　向うの相手が侍ひなら、こいつは一番當つて見もの。角の八本ある奴でも

雲三　此方は息杖一本で、山道坂道難所は合點、却つてそこらが仕事の場所。

雲四　侍ひ夫婦、奴まで、仕舞ひをつけろと小揚げの二人、權と六とが頼むゆゑ、助けに來ました。そんならお前が

四人　卜庵さまかえ。

卜庵　これサ、その名前は靜かに申せ。なんであらうと、小揚げの二人に賴んだ仕事。三枚橋の出水を幸ひ、双子へ引出すその三人、必ずともに

四人　呑みこみました。後からござれ。

　　卜矢張り鳴り物にて、ワヤ〳〵云うて下座へ入る。卜庵殘る。バタ〳〵になり、向うより眼六走り出て來り、卜庵を見て

眼六　ヤ、卜庵さま、この道をござりましたか。

卜庵　わりやア眼六。して、悴が安否は。首尾よう行つたか、どうぢや〳〵。

眼六　氣遣ひなされますな。寺の住持も一つ釜。水右衛門さまには首尾よく駕籠拔け。警固の奴等は殘らず往生。荷物に雜物引ッ淩ひ、そいつを路銀に、あなたの落ちつき。

卜庵　出來した〳〵。それで愚老も安堵した。併し噂はこの邊に、源之丞夫婦の者、家來の袖介引添うて、双子の在所に旅宿の樣子。彼奴等を首尾よくやらかす手段。殊に天國の劍も、腰に帶して爰にあるワ。

眼六　そんならわしらはあの二人を、仕舞ひをつけて今夜のうち……併し箱根で評判の、小力のある盤石お妻、あの女めは袖介が、妹とあれば、次手に彼奴も

ト庵　力があつても、高が女だ。其奴ぐるめに、われが働き。

眼六　どうか仕事にして見ませう。併しお前は御老足、爰らは石道、用心なされて

ト庵　サヽ、案内してくれ。

眼六　斯うお出でなされませ。

ト鳴り物にて兩人、下座へ入る。山おろし、捨て鐘になり、知らせあつて、黒幕を切つて落す。

本舞臺、一面の山幕、眞中に蚊遣りを焚き、六、權に、以前の雲助四人、立ちかゝりゐる。

四人　こいつはどうだ。素敵な藪蚊だ。

權　併し、もう何時であらうな。

六　もう四つでもあらうか。マア、和尚は、よもや道を間違へもしまいが。

權　ナニ〳〵、そりやアこの道へ引出すに違ひなしサ。

四人　それにしても、もう來さうなものだ。

ト此うち雲助一、向うへ思ひ入れあつて

雲一　アレ〳〵、向うに松明のあかりが見える。あれだ〳〵。

三人　來たか〳〵。

六權　これサ、靜かにしろ〳〵。

ト　ひそまつて火を焚きゐる。時の鐘、山おろしになり、向うより袖介、葛籠を脊負ひ、脚絆草鞋、旅なりにて、懷に幼子を抱き、松明を持つて案內して出る。跡より源之丞、甲斐々々しく出立ちし拵らへ、心急く體にて足早に出てくる。ズツと下がつて西入、麻衣、網代笠にて、件の手紙を持ち、跡追うて來る體。

西入　オヽイ〳〵、お侍ひ樣〳〵。

ト　走り來るゆゑ、源之丞袖介、振りかへつて立ちどまる。西入、走りついて思ひ入れ。

源之　見れば、御出家さまなが、呼びかけめさるは、此方の事かな。

西入　左やう〳〵。愚僧はこの近邊の庵坊主でござるが、見馴れぬお侍ひの云はるゝには、こなたの行く先にて、若ひ侍ひに逢はう程に、逢うたらこの手紙を渡して、双子越えに待ち合せて居るゆゑ必ずござれと云うて下され、道が知れずば、貴樣案內してやらつしやれと、くれ〴〵と賴まれました。この手紙に覺えがござるかな。

ト　件の狀を渡す。源之丞取つて、よく〳〵見て

源之　こりやコレ水右衛門が手蹟。さては首尾よくあの駕籠を

　　　ト思ひ入れにて手紙を讀む。

袖介　お前の話しに違ひなう、逃げのびたと見えまするな……モシ〳〵、坊樣、して、その侍ひは、お前、どこでお逢ひなされた。

西入　この半道も後の事。暗くて黑白は解らねど、慥か若いお侍ひ。くれ〴〵も待ち合すと云はれました

　　　ト此うち源之丞、よく〳〵文言を讀みしまうて

源之　コレ〳〵、袖介、某しが申すに違はず、水右衛門は逃げのび、身共に逢うて、所持なす書き物、取り返したきこの文言。約せし場所へ參るとの事。少しも早う、サヽ、用意いたして〳〵。

　　　ト心急く思ひ入れ。

袖介　それは〳〵、惡人ながらも流石の藤川、あなた樣と番うた詞を、反古にせず出合ふとは、まだしも武士の魂ござるやら。それに引替へ、折惡しくも、お時さまの御平產。殊に御男子。奴めが肌に附け、お時さまをば、お駕籠とは存ずれど、俄の事ゆゑ少しの間、葛籠の中へ忍ばせ申し、この袖介が背負ひまして

　　　トうか〳〵云ふを

源之 コレ

ト西入へ心遣ひの思ひ入れにて

して、その双子越えは、どの道を参るな。

西入 サ、その道は幸ひと、愚僧も参るゆゑ、案内してやりませう。

源之 それは忝い。左様なら頼みまする。

西入 サア〳〵、斯うござりませ〳〵。

ト入れ替つて西入先に立ち、舞臺へ來る。皆々見て

皆々 畚渡しを頼むなら、渡してやりませう。

西入 オヽ、人足衆か。コレ、この衆は旅人の事、よい程取つて渡して進ぜるがよい。愚僧は案内ぢや

この衆の駄賃を、サア、早う極めるがよいぞや〳〵。

六 よし〳〵、さうしませうが、幾人ござるの。

西入 連れの衆は二人ぢやが、荷がござるぞや、

權 アヽさうか。二人はよいが、葛籠が餘計ぢや。

六 コレ〳〵、荷を擔いだお供、見れば子を抱いてござるの。云はぬ事は悪いが、乳呑み子でも畚渡

しは二人前取るぞえ。よいか。後で四の五と云はんすなえ。

皆々　それでよしかえ〳〵。

袖介　隨分ようござるから、少しも早う、渡してもらはう〳〵。

源之　早う賴む〳〵。

ト氣の急く思ひ入れ。

雲一　これサ〳〵、其やうに急いたとて、まだ夜が明けぬから、畚が揃ひませぬわな。

トこの時下座より人足二人、畚を持つて出て來り

人足　サア〳〵、相談がよくば、畚の有りたけに、乘らんせぬか〳〵。

六　オヽ、此方は極まつた。てまへ達、越して進ぜてくれ〳〵。

人足　合點ぢや〳〵。サア、ござりませ〳〵。

袖介　左樣なら、マア〳〵、あなたお乘りなされませ。私しも又御一緒に參りませう。サア〳〵、早く賴む〳〵。

權　これはしたり、其やうに急かつしかるな。マア〳〵、人數を數へてから越して進ぜませう。

皆々　その中にも、荷は一人前に立ちますぞ。よしか〳〵。

ト口々に云ふ。

西入　コレ〳〵、斯うさつしやりませ。わしは案内の事ゆゑ、どうで先へ越してもらふのぢや。そのうちに、この荷を入れて渡すがよい。駄賃の事は、それで濟まして進ぜさつしやい。

袖介　いづれとも、よろしく頼みます。

西入　そんなら、そのつもりになされて、サア〳〵お若いの、お前は愚僧と先へ乘らつしやりませ……この葛籠は、わしが畚へ、おまけに乘せて行きませう。

ト葛籠を外して引ッ抱へる。源之丞袖介、葛籠へ思ひ入れあつて

袖介　ア丶コレ、その荷は靜かにして下さりませ。

西入　心得ました。さて重い葛籠ぢや。

源之　袖介、早う參れ。

ト山おろし、捨て鐘にて、兩人、葛籠を抱へ、人足先に源之丞、心急きし體にて入る。袖介、雲助みな殘つて

六　サア〳〵、これからは爰で、ゆるりと莨にしようか。

權　それでも、この人が急ぐではないか。

六　ハテ、急いだとても畚が足りぬワ。今の二人が、向うへ行つたその上で
雲一　向うの旅人が來るまでは
雲二　幾日かゝるか知れぬ話しだ。
雲三　そんならゆるりと莨にしようか。
雲四　それがいゝ〳〵。
皆々　サア〳〵、莨だ〳〵。
　ト焚き火へかゝり、莨を吸ひつける。袖介、心急く思ひ入れあつて
袖介　これはしたり、其やうに待つては居られぬ。サ、早う通してくれぬか〳〵。
六　モシ〳〵、通せと云はしつても、爰は本海道とは違ひますよ。いはゞ裏道の山仕事。
權　杣狩人の通るより、旅人は嚴しい御法度なれど
雲一　頼むに是非なく渡してやる。その畚渡しで通るなら
雲二　酒でもしつかり買はつしやい。
皆々　酒手を下さい〳〵。
　ト云はれ、袖介、思ひ入れあつて

袖介　こりや此方が心附かぬが不調法。成る程、酒を買ひませう。
ト小錢二百文を出し
サア〳〵、これで酒をよい程買うて下さい。此方は急ぎの道中、先も氣遣ひ。どうぞ早く、通して下さい〳〵。
ト心急く體。赤子泣くゆゑ
オヽ、たがよし〳〵。
トいぶりつけて思ひ入れ。權、件の錢を見て
權　コレ、見たか。道でもない山道を通る程の旅人が、たつた二百だ。
六　そればかりで、舂渡しがなるものか。
雲一　在鄕酒でも、これでは買へぬワ。
權　其方で買つて飮ましてくりやれ。
ト件の錢を袖介へ打ちつける。袖介、思ひ入れあつて
袖介　成る程、それは氣が附きませぬ。併し、長の道中、殊には斯様な幼子までもござるゆゑ、路用というても足りないわしら。こりやァ斯うしませう、酒手がいらば、こなた衆、よい程に云うて下

権　されどれ程やりませう。サア〳〵、云はつしやれ〳〵。どうといつたら極りは無いが、九十九貫はお許しだが、ところを負けて五十貫。それほど出さば

皆々　越してやらうワ。

ト云はれ、袖介、思ひ入れあつて

袖介　何と云ふ。酒手の高は五十貫……ア、、こりやア云はゞ山越えと見て、強請るのだな〳〵。

ト むつとしたる思ひ入れ。抱き子泣くゆゑ

ア、、たがよ〳〵。

ト いぶりつける。

皆々　ナニ強請りだ。コレ、何が強請りだ〳〵。

ト 立ちかゝる。赤子泣く。袖介いろ〳〵心遣ひあつて

袖介　ア、、コレ〳〵、腹が立つなら料簡さつしやい〳〵。わしも先のお方を案じるゆゑ、ツイ云うた出そこなひ。不承さんせ〳〵。何を云ふにも乳呑みが、此やうにせわるし、向うへは心が急くし、マア〳〵、渡してさへ下されば、どうなりとしませう程に、どうぞ酒手を、もそつと勘辨して下され。コレ、頼みます〳〵。何分よろしく、情でござるわいの。慈悲でござるわいの。どうぞ早う

通して下され、通して下され。

トいろ／＼詫びるを皆々見て

權　そんならこなたは、持合せが無いか。どうするものだ。錢が無いなら無いやうに、貰ふ物があるわえ。

皆々、それを貰はう／＼。

袖介　そんなら酒手を料簡して、何を貰ふと云はれるのぢや。

トよき時分より卜庵、出かゝりゐて

卜庵　コリヤ袖介、われが命を貰うた上で、渡してやるはおれが扱ひ。命を酒手に

皆々　くれて行きやれな。

ト云ふを袖介、思ひ入れあつて

袖介　こりや人足に事かはり、袖介といふおれが名を、知つたこなたは

ト窺ひ見て

ヤ、いつぞや在所の中島で、逢うた町醫者。後にて聞けば、藤川水右衛門が實の親。

卜庵　いかにも愚老は卜庵だ。石井主從尋ねしに、爰で逢うたが運の盡き。悴を敵と覘ふよし、返り討

にと思うたゆゑ、水右衛門も逃がした上、加勢を頼んでこの道筋。さりとは知らぬうつそりめら待つてゐたのに、よくうせたな。

袖介 さては敵の企みにて、この道筋へ誘き寄せ、失はんといふ計略よな。殊にいつぞや中島にて、薬の價と藤川さま、あなたのお行くへ、いづれにござるぞ。

ト庵 イヽヤ彼奴の行くへは知らぬ。連れて行つたは家來の九介、愚老は存ぜぬ。爰でしまふは源之丞連れそふお時は産後の惱み、われが背負うた葛籠の中と、察せしゆゑに先へ取上げ、谷を隔てゝ二人は往生。われも餓鬼めもこの山中、仕舞ひをつけるから覺悟しろ。

袖介 エヽ、思へば〳〵極惡人。さうとは知らずうか〳〵と、先へお二人を渡したは、この身の越度。申し譯には敵の片割れ、ト庵討つて袖介は、翼なくとも爰より直ぐに、お二人樣の御先途を、見屆けに行く。サアト庵、命もらうた、そこへ出ろ。

ト庵 何をいはれぬ世迷ひ言。うぬから先へ。

ト袖介へ切りつける。立廻り。この時ト庵、腰に差したる天國の劍を、立廻りのはずみに落す。皆々これを知らず、息杖にて袖介へかゝる。此うち眼六窺ひ出て、袖介にかゝる。取つて投げのける。眼六、天國の上へ投げられ、思はず取上げ

眼六　こいつは刃物だ。

卜庵　南無三、天國失うた。

ト尋れる。袖介、眼六へ切りつける。眼六、飛びのく。雲助、袖介へかゝる。立廻りにて突きやる。眼六、袖介と心得、雲助の一を天國にて思はず切る。これにて雷鳴り出し、雨降り來る。卜庵、天國を失ひ、尋ねる心にて、探し／＼下座へ入る。眼六、雷に恐れ、天國とも、心附かで、白刃を振り廻し／＼、雷に恐れて向うへ入る。これより鳴り物にて、袖介、大勢を相手に大タテあつて、トヾ皆々を切り散らし、太息ついて

袖介　よしなき奴等に支へられ、源之丞さま御夫婦の　お身の上が心許ない。爰から直ぐに

ト赤子をいぶりつける。

權　袖介、うぬを。

トかゝるを見事に切つて

袖介　さうぢや。

ト雨の音、雷、捨て鐘にて、一散に下座へ走り入る。知らせにつき、山幕を振り落す。

本舞臺、左右岩組み、上の方、高足の山臺、正面より下へかけ、山の峰を見せ、立ち樹の梢。すべて箱根山、双子の峠、斧渡しの體。花道よき所に山の峰を見せ、出入りあり、尤もこの道具、一體に望みあり、右の鳴り物にて、道具納まる。

ト爰にお時、葛籠より出たる體、産後の惱みにて苦しみゐるを、源之丞、介抱してゐる體。山おろし捨て鐘。

源之　アヽコレ、折惡い只今に至り、其方が其やうに心惡いというては、誠に致し方もない仕合せ。こりや暫らくも葛籠の中で、氣を詰めたゆゑの事と思ふ。コレ、氣を慥かに持ちや／＼。

トいろ／＼介抱する。お時、胸を押へて

とき　アイ／＼、もう氣合ひはようござりまする程に、必らずわたしを案じずとも、どうぞお前は水右衞門に逢うて、めでたう敵をお討ちなされませ。もう／＼、わたしや氣合ひはようござります。

ト心遣ひにて云ふ思ひ入れ。

源之　イヤ／＼、さうではあらうが、産後といひ、ひよつと血が上がつては惡いほどに、どうぞ爰らの家を頼んで

トいろ／＼あつて

アヽ、それに致しても、この袖介は、何を致して居る事やら。アヽコレ、どうぞ血の道が重らねばよいが。

トいろ〳〵介抱してゐる。よき時分より後の方へ水右衞門、俵をかぶり、窺ひ〳〵出て來り、この時側へ寄つて、物も云はずに源之丞を切り下げる。「アツ」と云つて飛びのく。返す刀にお時を切る。「アツ」ト苦しむ。兩人、よろぼひ〳〵、水右衞門を見附け

ヤ、わりや水右衞門か。

とき　エ、水右衞門が參りましたか〳〵。

源之　エヽ、おのれ、物も云はず騙し討、卑怯未練な人非人めが。

水右　約束ゆゑにこの山道、疾から爰に待つてゐた。約を變ぜず夫婦とも、よく來たな。併し來やうが遲いゆゑ、藪蚊に刺されて難儀したわえ。

源之　おのれ、誠の侍ひなら、なぜ名乘りかけて勝負いたさぬ。

とき　産後の惱みといひながら、舅御樣の敵のおのれ、やはか討たいで置くべきか。

トよろめき〳〵立ちかゝる。

水右　ナニいはれざる吐かし事。コリヤヤイ、最前寺にて源之丞、われが送りし小柄にて、駕籠を破つ

ての場を落ちのび、爰に待ちうけ、手紙を以て引寄せたるに、約を違へずよくうせた。使ひの坊主も廻し者。殊に附きそふ袖介が、邪魔と思うて親卜庵、人足どもに云ひつけて、谷を隔てゝ大勢が、よつてたかつて彼奴も寂滅。生れた餓鬼も狼の、腹を肥やさすこれ善根。餓鬼は小動大動、賽の河原で二人とも、夫婦揃うて返り討、屍は直ぐに小地獄へ、この藤川が引導で、爰で双子の土となれ。

ト きつとなる。兩人、無念の思ひ入れ。

源之 エヽ、その雜言は何事ぞ。この場で一命終るとも、父の敵を討たいで置かうか。

とき 女ながらも舅の仇、恨みの刃、おのれ藤川。

ト よろめき〱切りつけるを、立廻りよろしく、キツとなつて

水右 どうでうぬらは返り討、石井の血筋は絶ゆれども、後の憂ひを思ふゆゑ、變名なして仕官の願ひ今より水右衛門は改名なし、川の流れも清らかな、家名の藤川そのまゝに、今日よりしては赤堀源吾。水右衛門改め源吾。うぬらも覺えて冥土の土産。恨みがあつても、水右衛門でないぞ。

ト きつと云ふ。

源之 此まゝ死すとも

とき　恨みの刃。

ト また立ちかゝるを、立廻つて三人、二重舞臺へ上がり、お時をしたゝかに切り下げる。お時苦しみ後の谷へ撻と落ちる。源之丞、切りつけるを水右衛門、白刃を踏み落し、直ぐに切り倒し、源之丞に乘りかゝつて

水右　これがこの世の

ト 止めを刺す。矢張り捨て鐘、山おろし。後の蔭より西入、竹槍を持つて、よぢ登つて來り

西入　水右衛門さま、まんまと二人を

水右　爰へ引出し返り討。心がゝりは若殿より、卜庵どのへ送りし墨附。慥か此奴が

西入　心得ました。

ト 死骸を尋ね、書き物を出し、水右衛門へ渡し、死骸はあたりへ蹴散らす。

水右　志すのは東の方。道中筋は正しく詮議。其うち姿を

西入　呑みこみました。

ト 墨の衣を脱ぎ、水右衛門へ着せる事よろしく

夜の明けぬうち

水右　畚でこの場を

西入　渡らつしやりませ。

ト山おろし、時の鐘になり、兩人、下座へ入る。知らせにつき、この道具引いて取り、後の黒幕切つて落す。

道具替り。遠見になる仕掛け。

ト山おろしにて、西の方より袖介、拘子を懷中して、心急くまゝ手繰りして、畚に乘つて出てくる。水右衞門は東の方より畚に乘つて出で、袖介を見附け、西の方へ乘り出す。西入も畚に乘つて、源之丞が刀を持つて窺ふ。袖介の畚、水右衞門の畚と行き合ふ。袖介、窺ひ見て

袖介　モシ〳〵、今の坊樣か。旦那は首尾よく、越されましたか〳〵。

ト急いて聞く。水右衞門、笠にて顏を隱し、鼻聲にて

水右　わしは何も知らぬ〳〵。

ト作り聲にて綱をたぐり、急いで西の方へ入る。西入、綱を留めて窺ひゐる。

袖介　ハテ、心急くまゝお二人樣の

ト綱をたぐらんとする。知らせにつき、二十三夜の月上がる。この月明りに袖介、二重舞臺の死骸を見附け

ヤヽ、慥かに向うに源之丞さま、横死の様子。さては水右衛門め、お二人を

ト恟りする。西入、斧にて窺ひ寄る。よき時分より花道の山際へ水右衛門登り來り、小筒にて覘ふ事よき途端に火蓋を切る。西入は袖介の斧の綱を切る。途端一度の仕組み。袖介の斧の綱切れて谷間へ落ちる。西入は鐵砲に中り、血を吐いて苦しむ。この火氣、綱へ燃えつき、燒き切れて同じく谷へ落ちる。水右衛門見て、ハツと思ひ入れ。これを木の頭。爰にて笠を取り、キツと見る。これをキザミにて、よろしく、ひやうし

幕

直ぐに山おろし、捨て鐘、水右衛門、火繩を踏み消し、衣を脱ぎ捨て、大小着流しの形になつて、爰にて誂らへの鳴り物になり、嘲笑つて向うへ悠々と入る。知らせにつき打込み。二番目ちやい〳〵二番目ちやい。

第二番目　序幕

兩國廣小路の場

掛塚屋敷の場

役名――力持ち金五郎實ハ田邊文藏。女輕業師、小さん。藤川卜庵。石井後家、おらい。小さん兄、中野藤助。掛塚伴五郎。浪人、こけ安。同、桶直、同、馬。同、金。中間、八內、木戸番、高八。同、吉。同、權七。口上、くる右衞門。臑切り、眼六。

本舞臺、三間の間、眞中に力持ちの見世物の庵りと看板、綺麗に飾り、軒口團子提灯、眞中に木戸口上の方に潜り戸、長押に幕を張り、下の方に八卦小屋、麻の暖簾をかけ、看板をかけ、上に揚弓の見世、的を畫き、松川と記したる障子を立てかけ、爰に桶直、こけ安、大小、浪人の拵らへ。八內、中間にて腰かけゐる。お弓、矢取り娘にて、弓を引いてゐる。高八、吉、力持ちの木戸口番にて、臺の上で札を賣つてゐる。仕出し大勢立ちかゝりゐる。輕業の鳴り物、揚弓の音にて幕明く。

高八　サア〳〵、評判々々、入らつしやい。

吉　御油斷だと詰りますぞ。

兩人　サア〳〵、札を買つて〳〵……評判々々。

　トこの時、奥にて小太鼓のシヤギリになる。

奥で　中入りぢやい〳〵。

ト呼ぶ。兩人幕をあげて、

兩人　替りぢや〳〵。評判々々。

ト上の潜りより仕出し大勢、押しあひ〳〵出て來り、捨ぜりふにて兩方へ別れ入る。兩人、臺より下りて

吉　、今日も剛氣に入つたではないか。これで丁度千五足通つた。

高八　おれが方もその位だ。併し、錢にやアなるが、飯を食ふ間もねえ。

吉　さうよ。おれもまだ飯前だ。中入りのうちに、蕎麥切り豆腐で一杯やらかさうか。

高八　それがよからう。

兩人　サア〳〵、行くべい〳〵。

ト矢張り右のシヤギリの鳴り物になり、兩人、下座へ入る。

桶直　コレ〳〵、姐え、なんぼ手前物だといつて、大概に射ねえか。的が父さんの顏のやうになつてしまふワ。

八内　旦那が又癪を仰しやる。

こけ　カウ、姐え、爰の力持ちは、一番評判がいゝせるか、素敵に入るな。

ゆみ　左様でござります。淺草の奥山にもあるさうでござりますね。

こけ　奥山のも見たが、みんな上方者だ。どうして〳〵、江戸ッ子のやうに、あゝキビ〳〵とはゆかぬて。

八内　左様でござります。今まで力持ちも出ましたが、腹の上へ四斗俵を二十五俵あげるとは、あなた方の御扶持高を、十年ぶり一度に持つやうなものでござります。

桶直　コリヤ、ヤイ〳〵、いゝ加減に褒めろ。馬鹿な奴だ。他人も聞いてゐるわえ。

ゆみ　オヤ、そんならわたしを他人になさるのだね。憎らしいね。

こけ　カウ、お娘、一服下ッし。

ゆみ　アイ〳〵。

ト莨盆を出す。

こけ　イヤ又、力持ちが俵の二十俵や三十俵、腹の上へ載せるのは當り前だ。それよりこの子の方が、餘ッぽど強いて。

桶直　ハテノ、この娘は、そんなに強いか。

こけ　毎晩五十人位の男をのせるワ。

ゆみ　オヤ〳〵、きつい事だね。よく御存じだね。

こけ　知らなくつて。したが、矢場ぢやァこの姐え。向う兩國ぢやァ玉本小さんだ。何方も美しいものだ。
桶直　時にお娘を連れて、一杯やらうではないか。
八内　そりやァようござります。乞食奈良茶へでもお供いたしませう。
桶直、また外聞の悪い。金萬へでも行つて、鰻ときめよう。
ゆみ　お有り難うござりますが、明けると親仁に叱られますよ。
こけ　ナニ、明けると親仁が叱る。疾に明き切つてゐるだらう。
桶直　サア〳〵、なんでも連れて行かにやァならぬ〳〵。
ゆみ　それでも、今にお客が
こけ　ナニお客だ。此方もお客だ。
桶直　連れて行く〳〵。
ト嫌がるお弓をあちこちと追ひ廻す。辻打ちになり、向うより眼六、一本差し、臑切りの拵らへにて雨掛けを擔ぎ出て來り、この中へ入る。此はずみにお弓逃げて下座へ入る。
眼六　モシ〳〵、どなたかと存じましたら、これは、お二人様、お樂しみでござります。

桶直　てまへは卜庵が下部の眼六ではないか。
こけ　そして只今は何を致して居る、

卜輕業三味線の合ひ方。

眼六　私しも根性を入れかへて、只今では膞切りの膏藥賣り。古主の卜庵さまの御子息、水右衛門さまは、龜山の殿様へ仕官なさる筈、今はお名も變つて源吾さま。その附き人の濱田瑞軒さまと、彼の地へありつきの節は、私しもお供いたします。
桶直　その卜庵は、當時おいらが仲間の伴五郎どのと、藤川氏とは伯父甥の事ゆゑ、その縁で我れ〳〵まで懇ろに致すて。
こけ　あの又卜庵どのゝ事を、身に引請けて世話いたす、絹商人の明石屋兵助と申す者を、存じて居るか。
眼六　左樣でござります。その兵助と申しまするは、私しとは古朋輩でござりますが、あの者は相應な商人になりましたに、私しめは今に於てこの態。兎角に人は運でござります。
桶直　それについて聞きたいは、兵助めの弟は、今ではどう致した。
眼六　それも石井に勤めて居りましたが、その縁かして、勘當されたと聞きましたが、源之丞夫婦は返

り討になりまするし、袖介めは幼子を抱へて、箱根の谷底へころり山椒魚。大抵かの一巻きは、
根絶しとなりました。

八内　さすれば誰れあつて水右衛門さまを、敵を覘ふ奴はござりますまい。

こけ　イヤ／＼、左様申すな。源之丞が妹に、慥か藤川といふが

眼六、ござつたところが女の事。殊には水右衛門さまの女房。それも今に行くへが知れず。よし又めぐり逢つたとて、よもや亭主を敵とは、どうしてマア討たれませう。それぢやァ血で血を洗ふやうな……イヤ、血と云へば、血を見にやァわしは又、その日が送れませぬ。またこの間にゆつくりと、お目にかゝりませう。

ト葛籠をよき所へ直す。

桶直　段々承りたい事もあるゆゑ、必ず訪ねてくりやれ。

こけ　何にしても、もう頭も來る筈ぢやが、例の又ドロンではないか。

桶直　そこらを一遍尋ねて見よう。また後ほど參るであらう。

眼六　ハイ／＼、晩までは爰に居ります。

兩人　ドレ、尋ねて來ようか。

ト辻打ちになり、三人は下座へ入る。

眼六　思ひもつかぬ人達に逢へば逢ふものだ。ドレ、見世を張らうか。

ト矢張り辻打ちの鳴り物になり、眼六、見世を飾る。向うより藤助、ほつとせ、古鐵買ひの拵へにて、御膳籠の荷を擔ぎ、出て來り、直ぐに舞臺へ來て、眼六を見て

藤助　これは臑切りどの、早く出さしつたの。

眼六　ナニ早い事があるものだ。其方が遲いのだ。こんたなんぞは、もつと早く出た方が、よささうなものだ。

藤助　皆もさう云うてぢやが、あまり早いと退屈するゆゑに。

眼六　とんだ事を云ふ男だ。商賣が退屈ぢやァ仕方がねえ。カウ、腹を立たつしやるな。土臺、古鐵屋や天道干しなんぞは、山師と同じ事で、かませ物や口前が肝腎だ。全體お前にやァ無理だ。放し龜か、足袋へ入れる糸爪ぐらゐが相應だ。

藤助　わしもさう思ひまするが、妹とも又相談して見ませう。

眼六　ナニ妹と相談する。無事な人だぜ。したが、こんたの妹にしては、輕業師の小さんは、べら坊に好い器量だ。あんな危ねえ事をせずとも、外におつりきな事がありさうなものだ。

藤助　サア、何を云ふにも、わしといふ兄があるゆゑ、兎角妹も身が振り憎いには、困り果てまするて。

眼六　ハヽヽヽ、これがほんの困りものといふのだ。さう妹ばかり當てにせずとも、兄貴の兵助どのに、元手でも借りればいゝに。

藤助　どうして〳〵、兄は元、藤川卜庵どのゝ家來筋。わしは又、石井さまの御家來ゆゑ、敵同士ぢやというて、科もないわしを勘當。また右内さまの後家御樣まで、わしを勘當。皆これ兄の兵助どのより起る事。恨みこそあれ、力にはせぬ。……ほんに、此やうな事を云ふぢやなかつたに、必ず人に話して下さるな。頼みましたぞえ。

眼六　イヤハヤ、呆れたものだ。何とやらに附ける藥はねえ。

藤助　お前の脂藥ではどうぢや。

眼六　ぎえんの惡い。まだ口明けをしないよ。

ト鳴り物になり、藤助、御膳籠を並べ、その上に古脇差、鋸、古本、その外いろ〳〵並べゐる。また兩方より仕出し大勢出て來り

仕出　力持ちは仲入りださうだ。鱛切りでも見べい〳〵。

ト立ちかゝる。爰にて眼六、床几の上へ上がり、襷をかける。藤助は頬かむりをし、火打を出して莨をのみゐる。

眼六　サア、始めてお目にかけませう。お急ぎでないお方は、側へ寄つて御覧じろ。御存じ臑切りの脂藥は、柳子油まんていが、虎の脂を以て、人參を煎じ詰めたもの。赤いは辰砂。辰砂は熱をさますゆゑに、まづ火傷によく、癰疔ねぶと腫れ物、第一が切り疵。即功というて、踏んだる足を引かぬうち、立ち所に血をとめる。虫歯は頬へ摺りこみ、頭痛は顳顬、坊様の鼻血は、ひよつと毛抜を忘れた時は、ぼんのくぼへ摺りこみ、直さまとめる、と申したところが、緣者の證據で役に立たぬ。とまるとまらぬは、お目通りにて切つたる疵口、その血がとまつたら、後でお求めなさい。臑切りの體ぢやというて、別に誂らへやうがない。同じ夜食のかたまりぢや。先づ流るゝ血汐をお目通りに於て。

ト差したる一腰を抜いて臑を切る。血流れる。これにて俄に雷鳴り出す。仕出し皆々

仕出　ソリヤ、雷だ〳〵。

トあわてゝ双方へ走り入る。眼六、刃物を拭き、鞘へ納める。これにて雷やむ。藤助、これを見て思ひ入れ。眼六、一腰を抛り出し

眼六　イヤ又、こんな緣起の惡い脇差もねえものだ。折角人を寄せて、臑を切ると直ぐに雷が鳴り出すから、何にもならねえ。ほんに不吉な刄物だぜ。

トこれを聞いて

藤助　コレ〳〵。其やうに思ふなら、わしが代物と取替へてはどうぢや。

眼六　成る程、そんならさうして下さい。おれが持つてゐると、商賣の邪魔になる……そんなら、これと取替へて下せえ。

藤助　したが、雷の鳴る刄物と取替へるは、どうやら氣のない

眼六　馬鹿を云はつしやる。それが無けりやア、二朱や一貫に賣つても、此方で氣がねえのだ。

藤助　ようござる、そんなら只取替へて進ぜませう。

眼六　只もよく出來た。伊勢太で一分一本、默つて貸すのだ。こりやア二朱はむづかしい。みす〳〵一分損をするのだ。その代りに、見世を氣を附けて下せえ。緣起直しに、鰌でお酒でも

ト取替へて差し

あけて來ようか。

ト辻打ちになり、眼六、下座へ入る。藤助、脇差を見て

藤助　膈切りどのが、一分損をすると云うたが、誠の事か知らん。取替へたというたら、また妹に叱られはしまいか。こりや苦勞を求めたやうなものぢや。なんの因果で此やうにも、苦勞性に生れた事ぢややら。自體この兩國は、因果物の集まり所ぢやさうな。

ト思ひ入れ。唄になり、向うよりおらい、深編笠、二つ髷、女醫者の拵らへにて出で來り、花道にて

らい　いかに宿業なればとて、非道の刃に夫を討たれ、世にある甲斐もなき人の、せめては修羅の御無念を、晴らさんものと神々へ、願ひを運ぶ往來にも、人目せき笠いつしかに、とけてこの身の

ト また唄になり、思ひ入れあつて舞臺へ來る。藤助、笠の内を覗き見て

藤助　モシ〳〵、あなたは慥か、奥様おらいさまではござりませぬか。

ト袖を捉へる。

らい　ヤ。

ト振りかへつて、よく〳〵見て、振り切つて行かうとするを、藤助また縋つて

藤助　奥様ぢや〳〵。おらいさまに違ひない。マア、お待ちなされて下さりませ。

ト合ひ方。

お情なうござりまする。そりやハヤ、お腹立ちは、御尤もではござりますれど、なんぼ兄めが、

敵の家に奉公いたしますればとて、科もないこのわしにまで御勘當、譬へにさへ申す通り、兄弟他人の始まり。せめてはあなたばかりでも、赦してやらうと仰しやれば、それを力に亡きお方の御命日の御回向も、肩身廣う致しまする。どうぞ御勘當をお赦しなされて下さりませ。

ト手を突いて詫びる。おらい思ひ入れあつて

らい　主從の禮を重んじ、舊恩を思へばこそ、しほらしき其方が願ひ。聞きすまぬにはなけれども、今は血筋も絶えたれば、女ながらも敵を討ち、何卒石井の家再興。たゞ心にかゝるは、紛失なせし天國の劍、それが無ければ、お家の跡目も分明ならず。さすれば願ふ敵討も、叶はぬ道理。其方とても、まこと忠義を思ひなば、一つの功を立てたる上は、取上げまいものでもない。

ト此せりふのうち、後の八卦置きの小屋より、卜庵、易者にて出て、窺ひゐる。藤助、思ひ入れあつて

滕助　左樣なれば、その天國とやらの劍が出ぬうちは、敵討のお願ひも叶ひませぬとか。どうぞコレせめて似よつた品なりと、サ云うたところが、いくらあつてもがたや竹光。いま取替へましたるこれこそは、ちつとは目ぼしいやうなれど、その代りに血がつくと、直に雷が鳴りまするて。

トこれを聞いて

らい　ヤヽ、なんと申す。血汐をあやせば雷鳴の

ト手早く取つて

燒き刃、金色、寸尺まで、これぞ正しく尋ぬる天國。いかなる者の所持いたして、どうして其方が。

藤助　贗切りどのと取替へました。そんならそれが

らい　誠の天國。其方が忠節、この身の願望、神も佛も納受あつてか。チエヽ、忝い。

ト押戴き

今こそ赦す其方が勘當。以前に變らぬ主從なるぞ。

藤助　そんなら私しの御勘當。お赦しなされて下さりまするか、ヤレ〳〵、嬉しや、エヽ、有り難うござりまする。

らい　これにつけても娘の藤川、父の敵の水右衛門に、知らで連れそひ居るとも聞き、行くへ知れねば音信とても。もしや其方は

藤助　便りも聞かぬ藤川さま。併し敵は水右衛門と、知れたるからは

ト爰にて思はず卜庵、おらいと顏見合せ、暖簾の中へ隠れる。

らい　思ひ立つ日が卽ち吉日。直さまこれより敵討御免の願ひ。其方も共々。何かの事は隱れ家にて、これと申すも日頃から信心なす、不動明王の御利益。お禮參りのその間、其方は天國、大事にかけて。

ト一腰を渡す。

藤助　畏まりました。其うち見世を片附けて、爰にお待ち申します。

らい　とは云ひながら、覘ふ敵は、現在娘の

藤助　聟の水右衞門。逢うた時は、必ずともに

らい　討つ者も、討たるゝ者も聟舅。血で血を洗ふ家の瑕瑾。修羅の巷で結んだ緣か。思へば因果な。

トほろりと思ひ入れ。

藤助　サア、早う行てござりませ。

らい　ドレ、お禮申して來ようか。

ト唄になり、おらい笠をかむり、下座へ入る。藤助、見世を片附ける。輕業の鳴り物になり、向うより伴五郎、浪人者、着流し大小、下駄がけ。小さん、女輕業師の形。くる右衞門、口上云ひ、桃色の肩衣。權七、木戸番にて、いろ〳〵詫びて來る。馬、金。大小、下駄がけ、浪人組の形にて、皆々せ

りあひながら出て來り、直ぐに舞臺へ來て

くる　モシ〳〵、その子は私しどもの大事の太夫でござります。

權七　それをあなた方、どうなされます。

伴五　ナニどうするものか。綱の上から身共の面へ、この傘を打ちつけた。女だといつて料簡は出來ぬワ。

小さ　そりやモウ、ほんの怪我と申すもの。殊に私し風情を、あなた方大勢で捕へて、どうなさんすえ

馬　どうといつて、侍ひの顏へ、傘をぶッつけて濟むものかえ。ぶッつけ千萬、輕業な女だ。

金　なんでも屋敷へ連れて行つて、その上の事にするワ。

くる　サ、放れ業の儀にござりますれば、兎角仕損じ勝ちにござります。その段は幾重にも御勘辨の程を、乞ひ願ひ上げ奉りまする。

權七　只今口上を以て申し上げました通り、仕損じは何度でも、やり直してお目にかけます。

伴五　べら坊め、仕直されて堪るものか。面の掛替へは持たぬワ。

くる　どうぞ御免なされまし。

權七　その上、この太夫も、まだ病あがり。後の月の病氣は命拾ひ、なか〳〵私しどもは、この太夫に

引込まれましては、築地の内も仕舞ひませねばなりませぬ。それこそ本當に、築地へ歸られませぬ。

くる　イヤモウ、かゝり合ひの難儀ゆゑ、あそこや爰の御祈禱。中にも妙見樣と淸正公樣の御利益で、やう〳〵と本復いたしましたところへ

權七　あなた方に粗相があつては、まづ第一私しどもが立ちませぬ。それと申すも、まだ體が固まりませぬゆゑ。

馬　體が固まらうが、海鼠が溶けようが、それを知るものか。

權七　モシ〳〵、それぢやァ御連中方の御贔屓のお庇で、折角お目見得をした太夫が、どうもあなた方へ濟みませぬ。

小さ　ハイ〳〵、どうぞお赦しなされて下さりませ。

作五　エヽ面倒な。そびいて行け〳〵。

ト囁く。皆々とめる。藤助、この中へ入り

藤助　ヘイ〳〵、私しはこの小さんが、兄でござります〳〵。わざとではござりませぬ。どうぞ御堪忍なされて下さりませ。

伴五　兄でも親でも、料簡がならぬ〳〵。

トこの時下座より眼六、桶直、こけ安、八内出て來り

桶直　頭、合點さつしやるな。

こけ　おいらが耳へ入つちやア、頭が濟ませても、おれが濟まねえ。

眼六　それ〳〵、傘をぶッつけるとは、かさねての後だ。きつと糺すがようござる。

侍皆　なんでも濟まぬぞ〳〵。

ト喚くゆゑ

藤助　もし〳〵、旦那樣、左樣なれば、どう致しますれば、御堪忍なされて

伴五　そんなら云はうか。この女を身にくりやれ。

立役　エヽ。

伴五　コレ、小さん、てまへもおれが女房になれ。さうしたら料簡して遣はすワ。どうだ〳〵。

ト脊中を叩く。小さん思ひ入れあつて

小さ　否でござんす。

トつんとしてゐる。

桶直　それでは頭、面が立つまいぜ。

伴五　武士が一旦云ひ出しちやァ、否が應でも連れて行つて女房にするヮ。邪魔する奴等は

侍皆　合點だ。

ト伴五郎は小さんを捕へ、敵役寄つて皆々を引きつける。この時下座より、吉、高八、仕出し大勢出て

皆々　オヽ、喧嘩だ〳〵。

ト立騒ぐ。力持ちの鳴り物になり、内より金五郎、裁附け、大縞の廣袖、板締めの襦袢、紺の腹掛けにて、力持ちの大石を擔ぎ、敵役を毆りのけ〳〵、小さんを圍ひ、眞中に石を置き

金五　ハア、よんやサ。

トその上へ腰をかけ、扇を使うて見得。

侍皆　ヤイ〳〵、われは力持ちの

金五　アイ、金五郎サ。高が女を相手に、僅かな事を囮にして、小さんを貰ひてえとは厚かましい。お前に太夫を取られちやァ、大勢の難儀だ。無駄を云はずと歸らつしやい。

くる　金五郎さん、こりやァ斯うでござる。このお方が綱渡りを、舞臺へ上がつてござつて、小さんさ

んを、下から覗きこみさつしやるから、それで落した傘が觸つたのぢやｒ
權七　さうよ。見る所で見てゐれば、そんな事もねえのだ。
眼六　コレ〳〵、さう云ふと、こんた衆の方ばかり理屈のやうだが、傘をぶッつけたが其方の誤まりだ
マア、一旦小さんは、お屋敷へやらずばなるまい。
權七　コレ、臑切りどん、こんたも同じやうな渡世をしながら、何もさう先へ並ばずとも、とも〴〵膝
を抱いてくれるがいゝぢやァねえか。
伴五　たとへ膝を抱いても、小さんを抱かぬうちは料簡ならぬ。それに又、先と貰ひ引きの對談いたし
て居るを、金五郎めが、なんで横合ひから出たのだ。
こけ　なぜ脇道から出たのだよ。
金五　サ、そりやァ
小さ　イエ〳〵、脇道ではござんせぬ。この金五郎さんは
馬　この金五郎が、なんだ〳〵。
小さ　サァ、アノ、わたしが母さん、ではない、それ〳〵、わたしの亭主。この金五郎さんは、わたし
が亭主ぢやわいなァ。

　　　　ト寄りそふ。金五郎悄りして

金五　コレ〳〵、この女は、よく嘘をつく者だ。どうしておれが

小さ　サア、それでなければ、この場が濟まぬほどに、どうぞわたしが……モシ、亭主ぢや。アイ、亭
　主ぢやわいなア。

藤助　アヽ、あのやうに云うてぢやから、どうぞお前の

　　　　ト金五郎、思ひ入れあつて

金五　よし〳〵。そんなら、成る程この女の、亭主ぢや〳〵。おれが女房だから、それを貰つたと云や
　ア間男だぞ。それでも貴樣達は貰はうといふのか。

伴五　たとへ女房にもしろ、武士たる者が云ひ出した事

こけ　刀にかけても貰はにやァならねえワ。

金五　それほど欲しくば進ぜようワ。

小さ　それぢやというて。

金五　イヽヤサ、只はやらねえ。この石が聟引出だ。これを持つたその時には

伴五　小さんは身共にくれると云ふのか。面白い〳〵。ナニこの位な

金五　イヤア、これは見物事だ。頭、しつかりさつしやい〳〵。
権七　こりやア面白い。そんならおれが口上を云ふべい。肩衣を貸しな。
トこれより力持ちの鳴り物になり、権七は、くる右衛門の肩衣を着る。伴五郎は身拵へして石にかゝる。
東西……さて、お目通りに据ゑ置きましたる、百八十貫目の大石を、これにて差上げ、その上へ押しの重いお侍ひ様を一人乗せて、暫くが間は保ちまする。まづは力試し、小手がためが最初でござい。
トまた鳴り物になり。伴五郎、石を上げんとすれど、動かぬ思ひ入れ。
東西……さて、お目通りに据ゑましたるその上へ、押太いお侍ひ様を一人乗せて、暫らくが間保ちまする。まづは力試し、小手先が最初でござい。
トまた鳴り物になり、伴五郎、又々石をあげんとすれど、動かぬ思ひ入れ。金五郎見て
金五　サア〳〵、小さんはいらぬか。どうだよ〳〵。
権七　サア〳〵、どうだな〳〵。
敵皆　頭、我慢さつしやい〳〵。

仕出　ワアイ〳〵。

ト伴五郎、いろ〳〵とあせれども動かぬゆゑ

伴五　イヤ〳〵、おれは腹は勝手が惡い。脊中へのせてくれろ。

侍皆　それがよからう〳〵。

ト伴五郎、俯向けになる。皆々寄つて石を脊中へのせる。

權七　斯樣にのせましたる石の上へ、お侍ひ一人乘せまして、暫らくが間脊中にて保ちまする。この場首尾よう勤めますれば、小さんは卽ちお侍ひの女房。まづは石の許へ上がらせまする。

ト鳴り物になり、金、石の上へ上がる。

敵皆　ヤンヤ〳〵。

桶直　どうだ。この力では、よもや小さんは

こけ　女房になるであらうな。

眼六　サア〳〵、約束通りだ。否應はあるまいがの。

桶直　お手柄〳〵。その代りには、小さんはお前の、女房ぢや〳〵。

ト桶直下りて、皆々寄つて石を取る、伴五郎、矢張り俯伏せになつてゐるゆゑ

眼六　サア〳〵、起きなされ〳〵。

侍皆　伴五郎どの〳〵。

ト皆々寄つて石を取る。伴五郎、矢張り俯向けになつてゐるゆゑ

眼六　サア〳〵、起きなさい〳〵。

侍皆　伴五郎どの〳〵。

ト皆々寄つて引起す。伴五郎、目を廻してゐる。

侍皆　イヤア、死んだか〳〵。こいつは大變々々。

仕出　ワアイ〳〵。

權七　道理で物を云はねえ筈だ。これがほんに、芝緣に口無しだ。

金五　サア、どうだ。死んだ侍ひに、小さんを女房に持たせる氣か。

侍皆　サア、それは。

金五　サア

皆々　サア〳〵〳〵

金五　なんのこッた。風ッぴいた。

侍皆　エヽ、いま〳〵しい。

眼六　何にしても、打ッちやつては置かれやせぬ。

馬　足力へでも行つて見てもらはう。

皆々　伴五郎どの〳〵。

ト呼び生けながら、介抱して下座へ入る。仕出し大勢、これを囃しながら兩方へ入る。

眼六　こりやァ大きに厄介をかけやした。

權七　何にしろ、樂屋へ來てくんなせえな。

ト くる右衞門に囁き

早く持つて來いと云つてくんねえ。

くる　オット、合點だ〳〵。

金五　よさつせえな。氣の毒な。

くる　兄貴、みんなに禮を云はつしやい。

藤助　大きに有り難うござります。

權七　そんなら待つてゐやすぜ。兄貴も來て下さい

ト權七、高八、吉、藤助、木戸へ入る。この時、木戸より鐵、出て來り

鐵　モシ〳〵、金五郎さん、先刻わしが所へ、吉田屋の仙さんが、これを置いて行きましたよ。

金五　ナニ吉田屋の仙さんが。アヽ、そりやァ村松町の松壽軒といふ、新製仕出しの瀨戸物屋だ。これをどうするのだ。

鐵　それをお前の舞臺で、御見物樣へ披めておくんなさいましと、頼んで行きました。

金五　ナニ、これをか。

ト明けて見て

アヽ、こりやァ諸名家の書讃のある、酒の器だ。おれが舞臺で披めるより、マア、この御見物樣のお耳に入れて置けば、又お通りがけには御覽の上、お求めなされて下さるであらう。仙之助さんにもさう云つてくんな。

鐵　アイ〳〵、そんなら今に來なすつたら、さう云ひませうね。

ト鐵、下座へ入る。よき時分より卜庵出てゐて

卜庵　金五郎どの、いろ〳〵の事を頼みに來るなう。時に、くる右衞門どの、貴樣は神々舞ひでは儲けるし、さうして家主をして、口上云ひ。定めし金の置き所があるまいの。

くる　そこぢやて。わしも尋ねなければならぬ人があつて、物いり勝ちぢやて。それで、今居る内を賣りたいが、金五郎さん、なんと買つてはくれまいか。

金五　成る程、出入りは不自由だから、殊によつたら相談いたしやせう。

くる　それぢやと大きに極まりが早いて。なんと極まり次手に、小さんさんを引越し女房、直ぐに貰うてはどうぢや。

小さ　それなれば此方は嬉しいけれど、金五郎さんには餘所外に

金五　ナニ、そんな小嫌らしい事があつて、力持ちが出來るものか。

小さ　イエ〳〵、そんなに隱しても、あるといふ證據は

ト金五郎の掛けてゐる守り袋を取つて

定めし深う云ひ交した、女子の所から來た起請でござんせう。

ト明けにかゝる。

金五　コレエヽ、馬鹿をするな。そりやァ大事の守り袋だ。

小さ　なんの嘘ばつかり。そんなら見せなさんせ。

金五　ハテ、寄越せと云ふに。

卜爭ふはずみに、守り袋をあたりへ落す。卜庵、手早く取つて隱す。兩人、これを知らず

寄越さねえか。そりやァ大事の守りだ。

小さ　わたしや知らぬわいな。

金五　ハテ、冗談もいゝ加減にするものだ。

小さ　それぢやといふて、知りもせぬものを

金五　知らねえと云つて濟むものか。

卜小さんを追ひ廻す。小さん木戸の内へ駈けて入る。金五郎、追うて入る。

くる　エヽ、畜生め。もう痴話りくさる。時に卜庵さん、ちとお頼みがあるて。わしは元、濱松名越の家中、田邊文太夫さまの御子息、文藏さまの乳人役。その御子息が少さい時より、力業が好きで、大の腕白ぢや。後には腕に車といふ字を三ツ彫つたを、親旦那が立腹したら、其まゝ家出。そりやモウ二十年ほど跡の事ぢやが、そのお人を急に尋ねゝばならぬゆゑ、ちよつとそれを見てもらひたいて。

卜庵　それなら、先づ卦を起して見ませう。

卜小屋の内より筮竹を持出し、立てゝ

この易の表では、これを求むる事進むにあり、と申す心ぢや。こりや、遠からず巡り逢ふであらう。

くる　それは忝い。

卜庵　マア、方角は西南の間を尋ねるがようござる。

卜この時奥より吉、出て來り

吉　くる右衞門さん〳〵、みんなも大きに待つてゐらア。お前、來て、早くきりあけてくんねえ。

くる　オット承知ぢや。

卜この時下座より小犬一疋走り出て、くる右衞門にじやれつく。

エヽ、この畜生め。長い橋を越えて、いつの間に來をつた。全體おれには、犬猫が附き物ぢや。

吉　サア、早く來てくんねえ。

卜くる右衞門を引ッ張り、木戸口へ入る。犬はよき所に寐てゐる。卜庵、あたりを見て、懷より守り袋を出し

卜庵　小さんめがじやらつくうちに、捲きあげたこの守り袋。

卜明けて見て

こりやア金五郎めが臍の緒の書附け。殊に、腕の彫り物といひ、ハテ、好い物が手に入つたわえ

ト辻打ちになり、下座より伴五郎、眼六、捨ぜりふにて出て來り

伴五 コレ〳〵、卜庵老々々々。

卜庵 伴五郎どの、好い所へござつた。名越の家へ入込む、好い手がゝりが出來申した。

ト囁き、件の守り袋を見せる。

伴五 そんならアノ金五郎めは

卜庵 この臍の緒が何より證據ぢや。

眼六 わしは又、知らぬ事とて天國の短刀を、不吉な劍と、取替へてやつた古鐵買ひは、石井の家來のあの藤助。

卜庵 そんならいつぞや箱根にて、思はず我が手に入つた天國。外手へやつたか。大だはけめ。どうぞ此方へ取り得る工風が。

トこの時、藤助、一腰を持ち出て、下の方へ來り

藤助 ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。好い時には好い事ばかりぢや。皆が取持つて、妹めは緣附くし、天國が手に入つたばつかりで、勘當はゆりるし、もう奥樣はござりさうなものぢや。

ト思ひ入れ。眼六見て

眼六　コレ〳〵、先刻貴様と取替へたその脇差は、あのお方へ賣つて置いたのだ。返して下さい〳〵。

藤助　イヤ〳〵、そりや成らぬ〳〵。こなさん、あれ程に云うたぢやないか。

伴五　たとへ何と申さうが、その一腰は身が先約だぞ。

藤助　イエ〳〵、こればつかりは、返されませぬ〳〵。

ト脇差を抱へて思ひ入れ。

卜庵　コレ〳〵、貴様は、取替へたその脇差が、それ程までに欲しいか。

伴五　それほど欲しくば、われに遣らうが、その代りには妹の小さんをば、身に取持つか。

藤助　サア、その妹もたつた今、縁づきます。

伴五　そんならこれは、われにやア遣られぬワ。

ト引ッたくる。藤助かゝるを、眼六隔てゝ

眼六　コレエヽ、云はゞありやアおれが代物だワ。上手を使へば、いゝと思ひやアがつて。

ト藤助をこづき廻す。卜庵、中へ入つて

卜庵　コレ〳〵、どうしたものだ。靜かにさつしやい……カウ、貴様、斯うするがよい。おれがあの脇

差は預かつて置くほどに、たとへ小さんが縁附かうが、そこが兄の威光だ。取返して來て、あの脇差と引替へにするがいゝワ。

伴五　小さんさへ連れて參れば、直ぐに渡して遣はすワ。どうぢや／＼。

ト藤助、思ひ入れあつて

藤助　勘當のゆりたも天國のお庇、それを又取返されては、奥樣へどうも云ひ譯がございませぬ。さういふ事なら妹が、あなたの女房になるやうに、勸めて連れて參りませうほどに、その脇差はお前樣が

ト庵　氣遣ひさつしやるな。きつとおれが預かつた。

藤助　行きは行くが、臑切りどの、もしも爰へ、編笠をかむつた女が見えたら、待たせて置いて下され。したが、必ずこの事を話して下さりますな。

伴五　早く連れて參れ。遲いと破談ぢやぞ。

藤助　ハイ／＼、參ります／＼。

ト合ひ方で、藤助、木戸の内へ入る。三人、跡を見送り

三人　ヤ、大べら坊め。

卜庵　時に、この天國は、當時濱松の屋敷にて、家督の繼目に無くて叶はぬこの劒、持つてさへ行けば大金になる代物ぢやが、暇の出たこの卜庵。エヽコレ、誰れぞ

伴五　さういふ事なら、あの阿房めの來ぬうちに、どうか仕樣が

卜庵　あるとも〳〵、幸ひ〳〵、寸尺揃うた愚老の差料。

　　卜差してゐる脇差の中心を拔き、件の天國と入れかへ

これでよし〳〵。斯うして置けば、あの阿房が誠と思うて

眼六　恩ひらかけてやつた上、小さんを此方へ捲きあげ……したが、又あの金五郎めが、四文と出ねばよいが、何かにつけて邪魔になる奴だ。

　　卜思ひ入れ。辻打ちになり、藤助、嫌がる小さんの手を引き、出て來り

藤助　サア〳〵、尤もぢや〳〵。否でもあらうが、兄が一生の賴みぢやほどに、どうぞ伴五郎さんの所へ、行つてたも〳〵。

小さ　それぢやというて、金五郎さんといふ主のある身で、どうしてマア其やうな事が

藤助　それも劒を此方へ取戾すうちぢや。

伴五　なんだか氣まづい話しだ。したが、小さんさへ身が手へ渡せば、直ぐに劒は返して遣はす。

ト庵　それとも妹が不承知なら、愚老は此まゝ伴五郎どのへ

ト渡さうとするを、藤助とめて

藤助　アヽ、モシ〱、妹も得心して、喜んで居りまする。

小さ　イエ〱、兄さん、どうしてわたしが

藤助　コレ、妹、其方が得心してくれねば、望みの品も、わしが手に入らぬわいなう。

小さ　サア、それは得心してるれど、伴五郎さんの所へ行く事は、否でござんす。

伴五　小さんが否なら、身共も否ぢや。

藤助　それではどうも。

伴五　兄の威光で取持つか。

藤助　サア、わたしは取持ちますが、妹がどうも取持たせませぬ。

ト庵　エヽ、何を阿房め。コレ、伴五郎どの、こりや所詮直ぐには得心せまい。構はずと小さんを、連れて參らうではござらぬか。

小さ　どのやうに云はしやんしても、この事ばかりは

ト逃げるを

伴五　ドッコイ、われを逃がしては、身も蓋もあるものか。ソレ眼六。

眼六　心得ました。何にしろ、小さんはわしらが

　　　ト卜庵と眼六して小さんを引立てる。藤助、取りつくを、伴五郎、押へつける。

伴五　おれは跡から

眼六　早くござれ。

卜庵　ハテ、おれと一緒に來なせえよ。

　　　ト嫌がる小さんを兩人して伴ひ、下座へ入ると、直ぐに下座より、こけ安、馬、出て來り

たけ　モシ〳〵、小さんはいよ〳〵

馬　　得心しましたか。

伴五　小さんは無理に先へ屋敷へ

藤助　連れて行つて大事ない。どうぞ約束のその刀を

伴五　返してやらうか。

兩人　それぢやァ頭

伴五　ハテ、返すといふは、ソレ


二番目序幕


引返し

ト呑みこませる。

藤助　そんなら今、返して下さりませ。

伴五　オヽ、やるとも〳〵。われには

皆々　斯うしてやるワ。

ト有りあふ天秤棒を取つて藤助を打ち据ゑる。

伴五　この劒を餌にして、小さんを此方へ捲きあげて、否でも應でも抱いて寢て

こけ　其まゝ小さんはお前の女房。

馬　ちつとも早く屋敷へ歸つて

藤助　それではどうも

ト取りつくを、突きとばし

伴五　くど〳〵吐かすと、ぶツ放すぞ。

トきつとなる。

藤助　イヤ〳〵、刀はわしに

ト又かゝるを

兩人　エヽ、イケしつこい。

ト藤助を蹴倒し

伴五　馬鹿な野郎だ。來やれ。

ト鳴り物にて、伴五郎、兩人を連れ、下座へ入る。藤助、起上がり、思ひ入れあつて

藤助、妹を取られたその上に、劍まで捲きあげられ、どの顏さげて奥樣へ……氣の毒ぢやが、また金五郎どのを頼まねばなるまい……さうぢや。

ト矢張り右の鳴り物にて、藤助、逸散に木戸口へ入る。この道具廻る。

本舞臺、正面、床の間、違ひ棚。上の方、障子。二重舞臺に卜庵、土火鉢にて蚊をいぶしゐる。下は生垣、枝折り門、荒れたる屋敷。浪人組の隠れ家。流行り唄にて道具納まる。

ト伴五郎、上の方障子屋體に小さんを隠し置く心にて、障子を押へてゐる。桶直と貸物屋、蚊帳を引合つてゐる。こけ安、一升徳利を提げたる樽拾ひを引ッ捕へゐる。馬、金、眼六、立ちかゝりゐる體

桶直　コレ〳〵、貸物屋、今夜は客があるから、是非この蚊帳は借りて置く。置いて行け〳〵。

貸物　イエ〳〵、これは外へ貸すのでござります。御免なされませ〳〵。

こけ　コレサ、さう云はずと貸して行け……コレ、伊勢八の野郎、その酒を置いて行かぬと、うぬ、ぶつた切つてしまふぞ。

樽拾　アヽモシ、この間中の代も貰ひませぬから、親方が賣るなと申しまする。どうぞ御免なされませ御免なされませ。

金　ハテ、此奴聞分けの惡い。蚊帳も酒も、置いてうしやアがれ。

馬　ならぬと云ふと、腕も脛も叩ッ切つて、鹽辛にする。どうだ。

眼六　ビク／＼せずと、置いて行かつしやい／＼。

二人　どうぞ御免なされませ／＼。

ト　あちこち逃げあるき、よき隙に二人とも、蚊帳も酒も持つて逸散に向うへ入る。

卜庵　ソレ見たか。たうとう逃げられた。

四人　うぬら、逃がすものか。

ト　抜きかけて追ひかけんとする。伴五郎とめて

伴五　いづれも、彼奴等に構はずと、引上げて置いた小さんを、逃がさぬやうにして下さい。それゆゑ爰は一寸も離れられぬて。

桶直　ナニ氣遣ひがあるものか。滅多に逃がして堪るものか。

　　ト せりふのうち、門口の生垣より、小さん、ソロ〳〵と逃げ出で、花道の方へ行くを、眼六、見附けて

眼六　アレ〳〵、小さんぼうが、あそこへ行きます〳〵。

四人　ヤヽ、捕まへろ〳〵。

　　ト 追ひかけて小さんを捕へる。

伴五　ソレ見たか。油斷も隙もなるものではない。

　　ト 皆々捨ぜりふにて小さんを内へ連れ來る。

こけ　コレ〳〵、てまへ、聞分けのない者だぞ。

小さ　ナニ、聞分けのない事はござんせぬ。先刻にからも云ふ通り、どのやうに云ひなさんしても、わたしやこの屋敷にゐる事は否ぢやぞえ。なんでお前の自由になるものかいな。

伴五　コレ〳〵、小さん、其やうにつれなう云ふ事はない。身も侍ひの意地を立て、此方へ釣りよせた其方、どのやうな事云うても、この屋敷の敷居は、これ程も跨がせぬワ。その上、あの金五郎めが兎や角吐かせばとて、なんの彼奴等が怖うて、コレ、伴五郎は武士ぢやわい。侍ひぢやわいの

卜庵　左やう〳〵。いはゞ愚老も、親類内のこの卜庵、刀は無いがその代り、匙一本で金五郎めは、ピリ〳〵と仕舞ひをつけるには、家傳の藥法、强情云はずと、早う伴五郎どのゝ奥様になるがよい、惡く意地張ると、この祕法の藥で、あの金五郎めを……ナウ、いづれも。これで〳〵

ト懷より毒藥の包みを出して見せる。

眼六　左やう〳〵。小さんぼう、どうしたものだな。ぬしは大方、金五郎野郎と祝言したから、そこで義理立てをするのだらうが、よしねえ〳〵、ナニあの野郎が、何と思ふものか。

桶直　さうだ〳〵。その證據には、彼奴が内へ、今夜は伴五郎どのゝ祝言だと使ひをやつたも、氣を持たせて遊ぶ算段だソ。

こけ　知らせてやつたが、どうして〳〵、ナニ爰へうせるものか。

金　よしうせたとて、おいらが寄つて、それこそ筋骨を拔いてやるワ。

馬　力があると評判でも、怖い事は知つてゐるワ。彼奴も命に掛替へがあるものか。

伴五　無駄な力味を云はうより、今夜は身共と寢てくれろ。コレ、武士が頼むワ。手を突くワ。承知してくれ、承知してくれ。

皆々　コレ、頼みだ〳〵。

ト皆々、小さんを取巻き、逃がさぬ工面してゐる。

小さ　イエ〳〵、どのやうに云はんしても、なんのお前に……わたしやしみ眞實、否でござんす。アイ、否ぢやぞえ。伴五郎さん、これがお前へ、手切れの挨拶ぢやわいな。

伴五　そんなら、これほど口説いても

小さ　アイ、否ぢやぞえ。斯う云ひ出したら伴五郎さん、お前も腹が立ちやんせう。切り突かるゝは覺悟の前、命が惜しうて、此やうな事云はうかいなァ。伴五郎さん、どうなとさんせ。俎板の鯉ぢやわいな。

ト手ひどく云ふ。皆々思ひ入れあつて

馬　伴五郎どの、あゝいふ小さんが挨拶では

伴五　あれを聞いてはもう自棄ぢや。併し、折角釣りよせて、其まゝには歸されぬ。縛つてなりと思ひを遂げるワ。

桶直　そんならみんなで

こけ　廻り〳〵だ。

伴五　繩を出しやれ。

皆々　合點だ〳〵。
　　ト立ちかゝる。
小さ　アヽモシ、そんならどうでもアノわたしを
皆々　逃がしはせぬわえ。縛つてなりと。
　　ト小さんを捕へる。小さん、振り切り〳〵行かうとする。伴五郎、いろ〳〵追ひ廻す。ドサクサの仕組み。この時向うより八内、走り出て來り
八内　モシ〳〵、旦那々々、參ります〳〵。
　　ト息を切つて云ふ。
皆々　八内か。何が來る〳〵。
　　ト皆々、小さんを捕へる。
八内　モシ〳〵、只今の口上を、金五郎めに申したところ、承知しました、只今屋敷へ參らうと、支度して、アレ〳〵、參ります〳〵
　　ト慄へながら云ふ。皆々騷ぎ出し
馬　それは大變。先生、聞かしつたか〳〵。

小さ　エヽ、そんなら爰へ金五郎さんがござんすえ。エヽ、嬉しや。

ト いそ〳〵する。

桶直　其方は嬉しいか知らぬが、我れ〳〵どもは

三人　少し不氣味だ〳〵。

眼六　エヽ、お前方は口ほどにもない。なんの事だ。

卜庵　彼奴がうせて威張るが最期、それこそ愚老が

ト 件の毒の包みをちよつと見せる。

小さ　そんならわたしや、迎ひに行くぞえ。

伴五　イヤ、それには及ばぬ〳〵。

八内　アレ、來ます〳〵。金五郎が〳〵。

ト 皆々騷ぐ。卜庵これを聞いて、ツイと奥へ入る。矢張り唄になり、向うより金五郎、麻上下、下駄がけ、白木の臺の進物を風呂敷に包み、肩にかけ、菰ッかぶりの四斗樽を片手に提げ、後より藤助、早桶に棒を通し、これを擔ぎ、思ひ入れにて出て來り、花道にて

金五　コレ〳〵、兄貴、こなた、知つたやうに案内して下さい。

藤助　アヽ、又あの內へ行くのか。ハテサテ、弱る事ぢや。併し今度は、怖うないぞ〳〵。

金五　サア〳〵、先へござれ〳〵。

ト兩人、門口へ來り、藤助、內を窺ひ

藤助　賴みませう〳〵。

ト怖々戶を明ける。內の皆々

皆々　來たぞ。

ト恟りするはずみに、藤助も恟りして飛びのく。皆々見て

馬　イヤア、金五郎かと思つたら

小さ　兄さんぢやないかえ。

藤助　わしぢや〳〵。

皆々　それで落ちついた〳〵。

小さ　して、金五郎さんわえ。

伴五　どうしてよもや、あの者は

金五　イヽヤ來ました。

ト内へ入る。

皆々　そりやこそ、來たぞ〳〵。

ト飛びのいて、こそり寄る。

金五　これサ、靜かにさつしやりませ。お使ひゆゑに早速來ました。さて今晩は、おめでたうございます。

皆々　ハイ、おめでたうございります。

ト慄ひ〳〵辭儀をする。

小さ　コレ、金五郎さん、わたしを渡さば劍をやらうと、兄さんを騙して、その上さま〴〵

金五　コレ〳〵、小さん、何もかも聞いて來た。苦勞にするな。落ちついてゐろ〳〵……時に、ひつてん屋敷の殿樣、祝儀に來ました。御免なさい。やつとことつてはうんとこな。

ト酒樽を片手にて出す。

伴五　ヤイ、金五郎、見ればおのれは、身が祝言と申し遣はした、めでたい晩に、その早桶はいましい。なんで其やうな物を持つて參つたのぢや。

金五　ハテ、早桶ばかりぢやごんせぬヮ。見らるゝ通りこの劍菱、わざつと祝つて持込んだ。惡樽なら

ぬ正眞正銘。コレ

ト藤助、樽の菰をめくる。金五郎、鏡を打拔き

サヽ、鏡を拔いて進ぜるワ。生臭物は白木の臺附き。兄貴、そこへ出さつしやい。

藤助　アイ〳〵、これは肴ぢや。受けてもらひませう。

ト風呂敷のまゝ出す。伴五郎見て

伴五　イカサマ、これはいろ〳〵痛み入つた。眼六、その肴をこれへ。

眼六　畏まりました。これは見事な

ト風呂敷を取る。臺の上に件の小犬の死骸を載せあり。皆々、愕りして

桶直　イヤア、肴といふのは小犬が一疋。

皆々　こりやどうだ。

金五　さうサ。このお屋敷の進物は、赤犬ぐらゐが相應だ。併し、酒なら劍菱、お江戸の砂濾し交りなし、云はゞ男の一本生、惡酒くらふおさぶ達、めでたう受けて飲んで下さい。

皆々　イヤア。

ト伴五郎、思ひ入れあつて

伴五　コレ〳〵、いづれも見らるゝ通り、いろ〳〵の進物。イヤ、痛み入るワ……コレ、金五郎、われを爰へ呼びよせたは外でもない。あの小さんと、今宵身共が新枕、その取持ちをさせようと思うてサ。今夜は身共が祝言の、仲人を仕れ。

トこれにて金五郎、思ひ入れあつて

金五　そんなら小さんとお身様の、仲人をさせるのか。殊によつたらしても進ぜう。仲人役なら親分同然。丁度幸ひこの早桶。殊によると、わしか貴様か、二人に一人はあつち物。その時はお互ひに施主にならずばなるまいと、麻上下もその用心。小さんは勿論、此方で渡した天國添へ、形見分けだと思つて下さい。貰ひに來ました。貰つて行かうワ。

伴五　そんなら小さんを、アノわれが

皆々　貰ひに來たか。

金五　貰ふのぢやない、此方の玉だワ。

伴五　玉なら遣らう、その代り、われには振舞ふ物がある。それ振舞つたその上で

金五　くれさつしやるか。忝い……して又わしへの振舞ひは。

伴五　その振舞ひは……ナウ、いづれも」

ト顔見合せ、各自思ひ入れあつて

皆々　成る程承知……振舞ふ馳走は

ト敵役残らず刀を抜く。藤助、悄りして小さんを囲ふ。皆々白刃を一度に金五郎の目先へ突き出し

伴五　この太刀の魚

皆々　賞翫しろ。

金五　これはどなたも大きな御馳走。併し餘ッほど不漁と見え、斯う見たところが皆なまくら。抜いた手合ひはなまりぶし、いかに走りが流行るとて、節分も來ぬ赤鰯、柊豆ががらがらくためら、うぬらはおれを〆めるのか。

伴五　寄つてたかつて

皆々　〆めてやらうワ。

金五　それは御雑作。どうして〆める。

桶こ　おいらが斯うして

ト桶直、こけ安、兩方から切りつける。金五郎、兩手を出して腕にて受ける。馬、金

馬金　此方も助けに

ト切りつけ、肩先を切る。眼六は出刃庖丁、八内も拔いて

ト頭へ切りつける。

眼八　振舞ひ太刀魚。

伴五　後段は身共が、

ト拔いて切る。此うち小さん藤助、いろ〳〵心遣ひ。金五郎、不死身ゆゑ一向平氣にてゐる。皆々これを見て

待て〳〵。いくら切つてもこの如く、切つても切れぬ金五郎

皆々　こりやどうぢや。

金五　大だはけめら。知らねえか。この金五郎は生れつき、切つても切れぬ不死身だワ。

皆々　イヤア。そんならわれは

金五　ふじみ西行生れつき。たとへさもなく切られるとも、うぬらがなまくら赤鰯、おれが五體に立つものか。切るなら寄つて勝手に切れ。切り賃いらずの金五郎、五分でもこの身に立つものか。誰れだと思ふア丶、つがもねえ。

小さ　そんならお前は、生れついての不死身ゆゑ

藤助　それではわしも大きに安堵。

伴五　不死身と聞いては切らいでも

皆々　ぶち殺して、おいらが寄つて

ト切りつけるを金五郎、兩方の劍を取り、へし折る。これより各自切りつけるを、一々刃物を取つて片端より踏み折り、捨てる。皆々かゝるを、毆りのけ〳〵、伴五郎を引附け、縛りあげ

金五　サア、二本棒め、天國はどこにある。キリ〳〵出さぬと、摑み殺すぞ。

ト立ちかゝる。

伴五　アヽ、モシ〳〵、渡さう〳〵。コレ、眼六。先刻の天國、この親方へ、返してくれ〳〵。

眼六　モシ〳〵、それではお前。

藤助　イヤ〳〵、出しをらぬと、おのれはわしが

ト早桶の棒を持つて力む。

眼六　うぬ、この間拔め。

ト立ちかゝる、藤助逃げる。

金五　野郎め、出さぬと、うぬも。

ト立ちあがる。

眼六　アヽ、出しますく。その天國は、卽ちこれに。

ト　あたりより件の天國を出して金五郎に渡す。

金五　そんならこれが……コレ、兄貴、よく改めて取らつしやい。

ト　藤助、よくく見て、

藤助　アイく、これに違ひはござりませぬ。エヽ、嬉しやく……そんなら妹も、連れて行きませう。

金五　連れて行くのサ。小さん、支度をしろく。

小さ　アイく、これでわたしも落ちついたわいな。これから歸ると早々に、また改めてお前の女房。コレ、皆さん、喜んで下さんせ。

皆々　エヽ、おめでたうござりまする。

ト　このあたりより卜庵、奥よりソツと出て、酒樽の中へ件の毒藥を入れ、割り木にて搔き廻し、ソツと入る。

伴五　コレく、めでたい次手にコレ小さん……イヤ、小さんさん、我れらが繩を親方へ願うて、解い


市川団十郎
五渡亭国貞画

てくれぬか〳〵。

小さ　アレ、金五郎さん、あのやうに云うてぢやほどに、可哀さうに、解いてやらうかいな。

金五　エヽ、打ッちやつて置け〳〵。こんな奴は縛つておいて、今夜中ひどい蚊にくはせるが、まだしも腹癒せ。マア〳〵、てめえは先へ歸さうが、夜々中歩かせてもやられめえ。なんぼ貧乏屋敷でも、痩せ馬か、毀れ駕籠でもあらう。ヤイ、折助め、馬でも駕籠でも爰へ出せ。

八内　どうして〳〵、馬は疾に賣りました。駕籠もあつたが、底が抜けてしまひました。

金五　さう聞いては仕方がないが……ある〳〵。斯うしてやらう。小さんを負つてあよべ。コレ、二本棒たち、大儀ながら、この女を負つて送つて下さい。

馬金　ナニ、武士たる者に、女を負へと申すか。

金五　馬の代りを勤めさつしやい。

馬　言語道斷、罷りならぬぞ。

金五　否だと吐かせば、この伴五郎を手ひどく〆めて

ト立ちかゝる。伴五郎、思ひ入れあつて

伴五　アヽ、コレ〳〵、身共に致すと思うてナ、御苦勞ながら、小さんをよろしう送つて下され。

こけ　餘人は格別、其許のお頼みならば、是非がござらぬ。御懇意に致した身共ぢや。小さんを負ひませう。

伴五　それは近頃忝い。

藤助　コレ〳〵、妹ばかり負はずと、わしも負はれて行かうワ。

桶直　この間拔けめが。どうしてうぬまで

金五　負つてやらぬと、主をおれが

ト立ちかゝる。

伴五　アヽコレ、身共が爲ぢや。兄も一緒に。

眼六　誰れ彼れなしに、わたしが間拔けの兄御を。

藤助　ナニ間拔けとは。

眼六　イヤ、間に合さうといふ事サ。

金五　そんなら二人を、サア負へ。送つてくるまで後に殘つて、伴五郎は人質だぞ。さう心得て、早くしやれ〳〵。

眼六　サア〳〵お二人、御遠慮なしに〳〵。

ト脊中を出す。小さんはこけ安、藤助は眼六に負さり

皆々　小降りながらも、濡れては行かれぬ。

ト桶直、金、傘をさしかけ、馬、八内、箱提灯を持ち、先に立ち

桶直　然らばお内へ送りませう。

小さ　わたしは先へ行くほどに、お前は早う。

金五　兄貴を連れて。

藤助　金五郎さん、忝うござります。

ト天國を見せる。

皆々　送つて來ませう。

伴五　近頃御苦勞。

金五　今に行くぞよ。

ト唄、時の鐘になり、この人數、ワヤ〳〵云つて向うへ入る。跡に伴五郎縛られゐる。金五郎こなし

伴五　コレ〳〵、金五郎、二人を送つて歸るまで、身共を人質と申すが、朋輩が歸つたら、必ず繩を解いてくりやれよ。

金五　そりやアわしも男だ。番つた詞は反古にはせぬわえ。

ト此うち酒樽を見て

ほんに、おれが持つて來た酒があつた。今の騷ぎに素敵に草臥れた。御持參の酒を一杯きめようか。何か爰らに。

トあたりを尋ねる。

伴五　銚子か、杯か、それならばソレ、其方の水屋のあたりに

ト敎へるうち、金五郎、片口を見附け取出す。この時、卜庵出かゝり、窺ひゐる。

金五　ナニ〳〵、そんな物はいらねえ。この片口で樽から直ぐに。

ト酒をすくつてグツと飮む。

アヽ、いゝ心持ちだ。もう一杯氣を附けようか。

トまた汲んで飮む。卜庵、後で喜んで見てゐる。

伴五　コレ〳〵、てまへばかり其やうに飮んで、おれを他人にする事はない。仲直りに、なんと飮ませてはくれぬか。

金五　イカサマ、飮む口で見てゐるは辛からう。一つ献さうか。

伴五　飲ましてくりやれ〳〵。

金五　ドリヤ、飲ませてやらうか。

ト片口にすくつて伴五郎が口の端へ差し、既に飲まうとするを、卜庵駈けより、この手を捕へて

卜庵　アヽ、コレ〳〵、どうしてこの酒を、飲ませる事はならぬ〳〵。

ト留めるを見て

金五　コレ〳〵、この人は、どうやら見たやうな、……オヽ、それ〳〵、貴様は兩國に居た八卦屋どのだの。どうして爰に。

卜庵　イヤ、わしはこの屋敷の居候ふ。そこで爰に居たが……コレ、伴五郎どの、どうしてこの酒を、お前決して、飲むまいぞ〳〵。

伴五　コレ、卜庵、身共が望みの酒を見ては、堪へられぬに、なぜ、こなたは飲ませぬのだ。

卜庵　ハテ、この酒には、少つと曰くがあるから、滅多にお前には

金五　これサ〳〵、こなたは味な事を云ふが、この酒は、わしが持つて來た酒だよ。何も怪しい事はないに、なぜ留めるのだ。持つて來たわしが飲んだから、いゝぢやァねえか。

伴五　さうぢや〳〵。持つて來た金五郎が、飲んで献したこの酒、ナニ氣遣ひがあるものか。飲ませさ

つしやい〳〵。咽喉がグビ〳〵するわい。

卜庵 サヽ、さうではあらうが、この男が飲まうとまゝ、お前はどうも、飲んでは悪い〳〵。

ト いろ〳〵留めるを、二人に解らぬゆゑ

伴五 して又、身共が飲んで悪いといふ、その譯はどういふ次第だ。

金五 ハテ、飲んでも大事ねえぢやアねえか。

卜庵 サ、その譯はノ。エヽコレ、どうも聞分けの悪い。

ト いろ〳〵思ひ入れあつて

オヽ、斯うぢや〳〵。コレ、その悪いといふは、第一お前は大酒飲みぢや。

伴五 サア、それだから飲みたいに。

卜庵 それを飲ませぬは、不躾ながら、この屋敷にはまだ蚊帳がござらぬ。それにお前は、ソレ、ナ……
……手が叶ふまい。ところへ、大酒をして見さつしやい。そりやモウ、蚊がたかつてなるまい。
手が不自由では追ふ事はならず、遂には蚊に喰ひ殺されるぢや。それを見てはゐられぬ……こなたも又、喰ひ殺されては猶々濟むまい。それを察して愚老が留めるが、よもや無理ではあるまいがな。

トいろ〳〵云つて留める。

伴五　成る程、さう聞いては尤もでもある。併し、好きな酒を側で飲まれては、イヤこれは切ない。

金五　イカサマ、このお人の云ふ通りだ。そんなら、わしばかり飲まうか……イヤ、お前へ献さうか。

ト卜庵へ渡す。

卜庵　エヽ、埒もない。愚老は下戸ぢや。大の下戸ぢや。

金五　そんならおればかり、ドリヤ、辭儀なしに。

ト又すくつて飲む。

卜庵　ハテ、氣味のよい。こなた一人で重ねて飲みやれ。

金五　相手のなしは、をかしなものぢや。

ト又すくつて飲む。伴五郎、切なき思ひ入れにて

伴五　エヽ、飲む度毎に身共の咽喉が、グビ〳〵致すワ。これは術ない〳〵。

トいろ〳〵思ひ入れ。此うち金五郎、段々苦しみ出し、こなしあつて

金五　アヽ、痛い〳〵。こりやアどうだ〳〵。何だか素敵に胸が痛くなつた。アイタ〳〵〳〵。アヽ、苦しい〳〵。

トのたつて苦しむ。卜庵、思ひ入れ。

伴五　コレ〳〵、どうした〳〵。癪でも起つたのか。コレ、金五郎々々々。幸ひ爰に醫者どのも居られる。見てもらふがよい。卜庵老、あの者は急病でござるかの。

卜庵　これはしたり、捨てゝ置かんせ。どうでこの男は、今の間に死にまするワ。

伴五　エヽ、それは何で〳〵。

金五　なんでおれが死ぬのだ〳〵。

トのたうつて苦しむ。

卜庵　コリヤ、騒ぐな〳〵。これぢやによつて伴五どの、こなたに酒を飲ませぬも、この苦しみをさせまい爲。

伴五　そんならもしや、この酒に。

卜庵　愚老が家の祕方にて、蝦夷國シヤモウの大毒藥。

伴五　ヤヽ。

金五　そんならそれを。

ト立たうとして、よろ〳〵と倒れる。卜庵見て

ト庵　もう氣遣ひない。

ト　伴五郎が繩を解く。

伴五　誠に身共も命拾ひ。それに引替へ金五郎。

ト庵　先刻のモヤ〱、其うちに、樽の中へ愚老が仕込んだ。さうとは知らず喰つたは、天命盡きたる金五郎、思へば〱大だはけ。

ト　臑にて蹴飛ばす。

伴五　して、その毒に中ると其まゝ。

ト庵　一時かゝらぬ其うちに、命は終れどそれも又、二十四時の經たざるうち、天水咽喉を通るや否や息吹返す事あれば、只恐るべきは降りくる天水。忌むべし〱。

ト　金五郎これを聞いて

金五　道理で外へは飲ませもせず、おればかりに飲ませたは、殺すつもりか、さうとは知らず、うぬらが仕事にかゝつたと思へば、エヽ、この老ぼれめ。

ト　立上がり〱、臑腰立たぬ苦しみにて、あたりの莨盆やり火鉢を、摑み毀し〱、跪いて苦しむ兩人左右へ別れて、嘲笑ひ〱これを見て

卜庵　ア、、跪くな〳〵。どうでおのれは今に往生。力持ちでも不死身でも、醫者の祕方には叶ふまい。併し死んだらこの早桶、願ひの通り投込みに、寺も近所の回向院。

伴五　弔つてやるその代り、又ぞろ小さんを捲きあげて、まだその上に先刻の天國、持つてうせたはありや似せ物、誠の劍は即ちこれに。

ト吹替へたる一腰を見せる。

金五　エ、、さうとは知らず、毒を飲んだか。せめて小さんにこの事を

ト立上がり〳〵、よろめくを兩人、兩方より、あちこちと突きやり〳〵、突き廻され、金五郎、相好變つて、鬢を我が手に搔きむしり、口惜しき思ひ入れにて、段々と弱り果て、立ち身にて苦しむ。兩人、ツツと寄つて、よく〳〵窺ひ見て

兩人　今が往生。

ト兩方より金五郎を突く。よろ〳〵としてバツタリ倒れる。兩人、窺ひ見て

ハ、、、、、。

ト笑ふをキザミにて、よろしくひやうし直ぐに葬禮の鳴り物にてツナギ。引返し。

幕

第二番目　序幕返し

回向院の場

役名――力持ち、金五郎 實ハ田邊文藏。輕業師、小さん。所化、通門。木戸番、吉。同、鐵。同、高八。犬くらひ。熊男熊右衞門。猫娘お雉。石井下男、作助。

本舞臺、上の方に苔蒸したる大石塔、うしろ柾木の卒塔婆垣、所々に石塔、湯灌場。その中に土を盛りあげ、その上へ寶石といふ大石を載せ、新佛の體。水向け茶碗、樒、大分立て、その際に柳の大樹、この枝に白無垢形の女、首かゝりせしを菰掛けたる體。一體この道具黒幕にて隱し、回向院幕所の體。百萬遍の鐘にて幕明く。

ト爰に通門、所化にて、墨の衣、眞中に蓆を敷き、鉦を打つてゐる。吉、高八、鐵、犬くらひ、皆々百萬遍を繰つてゐる體。

四人 南無阿彌陀ン佛々々々々々々。

ト思ひ入れあつて

通門 願以此功德平等一切道發菩提心往生安樂。

四人　南無阿彌陀佛々々々々々々々々。

通門　これはどなたも蚊の多いに、御苦勞でござりまする。

鐵　イヤモウ、わしらは大事の輕業の太夫、小さんさんを失くしては、誠に木から落ちた猿でござる
犬く、それ〳〵、軒並びの山男も、氣の毒と思うて念佛に來ましたが、この間あの太夫は、曲持ちの金五郎と、祝言したではござらぬか。

吉　サア、その祝言した亭主の金五郎さんが、掛塚さまの屋敷で、頓死をしたゆゑ、この回向院へ葬むつたところ、その男の事を思つて、一緒に死ぬといつたあの子が

高八　駈け出して來て、金五郎さんを葬むつた所へ來て、此やうに首かゝり、誠に貞女な小さんさん、その死骸の番をしながら、無駄のないやうに、百萬遍を申すのも

鐵　金五郎さんと小さんさんの、菩提の爲といふものサ……時にお所化樣、お賴み申した非人は、夜番に來てくれましたかね。

通門　アヽ、來ますとも〳〵。しかもこの間、墓所の小屋へ參つた、佛作助といふ非人の親仁。閻魔の眞似をして、門附けに出ましたが、その者が來まする。云はゞ愚僧なぞも、美しいあの小さんが死骸、有やうは番をしたうござるが、まさか出家だけ、それも成りませぬて、

四人　ハテ、坊主が死人の番は、當り前でござります。

通門　さうでござらうか。愚僧もあの子には、少し味な心もござつたゆゑ、そこで猶々無常が起ります
て……イヤ、起るといへば、輕業の熊右衛門が、猫娘のお雉を連れて、逃げたと聞きましたが、
左樣か〳〵。

鐵　成る程、熊と猫とが、駈落ちをしました。

四人　此奴も又、心中と見えますて。

トわや〳〵云つてゐる。葬禮の鳴り物になり、向うより作助、乞食の閻魔の拵らへ、萬字の附きし赤合羽を襤褸の上へ着て、唐冠をかむり、大擂粉木の先へ五合德利を吊し、少し醉うたる體にて出て來り、皆々を見て

作助　アヽ、百萬遍はもうおしまひかえ。これからは又閻魔が代つて、佛の番を致しませう。お前さん方は、ちつと御寢なされませ。

通門　オヽ作助か。今夜は大儀ぢやの。

作助　イエモウ、大儀とも存じませぬ。一體、首かゝりの小さんが兄は、藤助というて、わしが屋敷に奉公した時分の朋輩ゆゑ、氣の毒に存じまして、お賴みがなうても、通夜いたしてやります心で

コレ〳〵、此やうに酒も肴も買うて參りました。

ト五合德利、竹の皮包みを出して見せる。

吉　それはてまへ、奇特な事だ。併し、あの美しい小さんと、力持ちの金五郎さんと、云はゞ心中も同然。

高八　その心中やら解らぬが、熊男と猫娘の駈落ちも

鐵　近所の附合ひ、尋ねずばなるまい。

犬く　左樣〳〵、爰から直ぐに尋ねに行きませう……モシ、お所化樣、この鉦を借りて行きまするぞや。迷ひ子を尋ねまする。

通門　持つてござれ〳〵。愚僧も本堂の勤めをしまして、また來ませう。コレ、閻魔どの、其うち酒でも飮んで番をしやれ。爰に夜廻りの拍子木を置くぞ。

ト作助に渡す。

作助　アイ、お案じなされますな。

吉　サア、降らぬうち、尋ねてやりませう。

三人　心得ました〳〵……迷ひ子の熊男やァい。猫娘やァい。

ト鐵、鉦を叩き、この人數は呼びながら向うへ、通門は下座へ入る。作助殘つて

さて、これからはおれ一人だな。心置きなく酒にしよう。

ト思ひ入れあり、空を見て

アヽ、また降つて來たな。これでは道がぬかつて爰には居られぬ。どこぞ片附いた所へ。

ト大石塔を見附け

この石は無緣さうな。棹石をこかして爰へ上がらう。

ト立ちかゝつて棹石を突きこかし、石臺の上へ上がり、思ひ入れあつて前へ德利と酒を並べ

よし／＼。誠にこれでは正物の閻魔のやうだ。ハヽヽヽ、ドリヤ、酒に致さう。

ト水向け茶碗にて酒を飲み、いろ／＼して居眠る思ひ入れ。時鳥、蛙の聲して、しめやかなる唄になり、捨て鐘を打込み、向うバタ／＼にて、向うより熊男と猫娘、相合傘にて出て來り、花道にて思ひ入れある。同じく下座より通門、引返して出て來り、單衣を脫き身拵らへして、小さんの死骸を引下ろす。此うち作助居眠る。熊男思ひ入れあつて

熊男　アヽ、思へば緣は味なもの。云はゞ女房のあるわしが、猫娘の其方をはらませ、二人駈落ちするものゝ、連れては築地へ歸られず、死ぬると腹を極めたれば

猫娘　わたしも共に心中と、浮名の立つた嬉しさに、桂川へと思へども、もし親方に捕へられ、折檻にあふその度に、鼻こすられるは當り前。猫と異名のわたしが死ねば、世の人のよい見世物と、評判にあふのがこの身の因果もの。こりやマアどうせう、ニヤンとせうぞいニヤア。

熊男　ハテ、今さら愚癡なその繰り言。最期の場所は回向院、爰で二人が

ト手を取りかはし、思ひ入れあつて

來やいなう。

ト捨て鐘になり、舞臺下の方へ窺ひゐる。此うち通門、こなしあつて

通門　アヽ、美しい小さんぼう、死骸になりともう一目。

ト探り〳〵窺ひよつて二人を見附け

イヤア、こりやこなた衆は夜夜中

ト怪しむ。

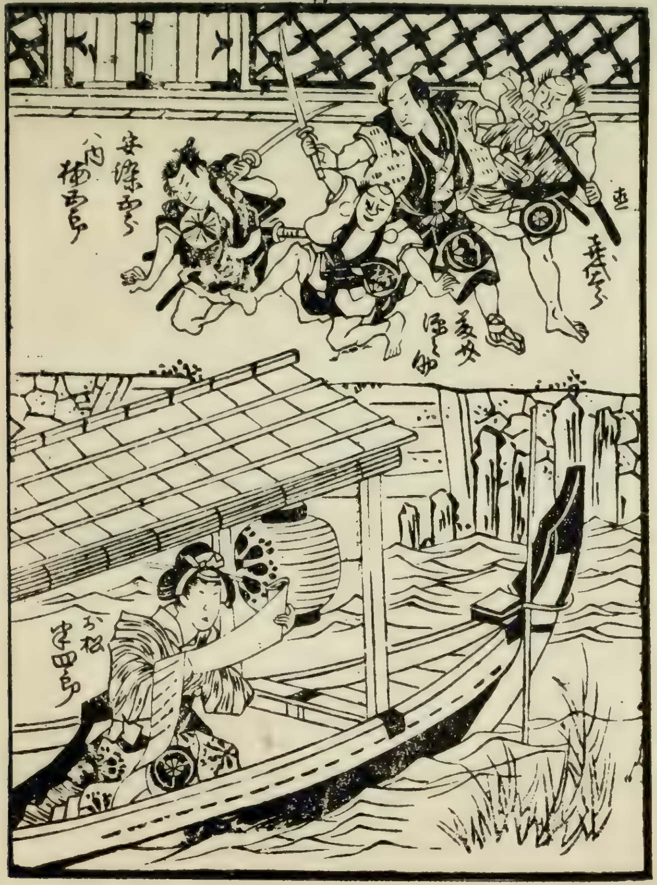
熊男　アヽコレ、怪しいものではござらぬぞ。この猫をはらませて、その云ひ譯に二人が駈落ち。

猫娘　見遁がして下さんせいなァ。

ト云ふ顏を、よく〳〵見て

中幕





通門　イヤア、わりやア愚僧がねんごろしてゐる、猫娘のおきじぢやな。おのれ、男を拵らへて

猫娘　通門さんか、面目ない。

　　ト逃げかゝるを通門捕へ

通門　おのれ間男、捕まへて

　　ト二人を追ひかけ歩く。此うち猫娘は逃げるとて、思はず盛りあげし新佛の土の中へ足を踏み込む。
　　下よりその足を捕へられし體にて

猫娘　アヽモシ、人か佛か幽靈か、わたしが足を、土の下から

熊男　それは堪らぬ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

　　ト熊男と通門は向うへ逃げて入る。猫娘も、やう〳〵足を引拔き

猫娘　これいニヤア〳〵。

　　ト向うへ追うて入る。この立廻りのうち、高き土も散亂して、積み重ねありし石は、あたりへ倒れる事。この時、雨しきりに降り來る。蛙の聲、時の鐘、一つ鉦の音して、散亂したる土の中より、蓋の取れたる早桶見えたるが、その中より手を伸ばし、金五郎、經帷子の形にて、そろ〳〵と這ひ出る。途端に、小さんの死骸は吹替へにて、よきあたりより蓆を刎ねのけ、髪をさばき、白の形にて、よろ

よろと立つ。兩人、天水咽喉へ通り、蘇生したる思ひ入れにて、合點のゆかぬこなしあつて

金五　こいつはどうだ。慥かにおれは毒を服まされ、死んだとまでは覺えたが

小さ　金五郎さんに別れた悲しさ、共に死なんと覺悟して、墓所へ慥かに首かゝりと、覺えはあれど

トあたりを見る。

金五　大方爰はあの世とやらか。ならう事なら地獄は否だ。

小さ　西は西方極樂と、聞けどもどこがどこぢややら

金五　極樂道は何方へ行くな。

トあちこち見廻して、小さんを見て

ヤヽ、てめえは小さんか。

小さ　金五郎さん、逢ひたかつた、逢ひたかつたわいなア。

ト縋つて思ひ入れ。金五郎、こなしあつて

金五　てめえが爰へ來たからは……アヽ、おぬしも死んだか。

小さ　アイ、お前が屋敷で俄に死んで、葬禮と聞く悲しさに、墓所で共に死なんと首かゝり。

金五　死んでくれたか。心中者め。併し、不思議な緣かして、未來で逢つたな。

小さ　モウ〳〵、わたしやお前の側を

金五　此方も放さぬ。今からどこぞへ店を借りよう。

小さ　サ、早う一緒に。

ト手を引いて行かうとする。

金五　アヽコレ、滅多に行かれぬ。どちらが地獄か極樂か、道が知れねえ。併し、貧乏店を借りたといつて、まづ第一に元手がない。何をしたなら夫婦稼ぎが

小さ　コレ、案じなさんな。お前は曲持ち、わたしは輕業、見世物に出て共稼ぎ。

金五　イカサマ、そこらだ。それにつけてもこの中死んだ、あの鬘屋の友九郎、どこに居るやら、内を尋ねて

小さ　アヽ、その人を尋ねて世話に

金五　心當りはあの男だ。相談相手に

ト思ひ入れあつて

イヤ〳〵、滅多に店は持たぬわえ。

小さ　そりやアなぜにえ。

金五　ハテ、娑婆にゐる時でさへ、あの伴五郎めが所へ、てめえ肩を入れたワ。その氣前だもの、國が違つて、どんな事が出來やうか、そいつが案じものだ。

小さ　エヽ、お前もよい事をお云ひだの。いつわたしが伴五郎さんに、どうしたえ。あの始末は、お前解つてゐるぢやァないかな。

金五　サ、そのこみやりは解つてゐるが、爰は日本ぢやァねえ、地獄か極樂だから、どんな又べら坊が引ッかゝるまいものでもねえからよ。

小さ　それがお前、どうしたえ〳〵。

金五　どうでもいゝわえ。

ト爰にて酒の匂ひを嗅ぎつけたる思ひ入れにて

アヽ、酒の匂ひがするが、酒屋があるか。

小さ　聞いてお見。

金五　モシ、爰らに呑む酒屋がありやすかえ。

トこの聲に作助、悔りして目を覺まし

作助　默れ。誰れだ。

金五　ハイ、、、。

ト悯りして

さういふお前は、この當地の

作助　おれは閻魔だ。番に來た。ナニ、墓所に酒屋が

金五　エヽ、閻魔様かえ。

作助　閻魔だ。

金五　左様なら、お願ひがござります。

作助　何を願ふのだ。

金五　私しどもは、亡者の夫婦者でござりますが、この女の心意氣が、嘘か誠か、どうぞ吟味して下さりませ。

小さ　これな、わたしが氣前を、お前、疑ふ事はないわいな。

金五　それだといつて、てめえの心意氣が、べら坊に解らねえから

ト兩人爭ふ。上より作助、いろ〳〵思ひ入れして

作助　コレ、亡者々々。

金五　ハイ〳〵〳〵。

ト手を突く。

作助　そんなら何と云ふ。あの女亡者の心意氣を、閻魔に考へてくれと賴むのか。ハテ、それは云はずと語らずと、二人ながら夫婦になるがよい。それが何よりの話しだ。

金五　モシ〳〵、左樣ぢやァござりませうが、この當地に知つた者は無し、第一女の仲人になり手もないから、間違ひの出來たあの世まで、人をやつたとて、滅多に便りも

作助　アヽコレ、その仲人には閻魔がならう。

金五　エヽアノ、わたしらが仲人に

小さ　閻魔さんがおなりかえ。

作助　サヽ、閻魔が仲人になる證據には。爰で夫婦亡者を寢かせるワ。コレ〳〵

ト上より下りて蓆を敷き、德利を枕に見立て、冠を取つて並べ、赤合羽を脫いで夜着に見立て、此うち捨ぜりふよろしく

サヽ、爰へ來て寢るがよい。時にお勤めを下げませう。

金五　ナニ、お勤めだえ。六文しかないよ。

ト六道錢を出す。

小さ　コレ、金五郎さん、折角閻魔さんが世話をなさるに、マア爰へお出でよ。

金五　さうもしようか。

ト兩人こなし。

作助　枕許へ蚊いぶしを仕掛けて

ト蚊やり火鉢をよき所へ差置く。

小さ　成る程、こりやァ素敵な蚊だね。

金五　ちつと燻して

作助　閻魔御承知。

ト澁團扇にて煽ぐ。この風にて蚊やりパツと燃え立ち、この火影にて、あたり明るくなる思ひ入れにて、黒幕落す。湯灌場、評判の石塔、建て札までも見える。兩人、あたりを見て

小さ　どうやら爰は、常々覺えの

金五　向うは慥かに兩國の

作助　爰は卽ち回向院、向うに見えるが松坂町、長屋の屋根まで鮮やかに、お目にとまれば、八百や、

八百や。

小さ　そんなら死んだわたしらは

金五　假のあの世へ蘇生して

小さ　また苦しみを、金五郎さん

金五　夢ではねえか、小さんぼう

作助　ゆるりと娑婆で

兩人　ヤ。

ト兩人こなしあつて抱く。

作助　おしげりなされい。

ト二人に合羽を着せるを木の頭。

火の用心。

ト作助自身に拍子木のキザミを打つ。時の鐘の送りにて、よろしく、ひやうし

幕

第二番目　中幕　　洲崎返り討の場

役名――水右衛門妻、藤川。下部、九介。藤川卜庵。赤堀源吾 實ハ 藤川水右衛門。

本舞臺、うしろ黒幕、高足の土手、柳の大樹。土手の上に蒲鉾の非人小屋。舞臺前、浪板。すべて洲崎入船のあたり、佃騒ぎにて幕明く。

ト東西より仕出し大勢、釣道具を持つて出て來り

仕出　今日は中川の方へ行かうか。

同　わしらは四十町によい釣り場がござる。砂村へかゝりませう。

同　おいらは昨日突きに行きましたが、素敵な漁サ。

ト此セリフ云うて、東西へ別れて入る。矢張り佃節。向うより九介、切繼ぎ、手拭を頭へ卷き、非人らしき拵らへにて、風呂敷包みを抱へ、逸散に駈けて來り、あちこちと見廻し、土間へ下りて隱れる。

矢張り佃にて、向うより箱廻し一人

箱廻　泥坊々々。

ト駈けて出て來り

あの野郎め、どこへうしやァがつた。泥坊め。秀吉さんの䆾𥜬を取りやァがつたな。泥坊々々。

トうろ〳〵して、下座へ駈けて入る。矢張り佃にて、件の九介、土間よりソロ〳〵と上がり來り、跡先を窺ひ見て、風呂敷を探り見て

九介　先づ餘ッほどの仕事をした。嗅アにこれを

ト思ひ入れ。佃の鳴り物にて、小屋の際へ來り

コレ、嗅アや〳〵、寢てゐるのか。歸つたよ〳〵。

ト小屋に向ひ聲をかける。合ひ方。入相の鐘、菰垂れをあげ、內に藤川、洗ひ髮、女非人の拵へにて出で來り

藤川　九介どの、戻つてか。今日は天氣もよいゆゑに、よごれた髮を此やうに洗ひあげ、よい心持ちになつたせゐか、ツィとろ〳〵と晝寢して、こなさんの戻つた事も

九介　アヽ、洗ひ髮か。イヤ又それでは格別美しくなつたワ。知る通り、いつぞや駿河の中島で、貴様の亭主の水右衞門どの、難病うけて藥の代金、それに困ると見たゆゑに、おれが盜んで持つてた、劍にかへて女房の、貴樣を此方へ貰つて來たが、何を云つても元手はなし、この洲崎の道端

の、蒲鉾小屋の夫婦暮らし。おれもおぬしもこの態で、居るも外聞悪いから、今日ウソ／＼歩いて、コレ／＼、ぬしに着せようと思つて

ト件の風呂敷包みの中より藍さびの女帷子、黒繻子の帶を出して

嘸アや、これを着替へるがよい。

ト見せる。藤川、思ひ入れあつて

藤川　コレ、九介どの、この品は、こりやこなさん、どこから貰つて。

九介　これか。こりやァなにサ、いま洲崎の武藏屋から、仲町の廻しが、藝者の着替へを持つて歸るのを、毆り倒して盜つて來たが、氣遣ひな代物ではない。マア、これを着さつし。あんまり形が見つともない。

ト云はれ、藤川、思ひ入れあつて

藤川　すりや、こなたは、これを盜んで來てかや。

九介　マア、そんなものサ。

藤川　コレ九介……イヤ、九介どの、いま落ちぶれたこの藤川、いかに賤しい身になつても、以前は石井右内の娘、殊には夫は水右衛門、病を治せん良藥の、價の代に現在の、家來の其方に助けられ

その代りには此やうに、わが身が方に人質同然。非人とまでも成り下がり、見苦しい姿になつても、わしや其やうな、道に背いた事を致すやうな心は持たぬ。もう〳〵、其やうな品、穢らはしい、穢らはしい。

ト身を縮めて思ひ入れ。九介、これを見て

九介　アヽ、盗み物は嫌ひか。いゝワ、そんなら勝手にするがよい。おれが思ふ程にもない。藤川どのおれはの、貴様の亭主が大病の、薬の金の代物を貸してやつたよ。その代りには又こなさんも、連れて來たは、こりやア當り前だ。その恩のあるわしに、今まで一度でも寢てくれた事はないよコレ、魚心あれば水心といふ事を、こなさんは知らねえか。イケ邪慳な女ぢやアねえか。

藤川　サ、さう云やれば、尤もなやうなれど、水右衞門といふ男のある身。殊に家來の其方に、どうして肌を觸れられやうぞ。この心ゆゑ、この上ともに

トこれにて九介、思ひ入れあつて

九介　そんならもういゝ。跡のよまひ言は聞くに及ばぬ。恩を知らない藤川どの、これからは又おれも男だ。

ト片肌脱ぎ、小屋より出刃を取つて來り

サア、もう自棄だ。こなたを殺して、おれも死んでしまふワ。家來と主の心中だ。さう思つて、サア、死んで下さい〳〵。

ト立ちかゝる。藤川あわて留めて

藤川　アヽコレ、滅相な。わしも疾から死なうとまでは思うても、何を云ふも父さん右内さまを、討つて立退く敵の家名、實名も知れたる上にて、首尾よく本望とげるまでは、我が身ながらも命が惜しい。死にともない。コレ、九介、爰の道理を聞分けて、どうぞそれまでわしが命を、わしに預けてくりやいなう。

ト云ふうち九介、あざ笑ふ思ひ入れあつて

九介　イカサマ、親を討たれて武士の娘が、敵討がしたいとは、尤もな事だ。コレ、右内どのばかりぢやアあるまい、水右衛門どのゝ母親の敵も、姑の事なら、こなたが討たずばなるまいぞえ。

ト云はれ、藤川、ギックリ胸にこたへし思ひ入れにて

藤川　成る程、姑のその敵も、一緒に討たねば、夫へ夫婦の義理が立たぬゆゑ、何事も敵討つまで、どうぞわしが命を暫く

ト思ひ入れ。

九介　助けてくれろか。そりやモウ、惚れてゐるおれだもの、ナニ貴様を殺したいものかな。助けておいてくれろなら、それ程な事はないが、その代りには、抱かれて寢るかえ。

藤川　サア、それは。

九介　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

トこれにて藤川、こなしあつて

藤川　いかにも心に……隨はうわいの。

ト涙ぐみて思ひ入れ。

九介　さうか〳〵。そんなら今でも

トしなだれ寄る。

藤川　アヽコレ、どうして爰で何事も……暮れたら其方の心のまゝに

九介　エヽ、有り難い。初めてさういふ臺詞を聞いた。したが、今のこの身は野伏りの、穢ない者の身知らずといふはおれだ。こなたが自由になるといふなら、おれも又男を磨いて、洗湯へ行つて髪月代……イヤ〳〵、此やうな形では、洗湯で斷わるであらう……アヽ、よし〳〵、猪の堀か本

松に、船湯が來てゐやう。それへ入つて來よう。併し、歸るうちには暮れるであらう。コレ、小屋の内に提灯があつた。爰へ持つて來さつし。

藤川　アヽ、これかいの。

ト破れし印のある小田原提灯を出して渡す。

九介　よし〳〵、成るたけ早く歸るよ。嘘をつくまいよ。屹度だよ。こいつはマア、今日はどういふ吉日だか。コレ藤川……アイヤ、今では九介が嚊アのお六、間違へまいぞよ。ドリヤ、船湯へ入りに……南無三、出かけないうちに、暮れて來たわえ。

ト暮れ六ツの鐘、流行り唄になり、小田原を懐へ入れ、イソ〳〵として向うへ入る。藤川跡見送り、「ワツ」と泣き出す。合ひ方變つて

藤川　エヽ、淺ましい今の身の上、下部にまでもあのやうに、女房呼はりされるといひ、なんであのやうな家來めと、仇な枕が交されう。これといふのも父さんの、敵が知れて討ちたいばかり。頼みに思ふ水右衛門どの、どこにどうしてござんすかと、明暮れ尋ぬる其うちに、隠れ家詳しう記せし手紙、伊勢參りの二人連れ、小屋を尋ねて今朝早う、届いた狀を九介には、見せられぬ文言故

トあたりを窺ひ、下の方の松の根を出刃にて掘り穿ち、狀を出して見て

この文言の樣子では、夫の住家は小名木の川筋、尋ね來らば以前に變らず、夫婦にならんが、さりながら、附添ふ九介が聞出しなば、この身が仕官の願ひの妨げ。折を窺ひ、九介を手にかけ、その上にては女夫の結びと、こま〴〵記せしこの文言、さすれば今宵は遁されぬ、九介が歸らば騙し寄つて

ト持つたる出刃にて、殺さうといふ思ひ入れして、件の狀を蚊遣りの火にくべる。

火中なしたで夫の在所も

ト思ひ入れあつて、小屋の際より手桶を持ち來り、よき所より手頃なる石を見附け、轉がし來り、出刃へ水をそゝぎ、石にて磨ぐ。此うち凄き合ひ方。蛙の聲。この時捨て鐘にて、町人の仕出し二人出てくる。下座より寒天屋、荷を擔いで出る。

町人　さて暗い晩だ。また降りさうになつた。

間　コレ〳〵、爰へ蕎麥屋が來た。なぜ行燈をつけないのだ。

寒天　ナニ、わしは蕎麥屋ではござりやせぬ。三間堂の葛入り寒天屋サ。

町人　さうか。おいらは蕎麥屋だと思つた……ソリヤ、降つて來たワ。

ト兩方へ別れて入る。此うち藤川、出刃を磨いでゐたりしが、雨降り來るゆゑ、思ひ入れあつて

藤川　アヽ、折惡いこの五月雨、兎やかう云ふうち、九介が戻つてくるは治定……窺ひ寄つて


市川團十郎
岩井粂三郎
五渡亭国貞画
五渡亭国貞画

ト思ひ入れあつて、出刃を隱し、小屋の內へ入り、薦垂れを下ろす。時の鐘、蛙の聲。時鳥の聲。向うより九介、件の小田原提灯を下げ、頰かむりにて出で來り、花道にて

九介　ハテ、よく降る雨だぞ。併し、いゝ所で卜庵親仁に逢つて、呑み代だけはいたぶり出したが、あの人の口吻では、水右衛門どのも江戸へ來てゐる樣子。さう聞いては爰の住居もなるまい。明日は又、どこのいづくへ寢る事やら。氣さくな世界だ。

ト思ひ入れあつて小屋の方へ來り

コレ〳〵、藤川どの、さぞ待ちかねたであらうの。先刻小名木澤で、卜庵さんに逢つて、ぬしの小遣ひだけは取つて來た。それからおれも歸り道。二合半をきめて來たが、今夜は新枕の御祝儀に、わざと五合買はう。待つて居さつし。ドレ、入船まで行つて來ようか。

ト提灯を下げ、行かうとして

イヤ〳〵、乞食が提灯を持つて酒を買ひに行つたら、向うで難儀であらう。置いて行くべい〳〵

ト下の方の松の枝に吊し

直に行つて來るよ〳〵。

ト云ひながら下座へ入る。此うち捨て鐘。向うより卜庵、頰かむりにて、天國の劍を腰に差し、外に

ト庵 一腰を差し、尻をからげ、下駄番傘にて出て來り、舞臺の提灯を見附け

あの提灯は目印しのある。九介めが下げてゐた破れ小田原。彼奴に逢つて思ひがけなう、なけなしの金をねだられ、これといふのも水右衛門が、この邊に來てゐる事を、口外させぬ口ふさげ。彼奴を生けて置く時は、水右衛門が出世の妨げ、殺してしまふ算段で、見え隱れにつけて來たが提灯ばかり掛けて置き、九介が見えぬは、大方小屋へどぶさつたか。さすれば近寄り、グッサリと

ト思ひ入れあり。

天國ならぬこの一腰、差してはゐれどこの刃物、錆びてはゐぬか、見た上で

ト窺ひ〱、提灯をソッと取つて、また花道へ歸り來り、刃物を拔き、明りにて、よく〱見て

ア丶、錆が附いたな。

トあたりを尋ね、小石を拾ひ、提灯を口に咬へ、小石にて劍の錆を落す思ひ入れ。此うち小屋の薦垂れをあげ、藤川、蚊を燻しゐたりしが、花道の提灯の印を見て、九助と心得、思ひ入れあつて

藤川 あの提灯の印しは違はぬ、正しく九介が

ト思ひ入れ。蚊やり火鉢へ有りあふ物を打ちかけ、火をしめし、出刃を携へ、小屋を出て外に窺ふ。

卜庵、身拵へして舞臺へ來り、小屋へ目を附け、提灯を吹き消す。これにて時の鐘、忍び三重になり探り〳〵舞臺へ來り、傘と下駄をよき所へ置き、探り〳〵小屋の方へ寄る。藤川は九介と心得、息を詰め、出刃を持つて窺ふ。卜庵、こなしあつて薦垂れを探り、頷いて上より白刃を突込む。この時、藤川は九介と心得、後より卜庵を、したゝかに切り下げる。卜庵、ウンと倒れて、刃物を振り廻す。この時下座より九介、何心なく酒を買ひ來り、卜庵がうめく聲を聞きつけ、合點ゆかずと窺ふ。卜庵は呻きながらあたりを切り立てる。藤川も滅多切りに切る。卜庵、深手を負うて、刃物も打落され、のたうつて苦しみ、藤川を捕へてキツと引附け、思ひ入れあつて

卜庵 ヤヽ、おのれは九介と思ひの外、女の手觸り。

藤川 さういふ聲は、九介にあらぬ

卜この時、九介探りよる。爰にて蚊やり、パツと燃え立ち、三人顏見合せ

九介 ヤヽ、わりやア嬶アか。

藤川 其方は

卜庵 女は嫁の藤川か。

九介 さういふ聲は卜庵どの。

藤川　ヤヽ、夫の實の親とも知らず

卜庵　九介と嫁の藤川が、人殺し〳〵。

九介　やかましい。息の根をとめてやるワ。

卜切り下げる。

人の目褄にかゝらぬうち、爰を走つて、サヽ、ちつとも早く

藤川　そんならわたしを

九介　連れて退くワ。支度をしろ。

卜天國の劍にて卜庵の首を打ち落す。雷きびしく鳴る。

ヤヽ、血汐をあやせば、俄の雷鳴。

卜刀の血を拭ひ見る。雷やむ。とつくり見て

藤川　もしや尋ぬる

さてこそ天國

卜九介、持ちかへて

九介　ハテ、それも欲しくば抱き寢して、跡でどうなと……それは格別卜庵が、死ねば外にこの事を

藤川　この首隠せば誰れとも知れず。幸ひ先刻に渡せし着替へ、これ着て今宵の新枕。小屋の別れぢや
爰へ来て

ト此うち藤川、卜庵の首を有りあふ風呂敷にて隠し、件の帷子と帯を見附け

ト思ひ入れ。九介、天國の劍を取上げ

九介　今日はいかなる吉日か、今までつれない藤川どの、その詞では武者憟ひ、今更どうやら

藤川　今宵の雨に濡るゝ初めは、其方と爰で

ト九介に寄り添ふ。

九介　アヽ、夢ではないか。

ト思ひ入れ。薦垂れ落ちて、藤川を隠す。捨て鐘。蛙の聲。九介、こなしあつて

こいつはまんが直つて來た。併しこれまでつれない藤川、俄に風が變るとは、九介を亭主に見代えたか。コレ、眞に嬉しい、今から嬶アだ。爰を立退く別れに今夜、誰れ憚らず、エヽ畜生め。

ト獨り喜ぶ。この時、小屋の内より九介の帯の端を捕へて引く。

ハテ、せはしない。エヽ、くされはないワ。

ト薦垂れへかゝる。この時、内より手を差出し、九介を引ッ張るゆゑ、立寄るところを、白刃出て貫く

九介苦しみ、タヂ〳〵として上の方、浪板の中へよろめき落ちる。この途端、蘆間より鴨大分、羽音して空へ舞ひあがり、トヒヨ、浪の音、この途端蔦垂れちぎれて、内に藤川、件の帷子、帶に着替へ切り首を腰に結び、白刃を下げて出て來り、飛び去る鳥に目を附け、キツトなる。爰にて時の鐘の頭を打つ。獨吟のかゝり、藤川思ひ入れ。唄一くさり切れる。

藤川　夫の詞に隨うて、憎しと思ふあの九介、手にかけたれば、ぬしの住家へ、尋ねて今宵……殊に手に入るこの天國。エヽ、忝い。

トまた獨吟になり、持つたる白刃を捨て、そこに落ちありし天國を腰に差し、あたりの下駄を履き、番傘を取つてさして、東のあゆみへかゝる。此うち時鳥、蛙の聲。雨の音。これに尺八の音色きこえる。藤川、中の間のあゆみを通る。このあたり道具靜かに廻る。

本舞臺、藁葺きの屋體、上の方に柏の立ち樹、伊豫簾かけ、泉水に杜若、下の方、卯の花垣、竹の簀戸。爰に尺八指南赤堀源吾といふ標札をかけ、すべて小名木川隱れ家の體。爰に水右衞門、正面の佛間へ向ひ、尺八を吹き、母の位牌へ回向の體。唄一ぱいに道具納まる。

ト藤川、花道へかゝり、門口へ來り、内を窺ふ。水右衞門、思ひ入れあつて

水右　時鳥、なくや皐月のあやめ草、あやめもわかぬ戀もするかな……古歌の心は藤川が、我れに便らん道もせを、竹の音色にそれぞとは

ト藤川、標札を透かし見て、こなしあって

藤川　町家も遠き村里に、尺八の音の優しくも、殊には簀戸の標札に、竹を指南の赤堀源吾、家名は何とも心得ぬ。

水右　慥かに門には女の聲、もしやは彼れが

ト思ひ入れ。藤川もこなしあって

藤川　赤堀源吾と我が夫の、もしやその名をお變へなされて

水右　ヤヽ、さいふは慥かに藤川か。

藤川　さてはお前の隠れ家は

水右　かゝる民家も稀れなる里に

ト此うち藤川、内へ入って

藤川　やう〳〵尋ねて、思はず爰へ

水右　尋ね參るは、さては下部を

藤川　お前のお指圖。やう〳〵今宵

水右　出かした藤川。それにて身共が女房に。して又仕留めし證據あつてか。

藤川　卽ちこれに仕留めし首級。御覽なされて下さりませ。

ト合ひ方變つて、腰につけたる首の包みを出す。水右衞門、思ひ入れあつて

水右　これが下部の九介めか。

ト思ひ入れあつて包みを開き、よく〳〵見て

ヤヽ、こりやコレ慥かに

藤川　お覺えあらんこちの人。お前の親御卜庵どの、この藤川を妻の敵と、討つべき身ながら淺ましい現在嫁の藤川が、手にかゝつてのこの橫死。これぞ誠に返り討。

水右　ヤヽ、舅を討つて落ちつき顏、返り討とは、してその仔細は。

藤川　連れそふわたしが今爰で。語る樣子を一通り、お聞きなされて下さりませ。

ト合ひ方變つて、キッとこなしあつて

思ひ出せば濱松にて。しかも去年の皐月闇、小筒を以て御次男の、若殿討たんと姑の、惡念つのるをさま〴〵と、お諫め申せど聞入れなく、殊にお前を取立てゝ、出世させんず母御のよこしま

とゞむるはずみに誤まつて、火蓋は外れて我れと我が、その身の怪我を藤川が、姑殺しと高聲にこの事世上に沙汰あらば、この身の科はいとはねど、その手蔓より悪事の露顯、お主に敵する親子ぞと、夫に難儀もかゝらうかと、所詮存命叶はぬ母樣、直ぐにわたしが介錯の、止めの劒を嫁の身で、立退くその夜に父右内も、人手にかゝつて思はぬ横死。親の敵が討ちたさに、今日の今まで母樣を、殺せし者も外々に、あると沙汰させ、お前に隱し包みしも、父の敵を討つたる後、名乘つてお前の手にかゝり、死なんずものと思ふうち、因果と今宵卜庵さま、九介に何の恨みやら、忍び來つて窺ふを、見覺えのある提灯の、印しを證據に九介と心得、深手を負はせしこの身の誤まり。苦痛を見兼ねて討たせし首級。されども九介も殺害なし、お前に逢うてこの身の云ひ譯。現在二人の舅御を、殺せし女房のこの藤川、爰でお前の存分に、なされた上で、わたしに代り、石井右内の仇敵、お前の爲にも舅の敵、助太刀なされて下さりませ。コレ、慈悲ぢや情ぢや水右衞門どの、お前に討たるゝわたしが願ひ。モシ、助太刀なされて下さりませ。

　トいろ／＼思ひ入れ。此うち水右衞門、胸にあたる事ゆゑ、いろ／＼こなしあつて

水右　よくも白狀いたした藤川。現在兩親女房の、其方が手にかけ殺せし事、何とて其まゝ差置かん。思へば根強き女の魂ひ。さはいへよく／＼考ふれば、連れそふ男を思ふより、つのり／＼てこの

間違ひ。亭主が女房を敵とは、類ゐ稀れなるこの仇討。是非に及ばぬ、女房藤川、助け置かれぬ親の敵、かゝる悪縁、覺悟いたして往生なせ。

藤川 お前のお手にかゝるが本望。とくより覺悟の上からは、命惜しまぬ、少しも早う……されども互ひの勝負には、白刃を合すがコレ本望、さなきに於ては、敵討とは云はれまじ。心にもなき事ながら、掟の爲の白刃と白刃。殊に最前思はずも、わたしが手に入るお家の重寶、これぞ誠の天國の。

ト劍を見せる。水右衛門見て

水右 ナニ、天國を其方が

藤川 これも舅御さま、御所持なされしこの劍、お前の手よりお屋敷へ。

水右 出かした女房。其方はそれにて、我れに刃向へ。念佛申して立合へ藤川。

藤川 あの世を助けて下さんせ。

水右 承知いたした。未來も助けて、この世に於ては助太刀も

藤川 願ひを叶へて

水右 致してくれう。

藤川　嬉しうござんす。

水右　イザ

藤川　イザ

兩人　イザ。

ト藤川は天國の劍にて、兩人立ち向ふ。誂らへの合ひ方。ちよつと立廻りあつて、藤川、わざと白刃を落す。水右衞門、猶豫せしが、思ひ切つて藤川が襟髮を摑み、キツとなつて

水右　今ぞ本望。念佛申せ。

藤川　嬉しうござんす。お前の存分。

水右　云ふにや及ぶ、

藤川　南無阿彌陀佛。

水右　南無阿彌陀佛。

ト胸許を貫く。藤川、苦しむ。

これにて身共も返り討、最早石井の血筋の奴も、これであらまし絶ゆるであらう。

藤川　ヤヽ、石井の血筋の絶ゆるとは、わたしを討つて返り討とは、そりやマアなんで返り討。

ト思ひ入れ。

水右　コリヤヤイ、藤川、女房を殺せば連れそふ某、枕を高く夜が寝られる。いつぞや箱根双子にて源之丞夫婦の者、横死なしたも身が仕業。元の起りは其方が親、石井右内を手にかけしも、現在聟たる水右衛門、この身をさみなす憎くき老ぼれ、それゆゑにこそ身が殺した。われも爰にて返り討、今といふ今某が、心にかゝる雲もなく、日本晴れの水右衛門。さうとも知らず助太刀を敵に頼むも女の淺はか。夫を敵の棟梁と、今日まで知らぬ大だはけ。思へば因果な奴だなア。

ト臑にて蹴飛ばし、キツとなる。藤川、無念の思ひ入れにて

藤川　ヤヽ、さうとは知らず父上の、敵を討つて下されと、現在敵に頼みしか。思へば〳〵口惜しい。

トよろぼひ寄つて水右衛門に切りつけるを、立廻つて足下に踏みつけ、キツとなつて

水右　近きに勢州龜山へ、ありつく家名は赤堀源吾、冥土へ行かばこの由を、右内をはじめ源之丞、夫婦の者にも物語り、敵は無事とあの世から、われも女房のよしみだけ、守つてくれろ。必ず恨むな。どうして〳〵、凡夫盛んに神祟りなしとは、浮世の譬へ。

藤川　此まゝ死ぬとも、せめて一太刀、

ト落ちてある天國を取つて切つて行く。水右衛門、立廻つて、その手を捕へ、天國をもぎ取り、キツ

となつて

水右　今ぞ往生。

ト止めを刺さんとせしが、思ひ入れあつて

天國なれば劍の威德。試し見るには。

ト思ひ入れあつて藤川を貫く。これにて雷鳴り出す。キツとなつて空を見て

ハテ、爭はれぬ劍の奇特……併し思へば美しい、惜しい女房を

ト血刀を拭ひ、思ひ入れ。雷やむ。水右衞門、藤川を見て

アヽ、三百落した

ト木の頭。藤川、落入る。

思ひがするわえ。

トきざみ、よろしく、ひやうし

幕

第二番目　大切　勢州龜山本望の場

役名——石井下部、袖介。袖介妹、お松。濱田瑞軒。掛塚伴五郎。赤堀源吾 實ハ藤川水右衛門。

本舞臺、うしろ黒幕、土手板、松の大樹、竹の矢來、傍示杭に關川橋普請と書き、よき所に薦垂れの小屋ある。すべて勢州龜山のあたり、夜の體。時の鐘にて幕明く。

ト爰に瑞軒・半纏股引、大小、旅形。若黨、中間、いづれも旅形にて、具足櫃、槍、挾み箱、旅用意の體にて扣へる。

侍ひ　御主人へ申しあげまする　當所關川橋、御普請の由、夜明けませねば、渡し船の通路お差留めの趣き。然らば間道へかゝりませうや。この儀お伺ひ申しまする。

瑞軒　なにサ〳〵、今日中には關東より、罷り越す赤堀源吾、到着に相違ない。身共は源吾を迎ひの爲道まで出迎ふ。夜の明くるまで其方ども、並木の方にて相待ち居れ。

ト時の鐘になり、皆々下座へ入る。この同勢のうち伴五郎、赤合羽を引ッかけ、中間笠にて、跡に殘りて顏見合せ

伴五　濱田どの。
瑞軒　少しの間も、さぞお氣づまり。
伴五　なんの〳〵、して、其許が御推擧の赤堀氏、慥かに今日到着いたさるゝか。
瑞軒　姿を變へて關東より、着と存じて御覽の通り、出迎ひましたる供廻り。到着次第に、直さまお目見得。
伴五　併し仇討の願ひ出でんは、袖介兄弟が養育いたす半次郎。
瑞軒　ハテ、それは當歳、小兒の事。
伴五　然らば赤堀、着いたしなば
瑞軒　貴殿の身の上、納める手段を
伴五　萬事よろしう
瑞軒　それまで並木の松陰にて
伴五　然らば濱田どの
瑞軒　イザ、御同道。
ト時の太鼓、捨て鐘にて、兩人、下座へ入る。淒き誂らへの合ひ方。時のたゞら。花道より水右衛門

旅虚無僧にて、天蓋、尺八、荷を擔ぎ出る。東の花道より袖介、木綿やつし、順禮の形、頭に手拭を卷き、笈摺、手甲、脚絆。赤子をいぶりつけながら、兩人くらがりゆゑ、ためらひ／＼、本舞臺へ來り

水右　まだ明けやらぬ街道筋、定かにそれと見えねども、それへござつた其許は。

袖介　ハイ、私しことは西國の、札所を廻る順禮でござりまする。

水右　さうお云やれば、同じ修行のお身の上。見れば何やら懐に、幼子抱いて

袖介　ハイ、この悴めは、嚊めが忘れ形見。それゆゑ母の菩提を弔ふため、札所を打つて長の旅。一河の流れも多少の緣。

水右　夜道をかけてそれは御難儀。夜明くるまでも暫しの間、憂い目辛い目旅先きの、お物語りも又一興。

袖介　爪づく石も御緣と申せば、こりやお互ひに

水右　話しませうか。

トあたりの石に腰をかけて思ひ入れ。赤子、泣き出すを

袖介　オヽ、誰がよく／＼。今に乳を貰ひに

トいぶりつける。

同



大切



水右　ハテ、この蚊の多いに
ト蚊を拂ふ思ひ入れ。時の鐘、正面の小屋のうちより、お松、女虚無僧、好みの誂らへ、尺八を差し天蓋置いて、野宿せし體にて額を出す。兩人、ためらひ見て
兩人　ヤヽ、誰れやらそこにも。
まつ　東雲近き夏の夜も、ツイとろ〳〵とまどろむうち
ト起上がつて來る。兩人、お松を見て
水右　黑白はそれと判らねど、同じ修行の身の上に
袖介　殊にしほらしい糸竹の、女子と見えて
まつ　行くへ定めぬ旅の空、その笛竹も行きくれて、一樹の宿りも修行の身の上。見ればお前も、幼子抱いて、旅人の衆か。
袖介　ハイ、西國めぐり、順禮でござりまする。幼子連れて長の旅、誠に困ります。
まつ　それはさぞかし御難儀な。わたしも長の道中筋、乳があつたら振舞うて、あげたいものぢやが子を持たぬ
袖介　エヽ、女中衆の長旅か。それは御大儀。ほんに、爰に火がござりますさうな。一服貸さつしやり

ませぬか。
水右　それは幸ひ。わしも一服下されうか。
袖介　サア〳〵、爰に燃えさし、吸ひつけて
ト割り木の燃えさしを取つて出す。三人、煙管を取つてのみかけんとする。明け六ツの半鐘、鶏の聲する。三人、思ひ入れあつて
水右　アヽ、最早夜明けの
まつ　アレ、東の方は
袖介　白んだ様子。
三人　朝日のお上がり。
ト塵手水使つて、拍手、一度に打つ。これをキツカケに鳥の聲。この時、前通りのかんてら筒、一度に引抜く仕掛け。舞臺は一時に明るくなる。黒幕、切つて落す。
本舞臺、向う打抜き、龜山の城を見せたる道具、前通り町家の屋根、外濠の景色、一體望みあり、城の内にて時の太鼓を打つ。
トこの時三人、初めて顔見合せ、思ひ入れあつて

まつ　ヤ、お前は兄さん、袖介どの
袖介　其方は妹、お松ぢやないか。
水右　さては二人は。
袖介　ヤ、われは敵の水右衛門。
まつ　ナニこの者が、尋ぬるところの
水右　いかにも藤川水右衛門、變名なして赤堀源吾。城主へ有りつき、着する今日。妨げひろがば身の上だぞ。
袖介　イヽヤこれまでおのれが在所、尋ね求めしこの袖介、養育なすは源之丞さまの、忘れ形見の半次郎さま、この子に敵を討たせにやならぬ。名乘り合せて勝負なせ。
水右　さてはいつぞや畚越しにて、谷へ落ちたる奴めが、死んだとばかり思ひしに
袖介　死ぬる命をやう〳〵と、延はりゐたるもお主の敵、討つべき時節の到來なせしか。
まな　石井のゆかりは即ちこの子、幼なけれども半次郎さま、勝負を決せん水右衛門、いざ立上がつて勝負しや。
水右　ナニ小ざかしき敵呼はり。その心根が不便さゆゑ、名乘つてくれん、よつく聞け。いつぞや遠洲

名越家にて、石井右内を討つて捨て、それより所々の返り討、これまで包みし某が、實名藤川水右衞門、今は赤堀源吾と變名。石井が下部と下素女、間近くよつて禮拜いたせ。

トきつとなる。

まつ　嬉しや敵と名乘る上は
袖介　この子の助太刀、同胞が、頃も皐月の菖蒲打ち。
まつ　皐月待つ間の曾我兄弟。
袖介　荒人神の兩社の靈驗。
水右　富士野にあらぬ龜山の、城下に於て、討つかよ同胞。
兩人　おんでもない事。
水右　返り討だぞ。
兩人　イザ
三人　イザ〳〵〳〵。

ト水右衞門、替へ袋より一腰を出す。お松、同じく袋より一腰を出す。袖介、杖の仕込み、三人詰め寄つて見得。この時、伴五郎、瑞軒、侍ひ大勢從へて出て

瑞軒　水右衛門に刃向へば、この瑞軒が手勢を以て
伴五　身共も荷擔の伴五郎、赤堀どのを警固して
水右　助太刀なされて、お二人とも。
兩人　心得ました。ソリヤ、やるな。
侍ひ　やらぬワ。

ト侍ひ大勢立ちかゝる。袖介、大勢を切り散らす。水右衛門、お松と渡り合ひ、立廻つて下座へ入る此うち掠めてドン〳〵。袖介は伴五郎瑞軒と立廻りあつて、切り立て〳〵入る。此うち引違へてお松、水右衛門に手を負はせ、水右衛門切り結び出て來り、兩人立廻りよろしく、袖介、大勢を追ひかけ出て來り、兩人にて水右衛門を取卷く。旅侍ひ大勢、バラ〳〵と圍む。

袖松　水右衛門、覺悟なせ。
水右　小癪な事を。

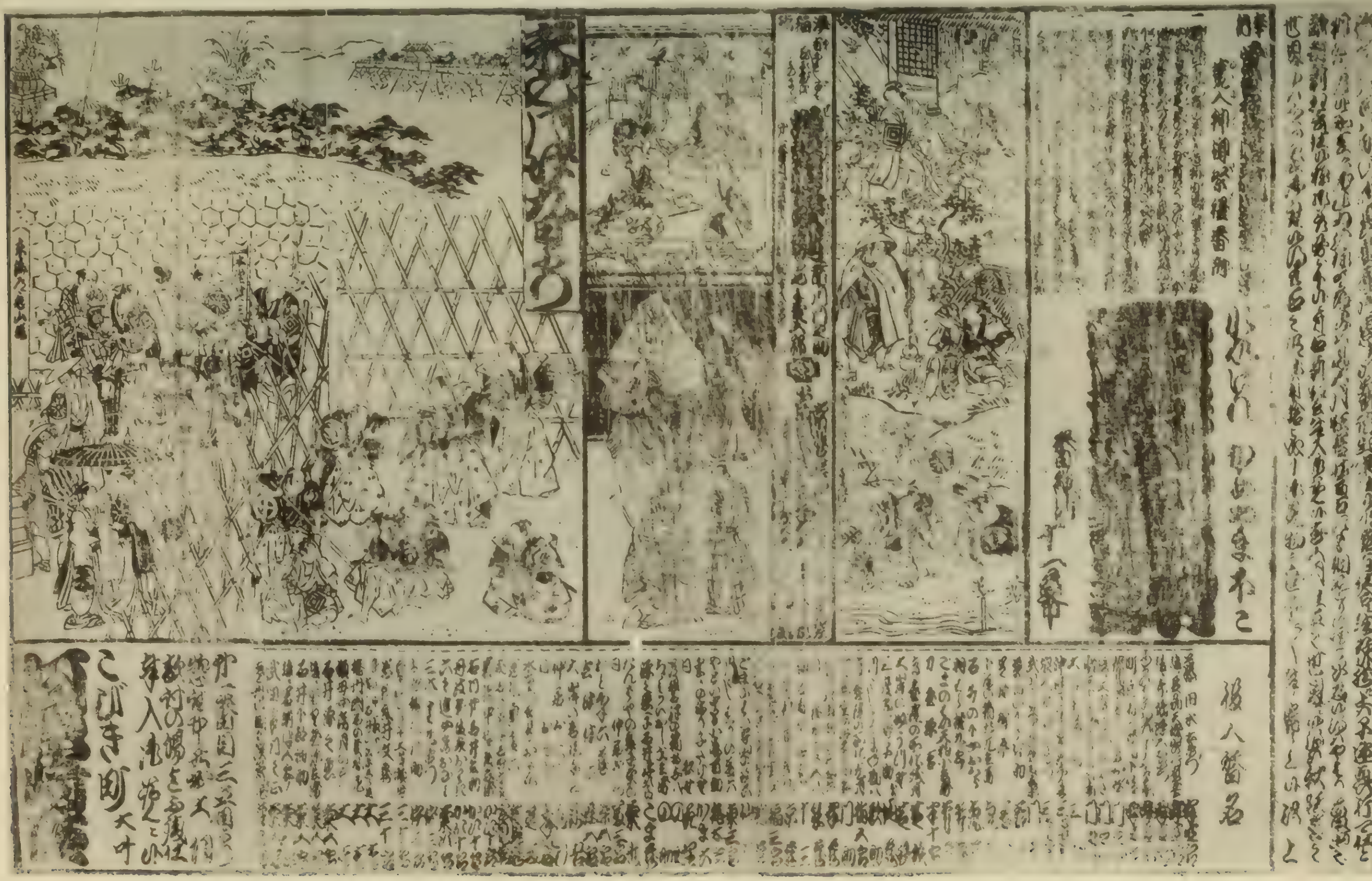
ト立廻つてキッと見得。

まづ今日はこれぎり。

めでたく　打出し

靈驗亀山鉾

（れいげんかめやまほこ）


後八番名
こびき町

靈驗龜山鉾

序幕　　石和川敵討の場

役名──藤田水右衛門。石井兵助。同若黨、轟金六。代官、掛塚官兵衛。藤田下部、作助。法臺寺了善。飛脚、早助。

本舞臺、三間の間、向う一面の黒幕、板松の並木。この眞中に傍示杭二本並べ立てあり、上手は「是より西御代官掛塚官兵衛支配所石和の宿」と記し、下手は「是より東鵜飼石領」と記す。すべて甲州石和宿棒鼻の體よろしく。こゝに百姓町人の仕出し六人ほど居並び、わや／＼云つてゐる。馬子唄にて賑かに幕明く。

百一　コレ／＼太郎吉、敵だと云ふ人を見たか。

百二　オヽ、見ただんか、この間とう丸で御陣屋へ行くところを、ちよいと見たわいの。

百三　モシ／＼、わたしや勝沼在から見物に來ましたが、その敵と云ふ人は、どんな人でござるか、早

く見たいものでござる。

ト此やうな捨ぜりふ云つてゐる。また馬士唄になり、向うより早助、胸かけ、絆纏股引、手甲草鞋の形にて、風呂敷に三度提灯を附けしたを脊負ひ、名古屋三度をかむり、スタ／＼出て、直ぐに本舞臺へかゝり、皆々ワヤ／＼云ふを見て

早助　モシ／＼、お前方、大勢寄つて、こりやァ所の鎮守祭りといふやうな事かえ。

百一　なにサ、珍らしい事がござりますからサ。

早助　ヘエ、珍らしいとは、どんな事でござる。

百一　この石和河原に敵討があるによつて、見物に來ましたのサ。

早助　そりやァとんだ事でござります。その人達は、どこの者でござるな。

町一　その敵の侍ひは、奥州とやらの生れださうなが、見るからに憎らしい人サ。

町二　又片々の侍ひは、遠州とやらいふ事ぢや……何にしても、見物事でござる。

早助　其やうな事は又と見られない。丁度よい所へ來合せたによつて、どうぞ見て行きたいものだが、もう始まりませうか。

百一　左樣サ、まだお役人の見えた太鼓が鳴りませぬ。

百二　それでわしらは爰に待つてゐます。
早助　それぢやァ滅多な事ではあるまい。
　　　トこの時、題目太鼓聞える。
　　あの大鼓は、始まるのではござらぬか。
町一　なにサ。ありやァ鵜飼石のお勤めでござる。
町二　敵討の始まるのは、八ツ時分といふ事でござる。
早助　それぢやァまだ二刻あまり。それを待つてゐるうちには、五六里も行く出入りだが
百一　お飛脚さん、また見ようといつて成らぬ事だ。大概な事なら、見物して行かつしやい。
早助　そりやァ見たい事は山々だが、大急ぎの用でござれば、商賣には代へられませぬ。
百二　ハテ、感心な人だ。
早助　これはおやかましうござりました。
皆々　精出してござりませ。
　　ト馬士唄になり、早助と仕出し一同、ワヤ〳〵云うて下座へ入る。また馬士唄になり、向うより了善
　老僧のこしらへ、長合羽を手の内にて括りあげ、脚絆草鞋、塗り網代の笠をかむり、出て來る。下座

より伴助、紺看板、柿の三尺帶、同じ脚絆、草鞋、中間笠をかむり、旅奴の形にて出て來り・兩人すれ違ひ、伴助花道へ行きかけるを、了善呼び止め

了善　モシ〱、卒爾ながら、お前は藤田氏の御家來ではござらぬか。

ト伴助、ぎよつとせしが、了善の風體を見て

伴助　ハイ、左樣でござりますが、お前は

ト云ひつゝ見て

さう仰しやるは駿州の沖津、法臺院の了善和尙さまではござりませぬか。

了善　いかにも左樣でござる。

伴助　ハテ、よい所でお目にかゝりました。私しは水右衞門さまの御用で、これよりあなた樣のお寺へ參り、委細の儀をお話し申した上、江州膳所の片原町に、町醫者をしてござる、藤田卜庵さまの所へ、參る道でござりますが、あなた樣にはこのあたりに、何の御用ござりまして、お出でなされたのでござります。

了善　愚僧も水右衞門が事で參つたが、丁度好い所で會ひました。マヽ、下にござれ。

ト合ひ方になり、兩方、そこに有りあふ物に腰をかけ

先づ何は差置き聞きたいは、水右衞門どのゝ身の上。今度遠州濱名の家中、石井兵助と云ふ者、水右衞門を兄の敵と殿へ願ひを上げ、三老の御判物を以て、敵討に出でしところ、甲州でめぐり合うて、水右衞門は囚はれ人となつたとの噂。水右衞門が親卜庵とは、兄弟同樣にしたこの了善、右の樣子を聞くと、直ぐにこれへ參つたは、陣屋へ愚僧が願ひ出で、水右衞門は人を討つて立退くやうな者ではござらぬと、どこまでも證人に出て、云ひ開きをしようと思ひ、わざ〳〵これへ參つたが、いよ〳〵水右衞門は囚はれ人になつたか。

伴助 左樣でござります。御主人水右衞門さまには、仕官の事にて、遺恨重なる石井右内、濱名の殿へ御師範もせし、神陰流の達人も、騙すに手なしと、登城の道に待ちぶせして、闇討ちにぶツぱなし、彼れが所持の神陰流の祕書、鵜の丸の一卷をば奪ひ取つて、この甲州に隱れしところ、兵助が女房、白綾といふ者は、この武田家の番頭、三木十左衞門が妹。その緣で兵助めが、この所を探しあるくに、因果と出ツ會し、囚人にされた上に、今日がたうとう敵討とはなりました。

了善 ヤヽ、すりや今日が敵討とや。エヽ、愚僧の足が遲きゆゑ、今となつては申し開きも後手となつたか。さすれば、いよ〳〵水右衞門が身の上は。

伴助 その儀は少つともお氣遣ひ下されまするな。敵討檢使の役は、當所の代官掛塚官兵衞さまと云ふ

お方にて、その掛塚さまは、お旦那の親卜庵どのとは、舊來の懇意にて、かねて卜庵さまの御家の祕法、無敵ころしと云ふ毒藥を取寄せ置かれしが、それをば、すは敵討といふ時に、水の中へ仕込み置き、兵助に喰はすれば、いかな剛氣な奴なりとも、太刀すじ狂ふは知れたる事。そこへつけ込み、鞠ヶ瀬流の極意にて、討つて捨つるは袋の鼠。

了善　それ聞いて少しは安堵したなれど、合點の行かぬは貴樣の身の上。主人の一大事のその時に、うろつき歩くは……ア、聞えた。水右衛門を見限つて、こりや駈落ちをひろぐのだな。

伴助　滅相な。どうしてこの伴助は、お旦那へは大忠義者でござりまする。その證據は、コレ

ト懐より紺地錦の袱紗に包みし一卷を出し、見せる。了善取つて

了善　この卷き物を證據とは。

伴助　それぞ右内が家の祕書、鵜の丸の一卷。

了善　すりや、これが……さるにても、どうして貴樣がこの品を

伴助　主人水右衛門、今まで所持してござつたれども、囚人同然の御身なれば、もしや詮議となつたその時に、やみ／＼渡すも口惜しと、この伴助に渡されたが、よく／＼考へ見るところ、藤田が下部と誰れ知らぬ者もないこの面ゆゑ、石井がゆかりの奴等に出ツ會せ、サア一卷は知らねえか

と、尋ねにあつたその時に、ハイこれでござりますも、あんまり安い敵役。そこでこの一卷を、お前に渡し置き、身輕になつて江州膳所、卜庵さま方にお出でなさるお才さまに、兵助を毒殺すれば、旦那のお身に氣遣ひなしと、案じぬやうに今の話しを聞かせろと、水右衛門さまのお使ひに行くのでござります。卜庵さまとは懇ろ仲の了善さま、どうぞこの一卷を、預かつては下さるまいか。

了善　成る程、極印打つたより、贋ひのないこなたの顏。貴樣が持つてゐるよりは、愚僧が預かれば、人の氣の附く氣遣ひはない。いかにもその品、預かりました。

伴助　それでわしも落ちつきました。

了善　たとへ今日の敵討に、毒殺をやり損なうてからが、そのお役人の官兵衛どのを、楯にして、水右衛門が身に、敵持つた覺えはない、そりや人違ひであらうと、愚僧がどこまでも云ひ張つて、水右衛門が命は、きつと助けて見せまする。

伴助　その御深切を卜庵さまや、お才さまにお話ししたなら、さぞお喜びでござりませう。

了善　水右衛門を助けおふせた上では、沖津の寺へ引取つて、その時渡すこの一卷。

伴助　その吉左右をお待ち申す。

了善　さりながら、近しき仲に垣とやら、念の爲、中改めて

ト袱紗を取つて一巻を開く。ドロ〳〵になり、いづくともなく白蛇一疋現はれ出て、一巻を取巻く。兩人驚き、跡すさりして、兩人キット見得。鳴り物になり

伴助　傳へ聞く、この一巻は、西に當つて遙かなる、日向の國、鵜戸の窟に御鎭座ある鵜戸大權現の神勅にて、授かりしより今に至り

了善　白蛇現はれ、守護なすゆゑ

伴助　鵜の丸の一巻と名けたるに

了善　袱紗の裂れは紺地の錦、地紋は正しく蝶鳥にて

伴助　裏は白地に一首の歌。

了善　「勝つとても、高きをひすな古しへも

伴助　勝つて兜の緒をぞ〆める」

了善　かゝる奇瑞のあるからは

伴助　疑ひもなき

了善　鵜の丸の一巻。

伴助　きつと貴僧に

了善　預かりました。

　ト巻き納める。ドロ〳〵やみ、白蛇消える。兩人これを見て

兩人　ハテ、爭はれぬ

　ト思ひ入れ。時の太鼓にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、淺黄幕、東西まで打廻し竹矢來、よきところに松の大樹、この枝に櫓太鼓かけあり。すべて甲州石和河原仇討の體よろしく、眞中に官兵衛、繼ぎ上下大小檢使の役人にて、御敎書を懷中し床几に掛け、上手に水右衛門、鉢かづら旅姿の浪人にて、下手に兵助、旅姿にて白の鉢卷をしめ白の股引大小。金六、半纏紐付の股引、旅姿の若黨にて、三人平伏して左右に扣へてゐる。この後に菖蒲革の足輕六人、棒を持ち立ちかゝり、警固してゐる。矢張り時の太鼓にて道具とまる。

足輕　双方ともに罷り出でましてござりまする。

　ト官兵衛こなしあつて

官兵　いかに石井兵助、武田多門の正有信の領地に於て、これなる藤田水右衛門に出會ひ、兄の敵とあ

つて、當所の陣所へ出訴いたせしにより、早速搦め捕つて斯くの如く、敵討の場所はしつらへたれども、今に於て水右衛門、石井右内を討つたりと、白狀なさねば、この仇討の儀は罷りならぬ。双方ともに、左やう心得てよからう。

兵助　アイヤ、その儀は先立つて、三老方の御判物を以て願ひあげし如く、實狀、兄の敵に相違ござりませぬ。

官兵　でも、罪に伏さねば取りあげる事は……。

金六　たとへ罪に伏さずとも、敵たる事は明白にて、その證人は、御當家の御家來、三木十左衛門どの

官兵　ヤア、その證人、この官兵衛は呑みこまぬ。なぜなれば十左衛門は、兵助どの、おてまへの爲には、女房の兄ではござらぬか。さすれば緣者の證據は、取上げにはならぬワ。理非明白な官兵衛と違ひ、ぬんべんくらりの侍ひを頼みに思うて、そでない事を云ひ上げても、天が明か。肝腎の力に思ふ十左衛門は、主用あつて郡内領へ、罷り越した後なれば、いくら踠いても及ばぬ事。ハテサテ、近頃氣の毒千萬な。

金六　ヤア、仰せられな掛塚さま、この場に十左衛門さま、御出席あればとて、緣者を頼みに致す、兵助ではござりませぬ。

兵助　卑怯未練な心に比べてのその一言、とても論判無益。ヤア〳〵水右衛門、右内を討つたは我れなりと、きり〳〵名乘つて勝負なせ。

ト詰めよる。これまで水右衛門、無言でゐたりしが、この時顔を上げ、ニッコリと思ひ入れあつて

水右　先刻より、おし默つて承はり居つたが、兵助どの、貴殿の御舍兄右内どのを、某が打つたなどとは、毛頭もつて覺えござらぬ。

兵助　ヤア、覺えないとは卑怯な奴な。水右衛門先つ頃、濱名家仕官の望み叶へんため、鞠ケ瀨の一流を極めしと、願書を以つて申し出せしに、手蹟は名に負ふ本目流の能書、殊に奧州の浪人とある事ゆゑ、既にお抱へにもなるべき爲

金六　主人右内どのと立合ひ仰せ付けられしところ、不覺をとつて首尾はさん〴〵、國境より追ひ拂はれしを、おのれが未熟は顧ず、右内どのゝ業なりと、それを遺恨にさしはさみ。

兵助　兄右内どの、殿樣より鵜の丸の一卷、御覽なされんと、夜中に急のお召しにつき、早速登城の道に待ぶせなし、馬場先の松原にて暗討にして、懷中の鵜の丸の一卷まで、奪ひ取つて立退く曲者

金六　その折下郞が駈けつけ見れば、死骸の御手に殘りしは、コレ

ト黑羽二重の紋付の片袖を出し

兵助　藤の丸に田の字の付きたるこの片袖、かゝる證據のある上は、天道その身を責める道理。最早遁がれぬ藤田水右衞門、兄の右内を討つて立退く折、鵜の丸の一卷まで奪ひ取りしと、サア尋常に

兩人　白狀いたせ。

水右　コレサ〱、お急きなさるな兵助どの、其やうな紋は、世間にいくらもござるワ。元より右内どのを討つた覺えなければ、鵜の丸とやら、烏丸とやら、左樣な品は猶以て知り申さぬ。

兵助　ヤア、さほど潔白なおのれが、何ゆゑあつてその時に、遠州を立退いた。

水右　仕官を望めど取上げなきゆゑ、立退きました。

官兵　ハヽヽヽヽ、小兒の喧嘩に等しき一言。武田の役人掛塚官兵衞、其やうな論は取上げぬ。聞けば右内が養子源之丞は、播州明石の家中、石井源藏が次男にて、生れついての柔弱者。此奴も扶持放されのせう事なし、西國筋へ知れもせぬ。敵を探しに出たとの事。

水右　こりや聞えた。神蔭流の達人と、高言吐きし右内どの、闇討にあつて、家名相立たざるため、俄浪人の苦しさに、そでもない身共を捕へ、云ひかけひろぐ石井兵助。

官兵　破れ扇に編笠で、のたれ死よりましと心得、無理敵討の云ひかけは、ほんの山犬に見込まれたと

同じ事、不便な事でござる……ナ、水右衞門どの

ト毒藥を服ませるといふ思ひ入れ。

いゝ加減にあしらつておやりなされ。

ト水右衞門のみこみ

水右　イカサマ、それも却つて功德でござらう。あまり心根が不便さに、覺えはないが敵になり、相手にはなつて遣はさうが、兄右内さへ闇討にあうた事なれば、その弟たる兵助が、神陰流も大概そこら。コリヤ、この水右衞門は鞠ヶ瀨流の名人。嘘でも敵討と云へば眞劍ぢやぞ。命に掛けがへあるならば、サア立上がつて石井兵助。

兵助　云ふにや及ぶ。共に天を戴かざる兄の仇、勝負はかねて望むところなれど、まづその前に鵜の丸の一卷、サア、受取らう。

水右　ヤア、云はして置けばさまざまのたは事。武士の情に、敵の眞似をしてやれば、附けあがりのした毛二才めら。幾度云つても同じ事、一卷なぞとは知らぬ事だワ。サア、尋常に立上がれ。

兵助　イヽヤ、たとへ敵は討つたりとも、一卷戻らぬ其うちは、石井の家名再興は

官兵　ならぬと思はゞその一卷、手に入るまではこの勝負、延す方がよからうが。

兵助　イカサマ、罪に伏さぬ水右衛門、これを討つのも何とやら。白状いたすそれまでは、矢張り當所の御陣屋に、お預かり下されい。

官兵　イヽヤ、そりや成らぬ。勿論、三老方の御判物は、この如く差上げしとは申せども、水右衛門こと、天下に對して科なければ、此方の陣屋に預かり置く事、罷りならぬ。

兵助　でも、一卷の詮議いたさねば

官兵　その詮議は私し事、多門正の存じた事ではない。今日敵討延引なすからは、水右衛門ことは、いづくへなりとも勝手に參れ。

兵助　アイヤ、折角心を盡して、めぐり逢うたる仇敵。

官兵　すりや、水右衛門を今討つか。

兵助　さすれば一卷の行くへが

官兵　そんなら勝手に追ひ放さうか。

兵助　サア、それは。

官兵　サア

兩人　サア〳〵〳〵

官兵　どうだえ。

　　トきつと云ふ。兵助、當惑のこなし。金六、側へ摺りよつて

金六　イヤ、兵助さま、今日優曇華の水右衛門、首尾よく敵討ちおふせ、その後一巻御詮議の儀、天運にお任せなされて、よろしからうと存じまする。

兵助　ムウ。是非に及ばぬ。この場に於て

水右　そんならおれと立合ふか。

兵助　いかにも。

水右　アヽ、本性でか。

兵助　云ふにや及ぶ。

官兵　然らば双方支度いたせ。

兩人　ハア。

　　ト白ばやしになり、水右衛門、右の形のまゝ、下緒を襷にする。兵助は金六手傳ひ、上着をぬぎ、白の四天襷、仇討の姿になる。キツト思ひ入れ。このうち官兵衛思ひ入れあつて、三方へ、土器二枚のせて持ち出し、兵助の方へ土器を隠しながら、懐より薬を出し、見物によく見えるやう入れる。足輕

に命じ、手桶を取寄せて、双方の土器へ水を入れて、思ひ入れあつて、

官兵 用意よくば。

兩人 ハツ。

ト双方より三方を眞中によろしく住ふ。金六後に扣へる。

官兵 兩人ともに水杯。

トこれにて兵助毒藥と知らず、ぐつと飲む。水右衞門は土器を持ちながら、兵助の姿を見て、わざと毒の廻るを待つ心にて

水右 見りやア、死装束のその出立。ハア、いゝ心がけな。

兵助 國を出でしそも／＼より、何處で汝に遇はんも知れず。それゆゑ、用意なしたるこの出立。石井右内が 弟 同苗 兵 助。

金六 お供は卽ち 轟 金六、主人の敵、助太刀して。

官兵 イヽヤ、助太刀は相成らぬ。

金六 でも御主人の

兵助 ヤア、見苦しい、すさりをらう。

ト これにて金六扣へる。

兵助　兄の敵、藤田水右衛門。

水右　イザ。

兵助　イザ。

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト双方土器を投げのけ、白ばやしになり、ちよつと立廻りあつてキツと見得。これより兵助、惣身に毒の廻る思ひ入れにて、ヂツと苦しきこなし。水右衛門わざと扣へて、この體を見て

水右　ヤア、卑怯なり兵助、遲れたか。

兵助　イヽヤ、遲れを取るいはれはなけれども、いま土器の冷水が、咽喉を通ると忽ちに

ト苦しき思ひ入れにて口より血を吐く。

ヤヽ、五體の惱亂この生血。

金六　さては、毒藥。

ト云ふと、手早く水右衛門、兵助の肩先を一太刀切る。兵助その手に縋り

兵助　武士にあるまい毒殺を。

水右　イヽヤ、そりや毒殺ぢやァねえ、初太刀を受け損じた、その血汐だ。そんな未熟の手の内で、なに刃が立つものか。いつその事に

ト云ひさま、したゝか切る。兵助身體の自由にならぬこなし。金六こらへかねて、兵助を圍ひ、入かはつて兩人鳴り物を變へて、烈しき立廻りあつて、トヾ水右衛門危くなると、官兵衛、立つて太鼓を打ち、足輕出る。

足輕　助太刀は叶はぬ〳〵。

ト六尺棒にて引分くる。金六無念のこなしにて兵助を介抱する。水右衛門、官兵衛と顏見合せ、ニツタリ思ひ入れ。

水右　身に覺えなき水右衛門が、敵の汚名受けし身も、云はゞ返り討になしたも同然。この上は、いさぎよく腹切つて。

ト刀へ手をかける。トこの以前より柵矢來の蔭に了善窺がひしが、この時

了善　待つた。その生害、無用。

ト出る。水右衛門見て

水右　ヤア、貴僧は。

了善　御親父卜庵どのとは懇意の愚僧。コリヤ、死ぬるには及びませぬぞ。

トとめる。

水右　でも現在兵助に、手傷を負はせし某しゆゑ。

了善　イヽヤ殺さぬ、まづ〳〵。

トなだめる、水右衛門とゞまる。

お役人へ申し上げまする。この水右衛門こと、愚僧よつく存じ罷りあつて、なか〳〵蟲けら一匹殺害なす者にてはござりませぬ。もしもお疑ひもござりませうならば、愚僧がいづかたまでも罷り出て、きつと申し開き仕りまする。何卒出家の願ひ御賢察あつて、御助命なし下さりませうならば、有り難う存じまする。

官兵　イカサマ、出家の身でさほど申す事と云ひ、當人が白狀せねば、敵でなきことは明白なれば、水右衛門切腹には及ばぬ事。また兵助があの態は、身より出でし銹にして、敵ならぬを敵と云ひ立て、却つてその身は深手を負ひしは、うつけの性根。

了善　とても存命覺束なければ、死骸は愚僧が引取つて、よしなに葬ひ致しまする。何卒この儀、お聞き届け下されませう。

官兵　出家の願ひ、尤も至極。其方が望み通り勝手に致せ。まつた、この許し文は、三老の御判据りあれば、此まゝ反古にもエヽなるまい。兵助が呼吸引きとらば、死骸に附けて寺へ納めもの。

ト出す。

了善　畏まつてござりまする。

ト受取り、懐へ納める。

金六　その御教書は拙者めが。

ト取りにかゝる。

官兵　陪臣の其方へ、渡す事はならぬわえ。

金六　エヽ、思へばくゝ、片おしな。

ト口惜しき思ひ入れ。この時兵助すりよつて

兵助　現在毒殺とは知りながら、外に證人なければとて、此まゝ敵も討たず死ぬのが、口惜しいわい口惜しいわい。

金六　御尤もでござります。

ト介抱する。兵助、金六に縋りつき

兵助 コリヤ金六。女房白綾、まつた源之丞へ、紛失の一巻尋ね出し、再び石井の家名を立つるやう、くれ〲も傳へてくれ。

金六 お氣遣ひなされまするな。あなたの御無念は、屹度。イヤサ、御傳言は、屹度申しまする。

ト耳へ口を寄せて云ふ。兵助、嬉しき思ひ入れ。

官兵 ヤア、死ぞこないの、べん〲と。

水右 云ひかけひろいだ、その返報。

ト振り上ぐるを金六隔てゝ

金六 眼前主人の弟を打たれ、やみ〲この場を逃がさうや。おのれ水右衛門。

ト切りかゝらんとするを官兵衛止め

官兵 又敵は天下の御法度だワ。

金六 御法度と云ふ字に手出しもならぬか。チエヽ。

水右 自業自得の身の破滅。

ト兵助の襟首とつて引起し

今が止めだ。

金六　思へば〳〵。

水右　南無阿彌陀佛。

ト止めをさす。

ムヽヽ。

ト笑ふをチョンと木の頭。金六ようらうとするを、官兵衞扇にて隔てる。水右衞門、刀を拭ふ。兵助落入る。了善回向する。金六泣き落す、双方よろしく。

幕

辻打ちにてツナギ、引返す。

道具出來次第、矢張り辻打ちにて、幕の引附けより下げ賣の仕出し三人、だん〳〵出て來り

下賣　評判々々。これはこの度、所は甲州石和河原にて、古今珍らしき敵討の次第、上下では事明細、敵討の次第を御覽じろ。

ト三人、別々に呼びながら、揚げ幕の内へ入る。直ぐに在鄕唄になり、この幕明く。

序幕返し　明石織屋の場

役名――石井源之丞。若黨、武井文藏。源之丞女房、お松。機織り女、お岩。同、お蝶。雇ひ中間、百助。胴腹の權九郎。頤骨の六藏。六之進妻、お浪。甲州飛脚、早助。

本舞臺、三間の間、奥深の世話屋體。上の方、九尺の機屋、竹格子の中窓、見通しに機道具を飾り、お岩、機織り女にて、手拭をかむり、襷がけにて機を織りゐる。二重の上手に蚊帳を吊し、内に蒲團搔巻にて、赤子寢てゐる。眞中のれん口。下手、臺所の書割り。よき所に神棚、神酒供へてあり。いつもの所に門口。この外に松の立ち樹。吊り枝。爰にお松、世話女房、前垂れ、襷にて、俎板にて膾を切りゐる。お蝶、機織り女の拵らへにて、矢張り前垂れ、襷にて、膳椀を拭いてゐる。百助、雇ひ中間にて、擂鉢にて、味噌を擂りゐる。すべて播州明石、機織りお松隱れ家の體よろしく、皆々こなしあつて

てふ　コレ〳〵、お岩さん、源次郎さんの誕生日の祝ひぢやに、お前一人其やうに、機を精出して織つてゐさんす事はないわいな。

百助　それ〳〵、慾張りも大概にして、爰へ來て手傳ひなさい。

　　トこれにてお岩、窓より顏を出し

いは　サイナア、わたしも一緒に手傳はうとは思ふけれど、この機は急ぎぢやによつて。

まつ　ほんに、さうでござんす。出入りの機屋さんから、急ぎの誂らへ物ぢやによつて、わたしはこの事にかゝつてゐるゆゑ、それでお岩さんを賴んだのぢやわいなア。

てふ　それぢやというて、たま〳〵の事ぢやに

百助　手傳つてあげて、夜鍋でも精出したがいゝ。

いは　ほんに、お前方ばかりに手傳はして、お氣の毒でござんす。機も少しで上がるによつて、水など汲んであげようわいな。

百助　さうだ〳〵。手傳はねえと、跡で御馳走になるに喰ひ憎いものだ。サア〳〵、手傳つたり〳〵。

　　ト機屋よりお岩出て來り

いは　お前方が精出しなさんすゆゑ、大概出來ましたなア。

百助　イヤ、まだこの味噌摺り役が片附かねえ。

いは　そんなら代つて摺らうかえ。

百助　ナニ、女の力で白味噌が、滅多に摺れるものか。
いは　そんならわたしが押へてあげうかえ。
百助　そいつは有り難山々だっ

トちり〳〵の合ひ方になり、皆々よろしくこなし。これより捨ぜりふ皆々、見物の落ちつくまで此やうな事して、よろしく見計らひあつて

まつ　モシ、皆さん、其やうに精出しなさんすと、又する事が無くなるによつて、茶なとおあがりなさんせいなア。
てふ　アイ〳〵。お膳もこれで拭いてしまふし
いは　味噌も大概摺れたやうぢやわいな。
百助　そんなら一服のまうか。

ト皆々よろしく住ふ。

まつ　大きに御苦労でござんした。

トめい〳〵に茶を汲んで出す。

いは　モシ、お松さん、このマア騒がしいに、親御作助さんは、どこへござんしたえ。

まつ　父さんは、惣領の源次郎を負うて、誕生日の祝ひぢやによつて、産神様へ参り、それから歸りにお醫者様へ寄つて、藥取つて歸られますでござりませう。

てふ　ほんに年寄りの、きつい達者な事でござりますなア。

いは　その達者に引かへて、あの源次郎さんは、まだやう／＼八つやそこらで、腰の立たぬ難病とは、さぞマァお松さんは、心遣ひでござんせうなア。

てふ　あの病には、何ぞ好い藥はないかいなア。

まつ　サイナア、お醫者様の仰しやるには、忽ち癒る妙藥はあれど、その藥には、肝の臟の生血を用ひねばならぬとある事ゆゑ、なか／＼其やうな藥を求める事は思ひもよらず、心に思ふばかりで、癒ると知りつゝ癒されぬ、わたしの心を、推量して下さんせ。

トこなし。

いは　ほんに、いとほしいと云はうか、親御作助さんは達者なれど、あの源次郎さんの腰が立たぬゆゑこれに掛りづめ。まだ當歳の半次郎さんはあるし

てふ　その上、力に思ひなさんす源之丞さまは、遠洲濱名の御親類内とやらへ、養子にござんした後はお前の手一つ。

いは　慥かアノ半次郎さんの生れさんしたは、源之丞さまが遠州とやらへござんした、その後でござんしたなア。

まつ　さうでござんす。あの半次郎がお腹に宿つて、五月經つや經たず、あの遠州濱名の御家中、石井右内さまへ御養子に、お出でなされたその後で、首尾よう生れたは半次郎。遠州よりも時々の、とひ音信はして下さんしても、國を隔てゝの事なりや、問ひ談合も間に合はず、搗てゝ加へて、兄の袖助さんは行くへ知れず。たゞ力に思ふは父さんばかり。これとてもお年の上、手業も細き機織りの、僅かな賃で兄弟二人を、成人させてと、思ふに甲斐ない源次郎の業病。ほんに遣る瀬はないわいなア。

百助　その苦勞も身から出た錆、何もばゞアを云ふ事もあるめえが。

まつ　成る程、さうでござんす。兄さんが奉公にござんしたその縁で、石井の御次男源之丞さま、兄さんがお供で、折々こちの内へお立寄りなさんした、その時はまだ十六のお若盛り。わたしは丁度十五の折。とても殿御を持つなれば、あゝいふお方に添ひたいと、思うたばかり賤しいこの身、殊に兄さんのお主樣、せめてはお側にと、此方で思へばあなたにも、お情らしいお詞に、不束な身も顧ず、一度はまゝよ二度三度、それが高じて岩田帶、結んだ縁の切れられぬ、父さんの介抱

にて、生み落した源次郎。親旦那源藏さまには、物堅いお方ゆゑ、聞えを憚り隱し妻。たつ月日に關守りなし、去年の秋、遠州へござんした後、狀通はして下さんしても、國を隔てゝの事。二人の子供をあなたと思ひ、朝夕樂しみに暮らして居りましたところ、この四五日前に、源之丞さんが戻らしやんしてナ。

てふ　ほんに、さぞマァ嬉しうござんせう。わたしらまでが、ォヽけなり。

ト思ひ入れ。

百助　聞けば源之丞さんの養子親は、殺されたとやら云ふ事ぢやが、さうかえ。

まつ　ア、滅相な、なんのそんな事がござんせう。源之丞さまが今度此方へお出でなさんしたは、御主人濱名さまに、おめでたい事がござんして、そのお喜びに兪迦山へ、御代參にお出でなさんした次手ながら、お墓まゐりや何やかや。ちよつとの間寄らしやんしたのぢやわいな。

百助　イヤ、それはさうと、お前の兄の袖助、親仁さんが勘當して、内へは寄せつけず。よく聞けば、元の御主人石井さまの方は、大概首尾は好いといふ事。それゆゑ友達づくのこの百助、詫び事に來た次手、此やうにお祝ひの手傳ひして、親仁どんの歸りを待ち、詫び事して見る氣だが、作助どんの方は濟まうかな。

まつ　左様でございます。たつた一人の兄さんの事なれば、どうがなと存じまして、時々詫び事は致しますが、兎角に父さんが、堪忍してではございませず、その上兄さんが、今ではいづくにござんすやら、便りとてもございませねば、致しやうもございませぬ。今のうち戻つてござんしたら、好い詫びの仕時でござんすに。

てふ　詫びといへばお前方も、元の御主人石井さまの方の、お首尾が悪いではござんせぬかえ。

百助　それも大方、兄の袖助どのから起つた事だらうよ。

まつ　サア、それぢやによつて、一倍父さんが腹立てゝござんす。殊に親旦那はおかくれなされて、奥様は今では、尼におなりなされておいでなされども、親旦那に劣らぬかたくなゝ御氣性。それゆゑ云ふに云はれぬ、心遣ひを致しまする。

岩蝶　ほんに、若い身空で、いかい御苦勞。

トこの時、門口の松の木へ、烏來て啼く。お松、心がゝりの思ひ入れあつて

まつ　何ぢややら、折も折とて、身の上話しのその所へ、烏啼きの悪さ。氣にかゝる事ではあるわいなア。

てふ　なんのお前、氣にかける事がござんせう。ありや喜び烏ぢやわいなア。

いは　たとへ烏啼きが悪いというてからが、夢にさへ逆夢といふ事がござんす。殊に祝ひ日の事なりや
こんなめでたい事はござんせぬ。

百助　物は祝ひからと云ふから、祝ひ直したがいゝ……イヤ、それで思ひ出した。料理拵らへは粗方片附いたが、肝腎の赤の飯を忘れた。ドリヤ、炊いて來ようか。

トついと奥へ入る。烏頻りに啼く。

岩蝶　エゝ、畜生め〳〵。

ト箒にて追ひ廻す。烏は飛び走ると、唄になり、向うより源之丞、着流し、浪人者、大小にて、下駄がけ、白張りの番傘をさして出てくる。この傘にお浪、家中の女房、裾の衣裳にて、腰帯を高からげにして、眞田緒の裏附けを履き、源之丞と相合傘にて出てくる。跡より紺看板の中間、日傘を持ち、竹の中間笠をかむり、俄雨にあひし體にて、皆々花道へ出て來り

なみ　ほんに源之丞さま、丁度よい所でお目にかゝり、お庇で雨をしのぎました。

源之　イヤモウ、斯様に折よくお目にかゝるも、佛參いたしたお庇でござりませう。して、あなたには何方へのお出でござります。

なみ　お前にいろ〳〵お話し申す事がござりまして、お隠れ家まで參るところでござりまする。

源之　それは幸ひ。何事かは存じませぬが、向うの宅まで
なみ　御案内なされて下さりませ。
　　ト唄の切れにて皆々本舞臺へ來る。
源之　お松や、戻つたぞよ。
　　ト内へ入る。
岩蝶　ヤア、お客さんがお歸りなされた。
まつ　ほんに旦那樣、お早うござりました。
源之　オヽ、坊主めは、よう寢て居るな。
　　トお岩、お浪を見て
いは　ヤア、お松さん、大事だ〳〵。
まつ　モシ、お岩さん、何を其やうに騷がしやんすぞいなア。
いは　エヽ、お前も餘ツほどな結構人ぢや。わたしが今云うたは爰の事。また源之丞さまも性惡な。いづれあのやうなお方と、連れ立つてござんしたは
てふ　氣のよいにも程があるわいな。現在女房の所へ、これ見よがしに。エヽ、腹が立つ。お前の代り

にわたしらが、追ひ歸してこまそ。

ト立ちかゝる。

まつ　アヽ、モシ〳〵、わつけも無い事云はしやんす。其やうなお方ぢやござんせぬ。

源之　身共が兄、六之進どのゝお内儀、嫂ぢやわいの。

ト しよげる。

岩蝶　エヽ、左樣でござりますか。大きに不調法を申しました。

まつ　お浪さま、ようお出でなされました。サア〳〵、お入りなされまし。

なみ　これは〳〵お松さま……どなたもお許しなされませ。

ト合ひ方になり、お浪こなしあつて上手へ通る。お岩お蝶、茶、莨盆を出す。皆々よろしく住ふ。

コレ〳〵、三助、わが身は、わしが此方に用足してゐるうち、傘と履物を取つておぢやらぬか。

中間　へイ、成る程、左樣いたしませう。

ト行きかゝるを

なみ　アヽ、コレ〳〵、わしが爰に居る事は、母樣へは必ず沙汰なしにしてたも。もしどれに居るとお尋ねなされたら、矢張りお寺に雨宿りして居ると申して、忘れても爰に居る事は云ふまいぞ。

中間　ヘイ〳〵、畏まりました。

ト向うへ走り入る。お岩、お蝶、思ひ入れあつて

いは　モシ、お蝶さん、何か皆さんが御用がある樣子。爰らが粋といふ所でござんせう。

てふ　ほんにさうでござんす。そちこち七ツ下がり、魚町の湯のしまはぬうち、ちよつと一風呂入つてから、また手傳ひに參りませう。

ト門口へ出る。

まつ　お岩さん、お蝶さん、お庇で早う片附きました。風呂へ入りなさんしたら、酒一つあがりに來て下さんせ。

いは　アイ、それは有り難うござります……あなた、これに。

兩人　ゆるりとお話しなされまし。

ト在郷唄になり、兩人向うへ入る。

源之　世間に人鬼はないと、里の衆達といふものは、深切なものぢや。

まつ　イヤモシ、源之丞さま、お浪さまの、毎々御深切にお尋ね下さりまする其お禮を

源之　イヤモウ、毎度お松が狀通にて、兄者人と申し、あなたの厚き思し召し、何から何まで、お心添

へて下さる段、心でお禮申して居ります。

なみ　そのお詞で、却つて迷惑いたしまする。それは差置き、今日私しが參りましたは、夫六之進の名代。母御貞林さまにお首尾の惡い、お松さまの所に逗留なさるゝゆゑ、母御の手前を憚り、佛參と申しまして、參りましてござりまする。

源之　久々にてお目にかゝりし嫂御、あなたにも御健勝にて、母上兄者人にも、御機嫌のよし承り、斯様に喜ばしい儀はござりませぬ。さりながら、この度本國へ立歸りましても、御對面も叶はぬ不運の某、御推量下さりませ。

まつ　それと申すも源之丞さまへ、不束な身も顧ず、お願ひ申してお情を、受けたが却つて仇となり、はる／＼お歸りなさんしても、おいとしうござります。

なみ　イヽエ、お松どの、この道ばかりは親の儘にもならぬが定まり。物堅い親仁様のお耳に入つて、聞捨てならねば、知らぬ顔にてお出入りも叶はず、打過ぎし折から、めでたう平產あつた源次郎内々源之丞さまが、貢いでの隱し妻、子仲まである事は、よう御存じにて、初孫の顔見たいと、心で思し召しは絶えねども、そこを逢はぬが武士の意地。一つ二つと年重ね、源之丞さまを長く當所に置く時は、一家中の譏りも如何と、御一家たる遠州濱名の御家中、石井右內へ養子におやり

なされて、心にもない飽かぬ別れをさせましたは、全くお前が憎いではない、可愛さあまつてから、人の批判を受けぬ爲。必ず惡しう思し召すな。

まつ　なんの惡しう思ひませう。勿體ない事仰しやります。さはさりながら、親旦那樣には

源之　その遠州にありしうち、親人樣には御死去の樣子、承つて驚き入り、直さま馳けつけ佛前にて、不孝のお詫びと存ずれども、思ふに任せぬ養子の身。其うち不慮の事出來と申す譯は、奧州棚倉の產、藤田水右衞門、鞠ヶ瀨流の劍術を云ひ立てゝ、濱名家へ仕官の望み。彼奴性得未熟者にて御內見の節、養父右內どのと立合ひ、遲れを取りしを遺恨に存し、登城の道に待伏せて、卑怯にも騙し討。その折御所持ありし、神蔭流の奧儀、鵜の丸の一卷を奪ひ立退きしゆゑ、右內どのゝ弟兵助どのには、敵討の願ひを達し、出立の折拙者も共々、御供と願へども、養子に參つて間もなく、まだ披露目も致さぬ源之丞、この供は相叶はぬ、本國明石へ立歸れとあつて、若黨轟金六と申す者を召連れ、水右衞門が本國、奧州棚倉を志し御出立。某つく〳〵存ずるには、たとへ一日たりとも親と賴みし右內どのゝ敵、やはか此まゝ置くべきかと、武井文藏と申す者を召連れ、中國筋に心當りもござりますれば、實父の許へ參上旁々、當所へ立寄りましてござりまする。

なみ　其お心を承つて、憚りながら感心仕りました。夫六之進どのにも、あなたのお心を汲み分けて母様へ度々御訴訟申せども、逢ひたい見たい二人の初孫、それさへ逢うては死行かれた、夫源藏どのゝ詞も立たず、二つには養父右内どの、横死ありしに今更出入りさせては、右内どのへ義理立たずと、武家の意氣地を立て拔いて、お聞入れなき母上樣、それゆゑ私しどもまで、心配いたして居ります。

ト思ひ入れ。懷中より袱紗包みの金五十兩を出し、源之丞の前へ置く。此うち百助、のれん口より出かゝり、金の樣子を窺うてゐる。

これは夫六之進どのより、僅かなれども路銀の足しにと申す事。お受取りなされて下さりませ。

源之　兄者人のお心こめしこの金、有り難う頂戴仕ります。

ト取つて戴き

さはさりながら、國を出まするそも〳〵より、手當は致しござれば、受納いたしたも同然なればこれはあなたへ、お戻し申すでござります。

なみ　イヤモシ、源之丞さま、あなたの養父は六之進にも親同然、共々敵の詮議とは思へども、心に任せぬ仕官の身、せめて力を添へるその金子、お納めなされて夫の寸志、お立てなされて下さりま

せ。

源之　ハヽ、忝きそのお詞。否むは却つて兄への不孝。仰せに從ひ有り難く、受納いたすでござります。

ト取つて戴き懷中する。此うち百助、聞きゐて、この時出て來り

百助　モシ〳〵、お松さん、赤の飯は炊いて火を引いて、移すばかりだが、まだお汁の靑味が買つてなかつた……こりやアどなたも御免なせえ。このお取込みぢやア、わしが行つて買つて來やせう。

ト門口へ出かけ

モシ、お松さん、今にも親仁どのが歸られたなら、兄御袖助どのゝ勘當の詫び、どうぞいゝやうに云うて下さい。わしも友達づくの事だから、わざ〳〵來やした……おれとした事が、お客のあるのに無遠慮な……ドリヤ、八百屋へ行つて來ようか。

ト時の鐘にて、源之丞の持ちし金に目をつけ、向うへ入る。

源之　何ぢややらあの人は、獨り言云うて行かれたが、どこの人ぢや。

まつ　アイ、ありや兄さんの友達ぢやというて、詫び言に見えましたが、源次郎が誕生日の喜びを幸ひと、手傳つて行たのでござんす。

源之 ハヽア、さうか。ハテ、氣輕な人ぢやな。

なみ いま承れば、右内どのゝ弟御、お前の爲には伯父、兵助どのには、棚倉の方へござつたのには手がゝりでもござりましてか。

源之 左樣にござります。水右衞門が親卜庵が本國は、奥州棚倉にて、彼の地は縁類もござれば、彼處を探すつもりにて、二つには兵助どのゝ妻白綾と申すは、甲州武田家の番頭、三木十左衞門と申して賴もしき侍ひ、まづ此方へ立寄り、それより本國へ參られまする筈にござります。

トこの時、以前の烏飛び來り、松の木へとまり啼く。源之丞、キツと耳立てる。

まつ 先刻といひ、いま又來て啼く烏。

源之 彼の唐歌の心目のあたり。伯父兵助どのゝお身の上。アヽ、心がゝりな。

なみ イヤ、源之丞さま、其やうに御心配なされぬがよい。烏に反哺の孝ありと申せば、あなたの孝心が屆いて、めでたう御本望遂ぐると申す、知らせの烏でござりませうわいなア。

トこなし。バタ〳〵にて、向うより以前の中間、雨傘と女の足駄、風呂敷包みを持ち出て、直ぐに舞臺へ來て

中間 御免なされませ……ハイ、雨具を持參いたしましてござります。

まつ　これは御苦勞にござんした。
なみ　母樣は御機嫌はよかつたかや。
中間　左樣でござりまする。……お合羽も取つて參りました。
なみ　イヤモウ、雨も霽れた樣子なれば、それには及ぶまい……先程より餘程の隙いり。母樣の思し召しも如何。もうお暇申しませう。

ト立ちあがる。

まつ　今少しとお止め申す事も、ならぬ身の上。
なみ　それも推量いたして居りますれば、わたしら夫婦がよいやうに、母樣へ申し上げ、御對面なさるやうに致しまする。ほんにおいとしいは、源次郎の病氣。その上當歳の半次郎、みんなお前の手一つで、お心遣ひ、お察し申して居りまする。……源之丞さま、必ず跡にお心置きなう、めでたう吉左右。
源之　何から何まで、詞にあまる御恩のほど、首尾よう敵討ちおほせ
まつ　御歸國なされて御禮を
源之　申しあげるは暫しのうち。

なみ　隨分ともに、御身を大事に

源之　あなたも御無事で

なみ　お松さん

まつ　お浪さま。

なみ　お子達を大事になされませ。

ト唄になり、お浪こなしあつて、中間附いて向うへ入る。源之丞、跡見送り、こなしあつて

源之　アヽ、忝い母人樣。この金子も表向を憚り、お浪どのよりの賜物なれど、母の魂ひ贈られしは我が爲の好き守り。忝い。

まつ　御舍兄樣御夫婦の志し、なか／＼に仇には思はれぬわいなア。

源之　いま母人の御氣性を、聞くにつけても思ひ出すは、おかくれなされた親人樣。子を思ふ夜の鶴と表は御氣丈に見ゆれども、分けて子に甘かりし御氣質ながら、某を右内へ一生の不通の養子の折家の重寶、千壽院力王のこの刀に添へて、小柄は卽ち……これ見やれ。

ト刀と小柄を出し

後藤祐乘が垣に朝顏。また差添は

ト脇差を出し

養父右内どのが引出として、仁王三郎の一腰を下され、いま二腰を帶し居れども、これを思へばこの大小こそ、親々達の形見となつたか。チエヽ。

トこなし。

まつ　僅か一年經つ經たぬに、一人ならずお二人の、父親達にお別れなされた、あなたのお身の上。

源之　今となつて便りにするは、文藏ばかり……ほんに、この文藏は、最前から見えぬが、いづれへ參つたのぢや。

まつ　ハイ、明日御出立の支度で、何やかや調へに參りました。

源之　ア、家來とは思はぬ、深切な者ぢや。イヤ、深切と云へば、この舅どのも、まだ歸られぬか。

まつ　アイ、源次郎を連れて、氏神樣からお醫者樣へ行かれましたれば、また歸りは遲うございませう

源之　アヽ、搗てゝ加へて、あの源次郎が難病。身共が遠國のうちは、其方のいかい苦勞と案じたばかりその貢ぎもならず。ほんに男まさりの其方の介抱、朝夕心に禮云うてゐたわいなう。

まつ　そのお詞で、苦勞の甲斐がござります。折々六之進さまが、お心附けては下されても、年寄りに幼子二人、おのれやれ、立派に成人させて、自慢をせうの一心ばかり。烏と共に疾く起きて、機

屋に入つては賃仕事。子ゆゑの闇も晴れゆく月に夜なべ業。僅かなお錢も源次郎が、藥の價に入りあげて、苦勞はさら〳〵いとはぬが、折角お出でなされても、明日又お別れ申したら、いつお目にかゝらうやらと

源之　コレ、お松、これぎりに別れるではなし、首尾よく敵さへ討ちおふせれば、直ぐに戻つていつまでも、一緒に居るわいの。僅かの間ぢや、辛抱しや。

まつ　ほんに、世の譬へにも云ふ通り、お月樣のあかりで仕事すれば、寡になるとやら。月夜のあかりで機織つたゆゑ、人の羨やむ好い男を持ちながら、わたしや寡も同じぢやわいなア。

ト膝にもたれかゝる。

源之　そりや其方の愚癡といふものぢや。コレ、機嫌直しや、お松。

ト云ひながらお松を抱へ起して、こなし。

まつ　アレ、まだ日も暮れもせぬに。

源之　なんの日の暮れるに構ふ事があつて……明日は出立する身共、今にも文藏や、舅どのが歸つては邪魔が入る。コレ、機嫌直しやいの。

まつ　なんの腹を立ちませう。さりながら、わたしやよう諦めては居りまするが、子供の側にお出でな

源之　さるは今宵ばかり。思へばわたしやそれが

　ハテ、平常に似合はぬ。愚癡な女子ではあるわいやい。

　ト引寄せる。この時、蚊帳の内にて、赤兒啼く。これにてお松、身を引き

まつ　アレ、半次郎の目が覺めて

源之　又グッスリと抜きはせぬか。

まつ　ドレ、添へ乳してやりませうか。

　ト合ひ方になり、お松、蚊帳の中へ入る。源之丞、思ひ入れあつて

源之　ハテ、子持ちといふ者は、自由の足らぬものぢや。ドリヤ、久しぶりで、川といふ字に寝ませうか。

　ト唄になり、大小を持つて、蚊帳の中へ入る。時の鐘にて、向うより權九郎、六藏、惡者の拵らへにて、以前の百助附添ひ、出て來り、花道にて

權九　百助や、そんなら今話した通り、石井の屋敷から五十兩持つて來たか。

百助　さうサ、あの源之丞とやらが受取つて、ほつほに納めてありやす。

六藏　ヨシ〳〵、それぢやァ先刻云つた、兄の事から仕掛けて

百助　首尾よく行つたら、約束通り分け前を

權九　そりやア云ふまでもなしサ。

六藏　われが來ちやア仕事がしにくい。今の所で待つてゐやな。

百助　合點だ。舊惡で首の細つたこの百助、路銀を持つて早くこの國を逃げりてえ。

權九　いま立前にしてやるワ。

百助　そりやア有り難い。必ず首尾しねえよ。

六藏　ハテ、爰にあるわえ。

百助　待つてゐやすよ。

ト引返して向うへ入る。兩人は門口へ來り

權九　ハイ、御免なさい。作助どのゝお内は、爰でござりますか。

ト蚊帳の内にて

まつ　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、蚊帳より出て、門口へ來て

作助の内は爰でござんすが、どなたでござります。

權九　へイ、左樣なら御免なせえ……サア、六藏、入りや〳〵。

ト兩人、內へ入る。お松、合點のゆかぬこなし。

モシ、作助さんは、お內でござりやすか。

まつ　イエ、父さんは留守でござんすが、お前方、何の用でござんした。

六藏　ムウ、父さんと云ひなさるからは、そんならお前はお松さんかえ。

まつ　ハイ、左樣でござります。

權九　親仁どんが留守なら、丁度幸ひだ。外の事でもござりやせんが、お前の兄貴、袖助どのゝ事で來やした。

まつ　そりやマア、よう來て下さんした。兄さんの勘當の事も、度々父さんに云うても、得心なさんせぬが、お前方がござんしたなら、また詫びの仕樣も

六藏　アヽモシ、お松さん、その詫び言の事ではござりませぬ。

まつ　エヽ、そして、どういふ事で

權九　サア、お話し申すもお氣の毒だが、あの袖助どんが西國筋で、云ふに云はれぬ譯あひで、お仕置になるところサ。

まつ　エヽ、そりや兄さんが何をさんして、どういふ譯で
六藏　サア、譯を聞きなすつたところが、どうで首にかゝはつた事だから、云はずと筋は知れた事。既にお仕置になるところを、友達づくのわつちが聞いて、だん／＼入り譯をお賴み申し、首代金二十兩といふもの出して、やう／＼袖助が首は接ぎやした。
權九　そこで袖助どのが、淚をこぼして云はれるには、首代金の二十兩、直ぐに返したけれど、知つての通りの譯なれば、おれが親は播州明石で、作助といふ者、どうぞ內へ行つて、親仁に隱し、妹にこの譯を云つて、二十兩の金を取つてくれろとの事。
六藏　それとも金が出來ずば、兄の事を見捨てにはなるまいから、妹を女郎に賣つても、金拵らへさせて穴を埋めてくれろと
權九　首を接いでやつたおいらに、手を合はせての賴み。それゆゑ二十兩を受取りに來やした。お松さん、どうぞ今渡して下さい。
まつ　その話しを承つて、誠に恟り致しました。よう御深切にお世話なされて、有り難う存じまするが、何ほど兄さんの言傳ぢやというて、機織り女の私しが、どうして二十兩といふ金が
六藏　サア、その出來ぬといふ事を、兄貴も知つてゐるゆゑ、妹を賣つてなりと、受取れと云つて寄越

した。

まつ　どうしてわたしが勤め奉公に行かれぬなれば、その金渡すか。

權九　行かれぬなれば、その金渡すか。

六藏　イヤ、この女中ぢやア解らねえ。親の作助に逢つて、しらちを附けよう。サア、作助に逢はう。

まつ　イヤ、父さんは小さいのを連れて、留守でござんす。

權九　イヤ、慥かに留守を使ふのだ。

六藏　なんでも怪しいは蚊帳の內。

權九　合點だ。

まつ　イヽエ、その蚊帳には

ト留めるを六藏引附ける。權九郎、蚊帳の內へ入ると直ぐに

權九　アイタヽヽヽヽヽ。

トこれにて源之丞、權九郎の手を捻ぢあげて出て

源之　この蚊帳一重は身が城廓。泥臑踏みこむ素町人。ヂタバタひろぐと

ト權九郎を見事に投げ

手は見せぬぞ。

トこれにて兩人、源之丞を見て

六藏　ヤア、作助が居ると思ひの外、若い野郎が蚊帳の內に。さてはお松が色男か。但し世話する野郎めか。そんならこの譯道を附けにつん出たのか。

兩人　サア、挨拶しろ、物を云へ。

源之　いかにも、その譯道附けてやらう。

六藏　面白い。サア、二十兩

兩人　受取らうかい。

ト源之丞、一向せかぬこなし。

源之　見す〱無理とは知りながら、大事を抱へし身の上なれば、事は好まぬ。ソレ

ト懷中より以前の袱紗包みの五十兩を出し、その中から二十兩出さうとする。お松、あわてゝ留め

まつ　イエ〱、そればかりは成りませぬ。わたしが兄さんの不埒から起つた事、どうして御主人樣へ御苦勞かけてなりませう。殊に阿母樣やら、兄御樣やら、お心こめられし御用金を遣はせましては、この身の冥加が

源之　ぢやというて、袖助が災難を、助けしとある恩義の金。
まつ　イエ〳〵、どのやうに仰しやりましても
源之　ハテ、打捨て置いてはこの上に、どのやうな難儀にならうやら。それを見捨てゝは
まつ　それでは却つてお主の罰があたります。その金ばかりは
　　　トきつと押へ留める。この體を見て
權九　金を出さうとギシャばるを、たつて止めるあのお松。そんなら女郎になる心か。
六藏　望みとあらば、おいらと一緒に
　　　ト引立てるを
源之　イヽヤ、お松を遣る事は
　　　ト留める。てんつゝになり、向うより文藏、若黨の拵らへ、風呂敷包みを脊負ひ、片手に草鞋を二足下げ、小買ひ物に行きし體にて出て來る。
權九　金を寄越さねば是非とも連れて
源之　サア、……金子遣はさう。
まつ　イヤ、その金ばかりは

六藏　そんなら、うせう。

ト連れ行かうとするを、源之丞は大事を抱へし身ゆゑ、何事も辛抱する心にて、支へゐるを、文藏この體を見るより早く、内へ入り、直ぐに兩人を見事に投げのけ、お松を圍ふ。

源之　ヤア、文藏か。

まつ　よい所へ、よう戻つて下さんしたなア。

文藏　譯は何やら存じませぬが、かりにも石井源之丞さまの奥方を捕へ、無禮働らく憎くい奴……もうお案じなされますな。

ト下にゐる。

權九　アイタヽヽヽヽヽ。ヤイ、一文奴め、なんでおいらを物をも云はずすつてんころりと投げたのだ。

六藏　すつてんころりと投げたのだ。

文藏　オヽ、おれの投げたのが、どうしたのだ。

トきつと云ふ。兩人、氣味惡き思ひ入れにて

兩人　サア、投げられたから、痛いわサ。

文藏　ハヽヽヽヽ。大だはけめ。して、わいらは何しに爰へうせたのだ。

權九　オヽ、おいらが爰へ來たのは、このお松の兄の袖助が、既に獄門になるところを、お慈悲深い胴腹の權九郎や

六藏　この頤骨の六藏さまが、二十兩といふ大金を出して、首を接いでやつた、その金を受取りに來たのだわえ。

文藏　ムウ。そりやハヤ深切に、よく金を出してやつたが、その袖助は、どこで其やうな惡い事をしましたな。

權九　アノ、西國で。

文藏　西國は、何といふ所で。

兩人　サア、その所は。

トつかへる。

文藏　そりや西國ぢやあるまい、慥か、三河の三川で

兩人　ヤア。

ト悄りする。

文藏　東海道三川宿の雲助めら。この文藏が、よく見知つてゐるわえ。

兩人　南無三。

ト逃げようとするを引ッ捕へ

文藏　袖助が首よりわいらが首、數も丁度二川宿、三河路邊をうろついて、國を拂はれたあぶれ者。今度の樣子をよく知つて、袖助をだしにして、騙りにうせたに違ひない。若旦那は大事を抱へし御身なれば、わいら如きをお手討にはなされぬが、この文藏が刀の切れ味を

ト立ちかゝる。

權九　アヽ、御免なせえ〳〵。成る程、仰しやる通りお松さまが、袖助の妹とやら

六藏　金にする氣で騙りに來ました。ハイ〳〵、命ばかりはどうぞ

兩人　お助けなされて下さりませ。

源之　コレ〳〵、文藏、此方で何も取られたといふではなし、料簡して遣はしたがよい。

文藏　エヽ、コレ、若旦那のお詞が無くば、ぶち殺す奴なれども、命冥加な盜人めら。サア、キリ〳〵と出てうせろ。

兩人　ハイ〳〵。

ト愚圖々々するを、襟首取つて門口へ突き出し

文藏　一昨日うせう。

ト門口をピッシヤリ締める。

兩人　チエヽ、いま〳〵しい。

ト呟やきながら花道へ行く。

權九　昨夜の夢見が惡かつたから、しまひはこれだらうと思つたよ。

六藏　併し、此まゝ引込むも曲がねえ。一首やらかさう……斯うもあらうか。

權九　なんと〳〵。

六藏　後は内へ歸つて云はう。

權九　何を云ふのだ。

トこなし。暮れ六ツの鐘鳴る。兩人、向うへ入る。

源之　ありやモウ暮れ六ツ。いかう暗うなつた。

まつ　灯をつけませう。

トお松、のれん口より行燈を出してつける。

源之　文藏、喜んでたも。今日、姉お浪どのが忍んでござつて、この通り

ト懐の金を出し

路用金ぢやというて下されたが、これも大方母人の、お心添へであらうわいの。

文藏　左様にござりませう。この上は、少しも御油斷はなりませぬ……いよ〳〵明日御出立につき、この通り、いろ〳〵の物を調へて參りました。

ト草鞋と風呂敷包みを出す。

まつ　モシ、文藏さん、まだ二三日はお出でなされても、大事あるまいぢやないかいなア。

文藏　イエ〳〵、そりや成りませぬ。たま〳〵お出でなされた若旦那ゆゑ、お名殘惜しいは、察しては居りまするが、世間の噂も何とやら。その代りには文藏めが受合つて、直ぐにお連れ申して歸ります。

まつ　ほんに、歸ると云へば父さんは、一人身でもある事か、源次郎をお連れなされて、この日の暮るのに、何してござんすやら。

文藏　イヤ、作助さまにはお目にかゝりましたが、明日は若旦那のお立ちゆゑ、あそこや爰の神々へ、御武運を祈りの爲、源次郎さまを御代參ながら、參つて行くほどに、案じぬがよいと云はつしやりました。

源之　ほんに、年寄りの深切な。達者な事ぢやなア。

文藏　ドレ、私しはお草鞋を拵らへて置きませうか。

ト合ひ方、時の鐘になり、文藏は草鞋拵らへしてゐる。源之丞、莨のみゐる。お松、そこら片附け、源之丞の肩を揉んでゐる。向うより前幕の早助、三度提灯と、桐油の附いた小風呂敷を脊負ひ、スタスタと出て來り、花道にてこなしあつて

早助　ア丶コレ、天久保までは持たうと思つたに、もう暮れた。併し、なんぼ日が長くても、今朝八軒家へ上がつたのは、丁度五ツ。それから十五里あまり歩いたから、大概そこらであらうかい。オオ、幸ひあそこで灯を借りて

ト舞臺へ來て

ハイ、御免なされませ。御無心ながら、灯を一つお貸しなされませ。

文藏　誰れかは知らぬが、此方へ入つてつけさつしやれ。

早助　左樣なら御免なされませ。

ト内へ入り、荷物の三度提灯より蠟燭を出し

憚りながら、どうぞこれへ、お移しなされて下さりませ。

ト出す。

まつ　アイ〳〵。

ト取つて、灯を移し、出す。

早助　ヘイ、お忝うござります。

まつ　マア、一服あがつてお出でなされませ。

早助　左樣なら、爰を少しお貸しなされませ。

ト坐る。

文藏　ア、見ますれば、お旅人はお飛脚だね。

早助　左樣でござりまする。

ト云ひながら、提灯の火にて莨のみゐる。

文藏　へエ、……つかぬお話しだが、お前、信州松本なら、もしあの邊に、藤田といふ家名の浪人はござりませぬか。

私しは信州松本の者でござりますが、西國筋へ飛脚に參ります。

早助　イヽエ、一向聞きませぬ。

文藏　さてお飛脚さんなぞは、國々をお歩きなさるから、さぞいろ〳〵な珍らしい事を、見たり聞いたりなさるでござりませうな。

ト裏問ひかける。

早助　左樣サ。いろ〳〵な話しもござりまするが、さて珍らしい事もないものサ。併し、二十四五日あと、甲州の石和といふ所を通りかゝると、その日に敵討があるといふ事で、大騷ぎでござりました。

トこの話しにて源之丞、早助の側へ摺りよつて

源之　エヽ、ナニ、敵討がござつた。して〳〵、その敵討は、如何いたしたな。御存じなれば、話して聞かせさつしやりませ。

早助　イエ〳〵、私しも急ぎの道中ゆゑ、見たいは一杯でござりましたが、そのまゝに通りましたゆゑ詳しい話しは存じませぬが、たゞ噂を聞いたばかりでござります。

源之　お聞きなされたとあれば、その家名實名は、御存じでござりませうな。

早助　それも詳しくは聞きませぬが、慥か奥州とやら、遠州とやらの侍ひといふ事でござつたが、見物せいで、殘念でござりました。

源之　ヤヽ、すりや、奥州とな。してく、その者の恰好は。
文藏　遠州のお方といふは、幾歳ぐらゐでござるな。
早助　イエサ、今申す通り、見物しませぬから。
まつ　それでもお前、聞いたと云はしやんすりや
源之　その者の面體は。
早助　ハテ、わしは見ないから知りませぬよ。
ト云ひながら立つて
ハイ、これはお世話でござりました。
ト門口へ出るを源之丞、袖を扣へて
源之　せめて年頃は、お聞きなされましたらう。
早助　ハテサテしつこい。
源之　でも、少しなりと。
早助　エヽ、知りませぬ。
ト源之丞の手を振り拂ひ

とんだ人達だ。

ト始終時の鐘にて、呟きながら下の松の樹の蔭へ入る。源之丞、跡見送り、呆氣に取られし思ひ入れ
にて

源之　オヽイ〳〵。

ト呼べども歸り來ぬゆゑ。こなしあつて内へ入り

割符を合す旅人の話し。正しく叔父兵助さまが、武田の家中、三木十左衛門さまを便りての敵討
御勝利あつてか。

文藏　何は兎もあれ、噂を聞いたその祝ひに

まつ　お神酒を上げて

源之　燈明上げい。

ト源之丞は思ひ入れ。文藏は燈明をつけ、神棚へ持ち行くと、灯消える。又つけると消える。この事
二三度あるべし。此うちお松、神酒徳利を持ち行き、供へようとして、誤まつて落し、徳利割れる

まつ　アヽ、こりや麁相を

トこなし。この物音に驚ろき、蚊帳の内の赤子泣く。お松あわてゝ抱きかゝへ出る。源之丞、徳利の

割れしを見て、ギックリ思ひ入れあつて

源之　ハテ、心がゝりな。

ト三人、思ひ〳〵にこなし。この時、下の松の樹の蔭より、幕明きの下げ賣り、三人出て來り

下賣、評判々々。これはこの度、所は甲州石和河原にて、古今珍らしき敵討の次第、上下では事明細、敵討の次第を御覽じろ。

ト三人ちぐはぐに呼びながら、だん〳〵に揚げ幕の方へ行くを、源之丞聞きつけ

源之　あれ買へ。

文藏　ハツ……オイ、敵討の次第を

トこれにて一人立戻り

下賣　ハイ、八文でござります。

文藏　エヽ、いくらでもいゝワ。

ト氣をいらち、いきなり錢をやる。下げ賣は揚げ幕へ呼びながら入る。源之丞取つて

源之　ソレ、灯を

まつ　ハイ。

ト云ひながら、二重より行燈を持ち來る。源之丞、待遠しき思ひ入れにて

源之　エヽ、何を愚圖々々

ト氣の急く思ひ入れにて、讀む事あつて

ヤヽヽヽ、こりやコレ甲州石和にて、敵水右衞門が爲に

文藏　すりや、兵助さまは

源之　返り討に。

文藏　若旦那。

トけわしく云ふ。これにて源之丞振り返り、文藏と顏見合せるが、チヨンと木の頭。兩人氣味合ひあつて、文藏は手を組み、チツト思ひ入れ。源之丞は今の下げを引裂き、向うを見込む。お松は赤子しきりに泣くゆゑ、いぶりつける。この模樣よろしく、拍子　幕

二幕目

沖津宿法臺院の場

役名――天城山の行者、宗玄實ハ藤田水右衞門。大岸頼母。三木十左衞門。掛塚官兵衞。法臺院

了善、同所化、残月。同、光月。中野藤兵衛、奥女中、藤川實ハ兵助妻呂綾。石井中間。袖助。

本舞臺三間の間、正面塗り塀、誂への櫃の口出入りあり、上の方黒塗りの門、すべて駿州沖津宿、法臺院の門前、葭簀張りの掛茶屋、参詣の仕出し大勢、各自番札を持ち、わや／＼云つてゐる。所化残月、茶屋の亭主、仕出しを鎮めてゐる體、双盤の音にて幕明く。

参詣　もし／＼、わしらは、明ケ六ツ前から來て居りまする、どうぞ行者様のお加持を

皆々　お願ひ申しまする／＼。

残月　コレ／＼、其やうに騒いでも、順ぐりに参詣は通しまする。靜かにさつしやれ／＼。

光月　なんぼ騒いでも急いでも、先へ入つたお加持が濟まねば、お前方は通されませぬ。

亭主　それぢやによつて、番附の書いた札を渡して置きましたから、お前方は札に合せて、順番にお加持を受けさつしやるがよい。

皆々　何分よろしくお願ひ申しまする。

仕出　して、行者様は、伊豆とやらからお出でぢやござりませぬか。

残月　左やう／＼、行者の出さつしやつたは、伊豆の天城山と云ふ所でござる。萬民の難病を助けん爲

に、この沖津の法臺院へ、お越しなされたのでござる。

亭主　誠にこの度いらつしやつた宗玄行者さまは、有り難い御名僧でござりまするが、そのお方様でも、病といふものは仕方のないものでござる。行者様のアノお顔が

光月　コレ〳〵、茶屋の御亭主、滅多な事を云はつしやるな。あの方の御面體の見ぐるしいのが、卽ち有り難い始まりでござる。

皆々　して〳〵、それはどう云ふ譯でござるな。

殘月　その仔細と申すは、法力尊き宗玄さま、萬民の病を、行者一人の御身に引受けて、世上の人をこの世から、難病助けんとの御誓願。それゆゑにこそあなたの御面體が、あの通りでござる。なんと有り難い行者様ではござらぬか。

皆々　それは誠に生佛樣でござりまする。

亭主　イヤ、生佛樣と申せば、この間お流行りなされた、駿州厚原の荒人神の御利益、曾我兄弟のお二人が、一社の神とならつしやるとは、イヤ、有り難い事でござりまする。

光月　靈驗尊き兩社ゆゑ、國々へ勸請なさるとの事、取分けて勢州龜山の御城主が、殊の外御信心、お國へ兩社を勸請なされ、曾我八幡とあつて、大岸賴母さまといふ御家中が、その御神體を申しう

け、今宵當宿にお泊りと聞きましたて。

仕出　成る程。曾我八幡樣は御利益があると、きつい噂でござりまする。

　　　トこの時奥にて、知らせの太鼓鳴る。

亭主　アレ〳〵、太鼓が鳴る。御祈禱が濟んだと見えまする。サア、これからお前方の番ぢや。

皆々　そんなら、もう參つてもようござるな。

亭主　サア、わしに附いてござりませ。

　　　ト双盤になり、亭主先に皆々、わや〳〵云うて門内へ入る。この時、鳴り物にて、向うより十左衞門官兵衞、麻上下大小。侍ひ中間つき出で來り、花道にて

官兵　イヤナニ、十左衞門どの、卽ちこれが法臺院でござる。さて夥しい參詣ではござらぬか。

十左　誠に、聞きしにまさる寺院の賑はひ、驚き入つてござる。官兵衞どのには、御案内賴み存ずる。

官兵　心得ました。サヽ、お越しなされい。

　　　ト兩人舞臺へ來り、茶屋の床几にかける。殘月、官兵衞を見て

殘月　これは掛塚官兵衞さま、御參詣でござりまするか。

光月　住持了善にもお噂でござりました。お出での樣子を、申し達しまするでござりませう。

ト行かうとする。この時門の內にて

了善　イヤ／＼所化達、住持了善、卽ちそれへ參るでござらう。

ト双盤になり、門の內より了善、誂への袈裟衣にて、中啓を持ち出る。

これは／＼宮兵衛どの、まつた御同道のあなた樣、ようこそ御參詣なされました。

十左　すりや、貴僧が寺院の住持了善とな。身ども事は武田家の家中三木十左衛門と申すもの。この後御別懇に申し談ずるでござらう。

宮兵　卽ち今日十左衛門どのを御同道いたしたは、殿樣よりの御使者も同然。

了善　して御領主より、何御用ござりまして、御兩所樣には。

宮兵　その仔細別儀でござらぬ。この程、當寺へ天城山より、宗玄と云へる貴き行者、入院いたされたよし。見屆け來れと殿より仰せ出され。

十左　殊さら世上の噂には、萬民の病をその身一人に引受け、人民の助けのため、加持祈禱を致さるゝ段、お聞きに達し、かゝる名僧當國に來るも、誠に領主の德あるゆゑと、御感のあまり、いよいよ名僧に違ひなくんば、當院に止め、長く武田家の祈禱所ともなされんとの仰せ。それゆゑ、わざ／＼罷り越してござる。

了善　これは冥加なき御領主樣の御意、愚僧も左やう存じ居れば、住持了善隱居願ひの差出し、宗玄行者を跡目と仕り、當院を相渡したき、拙僧が願ひ。然るに御兩所、殿樣のお指圖によつてお越しありしとは、愚僧に於て身の滿足、有り難う存じ奉ります。サヽ、見苦しくとも當院へ入らせられ、御口談下さるやう、願ひ上げ奉りまする。

官兵　イヤモウ。御住持の喜び、拙者も推察罷りある……イヤ、それは格別、承れば勢州龜山の家中、大岸賴母どの事、今日當宿へ泊りのよし承つたが、十左衞門どのには御緣者との事。いよ〳〵左樣でござるかな。

十左　成る程、大岸賴母が妻月の戸こと、身共三人の同胞のうちにて、末の妹。申さば拙者が妹聟と申すは、大岸氏でござるて。

官兵　イカサマ、左樣なやうにも聞きました。して、其許の直ぐの妹御は、遠州とやらへ緣附きめされた樣子。して、いづれの家中へ嫁ぎめされたな。

ト裏問ひかける。十左衞門こなしあつて

十左　イヤ、月の戸の妹、白綾の事でござるかな。あの者は未だ緣附きとても仕らず、矢張り遠州のお屋敷に、奥勤め致し罷りある。

官兵　左樣なれば、妹御は、未だ濱名のお屋敷に、御奉公をなさるかな。
十左　左樣でござる……イヤ、御住持、奥殿へ參り、委細は申し談ずるでござらう。
了善　コリヤ〳〵、所化達、あれなる三木十左衞門どのを御同道申しやれ。拙僧は殘りて官兵衞どのに、お聞合せ申す一儀もござれば、サヽ、急いで御案內申せ。粗略なきやう御馳走申しやれ。
兩人　畏まりました。
十左　すりや、官兵衞どのには、お後に殘られ
官兵　御住持と內談いたす儀もござれば、貴公はお先へ。
十左　如何やうとも仕らう。然らば住職了善御坊。
了善　十左衞門どの。サ、御案內いたしやれ
兩人　サ、お越しなされませう。
十左　所化達、よろしう。どりや、御寺院へ罷り越さうか。
ト双盤になり、十左衞門家來、所化兩人案內して門內に入る。兩人殘り、思ひ入れあつて
了善　官兵衞どの、何かと貴公のお心遣ひ。
官兵　お氣遣ひめさるゝな。殿の御前は、拙者よしなに推擧いたさん。これと申すも、かね〴〵同腹

了善　中の彼のお方、身共に於て如才はござらぬ。其許の志しは、宗玄どのも、よつく察し罷りある、尤も去年石和に於て、敵討の砌り、返り討にあひました石井兵助、所持いたし居つたる仇討御免のお墨附、此方にござつては不用な書き物、火中いたさんと存じたるを、其許の止めゆゑ、今以て宗玄方に所持いたすが、あの書き物が、何ぞの役に立ちまするかな。

官兵　成る程、敵を覘ふ者には大切なる書き物、又、覘はるゝ身にとつては、却つてその身の災ひ、引破つてもよきところなれど、かねて貴僧も知らるゝ通り、武田家を横領せんと企てし身共、それについて、三老の印可の寫し、似せ物を拵らへるには、この上もなきあの御判、それゆゑ墨附を火中なさるゝをお止め申した。今暫らく所持いたさるゝやう、頼み存ずる。

了善　イヤモ、左樣承つては、いつまでも其まゝに、所持いたさせまするでござらう。その上に愚僧、彼の人より預かりましたるは、右内の討たれしその砌り、藤田へ渡りし鵜の丸の祕書。この一卷は、鵜戸權現の不思議がござつて、かねて白蛇が附添ひ居れば、人知れず佛間へ隱し置きますが、いよ〳〵當院、武田の祈願所となる時は。

官兵　身共が大願叶ふの時。それゆゑ、彼の人を貴き行者と申し立て、武田の家へ入りこませ、法力ご

かしに、邪魔になる家中は追ひ退ぞけ、家國を此方へ引きあげる　根組みの計略、頼むは行者の心にござる。首尾よくゆけば、宗玄御坊も還俗して、武田の家の家老職。

了善　その時こそは愚僧も、この身の奢りを極め、活計歡樂。

官兵　たゞ氣かゝりは行者の面體、あれは誠の

了善　病でござらぬ、藥の一德。かねて實親卜庵の、祕方の藥方存じた藤田、毒は勿論面體まで、見まがふ如くの難病と、人目を憚かる作病なれば、面をなほさんその時は、外に用ゐる一藥ござつて、服する時は忽ちに、半時ばかりに以前の面體。よき藥方を存じたが、その身の仕合せ。

官兵　さすれば、あれほど醜き面も、用ひる藥で半時にも、元の如くに平癒の

了善　それが卽ち藤田の家傳。

官兵　願ひ成就の上からは

了善　なほす藥で

官兵　以前の如く

了善　立派な人がら

官兵　その時藤田の

丁善　コレ。ト思ひ入れ。

祕すべし〳〵。

、ト思ひ入れ。音樂になり、この道具廻る。

本舞臺上の方、障子屋體。正面は法臺院總卵塔の體。上の方よきところに、石井兵助の墓あり、側に藤田水右衞門の墓並べて立て、うしろ生垣、めい〳〵の俗名書いたる塔婆を立てあり、下の方草井戶、好みの道具にて納まる。

ト笙の入りたる合ひ方になり、向うより白綾、奧女中の拵へ、珠數をつまぐり出て來る。後より藤兵衞、一本差し、やつし作りの小者にて、樒、墓手桶をさげ、袱紗包みを持ち出て來り、花道にとまる。障子屋體の內にては、伏鉦の音する。

藤兵　モシ、藤川さま、これが卽ち法臺院の總卵塔、お尋ねなさるゝ墓は、このあたりでござりませう

白綾　わしはお墓を尋ねる程に、其方は水を汲んで來てたも。

藤兵　畏まりました。

ト矢張り鳴り物にて兩人舞臺へ來り、藤兵衛は下手の草井戸より水を汲みあげる。此うち白綾、方々と墓を尋ねる事あつて、石井藤田の塔婆を見て

白綾　俗名石井兵助。

ト讀み、恨めしき思ひ入れ。

俗名藤田水右衛門。

ト讀み愁ひの體。

墓が知れたわいの。この石へお花をあげて、よう掃除をしてたも。

藤兵　ハイ〳〵、早う知れましたな。

ト藤田の石塔へ水を入れ、いろ〳〵掃除をして、樒を立てる。此うち白綾、墓に向ひ、口中にて念佛を唱へる。

藤兵　まことに水が垢だらけでござりました。施主がなささうに見えまする。

白綾　その筈の事ぢやわいの。併し、墓に記した年號を見れば、今年は一周忌、殊に今日は命日ぢやわいの。

藤兵　エヽ、左樣でござりましたか。成る程、去年の年號でござりまするな。一周忌が來ても、花が一

本あけてないは、誠に無縁と見えまするわい。

白綾　コレ、其方は、わしがお墓へ御回向申してゐるうち、お寺へ參つて云はうには、縁者の者が參詣いたしました。何卒行者樣へお目見得を願ひまする、よろしうお取次頼みまするると、申し入れて來、てたもいなう。

藤兵　左樣なら、私しはお寺へ參つて、左やう申しませう。お前樣はその間、爰で御回向。この包みはこれへ置いて參りまする。

ト墓手桶をのせる井戸端の棚へのせる。

白綾　早う行て來やれ。

藤兵　畏まりました。

ト木魚入り、伏鉦入りの合ひ方になり、藤兵衛入る。白綾あと見送り、墓の側へ寄り、塔婆を抱きかゝへ、涙にむせびし思ひ入れあつて

白綾　今はこの世になき人の、俗名藤田水右衛門さま、よし御存命なさればとて、よも御存じはござりますまい。私し事は遠州濱名の奥に勤めし者、いつぞや濱名家へ仕官なさる筈になり、その時お前を見初めてより、一つ屋敷に奉公せば、申し出す折もあらう、また獨り身のお身ならば、

夫婦の語らひせん事も、奧向きの御首尾次第と、喜んでゐる甲斐もなう、石井右內が舌三寸の妨げゆゑ、御身の有りつき妨げられ、ほいなう思ふ其うちに、去年彌生の末つ方、甲州石和とやらにて、右內が弟石井兵助、彼の地に於てめぐり遇ひ、御身に向ひて無實の災難。さはさりながら、善心あるお前ゆゑ、當寺へ來り、人を害せし事を憂ひたまひ、それを氣病みて御病死と、承はつて、賴みの力も落ちはてゝ、もう私しは生涯に、男は決して持ちませぬ。御存命の砌りにさへ、御存じない筈。まして世を去る藤田さま、モシ、不便なと私しが心の內、御推察くださりませ。

ト塔婆を抱へて泣き入る。この時、上の方の障子ソツと開け、宗玄、好みの頭巾、額へ薄絹にて引まくをおろし、面體を隱せし體。鼠麻の衣、鼠布子にて出家のこしらへ、鉦を打ちゐたりしが、白綾の樣子を聞き、窺ひ見る體。白綾、兵助の墓に向ひ

白綾　青霜歸劍信士、俗名石井兵助どの、こなたは恨めしい人ぢやなう。右內を打ちしその者を、よくよく詮議もせず、死骸に殘る片袖を便りとなして、お上に願うて御免の御書を申し受け、覺えなき藤田どのを敵呼ばはり、その天罰がその身に報ひ、やみ〳〵と返り討。それを氣病みに藤田の病死。思へば〳〵こなたほど、恨めしい人はないわいの。水右衞門どの存命ならば、夫婦の結びも叶はうに、今は世になきこの印。それもこなたがなせる業。エヽ、腹の立つ。

ト兵助の塔婆を恨めしげに見やり、二つに折りて捨てる。途端、宗玄と顔見合せ、折れたる塔婆をそつと隱す。

白綾　あなた樣は。

宗玄、愚僧はこの程天城より、當院へ來りし宗玄行者。して、婦人には檀家のお方か。

白綾　ハイ、これたる佛に緣者の私し、それゆゑ墓參り致しまする者でござりまする。

宗玄　それは御奇特。サヽ、これへござつて澁茶なりとも。

白綾　有り難う存じまする。

ト合ひ方になり

宗玄　只今居間より見受けしところ、水右衛門とやらの墓に向ひ、愁傷の體。殊に緣者の人とお云やるが、その佛の妻女と申すお方かな。

白綾　イエ〳〵、左樣な者ではござりませぬ。

宗玄　左樣でなうて何ゆゑに、さほどに悲嘆の淚に。

白綾　サ、ちとした譯がござりまする。行者樣へ申し上げるも、お恥かしう存じまする。

ト思ひ入れあつて、懷中より包み金十兩あまり袱紗に包みたるを出し

宗玄　些少にはござりますれど、藤田氏の亡き後を、よろしう御囘向お願ひ申し上げまする。

お頼み無うても、世界の人を助けまするが出家の役。分けて愚僧が大願にて、世にある人の難病を、行者がこの身に引受けて、救はせ給へと、佛へ誓ひ。それゆゑにこそ、人の病は癒せども、この身は世界の難病を引受けしやら、俄に面もゝがさの如く、名もなき病も佛へ誓ひの大願、屆きしやらんと愚僧が喜び。さるにても佛前にて、穢れ不淨の面と存じ、薄絹顏へかけたるは、佛を恐るゝゆゑの事。

白綾　左樣のお噂承はり、わざ〳〵御囘向受けんが爲、お參り申してござりまする。行者樣には私しが、心ばかりのこの布施物。

宗玄　イヤ、婦人の手より行者、布施物は受けませぬ。云はゞ、天城山の深山にて、難行苦行に身を凝らし、山野に伏したるこの宗玄。國土の寶をこの身に受けて何かせん。殊には大願を起し、佛へ誓ひの大行者、もしや佛法妨げんと障化の業か。イヤ、障化さはりの憂ひもあれば、申し受けぬ、女中にはゆるりと參詣。

白綾　エヽ。

ト寄ろうとする。

宗玄　南無阿彌。

ト障子をさす。合ひ方音樂になり、白綾、本意なき思ひ入れにて、後見送り思ひ入れ。障子の内、伏鉦、回向の體。

白綾　すりや年若き私しゆゑ、もしや色ある心かと、お疑ひの心あつて、今の如くの御挨拶、さら〳〵無理とは存じませぬ。さりながら、望みをかけし御身も、今はあの世の苔の下、便りなき身の女子のはかなさ。主命ゆゑに只今まで、惜しからざりし命を延ばはり、今月今日主人のお暇出でたる上は、この身は誰れに憚からぬ、夫といふは藤田どの、今日の忌日に女夫の結び。

ト合ひ方かはつて、墓手桶に水を向け、茶碗を持ち來り、藤兵衞の置いて行きし袱紗包みの内より四方の白布を出し、墓の前に敷き、その上に坐し、懷中より懷劍を出し、件の茶碗にて墓水をすくひ、

一ト口のんで

世になき人と祝言の、これぞ誠に水杯。わたしが飲んで憚りながら、あとはお前へ水向けの

ト茶碗を石の上へ置き、樒にて水向けして

これでわたしが願ひも叶ひ、この世の縁は叶はずとも、後世こそ大事。即ち爰で

ト短刀にて髻を切つて墓へ手向け

望みなき身はわしも早う。南無阿彌陀佛。

ト短刀を咽喉に當てんとする時、バッタリと音して、上の障子の間より撞木を打ちつけ、白綾のきゝ手に當り、短刀を落す。思ひ入れあつて

自殺のこの手を止めしは、あの一ト間よりこの撞木、打つたる手の內たゞ人ならぬ、手練の手の內。南無阿彌陀佛。

トまた咽喉へ白刃を當てる。また音して、水晶の珠數、件の白刃へ、くる〳〵とまとひし體。白綾キツト見て

又も自殺を妨げる珠數の手の內、白刃へまとふは、手練のお覺えあるお方。おとめなさるお心か。但しは座興の戲れか。

ト障子の內にて

宗玄「初春の初音のけふのたまはゞき、手にとるまではゆかし玉の緒。」

白綾 ヤ、その古歌は聞き及ぶ、志賀寺の上人、六條の御息所へ送りし戀歌。口ずさみ給ひしは、いづれのお方。

宗玄 卽ち當寺の宗玄行者。

白綾　エ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、本釣り鐘の鐘入り、障子をそつと開け、宗玄、手箱を抱へ窺ひ見る。

あなたは行者の宗玄さま、武家へ仕へし私しも、少しは女子の心がけ。思ひがけなう一ト間より、撞木を以つての手練の程、殊に珠數にて白刃の面、おとどめなされしお手の内、深山にあつて御經讀誦の、貴き聖にお似合ひなされぬ行者の手の内。武家にて生立ち給ひしか。お包みなされず御身の素性、お明かしなされて下さりませ。

宗玄　イヽヤ、行者は幼きより、出家沙門に相違ござらぬ。

白綾　御出家樣ならこの世を見殺し、あの世を助けて下さりませ。

ト白綾見て又自殺せんとする。立廻つてその手を押へ

宗玄　ハテ、誠ある女中の胸中、人を助ける出家の習ひ、それゆゑとめる。助けにやならぬ。

白綾　御出家なれば、あの世の苦患を、お助けなされて下さりませ。

宗玄　然らば愚僧はこの世はとめぬ。この世をとめるは外にある。

ト立廻つて有りあふ彼の塔婆にて戒名の方を差し出し

今の自殺を止めるは、塔婆に記せし戒名、この戒名が俗名と、なつて劍の手の内とめる。女中、生害

暫く無用。

ト思ひ入れ。白綾こなしあつて

白綾　釋田譽幡龍、俗名藤田水右衛門。すりや戒名も俗名も

宗玄　とゞめる塔婆の筆勢は

ト白綾よく〳〵見て

白綾　手跡は正しく本目流、すりや御病死と沙汰ありしが、もしやゆかしき藤田さま、矢張りこの世に。

宗玄　今に存命。

白綾　エ。して、いづ方に。

宗玄　しかと在所は存ぜねど、その存命の證據は即ち

ト手箱より敵討御免の書を出し

石井兵助源之丞、上へ對し敵討、三老方の印が据わりし御免の御書、いつぞや甲州石和にて、手に入つたりしこの書き物。

白綾　石和と云ふは去年の春、右内が弟兵助が、返り討に會ひし場所。その時お前の手に入りしと仰

しやる書き物、もしやあなたが、わたしの尋ぬる

宗玄　その藤田にはあらずとも、水右衛門が病死と聞き、落涙なす女中。して其許は、いづれに勤めし

白綾　私しことは、濱名家の奥づとめ致したる、藤川と申す者。藤田氏には御存じなく、わたしばかりが戀ひ慕ふ、この戒名の水右衛門。流れの末は藤川の、早瀬せはしき御奉公、今にもゆかしい藤田さま。もし、存命にてあるならば

宗玄　添ひとげめさるゝ心よな。

白綾　一旦思ひ込んだるお方。

宗玄　して、その證據は。

白綾　證據は即ちこの切り髮。これより上の誠はよもや。

ト見せる。

宗玄　實に尤も。然らばこの身の大事を打明け

白綾　して又、あなたの生立ちは。

宗玄　武家に育ちしこの行者、家名は即ち。

トあたりを見廻し、砂をならして指にて書く。

白綾　すりやアノ御身が、わたしが尋ぬる
宗玄　藤川、藤田。
白綾　エヽ。
宗玄　アヽコレ、他言は無用。それまで預けるその書き物。
白綾　サア、きつとわたしが預かりました。さりながら、見初めし時とは面の相違、これには仔細の
宗玄　それぞ尤も、さりながら、口外せねど藤田の何某、敵と覘ふ輩あり、それゆゑ面を變へたるは、卑怯ながらも年寄りし、親を思ふが故のこと。即ち藤田家祕方の毒藥、服する時は命を斷ち、まつた面を一日一夜、その毒にて洗ふの時は、斯くの如くに面體變へる希代の藥方。
白綾　して又面を癒やする良藥、あつての事ゆゑ、さほど醜き。
宗玄　それも治するの妙藥あつて、疑はしきは其方の心底、見極めた上愚僧が面體。
白綾　元の如く癒してわたしに。
宗玄　疑ひ晴らせし、その時こそは
白綾　見初めしお方と
宗玄　互ひの名乘り

白綾　それまであなたは。
宗玄　この面體にて領主の使者へ。
白綾　お目見得あつて、その時は
宗玄　疑ひ晴らせば
白綾　わたしが安堵。
宗玄　必ずそれまで。
白綾　なんの離れう、藤田さま
宗玄　コレ。

ト思ひ入れ。白綾こなしあつて

白綾　おなつかしうござんしたわいなァ。

ト彼の塔婆を抱へて思ひ入れ、双盤になり、下座より了善出て來るゆゑ、兩人思ひ入れ。

了善　武田家より今日の御使者、いよ〳〵行者をお館へ伴ひ、殿のお目見得相濟みなば、御祈願所ともなされんと、評議とり〴〵。よき幸ひ、兩使へ面談いたされてよからう。
宗玄　然らば使者へ對面の上、武田家御武運長久の、札守を認めて差上げるでござらう。さるにても、こ

の婦人、尼に成りたき願ひござつて、行者へ推しての頼み。今宵は院内に止め置きますれば、この儀御沙汰に及ばれてよからう。

了善　心得ました。見ましたところが切り髮の尼御、大事ござらぬ。

宗玄　それにて行者も安堵仕つた。コリヤ婦人、聞く通りの儀、誰れ憚らず今宵は寺に。

白綾　エヽ、有り難う存じまする。

宗玄　イザ、御同道仕らう。

ト音樂、唄になり、宗玄先に手箱を持ち、白綾、了善ついて入る。時の鐘、誂らへの合ひ方にて、下の方生垣を押しわけ、藤兵衞、窺ひ出て

藤兵　何だか合點がゆかねえわえ。今日は是非〳〵墓參りと、參詣さしつた藤川さま、いつの間にやら髮切つて、尼になる心がけ。その女中を何氣なく、寺へ泊めると行者の詞、こいつもどうやら怪しいわえ。

ト思ひ入れ。風の音になり、いづくよりか白蛇一疋現れ、水右衞門の石塔へ這ひ上がる。合ひ方になり、十左衞門、庭下駄にて、この體を見て、怪しみ出て、思ひ入れあつて

十左　斯く草深きこの院内、くちなは多くあるは治定と存ぜしかど、ひばかり蝮の類にあらず。

藤六　見れば尺餘のあの白蛇、この石塔へ這ひまとふは、何ともつて。

十左　傳へ聞きたる日向の國、鵜戸權現の神勅にて

金六　白蛇は正しく一卷を。

ト兩人思はず顏見合せ、こなしあつて

兩人　ハテナ。

ト思ひ入れ、暮れ六ツの鐘にて道具鷹揚に廻る。

本舞臺三間の間、常足の屋體。向う唐紙、法臺院奥座敷の體。上手に寄せて障子の間あり。よき所に短檠を照らしある。六ツの鐘にて道具納まる。

ト奥より宗玄、頭巾を取り、月代の伸びたる體にて、柄香爐を持ち、出て來り

宗玄　最前の女中、さぞ待遠でござらう。

ト合ひ方になり、障子屋體を開け、白綾、旅櫛箱を出し、切りたる髷を直してゐたりしが、宗玄を見て

白綾　まだお手間がとれませうと存じましたに、お早うござりました。いよ〳〵お上のお首尾は、よろしうござりまするかえ。

宗玄　成る程、使者の御兩所へお目にかゝり、近々殿へお目見得、喜んで下され。

白綾　おめでたうござりまする。

宗玄　女中には、最前拂ひし黒髪の、髷を又ぞろ附け鬢して。

白綾　ハイ、先刻私しが、手づから切りましたは心の潔白。此やうに假りに附け置きまするは、あなた様のお十念を受けまして、その後改め、あなたのお弟子に、罷り成りまする尼法師と、左やう存じて、斯様に髷を。

宗玄　成る程、左様なさるゝもよくござらう。只今これにて宗玄が、女人成佛の十念を授け、その上にて行者が弟子に致すでござらう。いよ〳〵婦人はその心か。

白綾　何しに僞り申しませう。先程自殺も致すところを、お止め下された行者様、是非にあなたの、お弟子にどうぞ、サ、わたしを早う、尼になされて下さりませ。

　　トしなだるゝ體。

宗玄　その心に違ひなくば、只今、これにて尼法師、佛の御弟子と致して進ぜう。

　　トあたりより銚子、杯を取出し

サ、女中、御酒一献參らぬか。

白綾　ハイ、有り難うはござりまするが、今にも髪を落しまする私し、御酒下されても

宗玄　大事ござらぬ。不淨を拂ふ玉箒、酒まゐつても苦しうござらぬ。お酌仕らう。

白綾　これはしたり、勿體なうござりまする。

ト會釋して、互ひに飲み合うてゐる、合ひ方になり、奥より殘月出て

殘月　お支度出來あがりましてござりまする。

宗玄　コリヤ〳〵、所化、用事はない、行きやれ〳〵。

殘月　ハイ〳〵、もう御用はござりませぬか。アヽ、女人成佛、こいつは堪らぬ。

ト思ひ入れ。

宗玄　ハテ、行けと申すに。

ト叱られ、殘月うろたへ奥へ入る。宗玄、袈裟衣を取り、銚子杯を持ち、一間の所へ來り、思ひ入れあつて

サ、女中、遠慮には及ばぬ。

白綾　ハイ。

トもじ〳〵する。

宗玄　ハテ、大事ござらぬ。これより卽ち尼になるには、爰へござつて愚僧が十念を受けねばならぬ。
サヽ、爰へ〳〵。
白綾　行者樣には私しを、爰へお呼びなされたは。
宗玄　先刻申した古歌の心。
白綾　先刻の古歌とはえ。
宗玄　たゞ今宵こそ
白綾　すりや、新枕。
宗玄　出家堅固も今よりしては
白綾　わたしに見代へて下さんすか。
宗玄　佛の御罰受けるも合點。
白綾　エヽ。
トこの時懷中より藥包みを出して銚子の中へ入れる、白綾認めて
銚子の中へ何やら。
宗玄　これぞ面體忽ちに、治する藥は藤田の家傳、酒に浸して飮む時は、一時もたゝぬ其うちに。

白綾　お顔もわたしが見初めたる、すりやその節の殿御の面に。

宗玄　コリヤ……その時疑ひ晴らしやれサ。

白綾　エヽ、嬉しうござんす。

ト、こなし、唄になり、障子を締める。時の鐘、チリ〳〵の合ひ方、奥より殘月現れ、障子の内へこなし。

殘月　サア〳〵行者樣が、今の女へ御十念ぢや。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト思ひ入れ。矢張り、チリ〳〵の合ひ方にて光月、探りつゝ奥より出る。

光月　コレ、兄弟子々々、殘月々々。

殘月　ヤア、よい所へ弟光月。コレ、脚氣が起つた〳〵。

ト光月に縋る。

光月　アヽコレ、殘月々々。どうする〳〵。

殘月　ハテ、脚氣が起つた。ちつとの間、藥になりやれ〳〵。

光月　アヽ、坊主殺しだ〳〵。

トわめく。兩人なかしみの事あつて、奥より藤兵衞何心なく出て來る。兩人うろたへ、猫の眞似して走

り入る。

藤兵 なんだ彼奴らは。頭の丸い猫ださうな。それにしても、アノ藤川さまは、どこへお出でなされたやら。

ト尋ねる體にて、障子のところへ來り、思ひ入れあつて

さてこそ、爰に出家と女のどれ合は、不義者だ〳〵。寺中の手合ひ、出合はぬかえ〳〵。

ト大聲にてわめく。これにて奥より十左衞門、官兵衞、了善、所化二人出で來り

十左 心得ぬ院内にて、不義者ありとは何を以つて。

官兵 見馴れぬ男、わりやァ何者にて、寺中を騒がす高呼ばはり。

了善 最前女中の供いたし參つた下郎、何を見付けて不義とは申すぞ。

藤兵 見付けた〳〵。きつと見付けて、押へた不義者、殊に間男命づく。品によつたら坊主の首にかゝりませう。その間男の本尊は、即ち爰に。

ト障子を開ける。兩人さし俯向いてゐる。

官兵 イヤア、見馴れぬ女に、一人は行者の宗玄どの。

十左 お家御武運長久の、その祈願所とお見立てあり、いまだお目見得すまざるうち。

了善　かゝる身持は何事ぞ。天魔のみいりしか、宗玄御坊。云ひ譯ござれば、サヽ、早うお云やれ、ナヽなんと。

藤兵　イヽヤ坊樣、騷がつしやるな。この上もなき二人は不義者、その上行者は間男だぞ。

宗玄　默り居らう下郎め、女中は最前宗玄に、香剃り願うて尼法師、黑髮切つても愚僧が弟子と、賴み來りし女ゆゑ、卽ち髻拂ひし尼御、證據は卽ちコレ。

ト白綾の髻を取つて出す。

白綾　イエ〳〵、今さら其やうな、お前の身拔けは、聞えませぬ仰せ。尼にならうと願ふわたしを、無體に引入れて、髮も其やうにお前の手にて、無理心中に切つた髻、云ひ約束のあの男、見られた上は、この身の覺悟。

宗玄　ヤヽ、すりや最前申した言葉に相違して、今さら愚僧を不義者に落しに來たは、さては女は僞りよな。

ト立ちかゝる。藤兵衞とどめ

藤兵　間男したるその上に、おれが女房に指でもつけると、この寺を連尺つけて脊負つて行くぞ。

所化　イヤアヽ。

宮兵　ヤイ〳〵下郎め、たとへ行者が女を犯せし、その疑ひがあるにもせよ、なんでおのれが間男と、高言吐いてぬかすのだ。

藤兵　知れた事だワ。藤川どのは藤兵衛が、奥勤めの砌りより、暇が出たなら女房にならうと、おれを頼んだ女中、内祝言も濟んでゐる。それだによつて間男だ。女と坊主の首二つ並べて見せる。さう心得てゐさつしやい。

十左　然らばそれなる下郎めが女房、その藤川にいよ〳〵宗玄、不義云ひかけたに相違はないか。

了善　イヽヤ、名僧智識の身として、よもや行者が何ゆゑ女に。

白綾　イエ〳〵、たとへ智識のお方にせよ、尼の願ひのわたしを捕へ、不義なされたに毛頭違ひはござりませぬ。アイ、夫のある身を御出家の、三衣にかけての無理口說き。その心根がいとしさに、行者の心に從ひました。コレ、藤兵衛どの、腹も立たうが、今日からは、お前をふッつり思ひ切り、御出家樣の女房になる氣ぢや。サ、さう諦めて、去り狀書いてさつぱりと、宗玄行者の女房に、わたしをやつて下さんせ。

藤兵　ナニ、去り狀を書いて坊主の女房にやつてくれとは、エヽ、こなたは〳〵、それほど坊主に惚れ込んだか。

白綾　サイナ、出家に似合はぬ心ざしにほだされて、主の女房になる氣ぢやわいの。

　　　トきつと云ふ。宗玄、思ひ入れあつて

宗玄　さては行者の胸中を、探りに參つたこの女、身に覺えなき事までも、滿座の中にて出家に恥を與へたる、慥かに身共が俗性を。アイヤ、愚僧が素性を探らん爲、色で仕掛けし今日の仕儀。さは知らずしてこの身の上を。

白綾　お前の以前は武家育ち、伊豆の天城の山ごもり、深山に生ひ立ち名僧の、木の葉衣の佛經に、說きおかれたる天竺にて、阿羅々に仕へし釋尊の、そのお姿は藤かづら、家名は藤田。

宗玄　ヤ。

白綾　サ、藤蔦葛身にまとひ、淸き流れも谷川の、濁りに染まぬ靈水は、手向けんあかの水右衛門、水の流れと人の身は、行くへ定めぬ藤川が、行者のあなたを墮したゆゑ、わたしは無間苦を受ける、それも合點宗玄さま、今日からお前の女房ぢやぞえ。

十左　かゝる婦人を寺中へ引き入れ、大俗同然の行者の身持ち。かゝる破戒の宗玄を、お家の祈願所なんぞとは、思ひもよらぬ儀。掛塚氏、貴公は如何思さるゝぞ。

官兵　某とても、夢にも此やうな出家と存ぜぬゆゑ、推擧いたして今更に後悔。了善どの、貴僧は如

何計らはるゝ。

了善 たとへ女がいたづらたりとも、それに同意の行者の身持ち、出家にあるまいこの體裁。寺法の通りに計らひまする。用意の一品、愚僧が手づから。

ト つか〳〵と奥へ入る。

十左 左樣なうては叶ふまい。官兵衞どのにはこの旨、殿へ言上なさるか。

官兵 申し上げねば、推擧せし身共が越度、今日たゞ今宗玄の、三衣を即ち持參なし、右の樣子を言上いたさう。

ト有りあふ袈裟とりあげる。この時奥より了善、白張の傘の内へ一腰を隱し、持ち出て宗玄に向ひ

了善 サア、宗玄どの、只今よりして阿房拂ひ、掟の通り傘一本で寺開く、これが出家の掟、身より出でたる錆と心得、この傘でナ、急いで寺をナ、きり〳〵院中まかり出で、いづれへなりと。

ト傘の内に一腰あることを敎へながら渡す。

宗玄 傘一本が寺法の掟、今よりこの身を捨て坊主、人の門辻修行の僧、この傘の天が下、骨は即ち六十六本、諸國をはつちのよき便り。たゞ願はしきは只今まで、日夜囘向を致したる、佛間に飾りし厨子入りの、あの御佛を申し請けたい。

了善　尤もの願ひ。

ト走り行き　正面の佛間より一巻の入りし廚子を持ち來り

貴僧が朝夕祈念の尊像、所持して早う、いづれへなりと。

ト宗玄に渡す。

宗玄　宗玄しかと受取り申した。

藤兵　出家の掟はそれでも濟まうが、假にも女房を間男され、うつけになつたこの藤兵衞、こなたも相手だ、藤川どの、お寺をかりて不義の仕打を

白綾　この身のいたづら露顯の上は、わたしも大家の奥勤め、女ながらも武家奉公、命を惜んで今さらなんの。サ、男に持たうと契約の、藤兵衞、其方の存分に。

藤兵　その心なら相手の出家も、ならべて置いて。

ト立ちかゝる。了善とめる。官兵衞へだてろ。

官兵　出家に寺を開かすからは、これより上の仕置はない。然し心に叶はずば、金ところばゝ存分次第首代とまで、いじかつて、蛇の目を洗うて。

十左　洗うて行かずば女は勿論、亭主分とは聞くものゝ、男も立つまい。

官兵　扱かふ金は了善御坊。
了善　愚僧がよしなに、サ、宗玄、寺中をとく〳〵開きやれ。
宗玄　ア、思へば女が
　　　ト思ひ入れあり
佛の御罰。
　ト件の廚子を取りあげる。薄どろ〳〵にて又白蛇現れ、廚子のあたりへかゝる。白綾驚き
白綾　アレ、くちなはが
十左　廚子へまとうて。
　トかゝるを宗玄その手を拂つて、キツトなる。唄、時の鐘にて各々こなしあつて、藤兵衞、白綾を押しやり上手へ入れる。官兵衞、了善と目まぜして、袈裟衣を持ち、十左衞門さきに向うへ入る。了善同宿をつれ奥へ入る。合ひ方、時の鐘にて、宗玄思ひ入れあり
宗玄　我れを僞はるあの女、濱名の奥を勤めしなんぞと、當寺へ入込み宗玄が、素性を知らん爲なる事は、知らずして色にほだされ、十が九ツ云ひきけしは、この身の不運、正しく石井にゆかりある、白綾に極まれば、助け置かれぬ敵の身寄り。最前彼奴が胸中を、誠と思ひ仇討の、御免の書き物

まで、騙かられしゆゑ渡しおきしが、今より直ぐに面體を、元の如くに癒すの良藥、最前服してあるからは、一時片時にこの相變へん。さある時には大俗の、姿となつて一旦この地を。

ト傘の内の一腰を出し、寢刃を合はせて腰にさし、廚子の内より鵜の丸の一卷を出し、ニツタリと思ひ入れあり、裏に書きたる歌を見て

宗玄「勝つとても高きをひすな古へも、勝ちて兜の緒をぞ締めける。」

ト凄き合ひ方になり、障子屋體へかゝるを、藤兵衛窺ひ出て

藤兵　さてこそ、藤田水右衛門。

トかゝるをすかさず、拔打ちに切る。たじろぐ。宗玄血刀を下げてゐるを、白綾、懐劍を持つて

白綾　石井兵助が妻、白綾、夫の敵。

ト突きかゝる。

宗玄　さてこそ白綾、よくもおのれは。

ト切つける、藤兵衛よろめき、宗玄へ縋るを蹴とばし、白綾を切り下げる。白綾切られながら突きかかる。藤兵衛むしやぶりつくを宗玄、二人を相手に立廻り、時の鐘、凄き合ひ方になり、向うにて、バタ〳〵と人の來かゝる音するゆゑ、宗玄向うを窺ひ、唐紙を蹴破つて逃げる。向うバタ〳〵にて、

十左衞門、逸散に走り出て來り、この體を見て

十左　ヤヽ、妹白綾、中野藤兵衞、手を負うたか。さては行者の宗玄が

白綾　夫や兄御の敵たる、いよ〳〵藤田水右衞門、懐中には尋ぬる一卷。

藤兵　傘に隱せし一腰にて、思はぬ深手の白綾さま。

十左　さては住持の了善が、藤田は病死と石塔立て、面體姿を變へたる宗玄。

白綾　武田のお家の御祈願所、迂濶に討たれぬ行者の宗玄、不義云ひかけてこの身を穢し、素性を聞出し、いよ〳〵藤田に極まらば、わざと討たれて甥の殿、源之丞に敵を討たせん心にて、現在敵に肌ふれて、水右衞門と知つたる上は、コレ

ト懐中より御書を出し、十右衞門へ渡し

又敵討は天下の法度、お尋ねあらば御免の御書、この白綾が敵ぞと、願うて石井の

十左　右内の敵は兵助が、天運盡きて返り討、それにて双方勝負は濟む。今より改め白綾が、討たれし上は、伯母の敵を源之丞が、討たねばならぬ養子の義理、この御書、緣ある大岸へ、きつと手渡し。

藤兵　白綾さまのお妹御、月の戸さまは龜山にて、大岸さまに連れそふからは、爰へ使つて、何卒敵の

白綾　憎しと思ふ水右衞門、明石の養子源之丞が、討つて石井の家再興。
十左　討たするほどに、迷はぬやうに
白綾　お賴み申す、必ずともに
　　ト あたりを尋ねる思ひ入れ。
十左　すりや、兩眼は
白綾　暗き未來へ……兄上樣。
　　ト 探り寄る。
十左　臨終稱念。
　　ト この時、了善窺ひ出て
了善　その書き物を
　　ト かゝる。藤兵衞よろぼひ寄つて了善を引附ける。白綾は落入る。十左衞門、摺り寄つて思ひ入れ。
　　寺の鐘の送りにて、この道具廻る。
本舞臺、三間の間、以前の道具へ戻り、正面に樋の口、舞臺前は浪板、流れ灌頂、掛け茶屋葭簀な

巻き、床几片寄せてある。その上に、頬かぶりの男、木綿袷をすつぽりとかむり、下駄を枕にして寢てゐる體。時の鐘にて道具とまる。

ト向うより夜番、法臺院と云ふ提灯と、六尺棒を持つて出て來る。

夜番　火の用心〳〵。

ト呼び廻り、寐てゐる者を見て、窺ひよつて

誰れだ、そこに、寐てゐるは、起きて行かぬか。コレ、起きて行け〳〵。

ト足の方からゆり起す。件の男、ものも云はず、夜番を蹴とばす。

ハテサテ、ぞんざいな奴だ。イヤ、呆れた奴だ。こんな無法者にあうては、身の用心〳〵。

ト棒を突いて下座へ入る。時の鐘かすめて禪のツトメ、向うより旅なりの中間二人、箱提灯を持ち、旅乘り物、旅陸尺二人にて擔ぎ、ぶツ裂き羽織の旅の侍ひ二人、挾み箱持ち、鎗持ち、兩がけ、油單かけ、右の供廻り、すげ笠、脚絆にて出で來り、舞臺へ來る。この時樋の口のあたりより白刃出る。皆々これに驚き、乘り物をよき所へ下ろし、ワアと云つて提灯一張り捨てゝ下座と向うへ入る。矢張り時の鐘、蛙の聲、凄き合ひ方。樋の口をあけ、濡れたる宗玄、件の一卷を咬へ、血刀を下げ、尻をからげ、窺ひ出で、探りよつて、流れ灌頂の柄杓にて、川水を掬つて飲み、捨てゝある提灯を取つて、

　流れにさしより

宗玄　良藥飲んでもう一時、最早相好變りしか。

ト提灯を取つてあたりを窺ひ、前の流れに近寄つて提灯を右の手に差上げて、川の面を照らし、水に映る顔をキッと見る。この時宗玄元の顔になる。水に映るを見附けし體。この途端に時の鐘の頭、床几の上に伏したる男ずつと起き出で、三尺をしめ、身ごしらへする。この男、袖助にて、中月代のこしらへ。此方の乘り物を開け、頼母、野袴ぶッ裂き羽織、大小にて窺ひ出る。宗玄、提灯を下に置き、一巻を持ちかへ

宗玄　うつりし面體。元の如くに流れの水に。

袖助　さては。

ト兩人兩方よりかゝる。宗玄、提灯を消す。これより誂らへの凄き鳴り物にて、暗き立廻り。一巻を枷によろしくあつて、袖助、件の袱紗を取る。宗玄、一巻を持ち行かうとする。頼母引きとめる。立廻りのうち、宗玄が身がまへ、いち／＼心を付ける事仕組みよろしく、よきキッカケに知らせあつて、空へ朧月を出す。このあかりにて、袖助、袱紗をキッと見て

袖助　勝つとても高きをひすな古へも

頼母　鞠ヶ瀬流を覺えし手練。

宗玄　ヤ。

ト切りつける。ちよんと木の頭。月へ雲かゝり、また暗きこなし、三人分つてためらふ、これをキザミにて、時の鐘の送りにて　　拍子幕

三幕目

彌勒町揚屋の場

淨瑠璃「蟬霑恨鮫鞘」　常磐津文字太夫連中

役名——香具屋彌兵衛 實ハ石井源之丞。掛塚官兵衛。若黨、轟金六。藤田下部、伴助。丹波屋女房、おりき。仲居、お鐵、藝者、おかう。仲居、お雪。練り子、竹野。同、松野。法臺院番僧、光月。常磐津の與八、藝者、丹波屋お妻。隱亡、八郎兵衛。藤川水右衛門。

本舞臺、正面平舞臺、向う茶壁、のれん口、下の方九尺の板羽目、誂らへの高窓、この障子明けたて

上の方、九尺の二階屋體、葭簀の上げ下ろし。この軒口に蝶衛の紋散らしの丸提灯、いつもの所に門口、いゝ、丹波屋と書いたる懸け行燈。幕の内より官兵衛、夏衣裳、侍ひの拵らへ。お鐵、お雪、仲居の形揃ひの前垂れ。おりき、茶屋女房、後家の拵らへ、皆々夏衣裳、酒肴取散らし、すべて駿州彌勒町、揚屋の體。獅子の太鼓、祇園囃子にて幕明く。

てつ　マア〳〵、お待ちなされませ〳〵。

官兵　イヤ〳〵、身共は歸るぞ〳〵。駕籠を申し附けい〳〵。

りき　ハテ、其やうに仰しやらずと、もう一つ召上がりませ。

官兵　默り居らう。其やうな事を申すが、コレ、よう聞けよ。曾我祭禮中は藝者のお妻、身共が揚げつめ。今以て顔も見せぬは、外々へ賣りに參つたな。それゆゑ身共は、歸るぞ〳〵。

てつ　イエ〳〵、其やうな事ではござりませぬ。あのお妻さんも、今度のお祭には、男舞とやらで出なさんすゆゑ、會所へ所作の稽古をしにお出でござります。

ゆき　その上今日は、常磐津小文字太夫さんの連中衆の乘込みゆゑ、晩には此方の内で、淨瑠璃がござりますゆゑ、大方その迎ひがてら、入口の茶屋まで、行かしやんしたかも知れませぬ。

官兵　サア、その事も承知は致して居るが、あまり歸りが遲いではないか。

りき　あのお妻もお前樣に、拵らへてもらうた衣裳を、方々へ見せに行きました。今にも歸れば、もう外へ出す事ではござりませぬ。この祭のうちは、あなたの揚げづめ。あなたも精々お祭を

官兵　イヤモウ、內の主がさう云うてくれゝば、身共も安堵いたすといふもの。

てつ　左樣なら、御機嫌を直されて

ゆき　御酒になされてはどうでござりますえ。

官兵　イカサマ、それがよからう。サア、これから、酒ぢや〳〵。

女皆　サア、御機嫌が直つた〳〵。

官兵　祝ひに一つ打つてくれ。

四人　ヨイ〳〵〳〵。

ト手を打つ。獅子の太鼓、祇園囃子になり、向うよりお妻、振り袖の衣裳に裝束の上を引ッかけ、風折烏帽子、東下りの形。跡よりおかう、振り袖衣裳、白丁の上を着て、長柄傘をさしかけ、竹野、松野、白丁の形、粕烏帽子にて、附け太刀、沓の臺を持ち、跡より彌兵衞、好みのやつし、香具商人の拵らへにて、風呂敷包みの荷物を背負ひ出て來り

彌兵　イヤア、丹波屋のお妻さん、この度のお祭のその中では、お前の美しい評判ばかり。イヨ有り難

いと申しまする。

つま　何ぢやいなア、彌兵衛さんの餘所々々しい。爰に誰れも遠慮はないわいなア。

彌兵　オット、さうぢやが、この位に氣を附けぬと、ツイ持ち前が出てならぬ。時に。おぬしの業平、きついものぢやぞ。

つま　わたしや又、此やうな姿をして、お前に見せるも恥かしいわいなア。

彌兵　恥かしいより、業平のやうに、惡性は成りませぬ。

つま　その惡性はお前の心に、きつと云ひつけてお置きなされませ。

彌兵　きつと云ひつけまするでござります。

ト兩人顏見合せ

兩人　ハヽヽヽヽ。なんの事ぢや。

彌兵　お妻、おぬしに少つと話したい事もあり。

つま　わたしも云ひたい事も山々あれば、わたしが内で

彌兵　透を見合せ

つま　彌兵衛さん

彌兵　サア、お出でなされませ。
　　ト右の鳴り物にて、皆々舞臺へ來て、よろしく住ふ。彌兵衞、荷物を下の方に扣へる。
官兵　イヤア、お妻ぼう、いま戻つたか。色達が待ちかねた。
てつ　最前から官兵衞さまが、お待ちかねでござります。
りき　早うお側へ行つて、御挨拶申せ。
つま　官兵衞さん、ようお出でなされましたな。
官兵　イヤモウ、その御挨拶で此方ぐんにやり。いつも美しいといふうちにも、今日は格別美しい。したが、揚げづめの身共が座敷を明けて、どこへ行つて居たのぢや。こりや大方、俄をかこつけて脇のお祭でもわたしはせぬか。
つま　なんのマア、其やうな事があつてよいものかいなア。
官兵　イヤ〱、いま見て居れば、あれに扣へ居る若い者、何かソワ〱した様子。して、あの者は。
ゆき　ハイ、このお方は彌兵衞さんと申して、香具一式の商ひ。何なりと御用を、仰せつけられて下さりませ。
官兵　香具屋彌兵衞とは、この間中より噂は聞いてゐたが

彌兵　お目にかゝりますは初めてゞござります。モシ、旦那樣、何なりとお求めなされて下さりませ。

官兵　隨分求めて遣はさう。彌兵衞とやら、ズツとこれへ參れ。

彌兵　へイ〳〵、畏まりました。

ト前へ出る。官兵衞、よく〳〵見て

官兵　成る程、商人にしてはよい人品、なか〳〵町人とは見えぬ。其方、以前は侍ひにて、しかも生國は播州明石。

彌兵　エヽ。

官兵　イヤサ、明かしてそれとは云はれまい。なんと町人、元の侍ひになる氣はないか。

彌兵　お侍ひ樣とした事が、なんの私しが左樣な者でござりませう。正眞正銘贋ひなし、腹からの商人に違ひござりませぬ。

官兵　すりや、いよ〳〵

彌兵　親どもより受けつぎました香具商賣。モシ、旦那樣、何なりと、お求めなされて下さりませ。

官兵　隨分求めて遣はさうが、して、どのやうな品を商ひ致す。

彌兵　まづ第一が匂ひ袋、その外丸藥、花の露、長命丸女悅丸、香具一通り何なりと、お好み次第で


五渡亭國貞画

ござります。

官兵　イヤア、身共はソノ女悦丸を求めたいが、なんと賣つてはくれまいか。

彌兵　お望みなれば差上げませうが、あなたは何になされます。

官兵　ハテ知れた事、これなるお妻は身が深間、しつぽりと用ひるのだ。

つま　穢らはしい。其やうな事云うても下さんすな。なんのマア、お前のやうなお方を

官兵　此奴、人目があると思うて、ぴんと致すな。エヽ、畜生め。

ト寄りそふ。

つま　エヽ、アタしつこい。知らぬわいな。

官兵　おのれ、大分身共を惡しく致すな。

りき　モシ〳〵、官兵衞さま、どうやらその樣子では、藥も入用はござんすまい。

彌兵　所詮あなたには、無駄でござります。

官兵　此奴が〳〵、武士に向つて慮外な奴め。

彌兵　その武士ゆゑに、色氣がござりませぬ。

官兵　とは又なぜに。

彌兵　ハテ、浮世の譬へにも云ふ通り
官兵　花は櫻木
彌兵　人は武士、なぜ女には嫌はれる。
官兵　うぬ、素町人め、重々の慮外者。その頰桁を

ト切つてかゝるを、ちよつと立廻つて官兵衞をしつかと捕へ

彌兵　たとへ賤しい町人でも、敷居の外は七人の、敵とやらがあるゆゑに、商人ながらちつとはヤットウ腕に覺えの生兵法、怪我過ちのないうちに、ヂタバタせずとお侍ひ、マア／＼お下に、ござりませう。

ト思ひ入れ。

官兵　ヤア、武士も及ばぬ今の手の内。さては、うぬは。

トまた切つてかゝるを、お妻とめて

つま　モシ、待ちなさんせ。
官兵　お妻、なぜ留める。
つま　留めるも一つはお前の爲。

官兵　そりや、何ゆゑに。

つま　ハテ、彌兵衛さんは身に願ひが……イヤサ、願ひ叶ひしこの廓、たとへお前がお武家様でも、過ちあつてはお爲にならぬ、ナ、本望達するまでは、大事の身ではござりませぬか。イヤサ、大事の場所も辨まへず、人を切るの、突くのとは、短氣なお侍ひさんではあるわいなア。

ト彌兵衛へセリフを掛けて思ひ入れ。

官兵　お妻があの野郎の肩を持つ程、小胸が悪い。どうでも彼奴めを

トお妻を突きのけ、行かうとする。おりき留めて

りき　官兵衛さん、待ちなさんせ。

官兵　また此奴も留めるのか。

りき　ハテ、留めいでかいな。

官兵　おぬしまで、なぜ其やうな事を

りき　ハテ、お前も御存じの通り、わたしの内に亭主というては無し、後添を入れるも、好いた男も無いゆゑ、幸ひいとしらしい彌兵衛さんも獨り者、わたしが夫と云うては人目もあれば、世間は養子と云うて有やうは、オヽ恥かし。

女皆　ヤアノ〳〵、そんならアノおかみさんは
宮兵　イヤハヤ、呆れたものだ。
つま　ヤアノ〳〵、そんならおかみさんはアノ彌兵衞さんと。こりや腹が立つて來たわえノ〳〵……モシ、彌兵衞さん、お前、いつの間にやら、あのおかみさんと、内證に出來てゐるのぢやな〳〵。
彌兵　どうしてマア其やうな事を。
つま　イエノ〳〵、こりや出來てゐるのぢや〳〵。
彌兵　ハテ、おぬしも詰まらぬ事を腹立てる。其方を除けて、外の女子に
りき　モシ、彌兵衞さん、そりや胴慾ぢやぞえ。お前が商ひにござんす度に、いとしらしいと思うたがあのお妻と譯あると聞いては、こりや腹が立つて來たわえノ〳〵。
つま　お前より、わたしが腹が立つわいな。
　　ト有りあふ物を投げる。
りき　其方が腹が立てば、わしも腹が立つ。
　　ト同じく投げつける。
彌兵　コレ〳〵、兩方とも、靜かにしてくれ〳〵。

つま　イエ〳〵、腹が立つわいな〳〵。

ト立ちかゝる。皆々恟りして

皆々　マア〳〵、靜かにさつしやりませ〳〵。

ト兩人をなだめる。

官兵　こりや何の事やら譯が知れぬ。この官兵衛が挨拶いたす。靜かに致せ〳〵。

りき　官兵衛でも權兵衛でも、料簡ならぬぞ〳〵。

つま　わたしも料簡がならぬ。

りき　イヤ、わしもきかぬぞ〳〵。

皆々　ハテマア、靜かになされませ〳〵。

ト官兵衛お鐵お雪おかう、おりきをなだめ〳〵、松野竹野附いて奥へ入る。お妻と彌兵衛殘る。あと合ひ方。

つま　モシ、源之丞さま。

彌兵　コレ……滅多にその名を

ト押へる。こなしあつて合ひ方。

彌兵　大事を抱へし身の上なれど、商ひは附けたりで、毎日々々この廓へ入込めど、それぞと思ふ手がかりも

つま　無いとは云はれぬ、今の侍ひは、お前の身許を知つた樣子。もしや水右衛門ではないかえ。

彌兵　イヤ〳〵、あのやうな侍ひではない。違うた〳〵。尤も養父右内さまを、水右衛門が討つて立退きし時分は、わしは養子に行つて間もなく、まだ部屋住みの事ゆゑ、敵の顔は知らねど、存じた者は伯父兵助さま、返り討の節供を致せし、家來金六、彼れに詳しう樣子を聞いたが、それはそれは、たくましさうな人相骨柄。

つま　こりやさうでござんせう。とても人を殺し、立退くやうな悪人、どのやうな人やら見たいもの。マア、譬へて云へば、どのやうな人ぢやえ。

彌兵　おぬしが知つた人に譬へて見ようなら、誰れであらう。アヽ、カウト、ナ、待ちやれよ。オヽ、それ〳〵、役者で云はうなら、マア、高麗屋であらうかい。

つま　ほんにそれでは、たくましい筈でござんす。

彌兵　たくましいよりは、好ましいお妻、一兩日はお目にかゝらぬが、どうぢや〳〵。

ト引寄せる思ひ入れ。

つま　御家來筋の私しへ、有り難いそのお詞。あなたが御流浪遊ばし、兄文藏方へお出でなされてより人目を忍ぶ度重なり、お情うけしその後は、只ならぬお腹の樣子。

彌兵　アノ、たつたこれで

つま　サア、この事を御本國、明石にござるお松さまがお聞きなされたら、女子は誰れも同じ事、大抵お腹が立つ事ではござりますまい。

彌兵　其やうに詳しう知つてゐれば、今更何を隱さう。成る程、わしが右内さまへ養子に來ぬ前、本國明石の佛作助といふ者の娘と忍びあひ、程なく男子二人まで出生。數へて見れば惣領の源次郎は今年で十、弟の半次郎は三つ。二人とも病身であつたが、搗てゝ加へてその中に、お松が兄の袖助も病氣との事。案じらるゝは其方の懷妊、お松といひ、家來筋の女が、わしが胤を宿すといふは、よく〳〵深い緣であらうかいの。

つま　それ御覽じろ。お松さんの事も、問ふに落ちいで語るに落つるとやら。其やうに氣の多い若旦那樣。こりやモウ油斷がならぬわえ。

彌兵　ハテ、これは過ぎた事ゆゑ話して聞かせる。これからは女と云うては、女猫の側へも寄らぬ。堪忍しやく〳〵。

つま　そんなら今日から嗜みませうぞ。

彌兵　ハイ〳〵、畏まりました。

つま　それが誠なら、もつとわたしが側へ寄りや。

彌兵　ハイ〳〵、この位でようござりまするか。

つま　もつと寄つて、ひつたりと抱きつきや。

彌兵　ハイ〳〵、左樣ならお妻さま。

つま　オヽ、嬉し。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより常磐津の供與八、旅形にて、三味線箱を背負ひ、跡より垂れを下ろしたる四つ手駕籠二挺、駕籠舁き舁いて出て來り

駕舁　モシ〳〵、親方、この駕籠は、どこまで參ります。

與八　向うに見える丹波屋までやつて下さい。

駕舁　ハイ〳〵、畏まりました。

ト皆々舞臺へ來り

與八　モシ〳〵、お賴み申します〳〵。

ト門口を明ける。お妻彌兵衛悯りして

彌兵　どちらからお出でなされました。

與八　丹波屋はこれでござりまするか。常磐津の太夫衆が、只今着きました。

つま　檜物町の太夫さんのお出でかえ。それは御苦勞でござります。

彌兵　駕籠は直ぐに庭へ廻すがようござります。

駕舁　ハイ〳〵、畏まりました。

ト駕籠二挺は下の方へ入る。

彌兵　お前、お草臥れでござりませう。荷物を下ろして、お休みなされませ。

與八　左様なら御免なされませ。

ト内へ入る。

つま　モシ〳〵、太夫さんがお着きなら、早う稽古したいものでござんすな。

彌兵　稽古はするがいゝが、今夜の座附き淨瑠璃は、何を語りますな。

與八　何やら書附にして、太夫さんが寄越しました。

ト淨瑠璃觸れを出す。

彌つ　早く讀んで御覽じませ。

與八　ハイ〳〵、畏まりました。

　　ト淨瑠璃觸れを讀み

　その爲、口上

彌兵　左樣なら、斯うお出でなされませ。

　　ト唄になり、彌兵衞先へ與八、三味線箱を持ち、奥へ入る。この唄をかりて、向うより金六、一本差し、下部の拵らへ、誂らへの團扇を差し、スタ〳〵と出て來り、門口の行燈を見て

金六　丹波屋は爰だな、よし〳〵……御免なされませ。あなたに藝者のお妻さまと申す、女中はお出でなされませぬか。

　　トお妻を見て

　イヤア、お妻さま、爰にござりましたか。

つま　お前は金六さん、ようお出でなさんした。マア〳〵、お入りなされませ。

金六　左樣なら御免下さりませ。

つま　何ぞわたしに、御用でもござりますか。但しはお祭の御見物かえ。

金六　なか／＼其やうな、よい機嫌らしい事ではござらぬ。それに引替へお妻さま、お前は見れば華やかな、よい着物を着てござるが、川柳にもある通り、「貧すれば緞子の夜具を着る娘」と、ハテ、よう云うたものぢやなア。

つま　ほんに思ひがけない、此やうな形を、お前方に見らるゝも、お恥かしうござんすわいなア。

金六　なんの恥かしい事がござりませう。主人の爲、親の爲に、勤め奉公するは、いくらもある習ひでござりますぞや。

つま　サア、それぢやによつて源之丞さま、不慮の儀につき、この程の御難儀。兄さんと相談の上、この丹波屋へ藝者勤め、その身の代であなたを貢ぎ、敵水右衞門をお尋ねなされども、今に行くへも知れぬとの事。

金六　サア、その事で、わしもお前に逢ひに來ました。

つま　そんなら手懸りでもござりましたかえ。

金六　なんのマア、其やうな譯ではござらぬが、今お前は藝者の身の上。この廓は數多の人の入込む所もしも水右衞門に似た人あらば、早速お旦那へ知らせて下さりませ。

つま　そりやモウ、わたしが爲にもお主の敵、それと知つたなら、早速お知らせ申しませうが、何を云

うても、わたしやその水右衞門は、どのやうな人相やら。

金六　オツト皆まで云ふまい。其やうな事であらうと思つて、買つて來たこの團扇は、こりやコレ江戸の役者、幸四郎とやらの姿繪、見れば見るほど水右衞門に生寫し。この顏に似た人あらば、色に事寄せ身分を糺し、早う知らせて下さりませ。

ト幸四郎の似顏の團扇を出す。お妻、取つて

つま　そんなら水右衞門は、この團扇繪によう似てゐますかえ……どうやら最前源之丞さまのお物語りに、割符の合うたこの面體。

金六　サア、水右衞門を詳しう知つた者がないゆゑ、惜しからぬわしが命、今日まで長らへて居りまする。

つま　そりやなぜでござんすえ。

金六　なに面目あつて、人に顏が合されませう。兵助さま、大旦那右内さまの仇討の砌り、わしがお供をしながら、やみ〳〵兵助さまを返り討に致させし、その時の口惜しさ。おのれ直ぐにもぶつて捨てんと存ずれど、役人官兵衞が權威にて、又敵は叶はぬ御法に

つま　その無念を堪へた上は、敵水右衞門の見知り人となつて、いづくに居るとも尋ね出し、お前もと

もども力となり、其うちわたしが兄さんも、戻られませうゆゑ

金六 文藏どのは、まだ戻られませぬか。

つま サア、兄さんは、江州膳所の町醫者、藤田卜庵とやらが、水右衛門の實父ゆゑ、もしあの方に隱れては居まいかと、樣子探りに行きましたが、今に戻られませぬわいな。

金六 マヽ、早う安否を聞いて、安堵したいものでござる……イヤ、時に、わしはモウ歸りませう。

ト立ちかゝる。この時、奥にて

りき お妻や〳〵。

ト呼ぶ。

つま アイ〳〵、只今それへ參ります。モシ、この品は、慥かにわたしが預かつたぞえ。

金六 そんなら必ずお妻さま

ト門口へ出かける。

つま 尋ぬる人の人相は。

金六 脊の高さは常體にて

つま 目のうち鋭く、鼻筋通り

金六　青髭あつて色白く

つま　左の眉に一つの黒子。

金六　その姿繪と

つま　割符が合はゞ

金六　紛ふ方なき

つま　お主の敵。

金六　コレ……お妻さま、萬事お頼み申します。

ト唄になり、金六、向うへ入る。お妻、團扇を持ち、奥へ入る。合ひ方になり、おりき、官兵衛、出て來て

りき　モシ〳〵、官兵衛さま、私しに御用とは、何でござります。

官兵　別儀でない。最前よりこれへ參つて、樣子を窺ふところ、あの香具屋彌兵衛とやらは、どうやら石井に由縁と見える。殊には藝者のお妻、彼奴も滅多に油斷はならぬ。して、水右衛門どのは。

りき　サア、わたしが爲にはお主の若旦那、水右衛門さま、この度のお身の上なれば、よんどころなうあの一間へ、お隱まひ申して置きましたが、胡散らしい石井の由縁が、この近邊をぞめき歩くか

らは、こりや一思案せにやなりませぬ。

官兵　その儀は少しも氣遣ひしやるな。かねて水右衛門どの、このあたりに石井の由縁が徘徊する事は疾より察して居れば、人知れずぶッ放し、枕を高く榮華の夢。

りき　それが何より旦那のお爲。して、その手段は。

官兵　コレ。

ト囁く。

りき　出來ました／＼。天晴れ妙作。

官兵　コレ、祕すべし／＼。

ト思ひ入れ。獅子の太鼓、流行り唄になり、向うより八郎兵衛、剃立て鬘、町人の拵らへにて出て、直ぐに舞臺へ來り

八郎　御免なされませ。今日は大分お賑やかでござります。

りき　これは／＼八郎兵衛さん、よう入らつしやりました。サア、これへ／＼。

八郎　左樣なら御免なされませ……イヤ、これはお客樣、ようお出でなされました。

官兵　ハヽア、おてまへも今日は、祭見物でござるかな。

八郎　左やうサ、この町内の祭は、格別にようござりますゆゑ、一杯飲みながら、見物に參りました。おかみさん、お妻を呼びにやつて下さりませ。

官兵　イヤア、この客人も、アノお妻が馴染みか。

八郎　馴染みでもござりませぬが、噂の高い丹波屋お妻。先刻、祭の形でちよつと見ましたが、成る程美しい女。私しもまだ獨身者ゆゑ、殊によつたら身請けして、女房にもしようと思つて居ましたのサ。何にしろお妻を、早く呼びにやつて下さりませ。

りき　ハイ〳〵、畏まりました。左樣ならお妻を呼びませう。

官兵　待て〳〵。お妻はこの祭り中は、身共が揚詰め、外の客へ出る事は、ならぬぞ〳〵。

八郎　お前樣が揚詰めになさるなら、私しはお妻を身請けして、連れて行きます。

官兵　この男は大きな事を云ふが、お妻が身の代は大枚な金。

八郎　高の知れた藝者の身請け。今夜中には方を附けるのサ。

官兵　イヤア、大きな事ばかり申すが、して其方は何者だ。

八郎　サア、私しは……オヽ、それ〳〵、府中本町の町人、古手屋八郎兵衞と申す者でござります。

官兵　てまへが八郎兵衞ゆゑ、お妻を身請けしようと云ふのか。

八郎　マア、そんなものサ。
官兵　其方に身請けされては武士が立たぬ。あのお妻は身共が請け出す。
八郎　イエ、是非とも私しが
りき　アヽ、モシ〱、お前方、身請け〱と仰しやりをするが、どちらへなりと金の早い方へ御相談して、その金は
兩人　サア、それは。
りき　金が無ければ、お妻の事は
兩人　破談と云ふのか。
りき　これにつけても八郎兵衛さん
八郎　金が敵の世の中だなア。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより伴助、旅中間の形にて、狀箱を首に掛けて出て來り

伴助　駿河の府中彌勒町、丹波屋といふ茶屋と聞いたが、どこだ知らん……ハヽア、向うに行燈が見える。あれへ行つて聞いて見よう。

ト舞臺へ來り

御免なされませ。丹波屋おりきさまと申す後家御は、爰でござりますか。

りき　ハイ、丹波屋りきはこれでござります。どなたか、此方へお入りなされませ。

伴助　左樣なら、お許しなされませ。

ト内へ入る。官兵衞、おりきと顏見合せ、目顏にて思ひ入れ。

伴助　私しは江州膳所の町醫者、藤田卜庵方より飛脚の者でござりますが、お前方に御子息の藤田水右衞門さま、御同居なされてござるとの事。どうぞ私しに、お逢はせなされて下さりませ。

りき　イエ〳〵、水右衞門さまとやら、其やうなお方は私しの内には、お出でなされませぬ。

伴助　成る程、浮世を憚る水右衞門さま、お隱しなさるは御尤もではござるが、私しは親旦那より使ひの者、御遠慮はござりませぬ。その水右衞門さまとやらに、お逢はせなされて下さりませ。

りき　ハヽア、そんならお前は水右衞門さまを、御存じではござりませぬか。

伴助　若旦那水右衞門さま、家出なされた跡へ、奉公に參つた私し。常々大旦那の話しに聞いてゐましたが、まだお目にかゝつた事はござりませぬ。

官兵　あのやうに申すからは僞りもあるまい。おりき。計らうて遣はせ。

りき　畏まりました、とは申すものゝ、滅多に油斷はなりませぬ。して、お前は、何の用でお出でなさ

れました。

作助　委細は存じませぬが、お手紙が一通、外に金子二十兩持つて參りました。これを若旦那に直々にお目にかかり、お手渡し致して參れとの、お使ひでござります。

ト これを聞いて官兵衞、おりき、思ひ入れあつて

りき　お前、若旦那水右衞門さまの、お顔を御存じないとあれば、わたしがお引合せ申しませう……モシ、水右衞門さま、使ひの者に、お詞を下さりませ。

官兵　オヽ、いかにも〳〵。コリヤ〳〵、使ひの者、親どもより金子二十兩、手紙を添へて參りしとの事。早うこれへ持て〳〵。

作助　畏まりました。左樣なら、お手紙と金子はあなたへ

ト 官兵衞を、よく〳〵見て

イヤ、こいつは違つた〳〵。親旦那のお話しには、水右衞門さまは鼻の高い、目のうち淸しく、立派な男と聞いたが、お前樣は大きな相違、似ても似つかぬ身を以て、水右衞門なりと僞り、この金を騙り取る氣だな。その手は食はぬ。但し、石井の餘類か。サア、眞直に吐かしをらう。

りき　アヽ、コレ〳〵、石井の餘類ではない、水右衞門さまの

伴助　まだ吐かすか。大騙りめ。どうぞ早く水右衞門さまに、お目にかゝりたいものだが。

ト何心なく八郎兵衞を見て

これだ／＼。親旦那のお話しの通り、鼻の高い、目のうち淸しい、立派な男の水右衞門さまは、これだ／＼。ハッ、恐れながら水右衞門さまへ申しあげます。大旦那より密事の御狀、即ち金子二十兩、遣はしてござりまする。イザ、お受取り下さりませう。

ト手紙と金を出す。八郎兵衞、恟りする。

りき　アヽ、コレ／＼、それは違つた／＼。

伴助　何を大騙りめら、すッ込んで居らう……イザ、若旦那、金子もろとも、お受取り下さりませう。

八郎　イエ／＼、わしは其やうな者では

伴助　世を忍ぶあなたゆゑ、お包みなさるは御尤もなれど、私しへ御遠慮はござりませぬ。金子は慥かにお受取り下さりませ。

ト八郎兵衞、金と聞いて俄に氣を替へ、思ひ入れあつて

八郎　いかにも身共は、水右衞門に相違ない。然らば金子二十兩、手紙もろとも、慥かに受取つた。

ト懷中する。おりき、官兵衞、そろ／＼氣を揉むこなし。

伴助　お手紙御披見の上は、御返事を下さりませ。

八郎　サア、この手紙を讀みたいにも、返事を書きたいにも、おれは無筆……イヤサ、今日は取込んで居れば、御返事は此方より致すと、親どもへよろしく申しあげてくりやれ。

伴助　ハイ〳〵、畏まりました。イヤ、私しもこれで安堵でござりまする。さりながら、あなた樣も、諸所方々御遍歷なされ、さぞ御難儀なされてゞござりませうな。

八郎　イヤモウ、刀差す身は、世の盛衰はある習ひ。殊には身貧な憂き艱難、いろ〳〵な目にあひましたが、その代りには憚りながら、お前さんの前だが、泥水商賣をしてゐる代りにやア、一夜越しの錢もねえが、有り難い事には、マアどうか斯うか、酒の一杯も飲んでゐるのサ。そこへ行つちやア江戶ッ子は、まごつく氣遣ひはござりやせん。有り難いものさねえ。

ト地金のセリフを云ひながら、腕まくりする。伴助、八郎兵衞の彫り物を見て

伴助　ヤア、旦那の腕は

ト八郎兵衞、ちやつと心附き

八郎　イヤ、其方立歸りなば、親どもへよろしく

伴助　畏まりました。左樣なら若旦那

八郎　使ひ大儀。

伴助　お暇申します。

ト時の鐘、合ひ方になり、伴助、向うへ入る。八郎兵衛、件の金を出して

八郎　サア／＼、金が出來たぞ／＼。

り官　コレ／＼、その金は此方へ寄越して下されい。

八郎　この金は今見る通り、おれが金だ。そんならこなたは水右衛門か。

官兵　イヤ、さうではないが。

八郎　そんなら大きにお世話、構つてくれるな。この金はお妻が手附け。お内儀、早く呼んで下さい。

りき　味に搦んだ金なれど、此方も商賣、せう事ない……お客様がござつた。皆お出でよ／＼。

ト奥にて

皆々　アイ／＼。

ト合ひ方になり、お妻、以前の團扇を持ち、跡よりお鐵、お雪、おかう、竹野、松野、出て來り

皆々　お客様、よう入らつしやりました。

八郎　オヽ、お妻、よく來てくれたな。サア／＼、これからが大洒落。酒を持て／＼。

てつ　ハイ〳〵、畏まりました。

ト酒肴を出す。

ゆき　サア〳〵、お客様、一つ召上がりませ。

八郎　これが飲まずにゐられるものか。

ト杯を取る。おかう酌をする。

つま　モシ〳〵、あのお客さんはえ。

りき　あなたは古手屋の八郎兵衛さんといふお方ぢやわいな。

八郎　おかみさん、今云つた通り、このお妻はおれが身請けするから、さう思つて下さりませ。

りき　それは有り難う存じます。お妻、ちやつとお禮を申せ。

つま　エヽ、何と云はしやんすえ。

官兵　アヽコレ、お内儀、あのお妻は身共が方へ身請けの約束。それを又、八郎兵衛とやらへ身請けをさせるとは

つま　そんならわたしを、あのお方が

官兵　コレお妻、何も案じる事はない。おぬしは身共が女房にするワ。

つま　おいても下さんせ。わたしや其やうな事は知らぬわいなア。

八郎　さうであらう〳〵。金が取持つ色男。兎角襟許の世の中。今日からお妻はおれの女房。

　　　トお妻を引寄せるを、ツンとして

つま　エヽ、何ぢやいなア。いかにわたしが勤めの身ぢやとても、當人のわたしに得心もさせず、身請け身請けと、金で女子は、自由にはならぬわいなア。

宮兵　オヽ、さうサ〳〵。然らば身共が女房になるか。

つま　イエ〳〵、それも否でござんす。

八郎　そんならおれが女房か。

つま　お前も否でござんす。

八郎　たとへおぬしがどのやうに云つても、此方は金といふ物があつて談ずるのだよ。

つま　又しても金々と云はしやんすが、そりや當世ぢやによつて、襟許に附く女中さんもござんせうがわたしに限つて、お前方の女房になる事は、否でござんす。

　　　トこの時、八郎兵衞の顔を思はず見て、悃りして、件の團扇とよく〳〵見比べ、ギヨツと思ひ入れあり、ちやつと氣を替へ

モシ、八郎兵衛さん、わたしやお前の、女房ぢや〳〵。

ト八郎兵衛、悔りして

八郎　イヤア、そりやおぬしやア、ほんの事か〳〵。

つま　女子の口から恥かしい、なんの僞りがあらうぞいな。

ゆき　モシ〳〵、お妻さん、そりやお前、何を云はしやんす。わたしらも知つてゐる、香具屋彌兵衛さんと深く云ひ交してゐながら

てつ　今さら八郎兵衛さんの女房さんにならしやんしては、それでは女子の道が

女皆　立つまいぞえ。

つま　今までは、深く云ひ交してはゐたれども、わたしを藝者の勤めに出し、その金を何に遣うたのやら。今では僅かに香具商人。其やうな働きのない男には、ふつ〳〵愛想が盡きたわいな。それに引かへ、いとしらしい、情深い八郎兵衛さん、わたしが年季を拔いて、女房に持つて下さんすとは、捨てる神あれば助ける神。兎角に襟許に附くが當世ぢやわいな。

かう　そりやお前、あんまりぢやぞえ。

りき　岡燒き餅は大きなお世話、そちら向いてもらひませう……八郎兵衛さん、おめでたう存じます。

八郎　これでおれも落ちつきました。サア、お妻が身請けの手附け二十兩。ソレ、受取つたり。
　　ト件の金を渡す。
りき　ハイ〳〵、有り難うござります。
　　ト金を取る。官兵衞見て
官兵　アヽ、コレ〳〵、その金は
りき　ハテ、斯うなつたれば、金づくでは、親子の見境は無いわいな。モシ、八郎兵衞さん、手附けの受取り證文は、只今差上げませう。サア〳〵、お妻、わが身一つ飲んで八郎兵衞さんに、それが女夫の杯ぢやわいな。
官兵　アヽ、コレ〳〵、おりき、それでは身共の武士が立たぬ。その杯は、成らぬ〳〵。
りき　コレ〳〵、女ども、此やうな交ぜッ返しがゐては何かの邪魔。早う奥へ連れて行きや。
官兵　イヤ〳〵、おれは爰にゐて交ぜッ返す。
てつ　ハテマア、奥へお出でなされまし。
かう　モシ、お妻さん、友達の懇ろも、もうこれぎりぢやぞえ。
てつ　そんならお妻さん

ゆき　又その内え。

官兵　とはいふもの〻

女皆　サア、お出でなされませ。

ト流行り唄になり、おりきお鐵お雪、官兵衛をなだめ〳〵、奥へ入る。おかう、竹野、松野は向うへ入る。跡、合ひ方になり、こなしあつて

八郎　これからは、誰れも指の附け手はないおれが女房、どうだ、お妻、嬉しいか。

つま　嬉しうなうて何とせう。今のやうに、朋輩衆に下げしまれても、人の噂も七十五日、一寸先は闇とやら。サア、八郎兵衛さん、一つおあがり。

八郎　飲まないでどうするものか。サア、ついだ〳〵。

ト兩人酒を飲む事。

つま　斯うなれば夫婦の仲、何もかも、隱しなさる事はござんすまいな。

八郎　どうして、おぬしに物を隱すものか。

つま　そんなら、お前の御商賣はえ。

八郎　ハテ知れた事、商賣は三つ物屋、それでおれが名も古手屋八郎兵衛。

つま　お前は古手屋八郎兵衛、わたしは丹波屋お妻、どうか聞いたやうな色事。こりや面白うなつたわいな。

八郎　おぬしは面白いか知らねえが、おらアさつぱり心が浮かないのサ。

つま　そりやなぜにえ。

八郎　ハテ、今も聞けば、香具屋彌兵衛とやらと、譯があるとの事。

つま　そりや譯合ひもあつたれど、今では其やうな事はないわいな。

八郎　何だか知れぬおぬしの心、どうもおれは

つま　わたしの心が知れぬと云はんしやすなら、切れて見せませう。

八郎　エヽ、そんなら彌兵衛とやらと

つま　今日爰へ來てゐるこそ幸ひ、お前の見なさんす前で、切れて見ませう。

八郎　面白い。それでおれも落ちついた。

つま　お前の疑ひ晴れたれば、わたしにも疑ひを晴らさして下さんせ。

八郎　そりや何を。

つま　お前、今でこそ古手屋、元はお侍ひさんではないかえ。

八郎　イヤ、其やうな者では

つま　ないとは、矢ツ張りお前は

八郎　成る程、侍ひの飯も、食つた事はあつたのサ。

つま　ソレ見やしやんせ。して、お前の生國はえ。

八郎　ハテ、夫婦になつたら其やうな話しは、いつでもならうぢやアねえか。

つま　ほんに、それもさうかいなア。そんなら八さん、一つ上げるぞえ。

八郎　オツト、一つお手許を

ト酒盛りになり、兩人少し醉ひたる思ひ入れ。この時奧より彌兵衛出て來り

彌兵　イエ〳〵、まだ歸りは致しませぬ。ちよつとお見世に行つて參ります……お客樣、御免下さりませ。私しはこの者とは遁がれぬ者。お許しなされませ……コレ、お妻、わしはこなたに荷を預けて歸るほどに、また其方、跡で外の男と、嫌らしい事はならぬぞ。そんならわしは、もう歸るぞや。コレ、お妻、なぜ物を云はぬのぢや。ハヽア、聞えた。最前話した明石のお松が事を、まだ其やうに腹立ちか。ありや、わしが世にある時のほんの戯むれ、今では其方を除けて、外の女子に見替へる所存はない。コレ、お妻、機嫌を直しや〳〵。

ト思ひ入れ。

つま　エヽ、其やうな事ではないわいなア。

　　トつんと思ひ入れ。

彌兵　それでなくば、なんで其やうに欝いで……アヽ聞えた。爰の内のお内儀は大のやかまし婆。お客樣の事で叱られたのか。おぬしもあのお方の氣を知つてゐながら、不調法千萬な。ドレ〳〵、わしがお内儀に逢うて、詫び事してやりませう。

　　ト立ちかゝる。この時、奥にて

りき　イヤ、彌兵衛どの、その詫び事はきかれませぬわいな。

　　ト合ひ方になり、奥よりおりき出てくる。彌兵衛見て

彌兵　これは〳〵おりきさま、いつにないそのお詞、そりや何ゆゑでござります。

りき　ハテ知れた事、いとしらしいこなたゆゑ、どうぞ表向きは養子にもらひ、内譯はわたしの聟と思うたに、聞けばあのお妻と譯のある樣子。その上こなたは石井のゆかり……サア、意趣も遺恨もなけれども、こなたのやうな蟲があつては、お客の邪魔になる。今日からわしの内へ、足踏みして下さるな。

彌兵　成る程、その腹立ちは御尤もで只今まで、あなたのお目を掠めましたは、私しが惡うございます る。たとへ不義密通は致さずとも、お妻が事につきましては、何事によらず私しが、世話いたさねばなりませぬ。

りき　アヽ、コレ／＼、彌兵衛どの、今までの事は格別、もう此やうに物が綻びた上は、何も隱す事はないが、あのお妻が身の上については、萬事お世話をなされうと、仰しやるお方があるわいな。

彌兵　エヽ、何と仰しやります。

りき　アヽ、慮外ながらお妻には、れつきとした男があるわいな。

彌兵　おりきさまとした事が、私しに氣を揉まさうとて、いろ／＼な冗談ばかり。

りき　ハテ、こなたも餘ッ程なうつそり。今時の女子は、みな襟許に附くが常世。嘘でない證據は、お妻を身請けの手附け金、しかも小判で二十兩、受取り證文もコレ爰に。

　　ト證文を出して見せる。彌兵衛見て

彌兵　ヤア、今まで誠とは思はなんだが、そんならお妻は心變りか。コレお妻、そりやほんの事か／＼

　　ト急いて云ふ。これにてお妻、胸苦しき思ひ入れ。

コレ、おぬしはそれでは、濟むまいがな／＼。

つま　サア、その腹立ちは御尤もなれど、この場で云はれぬ今の仕儀。これには段々様子のある事。

　　　ト八郎兵衛と顏見合せて、氣を替へ

ホヽヽヽヽ、あの仰山な顏わいな。濟む濟ままぬのと、井戸がへぢやァあるまいし。何事も金次第。お前のやうな、働きのない亭主を持つては、末の事が思はれる。それぢやによつて、金のたんとある、好いた男と添ふのが、當世でござんすわいな。

彌兵　うぬはな〳〵。

りき　オツト、大事な代物、側へ寄つてもらひますまい。それとも身請けの金はあるか。

　　　ト思ひ入れ。おりき中へ入り

彌兵　サア、それは。

りき　どうして〳〵、身の皮を剝いだとて、なんでちやんころがあるものか。

つま　それぢやによつて、わたしや愛想が盡きましたわいな。

彌兵　チエヽ、そんならうぬは、僅かな金に目がくれて、今までの義理も忘れたのか。其やうな惡性とは露知らず、心の願ひ一大事を、打明けたのが、口惜しいわえ〳〵。犬と云はうか、猫と云はうか。いつその事に

ト摑みかゝらうとするを、おりき支へて

りき　これサ、今までとは違ふ。このお妻には、男がござるぞよ。

彌兵　して、その男は、どこにゐる。

八郎　憚りながら、その色男は爰に居ります。

彌兵　ヤ、なんと。

八郎　わしやアお妻が間夫の、古手屋八郎兵衞と云ふ者。彌兵衞どのとやら、見知つてもらひませう。

ト前へ出る。彌兵衞、よく〳〵見て

彌兵　ヤア、鼻筋通り、目の内鋭く、どうやらこなたの面體は。

八郎　なんだ此奴は、人の面を見て、イケ不躾な。馬鹿な野郎だ。

ト踏みとばす。彌兵衞、思ひ入れあつて

彌兵　怪しき體の八郎兵衞、おのれが身許を

ト立ちかゝるを、おりき引立て

りき　こなたのやうな狂人が居ては、お客の邪魔、早う出てもらひませう。

彌兵　それぢやといふて。

ト思ひ入れ。おりき、彌兵衞を無理に引立て

りき　一昨日うしやアがれ。

ト門口へ突出し、門口をピッシャリ締める。彌兵衞、思ひ入れあつて

彌兵　あの八郎兵衞とやらは、どうやら心當りの

ト門口を明けようとしても明かぬゆゑ

どうやら似寄りと思へども、紛しのならぬもお妻ゆゑ。エヽ、これなア。云ひたい事は山々なれど、外へ洩れては大事ゆゑ、なんとも云はぬぞ。おのれ女め、覺えてゐろよ。

ト唄、時の鐘になり、彌兵衞、思案の體にて、向うへ入る。おりき、門口を明け、跡を見送つて

りき　今日はいろ〳〵な交ぜツ返しが來るわえ……サア〳〵、邪魔は拂うた。幸ひ爰に蒲團と屛風。

ト よき所へ蒲團を敷き、屛風を引廻し

サア、お妻、わが身もあの床へ行て、ちつと横になりや。

つま　そりや嬉しうござんすが、女子の嗜み、顔を直して。

りき　色直しする心か。それも祝言のまなび。爰に鏡臺もあれば、サア〳〵早う。

ト鏡臺の鏡を出す。

八郎兵衛さん、今日からお妻はお前の女房、誰れ憚らず、ゆるりとおしげりなさい。

ト床の上へ突きやる。

八郎　しつけぬ事ゆゑ、小ツ恥かしいやつサ。

ト思ひ入れ。おりき、よき程に屏風を引廻し

りき　おぬしも顔を直したら、早うお床へ。仲人は宵の程、開きませう。

ト時の鐘、合ひ方になり、おりき奥へ入る。お妻、跡先見廻し、門口を明け、こなしあつて

つま　モシ、若旦那様、さぞお腹が立つたでござりませう。お赦しなされて下さりませ。モシ、源之丞さま。

ト云はうとして、思ひ入れあつて團扇を出し、屏風の内を窺ひ見る。この時、屏風の中にて物音するゆゑ、ちやつと鏡臺の側へ來り

ハイ／＼、いま行くわいな。ハテ、せはしない。

ト鏡に向ひ、髪を撫でつける事。この時、後の高窓を明け、水右衛門、誂らへの鬘にて浪人の姿にて窺ふ。この時、件の鏡へ、水右衛門の顔うつるゆゑ、お妻、キッと見て、件の團扇を取上げ、よくよく見比べ、思ひ入れあつて

ヤ、鏡にうつるをよく見れば、この姿繪に寸分違はず。疑ひもなき水右衞門」

水右　そんなら女は、石井の身寄りか。

つま　ヤア。

　　ト振りかへる。水右衞門、障子をピッシャリと締める。お妻、思ひ入れあつて

この姿繪を見るよりも、八郎兵衞さんを尋ねる敵、水右衞門と思ひしに、今また鏡にうつるを見れば、寸分違はぬ人相骨柄。すりや、この内に、あの面差し。ハテナア。

　　ト思ひ入れ。この時、最前伴助が持つて來りし手紙落ちてあるを取上げ見て

「藤田水右衞門どのへ、同苗卜庵より」……この手紙が落ちてあるからは、さてはいよ〱水右衞門は……こりやこの家は動かれぬ。何は兎もあれ奥へ行て、今の水右衞門を一詮議。

　　ト奥へ行かうとする。この時、屏風の中より、八郎兵衞出て來り

八郎　オット待つたり、おれを寢こかしにして、外の座敷へ行かうとは、そりや成らぬ。身じまひが濟んだら床の内へ。

つま　もうわたしや、お前と寐る事は否でござんす。

八郎　イヤア、どうも合點がゆかないわえ、今までおれの女房にならうと云ひながら、俄に其やうな事

を云ふは、どういふ譯だ。
つま　サア、その譯は、どうも
八郎　云はぬといふは、外の男に迫かれたか。
つま　其やうな事ぢやないわいな。
八郎　そんならなぜ詠返りだ。
つま　サア、それは
八郎　外の男か。
つま　なんのマア。
八郎　そんなら女房に
つま　サアそれは。
八郎　サア〳〵〳〵。早くどうとも、極めてくりやれな。
ト思ひ入れ。バタ〳〵になり、向うより光月、走り出て來り、八郎兵衛を見て
光月　オヽ、八郎兵衛、爰に居たか。
八郎　コリヤ、何にも云ふな。古手屋八郎兵衛、これに居ります。なんぞ御用でござりまするか。

光月　用どころではない。今日は佛が大分來て、もう日が暮れるゆゑ、施主の衆の
八郎　アヽコレ、何を云ふ。アヽ聞えた。施主の衆が掛け無垢を買ひに來たと云ふのか。
光月　この男は、何を寐言を云ふのだ。早く來さつしやい。
八郎　オヽサ、今に行く……コレお妻、おぬしはもう一度、料簡して見る氣はないか。
つま　どうぞこの事は、諦めて下さんせ。
八郎　仕方がない。うぬが寐返りなら此方も寐返り。手附け金の二十兩を取返すワ。
光月　ナニ、手附け金の二十兩……いゝ工面だな。そんなら、この間貸した金を返して下さい。
八郎　ナニ、おれに一文もあるものか。
光月　それでも手附けの二十兩。
八郎　サア、それは富を取つた時の話しよ。
光月　この男は、どうしても寐惚けてゐるわえ。サア、來さつしやい〳〵。
八郎　イヤ、おれは二十兩を
光月　ハテマア、來さつせい。

ト合ひ方。八郎兵衞を連れて無理に向うへ入る。お妻殘る。この時、奥にて

△　太夫さん、座敷淨瑠璃を

大勢　お賴み申します。

ト大勢の聲する。お妻、奥の方を見て

つま　人の心も知らず、今宵に限つてあの淨瑠璃。其やうな機嫌ぢやないわいな……いま鏡にうつるを見れば、疑ひもなき水右衛門。わたしが爲にもお主の仇。今宵のうちに、あの小座敷へ忍び入り騙し寄つてたゞ一討ち。

ト鏡臺の中より剃刀を出し、行かうとして

イヤ〳〵、なまじいな事して取逃がしては、後での後悔。一時も早うこの事を、源之丞さまへ、と云つたところが女子のわたし。廓を出ようにも人目あれば、その事も叶はず。エヽコレ、どうしたものであらう。一つ叶へば又一つ。斯うまで辛き今の身の上。これを思へば譬への通り、苦は色かゆる世の中ぢやなア。

ト思ひ入れ。正面の簾、バラ〳〵と下りて、お妻を隱す。この途端に、二階の簾まきあがる。爰に文字太夫連中、袴羽織にて居並び、前彈きなしに

〽憂き事に夜半も啼くなる時鳥、今の思ひは行燈の、灯影もくもる女氣の、細きあかりを搔

き立つる、その簪の足さへも、二心とや、さぞやさぞ、身の云ひ譯はそれぞとも、あからさまには、岩橋の、よそに我が名も、妻とはいへど夫ならぬ、結ぶの神もすき切れに、書きあたりては後の世の、縁も契りも薄紙と、心にかゝる藻鹽草、涙に薄き墨の色。

ト淨瑠璃の合ひ方になり、簾まきあがる。内にお妻、丸行燈を置き、硯箱を引寄せ、思ひ入れあつて

つま　ほんに思へばわたし程、因果な者が世にあらうか。父さんや母さんは、小さい時分にお別れ申し便りといふは、たつた一人の兄文藏さん、わたしもろとも石井のお屋敷にて成長なし、その御恩も送らず、剰へ若旦那源之丞さまと忍びあうて、お胤まで宿せし身のいたづら。人目を包む其うちに、思ひがけない今の成行き。お主を貢ぐその爲に、兄さんと相談の上、この丹波屋へ藝者づとめ。人の入込む所ゆゑ、この姿繪に似たる人あらば、色に事よせ素性を糺し、敵討の手引きせいとのお賴みゆゑ、あの古手屋八郎兵衛とやら、面差しの似たるゆゑ、この事あからさまにも云はれず、わざとお前に辛なう云うたが、さぞお腹が立つたでござんせう。腹が立たいでなんとせう。現在お主に惡口雜言、これもあなたへ忠義の一つ。殊には手に入るこの密書。鏡にうつりし人相骨柄。延び〳〵ならぬ今宵の手詰め。あなたへ一筆、オヽ、さうぢや。

ト行燈を搔きたて、以前の手紙を出し、硯箱を引寄せ、文を書きかゝる。

〽いとし〳〵、皐月の空にくらべこし、心も同じ曇りがち、今は儚く古手屋の、思ひは胸に八郎兵衛・今宵限りとつきつめし。

トこの文句のうち、本釣り鐘、時鳥笛、向うより彌兵衛、やつし形、鮫鞘の一本差し、頬かむりにて出て來り、花道にて思ひ入れ。

〽鐘もろともに忍び出で、菖蒲の雫身に浸むも、つれなや憎やその人を、火きりきり〳〵霧島つゝじ、花と見えしも宵の夢、浮世の夢も鮫鞘の、鯉口くつろげ落し差し、はや後夜の鐘指折りて、一つ二つ三つ四つ、夜中四ツ筋四ツ辻の、川邊傳ひに上りつ下りつ幾戻り、戀の奴に使はれて、かしこに來れば身の上を、彈くか語るか佇みて、内の樣子を窺へり。

彌兵　人の心と飛鳥川、變るが習ひと云ひながら、あのお妻に限つては、よもや〳〵と思ひの外、打つて變つた先刻のしだら。身に願ひあるゆゑに、ヂッと堪へて歸つたが、最前お妻を身請けしようと、云つた男は金六が、話しのあつた水右衛門に瓜二つ。斯ういふ時は見知り人の、金六に見せたいものぢやが、折惡しく留守といひ、これにつけてもあのお妻は、どういふ事やら心が腐り、僅かの金に目がくれて、敵の方へ裏返つた先刻の樣子。たとへ彼奴に突出されても、大事を抱へしおれが身の上、女如きに迷ひはせぬが、今まで深切な女ゆゑ、一大事を明したが、おれが一生の

誤まり。この事が外へ洩れては、願ひが叶はぬゆゑ、不便ながらも生けては置かれぬ。また最前の八郎兵衛とやら、身許を糺す一詮議。何は兎もあれ今宵のうちに……さりながら、お妻が今死んだなら、腹に宿せしおれが胤、現在親が闇から闇。思ひ廻せば廻す程、戀は諸道の妨げぢやなア。

〽その仇人を待つぞとも、内は白鷺しよんぼりと、濡れた仲ぢやと人さんに、羨まれたもはや昔、思ふ同志の入れ黒子、命といふ字を書いたのも、筆に變りは夏毛の鹿の、慕ふわたしが心をば、夢にも知らずさぞ今頃は、恨み云つたり腹立てゝ、緣も切る氣であろけれど、愚痴な事ぢやがこれ申し、未來は添うて下さんせ、待つてゐるぞえ待つてゐると、人目思へば聲立てゝ、云はぬ心の暇ごひ、それと知らねば束の間も、心ゆるさぬ目釘竹、しめる夜露に更けてゆく、星かあらぬか提灯の、灯影にしばし立ち忍ぶ。

ト右の淨瑠璃にて、兩人よろしくあつて、お妻は文を卷きをさめる。彌兵衛は内の樣子を窺ひ見て

彌兵　人の心も知らず、あのマア二階の騷ぎ。慥か今の淨瑠璃はお妻八郎兵衛、思ひ語つたおれが身の上。あのやうに唄ひ囃すも、矢ツ張りあれも、お妻と先刻の男。思へば〳〵二人の奴等、今に思ひ知らす。覺悟いたせ。

ト一腰を抜き、有りあふ草履にて寢刃を合はせ、思ひ入れ。

〽直ぐな心も亂れ燒、遁がさじものと身繕ろひ、窺ふ足もさしつめし、戸口に夜の物思ひ、幾重の垣や越えぬらん。

ト淨瑠璃納まり、二階の簾下りて太夫連中を隱す。彌兵衞は身繕ろひして、門口を蹴破り、內へ入る

兩人顏見合せ

つま　ヤア、お前は

彌兵　お妻か。うぬを。

ト切つてかゝる。お妻「モシ」と留める。また切りつけるを振り切り、有りあふ屛風を枷に立廻り、彌兵衞踏みこんで切りつける。お妻、二通の手紙を彌兵衞の前へさしつけて

つま　サヽ、お腹の立つは尤もぢや。これを見て下さんせ。

彌兵　何をおのれが

ト思ひ入れ。

つま　サア、最前つれなう云うたのも、これには段々譯のある事。その過ちの無いやうに、認め置いたわたしがこの文。外に名宛の大事の密書。心を鎭めてとつくりと、見て下さんせ。

彌兵　ナニ、認め置いたおのれが文、外に名宛の密書とは。

つま　サア、敵の便り、この密書。

彌兵　ドレ。

ト二通を見て

「藤田水右衛門どのへ、父卜庵より」……ナニ〳〵「飛札を以て申し遣はし候ふ。其方を敵と附け覘ふ石井源之丞主從、その地に徘徊いたす由、さすればその身の凶事も計り難く、卽ち金子二十兩持たせ遣はし候ふ間、今宵のうち阿部川にて諸用を調へ、早々この地へ參るべく候ふ、以上」……ヤヽ、この卜庵といふは、水右衛門が實父と聞く。さすれば我れ〳〵この地にある事を知つて、親卜庵より密事の書狀。今宵のうちに阿部川原にて、諸用を調へよとあるこの一通。如何いたして手に入つたるか。

つま　最前御家來金六どの、水右衛門の繪姿を持ち、この所は人の入込む遊里なれば、この團扇繪に似た人あらば、色に事寄せ身許を糺し、もしや敵と知るならば、早速知らせくれよとのお賴みゆゑ今も今とて古手屋八郎兵衛、面差し似たゆゑ、色で仕掛け、その身の素性を尋ね問はんと、わざとお前を辛なうあしらひしゆゑ、さぞお腹が立つたでござんせう。この事を申し譯に、認め置き

たるわたしが文。モシ、どうぞ堪忍して下さんせえ。

彌兵　其やうな事とは露知らず、其方を恨んだは却つて恥かしい。それは格別、いま其方の云やる通り最前の八郎兵衛とやら、面差し似たるゆゑ、心を附けるその折柄、思ひがけない先刻のしだら。して、八郎兵衛は、未だこの家に。

つま　サア、わたしもそれぞと思ふゆゑ、心を凝らす其うちに、鏡にうつる浪人姿、これも同じく姿繪に、寸分違はぬ面差し恰好。

彌兵　すりや、この家の內に敵に似たる者、二人までありしとや。いづれ一人は水右衛門。殊には密事の書狀といひ、本望達する時節到來。チエヽ、忝い。して、浪人體のその者は。

つま　正しくこの家の後家御こそ、水右衛門にゆかりと見えて、隱まふ仔細は。モシ

ト囁く。

彌兵　すりや、浪人體の者が、あの小座敷に。

つま　隱まひあるこそ幸ひなれ。奥へ踏んごみ實否を糺し、いよいよそれと極まらば、女ながらも、わたしも共々。

彌兵　その心遣ひは嬉しけれど、敵討には作法のあるもの。殊に女の助太刀ありと、云はれては末代恥

辱。ましてや爰は御免の遊里。場所辨まへぬと後日の譏り。幸ひなるかなこの密書に、今宵のうちに阿部川原まで立退くとあれば、彼の地に待ちうけ、實否を糺さん。町人姿も如何なれば、旅宿へ立越え身のまはり、金六もろとも何かの用意、先へ廻つて事を計らん。

つま　それにつけても兄さんは、なぜ遲い事ぢややら。この事聞きなさんしたら、さぞ本意なく思ひなさんせう。

彌兵　イヤ〳〵、かゝる時節に助太刀多きは、却つて恥辱。矢張り金六と主從二人。

つま　そのお二人の出立は、今も噂に傳へ聞く、曾我兄弟も駿河なる

彌兵　富士が根方へ門出の折柄、その夜の雨雲。

つま　虎が祈りと世の噂。

彌兵　我れはさほどにあらねども

つま　別れは同じ門出の名殘。

彌兵　隨分ともに腹な子を

つま　大事の場所ゆゑ、御身を愼しみ

彌兵　片時も早う。

ト行かうとして立戻り

とはいへ知れぬ人の身の上。

つま　モシ、めでたい出立。わざと祝うて。

ト鏡を差出す。彌兵衛見て

彌兵　鏡は卽ち日の形。

つま　裏の文字は天下一。

彌兵　本望達せしその時は

つま　名を末代にかゞやかす

彌兵　淸き流れの

つま　阿部川原へ

彌兵　これより直ぐに

トつか〳〵と花道よき所まで行く。

つま　モシ、必ずともに。

ト思ひ入れ。

彌兵　堅固でゐやれ。

つま　アイ。

ト　べつたりと下に居る。彌兵衛、見返る。木の頭。

彌兵　未練な事を。

ト思ひ入れ。お妻は彌兵衛の姿を鏡に寫し、これに抱きつく。兩人よろしく、拍子　幕

ト幕の外、時の鐘にて、彌兵衛、向うへ走り入る。雷の音にてツナギ。引返す。

三幕目返し

阿部川返り討の場

中島村燒場の場

役名――石井源之丞。若黨、轟金六。林作左衛門。掛塚官兵衛。藤川下部、作助。川越し、鴻の眞似勘八。同、むぐりの藤六。若黨、武井文藏。所化、雲才。百姓、十藏。同、茂作。人足、車町の三婦六。同、横川の五五八。藝者、丹波屋お妻。湯灌場、八郎兵衛。藤川水右衛門。

本舞臺、正面蛇籠、亂杭の草土手、向う打拔き奥深に見せたる阿部川の景色。上の方、誂らへの土橋

この下へ人入る事あり。よき所に阿部川原と記したる傍示杭、左右松の立ち樹、同じく吊り枝、本雨の仕掛け。すべて阿部川原の入口の體。爰に勘八、藤六、川越しの形にて、鍬鋤を持ち、立ちかゝつてゐる。時の鐘、大雷にて幕明く。

兩人　桑原々々。

勘八　なんとマア、恐ろしい雷ではないか。

藤六　川越しの裸蟲、臍の隱しやうが無いわい。

勘八　時に、お侍ひ様に頼まれて、川原の入口の土橋へ、何やら落し穴を拵らへてくれ、またその上にもしもの事があつた時、助太刀をしてくれろと云はれたが

藤六　云はゞ命がけの仕事、手附けの金位では濟まない。あの侍ひ衆は、もう見えさうなものぢやが。

勘八　今夜五ツ過ぎと云はしつたが、もうござるであらう。

藤六　そんなら仕掛けた仕事、やらかして置かうではないか。

勘八　それがいゝ〳〵。

ト時の鐘、雷にて、兩人、鋤鍬を持ち、立ちかゝつてゐる。向うより官兵衛、伴助、俵や糸立をかむつて出て來り

作助　モシ、官兵衞さま、素敵に降るではござりませぬか。
官兵　イヤモウ、降るといへば、今日丹波屋へ行つたら、あのお妻に飛んだ目にあつた。
作助　ヤア、そんならアノお妻とやらに、横ぞつぱふでも毆られたかえ。
官兵　なにサ、其やうな事ではない。今まで彼奴が手にかゝつてゐたのよ。
作助　その手で思ひ出した。なんと先刻おれが飛脚の鹽梅、似せ手紙は、うまく行つたではござりませぬか。
官兵　おらアてめえが眞面目で飛脚の仕打は、餘ッほどをかしかつた。時にあの手紙は、源之丞が身寄りの手へ渡ればよいが。
作助　ハテ、八郎兵衞も此方の仲間なれば、如才なく源之丞が手に入つた樣子。
官兵　して、銅脈の二十兩は。
作助　あの似せ金を、お妻が身請けの手附けに渡し、源之丞に氣を揉ませ、彼奴等に同士討させる魂膽似せ手紙にてアノ源之丞めを……モシ、向うに誰れやら。
官兵　それに居るは、何者だ／＼。
ト舞臺へ來る。勘八、藤六、兩人を見て

勘八　お前樣は先刻のお侍ひ樣。
官兵　其方どもは人足の者か。大儀々々。
作助　して、頼んだ事は、どうだ〳〵。
藤六　お頼みの土橋、御覽下さりませ。
官兵　ドレ〳〵、檢分いたさう……イカサマ、これではよもや仕損じはあるまい。出かした〳〵。然らば約束の通り金子を遣はす。
ト懷より金を出してやる。兩人取つて
兩人　これは有り難うござります。
藤六　外にお頼みの事は、まだでござりますか。
作助　その事も、今に頼まねばならぬが、何にしろこの道筋へ、若い侍ひの二人連れは來なんだか。
勘八　イエ〳〵、其やうな者は見えませぬ。
官兵　そんなら彼奴等は、本海道を行くと見えるわえ。
ト向うバタ〳〵になり、伴左衞門、浪人者の形にて、深編笠を持ち、走り出て來る。
四人　ソリヤ來たぞ。ぶッちめろ〳〵。

ト　かゝらうとする。伴左衞門、恟りして

伴左　アヽコレ、人違ひしまい。おれだ／＼。

ト　皆々、伴左衞門を見て

官兵　イヤア、貴殿は林伴左衞門どの

伴助　今時分、何しにござりました。

伴左　拙者は播州明石に住ひせしかど、聊かの儀によつてお家追放。それよりこの駿州へ下り、諸々方方遍歴いたすところ、かねて入魂の水右衞門どの、今晩源之丞を返り討と聞きましたゆゑ、及ばずながら助太刀いたさうと存じて、わざ／＼參つてござる。

官兵　それは御深切、忝うござる。水右衞門どのも、さぞ喜びませう。

伴左　して、討取る手段は。

官兵　コレ。

ト　囁く。

伴左　天晴れ計略。然らばこのあたりに待伏せして

伴助　源之丞主從もろとも

官兵　萬事はあの松陰にて

勘八　左樣ならお侍ひ樣。

官兵　兩人參れ。

ト時の鐘、雷の音になり、四人は松蔭へ入る。右の鳴り物になり、向うより彌兵衛の源之丞、黑羽二重、丸に井の字の紋附いたる衣裳、差添の鮫鞘の大小にして、跡より金六、下郎の形にて、小提灯を持ち、出て來り

金六　旦那樣、最早阿部川の入口でござりまするが、水右衛門らしき者には、一向に巡り逢ひませぬ。こりや外道ではござりますまいか。

源之　なにサ〳〵、夜中と申し、外道へはよも行くまい。殊には彼れが親どもの書狀を見れば、阿部川原にて用意調へ、江州膳所へ上るとあれば、この所へ來るは必定。併し、もう何時であらうな。

金六　彼れこれ五ツでござりませう。併し、旦那樣は、なぜ笠をお召しなされませぬ。

源之　其方は愚かな事を申す。今にも敵に出逢ひなば、運を天に任す身が、なんの大雨とていとひがあらう。濡れぬ先こそ露をもいとへと申すではないか。

金六　その思し召しなら、片時も早く先へ廻つて

源之　敵の輩を待ちうけん。併しながら、いつぞや甲州石和にて、伯父兵助どの返り討の節に、面體存じ居る其方。もしそれと見るなれば、必ずともに、心得たか。

金六　畏まりました。左樣なら若旦那樣。

源之　急げ〳〵。

ト兩人舞臺へ來り、金六、あたりを見廻し

金六　廣き川原といへど、關所同樣の一筋道なれば、この所へ來るは必定。旦那樣、これにて御休息なされませ。

源之　イカサマ、この所にて待ちうけん。

トよき所の捨て石へ腰をかける。此うち金六、提灯を見て

金六　イヤア、どうやら蠟燭どのが臨終と見えるわえ。こりや往生せぬうちに、つぎ替へて置きませうか。

ト源之丞このセリフを聞いて心がゝりの思ひ入れにて、耳をふさぐ。金六、蠟燭をつぎ替へるはずみ思はず灯を消し

南無阿彌陀佛々々々々々々。たうとう蠟燭どのが往生いたされた。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト源之丞また氣にかゝるこなしあつて

源之　アヽ、消えてもいゝワ〳〵。

金六　でも、灯がござりませねば。

源之　ハテ、提灯の消えたのは、時にとつての吉左右ではないか。

金六　提灯の消えたのが、なんで吉左右でござりますな。

源之　ハテ、蠟燭は灯がうつらねば、消えてゆく事もなく、齢久しきと申す心は、どうぢや〳〵。

金六　イカサマ、これは好い吉左右。それはよけれど、今にも水右衛門が來た時に、この暗さではさつぱり解るまい。ハテ、困つたものぢやな。

ト思ひ入れ。源之丞、向うを見て

源之　アレ〳〵、向うへ旅人と見えて、灯が見える。これへ參つたら、灯を無心いたせ。

金六　畏まりました……オヽイ〳〵。

トさし招く。時の鐘、雷の音にて、向うより水右衛門、浪人姿の上へ坊主合羽、深き三度笠にて、小提灯を持ち出て來り、直ぐに舞臺へ來る。金六見て

金六　御免なされませ。私しは旅の者でござりまする。提灯を消しまして難儀いたしまする。御無心な

がら、灯を一つお貸し下さりませ。

ト水右衛門これを聞いて、提灯を前へ出す。この灯にて金六、笠の内を覗き、よく〳〵見て

ヤア、こなたは……お旦那、これが即ち藤田水右衛門でござります。

源之　ナニ藤田水右衛門とや。

兩人　源之丞主從、この所に待ちうけたり。

ト水右衛門へ組みつく。立廻りのうち雨具取れる。ちよつと立廻つて、キツト思ひ入れ。時の鐘、凄き合ひ方になり、兩人思ひ入れあつて

源之　養父右内を手にかけ、鵜の丸の一卷を奪ひ、その後伯父兵助を返り討にせし、恨み重なるこの年月。

金六　君父の仇には共に天を戴かず

源之　浮世にひそむ今日まで、汝を尋ねし甲斐あつて

金六　めぐり逢ひしは優曇華の

源之　花待ち得たる藤田水右衛門、イザ立上がつて

兩人　勝負々々。

水右　サア、それは。

兩人　但し汝は遲れたか。

水右　イヽヤ、全く卑怯未練にはござれども、某たつた一言申すべき事ござれば、憤りをなだめられ、お聞きなされて下さりませ。

兩人　して、その仔細は。

水右　別儀でもござらぬ各々方、某、右内どのを殺害いたし、鵜の丸の傳書を奪ひ取りしとは、拙者身にとつて覺えござらねども、いつぞや右内どのゝ御舍弟兵助どの、我れを敵と申さるゝゆゑ、よんどころなう返り討にせしは某なるゆゑ、各々方の心を察し、討たれて進ぜたけれども、一人の親藤田卜庵、最早老年に及びたれば、何卒彼れを見送りて、その後いかやうとも相成りませう。爰の道理を聞分けられ、何卒武士のお情にて、今の命をお助け下されるならば、有り難う存じまする。

金六　イヤ、その申し譯は暗い〳〵。源之丞さまは他家へ御養子、この下郎は御譜代ゆゑ、仔細は殘らず存じ居る。大旦那右内さまを討つて、傳書を盜みし大罪人。

源之　最早叶はぬ養父の仇。

兩人 サヽ、尋常に名乘り召されい。

水右 ハテ、是非に及ばぬ。さほど疑ひ召さるゝなら、この場に於て……南無阿彌陀佛。

ト腸切らうとする。源之丞とめて

源之 ヤレ待たれよ。この年月尋ねし敵、死首取つて何かせん。尋常に勝負召されい。

水右 すりや死ぬにも死なれぬか。ハテ、是非に及ばぬ。

ト悄るゝ體を見せ、手早く拔いて源之丞に討つてかゝる。金六、恟りして支へる立廻りのうち、水右衞門の懷より一卷落ちる。源之丞、手早く取つて

源之 ヤヽ、こりやコレ一卷。

水右 南無三、それを。

ト引つたくり、懷中して

いづれも。ソレ

皆々 合點だ。

ト上手より伴左衞門官兵衞出て源之丞にかゝる。伴助勘八藤六は金六にかゝる。皆々立廻りのうち、伴助等は金六を引つかつぎ、花道へ行きにかゝる。上にて金六、白刃を振り廻すゆゑ、伴助はその手を

捕へ、三人は金六を擔いで向うへ入る。舞臺には水右衛門伴左衛門官兵衛、源之丞に切つてかゝる。立廻りあつて伴左衛門は源之丞に切り立てられ、後へ逃げて入る。此うち官兵衛は源之丞に一太刀切られ、タヂ〳〵となり、上手の橋の下へ逃げこむ。跡にて源之丞水右衛門立廻り。本雨サッと降つてくる。源之丞は立上がつて水右衛門へ切つて行く。水右衛門はあしらひかれたる思ひ入れ。源之丞、誠と心得、附入り〳〵打つてかゝる。水右衛門、段々跡下がりになり、源之丞落し穴に足を踏んごみ撻となり、土橋を突き通す。これにて官兵衛「ワッ」と云うて舞臺へ駈けあがり、撻となる。源之丞一太刀切られ、よろめきながら立廻つて、キッと思ひ入れ。一ッ鉦、誂らへの合ひ方。兩人こなし。

源之　エヽ殘念な。思はず足を踏み損じ、かゝる不覺も武運の末か。

水右　流石は源之丞、いゝ諦め。とても叶はぬその命、冥土の土産に云つて聞かせる。うぬら主從がこの水右衛門を、敵と附け覘ふゆゑ、市中で殺さば後での難儀と、似せ手紙を拵らへて、爰までござれの落し穴、たうとう命も寂滅爲樂。甘い手盛りの阿部川も、うぬらが爲には三途川、一ぱい參つて、重疊々々。

源之　すりや最前の一通も、みな計略にてあつたるか。さりとは知らず誠と心得、誘き出されしは不覺なれど、荷擔人あつて待伏せなし、落し穴とは卑怯な奴めが。

水右　卑怯とはうぬが事だワ。石井の世繼でありながら、いかに敵を尋ねるとて、町人と姿を變へ、お妻が色香に現を拔かし、とゞのしまひが刀の銹。右内兄弟白綾まで、おれが手先にかゝるとは、よく〳〵深い惡緣と、思へば手向けの拜み討。迷はぬ功力引導は、坊主がはりの袈裟衣。早くその身もくたばつて、死出の山路のだら〳〵下りで、親子兄弟待ち合せ、地獄極樂望み次第、勝手な方へうしやアがれ。

源之　たとへこの身は死ぬるとも、父母への土產は、おのれを一太刀。

ト よろぼひながら切つてかゝる。立廻るうち向うより金六、作助、手負ひにて切り結びながら出て、金六は作助を一太刀切る。これにて作助、撞となる。金六、源之丞を見て

金六　ヤヽ、若旦那樣のこの體は。

ト 源之丞、金六を見て

源之　ヤア、其方も手を負うたか。

兩人　おのれ水右衞門。

ト 切つてかゝる。水右衞門、金六を見事に切り下げる。此うち源之丞、切りつけるを、その刀を引ッ外して一太刀切る。これにて源之丞ウンとなる。

水右　とてもの事に。

ト止めを刺さうとする。向うにて人音するゆゑ、手早く刀を納め、落ちてある桐油を引ッかけ、三度笠をかむり、花道へかゝる。時の鐘、ひぐらし笛になり、向うより文藏、坊主合羽、菅笠、一本差し脚絆草鞋、旅形にて、小提灯を持ち、出て來り、花道にて水右衞門と摺れ違ひ、文藏は舞臺へ、水右衞門は揚幕へ入る。文藏は舞臺へ來り、源之丞と知らず

文藏　誰れやら寢てゐる。生醉ひか。オイ、起きて行かつしやい。生醉ひどの〳〵。

ト呼び生ける。これにて源之丞心づき

源之　おのれ水右衞門。

ト立上がり、また撻となる。文藏見て

文藏　オヽ、あなたは御主人源之丞さま。

ト源之丞、この聲を聞きつけ

源之　文藏か、無念なわやい〳〵。

文藏　思ひがけないこの深手。御尤もでござります〳〵。

ト金六の死骸を見て

ヤア、金六も手を負うたか。モシ、旦那樣、數ケ所なれども急所は外けてござります。お心慥かに。

ト提灯を松に引ッかけ、源之丞を介抱して

モシ、源之丞さま〳〵……して〳〵、かゝる大事に及びました仔細は。

源之　敵水右衛門、我れをこの所へ誘き出し、荷擔人多く待伏せして、卑怯未練な騙し討。

文藏　すりや、水右衛門が仕業であつたか。今の旅人は正しく曲者、跡追ッかけ

ト行きにかゝる。源之丞、苦痛の思ひ入れ。これを見て立戻り

モシ、お心を慥かに。

源之　イヤ〳〵、とても存命思ひもよらず。この刀は、實父源藏さまのお形見。銘は即ち千壽院力王、差添の鮫鞘は仁王三郎、小柄は祐乘の垣に朝顏。其方同胞に遣はす。妹お妻もろとも、我が亡骸は煙りとなし、あと懇ろに弔らひくれよ。

文藏　エヽ、お情ない旦那樣。モシ、お心慥かに。

ト思ひ入れ。この時、後へ伴左衛門窺ひゐて、松の枝に掛けたる提灯を打ち落し、文藏が前にある大小を引ッ滚ひ、行きにかゝる。文藏、引ッたくる。立廻りのうち官兵衛起上がりてかゝるを文藏、官

兵衛を見事に引きつける。此うち伴左衛門、花道まで逃げて行く。文藏、透し見て

怪しい曲者。

ト行きにかゝる。官兵衛、組みつくゆゑ、是非なく鮫鞘の小柄を手裏劍に打つ。この小柄、伴左衛門の膝頭に立つ。これにて伴左衛門、摚となり、小柄を拔いて透かし見ながら、向うへ走り入る。官兵衛振り切るを文藏、見事に官兵衛を切る。この物音に源之丞、よろぼひ寄り

源之　文藏、今の物音は。

文藏　敵の荷擔人、仕留めてござる。

源之　出かした。その心底を見る上は、賴み置きたき我が存念。

文藏　して、そのお賴みとは。

源之　何卒明石に殘せし二人の悴に

ト後云ひさして苦痛の思ひ入れにて、文藏に取りつき、物云ひたきこなし。文藏これを見て、耳許へさし寄り

文藏　お氣遣ひなされますな。御兄弟の御子息を守り立て、あなたの御無念、晴らさせませう。

源之　ヤ。

トにつこりと思ひ入れあつて、手を合せる。木の頭。文藏見て「ハア」と泣き落す。これをキザミ、よろしく、ひやうし

幕

禪のツトメにてツナギ、引返す。

、本舞臺、三間の間、うしろ淺黄幕、正面高札場、松榎の大樹、稲村、すべて中島村入口の景色。爰に狼一疋、百姓大勢に飛びかゝつてゐる。これを庄屋と百姓にて、鋤鍬を振りあげ、狼を取卷きゐる見得。法螺貝の音、用心太鼓を打ち立て、早拍子木烈しく幕明く。

ト矢張りこの鳴り物にて狼荒れて、皆々を喰ひにかゝる。百姓、捨ぜりふにて狼に追ひ立てられ、騒ぐ。狼は荒れて駈け廻り、下座へ駈けて入る。皆々片息になつて

皆々　モシ〳〵、庄屋樣、危ない事でござりましたの。

庄屋　さて〳〵あの狼めは、イヤ恐ろしい畜生めぢや。權兵衛に喰ひついたと思ひ申したから、持つたる鍬で見知らさうと、振つてかゝつて、我れどもが噛みつかれやうとし申した。

百姓　さうでござつた。して、あの狼めは、どこから追ひ出し申したの。

庄屋　畜生めは、甲州の長峰から出申したが、この間阿部川の川原へ、汐を脊めに出をつて、淺間下の

手合ひが、追ひかけられたといふ噂でござつた。

百一　ほんに阿部川と云へば、昨夜あのあたりで、人が切られたといふ事。切り手は知らぬが、慥か源之丞といふ侍ひ。又は彌兵衛といふ香具屋ぢやともいふ噂でござります。

庄屋　外にも切られた者があるとの事。聞けばその侍ひの死骸を、お妻といふ女が引取つて、中島村の燒場で、火葬にするとの事。アヽ、思へば〳〵、氣の毒な事でござるわいの……イヤ、何よりは今の狼。狩り出して下され〳〵。

皆々　合點でござる。サア〳〵、ござりませ〳〵。

ト竹法螺、早太鼓の音にて、皆々ワヤ〳〵云うて下座へ入る。直ぐにてんつゝになり、向うより三婦六、五五八、人足なり、白布をかむせし箱弔ひを、さし擔ひに丸棒に通し、跡よりおりき、手拭をかむり、水右衛門の大小を風呂敷に包み、これを抱へ、舞臺へ來り

三婦　コレ、五五八、爰ぢやァ下ろしてもよからうぞよ。

五五　アヽ、三婦六、てまえは草臥れたな。いゝワ、下ろして一服して行かうか。

りき　アヽ、コレ〳〵、二人ながら休んでゆくなら、もうちつと野道へ出てからにさんせ。

三婦　ナニお前、桶の内のが正眞の佛ではなし

五五　どこへ遠慮が

りき　これはしたり、それを滅多に云ふ事か。あれほど斷つて置いたぢやないかの。

兩人　成る程、こいつはあやまりました。

りき　見れば、往來も途絶えた樣子。其方衆は、あたりへ氣を附けて下され。

兩人　呑みこみました。

ト合ひ方、捨て鐘。二人は左右へ別れて窺ひゐる。おりき、棺の側へ寄り、コト〱と叩き

りき　モシ、水右衞門さま〱、さぞお氣詰まりでござりませうが、內の抱へのあのお妻、あなたの面體覺えた樣子。お立退なさるにも、阿部川の樣子といひ、ほとぼり覺めぬうちなれば、お駕籠というても目に立つゆゑ、燒場へ送る死人と見せて、この道筋を忍び〱に……併し、夜に入れば遠慮はござりませぬ。今日とても阿部川上を、藤枝までは矢張り此まゝ。大小は風呂敷に包みまして、持つて參りました。必ずお氣遣ひなされますな。

トさし寄つて思ひ入れあり

コレ〱、小揚げの衆、必ずこの樣子を他言さつしやるなよ。

三婦　呑みこみました。駄賃次第のこの仕事、滅多に他言する事ぢやァござらぬぞ。

五五　それにしても、暮れるに間もあるまい。提灯の支度はようござりますかえ。
りき　イエ〳〵、急いだゆゑに、とんと氣が附かぬわいな。
三婦　そいつは大變だ。阿部川べりに狼が出ますから、灯の工面が肝腎でござります。
りき　心得ました。ドリヤ、一走り行て

ト捨て鐘になり、引返して向うへ入る。この途端に東の口より白地縫ひ模様の古き打敷を掛けし棺を十藏茂作、百姓にて、丸棒に通してさし擔ひ、雲才、墨衣、淨土袈裟、所化の拵らへにて附添ひ、スタ〳〵と出て來り、この體を見て

十藏　モシ〳〵、お所化樣、見さつしやれ、爰にも佛が一人休んでゐます。
茂作　ほんに、よい道連れが出來ました。おいらも一服のんで行かうか。
雲才　さうさつしやれ。大方この佛も、中島村の燒場へ行くのであらう。貴樣達は、どこの寺からの送りものぢや。
三婦　なにサ、燒場へ行くのぢやアねえ。
雲才　燒場へ行かねえで、どこへ行くのだ。
三婦　サア、どこへ行くのであらう。ナア、五五八。

五五　ハテ、行く先は、われが知つてゐるぢやァねえか。
三婦　それだといつて、その先を知るものか。佛だから極樂へでも行くのであらう。
十藏　コレ〳〵、この手合ひは、てん〴〵の行く先を知らぬのか。
茂作　それ〳〵、この衆は佛を擔いで、この世から迷つてゐるのぢやな。棺の中の佛も、どうで極樂へは行かれまいわい。
三婦　成る程、極樂へは行かれまい。知れた事だワ、佛ぢやァねえわえ。
十藏　イヤア、棺の中は佛ぢやァねえのか。
五五　アヽ、コレ〳〵、佛だワ〳〵。
三婦　成る程、佛だ〳〵。佛に違ひないのサ。コレ、マア、一服のんでござらぬか。
十藏　さうしませう。中島まではもう僅かだ。吸ひつけて行きませう。
雲才　さうさつしやれ〳〵。

ト棺を同じ所へ下ろし、莨をのみつける。俄に竹法螺、早太鼓、山颪しになる。皆々、何事かと驚く下座より庄屋、百姓大勢逃げて出る。跡より腕を咬へし件の狼、荒れて來り、皆々へ飛びつき、捨ゼリフにて皆々立騷ぎ、大騷ぎになる。

皆々　ソリヤ、狼だ〳〵。
庄屋　噛みつくぞ〳〵。
雲才　こいつは堪らぬ。南無阿彌陀佛々々々々々々々。
皆々　ソリヤ、喰ひつくぞ〳〵。早く逃げろ……。狼だ〳〵。

ト大騒ぎになり、皆々兩方へ棺を捨て、ワツと云うて入亂れになり、殘らず逃げて下座へ入る。狼は舞臺下手の方へ來てゐる。雲才十藏茂作は、捨ぜりふにてうろたへ出て來る。爰にて入相の鐘、竹法螺、早太鼓。

雲才　サア、狼の來ぬうち、早くやらつしやい〳〵。
兩人　さうしませう〳〵。

ト水右衛門の忍びし棺を擔ぎあげ、思はず狼を見附けて

雲才　ヤア、そこに居たか。
兩人　早く逃げろ〳〵。

ト三人とも棺を取違へ、這々に揚げ幕へ逃げて行く。狼は追ひかけて入る。引違へて三婦六、五五八、うろたへ出て來り、向うよりおりき、小田原をともし、走り來り、二人を見附け

りき　ヤア、人足の衆かいの。貴樣達も狼に追はれてかいの。
五五　イヤモウ、命拾ひをしましたよ。
りき　サア〳〵、やつてもらひませう〳〵。
兩人　心得ました。急いでやらう。
　　ト擔ぎあげる。おりき、提灯の灯にて打敷を見て
りき　待たんせ〳〵。わしが掛けたのは白布の筈。こりやコレ打敷。ヤヽヽ……こりや、棺が違うた
　　わいの、違うたわいの。
兩人　そんなら今來たあの佛と、違ひましたか。
りき　エヽ、違つてゐるわいの〳〵。コレ〳〵、何と云はんす。そんなら爰へ、外に佛が來たと云ふの
　　か。
兩人　左やう〳〵、燒場行きの佛が來ました。
りき　して、その燒場は、どこぢやぞいの。
兩人　どこやら、その先までは聞きませぬ。
りき　エヽ、この衆は、氣の揉めた。こりやマア、どうせうぞいの〳〵。

ト氣を揉む思ひ入れ。下座より竹法螺、早太鼓を打ち、大勢の聲する。

兩人 ヤア〳〵、また狼が來る。早く逃げよう〳〵。

ト立騒ぐを、おりき、二人を捕へて

りき これはしたり、この棺を擔いで行き、此方の棺と、取替へて來さんせ〳〵。

兩人 それでも、狼が來ますわいの〳〵。

りき エヽ、自烈たい。早く取替へさんせ〳〵。

ト逃げたがる二人を捕へ、せがむ見得。件の鳴り物にて道具廻る。

よき時分より暮れ六ツの鐘。木魚の音になる。

本舞臺、正面白壁、土藏作りの火屋、土戸の開け閉てあり、うしろ黒幕、生垣、石地藏、よき所に跳れ釣瓶の草井戸、高燈籠、柳の大樹、すべて駿州阿部川淵、中島村の燒場。間違へし白布の棺桶、よき所に据ゑてある。十藏、茂作、雲才、汗を拭ひゐる體。右の鳴り物にて道具とまる。

茂作 さても今の狼には、生膽を拔かれたわいの。

十藏 イヤモウ、彼奴に喰ひつかれたら往生だ。

雲才　愚僧も餘ッほど、こいつを脱いで着せうと思つた。

兩人　なぜ着せるのだな。

雲才　ハテサ、狼に衣だもの。

兩人　エヽ、とんだてんぷらだ。ハヽヽヽ。

ト矢張り時の鐘、一つ鉦、木魚の音聞える。下座より八郎兵衞、手拭をかむり、古き袷、身拵らへせし形にて出て來り

八郎　モシ、お所化さん、切手ば來ましたかえ。

雲才　持參仕りました。外に佛は來ませぬかえ。

ト懷の切手を渡す。

八郎　イエ〳〵、この佛様ばかりサ……施主の衆がござつたら、火を掛けますぞえ。

十藏　さうさつしやれ。施主は女中でござるが、今に來ませう。イヤハヤ、この佛も、氣の毒な事でござつた。

茂作　もう暮れたから、かゝらしつてもよからう。

八郎　イエ〳〵、施主方がござつてから、かゝりませう。

雲才　そんなら、もう歸りませう。

兩人　今度は狼に逢はぬやうにしたいものだ。

八郎　ドリヤ、そろ／＼と焚きつけようか。

ト時の鐘、變つた合ひ方、木魚の音。三人は捨ゼリフにて向うへ入る。八郎兵衞、火屋の内へ入り、薪を取出し、焚きつける事。引違へて向うよりお妻、さゝげ草たばねにして、鮫鞘の刀を風呂敷に包み、振り袖を脇挾みたる形にて、打悄れし體、怖々に出て來り、後先へ思ひ入れあつて

つま　アヽモウ、怖い／＼と思ふ程、梢に塒の鳥さへも、どうやら怖氣の後ろ髮。よる夜中この無常場へ、女の一人連れもなう、これもお主の亡骸を

ト怖氣立つ思ひ入れにて、後先へ心遣ひあつて、舞臺へ來り、棺の下ろしあるを見附け、やう／＼に透かし見て

ヤ、こりや源之丞さまの御亡骸。見るもいぶせき

ト棺に取りつき

さぞ御無念でござりませう。誰れあらう、播州明石のお屋敷より、遠州濱名の御家中へ、養子にお出でなされた源之丞さま、御養父右内さまをお討たれなされ、敵討のお願ひあつて、兄文藏を

お連れなされ、御發足ありしより、引別れたる伯父御兵助さま、奥樣白綾さまをも返り討。かへす〲も、恨み重なる水右衞門。あの丹波屋に隱れゐて、あなたを始め金六どの、敵の爲にむごたらしう、お討たれなされし御亡骸。跡に殘りし形見の一腰、銘は即ち仁王三郎、これを恨みの鮫鞘にて、女の念力、兄文藏ともろともに、今にぞ思ひ

ト桶に取りつき、無念の體。この時、水右衞門聞きつけ、飛び出でん景色、物音する。お妻、恟りして

さては斯樣に私しが、申しましたる存念が、屆きましてか今の物音。殊にわたしが胎内に、お情受けしおどもりの、お胤を宿せし私しゆゑ、産み落さぬお子樣に、お心も殘りませうが、モシ、この樣子を明石なる、お松さまがお聞きあらば、憎い奴とも大膽な、いたづら者とも思し召しませうが、モシ、御免なされて下さりませ。これと申すも旦那樣、敵を尋ねるこの年月、種々樣々と御艱難。徒然の夜半のお氣晴らし、一度は御免おゆるしを、二度は仰せに從うて、三世の縁の御主人樣、家來の娘に有り難い、お情受けし身の冥加。

ト桶に取りつき思ひ入れ。一ツ鉦の合ひ方、時の鐘。火屋の内より八郎兵衞、出刃庖丁を提げ、棺をこなしに出て、お妻を透かし見て

八郎　アヽ、お施主様かえ。大分遅うござりましたな。サ、お立合ひなされませ。そろ〳〵かゝりませう。

つま　ハイ、いま参りましたわいな。

ト物凄きこなし。

八郎　アヽ、お施主様は女中様だね。お前、お一人かえ。

つま　アイ、左様でござります。

八郎　ハテ、大丈夫な女中様だ。ハヽヽヽヽヽ……ドリヤ、繩を切りませうか。

ト出刃にて桶の繩を切り、棒を抜き取り、打敷も取つて

サア、これから火屋の薪を持つて來て、火葬にする一段だ。

ト舞臺よき所へ薪を並べる。

つま　アヽモシお前、なぜあの火屋の内へは

八郎　さればサ、さう思ひなされうが、病死と違ひ、劍難の佛様は、別火屋で燒くのが定式。そこで外燒にするのサ。ドリヤ、焚きつけやせう。

ト薪のあたりへ火を焚きつける。お妻は珠數を出し、早桶の方を拜みゐる。焚火燃えあがる。このあか

りにて兩人顏見合せ、恟りして

つま　ヤ、お前は八郎兵衞さんぢやござんせぬか。

八郎　施主の女はお妻だな。

つま　そんならお前は

ト逃げるを追ひかけ

八郎　動きやアがるな。

トきつと引敷く。

つま　アヽコレ、尤もぢや〳〵。これには段々

八郎　イヽヤ、聞くにやァ及ばぬ。よくおれを騙したな。うぬが方から仕掛けた色事。誠と思つた八郎兵衞、俄にそれも突出したは、さては商賣が商賣ゆゑ、われは愛想を盡かしたのか。その報いでよる夜中、一人うせたは、おれを長棹にした罰だわえ。エヽ、腹の立つ、うぬわえ〳〵。

ト捻ぢつける。

つま　サヽ、尤もでござんすが、これには段々譯のある事。人に云はれぬ事ながら、コレ、八郎兵衞さん、お前がこれまで商賣を、わたしに隱しなさんしたが、却つてお前の疑ひうける、元の起りと

八郎　ナニ、どうしたと。

つま　わたしがお主の源之丞さまのお尋ねなさる侍ひの、その面差しは斯う〳〵と、姿繪までもお見せなされし尋ねもの。それゆゑにこそ雇ひの先々、勤める茶屋の座敷にて、初に逢うたが、お前の面體。もしこのお方かと思ふゆゑ、色で仕掛けて尋ねても、打明けて云はんせぬは、此やうな怖い商賣なさんすお前。わたしが身では姿繪に、違はぬ詮議の侍ひと、思ひつめたが皆間違ひ。思はずこの程丹波屋にて、座敷に忍ぶ侍ひが、お前の顔に生寫し。さてこそお主のこの年月、お尋ねなさるはこの侍ひ、八郎兵衛さんではないものと

八郎　それからおれに用も無く、突出す心になつたのか。おれに似寄りの侍ひとは、此方も縁ある藤田さま。うぬが頼んだ主人といふは、石井へ養子の源之丞、うぬも其奴が家來の妹。おれを騙した天罰で、源之丞めは阿部川原でのたれ死。うぬらが大方、敵々と吐かすのは、水右衞門さまであらうがな。

つま　アヽモシ、それをあらはに

八郎　云つてもいゝワ。うぬが腹にはくたばつた、コレこの桶の中にゐる、源之丞が落し胤。藤田さまの仇になる、そんな奴なら生けては置かれぬ。三年の戀も覺め果てた。無理心中にこの出刃で

ト突いてかゝる。立廻りよろしく、お妻を、したゝかに突く。お妻「ワツ」と云うてその手に縋り

つま　エヽ、聞分けのない八郎兵衞さん、そんならどうでも

八郎　知れた事だワ。女子供に騙されて、面の立たない隱亡の、異名を取つた湯灌場は、以前が籠ぼろ古手買ひ、湯灌場買ひから取上げて　小金も廻す、八郎兵衞、藝者のお妻に長棹の、その腹癒せは幸ひな、早桶こなすこの出刃で、大道裂きの鰻谷、辻々小路の江戸前も、今はあの世に旅鰻、隱亡團扇で煽つちやア、腹に身ごもるめそつ子も、共に無常の風なびく、無所の煙りとなつてしまへ。

つま　すりや、どのやうに譯云うても

八郎　戀の敵だ。騙した意趣だ。

ト出刃にて切りかゝる。お妻鮫鞘を手早く拔いて切りかゝる。八郎兵衞、恟りして

ヤ、女に似合はぬ、うぬは刃物を用意して

つま　これぞお主の所持なりし、仁王三郎、今は形見のこの鮫鞘。女ながらも

ト切りつけるを引ッ捕へ

八郎　そんならうぬは鮫鞘で、この湯灌場の八郎兵衞、おれを切る氣か。

つま　聞分けなければ是非がない。

ト騙しよつて八郎兵衛を切り下げる。タヂ／＼として

八郎　女め・手ひどく切りつけたな。

ト出刃にて突いてかゝる。これより凄き合ひ方、ひぐらし笛、蛙の聲、一ツ鉦の念佛。兩人相討ちの立廻り。八郎兵衛・顔を切られ、出刃を落し、兩手で顔を抑へて火屋の内へ駈けこむ、お妻續いて追ひ行くを、内より薪を打ちつけ／＼、投げ出す。お妻、その薪を滅多切りに切り拂ひ、火屋の内へ入らんとする。内より吹替への八郎兵衛、面體血にそみて、顔を抱へ出るを、お妻切りつける。八郎兵衛、むしやぶりつくを切りつける立廻りよろしく、八郎兵衛の吹替へ、火屋の内へ倒れる。向うよりおりき、件の大小を抱へ、走り出て來り、この體を見て

りき　モシ／＼、旦那さま／＼、大きに無調法を致しました。

ト早桶を見附け

ヤヽ、この内にこそ水右衛門さま。モシ、私しでござります。

つま　ナニ、敵の水右衛門が、どうして爰に。

りき　ヤ、わりやお妻だな。手を負つたのは、もしやお主の隠れたる

ト桶の方へ寄るを、お妻、思ひ入れあつて

つま　すりや、水右衛門は此あたりに。

りき　それ知られたら生けては置かれぬ。お主の刀で

ト風呂敷の中の刀を抜き、切つてかゝる。お妻、よろめき〳〵、立廻りあり、兩方相討ちの模樣。跡すさりにおりき、上の方の草井戸へ落ちる。お妻は仁王三郎の刀にて、思はず早桶を切る。途端に内より早桶を押し破り、メリ〳〵と毀れる。内より水右衛門現はれ出で、お妻が手の白刃をキッと捕へ引附ける。この時、焚火パッと燃えあがる。誂らへの合ひ方、木釣り鐘。お妻、水右衛門をキッと見て

つま　ヤヽ、其方はこの程丹波屋に、忍びし侍ひ。正しくその名は

水右　源之丞が敵と覘ひし、身共は藤田水右衛門。

つま　さてこそ多くの御主人方を、討つて立退く水右衛門。かよわき女の刃向ひ立て、敵はずとても、せめて一太刀。

ト切りつけるを、立廻つて白刃をもぎ取り、星あかりにかざして見て

水右　寸尺金色、刃金の鍛へ。こりやコレ正しく仁王三郎。

つま　お主の敵。

　　トむしやぶりつくを、キッと捕へて

水右　餓鬼に等しきこの女、大人氣なきに似たれども、源之丞が胤を懐姙、敵の末は根を絶つて

　　ト引附ける。この時、空にて烏啼く。水右衛門、キッと見上げて

闇の夜に、啼かぬ烏の聲聞けば、生れぬ先の

　　トお妻、思ひ入れ。

つま　ヤ。

　　ト寄るを、見事に切る。

水右　これで大方

　　ト指を折るを木の頭。お妻倒れると、水右衛門残りの指を折つて數へる。これをキザミ、時の鐘にて

ひやうし　幕

四幕目

明石縮屋の場

石井六之進屋敷の場

役名――石井母、貞林尼。明石の縮屋、お松。お松親、佛作助。林伴左衞門。縮買ひ、才兵衞。石井六之進。同妻、お浪。下女、おくら。女小姓、菊野。大岸若黨、神崎與三。若黨、武井文藏。所化、西念。石井源次郎。

本舞臺、三間の間、平舞臺の世話場。上の方打廻し機屋、腰窓。正面、のれん口、上は佛檀、その下は押入れ。下手、神棚、上下ともに座敷疊、爰に西念、講坊主にて、講中大勢、百萬遍を繰つてゐる。才兵衞、縮商人、反物を前に置き、十露盤を彈いてゐる。お松、茶を汲んでゐる。明石明神の大拍子百萬遍の聲にて幕明く。

皆々　南無阿彌陀ン佛〳〵〳〵。

西念　南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト鉦を打ち鳴らし

まつ　サ、お茶あがりませ。どなたも中囘向ぢや。ちと休まつしやれ。

ト皆々に茶を出し

縮屋さんも、一つおあがりなされませ。

才兵　構はつしやりまするな。コレ、お松どの。此やうに講中の衆が寄つて、百萬遍を繰らつしやるには、こちの内に志しの佛でもござつてかな。

まつ　左樣でござりまする。源次郎が弟に、半次郎と申すがござりましたが、一體病身な生れ、たうとう生れた年に亡なりましたが、當年が三年でござりまするゆゑ、皆さんをお頼み申して、心ばかりの法事を致しますわいな。

才兵　ハテ、もうさうなりまするか。月日の經つのは早いものでござる。して、源次郎さまの病氣は、どうでござる。

まつ　これも彼れこれ四年にもなりまするが、いまだに腰が立ちませぬゆゑ、祖父樣に負はれて、毎日毎日、お醫者の所へ通ひますわいな。

才兵　ハテ、それは女子の手一つで、長い病氣に、思ひやられます。

西念　時に皆の衆、願以志功德としようではござらぬか。

皆々　さうしませう〳〵。

才兵　コレ〳〵、坊樣、半次郎どのなら、まんざら知らぬ佛でもござらぬ。わしも講中の仲間へ入れて

下さるまいか。

西念　それは御奇特な事でござる。入ちつしやるがよい。

ト鉦打ち鳴らし

南無阿彌陀ン佛。

皆々　南無阿彌陀ン佛。

トまた皆々百萬遍にかゝる。掠めたる大拍子になり、向うより作助、孫の源次郎を負うて出て來り、直ぐに門口に來る。これと一ぱいに百萬遍切れて

西念、願以志功德平等精一切發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛々々々々々々。

トこの時作助、内へ入る

作助　これは講中の衆、御苦勞でござりました。

皆々　オヽ、作助どの、戻らしやつたか。

まつ　源次郎、溫なしく行つて來やつたか。父さん、さぞ重うござんしたらうな。

作助　イヤモウ、びつしよりと汗になつたわいの。

まつ　さうでござんせうとも。サア、お茶あがりなさんせ。

ト茶を汲んで出す。

才兵　作助どの、いま聞きましたが、源次郎どのゝ病氣、長い事で、さぞ困らつしやるでござりませう

作助　これは縮屋の才兵衛どの、仕入れにござりましたか……イヤモウ、孫めの病氣ゆゑ、娘もわしもホツとしますわいの。

才兵　イヤ、モウ、推量してゐますて……イヤ、とんと忘れて居たわい。坊の所へ、土産を買うて來たて。

ト風呂敷包みをひろげ

これは怪我をせぬ王子守り……ソレ、手習ひを精出すやうに墨、筆、硯。千里行つて千里歸る、足にあやかるやうに、ソレ、虎の水入れ……ヤツトウが好きぢやといふが、木太刀は危ないによつて、小さな竹刀を買うて來たが、なんと、嬉しいか。

トいろ／＼そこへ並べ立てる。作助、お松、思ひ入れあつて

作助　これはどうしたものでござる。來さつしやる度毎に、大枚な錢目な物を下されて

まつ　却つて迷惑いたしますわいな……コレ、源次郎、ようお禮を申しやいの。

ト源次郎、手を突いて

源次　モシ、小父樣、いろ〳〵のお土産を、有り難うござりまする。

才兵　イヤ、これはお禮で痛み入りました。ハヽヽヽヽヽ。ほんに賢い子ぢやないか。惜しい事でござる。

西念　惜しいと申せば、爰の娘のお松女郎、獨り身で居るは惜しいもの。村中で噂して、聟になる人はいくらもござるが、こなたさんも段々とる年の事なり、なんと作助どの、このお松どのに相應な聟を取つてやらつしやらぬか。

皆々　トこれを聞いてお松、ツンとして耳をふさぐ。作助、思ひ入れあつて

作助　皆の衆の深切、忝うござるが、譯あつて、この源次郎といふ子を儲けた娘のお松、これとても段々聟の世話燒く仁もござつたが、アレあの通りに、耳をふさいで嫌がるほどな、氣隨な娘。もうこの後聟穿鑿は、ふッつりとも云うて下さるな。兎角に困るは、孫が病氣でござるて。

西念　ハテ、それは惜しい事でござる。イヤ、作助どのや、愚僧も前方は醫者であつたが、兎角に藪といふ異名を附けられて、匙の先でこの世の人を助けるはむづかしいゆゑ、同じ丸い頭で珠數先で、あの世の人を助けるが、昔取つた杵柄で、ちつとは病の見やうも知つてゐるが、この子の病氣はコレ、人間の肝の臟の生血があると、忽ちに本復しますて。

作助　さればサ、この子のかゝつてゐる醫者なども、平常それを云はるゝが、どうして其やうな藥が、手に入るものでござる。

まつ　外に何ぞ好い藥があるなら、どうぞお敎へなされて下さりませ。

西念　されば、その外に足腰の立たぬ藥というては、またゝびなぞがようござるか。

皆々　何を云はつしやる。猫ではあるまいし、

西念　そんなら飛脚の黑燒を服ませたら、足が達者になりませう。

皆々　アヽ、埒もない。

西念　ハヽヽヽヽヽ、ほんに飛脚と云へば、講中の衆、もうお暇申さうではござらぬか。

作助　これはどなたも、御苦勞でござりました。

まつ　あまりお粗末でござんした。

作助　そんなら又、話しにござらしやりませ。

トてんつゝ、掠めたる大拍子にて、西念先に講中の皆々、向うへ入る。源次郎、そこにある竹刀を取つて

源次　母樣、わしは祖父樣と、劍術の稽古しませうか。

まつ　アイ〳〵。しやしやんせぢやが、祖父様はお前を負うて歩いて、いかう草臥れたと云はしやんすゆゑ、こりや後の事がよからうわいの。

源次　アイ〳〵、そんなら手習ひを致しませうわいの。

作助　あれ聞きやつたか。あのやうな温しいな奴でござるわいの。サ、祖父が手習ひさせてやりませう。幸ひ才兵衛どのに貰うた、この筆と墨で

ト机を取出し、源次郎に手習ひさせてゐる。才兵衛、思ひ入れあつて

才兵　成る程、賢い子ぢや。譬への通り、瓜の蔓に茄子はならぬとやら。根が侍ひの胤ゆゑに

まつ　エ。

ト思ひ入れ。

才兵　イヤ、お松どの、サ、勘定して行きませう。

ト十露盤を置いて

今日は七反買ひましたが……三十五匁づゝにして、二百四十五匁、金にして四両と五匁ぢやが、いつもの通り一反につき十匁増して、三百十五匁の五両一分。サア、受取らつしやりませ。

ト金を並べる。お松、思ひ入れあつて

まつ　モシ、才兵衛さん、これぢやによつて、もう〳〵お前には、縮は賣らんと云うたわいな。來る度毎に源次郎へ、土產を買うて來て下さんす上に、此方の云ひ値より十匁づゝ、値をよく仕切つて行かしやんす。お前にはモウ〳〵縮は賣られぬ程に、この後必ず仕入れに來て下さんすなえ。

才兵　これはいかな事。どこの山方へ行ても、わしが三十五匁に買ふと云へば、イヤ四十匁でなけりや賣られぬ、三分でなけりや仕切りせぬと、高う云のが當り前ぢやに

まつ　モシ〳〵、そりや云はしやんすな。なるたけ廉う仕入れるのが、商人の習ひぢやに、どうがなして値をよく買はうといふ、お前には賣れませぬ。父さん、聞かしやんしたか、わしが云ふのは、無理ぢやござんすまいがな。

作助　オヽ、無理ぢやない〳〵。廉くなら、なんぼでも賣るがよいが、値がよくば賣らぬがよいぞや。

才兵　ハテ、さう云はずと、値をよう賣つて下されと云ふに。

まつ　イヽエ、廉う買つて下さんせ。

才兵　イヤ、呆れたものだ。爰の娘御の廉賣りには、買出しの商人も、とんと困り果てまするワ。

まつ　ほんに才兵衛さん、待ちなさんせ。

トすつと立つて押入れを明け、簞笥の中より紙包みの金を持ち來り

お前が一昨年中より、仕入れにござんす度々に、値をよく買うて行かしやんした十匁の金が、積り積つて十七兩、爰にござんす。これ持つて、早う去んで下さんせ。

才兵　そんなら何と云はつしやる。わしが足掛け三年、十匁づゝ値をよく買つたその金が、積り積つて十七兩、この病人のある艱難の中で、遣はずにのけて置いたと云はつしやるのか。

作助　娘もあの通りの氣質。わしも佛作助と異名を取つた正直親仁、一反について十匁といふ、大枚な値賣りをしては、天道樣へ濟まぬ。ぢやによつて、娘が女子の手一つで

まつ　朝夕立てる煙りさへ、機の絲より細元手、貧苦の中でのけた金、いつか折があらば戻さうと思うてゐました。どうぞ受取つて行つて下さんせ。必ず惡う思うて下さんすなえ。

ト才兵衞感心の思ひ入れあつて

才兵　ハテサテ、揃ひも揃うた親子の心、感心しました。決して云うてくれるなと頼まれたゆゑ、三年が間、これ程も口外はしませぬが、この才兵衞が、爰の内の機ばかりを、値をよく買ふのは、外から頼まれたのでござるわいの。

まつ　エヽ、そりや又誰れに頼まれなさんして、わたしが手織りの機ばかりを

作助　どういふ譯で、値をよく買つて下さるのぢや。

才兵　石井源之丞さまの母御、貞林さまに頼まれました。

作松　エ。

ト兩人顔見合せ、思ひ入れ。これより合ひ方。

作助　そりやどうも合點がゆきませぬ。この作助もその以前、源藏さまのお草履を摑んで、御奉公をしてゐたが、このお松と若旦那、源之丞さまの事について、長のお暇。その後源藏さまはお果てなされ、御新造樣も御剃髪なされたが、その譯ゆゑに、今にお出入りの叶はぬ、わしら親子の者へなう、娘。

まつ　さうでござんす。殊に、わたしや一度もお目にかゝつた事の無い母御樣、どうしてマア其やうな事を、なされう筈はござんせぬわいな。

才兵　サア、そこでござるて。三年以前お屋敷へ上がつた時、母御樣が、密かにこの才兵衞に云はつしやるには、忰源之丞が隱し妻、お松とやら、源之丞不慮の事にて、養父の敵を尋ね、國遠して、跡は女の手一つにて、年よる作助、兄弟二人の幼子を養育して、殊に外から縁談を云ひ入れても忰源之丞へ操を立て、いつかな請け引かぬとやら。武家恥かしい貞節な女子。これが町人百姓の事ならば、早速名乘り合つて、初孫の顔見ようもの。其やうな奇特な嫁女にも、逢はれぬとい

ふは武家の表向き、どうぞ蔭ながら貢いでやりたい。其方よいやうに頼むと云はしやつたゆゑ、そこでわしが思ひ附いて、一反について十匁づゝ、値をよく仕入れたその上端が、三年積つた十七兩。これはみんな母御から出たお金。その上來る度々に、源次郎どのへ土産物も、誠はあの方から、遣はされたのでござるわいの。

ト兩人これをつく〴〵聞いて、思ひ入れあつて

作助 へエ、さうでござるか。ハテサテ、それ程までにお心を盡されて、作助親子を蔭ながら、貢いで下さる母御樣のお志し、娘、おりや涙がこぼれて

まつ 勿體なうて〳〵、冥加の程も恐ろしうござんす。ほんに、これまで母御樣のお手から出た、お金とは知らなんだ。

ト金を押戴き

サ、父さんも拜ましやんせ。

作助 拜まいでわえ。

ト押戴き

サ、源次郎も、こりや其方の祖母樣のお金ぢやぞや。

ト よろしくあつて

兩人 エヽ、有り難うござります。

ト向うの方を伏拜む。

才兵 ぢやによつてこの金は、折角のお志し、納めさつしやるがようござるて。

まつ さういふ事なら、何しに不足を申しませう。どうぞお次手にわしら親子が、厚うお禮を申しあげたゝ

作助 母御樣へ云はしやつて下さりませ。

才兵 イヤ〱、それは惡い。其方衆は矢ッ張り知らぬ分。わしが斯う〱打明けましたと申しあげては、母御樣のお心に背きまする。ぢやが、こなた衆の正直なところは、わしが又吹聽の仕樣がござるて。

作助 時に縮屋どの、もう時分ぢやあらうに

まつ ほんに、精進物ぢやが、飯あがつて行かしやんせ。

才兵 イヤ〱、どうして〱。最前の牡丹餅で、夕飯までもかすりさうでござる。ドリヤ、お暇申しませう。

作助　そんなら、どうでも歸らしやるか。

まつ　また土用前に來て下さんせ。

才兵　アイ〳〵。

ト門口へ出て、源次郎を見て

成る程、あの子は、よう手習ひに精を出しまするな、さぞよい手になるであらう。どうぞその次手に、足もよくしてやりたいものでござる。ハヽヽヽヽ。

ト掠めたる大拍子になり、才兵衛、風呂敷を脊負ひ、向うへ入る。跡見送つて

作助　ヤレ〳〵、今日といふ今日アノ才兵衛どのが、縮を値をよく買ふ譯が、さつぱりと解つたわいの。

まつ　わたしもこれまで、不思議な事ぢやと思うてゐたに。併し、あの様子では母御様は、六之進さま御夫婦へも

作助　隱してのお心遣ひと思はるゝて。

まつ　また六之進さま御夫婦は、母御様へお隱しなされて、折々の訪ひ音づれ。ほんに武家方の御深切は、また格別なものぢやわいなう。

作助　それといふが、御子息の源之丞さまが可愛さゆゑ。それにつけても、其方の兄の袖助が事、丁度あ

の源次郎が年から、石井のお屋敷へ御奉公に上がつたが、それは〳〵親旦那が可愛がらしやつて若旦那方の劍術のお相手。源藏さま御夫婦の云はしやるには、作助めは鳶が鷹、あの袖助は行く行くは、天晴れな太刀筋になるであらうと、御祕藏なされて下されたが、身持ちが惡く、お屋敷を駈落ちしたゆゑ、この親仁も勘當したが、彼奴が眞人間で居るならば、源之丞さまの片腕にもならうに、ア、、今頃は、どこにどうして

ト思ひ入れ。よき時分より源次郎、机にもたれて眠る。作助見附け

ハ、、、、源次郎めが居眠り居るわえ。可哀さうに。娘、納戸へ寐かしてやりやれ。

まつ　アイ〳〵。源次郎や、眠くば、母が寐かしてやりませう。

源次　イエ〳〵、わしや侍ひぢやによつて、晝寐はしませぬ。

まつ　ホ、、、、侍ひぢやというて、寐々せずにゐられるものかいの。サ、、風引かぬやうに寐々しや。

源次　そんなら寐るほどに、目が覺めたらコレ祖父樣、劍術の稽古して下さりまし。

作助　アイ〳〵、致しませう〳〵。

まつ　ドリヤ、寐さしてやりませうか。

ト唄になり、お松は源次郎を抱き、のれん口へ入る。作助は机のまはりを片附けてゐる。この唄をかり、向うよりお浪、家中者女房の拵らへ、日傘をさし、下女のおくら附き、中間一人、風呂敷包みを持ち、供をして出て來り、直ぐに門口へ來り、お浪、中間へ思ひ入れする。

中間　頼みませう〳〵。

ト作助聞きつけて

作助　ハヽヽ、また村の若い者どもが冗談しをるか。

ト表へ出て

ヤ、あなたは石井の御新造樣。

なみ　作助どの、久しう逢ひませなんだ。

作助　これはしたり、マア〳〵、ようこそお出でなされました。サヽ、此方へ。

なみ　大きに無沙汰いたしましたわいな。

ト門口を明けて、内へ入り、上の方へ通る。作助、茶を汲んで

作助　へイ、ぬるくとも、お一つあけませう」

なみ　イエ〳〵、構はしやんすな。

作助　サヽお女中、一つあがらつしやりませ。

くら　イエ〳〵、わたしやまだ若いによつて、お茶は否よ。

作助　ハヽヽヽヽ、これは嫌はれました。そんならお前へ

ト中間へ出し、お浪の前へ手を突き

さて、この間はお目にかゝりませぬが、母御さま、六之進さまにも、御機嫌ようお出でなされまするか。

なみ　ハイ、隨分息災で居りまする。して、お松どの、源次郎どのにも、お變りもなう。

作助　有り難うござりまする。コレ、娘、お客がある。ちよつと來やれ。

まつ　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、奥より出て來り

これは〳〵石井の御新造様、ようこそお出でなされました。今も今とてあなた様の、お噂を申しあげて居りましたわいな。

なみ　あまり久しう逢ひませぬゆゑ、幸ひ母様は、昨夜お夜詰めにお出でなされて、お下がりは今日のむツぢやといふ事ゆゑ、隱れて逢ひに參つたわいな。

まつ　左樣でござりまするかいな。いつもながら、あなた樣の御深切

作助　有り難うござりまする。

まつ　ほんに、おくらさん、重年でござんすか。おめでたうござります。

くら　ハイ、わたしや此やうにそゝくさしても、御隱居樣や御新造樣の、お氣に入つてゐるかして、來る年も來る年も、重年を仰しやりつけられまするが、お松さんえ、お前はいつも綺麗だね。成る程、あの源之丞さまが惚れなさんしたも、憎うはないね。

なみ　これはしたり、おくら、どうしたものぢや。わが身の出過ぎにも、とんと困るわいの。ほんに、それはさうと、源次郎どのゝ病氣は、少しはようござんすかえ。

作助　イヤモウ、いつも同然でござりまする、いま納戸に晝寐して居りまする。娘、ちよつと起して來やれ。

なみ　アヽ、モシ〳〵、折角よう寐てゐるものを、可哀さうに。今度參つた時に逢ひませう。コレ、おくらや、その包みを。

くら　ハイ、

トお浪の側へ、持つて行く。お浪、中より誂らへの小裁の、絽の袷帷子を出し

なみ　この小裁は、誂らへ染の蝶千鳥、母樣に隱して、わたしが手づから仕立てた着物、曾我兄弟の孝行にあやかるやうにと、源次郎どのへ土產物。どうぞ着せてやつて下さんせいなう。

ト　お松思ひ入れあつて

まつ　モシ、父樣、わたしやあなたが此やうな見苦しい所へ、お尋ねなされて下さるさへ、有り難うてならぬのに、此やうなお心遣ひなされては、どうもお禮の申しあげやうがござんせぬわいな。

作助　勿體ない事ぢやが、折角のお土產、戴いて置きやれ。

まつ　さぞ源次郎が、喜ぶ事でござりませう。

ト　着物を見て

モシ、憚り樣ながら、よいお手でござりまするな。

なみ　イエモウ、お恥かしうござんす。

作助　これにつけても、どうぞあなた方のお執成しで、其方や孫めが一緒にお屋敷へ

まつ　わたしや叶はずとも、あの源次郎をば、母御樣へお目通りが

なみ　サヽ、その事を、平常わたしら夫婦が、執成して居りますれど、兎角物堅い母樣、わたしが此やうな事を云ふも異なものぢやが、それは／＼モウ、男まさりと云はうか、あのやうなお方はござん

せぬ。女子一通りの事は云ふに及ばず、武藝のお心掛け、何から何まで拔け目のないお方ゆゑ、また優しさも人一倍なりや、現在のお孫の事、いつか一度はお逢ひなされいでわいな。ほんに、お前もわたしも、あのやうな姑御を持つといふは、仕合せでござんすぞえ。

まつ　ほんに勿體ないが千に一つ、世間晴れて、あなたの嫁になれましたなら、そりやモウ、どのやうに嬉しうござりませう。

なみ　そりやならいでわいな。

まつ　アノ、なりませうかね。

なみ　なります。

まつ　アノ、ほんまになりませうかね。

なみ　きつとなります。

まつ　アノほんまに。

くら　オヤ〳〵〳〵、きついなりたい事だね。

ト皆々顏見合せ

皆々　ホヽヽヽ。

ト思ひ入れ。

まつ　モシ、父さん、最前からわしや、聞きたうて〳〵。

作助　そりや何が。

まつ　イエモウ、大概知れたものぢやわいな。

ト お浪、思ひ入れあつて

なみ　ほんに、こりやわたしが心附きませなんだ。御出立なされて、もう三年になりまする。母御様の方へは、未だに一度も便りがござんせぬが。

作助　ハヽア、源之丞さまの事な。それが恥かしい事があるものか。其方がお聞き申してもよい事を、ハヽヽヽ。

まつ　左様ならお屋敷へも、前々よりござりませぬかいな。

なみ　して、お前の方へ、お便りでもござんしたかえ。

まつ　サ、源之丞さまに頼まれたと、四五日以前から此方の内に、逗留してゐるお侍ひがござんすが、これもどうも

作助　ほんに、あの作左衛門どのは、どこぞへ行かれたのか。

まつ　大方また釣りにでも・行かしやんしたのであらうわいな。

なみ　エ。そりやどこから頼まれてござんして、何といふ侍ひでござんすえ。

作助　所は駿河の府中邊から、源之丞さまに頼まれて來たと申す侍ひ、私しも見知り小知りに知つてはゐます。以前は矢張りこの明石の家中で、先年阿房拂ひになりました、林伴左衞門と云はれる侍ひ。其やうな惡者を、若旦那が頼まつしやる筈はないと思はれまする。

まつ　源之丞さまがお持ちなされて、わたしも見覺えてゐまする、垣に朝顔の彫りのある小柄を證據に頼まれたと云はしやんすゆゑ、お宿申しては置くものゝ、モウ〳〵、アタ嫌らしうて

　　トよき時分よりおくら、こくり〳〵居眠る。

なみ　イエ〳〵、それは油斷がなりませぬ。敵討つ身は敵持ちとやら、もしや敵の

くら、わたしや虎藏より、お薩がよいよ。

　　ト寢言を云ひながらフツと目覺まし、怪訝な顏をしてゐる。

なみ　コレ、くらや、わが身はマア、どうしやつたのぢや。

　　トこれにて氣が附き

くら　オヤ〳〵〳〵、どう致しませうね。私しはマアとんだ所で、お夢を拜見いたしました。

なみ　いかに夜が短かいというて、ちと嗜みやいなう。

トこの時掠めて、時の太鼓鳴る。お浪、思ひ入れあつて

ほんに、ありやモウお城の八ツの太鼓、母樣のお歸りに間もござんすまい。左樣なら、わたしや歸りますぞえ。

まつ　もそつとお留め申したいが、母御樣へお忍びゆゑ。とは申しながら、あまりお愛想が

なみ　イエ〳〵、又いつか世間晴れて、話しのなる事もござりませうわいな。

作助　六之進さまへ憚り樣ながら、よろしくお願ひ申します。

まつ　これはおくらさん、御苦勞でござんした。

くら　ハイ〳〵、これから又私しは、母御樣のお迎ひに上がります。ほんにマア、斯う歩いてはどこやらが

中間　ねれたところが、食ひ手があるまい。

くら　オヤ、あんな事を申しますよ。

なみ　左樣ならお二人の衆、隨分源次郎どのをお大事に。又その後、逢ひに參りませう。

作松　ハイ、ようお出でなされました。

ト唄、掠めたる大拍子にて、お浪おくら中間、向うへかゝる。作助、奥へ入る。この鳴り物をかり、向うより伴左衞門、深き竹笠をかむり、着流し、大小にて釣竿をかつぎ、魚籃を持ち、出て來り、花道にて行合ひ、お浪、目を附ける。伴左衞門、顏を外けるこなしあつて、お浪は揚げ幕へ、伴左衞門は門口へ來り、内の樣子を窺つてゐる。お松これを知らず、思ひ入れあつて

まつ　ほんに優しい御夫婦の衆、母御樣へお隱しなされて、此やうに着物までを、仕立てゝ下さんすといふは。大抵な御深切ぢやない。それにつけても、あの源之丞さま、どこにどうして居やしやんすやら、便りはあつても何ぢややら、心に濟まぬ事ばかり。そして、又行く先々で、どのやうな面白い女中が……イヤ／＼、此やうな事を思ふと、方途がない。アヽ、思ふまい／＼。兎角一日も早く御本望をお遂げなされて、歸らしやんした上、喜ぶお顏が見たいわいな。

ト思ひ入れ。この時、伴左衞門、ズッと内へ入り

伴左　イヤ、所詮源之丞は、歸る事はないぢやて。

まつ　エヽモウ、恟りしたわいな。モシ、伴左衞門さま、氣にかゝる今のお詞。源之丞さまは、なぜに歸る事ぢやござんせぬえ。

伴左　歸らぬと云つたのは

まつ　歸らぬと云はしやんしたは

伴左　なによ、オヽ、それ〳〵、源之丞には、色が出來た。

まつ　エ、そりやマアどこの女中でござんす。

伴左　アヽ、慥か駿河の二丁町で、お妻といふ藝子と大の色事。

まつ　モシ、そりやマアほんまの事かいな。

伴左　ほんまどころか、そのお妻といふ藝子と、死ぬ死なうといふ仲であつたが、あれでは今頃は、大方死んだであらう。

まつ　エヽモウ、緣起の惡い。鶴龜〳〵々々。

ト耳をふさぐ。

伴左　ハヽヽヽ、おぬしは鶴龜、源之丞は又そのお妻と、する龜〳〵。

まつ　エヽ、聞けば聞くほど腹が立つ。

伴左　それぢやによつてコレ、身共が云ふ事をよう聞きやれ。

ト懷の紙入れより前幕の小柄を出し

源之丞がこの伴左衞門に云ふには、明石の在所に、お松といふ隱し妻があるが、何卒貴殿その小

柄を證據に、お松に逢つて云はうには、源之丞路用に盡きて難儀する最中。どうぞ金拵らへてくれと云へば、田舍娘の馬鹿深切、たとへ賣つても二十や三十の金は工面をするほどに

まつ　モシ〳〵、そんなら何と云はしやんす。路用に盡きたと僞つて、わたしに金の才覺させ

伴左　實はそのお妻に入りあげるのぢやワ。

まつ　エヽ、此方で思ふやうにもない。そりやあんまりぢや源之丞さま。聞へませぬわいな〳〵。

ト伴左衞門の胸倉を取つて振り廻す。

伴左　これサお松、其やうに腹立てずと、身共が云ふ事を聞くがよい。そこで四五日以前、爰の内へ來て、始めは賴まれた通りにやらかして見たが、源之丞とは打つて變つて深切な其方、心根が不便さに、此やうに何もかも、打明けて云つて聞かせる心中男。なんと憎うはあるまいがな。

トいやらしきこなし。よき時分より作助窺ひ出て、お松と目くばせする。伴左衞門これを知らずにゐる事。

まつ　ほんに、あのやうな子まであるわたしを捨てゝ、いかに男の習ひぢやとて

伴左　そこが去る者日々に疎しとやら。其やうな心の腐つた男めに、心中立てるはあんまり古風。

まつ　わたしもこれから心を改め

伴左　すりや、牛を馬に乘りかへて
まつ　この間から、深切に云うて下さんす
伴左　身共が心に隨ふか。
ト思ひ入れ。
まつ　アイ……と云ひたいが否でござんす……モシ、父さん、聞かしやんしたか。この間から、この通りぢやわいな。
伴左　ヤ。
ト恟り、振りかへり、作助を見て、恟りして
作助、いつの間に。
作助　ハテ、よい身持ちでござるの。
伴左　エヽ、あのお松め。
ト寄るを作助隔て
作助　伴左衞門どの、エヽ、こなたはなう。
ト思ひ入れ。合ひ方になり、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、眞中、更紗のれん口。上の方、床の間、違ひ棚。下の方、貼りつけの壁。よき所に本箪笥、矢屏風、具足櫃を飾り、長押に槍、薙刀を掛けあり、上の方に萩垣、手水鉢、下草のあしらひ、すべてこの道具綺麗に飾りつけ、鳴り物、中程より變り、道具とまる。

ト二重舞臺に與三、絆纏、ぶッ裂き羽織、大小、旅形にて、お浪、挨拶してゐる。下の方に袴、一本差しの侍ひ、手を突いてゐる。

なみ　これは〳〵、遠々の所を、御苦勞に存じまする。して、お國を幾日にお立ちでござりました。

與三　十五日に勢州龜山を發足いたしまして、殊の外道を取急ぎましたゆゑ、五十餘里の道を三日目に御當地へ到着仕りました。

なみ　それは怪しからぬお早い足でござりましたな。

侍ひ　左樣なら、旦那のお迎ひに行つて參りませうか。

なみ　大方弓場に射てぢやあらうほどに、さう申して來や。

侍ひ　畏まりました。

ト門口へ出る。曲舞の鳴り物にて、向うより六之進、着附け、袴、脇差ばかりにて、片肌脱ぎ、弓かけを持ち、出て來り、花道にて出合ひ

只今お迎ひに上がるところでござりました。

六之　何ぞ用事あつてか。

侍ひ　勢州龜山の大岸さまより、お使ひが見えられました。

六之　アヽ、そりや母人の使者であらうか。何に致せ、身共も行て挨拶を致さう。

ト入れかはつて侍ひに弓矢を渡し、肌を入れ、弓かけを取りながら内へ入る。お浪、與三、下へ下がる。侍ひ、弓矢を持ち入る。思ひ入れあつて六之進

これは〳〵、只今承つたが、神崎與三どの、先づは大岸頼母どのにも、御勇健にお勤めなさるや。さて遠路のところ、お使者御苦勞でござる。

與三　拙者は御隱居樣へのお使ひでござりまするが、御主人大岸頼母申しつけまするには、御若年ながら六之進どの、武藝御鍛練とのお噂、當家中までも專らの取沙汰、陰ながら大慶に存じますると、傳言仕るやうに、申しつけられましてござりまする。

六之　これは〳〵、未熟な拙者、大岸どのゝお詞にあづかり、お恥かしう存ずる。イヤ、さぞお草臥れでござらう。ゆつくりと御休息なされい。

與三　して、御隱居貞林さまには、御在宿でござりますかな。

六之　母ことは昨日より、大奥へ上がつて居りまするが

なみ　先程迎ひを遣はしましたゆゑ、おつつけ戻るでござりませうわいな。

ト唄になり、向うより貞林尼、誂らへ、尼の拵らへ、黒絽の頭巾、御納戸繻子の着附け、黒の羽織。菊野、女小姓にて、誂らへ石臺に植ゑたる撫子を持ち、おくら。袴、絹羽織の侍ひ一人附き、出て來り、尤も道より侍ひ、駈けぬけて門口へ來り

侍ひ　お歸りでござりまする。

トこれにて六之進、お浪、下手へ出迎ひ

六之　母人様、お早いお下がりでござりました。

貞林　今日は十八日。六之進、其方は非番ぢやの。

六之　左様でござりまする。

ト貞林上手へ通り

貞林　わしは昨日吉日ぢやによつて、お姫様へ薙刀の許しを、申しあげたお祝ひに、大奥へお伺ひ。コレ、夫婦の衆も喜ばしやれ、大殿様が入らしつて、この母へ御褒美のお杯。有り難い事ではないか。彼れこれで、殊なく夜が更けたゆゑ、たうとうお夜詰めして歸りました。

なみ　それはモウ、御苦勞にござりました。併しながら、有り難い事でござんすな。
菊野　御隱居樣、この撫子は奥のお庭へ、持つて參りませうか。
貞林　爰へ置いてたも。
菊野　畏まりました。

トよき所へ置く。お浪見て

なみ　ほんに美しいこの撫子、どこでお召しなされましたぞいな。
貞林　イヤ、こりや大奥より拜領して來ました。なんと見事な花ぢやござらぬかいな。
六之　道理こそ、平常の花とは違ひまする。誠に母人のお庇ゆゑ、拙者までが勤めむきの、外聞にもなりまする。……イヤ、最前より勢州龜山の、お使ひが參つて居りまする。
くら　オヽ怖。

ト悚りする。

なみ　これはしたり、何の事ぢやぞいの。
くら　それでもあなた、龜山から來たと仰しやるから、私しは化け物かと存じまして
なみ　エヽ、何を云やるぞいの。

與三　貞林さま、神崎與三でござりまする。先づは御機嫌よろしく。

貞林　これは〳〵、遠路のお使ひ、御大儀でござります。して、御用の趣きはな。

與三　別の儀でもござりませぬ。いつも飛脚を以てお願ひ申しまする歌の御點、この度は私しが、わざわざ詠草を持參いたしましてござりまする。

貞林　これはしたり、なんと六之進夫婦の衆、聞かしやつたか。大岸どのゝ御內證は、殊ない執心ではござらぬか。勢州よりこの播州へ、毎月詠草の點を取りに遣はせられる。諸藝ともに、あのやうに出精せねば、上達は致さぬぞや。さればこそ月の戶どのゝ詠まるゝ歌は、心も姿も幽玄に、よう手爾波を詠じ叶へなさるわいの。

ト思ひ入れ。與三、詠草を入れし薄箱を取出し

與三　卽ちこの中に、狀もござりまするを申す事でござります。何卒御點をお願ひ申しまする。

貞林　承知いたしました。及ばずながら吟じてあげませう。先づ〳〵お前は、ゆるりと逗留なされて、お休みなされませ。

なみ　コレ、女ども、このお方を、奥へ御案內しや。

くら　畏まりました……サ、龜山さま。

なみ　これはしたり。

くら　オヤ〳〵、どう致しませう。又云ひ損なつた。この口めが。

ト口の端をつねる。

與三　左樣なら、御免を蒙りまして

六之　ゆるりと休息なされい。

ト曲舞になり、與三をおくら菊野案内して、奥へ入る。貞林、箱の蓋を取つて、詠草を出して

貞林　道に於ては、好きほど尊いものはない。武藝一通りは侍ひの表、こりや云はいでも出精せねばならぬが、折々は又、和歌の道も心がけて置かつしやれ。人の心を和らぐるはこの道ぢや。また、物の哀れをよう辨まへねば、誠の武士とは云はれぬぞや。

六之　そりや母樣のお詞ではござりまするが、侍ひは物の哀れを存じましては、まさかの時の刃金がなまり、思はぬ不覺を取らうかと思はれまするて。

貞林　イヤ〳〵、そりや一徹な血氣の勇。昔より名士と云はるゝ人は、皆それ〴〵に、物の哀れを辨まへて

六之　すりや、夫婦親子の恩愛も

貞林　ホヽ、知らいでわいの。

ト六之進お浪、好き折とうなづき合ひ

六之　母様のお話しを承りますれば、成る程、和歌と申すものは、結構なものでござりまする。それについて、お聞き申したいは、あの石臺に咲いて居りまする撫子の花、あれを歌に詠みまするには、どのやうな心に詠みますればよろしうござりますな。

貞林　されば、撫子といふ聲があるゆゑに、大抵は幼子なぞに准へて詠みます。子を思ふ親の心のわりなきは、なぞと、古歌にもござるわいの。

六之　して見ますれば、心なき草木にさへも、寄せて親子の恩愛をば

貞林　詠みまする。なんと優しいものではござらぬかいの。

なみ　サ、それ程に、物の哀れも恩愛も、辨まへてお出で遊ばす母人様

六之　なぜに逢うてはおやりなされませぬ。

貞林　ムウ。逢うてやらぬとは、そりや誰れに。

なみ　弟御源之丞さまの忍び妻、お松どの、殊にあなたのお爲には、現在の初孫にて

六之　いたいけ盛り、蕾みの花、その撫子に、なぜに逢うては

兩人　おやりなされませぬ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、貞林こなしあつて

貞林　今に始めぬ事ながら、夫婦の衆の其やうに、云うて下さる志し、母が身にとつて過分なぞや。子に甘いは母親の習ひ。いとしい我が子の源之丞に操を立て、子仲まであるお松とやら、逢ひたうなうて何とせう。その初孫の顔見たいは山々ぢやが、爰の道理をよう聞かつしやれ。悴源之丞養父の敵を討ち負ふせ、右内どのゝ家を引起し、あの方にて世嗣にても出生せぬうちは、お松親子に親しうしては、草葉の蔭の養父へ對し、この母がどうも義理が立ちませぬわいの。我が子の愛に引かされて、過ぎゆかれた連合ひ源藏どのが、磨きあげたる武士の鏡、曇らすやうな母ぢやござらぬ。六之進夫婦の衆、よう合點がゆきましたか。必ず辛ない母と思うて下さるなや。

ト思ひ入れ。兩人もこなしあつて

六之　事を分けたる母人のお詞。この上何とも

なみ　申しあげやうがござりませぬわいな。

ト暮れ六ツの時計鳴る。

貞林　サヽ、大岸どのゝ内證の詠草、披見しませう。其方衆にも

兩人　少と拜見いたしませう。

ト三人寄つて詠草を見てゐる。鼓の調べ、合ひ方、時の鐘、蟲の音にて、向うより文藏、旅形、大小割りがけ、三度笠を持ち、出てくる。花道にて思ひ入れあつて

文藏　アヽコレ、三年振りにて、お屋敷へ戻つて來たが、昔に變らずお隣の、御隱居の鼓の調べ、それに引かへ、變り果てたは

ト思ひ入れあり。

あの事を申しあげたなら、なんぼ氣丈な母御樣でも、さぞお嘆きなさるであらうと思へば、敷居が高うて……アヽまゝよ。所詮云はねばならぬ事ぢや。

ト思ひ切つて、ツカ〱と門口へ來り、入らうとして、いろ〱こなし。また思ひ切つて門の戸へ手をかける。この時、鳴り物になり、下座にて

謠〽親は空にて血の涙、子は安方の安からぬ。

トこの謠を聞き、內の貞林、外の文藏、心々に氣味合ひの思ひ入れあつて、貞林、フツと外の文藏を見附け

貞林　六之進、表に誰れやら見ゆるぢやないか。

ト六之進、お浪、思ひ入れあつて

六之　成る程、誰れやら居りまする……行て見て參れ。

ト お浪立つて門口へ來り

なみ　誰れぢや。どなたでござりまする。

ト門口を明け、文藏を見て

ヤ、其方は文藏ではないか。

文藏　御新造樣、久々お目にかゝりませぬ。

六之　ナニ文藏ぢや……成る程、文藏ぢや〳〵。モシ母人、吉事でござりまする〳〵。

ト貞林も立つてくる。

貞林　ヤレ〳〵、文藏か。嬉しや、よう戻つたな。其方が戻つて來るからは、忰源之丞も

なみ　戻らしやんすは知れた事。

貞六　ヤレ〳〵、落ちつきました〳〵。

貞林　これはしたり、何を其やうに、うぢ〳〵して居るぞ。

三人　サヽ、此方へ入りやれ〳〵。

ト文藏を無理に内へ入れて

貞林　コレ、其方衆にも云はなんだが、この間は打續き夢見の惡さ。有やうは、いかう案じてゐたわいの。よう戻つてたもつた。それにしても、源之丞は、なぜ其方と一緒には來やらぬぞいの。

六之　ハア、こりやてつきり道寄りしてゐると見えるわえ。

なみ　サア、その道寄りなされたいも御道理ぢやが

六之　少しも早う母人へお目にかゝらいで。コレ、文藏、其方、急いで迎ひに行つて、連れて來やれ、連れて來やれ。

貞林　それ〳〵、母も早う逢ひたいわいの。

六之　サヽ、大儀ながらツイそこぢや。行つて來やれ〳〵。

ト文藏、俯向いて默つてゐるゆゑ

貞林　コレ、文藏、なぜに物を云はぬのぢや。

六之　源之丞が道寄りをしてゐる所は、母人も大概御存じだ。早う連れて來て

なみ　サア〳〵〳〵、早う源之丞さまに

三人　逢はしやいの。

ト三人寄つてせがむ。文藏、ヂツと思ひ入れあつて

文藏　其やうに仰しやつては、文藏が申しあげる事さへも申されませぬ。お氣を鎭めてとつくりと、源之丞さまにお逢ひなされませ。

ト貞林、思ひ入れ。

貞林　この場に居やらぬ源之丞に

六浪　サヽ、逢はせてたもノ＼。

ト合ひ方になり、文藏、油紙に包みし誂らへの刀を取出し

文藏　これが卽ちあなた方が、其やうに逢ひたう思し召しまする

三人　ヤ。

文藏　源之丞さまでござりまする。

ト眞中へ刀を置き、ヂツとなる。貞林騷がず、刀を取上げる。六之進、目を附けて

六之　柄絲ほぐれ目貫は拔け、血に染みたるこの一腰。これを源之丞と申すからは、さては弟は

貞林　コリヤ。

ト思ひ入れ。貞林、刀を拔きはなし、キツと見詰める。これより誂らへ胡弓入りの合ひ方。

六之　鋒子先より鍔元かけて、切りこむ疵は五十餘ケ所。
　　背のしのきもさゝらの如く
貞林　しかも源之丞が差料
六之　千壽院力王が刀。
貞林　すりや、身一つにて七八人の、敵に當つた烈しい働き。
　　　　ト思ひ入れあつて
　　文藏々々。
文藏　ハツ〳〵。
　　　　ト平伏する。
貞林　我が子ながら源之丞、恥かしからぬ死やうしやつたの。
　　　　ト思ひ入れ。
六浪　すりや、源之丞さまは。
貞林　返り討に
　　　　ト泣き沈み

勝負は時の運による。よし返り討になるとても、この働きの樣子では、敵も兩三人は仕留めたであらう。天晴れ武士ぢや、よう働いたなア。コリヤ、文藏、母は未練に嘆きはせぬぞ。せめてもの事、その場に有りあはせたか。默つてゐては譯が解らぬ。助太刀は何者ぢや。サヽ、その場の樣子を、母に云うて聞かしや。

六之 サア〱、樣子を申し聞かせいの。

ト詰めよる。文藏、思ひ入れあつて

文藏 ハッ、申しあげる面目もござりませねど、三ケ年以前源之丞さま、當地を御發足なされてより、敵の在所尋ねんと、主從三人さま〲に身をやつし、爰の手がゝり、彼處の取り沙汰、聞出さんと心を配る折柄。敵水右衛門の實父、卜庵と申す者、江州膳所に住居なす由、人の噂に聞くや否血氣に逸る若旦那、これ屈竟の手がゝりと、罷り登りて聞き糺せ、文藏早うと主人の仰せに是非なくも、拙者は先月初めつ方、若旦那には轟金六を附け置いて、駿河の國府中宿にてお別れ申し、彼處へ參つて聞き糺せど、これぞと申す手がゝりも無く、すご〱歸る阿部川在、しかも先月二十一日、雨は篠突く眞の闇、中島繩手の里はなれ、心ならざる胸騷ぎ、爪づく死骸に恟り仰天、よく〱見れば轟金六、いま一人は若旦那源之丞さま、數ケ所の深手に今際の際。

貞林　すりや、その時は、まだ生きてゐやつたかいなう。
六之　して〳〵、後は。
文藏　聲を限りに呼び生け申せば、聲通じてか御目を見開き
貞林　オヽ、何と云うたぞいの。
文藏　敵水右衛門、大勢の助太刀語らひ騙し討、文藏、無念な、口惜しいわやいと、その一言がこの世のお別れ。
六之　卑怯未練な水右衛門。すりや、助太刀語らひ、騙し討とな。
貞林　さぞ無念であつたらう。尤もぢや〳〵。
文藏　チエヽ死なしたり、おのれ敵の水右衛門めと、駈け出しても眞暗闇、自園駄踏んでも詮方なく、せめては御働きのしるしもやと、あたりを見れば、助太刀ひろいだ奴と見え、浪人或ひは雲助など、四五人見事にお仕留めなされし上は、また〳〵それがお腹癒せ。たゞ申し譯無きはこの文藏お供いたした甲斐もなく、御大事の場所にも居合さず、生面さげてノメ〳〵と、立歸つたる拙者が胸中、モシ、御推量なされて下さりませ。
ト思ひ入れ。お浪、こなしあつて

なみ　モシ、母上樣、六之進さま、お心のうち、推量いたしますわいな。

貞林　イヤ〳〵、源之丞は敵持つ身、討つ討たるゝは定まり事。たゞ不便なは轟金六、よう、一緒に死んでくれたなア。とはいへあれが親の心は、どのやうにあらうと思へば、わしや悲しうはないが、金六が親の心が推し量られて、不覺の涙がこぼれますわいなう。

ト思ひ入れ。六之進こなしあつて

六之　さうぢや。

ト立ちかゝるを、貞林、思ひ入れあつて

貞林　忰六之進、血相變へて、どこへ行きやる。

六之　これより直さま登城なし、お暇頂戴いたした上、弟の敵水右衛門、草を分けて詮議なし、首引ッ提げて立歸り、あなたのお目にかけませう。

トまた行きかけるを

貞林　コリヤ、待ちや〳〵、六之進、わが身は血迷うたか。其方が命は誰れが命ぢや。弟源之丞にくれた命ぢやあるまいがの。サ、その命を捨てゝ先祖代々、高祿を頂戴いたす、御主人御爲前の御奉公は、何で勤めるぞ……勇氣に逸るは賴もしけれど、まだ料簡が若いわいなう。

ト思ひ入れ。六之進こなしあつて

六之 成る程、御尤もなるそのお詞。さりながら、右内どのゝ敵水右衛門は、源之丞の血筋を以て討ちませずば、養父の家へ立ちますまいがな。

貞林 サヽ、立ちませぬ。その源之丞の血筋も、どこやらに有りさうなもの……コリヤ、六之進、それには眼前、好い手本は轟金六。年一合でも侍ひの、祿を食んだる魂ひにて、主人源之丞と共に切り死したとの事。天晴れ武士の心掛け、年端もゆかいで健氣な奴。わしや源之丞より金六が不便なぞや。同じ家中のその中にも、おのれが主の大事の場にも在り合さず、おめ〱と立歸つて來る者もあり……ぢやによつて我れ人ともに、主人を持つ侍ひの、命の捨て所は大事なもの。よう合點しやれよ。

トこなし。文藏、ヂツと切なき思ひ入れあつて

文藏 サヽ、拙者もその場にて腹掻ッさばき、冥土のお供とは存じたれど、さある節にはこの一條、誰れあつてお知らせ申す人もなく、殊に當所の安居町には、源之丞さまの忘れ形見の

貞林 オヽ、それ〱、其方がやうな侍ひも又、無けにや叶はぬ。コリヤ、文藏、瓦となつて全からんよりは、玉となつて碎けよと、其方や金六に好い譬へ、不忠が無けにや忠義も知れぬ。返す〲も

あの金六、よう命捨てゝたもつたなう。

ト思ひ入れ。文藏こなしあつて

文藏　思へば〳〵、羨やましきは轟金六、よつく武運に叶ひし身の上、場所をも去らず冥土のお供。今あなたのお詞を、聞く文藏が胸の内、身は八裂きの肉ひしほ、死は一旦にして易しとやら、最早この世に用無き拙者。お庭を穢して

ト腹切らうとするを

貞林　アヽコリヤ、待ちや。

文藏　でも。

六之　アヽコレ、母人の仰せ。文藏、必ず早まるまいぞ。

貞林　嫁女、佛壇へお燈火あげてたも。逆さまながら一遍のなみ御回向なされて遣はされませ。

貞林　六之進、その石臺の撫子に、咲き交りたる桔梗の花、子を先立てしこの母が、何の花見て慰さまう。香華に取つて手向けにせん、早うその花切つてたも。

六之　すりや、拜領なされしこの花を

貞林　サ、切りや。

文六　エ。

貞林　サ、早う切らぬかいなう。

ト思ひ入れ、これより誂らへ獨吟のかゝり。

〽折らば散り、拾はゞ消えん萩の露、えにしも薄き月の影。

トこの獨吟のうち、お浪こなしあつて奥へ入る。六之進、小柄を取つて石臺へかゝる。文藏、肌を脱ぎ、切腹の用意する。此うち貞林、詠草へ歌を書くこなし。唄一くさり切れる。

貞林　見事切る氣か。

六之　エ。

貞林　その花を

文藏　おさらば。

ト思ひ入れ。

貞林　アヽ、コリヤヽ、待ちや／＼……まだ早い。

文六　とは又なぜに。

貞林　サヽ、同じ切るにも切りやうがあらう。心無う切る時は、そりや犬死。アイヤ、無駄花にならぬやう、

文藏　なんと。

貞林　コレ、よう聞きやれよ。この石臺の桔梗の一本、所詮切らねばならぬ花なら、この撫子の爲に切れ。

ト思ひ入れ。

文藏　この撫子の爲に切れとは。

トこなし。

貞林　さある時には、この桔梗の功も立つ。足腰立たず打悄れし、撫子は花も浮立ち、浮木の龜や、優曇華ならぬ

六之　花を咲かすか

文藏　咲かさぬも

貞林　サヽ、この桔梗の花の切りやうによる。

トこなし。六之進、思ひ入れあつて

六之　心あり氣な母人の
文藏　切れと仰しやる花の謎。
貞林　解けしその時、まつこのやうに
　　ト誂らへの通り、石臺を切り割る。
文六　これは。
　　ト貞林、片手に詠草をさしつけ、兩人に見せて
貞林　「うつし植ゑん、露の惠みをうけてまし
六之　忘れがたみの
文藏　撫子の花」。
貞林　花もの云はねど
文藏　色をも香をも
貞林　慕ふは撫子。
文藏　エ。
貞林　文藏。

文藏　ハツ。

貞林　忠義を磨く

　　ト桔梗の花を投げて

　思案をしやれよ。

　　トよろしく又獨吟になり、文藏は花を取上げ、思案の思ひ入れ。貞林、六之進、囁き合ふ事よろしく

　　唄の切れに道具、鷹揚に廻る

本舞臺、元の世話場へ戻る。爰に作助、源次郎を相手に劍術の稽古してゐる見得。白囃子、機を織る音にて道具とまる。

　　ト兩人、竹刀にて立廻りあつて

源次　祖父樣、これではどうでござりまする。

　　ト下にゐたまゝ打つてゆくを、受けとめて

作助　イヤ、なか〳〵味をやり居るわえ。ところを、斯うして

　　トほどくを源次郎、切り返して

源次　滅多に油断は

ト竹刀を合せて

致しませぬ。

作助　オヽ、賢い〳〵……コリヤ、髪の毛ほどの透があると、此方の體は眞二ツ。ソリヤ、踏みこんで來い、と云つたところが叶はぬ足。

源次　ところを斯うして。參つたか〳〵。

ト作助の足を打つ。作助、ベツタリと下に居て

作助　オツト見えた〳〵……ヤレ〳〵、出かし居つた〳〵。成る程、腹は賤しい作助が娘でも、胤は爭はれぬものぢや。源藏さまに御奉公してゐた時、若旦那方のお稽古を、見やう見眞似に覺えた太刀筋。敎へる祖父より、忽ち上手になり居つた。イヤ、感心ぢや〳〵。

ト思ひ入れ。

源次　これでは侍ひになれませうか。

作助　なられる段ではないわいの。

源次　そんなら、もつと立合ひませうか。

作助　イヤ〳〵、もう堪忍してくりやれ。祖父はホツと草臥れたわえ。

ト作助、獨り按摩などとつてゐる。大拍子になり、石見、刺貫、一本差し、本綿襷、神主の形にて、お札を持ち、向うより出て來り

石見　明石明神の神職、榊石見でござる。作助どのはお宿かな。

作助　これは神主樣、いつものお札配りでござりますかな。

石見　イヤ〳〵、左樣ではござらぬ。七日以前、此方の娘お松どのが見えられて、頼まれた御祈禱の札今日滿願でござるゆゑ、持つて參つた。信心して受取らつしやれ。

ト此時お松、機屋より、明石縮一反、紙包みにして持つて出て來り

まつ　石見さま、お札をお持ちなされて下さりましたか。有り難うござります。これは私しが手織りの縮、憚りさまながら、御祈禱料に上げまするわいな。

石見　これはお松どの、念の入つた事、早速受納いたしまする。イヤ、それについて、聞きたい事は、先日こなたが、二十五歳の男、武運長久というて願うたゆゑ、その心で丹誠を凝らして祈念いたしたが、爰の内は百姓、どういふ譯でござるな。

作助　それには、少つとした譯のある事でござりまする。

石見　ハテナア。イヤ、この祈禱いたす七日のうちに、さま〴〵な希有な事が

　　ト、うか〳〵云ふ。お松、思ひ入れあつて

まつ　エ。そりやマア、どのやうな事が

石見　イヤ〳〵、云はぬ事〳〵。拙者はお暇申しまする。

まつ　モシ、どのやうな事がござりましたえ。

石見　イヤ〳〵、云はぬ事ぢや〳〵。

　　ト足早に向うへ入る。お松、門の外まで出て

まつ　モシ〳〵、氣にかゝりまする。云うて聞かせて下さんせいな。

　　ト向うへ思ひ入れする。小鳥笛になり、日覆より小鳥を摑んだ鷹、舞ひ下がる。源次郎、見附けて

源次　アレ、祖父樣、鷹が鳥を捕つたわいな〳〵。

　　ト作助「ドレ〳〵」と思ひ入れ。この鳥の持つたる血汐、お松の持つたるお札へかゝる。思ひ入れあつて

まつ　アレエ、氣味の惡い。

作助　コレ、娘、どうしやつた。

まつ　イエモウ、氣にかゝる事聞いた先、どういふ事やらこのお札へ、此やうに血がかゝつたわいな。

ト氣にかゝる思ひ入れ。作助、こなしあつて

作助　ハテ、そりやつたた今、鷹の攫んだ小鳥の血であらうが、それにしても

ト思ひ入れ。氣を變へて

イヤ／＼、娘、氣にかけぬがよい。そりや大方源之丞さまが、めでたく敵を討つて歸らしやるといふ、明神樣のお知らせであらうわいの。

まつ　サ、さうならよけれど、もしひよつと

ト思ひ入れ。

作助　ハテ、氣にかけるなと云ふに。ドリヤ、わしがお札箱へ納めてやりませう。

トお札が神棚へ納めてゐる。お松、うつとりとしたる思ひ入れ。合ひ方、入相の鐘。下座より文藏、悄々として出て來り、門口へ來て

文藏　お松さま、作助どの、お變りもござりませぬか。

ト内へ入る。

まつ　ヤ、、文藏どの、歸らしやんしたか。モシ、父さん、歸らしやんしたわいな／＼。

作助　ヤヽ、歸らしやつたか〳〵。見をれ、娘、それぢやによつて、氣にかけるなと云うたわいやい。

まつ　コレ、源次郎や、父樣がお歸りぢや〳〵。

作助　サヽ、お迎ひに出よう〳〵

　　　ト源次郎を抱いて門口へ出て、あちこち見廻す。文藏、思ひ入れあつて

文藏　てつきり斯うであらうと思うた。アヽ、どこへ行つても、困つたものだ。モシ、お松さま〳〵。

まつ　アイ〳〵。

　　　ト矢張り向うばかり見てゐる。

文藏　これはしたり、お松さま、作助どのも、キリ〳〵内へ入らしやりませ。

　　　トこれにて三人、内へ入り

まつ　モシ、文藏どの、源之丞さまはえ。

文藏　サ、源之丞さまは

作助　若旦那樣は。

源次　コレ文藏、なぜ父樣のお供しては來やらぬ。

　　　ト文藏、源次郎を見て

文藏　源次郎さま、よう御成人なされましたなア。文藏めが、ちとお抱き申しませう。

ト源次郎を抱き、顏をヂツと見て思ひ入れ。お松作助、氣を急いて

まつ　エヽモウ、悠長らしい文藏どの。源之丞さまは

作助　なぜ歸らしやらぬのぢや。

文藏　イヤ、お歸りなされました。

まつ　して、どこにゐやしやんすぞいなア。

文藏　石井のお屋敷におゐでなされます。

まつ　エヽモウ、何の事ぢやぞいな。そんならさうと、早う云うて下さんすりやよいに。意地の惡い人ではあるわいな。

作助　この年月、親子の者の案じたは、どのやうにあらうと思はつしやる。ヤレ〳〵、その甲斐あつてめでたい〳〵。

まつ　父さん、わたしや此やうな嬉しい事はござんせぬ。

作助　イヤモウ、嬉しい段ではないわいやい。そして、歸らしやるからは、定めて御本望を

まつ　お遂げなされたでござんせうな。

文藏　マヽ、左樣でござりまする。

作助　ヤレ〳〵、めでたい〳〵。

まつ　そして、あなたにお怪我はござんせぬか。

文藏　慥かお怪我もござりませぬ。

作助　サ、も一つめでたいワ。ハヽヽヽヽ。

まつ　ハヽヽヽ、それでほんまに落ちついたわいな。

源次　コレ文藏、早う父樣にお目にかゝりたい。お迎ひに行て來てくれぬかいやい。

まつ　源次郎、よう氣が附きました。この子があのやうに逢ひたがるほどに、お前、草臥れたぢやあらうが、ツイ一走り、行て來て下さんせぬかえ。

作助　どうぞ頼みます。その代り、晩の寢酒、買うて置きますワ。

ト文藏、思ひ入れあつて

文藏　アイ、只今お迎ひにあがりまする。

ト合ひ方になり、机の上の硯箱を取つて來り、鼻紙へ一筆書き、結んで

作助どの、どうぞこの手紙を石井のお屋敷へ、持つて行て下さりませ。

作助　易い事ぢやが、こなさんも知らしやる通り

まつ　父さんは未だに、お屋敷のお出入りは

文藏　イヤ、叶ひます。只今私しが御隱居樣へ、お詫びを申して參りました。

作助　ヤヽ、そりやマアほんまの事でござるか。娘、又めでたいワく。

まつ　ほんにマア、此やうにめでたい事の重なるものか。そんなら父さん、少しも早う。

文藏　御苦勞ながら

作助　アイく、行かいでわいの。

ト手紙を持ち、トツカワと門口へ出て

ヤレく、めでたいく。

ト云ひながら、掠めたる大拍子にて、作助、向うへ入ろ。あと捨て鐘、合ひ方。

まつ　ほんにマア、嬉しいに取紛れ、日が暮れたに、灯もつけいで。

ト火を打つて行燈をともし、思ひ入れあつて

めでたいによつて、神棚へお燈明を

トまた火を打つ。

文藏　ア丶、モシ〳〵、お松さま、神棚へお燈明は、よしになされませ。

まつ　そりや又なぜにえ。

ト思ひ入れ。文藏こなしあつて

文藏　なんでござります。ア丶、それ〳〵、源之丞さまが、敵を討つてお歸りなされたによつて、血の穢れがござります。

まつ　さうかいな。女子といふものは、とんと其やうな所へは氣の附かぬもの。ほんにマア、源之丞さまがお出でなされたら、何からお話し申さうやら。モシ、あの病身者の半次郎は、たうとうあの年に

文藏　それもお屋敷で、六之進さま御夫婦に承りましたが、モシ、まだ源次郎さまの御難病は、御平癒なされぬさうでござりまするな。

まつ　サア、その事でござんす。父さんも、わたしも心を盡して、毎日〳〵、醫者の所へ通はすがナ、平常そのお醫者樣の云はしやんすは、男の肝の臟の血汐とやらがあると、忽ち本復すると云はしやんすがな。

文藏　エ丶、すりや、何と仰しやる。アノ源次郎さまの御難病には、男の肝の臟とやらの生血が、良藥

になりまするとな。

ト思ひ入れ。

まつ　サア、それさへあれば、きつと受合つて、本復させて見せると云はしやんすが、どうしてマア其やうな恐ろしい藥が、手に入るものかいな。それゆゑ、わたしやモウ、ほつとするわいな。

文藏　モシ、お松さま、すりや、いよ〳〵男の肝の臟の生血さへあれば、源次郎さまの

まつ　サ、立ち所に本復するといな。

ト文藏、思ひ入れあつて

文藏　ハヽア、それで解つた最前の、母御樣の詞の端々、切るのは早い、とても切るなら、あの撫子の爲に切れとの謎々は

ト源次郎へ思ひ入れあつて

この撫子の爲に、切れとの教へ草か。エヽ、忝い。それでやう〳〵、あの謎が解けたわえ。

まつ　何と云はしやんすえ。

文藏　アイヤ、お松さん、この桔梗は、見事な花ぢやござりませぬか。

まつ　ホヽヽヽ。何を云うてぢややら。いつも氣さくな文藏どの、たとへ何ぢやあらうと、源之丞さ

まがお歸りなされば、何にもいらぬわいな。コレ、源次郎や、今お父樣がお歸りなされたなら、何と云ふのぢやえ。

源次　お父樣、御機嫌ようお歸りなされて、おめでたうござります。

まつ　オヽ、さうぢや〳〵……さう云やるとアノ父樣が、源次郎か、ヤレ温なしうなつたなアと、斯うお抱きなさるワ。

ト源次郎を抱き、フッと文藏と顏見合せ

ホヽヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。文藏、こなしあつて

文藏　モシ、お松さま、私しはいかう草臥れましたによつて、源之丞さまのお見えなさるまで、納戸へ行て、寐轉んで居りませう。

まつ　ほんに、さつぱりと氣が附かなんだ。さうしなさんせ〳〵。

文藏　左樣なら、御免なされませ……アヽ、移り變るは世の習ひ。三年以前の夏の初め、源之丞さま、この家を御發足なされてより

まつ　ほんに、斯ういふ事と知つたなら、髮なと結うて置けばよかつたに、此やうな世帶じみた姿を見

やしやんしたなら、ひよつと愛想が

文藏　所定めぬ旅の空、夜の寐覺めのお話しにも、一日も早う本望遂げ、故郷へ歸り、源次郎兄弟の成人なしたを、見たいものと仰しやつたが、耳に殘つて

まつ　イヤ〳〵、此やうな子仲まである源之丞さま、其やうな水くさいお心でよいものか。

文藏　アヽ、知らぬが佛、思へば果敢ない

まつ　いんまの間に、お顔が見らるゝ事かと思へば、心がワク〳〵して、ほんに嬉しい。

文藏　あの喜びも

まつ　エ。

文藏　イヤ、後刻お目にかゝりませう。

ト源次郎にキッと思ひ入れあつて、合ひ方になり、涙を隱し、のれん口へ入る。

まつ　サア〳〵、源次郎や、お父様がお出でなさるによつて、着物を着替へや。

ト最前の衣裳を源次郎に着せかへる。源次郎見て

源次　こりやわたしの着る物かえ。

まつ　そりや最前、お屋敷の小母樣が下されたのぢやほどに、今度お目にかゝつたなら、ようお禮を申

しませうぞや。

源次　アイ〱。母様、脇差も出して下さりませ。

まつ　イヤ、どうでもお侍ひは違うたものぢや。よう氣が附くわいの。

ト押入れより出し

ハイ、お腰の物。

ト源次郎に着させ

サア〱、源之丞さまのお出でに間もあるまい。ちよつと爰らを片附けて

トあちこちを片附けて、フツと思ひ出したるこなしにて、鏡を出して顔を拭いて、又あたりを見て

このマア埃わいの。ドリヤ、掃出して……それはさうと、お飯もあるかしらん。イヤマア、お煮花を仕掛けようか。サア〱、もう盆も正月も、一緒ぢや〱。

トうろ〱する。

源次　コレ、母様、お茶はわたしが沸かしませうか。

まつ　これはようお氣が附かれました。サア〱、お頼み申しませう〱。

ト土瓶へ水を入れ、七輪へかける。源次郎、躄つて行き、七輪の下をあふぐ。

まづお茶は仕掛けたが

ト思ひ入れあつて、紅猪口を出し、口へ紅をさしながら、又フッと氣を變へ

マア、爰から掃除して

ト棕櫚箒にて座敷を掃き、イソ〳〵して、何かをまぜこぜにする仕組み。又フッと氣を變へ、押入れより枕を出し

イヤ、これが肝腎ぢやわいな。

ト埃を拂ひ、枕紙を仕替へてゐる。合ひ方、捨て鐘、時鳥啼き、向うより作助、しを〳〵として念佛を唱へながら出て來り、我れ知らず内へ入る。フッとお松を見て

作助 娘。

まつ 父さんかいな。

ト悄りして枕を隠す。作助見て

作助 コレ、源之丞さまはナ

まつ お出でなさんしたかいな〳〵、

ト作助、思ひ入れあつて

作助　オヽサ、今お出でなさるほどに、娘、必ず恂りしやんなよ。

まつ　ホヽヽヽヽ、父さんとした事が、あのきやうとい物の云ひやうわいな。

作助　いま源之丞さまがお出でなさるによつて……南無阿彌陀佛々々々々々。

　　ト涙を隱し、佛壇へ灯を附けてゐる。

まつ　サア〳〵、源次郎や。いよ〳〵お父樣が、お出でぢや〳〵。

　　ト源次郎が手を持ちそへ、七輪の下をあふぎながら、イソ〳〵してゐると、掠めて本釣り鐘、銅羅の打ちませ、合ひ方、蟲の音にて、向うより貞林、中間の提灯を先に立つて、おくら、才兵衞、附き、出て來り、花道にて才兵衞、腰をかゞめ

才兵　モシ、御隱居樣、作助どのゝ宿は、ツイ向うの機家でござります。

貞林　あの家ぢやの。

　　ト思ひ入れ。

才兵　左樣でござります。

貞林　これは大儀であつたわいの……そんならモウ爰から歸つて下され……コレ、くらや。

くら　ハイ。

ト行くを、貞林囁く。おくら呑みこみ

ハイ／＼、畏まりました。

ト貞林、中間に歸れといふ思ひ入れをする。

才兵　左樣なら御隱居樣、これでお別れ申しまする。

貞林　大儀であつたわいの。

ト皆々引返して入る。貞林、門口へ來り

作助々々。

ト呼ぶ。お松、この聲を聞いて

まつ　ソリヤ、源之丞さまぢや／＼。

ト門口へ行くを作助「コレ」とお松を搔きのけ、門口を明け

作助　石井の母御樣、見苦しくとも

貞林　許してたも。

ト內へ入り、上座へ通る。お松こなしあつて

まつ　父さん、そんなら、あなたが

ト思ひ入れ。作助、さうだと云ふこなし。貞林、思ひ入れあつて

貞林　作助、すりやアノ二人が、悴源之丞の

作助　ハツ。

ト思ひ入れ。

貞林　コレ、お松とやら、名は聞きながら一昔、逢はずに過ぎたこの母を、邪慳な者とも思やらうが、恩愛にも替へられぬは武家の義理、今こそ許す、苦しうない。初めて逢うたこの母に、近う寄つて初孫の顔、とつくりと見せて下されや。

ト思ひ入れ。お松こなしあつて

まつ　私しはマア、どのやうなお訶りを受くる事と存じましたに、勿體ないそのお詞。サヽ、源次郎やあなたが父様の母御様ぢや。溫なしう、お目見得申しあげや。

源次　ハイ。私しは源次郎と申しまする。お目かけられて下さりませ。

ト手を突いて云ふ。貞林、ザツと見て

貞林　アノマア、似た事わいの。

ト思ひ入れ。これより誂らへの合ひ方になり

悴源之丞が稚立ちに、これ程までも似るものか。又お松が奇特な志しは、出入りの町人才兵衛といふ者に、詳しう聞きました。その上、器量といひ、取なりといひ、恥かしからぬ石井の嫁女コレ、今日改めてこの母が、悴源之丞と祝言をさせませう。

まつ　エヽ。モシ、父さん、聞かしやんしたか。冥加にあまるあのお詞。勿體ないやら、嬉しいやら。エヽ、有り難うござりまする。

ト伏拜む。作助、堪りかねて

作助　エヽ、こりやモウどうも辛抱が

貞林　コリヤ、以前は主從仲絶えて、赤の他人の作助に、また改めて石井の家と、縁を組まねばならぬ仕儀。サ、源之丞と、祝言して下さるか。

まつ　エヽ、勿體ない事、仰しやつて下さりますな……して、源之丞さまは。

貞林　サ、源之丞は

ト扇を開き、懷中より五寸ばかりなる白木の位牌を出し

卽ちこれが其方の夫、源之丞でござるわいなう。

ト思ひ入れ、位牌を扇の上へ載せる。お松、恟りして

まつ　ヤヽヽ、すりやアノ、源之丞さまは

貞林　敵水右衛門の爲に、返り討になりました。

まつ　エヽヽヽヽ。コレ、源次郎、父様はお果てなされたといなう。こりやマアどうせう、何と致しませうぞいなう。

ト源次郎を抱き、泣き伏す。

作助　オヽ、尤もぢや〱。最前お屋敷にて、この事を聞いた時、其方の心を思ひやり、祖父が心は、どのやうにあつたであらうと思ふぞ。その折あなたの仰しやるには、この事、娘や孫には、少つとも遅う知らせたいとの御意ゆゑに、暫しのうちも包み隠してゐた、祖父が心の切なさを、推量してくれいやい。

ト思ひ入れ。貞林、こなしあつて

貞林　武家の行儀の悲しさは、此やうな嫁女や孫がありながら、今まで名乗り合ふ事のならぬといひ、子を先立てゝも存分に、泣く事さへもならぬといふは、何の因果で侍ひの、母とは生れた事かいなう。

ト愁ひのこなし。お松、思ひ入れあつて

まつ　さうぢや。

ト源次郎の脇差を取つて、死なうとする。

作助　コリヤ娘、何するのぢや。

ト留めるを

まつ　イエ〳〵、源之丞さまにお別れ申し、なんと生きてゐられませう。父さん、堪忍して下さんせ。

トまた死なうとするを。

貞林　作助留めい。

作助　コリヤ、母御様の御意ぢやわやい。

ト脇差をもぎ取る。

貞林　嘆きのあまり、其やうな心になるも無理ならねど、其方を殺してはこの母が、位牌へ對して濟みませぬ。その一隨な氣性があれば頼もしい。死ぬる命を長らへて、未來の夫源之丞へ、貞節の立てやうがありさうなものぢや。

まつ　エ。

ト思ひ入れ。

貞林　コレ、作助、其方の娘はわしが嫁女、きつと貰ひうけましたぞや。

作助　娘、あれを聞いたか。有り難い母御樣のお詞。泣いてゐる所でない。早々お請けを申しあげやれ

　　ト　お松、思ひ入れあつて

まつ　姑御樣。

貞林　嫁女。

まつ　エヽ、有り難うござりまする。

　　ト　思ひ入れ。

貞林　オヽ、めでたい／＼。わざと杯しませう。作助、杯々。

　　ト　奥にて

文藏　そのお杯は、拙者が持參いたしませう。

　　ト　合ひ方になり、奥より文藏、色蒼ざめ、銚子杯を持ち、出て來て

お松さま、委細は納戸にて承りました。その祝言の、お酌は拙者が

貞林　アヽ、思うて見れば果敢ない浮世。親子は一世

まつ　夫婦は二世

文藏 主從合せて三々九度。

貞林 その祝言の杯も

文藏 今は手向けの水杯。

作助 エヽ、こんな悲しい

文藏 アヽモシ……千秋萬歲の、千箱の玉を

トこなし。貞林、始終文藏へ目を附ける。

貞林 位牌の夫へ祝言の、杯いたす酌人は、成る程、其方が相應ぢや。

文藏 エ。

貞林 眼中溷み、音聲五音の狂ひといひ、死相を現はす其方が面色。その杯の納まりは、孫源次郎へ差す所存であらうがの。

ト思ひ入れ。文藏、こなしあつて

文藏 アヽ、流石は石井の母御樣、天晴れなる御眼力。

作助 すりや、文藏どのには

文藏 最前あなたの花の謎、解けし上にて、まッこの通り。

ト肌を脱ぐ。腹を切つて布にて卷いてゐる。

まつ　ヤヽヽヽ、文藏どの、お前が死んで源之丞さまの、敵は誰れが助太刀申して。

貞林　こりや斯うなうては叶ふまい。天晴れ健氣な、愛い者ぢやなア。

ト思ひ入れ。竹笛入りの合ひ方になり、こなしあつて

文藏　イヽヤ、疾より覺悟の武井文藏。源之丞さま御大事の場所にも在り合さず、刀の冥加に盡きたる拙者、遲ればせなる追ひ腹も、せめて不忠の申し譯に、源次郎さまの難病を助けん爲。コレ、作助どの、勘當された袖助どの、世にも稀れなる早業を、かね〴〵若旦那のお物語り。性は善なり行くへを尋ねて源次郎の、力となして下さりませ。モシ、母御樣、未來にござる源之丞さまへ、この腹一つが不忠のお詫び。御免なされて下さりませ。

ト思ひ入れあつて

サヽ、源次郎さま、拙者が生血、少つとも早く。

ト銚子を取上げる。この時、上の屋體より伴左衞門窺ひ出て

伴左　それ喰はせては

トかゝるを文藏、立廻つて伴左衞門を片手で捻あげ、源次郎を膝の下に引敷き、源次郎の口へ銚子の

血汐をつぎこむ。よき時分より六之進、忍び提灯を持ち、與三附き、下座より出で、窺ひゐる。貞林伴左衞門を見て

貞林　ヤヽ、その者こそはお屋敷を、追放されし不忠の侍ひ。

文藏　正しく敵へ一味の武士。

伴左　それ知られたら

ト振りほどいて貞林へ切つてかゝるを、貞林ちよつとかはして、坐つたまゝにて脾腹を當てる。伴左衞門、タヂ／＼として、門口の方へこけかゝるを、外より六之進、刀を拔き、伴左衞門を刺し通し

六之　母人樣、お迎ひながら

貞林　六之進か。

六之　ハア。

ト刀を引く途端、伴左衞門、見事にかへる。このはずみに伏したる源次郎、スツクと立上がる。門口明く。一度の仕組み。

源次　これでは父樣の敵が討たれませうか。

ト力足を踏んで見得。皆々見て

貞六　ヤヽ、源次郎が難病は
文藏　御平癒あつたか。
四人　エヽ、忝い。
　ト文藏思ひ入れ。伴左衞門「うぬを」とかゝるを、文藏、引附けて
文藏　源次郎さま、お松さま、敵の片割れ、せめて此奴を
　トお松源次郎に落したる刀を持ち添へさせ
　敵にお出合ひなされたなら
松源　まッこの通り。
　ト兩人、伴左衞門を抉る。
作助　天晴れ健氣な
六之　この詠草は母人の
　ト最前の詠草を渡す。
與三　一首の御歌。
　ト懷中する。勘八、窺ひ出て

勘八　この小びッちよめを

ト源次郎へかゝるを文藏、立上がつて見事に引敷く。

源次　コレ、文藏。

ト駈けよる顔を、ヂツと見て

文藏　アヽ、返すぐ\も嬉しやな。これで未來の御主人へ

ト腹帶を解く。

松作　南無阿彌陀佛。

ト介抱する。

六之　アコレ、やがて浮木の仇討を

貞林　草葉の蔭より

文藏　見物いたさう。

ト勘八、刎ね返すを、文藏、捻あげる。源次郎、脇差にて勘八の脾腹を抉る。勘八、立ち身にて苦しむ。さつと内を見込むを、六之進、外より門口をさす。文藏、勘八を返し、ベツタリと下にゐる。途端一度の仕組みにて、木の頭。

見事。お見事。

ト源次郎を見て、ニッコリと思ひ入れよろしく、ひやうし

幕

五幕目

鏡宿辻堂雨宿りの場
江州馬淵繩手藥掘りの場

役名——藤田水右衛門。町醫、藤田卜庵。同供男、左兵衛。護摩の灰、天狗小兵衛。同、守山の鐵六。同、丈助。刀屋源吉。堂守り、西念。順禮、佛作助。雲津鄕助。水右衛門云ひなづけ、お才。作助娘、お松。石井下男、袖助。

本舞臺、三間の間、うしろ淺黄幕。正面、藁葺き三間の地藏堂、緣側附き。本尊の前に茶屋場の蝶千鳥、丸に井の字の小裁の表を旗に直し、かけあり、佛具よろしく飾り、地藏菩薩と書きし提灯を吊し爰に西念、堂守り坊主にて、土火鉢に土瓶をかけ、煽ぎゐる。作助、順禮の形にて病氣の體。源吉、旅商人、半合羽、脚絆、一本差し、供を連れ、割かけの荷を擔ぎ、夕立、雨宿りの體。百姓二人、田植の歸りにて、ワヤ〳〵云うてゐる。雨車、雷の音にて幕あく。

百姓　アヽ、桑原々々。

源吉　桑原々々。

ト耳を押へて思ひ入れ。雷、鳴りやみし體。皆々、空を見て

ヤレ／＼、ひどく鳴りましたワ。もうあれぎりで、嬉しや、お天氣になりさうな。

西念　イカサマ、今のはどこぞへお下がりなされたと思ひまするわえ。お前方も、雨をやましてござりませ。

源吉　ハイ、それは忝うござります。道中で雷にあふのは、一倍心細いものでござる。これが誠に夕立や法華駈けこむ阿彌陀堂ではなうて、アヽ、地藏堂でござるの。

西念　左樣でござるて。

ト掠めて雷鳴り出す。

百姓　アヽ、また遠くでお鳴りなさる。もう此方へかゝらつしやりもせまい。新田の方から植ゑてしまはうか。

同　さうすべい／＼。ヤレ／＼、ひどくお鳴りなされた。

ト矢張り遠くにて鳴る。百姓、捨ぜりふにて向うへ入る。揚げ幕より水右衛門、旅虚無僧の形、白股

引、手甲、大風呂敷に大小その他何なりと包みたるを脊負ひ出て來り、舞臺へ來て

水右　どうやら空も晴れて參つた。幸ひの地藏堂、火を借りて、一服吸うて參らうか。御庵主、御緣先を少とお借り申さう。

西念　アイ〳〵、一服あがつてござりませ。

水右、さて只今は、きつい雷でござつた。

ト腰をかけ、土火鉢にて莨を吸ひつける。この時、作助、思ひ入れあつて

作助　御出家樣、もうお鳴りなされませぬかな。只今の嚴しい音に、一倍疝癪が……アイタヽヽヽヽ

ト思ひ入れ。

西念　アヽ、さうでござらう。あの後の一つが、嚴しい音でござつた。連れの女中は、どこでこの雷に會はつしやつたやら。

作助　わしもそれが案じられますわいの。

ト此うち水右衛門、下げてある籏の紋に目を附け

水右　佛前に吊したる籏の模樣は、蝶千鳥に丸に井の字の紋どころ。丸に井の字は石井の定紋。似寄りの紋も

ト思ひ入れあり

コレ、坊樣、あの籏は、どこからあげました。施主はどこでござるな。

西念 エヽ、あの籏かな。あれは爰にゐる順禮衆が、この間、小裁の小袖を縫ひ直してあげました。

トこれにて水右衞門、作助に目を附け

水右 道通りの順禮どの、見れば餘程の年配。殊には病氣と見えるが、して、生國はいづれのお人ぢや

作助 ハイ、私しは播磨の者でござりまする。

水右 アヽ、播磨の順禮衆か。して、道連れはござるかの。

作助 ハイ、連れはあつてもわしが娘、その上、十歳の男の子を連れ、播州明石を出ましてから、足弱ばかりの長の道中。

水右 アヽ、すりや、生國は播州明石。連れの女中とまだ外に、十歳ばかりの男子を連れ、アノ札打ちを

トよろしく目を附け

ハテ、割符を合はす

ト思ひ入れあり

小さいのを連れては、定めし道中も難儀な事でござらう

作助　アイ、大抵世話な事ぢやござりませぬが、そのマア世話なうちにも悲しいは、折角育てたその悴を、無くしましたわいの。

水右　アヽ、その小さいが亡くなられましたか。

作助　モシ、聞いて下さりませ。その失ひました小さいは、私しの孫でござります。それは〳〵、悧巧な奴でござりましたが、親子三人順禮の、鏡の宿に逗留のうち、悪い疱瘡に取りつかれ、十二日目にツイ取られました。孫めを産んだは、わしが實の娘。もう〳〵それからは、狂人のやうになり居りましたを、やう〳〵に理解を云ひ聞かせ、二三日あと、この村へ参りまして、この庵に泊りまして、娘は今朝、近所を修行に出ましたが、搗てゝ加へてわしが持病、疝癪で筋をとぢまして、大きにこの坊樣の世話になりますわいの。

水右　イヤモウ、道中での煩らひ、誰れしも難儀なものでござるて。

ト作助へ目を附けて思ひ入れ。

西念　ほんに、先刻頼ましやつた塔婆を、書いて進ぜませうか。

作助　アイ、お世話ながら、お前へあげた戒名の通り、塔婆を記して、地藏樣へあげさしつて、御回向

を頼みます。今日が初七日の逮夜でござりまする。

西念　心得ました。ドリヤ、戒名を書いて、回向しませうか。

ト双盤、木魚の音になり、西念、荒木の卒塔婆を持ち、門脇へ入る。この鳴り物をかり、向うより郷助、絆纏股引、旅形にて、引はだ掛けし大小。旅形の若黨一人。旅奴、兩掛けを擔ぎ、菅笠、草鞋にて出て來り、直ぐに舞臺へ來り、源吉を見て

郷助　それに居るは、刀屋源吉ではないか。

ト緣に腰をかける。

源吉　これは龜山の御家中、雲津郷助さま、いづ方へ御旅行でござりまする。

郷助　身共は殿の御用につき、駿州の御領地へ罷り越す道筋。只今の夕立に、殊の外手間取り申した。して、其方は。

源吉　へイ〳〵、私しは商賣用につきまして、お拂ひなさるゝお刀がござりまするゆゑ、美濃の大垣まで參りしところ、さのみにもござりませぬお道具ゆゑ、斷わりまして歸りまする道筋。ハテ、よい所でお目にかゝりました。

郷助　アヽ、最早歸りやるのか。

源吉　左様でござりまする。

ト この話しのうち、作助は病氣の體。水右衛門は郷助に目を附け

水右　雲津郷助どの、久々にて御意得まする。宗門の表、天蓋の儀は

ト式例ある。郷助、こなしあつて

郷助　左様お云やるは、慥かに藤田

ト云はんとする。

水右　アイヤ……面を包みまする拙者、且は尺八修行の梵論字、參り合せて、よき折柄に行合ひました
先達ては、御深切なる御狀の表。

郷助　屆きましたかな。

水右　いかにも。その儀につきまして、其許へ折入つて

郷助　アノ、身共へお頼みとな。して、その儀は

水右　サ、その儀は。

ト遠慮の思ひ入れ。郷助、呑みこみ

郷助　コリヤ、家來ども、其方達は、この次の立場へ參り、身が參るまで相待ち居れ。

家來　畏りました。

ト供の兩人、上手へ入る。源吉、心意氣あつて

源吉　ヘイ〳〵、私しもこれでお別れ申しませう。郷助さま、お早うお戻りなされませ。

ト供を連れて行かうとする。

水右　ア、イヤ〳〵、お旅人、決して心遣ひは御無用、矢張り其まゝ〳〵。

源吉　でも、御遠慮の體。

水右　ハテ、大事ござらぬ。

郷助　然らば我れら〻其許の

水右　お頼みと申すは、これでござる。

ト合ひ方になり、大風呂敷の中より、仁王三郎の鮫鞘を出し

御覽の如く、世上の人の情にて、世を渡りまする拙者、路用とても甚だ以てお恥かしう存ずる。貴殿を見かけ、お頼みと申すはこの一腰、手離すまじき道具なれども、郷助どの、何卒お求めなされては下さるまいか。

ト源吉へ聞えるやうに云ふこなし。

鄕助　成る程、御難儀の樣子を、見捨てゝ出るも本意ならず、とあつて拙者も路用と申して、あまり貯への儀も餘計ならねば、何とも以て。

ト思ひ入れあつて

イヤ、幸ひな刀屋源吉、其方、求める心があらば、なんと相談申して進ぜぬか。

源吉、イヤモウ、途中と申し、あまり望みにもござりませぬが、お刀を引當てに、少々の金子、御用立てまいものでもござりませぬが、何を申すも、餘計に金子を持合せませねば

水右　イヤ〱、その儀は氣遣ひござらぬ。此方も、仕官の望み叶ひますれば、早速鄕助どのまで金子は返濟仕る。もし延引に及びましたならば、御勝手次第に其方にて拂うたりとも、決して恨みとは存ぜぬ。銘は即ち仁王三郞。お預け申す。何卒金子三十金、貸さしつては下さるまいか。

源吉　イヤモウ、それしきの儀は、お道具を拜見の上、お貸し申しますまいものでもござりませぬが、モシ、鄕助さま、いよ〱あなた、お請合ひにお立ちなされまするかな。

鄕助　そりやモウ、お互ひの儀と申し、別して相違はおりない。何分御相談が出來るならば

水右　然らば一腰、改めてお見やれ。

ト差出す。源吉取つて見る事。其うちに水右衞門、頭陀の内より矢立を出し、半紙へサラ〱と認め

ろ。源吉、思ひ入れあつて

源吉　相違ござりませぬ仁王三郎、お預けなさるゝならば、金子三十兩、お渡し申すでござりませう。

水右　忝う存ずる。郷助どのを證人と仕る上からは、雲津氏まで返濟の沙汰、延引いたさば、何れへなりとも賣拂うてしまはつしやい。その節、一言の申し譯はござらぬ。お知り人と罷りなる上からは、拙者が面體。覺えさつしやるため

ト天蓋を脱ぐ。下は頭巾をかむりし體。

身が面、覺えし上は、何分よろしく頼み存ずる。

源吉　左樣ならば仰しやる通り、三十兩は、サ、お受取りなされませ。

ト内がへより三十兩の金を出して渡す。

水右　過分に存ずる。しかと金子受取り申した。仕官の願ひ叶ひ申さば、早速雲津氏まで、當月末には尋ね參らう。もし日限に相違いたさば、苦しうござらぬ。何れへなりとも、お拂ひなされいサ。

源吉　承知仕りました。

水右　然らば一札遣はしませう。

ト書き物を渡す。源吉見て

源吉「入れ置き申す一札の事、一つ、我れら所持の仁王三郎の一腰、金子三十兩入用につき、貴殿方へ預け置き候ふところ實正なり、右金子調達次第早速請け戻し候ふ間、その節引替へ申すべく候ふ念のため一札件の如し、月日、刀屋源吉どのへ、幡龍」……そんなら、この書き物をお預かり申しまして

郷助　アヽ、イヤ／＼、身共が口入れ致すからは、別に書き物には及びますまい。矢張りその一札は、お返し申したがよからう。

源吉　然らばこの書き物は、矢張りあなたへ

ト戻す。

水右　左様ならば、書き物には及びませぬか。郷助どのゝお志し、忝う存ずる。

ト書き物を疊み、袂へ入れる。

源吉　もう私しは、これにてお別れ申しませう。何分日限が相違仕りますれば

水右　賣拂ひ召されたとて、恨みとも存ぜぬて。

源吉　承知仕りました。左様なら郷助さま、お國許にてお目にかゝりませう。

郷助　源吉、世話であつた。機嫌よう行きやれ。

源吉　へイ／＼……ドリヤ、急ぎませうか。

ト木魚入りの双盤になり、源吉、一腰を風呂敷へ包み、腰に差し、供の男を連れ、向うへ入る。この時、後にゐたる作助、思ひ入れあつて

作助　アイタヽヽヽヽ。

ト胸苦しき思ひ入れ。兩人、恟りして

水右　こなたは旅の順禮どの、只今これにて申した事を

作助　何ぢややら、持病が起りまして、この胸先が、アイタヽヽヽヽ。

郷助　病人ながらも、もしやは今の

ト思ひ入れ。

水右　コレ……藥を進ぜようか。

ト合ひ方。

作助　ハイ、有り難うございます。

水右　しかも秘方のこの一藥、持合せたが、こなたの仕合せ。

ト頭陀の内より毒の包みを出し、袂にありし一札の反古をひろげ、この毒を半分明けて、右の反古へ

包んで

サ、有りあふ白湯で服まつしやい。

作助　ハイ、有り難うございます。

ト土瓶の湯をあけ、これへほたて、毒とも知らず戴いて服む。水右衛門、見屆けゐて

水右　大事を聞いた田舍順禮、不便ながらも、貯へ置いた

郷助　すりや、良藥と云つたのは

水右　コレ……家傳でござる。

郷助　それは仕合せ。よい折柄に貴殿に逢うて

ト思ひ入れあり

然らば、これにてお別れ申さう。

水右　これは何かと貴公のお世話。品によつては勢州へ

郷助　必ずともに尋ね召されい。及ばずながら推擧いたさう。

水右　郷助どの……ア、さるにても、旅の順禮。

トきつと目を附け、思ひ入れあつて

兩人　お別れ申さう。

ト木魚の音、双盤になり、鄕助は上手へ入る。勝手より西念、卒塔婆の書いたるを持つて出て

西念　サア〳〵、順禮どの〳〵、卒塔婆へ法名を記して來ました。これでようござるかな〳〵。

ト卒塔婆を渡す。

作助。アイ〳〵、忝うございます。して、戒名は、何と申しましたな。

西念　コレ〳〵、戒名は、夏月童子といひますわいの。播州明石の生れ、俗名石井源次郎。

水右　ヤ。

ト思ひ入れあつて

作助　ハイ、お世話でござりました。アイタヽヽヽヽ。

西念　ドレ、回向してやりませうか。

ト堂の内へ入り、戸を閉す。

水右　さてこそ旗の定紋と、割符を合はす石井の身寄り。

作助　エ。

ト胸を押へる思ひ入れ。

水右　アイヤ、たてつけて服まつしやりませ。

ト時の鐘、誂らへの合ひ方。水右衛門、尺八を吹き出す。この時、堂の内にて一つ鉦聞える。順禮唄空には時鳥の聲。向うよりお松、高からげ、やつし順禮の拵らへ、笈摺、柄杓、竹の杖にて出て來り尤も道にて水右衛門と摺れちがひ、思ひ入れあり、水右衛門、振りかへり見て

まつ　エ。

同行三人、播州明石の

ト振りかへる。水右衛門、思ひ入れあつて

水右　ハテ、長旅の、御奇特にござります。

ト思ひ入れあつて向うへ入る。お松もこなしあつて

まつ　面はそれと見えねども、その恰好は繪圖面に、記しあつたる中肉中背。もしや今のが

トこなしあつて、ツカ〳〵と向うへ行かうとする。作助、この聲を聞いて

作助　ヤ、お松ぢやないか。よう戻つてくれた〳〵。

ト思ひ入れあつて苦しむ。

まつ　いま摺れちがうた修行者は、もしや尋ねる

ト行かうとする。

作助　アヽコレ、娘、其方の留守に、いつもの持病が、殊に取分け常に變つて

ト苦痛の様子。お松、これを聞きつけ、戻つて

まつ　そんならいつもの持病が募つて……アヽコレ、折惡いお前の病氣。今の梵論字もしやはと、尋ねたいにも苦痛の様子。

ト先と此方へ思ひ入れあつて

アヽコレ、お前の苦痛を見捨てゝは、どうも先へは

トいろ／＼心急く思ひ入れ。作助、これを聞いて

作助　コレ／＼、娘、そんなら道に、水右衛門に逢うたのか。それならば、おれに構はず、敵めを早う追ひかけ、取逃がすな。おれも病が起つても、われと一緒に

ト立上がらうとして、苦痛の惱みに、いろ／＼と思ひ入れあつて

エヽ、折惡いこの持病。おれに構はず、早う行け／＼。

まつ　エヽ、モシ、父さん、其やうに氣を焦立てゝは、また持病が募りまする。マア／＼、靜まつておいでなさんせいな。

作助　それぢやというて、わりや敵に逢うたのぢやないか。

まつ　イヽエイナ、左様ではござりませぬが、どうやら恰好似寄りとは思へど、顔を見ぬからは、慥かにそれとも、

作助　思はれぬと云やるのか。エヽコレ、何を云うても、敵の面を見知らぬわし。それにつけてもわれが兄の袖助め、親は勘當して置いたれど、斯ういふ事を聞き居つたら、おいらを尋ねてうせる筈どこにどうして居をるやら。病の起るその度に、彼奴が事が

ト思ひ入れあつて

アイタヽヽヽ。アヽコレ、先刻より又胸苦しう。

ト苦しむ。お松、介抱して

まつ　尤もでござんす。親同胞へ苦に苦をかける、あの兄の袖助どの、お前の心に違へども、お主樣にはこれ程も

作助　サヽ、それぢやによつて、どうぞ兄めに巡り逢うたら……アイタヽヽヽヽ。

ト苦しき體。お松、介抱して思ひ入れ。

まつ　アヽコレ、父さん、お前は常に事かはり、いかうお顔の、……ヤヽヽ、顔色が、アレ〳〵、

見てゐるうちに、眼の内までも變りし樣子。いつもの藥を

作助　イヤ〳〵、持合せた藥は皆になつたが、いま爰へ旅虚無僧が、往來の侍ひと、あの簱を見て、濟まぬ顏で、わしが病の樣子を聞き、奇特な人ぢや、藥をくれて行かしつたわいの。

まつ　エ。そんならその虚無僧が、我が子の小裁の縫ひ直した、あの簱を見て、濟まぬ顏をして

ト思ひ入れ。蛙しきりに啼く。

もしや小裁の定紋を、見咎めしより

ト思案のうち、作助、だん〳〵と苦しむ思ひ入れあつて

作助　アヽコレ、娘、だん〳〵募るは、こりやモウ死病か。

まつ　して、虚無僧が、くれた藥を

作助　白湯へほたてゝ服むとそれから、一倍胸が

まつ　エヽヽヽ。その貰うた藥は

作助　コレ、この紙に包んだ藥。

ト差出す。お松、包みし反古を取つて

まつ　「入れ置き申す一札の事、一つ、我れら所持の仁王三郎の一腰、金子三十兩入用につき、貴殿へ

預け置き候ふところ實正なり……ヤヽヽヽ、宛名は刀屋源吉どのへ、幡龍判……こりや、コレ仁王三郎のその一腰を、僅かな金に預け物。いつぞやお果てなされし源之丞さま、遠州へ御養子のその砌り、添へて石井へ贈られしが、阿部川原の返り討、その時よりして失せたる一腰、それを所持して居るといひ、さては逢うたる梵論字こそ、慥かに藤田、程は行くまい。

トつか〳〵と走り行く。作助、苦しき思ひ入れあつて

作助　コレ娘、そんなら貰うて服んだ藥は、毒であつたか。エヽ、なんの憎しみ恨みがあつて、見ず知らずの順禮に、毒を與へて

ト思ひ入れ。

まつ　サ、それが正しく敵の手がゝり。定紋附きのあの籏に、目を附けたその上に、慥かにお前の國所書いた笈摺菅笠まで、もしやゆかりと知つたるゆゑ、毒を藥と僞つて、根葉を枯らすは慥かに藤田。モシ、疑ひ晴らすは

トあたりを見廻す。片脇の流れに蛙大分啼きつれてゐるに、思ひ入れあり、お松、反古に殘りし藥を蛙のあたりへ散らす。この時、蛙、一度に音をとめ、毒藥に中りし蛙二三疋、赤き色に變つて仰向けになり、落入る。合ひ方變つて、伏鉦聞える。

作助　ヤヽヽヽヽ、藥を流れへ取捨つれば、そこに音なす數多の蛙、一度に音をとめ、アレ〱
みな紅ゐと落入るは、さては藥は、いよ〱毒藥。

作助　ヤヽヽヽヽ、すりや僞つて、毒を與へて

ト驚く拍子に「ウン」とのる。

まつ　アヽモシ、心を慥かに

ト介抱する。作助、苦しき思ひ入れにて

作助　コレ、松よ。おれは死んでも、必ずあの子に

ト件の旗の方へ指さす。

まつ　女の念力、おのれ敵め。

ト書き物を持ち、向うを見詰め、無念の思ひ入れ。これにて木の頭。作助、ガックリとなる。お松、キツと抱きしめ「ハア」と泣き落す。これをキザミにて、ひやうし

幕

念佛太鼓にてツナギ。引返し。

本舞臺、三間の間、高土手、うしろ竹藪、土手の上よき所に蒲鉾非人小屋、松の大樹、稻村、ヽヽ、江州馬

ト、淵縄手と記したる傍示杭、爰に卜庵、野袴一本差し。お才、屋敷者の拵へ、青傘をさし、左兵衛、中間の形にて、手鍬を持ち、草村を掘りかへしてゐる。小兵衛、白き金比羅參りの形、箱を脊負ひ、鐵六、丈助、伊勢參りの拵へにて、同じくそこを尋ねゐる見得、在郷唄にて幕あく。ト念佛太鼓、ひぐらし笛。卜庵、掘りかかりしたる赤土を取り、何やら尋ねる思ひ入れ。

小兵　モシ〳〵、お女中樣、その赤土が着物へ刎ねると、滅多に落ちるものぢやござりませぬ。

丈助　お前方は先刻にから、何をお尋ねなされます。よもや今時分、摘み草でもござりますまい。

鐵六　嫁菜も餅草も、もう遲まきだが、奴さん、何を尋ねなさるのだえ。

左兵　アヽ、何とか云つたが、何だかむづかしい名の物だ。モシ、お才さま、何とか申しましたな。

さい　どうして其方があの名を知らうぞ。ありや滅多に無いものぢやわいの。それはさうと、わたしや爰らの草の中へ、簪を落したさうなわいな。

ト頭へ手をかけ、尋ねる思ひ入れ。

左兵　簪が見えませぬかえ。

卜庵　ソレ見やれ。それぢやによつて、今も愚老が氣を附けたぢやないか。コリヤ、左兵衛、そこらを尋ねてやりやれ。

左兵　ハイ〳〵、畏まりました。ハテト、どこへ落さしつたの。

ト草村を尋れる。

鐵六　アヽ、あなたは簪を落しましたか。尋ねてあげませう。

さい　どうぞそこらを尋ねて下さんせ。

小兵　これは困つた事をなされたな。

ト方々を尋れ、鐵六、草村より、藤の丸に田の字の紋附きし大きなる銀の簪を拾ひ、お才へ渡し

鐵六　モシ〳〵、藤の丸に田の字の紋の附いた簪がござりました。これでござりませう。

さい　アイ〳〵、これぢやわいな。こりやお前、忝うござんす。

鐵六　アイ〳〵、お易い御用でござります。

左兵　そりや好い人に拾はれなさつた。

ト庵　それはお世話。コレ、貴樣達は、もう下向するのか。

鐵兵　イエ〳〵、いま參りかけでござります。

ト庵　奇特な事ぢや。左兵衞、あの衆へ手の內をやりやれ。

左兵　ハイ〳〵、畏まりました。……サア〳〵、伊勢參りどのも、金比羅參りどのも、草鞋錢をやりま

せう。

ト つなぎ錢を拔いて、各自にやる。

三人　これは有り難うござります。

小兵　時に貴樣達は、もう少つと貰つてくるか。

鐵六　もう日も暮れるに間もあるまい。成たけ宿錢でも貰うて置かう。

丈助　金比羅、貴樣も修行する氣か。

小兵　こなた衆が行くなら、この村を稼いで見よう。

鐵六　さうしませう。これは旦那、有り難うござりました。

ト庵　オヽ、世話でござつた。

さい　よう尋ねて下さんしたの。

鐵六　アイ、また失うたら尋ねてあげませう。ハヽヽヽヽ。

小兵　サア、貰うて來ようか。

ト 念佛太鼓になり、三人、ワヤ〳〵云うて下座へ入る。

ト庵　イヤモウ、尋ねる禹條土は見附からいで、お才が簪を落すやら、埒もない事ばかり……ほんに

いま拾うた男が云うたで心附いたが、お才が簪には、藤の丸に田の字の紋どころ。そりや其方が拵らへたのか。

さい　ハイ、左様でござりまする。云ひ號けばかりにて、祝言せねど、わたしが連れそふお方といふはこの紋の、藤に田の字の定紋附く、その主様を大切に致す心で、あなたへも隱して、わたしが簪へ附けた紋は藤田さま、頭の上へも附くべきお方。

卜庵　云ひ號けして今日までも、見えぬ男を、それ程までに……ハテサテ其方は

ト思ひ入れ。七ツの鐘鳴る。卜庵こなし。

アヽ、もう七ツか。折角尋ねに參つて、取り得ぬとは、たはけた事ぢや。左兵衛も、もそつと精出して、尋ねやれ〳〵。

左兵　へイ〳〵、隨分尋ねまするが、どうやら爰らには、蛇が居さうでござりますから、私しは氣味が惡うて

トうぢ〳〵する。

卜庵　これはしたり、その蛇のきつう嫌ふ土ぢやによつて、尋ねるのぢやないか。その蛇の嫌ふ土のある所に、なんで蛇が居やうぞ。禹條土といふ草は、赤土ばかりの場所に、自然と出來るものぢや

て。

左兵　エヽ、左樣なら禹條土と申す物は、此やうな赤土の所に出來まするかな。

卜庵　左やう〳〵。赤土の場所に出來るものぢや。幸ひこの間、觀音寺の開帳へ參詣の砌り、守山宿にて旅宿の間、その品を取り得て立歸らうと、その品ありと聞いたこの繩手。精出して尋ねてくれい。

左兵　畏まりました。爰がようござりませう。

卜赤土を掘り返してゐる。卜庵、石に腰かけ、摺火打にて煙草をのむ。

さい　申し、舅御樣、只今も仰しやりましたる、わたしが云ひ號けの御子息樣、何卒あなたのお行くへ知れ、早う女夫になるやうにと、神佛樣へ、わたしやお願ひ申して居りますわいな。

卜庵　そりやその筈の事ぢや。其方は幼少の時分より、悴めに娶合さうと、貰うて置いた云ひ號け。實の悴は、奥州棚倉の屋敷を浪人いたしてより、遠州濱名へたつきと聞きつるが、そこにも居らいで矢張り浪人。また一說には、病死とも聞いては、親の心のうち、案じぬ日とてもなかりしが、息災なるかその砌り、江州膳所へ參りしゆゑ、止め置きしにこれとても、我まゝ者のあの悴、親にも沙汰せず、彼の地を立退き

さい　御滯留のその間、お前がお寫しなさんした

ト云はうとする。

ト庵　アヽコレ、其やうな事は、決して申さぬ事ぢやぞ〳〵。

トこれにておオ、思ひ入れ。此うち左兵衞、赤土の中より、怪しき土の塊りを見附け出し

左兵　モシ〳〵、旦那、御覽じませ。この土の塊りは、お尋ねなさるゝ

ト庵　ドレ。

ト取上げ見て

誠にその色變りしは、尋ぬるところの……オヽ、こりや禹條土に違ひない。左兵衞、よう取出した。手柄々々。

ト土の塊りを鼻紙に包みつゝ、懷中する。

さい　申し、父さん、その禹條土とやらは、何の藥になりまするぞいな。殊にあなたはこの程まで、恐れ氣もなき蛇が、どうして俄にお嫌ひに

ト庵　ナニ蟲けらをこの年で、卜庵恐るゝ事なけれど、かねて所持する一卷に、不思議に小蛇の附きまとふ、それを除けんがその爲に、わざ〳〵尋ぬるこの禹條土、いま一藥は鐵の粉を、製してそれ

を懐中なせば、なか〳〵蛇は近寄らぬ。その一卷も、即ち爰に。

ト懐中より袱紗包みの一卷を出す。この時、時の鐘の頭を打込み、後の蒲鉾小屋の菰垂れを上げ、袖助、はちかつら、非人の拵らへにて、竹杖の仕込みを突き、自在にかけたる土瓶の下を焚いてゐる。

さい　エヽ、そんならその一卷へ、蛇が附きそひまするゆゑ、それを除けんがその爲に、お尋ねなされた禹條土とな。

ト此あたりより袖助、ソロ〳〵と卜庵が側へ來り

袖助　ハイ、旦那樣、お助けなされて下さりませ。

トこの聲に卜庵、恟りして、一卷を手早く懐中して

卜庵　オヽ、そちや野伏り、非人か。

袖助　ハイ、左樣でござります。御覽の通り、病み耄けたる菰かぶり。所のお方、往來の、お旦那方のお情で、露命をつなぐ物もらひ。私し一人でござります。旦那樣、お手の内を取らせてやつて下さりませう。

ト卜庵、これに目を附け

卜庵　ハテ、年若な非人ぢやが、病氣とは嘸かし難儀。して、其方は腹からの乞食か。但しは故ある者

なるか、身狀が惡さに其やうな

袖助　ハイ、成る程、左樣でござります。腹の中から物貰ひ、お剩り食つて此やうに、手足を伸しも致しませぬ。輕い身分でござれども、生れついての野道樂、義理も禮儀も知らばこそ、酒と色とに身を賣つて、親兄弟に見離され、乞食とまではなりましたが、國所には親類緣者、旦那寺にしつかりと、石塔までもござります。

ト庵　して又、われが生國は

袖助　ハイ、播州でござります。

ト庵　ナニ播州……して、播州は、いづれの生れぢや。

袖助　ハイ、明石の者でござります。

ト庵　アノ、播州明石か。

袖助　左樣でござります……して、旦那樣は、御近所のお方でござりますか。

ト庵　イヤ〳〵、愚老は江州膳所、その町方に住居いたす、一僕さへも得連れぬ、至つて輕い町醫ぢやて。

袖助　エヽ、あなたは膳所の、お醫者樣でござりまするか。

卜庵　いかにも町醫者、藤田卜庵。
袖助　エ、アノ、こなた樣が藤田卜庵
卜庵　ヤ。
袖助　サ、卜庵さまでござりまするかな。
　　　　卜合ひ方。
卜庵　そちや愚老を存じ居るか。
袖助　アイヤ、承り及びましたる、御高名な藤田さま、御名醫と申す事は、國許の明石まで
卜庵　ふところ醫者の藪醫者のと、定めてその名も通つて居らう。ハテ、惜しいかな、よい若者を、乞食させるは殘念至極。
　　　　卜思ひ入れ。この時、入相の鐘鳴る。
さい　申し、父樣、ありや入相でござりまする。早う旅宿へお歸りなされませいな。
卜庵　左樣いたさう。コリヤ、左兵衛、あの非人に、合力いたして遣はせ。
左兵　ハイ〳〵、畏まりました。
　　　　卜つなぎ錢をよき程に拔いて

コレ、非人、手の内を取らさう。

袖助　ハイ、有り難うござりまする。

　　　トあたりを見て

モシ、旦那樣、蛇の嫌ふ禹條土は、この赤土場にござりましたかな。

　　　トこれにて卜庵、思ひ入れあり

卜庵　そちやその一藥、存じて居るか。

袖助　ハイ、蛇が嫌ふさうにござりますが、旦那は蛇がお嫌ひかな。

卜庵　イヽヤ、至つて好きぢや、好物ぢや。人の嫌がる長蟲は、卜庵、何より望みぢやが、除けねばならぬ品あつて、尋ねに參つた禹條土、こりや少と外に入用あつてぢや。旅宿は卽ち守山宿、愚老が宿は江州膳所。

袖助　お名はいよ〳〵

卜庵　藤田卜庵。

袖助　御緣もござらば、お禮ながらに

卜庵　訪ねて參れ。

袖助　是非お願ひにあがりませう。

卜庵　その節、手の内取らせてくれう。

袖助　有り難うござります。

卜庵　サ、娘、日暮れぬうちに

さい　參じませうわいな。

卜庵　非人、必らず訪ねいよ。

袖助　ハイ、お願ひにあがりませう。

卜唄、時の鐘。卜庵、袖助、顏見合せ、思ひ入れあり、お才附き、左兵衞、手鍬と青傘を持ち、跡に附いて向うへ入る。合ひ方、ひぐらし笛。袖助、跡見送り

すりや、あの醫者が藤田卜庵、身狀の知れぬ乞食に、問はず語りに實名を、明かして行つたは合點がゆかぬ。非人が生國播州と、聞いてもしやはそれなるかと、わざとその名を名乘りしか。殊に小蛇を除くるの一藥、正しく今の老人が、尋ぬるところの一卷を

卜思ひ入れあり、莨入れの中より、件の袱紗を出し

沖津の驛にて拾ひし袱紗。人の噂に鵜の丸を

トこなしあり

住所は江州膳所の町、旅宿は即ち守山宿、近寄りゐるぞ最屈竟。

トきつと思ひ入れ。時の鐘、下座より人聲する。

三人　サ、行きませう／＼。

トこれにて袖助、窺うてゐる。念佛太鼓になり、小兵衛、鐵六、丈助、出て來り

丈助　コレ／＼、金比羅さん、わしらは村市を貰ひながら行きませう。

小兵　さうさつしやるか。直に暮れるぞよ。

鐵六　ハテ、どうで野宿だから、暮れてもよいのサ、

ト袖助を見て

アヽ、こなたはあの小屋の非人どのか。どうだ、鹽梅はいゝ方か。

袖助　アイ、大きに心ようござります。

丈助　そりやア仕合せな事だ。大事にさつしやいよ。

袖助　ハイ、有り難うござります。

鐵六　サ、金比羅さん、爰で別れませう。

小兵　また歸りに逢ひませう。

ト念佛太鼓になり、丈助鐵六は向うへ入る。

ヤレ〳〵、草臥れた〳〵。コレ、非人どの、守山泊りには、餘ッほど暮れやうの。

袖助　左やうサ、大きに暮れませう。急がつしやるがようござります。

小兵　なにサ、行き當りバッタリの金比羅道者、暮れたら野宿をする分と、高をくゝつた事なれば、別して急ぐ事はござらぬ。長の旅を抱へてぱ、やわり〳〵とやらかすのサ。

袖助　エヽ、お前お一人かえ。

小兵　アイ、一人旅サ。

袖助　お國はどこでござります。

小兵　おらは奧州でござるが、道連れを尋ねたらありもしやうが、讃岐ばかりの心がけでもござらぬ。なんでも足任せに、四國西國は勿論、吉野高野熊野那智、行きがけにはマア、播州めぐりをして行くつもりサ。

ト袖助、こなしあつて

袖助　エヽ、播磨廻りをしてござりまするか。そりやアモシ、幸ひでござります。私しも腹からの野良

乞食でもござりませぬ。生れは播州明石の者、この春お伊勢樣へ參りまして、道での大病、此やうに大煩らひを致しまして、この邊の旦那方のお情で、やう〳〵その日を送りまするが、何を申すも、國へ歸りまする路銀がござりませぬ。この體裁を在所へ申して遣はしますると、迎ひの人が參りまするから、その手紙も、わざ〳〵認めて置きましたが、モシ、あなた、何ともお願ひでござりまするが、播磨へのお通りがけ、どうぞ手紙を一通、明石の知るべまで、お屆けなされては下さりませぬか。

ト小兵衞、思ひ入れあつて

小兵　アヽ、こなたは播磨の人か。長旅で煩らうては、そりやァ難儀でござらう。わしも長旅の金比羅道者、殊に身につまされて、人の事ぢやござらぬ、めん〳〵の身の上でござる。通り道なら、隨分わしが屆けてやりませう。

袖助　そりやァ有り難うござります。ちよつとお待ちなされて下さりませ。

ト非人小屋の内より油紙に包み、薄板に挾みたる狀を取出し

モシ、左樣なら、御面倒にはござりませうが、播磨の明石、お組小路と申す所で、石井六之進とお聞きなされ、それまでどうぞ、お屆けなされて下さりませ。

ト渡す。小兵衞思ひ入れあつて

小兵　心得ました。この狀を、その明石のお組小路、石井六之進さまといふお方まで、お屆け申しさへすればいゝの。

袖助　左樣でござります。大切な狀でござりますから、きつと屆けて下さりませ。その上、向うで樣子を聞きましたら、私しが乞食になつて居りまするといふ事を、くれ〴〵も話さしつて下さりませ。

小兵　アヽ、この風體でゐる事を、話してもようござるか。して、貴樣の名は何といひます。

袖助　ハイ、わしが名は譯あつて、ちつと申し憎うござります。その手紙の中には、委細書いてござります。話しのやうに仰しやるなら、御家來の中間が大病で、江州に乞食になつて居りましたと云はつしやれば、隨分わかりまするて。

小兵　よし〳〵、その通り話しませう。そんならこなたは、お中間ぢやの。

袖助　アイ、折助の煩らつたのでござります。何分お賴み申します。

小兵　氣遣ひさつしやるな。きつと屆けてやります。こなたも病あがりなら、大事にさつしやいよ。

袖助　忝うござります。お前も隨分と堅固で歸らつしやりませ。

小兵　オイ〳〵、また歸りがけに逢ひませうよ。

袖助 氣を附けてござらつしやりませ。

ト暮れ六ツの鐘、念佛太鼓になり、小兵衛、狀を受取り、花道へ行き、振りかへり、思ひ入れあつて、足早に向うへ入る。袖助、跡を見送り

ヤレ／＼嬉しや、幸ひの讃岐道者。あの狀が旦那へ屆いたら、この下郎の存念が

ト思ひ入れあつて

先刻に來た藤田卜庵、似寄りのその名もある習ひ。併し江州膳所の町住居とあれば、いよ／＼違はぬ彼れが顏。

ト竹杖の仕込みを拔き、星あかりに透かし見て

かねて嗜むこの一腰。これより直ぐに守山宿、旅宿へ仕掛けて老人が、所持する品こそ鵜の丸の一卷。そんならいつぞや沖津にて、この袱紗を落したるは、あの老人か、又は敵の水右衞門か。爰の道理が

ト思ひ入れあり

ドリヤ、用意して、守山の

ト捨て鐘になり、小屋の内へ入り、菰垂れを下ろす。これより誂らへの合ひ方、禪のツトメ、蛙、時

鳥の聲聞える。向うより左兵衞、藤の丸に田の字の紋附いたる留守居提灯をともし、これを差出しながら出る。卜庵、以前の狀を開き、提灯のあかりにて眼鏡をかけたまゝ讀みながら出る。跡より小兵衞、あたりを窺ひ出て來り、花道にて

卜庵　手紙を屆けし非人の小屋は

小兵　卽ち向うのあの蒲鉾。

卜庵　さてこそ最前逢うたる野伏り。斯樣な奴と知つたるゆゑ、疾より賴み置いたる道者。よくも手紙を。

小兵　そりやア如才はござりませぬ。木曾海道をウロ〳〵と、股にかけたる護摩の灰、こんな仕事は手輕いものサ。

卜庵　大儀であつた。

左兵　モシ〳〵、旦那、あの小屋に御用があらば、私しがちよつと參つて

卜庵　イヤ〳〵、差向ひにて賴まにやならぬあの非人。われは旅宿へ、提灯置いて、サア、歸れ〳〵。

左兵　イエ〳〵、お附き申して參らずば、お才さまがお叱りなさるでござりませう。どの道にも私しも

卜庵　ハテサテ、おのれが何の用に足らうぞ。歸れと申さば歸りをらぬか。

左兵　ハイ〳〵、左様なら歸つて寢まする。有やうは勝手でござります。

ト提灯を渡す。

小兵　左樣なら旦那樣、手紙はあなたへお渡し申しましたぞえ。

卜庵　しかと受取り申した。

左兵　サ、金比羅樣、一緒に行きませう。

ト時の鐘、合ひ方になり、小兵衞左兵衞引返して入る。卜庵、提灯にて、小屋の方をよく〳〵窺ひ、持つたる狀を懷中なし、提灯を持つて本舞臺へ來り、鯉口くつろげ、身拵らへあつて、小屋の側へさしかゝり

卜庵　小屋の內の非人、用事がある、これへ出い。イヤサ、非人、その實名は播州明石、石井六之進が小者袖助、用がある、これへ出い。出をらう。出ませい。

トきつと云ふ。この時、菰垂れを引切り、袖助、仕込みを携へ、ツカ〳〵と走り出て、身拵らへして、卜庵が面體をキツと見る。この時、捨て鐘の頭、誂らへの合ひ方。時鳥の聲聞える。袖助、よく〳〵見て、

袖助　こりや最前の旦那樣、禹條土掘りにござつたお方、非人に御用は聞えたが、石井の小者袖助とは

身に覺えなきその家名。察するところ人違ひ。こりや間違ひでござりませう。その袖助とやらいふ非人に、用事ござらば外々の、蒲鉾小屋を御苦勞ながら、お尋ねなされて御覽じませ。

卜庵　イヤ、僞るな袖助、其方が素性は石井が下郞、駿州阿部川原に於て、人手にかゝりし源之丞、彼れが小者の袖助ならずや。證據は最前奥州より、讃岐へ通る奥道者、それに屆けた明石への、この狀覺えがあらうがな。

ト狀をバラ〳〵と擴げ、提灯にて見せる。袖助、見て、悄りして

袖助　ヤヽヽ、こりやコレ最前讃州へ、參詣いたす道者を賴み、播州明石へ屆けるこの狀、これがどうしてあなたのお手に。

卜庵　われが賴みし道者を手なづけ、愚老が手に入れ披見の上、身の上素性もガラリと知れた。石井が小者の二合半、主の敵をつけ覘ふ、健氣な心底、愛い奴ぢやが、われが敵と覘ふのは、この提灯の定紋か。

ト提灯を差出す。

袖助　ヤヽ、なんと。

ト紋どころを、よく〳〵見て

その紋どころは藤の丸に、中に田の字を附けたるは、聞き及んだる藤田氏、その定紋を附けたる
あなた。さすればいよ／＼旦那樣、あなたは藤田卜庵さま。

卜庵　いかにも最前云ふ如く、愚老は藤田卜庵だ。實の悴は同苗藤田水右衞門。

袖助　さてこそな。

卜庵　われも石井の身内ぢやと、包まず爰で名乘つてしまへ。

袖助　明石へ屆けるその狀が、こなたのお手に入る上は、包むに詮なき身の素性、察しの通り私しは、播州石井が譜代の家來、草履摑みの袖助が、世に落ちぶれて乞食非人。年月主の仇敵と、覘ふ藤田水右衞門、その實父たる

卜庵　イヤ、悴は敵であるまい。彼れを覘ふはそりや僻事、右内を討つたは外にある。

袖助　外にあるとは、そりや何者。

卜庵　まこと右内を手にかけしは、斯く云ふ藤田卜庵だ。悴か濱名へ有りつきの、妨げなしたる石井右内、遺恨に存じて愚老が害し、鵜の丸の一卷までも奪ひ取つた。それを不覺の弟兵助、御免の御書を申し請け、石和の宿にて悴に出合ひ、無實の云ひかけ、天罰にて、返り討にあつたるは、自業自得と申す者。その外白綾源之丞、所々の横死は皆卜庵が業なるに、さは知らずして覺えな

き、水右衛門を附け覘ふは、趣意を存ぜぬうつけの輩。まこと根本根元の、敵といふはこの卜庵
敵と討たば愚老を討て。誠に愚蒙の石井の身寄り、皆うつそりの大だはけめ。

袖助　すりや、旦那方を討つたるは、水右衛門にはあらずして、親卜庵が業なりとは、悴をかばふ親心
情の詞であらうがな。

卜庵　イヽヤ右内を殺したる、僞りならぬ證據は爰に。その場で奪ひし鵜の丸の

卜懷中より一卷を出し

一卷所持の上からは、愚老が討つたに相違ない。

袖助　いよ／＼所持する一卷が、鵜の丸に極まらば、この品定めて覺えがあらう。

卜件の袱紗をさしつける。卜庵ヂロリと見て

卜庵　して、その品は。

袖助　紺地の錦、地紋は即ち蝶千鳥。裏は白地に一首の歌。覺えがござるか、卜庵老。

卜庵　アイヤ、其やうな歌は。

卜當惑の體。

袖助　誠の一卷持ちながら、それを知らぬは合點がゆかぬ。

ト庵　して、その歌は。

袖助　「勝つとても高きにひすな古へも、勝て兜の緒をぞしめける」……袱紗の歌を、知らぬは何とも

ト怪しむ思ひ入れ。

ト庵　歌を知らうが知るまいが、この一卷には小蛇の不思議。それを除くるは尋ねし禹條土。それ蛇除けに川ひん爲に。

袖助　さすればそれが石井の重器、鵜の丸にてありけるか。殊に敵と自分の白狀。お旦那方の血筋さへ絕えて今ではやう〳〵に、殘る明石の若旦那、妹お松、この場になきが殘念ながら、惣名代は袖助が、お旦那方の仇敵、討つて手向ける、卜庵どの、病みほうけたる袖助が、刃金も鈍き錆刀、受けたる上でその一卷、下郎にキリ〳〵渡さつしやい。

ト庵　オヽ、神妙なり、さりながら、病みほうけたる中間小者、年寄つたれど卜庵を、小刀一本持ちもせず、わりや又敵を何で討つ。

袖助　小者なれども石井が下郎、一寸の蟲に五分の魂ひ、盛切り喰ふ中間にも、それ相應の魂ひござれば、見事敵を討ちまする。

ト庵　して又われが魂ひは。

袖助　下郎が魂ひ、この竹杖。

卜庵　アノ、その竹杖が……ドレ。

ト云ひ寄るを突き返しあつて、竹杖をヒラリと拔き、卜庵が目先へ差しつけ、キツとなつて

袖助　御所望なれば非人が魂ひ、以前は武士の扶持切米、身分の輕い中間小者、その魂ひはこの通り、かねて寢刃も合せてござれば、いつ何時でも附け覘ふ、敵にあへば、及ばずながら。

卜庵　ハテ、心掛けのよい若者。一卷所持を存じた下郎、どうでわれをば返り討、不便ながらも愚老が手にかけ

ト拔いて切りかける。袖助、シヤンと留めて

袖助　老ぼれ醫者の藤田卜庵、まだ病あがりの袖助ながら、滅多にその手ぢや行きますまい。

卜庵　機轉のきいた奴ながら、どうで生けては

トまた切りつける。立廻りあつて、これより凄き合ひ方。兩人拔き合せ、タテになり、袖助は一卷を取り、助けんとする心。卜庵は討たれんとする心意氣のタテになり、ト卜庵、我が手に一刀切りさき、苦痛の體にて一卷を差出し

エヽ、殘念なこの深手、どうで存命叶はぬ老人。この一卷を相渡す。急いで止めを。コレ、苦痛

を助けよ。

ト袖助に縋つて思ひ入れ。

袖助　是非に及ばず、この深手。いかにも苦痛を助けてやらうワ。

ト一巻を取つて口に咬へ、卜庵が胸づくしを取る。卜庵、手を合せ

卜庵　急いで止め。

袖助　南無阿彌陀佛。

ト卜庵が胸許をぐッと刺し通す。卜庵、稲村の蔭へ倒れる。袖助、刀を拭ひ、提灯のあかりにて、一巻を見て、思ひ入れあつて

見覺えなけれど、合點のゆかぬこの一巻。水右衛門が所持なすと、聞きしに違ふ親卜庵、もしや我が子を助ける爲の

ト死骸を引出し、思ひ入れあつて

惡に凝つたる悴ながら、助けん爲の親心。

ト思ひ入れあつて

最早明石へ知らせに及ばぬ。この上は、卜庵殺せし敵となつて

ト提灯の火にて以前の手紙を燒きすて、卜庵が死骸の懷より、鼻紙を引き出し、左の小指をくひ切り

斯うして置けば、後の手蔓に。

ト思ひ入れ。小指の血にてサラ〳〵と認め、卜庵が小柄を取つて、提灯の紋のあたりへ刺し貫き、振りよき松の樹へこれを吊し、思ひ入れ。此うち始終捨て鐘、時鳥、蛙の聲する。片脇の稻村を押分け、小兵衞、鐵六、丈助、出かゝり、窺ひゐる。

それにつけてもこの一卷、いよ〳〵誠の品なるか。

ト思ひ入れ。小兵衞、窺ひよつて

小兵　その一卷を

トかゝる。立廻りのうち、死骸に爪づき、悄りして

ヤ、こりやコレ先刻の卜庵どの。こりや人殺し。

袖助　なにを。

ト引附ける。小兵衞、一卷を奪ひ取り、逃げんとする。これより鐵六丈助も袖助へかゝり、タテあつて、トゞ小兵衞、一卷を持ち、下座へ走り入る。

南無三一卷、イデ追ひかけて

ト二人を投げつけ、ゴレ〳〵の送りにて、袖助、跡追ひかけて下座へ入る。矢張りこの鳴り物にて、東の口より水右衛門、以前の虚無僧の姿にて出て來り、舞臺へ來て、松に掛けたる提灯を見附け

水右　アヽ、ありや提灯さうな。紋どころは藤の丸に田の字、身共が紋と同じ事。アヽ、提灯の紋を見て、返らぬ昔が思ひ出され……ハテ、それは兎もあれ、どうして枝へ

ト立ちよつて提灯を取り、小柄を差したる書き物を見附け、何心なく開き見て

ナニ〳〵……「鵜の丸の一卷所持なす老人ゆゑ、たつて所望いたせしところ、承引なきによつて是非なく討つて立退くものなり」……ハテ、合點のゆかぬ。鵜の丸は、かねて身共が所持なす品

ト懷中より一卷を出し

それを又ぞろ老人が、所持なせしとは。

ト思ひ入れあり

殊に身共と提灯の、紋も一つの

トあたりを尋ね、卜庵の死骸あるゆゑ、よく〳〵透かし見て、恟りして

ヤヽヽヽ、こりや親人卜庵さま。モシ、親人、コレ、卜庵さま。

ト呼び生ける事あつて

はや綷切れしこの死骸。何奴の仕業なるぞ。さるにても一卷を、所持あつたとは心得ぬ。もしや身共が先達て、江州膳所に同居の砌り、我れに隱して鵜の丸の、一卷を寫し置かれしか。さるにても、親人を討つたる奴が、その一卷所持するからは、もしや石井にゆかりの奴か。思へば〳〵口惜しい。

ト無念のこなし。時の鐘にて、向うより左兵衞、守山宿かぎやといふ小田原提灯をともし、お才、かひ〴〵しきいでたち、足早に出て來り

さい　其方もマアお附き申さいで、歸るといふ事があるものかいの。

左兵　それでも、歸れ〳〵とお叱りなされますから。

さい　その非人小屋は、先刻のあたりかや。

左兵　向うでござりました。

ト此せりふにて舞臺へ來り、窺ひ見て

さい　アレ〳〵、こちの提灯が、あそこに見えるぞや。

左兵　それ〳〵、旦那もあそこでござりませう。

さい　申し、父さん、卜庵さま。それにおいでなされまするか。

ト水右衛門、聲を聞いて

水右　左やう申すは、お才でないか。

さい　ヤ、さう云はんすは……ヤア、水右衛門さま、どうして爰に……コレ、我が夫、モシ、おなつかしうござんすわいな。

ト近寄らんとして、死骸を見附け

ヤ、爰に伏したは何者の……ヤ、血汐の滴り、そんなら誰れやら。

水右　切られてござるは卜庵どの。

さい　エヽ、アノ、父さんが

ト驚く。

左兵　ヤア、人殺しだ。切つた〳〵。

ト提灯を持つたまゝ下座へ逃げて入る。

水右　殘念なるは今少し、早う來たなら、やみ〳〵と

さい　最前とてもお前のお噂、お案じありし親人樣。こりや何者の仕業でござんす。コレ、水右衛門さま、相手は何者、敵を御存じでござりますか。

水右　その手がゝりは果し狀、父の所持ある鵜の丸の、一卷奪ひし曲者が、親卜庵を討つたる敵。これといふのも某が、多くの輩を返り討。それに緣ある奴等の業か。

さい　そんなら噂に違ひなう、人を殺めて日影のお前。

水右　イヽヤこの上某を、恨むる輩も大半片附け、枕を高うと思ひしに、今日の今より此方にて、親の敵を尋ねゝば、ならぬ身分となる上は、足手纏ひは却つて邪魔。お才は今から緣切つた。勝手次第に。

ト行かうとする。お才、裾に縋つて

さい　アヽモシ、そんならわたしを緣切つて

水右　いづれへなりと。

トお才を突きやり、キツとなる。

さい　すりや、云ひ號けのわたしを捨てゝも

水右　足手搦みを拂つた上、一本立ちの身となつて、この提灯の果し狀、これを證據に親人の、敵を尋ねてズタ〳〵に、切り苛なんで父への供養。

さい　そのお心であるからは、お前の武士は立ちまする。必らずお心殘らぬやうに

ト差したる件の簪を取つて

この簪の藤田氏、世に頼みなき、わたしはどうで

ト思ひ入れあつて、簪を咽喉へ突き立て、苦しむ。この音と一緒に正面の藪垣を押しわけ、袖助、件の一巻を咬へ、窺ひ出る。水右衛門、自殺の様子を見て、ニツコリ笑ひ

水右　この一巻へ、不浄な生血。

ト臑にて蹴飛ばす、おオ、落入る。水右衛門、懐中より一巻を出す。薄ドロ〳〵にて、白蛇一疋、水右衛門のあたりへ這ひ行く。袖助、これを見附けて

袖助　慥かに蛇。

水右　ヤ。

ト一巻を懐中する。袖助、ツカ〳〵と寄る。水右衛門、天蓋にて顔を隠す。袖助、思ひ入れあつて

袖助　形は旅の

ト窺ひ見る。最前より鐵六窺ひゐて

鐵六　人殺し。

ト寄るを水右衛門、見事に投げる。これを木の頭。鐵六、起上がるを袖助、膝にて押へつける。この

仕組みよろしく、ひやうし幕

六幕目

大岸頼母屋敷の場

役名━━大岸頼母、頼母妻、月の戸。若黨、赤堀源吾實ハ藤川水右衞門。雲津郷助。刀屋源吉。腰元、うつ野。下部、權平。大岸主稅之助。若黨、神崎與三。小鼠百助。大岸妾、賤機實ハ作助娘お松。岩淵萬五郎實ハ石井下部袖助。

本舞臺、三間の間、常足の屋體。上の方、柴垣に秋草、蜘蛛手に誂への手水鉢。下に指折り門、正面には、障子閉てきり、すべて勢州龜山の家中、大岸頼母の一構へ。庭先の體。二重舞臺に郷助、麻上下、大小にて、莨盆を扣へ、主稅之助、着流し、袴、大小にて、夏菊桔梗女郎花、その外秋草よろしく花活大分取寄せ、花を活けてゐる。平舞臺には權平の足輕、與三の若黨、竹刀打ちの稽古してゐる源吉、以前の刀屋にて、下の方に扣へゐる。琴唄に白囃子をかぶせし鳴り物にて幕明く。

ト兩人立廻りよろしく、與三、竹刀を取落す。權平附入つて與三を打ち据ゑる。

郷助 イヨ〳〵、權平、手の內見事々々。餘程上達いたしたわえ。

權平 イエ、あまり左樣でもござりませぬが、先生に教へられた早速の早業。この位な勝は、當り前でございますて。

與三 これサ權平、おぬしは先生々々と云ふが、その稽古する師匠といふは、當國にて家名は何といふお人だ。

權平 ハテ、この男は、おれが先生を知らぬか。一刀流に並びなき、岩淵萬五郞さまといふ御浪人から稽古した手の內だワ。

主稅 成る程、その岩淵どのといふは、この程より當所龜山の御城下に、道場を出されしとの聞え。殊更一刀流の達人にて、日向の國、鵜戶權現の神勅あつて、鵜の丸の一卷を、先祖より持ち傳へられ、城主へ差上げ、仕官の願ひ致さるゝとの噂。

郷助 すりや、主稅どのには、その浪人が、鵜の丸の一卷、殿へ差上げ、有つきの願ひとな、……ハテ合點のゆかぬ。世にも稀れなるその一卷、所持する者は、藤田ならでは

ト云はうとする。主稅之助、聞き咎めて

主稅 して、所持いたす者、貴公樣には御存じかな。

郷助　イヤ〳〵、存じたと申す儀でもござらぬが、岩淵とやらが所持するとは、合點のゆかぬお話しを承つたで

ト思ひ入れ。

源吉　へイ〳〵、若旦那主税さまへお伺ひ申しまする。別儀でもござりませぬが、先達てお好みとござりまするゆゑ、私し方より差上げましたる、仁王三郎の一腰、いよ〳〵旦那頼母さまには、お求め下さりまするや。この段承りたく、わざ〳〵推參仕りましてござりまする。

主税　その一腰の儀は、父上頼母こと懇望あつて、求め置くとの事。其方參り次第、母上へ申し、劍の代金受取り參るやう、某に申しつけ、お下館に勸請ある、荒人神へ俄の參詣。刀屋源吉、金子は卽ち母人より、受取り歸つてよからう。

源吉　それは有り難うござりまする。左樣なれば私しは、月の戸さまへお目見得の上、代金頂戴仕るでござりませう。

ト郷助を見て

モシ、郷助さま、いつぞやあなたの御推擧なされました、あの仁王三郎の劍は、いよ〳〵

ト云はうとする。

郷助　これはしたり、それをこの場で、麁相千萬。賣拂ふとも、どうなりとも、爰で身共に、ナ……ハテ、其方は機轉のきかぬ。

　　ト思ひ入れ。源吉、呑みこみ、こなしあつて

源吉　ヘイ〳〵、左様なれば、御存じないあなた様でも、この儀ばかりは、きつとお屆け申して置かねば

　　ト怪しく挨拶する。

郷助　ハテ、どうなりとも勝手に致せサ。

　　トこの時、向うにて

呼び　お歸り、

　　ト呼ぶ。

主税　最早親人歸宅の知らせ。

郷助　お目にかゝつて罷り歸らう。刀屋源吉、其方も必ず、ナ

　　ト思ひ入れ。源吉、こなしあつて

源吉　承知仕りました……ドリヤ、月の戸さまに、お目にかゝつて參じませう。

ト唄になり、源吉、思ひ入れあつて奥へ入る。亂れのやうなる鳴り物になり、向うより頼母、羽織袴大小、庭下駄を履き、少し酒機嫌にて出てくる。跡よりお松、妾奉公人の拵らへにて、牡丹の枝の手折りたるを持ち、青傘をさし、うつ野、腰元形にて、附添ひ出て來り、花道にて、お松が持ちし牡丹を見て

頼母「咲きにけり、浪花は色の深見草、さらでも人の花になる世に」……時は今、秋の半、四季咲きのその牡丹花、いはゞ丁度わが身と同じ。

まつ　アノ、この牡丹を、わたしと同じ事ぢやとは、お弄り遊ばしまするか。

頼母　なんの弄らう。妻のある身で大岸が、召抱へた妾の其方、思うた色の深見草、牡丹は花の富貴といへど、人の手活けの花となる。世の盛衰は

まつ　エ。

ト兩人、思ひ入れあつて

頼母　ハテ、賑やかに咲いたではないか。

うつ　左樣でござりまする。お下館のお庭内、勸請なされた曾我八幡のお祭り。その儀について旦那樣神主樣へお寄りなされ、御馳走酒のその上に

まつ　花壇の花を御所望遊ばし、手折り参りし牡丹花の、譬へに申す、牡丹は奥様、月の戸さま。

頼母　其方はさしづめ菖浦の妾、そのわが身から妾の證文、取つた一札、慥かに身共は

ト懐中より半紙の書き物を出す。

まつ　手蹟が卽ち手がゝりに

頼母　サ、妾の其方は、側を放さず

トよろ〳〵として、お松にもたれかゝる。

まつ　お危なうござりまする。

ト思ひ入れ。鳴り物にて、皆々舞臺へ來る。主稅之助、出迎へ

主稅　親人樣、只今お歸り遊ばしましたか。

鄕助　イヤア、大岸どのには、今日はお下館へ、お妾を同道なされて御遊山とは、おうら山吹杜若。アア、牡丹を手折つてお歸りとは、ア、、四季咲きと見えまするな。

頼母　これは〳〵、雲津氏、なんと思うて入らせられしぞ。身も今日はお館へ、勸請ありし兩社の御神近きに祭禮ござるゆゑ、神職方へ立越へまして、もてなし酒に酩酊いたし、只今やう〳〵歸宅の拙者。手折り參つた牡丹花を、コリヤ〳〵、權平、その花活けへ、其方よきに活けて置きやれ。

権平　ヘイ〳〵、畏まりました。私しが遠州流をお目にかけませうかな。

與三　お旦那へ申しあげまする。先達て罪極まりし、播州の盗人百助こと、今日死罪の仰せ出され。左様ござらば直さま引立て、仕置場に於て成敗仕りませうか。如何計らひませうな。

頼母　成る程、兩社の祭禮來らぬうち、切捨ての科人、即ち今日成敗いたして……コリヤ、悴、幸ひ、この程求め置いたる、仁王三郎、あの劍にて、役目は其方、切り柄はめて、劍の切れ味。

主税　すりや、私しの小腕の成敗。

頼母　仕負ふせて見せい。

主税　畏まつてござりまする。

郷助　主税どのには首切り役を……こりや拙者めも見物仕らう。大岸どの、切り場へ參つて

頼母　悴めにお指圖の役、頼み入りまする……サ、與三は獄屋へ。

與三　ハツ。

主税　郷助どの、斯うお出でなされませ。

ト唄になり、郷助、主税之助は奥へ、與三は向うへ入る。頼母、思ひ入れあつて

頼母　コリヤ〳〵、新參の女、茶を汲んで參れ。

まつ　ハイ〳〵……ドリヤ、お茶の間へ行て

ト立たうとする。奥にて

月の　そのお茶は、私しが差上げませう。

ト合ひ方變つて、奥より月の戸、大岸女房の拵らへ、薄茶を立てし體、袱紗に茶碗を持ち添へ、出て來り、賴母が前に差出し

サヽ、召上がりませいな。

ト賴母、見て

賴母　これは月の戸か　お手前、久しぶりで下さるわえ。

まつ　申し、月の戸さま、私しも今日は、お庭拜見のお供を致し、よい慰みを仕りましたわいな。

月の　さうであらうわいの。お下館のお庭の景色……見れば見事なその牡丹。花壇からお持ちなされましたかえ。

賴母　左やう〳〵、花壇に咲いた深見草、所望いたして手折つて參つた。誠に庭前の風景、アヽ、其方にも見せたいものぢやわいの。

月の　それは有り難うござりまする。私しもこれまで久しう居りますが、殿樣のお庭の景色、お噂に承

りしばかり、今に拜見いたしませぬが、其方は昨日今日上がりやつた奉公人、こちの人のお供して、お庭拜見いたすなどゝは、願うてもない仕合せな事ぢや。それといふのも年若で、新參の其方。どうでも物は新らしいうちが賞翫。なう、權平、左樣なものぢやないかや。

トこれにてお松、氣の毒なる思ひ入れ。

權平　左やう〳〵、飯椀は勿論、六尺ものゝ下帶でも、新らしいうちが賞翫。茶漬屋が出てさへ、新見世のうちは、隨分賣れるものでござりまする。

月の　さうであらうとも〳〵。わしもさう思うてゐるわいの。

賴母　コリヤ、女房、そちや變つた事を申すが、これなる新參の女子を、お庭の牡丹拜見の供に召連れたるを、どうやら其方は物あるやうに云やるが、コレ、妾を抱へ、召仕ふやうにと、一體其方が承知の上の事ではないか。

月の　そりやお前樣、殿御の高下、どのやうな事なされうとて、なんでマア私しが、悋氣がましい事を申しませうぞいな。

賴母　それ〳〵……悋氣がましい事を申しませぬと、云やるのが卽ち悋氣ぢや。

月の　これはしたり、其やうに仰しやりましては、私しが申しまする事は、どのやうな事でも

頼母　オヽ、身が耳へは、悋氣いたすやうに聞えるわいの。

月の　それは迷惑な儀でござりまする……コリャ、新参の其方、こりやどうしたらよからうぞいの。

まつ　サ、私しぢやと申しまして、お氣の毒には存じますれど、どう致してよからうやら、新参者ゆゑ御家風とても

うつ　モシ〳〵、常から旦那の仰しやるには、下々で云ふ燒餅とやら、こちの女房にちとやらせて、その鹽梅を見たいものぢやと、仰しやつてゞござりまするぞえ。

頼母　成る程、其方が云ふ通り、この月の戸は、ついに燒餅を燒いて見せた事がない。いかに侍ひぢやと申して、その燒餅の加減を拜見せぬも、如何なものぢやて。

まつ　エヽ、左樣なら旦那樣は、まだ燒餅悋氣の御樣子は、御存じではござりませぬか。

頼母　ついにあの者が、燒いて見せた事がないて。

まつ　そりや御尤もでござりまする。月の戸さま、あなた樣、その燒餅を少しばかり、お燒きなされては、どうでござりまする。

月の　サ、わしも女子に生れて、燒餅悋氣も、ちつとは燒いて見たいと思うても、ぬしがついに燒かせるやうな身持ちをなされませぬによつて、わしも燒いた事はないが、見たいと思し召すなれば、

お前樣から燒餅の、下拵らへをなされませいな。

賴母　ア丶、燒餅にも、下拵らへがいるものか。

月の　左樣でござりまする。コレ、權平、さうぢやないか。

權平　左樣でござりまする。これまでは、お二人樣にこれ程も、互ひに悋氣なさるゝやうな、趣意はござりませぬから、おのづと燒餅はござりませぬが、この間旦那樣が、このお妾をお抱へなされたので、これを足代にしたら、どうか燒餅見世が出されさうなものでござりまする。

月の　さう云やれば、成る程、少しでも手がゝり無うては、燒かれるものではあるまいわいの。モシ、お前樣から、燒餅の下拵らへをなされませ。

賴母　ハテサテ、燒餅を燒くのは、牡丹餅團子と違ふやら、大分むづかしいものぢやな。併し、下拵らへならば、コリヤ〱、新參の女、爰へ來やれ〱……コレ、身共晝中に恥かしながら、斯う抱きついて居たならば、月の戸は燒餅見世を、出されるであらうわいの。

　　トお松に野暮らしく抱きつく。

まつ　ア丶モシ、あなたが御覽じておいでなされまするわいの。

　　ト立たうとする。

月の　アヽ、これいなう、さうして居ても、其やうな事を見いでは、燒餅心が附かぬわいの、なんであらうと、見るは後學。それを拜見いたした上で、そろ〳〵燒餅心にかゝるわいの。マア〳〵、燒餅の稽古は、なか〳〵出來ぬものぢやぞや。

權平　成る程、これは御尤もゝ併し、燒餅も大福も

うつ　落つれば同じ谷川の

賴母　水も洩らさぬなか〳〵に、これでは月の戸、燒餅燒くか。

トお松を引寄せ、抱きつく。お松、氣の毒なるこなし。月の戸、思ひ入れあつて

月の　それではどうやら燒餅見世が、出されさうにござりまする。

ト會釋する。向うバタ〳〵にて、揚げ幕より水右衞門、花色の絹羽織、海鼠織りの袴、足輕の拵らへにて走り出て來り、花道に手を突き

水右　申しあげます。

賴母　何事ぢや。

水右　御浪人、岩淵萬五郎さまと御意なされ、賴母さまへ御面談なされたいとの事。これへお通し申さんや。如何計らひませうな。

頼母　いかにも。この程よりお約束申し居つたる岩淵氏。苦しうない、これへお通し申せ。

水右　ハッ。

ト引返して入る。頼母、思ひ入れあつて

頼母　折角好んで焼餅の、稽古半へお客人。コリヤ、其方達は暫く爰を

トお松へ思ひ入れ。

まつ　左様なればお客人、岩淵さまのお出でゆゑ、今日の趣向はこれぎりに。アノ、お客といふは御浪人、もしや手がゝり。

ト向うへ思ひ入れ。

頼母　コリヤ、無禮なきやう、ナ、合點がいたか。

トこなし。

月の　すりや、私しも爰にあつては

ト思ひ入れ。

頼母　アイヤ、其方は直にお客の迎ひ。アノ門先まで

月の　殿御の迎ひに、アノ私しが

賴母　それも矢ッ張り燒餅の
月の　エ、、稽古に遣ふはあなたの悋氣。燒餅の種にわたしを
まつ　こりや新らしうござりまする。

ト向うにて

呼び　岩淵さまお入り

ト呼ぶ。お松、向うを見て

まつ　あの岩淵と呼ぶお方が、もしや
賴母　アコレ、其方は奥へ。
まつ　ハイ。

ト合ひ方になり、お松うつ野、權平、思ひ入れあつて奥へ入る。

賴母　お客人には、イザまづこれへ。
袖助　御家來中、御案内賴み存ずる。
月の　ドリヤ、お迎ひに參りませうか。

ト誂らへの鳴り物になり、月の戸、花道へかゝる。向うより袖助、五十日鬘、羽織袴、大小にて、深

編笠を水右衛門に持たせ、出て來り、花道にて月の戸と行合うて、こなし。水右衛門、聲をかけ

水右 月の戸さま、いづれへお越しなされまする。

月の 夫が指圖にお客人、岩淵さまのお迎ひながら。

袖助 身共を迎ひとおいやる婦人、殊にあれなる男子が模樣、大岸どのゝお內方、承り及びたる、月の戸どのとは、其許樣でござるかな。

トこれにて袖助、思ひ入れあつて

月の 左樣でござりまする。今日稀れ人御入來の、そのお迎ひに御門まで、參りましたる路次におき、お目にかゝりしお客人。

袖助 一僕さへも召連れぬ、尾羽打枯らせし素浪人、大岸どのゝお詞を、承つて城主へお願ひ。あらましは先達て、お物語り致したが、お內方には只今始めて。萬事よろしく。殊に病中、長髮は、幾重にも、御容赦にあづかりませう。

月の これは〳〵御挨拶。夫賴母も先刻から

袖助 さぞお待ちかね。然らば內方、月の戸どの。

月の 岩淵さま、サ、斯うお出でなされませ。

トよろしくあつて三人、鳴り物の切れにて、舞臺へ來り、座につく。水右衞門、下に扣へ

水右　お客人岩淵さま、お供仕りましてござりまする。

賴母　これは〳〵岩淵氏、ようこそ御入來。只今も女房月の戸、門先までお迎ひながら

袖助　左やう承つてござる。お内方にも途中ながら、お近附きに罷りなり、只今あれにて申す如く、御覽の通りの長髮も、未だ病中是非なくも、御免の請けて推參いたした。賴母どの、この上ともに、御前よろしう賴み入りまする。

賴母　改まりましたるお詞。大岸賴母、委細承知いたしてござる。早速ながら承らうは、貴公樣には一刀流の奧儀を極め、鵜の丸の一卷城主へ差上げ、仕官の望み致さるゝ、御心底と承り、御推擧な仕つらんと、わざ〳〵お招ぎ申せしに、早速の御入來、忝う存じまする。

トこの一卷の事を聞き、水右衞門、心得ぬ思ひ入れにて、袖助へ目を附け、聞き耳立てゝ窺ひゐる。

袖助　いかにも貴公の仰せの通り、當お館へ劍術師範のお願ひ。それと申すも日頃から、一刀流の奧儀を極めしこの岩淵、かねて所持仕る、家の秘書、鵜の丸の一卷を

水右　すりや、あなた樣が、その一卷を

ト思はず近寄る。袖助思ひ入れあつて

袖助　肌身離さぬ先祖代々

水右　御所持でござりまするかな。

袖助　いかにも……して、其方は、お抱への足輕か。

水右　ヘイ、新組の足輕、赤堀源吾と申しまする、新参者でござりまする。

袖助　すりや其方が、赤堀源吾と申す足輕か。

水右　左様でござりまする。

袖助　その足輕が、なんで身共が持参せし

水右　その一巻のお噂を、承つて、よもやとは

袖助　ヤ。

水右　よいお道具を、御所持なされしあなたゆゑ

袖助　それで身共を

水右　お羨ましう存じまする。

ト手前の懐中に、誠の一巻あるゆゑ、詰る思ひ入れ。月の戸も、こなしあつて

月の　憚りながら、女子の差出たる事ながら、只今お話しの一巻こそ、日向の國、鵜戸權現の神勅によ

り、右の一巻所持する時は、折々白蛇の不思議ある、神蔭流に傳へたる、一巻と承りしが、あなたの奥儀は一刀流、他流で用ひぬその秘書が、どうしてあなたの

袖助　ヤ。

トぎつくり思ひ入れ。月の戸、こなしあつて

月の　サ、斯様に申すも世間の噂。ハテ、よい品を御所持なされまするな。

ト水右衞門も似せ者ならんと思ひ入れ。袖助、こなし。

頼母　コリヤ、月の戸、女のいらざる小差出た。其方が何を存じて。扣へて居やれ。

袖助　イヤ〳〵、大岸どの、左様に仰せられぬがよい。見ましたところが、お物腰と申し立振舞ひ、男まさりの月の戸どの、誠に貴殿には、よいお内方をお持ちなされた。拙者なぞは獨身でござるが女房を持つなれば、お内方月の戸どのに似寄りの女、尋ね求めて宿の妻。ハテサテ、女中に稀れなるお方。

月の　これはしたり、岩淵さま、その仇口も淺はかな、女子どもを喜ばす、あなたも餘程の

袖助　イヽヤ眞實。

ト頼母を見て思ひ入れ。

月の　おどけたお方でござりまするわいな。

ト思ひ入れ。奥にて時計の八ツを打つ。賴母、思ひ入れあつて

賴母　死罪あるべき八ツの刻限、悴主税が小腕の試み……コリヤ、月の戸、其方は奥へ參り、この程求めし劍の試み。

月の　すりや、鮫鞘の仁王三郎。

トこれにて水右衞門、思ひ入れ。

賴母　悴に支度いたさせてよからう。

月の　畏まりました……岩淵さま、後程お目にかゝりませう。

ト唄になり、月の戸、袖助へ心を殘し、奥へ入る。袖助も跡見送つて、心ある思ひ入れ。時の太鼓になり、向うより百助、淺黃のお仕着、繩にかゝり、侍ひ二人繩をひかへ、跡より與三附き、早足に出て來り

侍ひ　下に居ろ。

ト下の方へ引据ゑる。

與三　お指圖の科人、引据ゑましてござります。

賴母　神崎與三、其方は警固いたし、首討つ役は若年ながら、悴主税……コリヤイ、今日死罪仰せつけらるゝも、身より出でたる罪は遁がれぬ。おのれも武家に奉公いたし、切取り致した天罰が忽ち報うて只今刎ね首、有り難くお請けを申せ。

百助　へイ、有り難うござります、と云つたところが首はコロリだ。人はいつどのやうな死やうをしようやら。わしも西國では、武家奉公の中間小者。盗みの上の人殺し。これにも段々こみ入つた

ト云はうとする。水右衛門、武士の小者と聞き、もしやト思ひ入れ。賴母、あと打消して

賴母　白狀の上は今となつて、なんの痴言。急ぎ切り場へ引ッ立てい。

與三　科人、立たう。

百助　この世の別れだ。酒でも呑んで死ぬべい。

ト捨て鐘、合ひ方になり、侍ひ引立て、與三附いて、下の口へ入る

袖助　大岸どの、只今の科人は、盗人でござるかな。

賴母　左樣でござる。彼れは播州明石の產れ、武家奉公を致せし小者。盗み致して人を殺め、牢舍いたし罷りありしが、今日の死罪、よく／＼素性を聞きますれば、主の仇を報はんなどゝ、非人となつて諸國を經めぐり、路用の貯へ無きまゝに、切取りせしと自身の白狀。主人の恥を思うてや、

おのればかりが身に引請け、今日の死罪。不便の儀とは存ずれど、國の政道、盜人の仕置。誠に彼れめが、もし敵討とやらでござるなら、アヽ、不便な儀でござるて。

ト水右衞門が面體を、窺ひ〳〵、此せりふ云ふ。水右衞門は、さてこそ袖助が死罪になりしといふ思ひ入れにて、安堵のこなし。

袖助　ハテサテそれは、不便な事でござつたな。

水右　すりや、只今の科人は、播州明石の武家方に、奉公いたせし小者にて、主の敵を附け覘ふ………アノ敵を覘ふ

トいよ〳〵安堵の思ひ入れにて

それは不便な儀でござりまする。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、下座より源吉、おづ〳〵出て來り

源吉　これは大岸さまでござりまするか。彼の仁王三郎の一腰を、お求め下さいまして、只今月の戸さまより、代金殘らず、下し置かれましてござりまする。誠に有り難い仕合せにござりまする。

トせりふのうち、水右衞門を見附け、いろ〳〵思ひ入れあつて

ヤヽ、お前は、いつぞや鏡の宿の雨宿り、アノ辻堂で一腰を

ト云はうとする。水右衞門、空うそぶいて

水右　これはしたり〳〵、このお人は、何を云はつしやる。下郎は今參りの足輕、源吾と申す者。こなた、そりや人違ひでござらう。似た者もある習ひでござるワ。

ト取上げぬゆゑ、源吉、手持ちなき體にて

源吉　左樣なら、私しが不調法でござります……ハヽヽヽヽ、いかいたはけな。それにしても、あまりよう似た

ト思ひ入れある。

頼母　して、代金は相濟んだか。

源吉　左樣にござりまする。殘らず頂戴仕りましてござりまする……ほんに、念のため、受取を認めて差上げませう……お硯箱を

ト思ひ入れ。

頼母　イヤ〳〵、受取には及ばぬ。仁王三郎の一腰、借用金の受取、疾よりこれに。

ト お松より受取りし心にて、前幕の毒の反古を出す。袖助、目を附けろ。源吉、窺ひ見て

源吉　ヤ、そりやソレいつぞや途中に於て、認めさしつた劒の預かり。どうしてあなたへ

水右　ヤ。

　　ト窺ひ見て、我が手蹟といひ、毒を包みし反古ゆゑ、恟りする。頼母、素振りを見て、

頼母　この借用の一札は、至つて見事な手蹟なれども、時世につるれば艱難苦勞を

　　ト水右衞門と袖助へも、わざと目を附け、懐中して

手蹟と申せば、萬五郎どのには、殊の外に能書の聞え。折からこの扇面へ、何卒貴公の御手蹟
を

　　ト腰の扇を取つて袖助へ差出す。水右衞門は安堵の思ひ入れ。袖助、迷惑なるこなしにて

袖助　これはしたり、それは何と仰せらるゝぞ。筆取る事は、身共は至つて不器用な生れつき。その儀
なら、餘人へ〳〵。

源吉　アイヤ、お隱し遊ばされまするな。あなたの御手蹟、見事な事は、至つてお噂でござりまする。

　　トその身を遁がるゝ思ひ入れ。

頼母　左やうか〳〵。然らば御辭退なく、サヽ、お認め下されい。

袖助　これは迷惑千萬な。流石の岩淵萬五郎、これには僻易仕る……アヽ、まゝよ。それ程にお望み
なら、惡筆兵衞景清も、後を見するは卑怯の至り。認めませう。料紙をお貸し下されい。

賴母　幸ひこれにござりまする。
　　ト硯箱を差つける。袖助、扇へサラ〳〵と認めて
袖助　サ、書きました〳〵。陣分漢は存ぜぬ身共。覺えた歌の秋の田の。これで御容赦。
　　ト賴母へ渡す。
賴母　「秋の田の苅穗の庵の笘をあらみ、我が衣手は露に濡れつゝ」……こりや一段と出來でござりまする。御手蹟も見事な儀でござりまする。
袖助　これは〳〵御挨拶、面目次第もござらぬわえ。ハヽヽヽ……連歌俳諧何一つ、さて〳〵出來ぬ萬五郎。併し武藝一通りは、あまり遲れは取りませぬて。
賴母　かね〴〵左樣に承る。よき折からの御入來なれば、何卒悴が太刀筋を、憚りながら、御覽なされて下さりませ。
袖助　イヤモウ、お好みとござるなら、心がけよき御子息の、御手練の程、及ばずながら見ました上で
賴母　それは近頃忝う存じまする。
　　トこの時、奥にてバッタリ太刀音する。源吉は恂りする。
袖助　あの太刀音は。

賴母　只今引かせし科人の成敗。

水右　アノ、敵討なりと仰せあつたる。只今の武家の小者が

賴母　なんと不便な事ではないか。

水右　いよ〳〵それで、安堵いたした。

　　ト思ひ入れ。袖助、聞き咎め

袖助　源吾とやら、盗み致した小者めが、首の落ちたが、何が安堵だ。

水右　イヤ、拙者が安堵ぢやござりませぬ。お仕置にもあふべき惡者、生けて置いては世上の難儀、死罪にあへば萬民の喜び。さぞ世の人は、安堵いたすでござりませう。

袖助　アヽ、左樣か。成る程、それでは世の中の……イカサマ、安堵いたすでござらうか。

　　ト目を附けて思ひ入れ。下の口より侍ひ二人、件の首を俵に入れ、青竹に通したるを擔ぎ、與三附いて出て來り

與三　お指圖ありし科人、その太刀取りは若旦那、見事な事でござりました。

賴母　然らばこの首、お國境へ掛け置いてよからう。

與三　畏まつてござります。

源吉　へイ〳〵、私しもモウお暇仕りませう。……くどい事だが、あの虚無僧は

ト水右衛門を見て思ひ入れ。

賴母　源吾は奥の稽古場にて、竹刀の用意。

水右　畏まつてござりまする。

賴母　神崎、急げ。

與三　ハツ。

ト唄、時の鐘になり、水右衛門、思ひ入れあつて下座へ、侍ひは首を擔ひ、與三と源吉あとに附き、向うへ入る。兩人殘つて

袖助　イヤナニ、大岸どの。いよ〳〵其許、拙者めを、推擧なさるゝ御所存かな。

賴母　何しに僞はり申さんや。同じ流儀のよしみもござれば。

袖助　同流のよしみとお云やるが、其許樣は神陰流、拙者は即ち一刀流、それを知りつゝ只今のお詞、何とも以てその意を得ませぬ。

賴母　御尤ものお咎めなれど、この程お宅で稽古の御手練、拜見いたしてこの大岸、正しく貴殿は神陰の、流儀を隱す一刀流、それに相違はござるまい。

袖助　イヽヤ、そりや其許の心得違ひ。拙者が手練は一刀流、それを俄に神陰とお云やるが、たつて疑ひめさるゝなら、一刀流の手の內を、お目にかけませうか。

トきつと云ふ

賴母　これはしたり、どうやら其許には、御立腹の體に見えまするが、拙者が見極めましたるは、相違ござらぬ神陰のお手の內。

袖助　その手の內は一刀流、油斷の節を窺うては

ト扇にて打つて行く。賴母、刀を取つて胸にて受けとめ

賴母　その早業も卽ち神陰。拙者流儀も同じ事。

袖助　イヽヤ同流ならざる太刀筋、開いて眞向、打つてかゝれば

賴母　右手へかはして、眞劍ながらも、拳をかためて

ト立廻つて、腰の扇を取つて、袖助の腕を打つ。袖助、思はず持つたる扇を落す。賴母、件の扇にて立廻りよろしく、袖助、刀へ手をかけるを、扇で押へる。立廻りよろしくあつて

流儀の論より無益の立合ひ。されども至つて上達せし、この手の內では、見事討たるゝ

袖助　ヤ。

ト思ひ入れ。

頼母　イヤ、討たれぬ先に拙者が閉口。イヤ、天晴れ御手練。

袖助　イヽヤ未熟な病後の手の内。

ト左右へ分れ、よろしくあつて、此うち袖助の袴綻びし體、頼母、目を附ける。袖助、これを知らず

頼母　血氣盛りの其許へ、なか／＼拙者は及ばねど、少々疵を

袖助　ヤ、いづれへ疵を

ト身の内を尋ねる思ひ入れ。

頼母　イヽヤお客へ何しに疵を、それも拙者が　〽糸の亂れの苦しきあまり

袖助　衣の楯は

ト袴を見附け、縫ひたる朝顔の小柄を拔き取り、あと綻びる事。思ひ入れあつて

アヽ、綻びにけり……ヤ、垣に朝顔、覺えある

頼母　思はず不作法。

袖助　今は形見の

ト小柄へ思ひ入れ。よき時分頼母、件の刀の受取を落し置く。袖助、取上げて見て

仁王三郎、預かり置くとのこの一札。こりやコレ今の

頼母　その筆法は本目流、それを手形に抱へた妾。

袖助　すりや、その書き物を、妾の手形と

頼母　裾に縫つたる朝顔の、小柄の剣は仁王三郎、反古の手形は妾の賤機、彼れへ渡して即ち印形、その請け人も

ト袖助へ目を附け、件の書き物を懐中して

岩淵氏。

袖助　御亭主。

頼母　ゆるりとこれで

袖助　くつろぎませう。

ト唄になり、頼母、思ひ入れあつて奥へ入る。袖助、小柄を取つてヂッと見詰め、思ひ入れあつて

思へば〳〵。

トぢつとなる。この時、奥にて

月の　アイ〳〵、只今參りますわいな。

トこれを聞き、ちやつと懷中する。合ひ方になり、月の戸、針疊を持ち、出て來り、袖助を見て

お袴の綻びは、あなたでござりまするか。夫頼母が申しつけましてござりまする。サ、ちよつと縫うてあげませう。

袖助　これは奧方。腰元衆なりとお頼み申さうに、月の戸どのへ。どうして〳〵。矢張り此まゝ。苦しうござらぬて。

月の　イエ〳〵、左樣ではござりませうが、折角夫が申しつけました用事、致さぬ時には私しが叱られまする。ちよつとお脫ぎなされませ。直に縫うてあげませう。

袖助　それはあまりに恐れ入りまずるが、折角左樣に御意なさるを、辭退いたすも如何。然らばザッと縫うて下さりませうか。

月の　サア〳〵、これへ遣はされませいな。

ト袖助、捨ぜりふにて袴を脫ぐ。月の戸、取つて

只今直に縫うてあげまする。マア〳〵、一服召上がりませいな。

袖助　イヤモウ、隨分ザッとなされて下され。武骨な拙者、忽ち踏み破りまするて。ハヽヽヽ……時

月の　に奥方、承らうは、大岸どのには、妾をお抱へなされたとの事。いよ／＼、左やうかな／＼。

月の　ハヽ、成る程、この間召抱へました新參の女子、ありや賴母どのゝ妾でござりますわいな。

ト此せりふ云ひながら綻びを縫ふ事。

袖助　サヽその儀も承つてござるが、かゝる貞女の月の戸どの、その貞心なる女房を袖にして、素性も知れぬ妾狂ひ、聞いても身共は腹が立つ。斯樣に見えても、拙者、至つて女には淚もろい生れでござるて。

月の　成る程、御意なされますれば、どうやら左樣にお見受け申しますわいな。ホヽヽヽヽ。

袖助　イヤ又、拙者などが、其許のやうな貞女な女房を持ちましたら、朝も晩も引附けて居りまする。丁度此やうに引ッ附きまする。不調法ながら、御免なされませ／＼。

トもたれかゝる。月の戸、こなしあつて

月の　これはしたり、あなた樣と致したことが、女子を喜ばす事ばかり。ホヽヽヽヽ。この樣子では、あなたの內儀樣におなりなさる女中樣は、お仕合せな事でござりまするわいな……サヽよろしうござりまする。お召しなされませ／＼。

袖助　これは千萬忝ない。誠にお手を勞しました。エヽ、お慮外いたしました。

ト袴をはく。月の戸手傳ひ、紐を結ぶ。

さて、お內方、お覺えもござらうが、當春初午の祭禮でござつた。柳の馬場にて、御家中の內方とお連れ立ちなされ、摘み草をなされてござつた砌り、拙者お見かけ申して、大岸どのゝお內方と、詳しう承り、侍ひのあるまじき、その時より、叶はぬながらも戀着の心起りまして、折もあらばと、斯樣に認めまして

トあたりへ心を配り、懷中より封じ文を出し

今日お屋敷へ參るを幸ひ、持參いたしした。月の戸どの、よろしうお返事を、お願ひ申す〳〵。

ト件の文を月の戸へ渡さうとする。よき時分より水右衛門、下座より出て來り、窺ひゐる。

月の　これは萬五郎さまの、あられもない事仰しやりまして、主のござりまする私しに、困らすやうな御座興は、モシ、御免なされて下さりませ。不束者と思し召し、あられもない儀を、ホヽヽヽ惡洒落も人によりまするものでござりまする。

ト文を直ぐに戻すを、袖助、思ひ入れあつて

袖助　なにサ〳〵、惡洒落ではござらぬ。眞實其許樣へ

月の　イエ〳〵、座興も程がござりますわいな。

ト文を戻す。袖助、無理に渡さうとする。捨ぜりふにて立廻りのうち、思はず袖助が右の小指へ、ひどく觸ること。袖助、思ひ入れあつて

袖助　アイタヽヽヽヽ。

ト小指を押へる。水右衞門、目を附ける。

月の　どうなされました〳〵。

袖助　イヤ〳〵、拙者は右の小指を、少々怪我を致しましたゆゑ

月の　エヽ、右の小指が

ト思ひ入れあり

アヽ、こりや心中に、お切りなさんしたでがなござりませう。

袖助　なにサ、小指の尖を少々ばかり。

トこの時、水右衞門、窺ひ見て

水右　右の小指の尖の切れたは、もしや血汐の文言を、書いたる筆の筆勢も

ト最前の扇の歌の手蹟と比べ見る心。袖助、思ひ入れあつて

袖助　わりや足輕の赤堀源吾。血汐の文言書いたるとは。

水右　小指の尖のその怪我は、あなたはどうして

袖助　アノ、これか。

月の　成る程、小指も右の方。その切れ口も

水右　自分の怪我か。小指はなんで

袖助　サ、これは。

水右　どうか似寄りの

ト差寄るを袖助、左にて刀を抜き、我が手に右の小指を切るゆゑ、駈けよる。合ひ方。

月の　岩淵さまの

水右　この體は。

袖助　心中だ。

月水　エ。

袖助　この場に於て俄の心中。それで切つたるこの小指。

月の　して心中は何者に、なさる心で

袖助　即ちそもじに。

月の　エ、主あるわたしに
水右　岩淵さまの
袖助　屬魂惚れた、月の戸どの、それゆゑ切つたこの小指、只今爰で俄に切つた。小指を添へてこの文は、何卒そもじへ

　ト小指を添へて文を差出す。

月の　すりや附け文に、小指を添へて
水右　主あるあなたへ、岩淵さまのアノ附け文。
袖助　書いた文言、樣まゐる、う〳〵のにじり書き。武骨な身共が胸中を、大岸どのへ、ナ……サ、有りのまゝに仰せられても大事ない。命を的のこの附け文、小指を添へて月の戸どの、受取つてもらひたい。

　ト月の戸、こなしあつて

月の　心ありげなあなたのお文、指まで添へての心中は、聞捨てがたき色仕掛け。道なりませぬ事ながら。
水右　主ある御身でありながら、その文、あなたは

月の　受けぬも如何。岩淵さま、一旦わたしが

ト懐中する。

水右　貞女を破つて月の戸さま、いよ〳〵あなたは

月の　夫へ見するを御承知の、その上からは、何しに否とも。

袖助　それで拙者も、この身の安堵。必ず文は

水右　大岸さまへ、御披露なされて

月の　有無の御返事、それまでは

水袖　いよ〳〵、文は

月の　お預かり申しませうわいな。

ト三人思ひ入れ。月の戸、二品を懐中する。合ひ方になり、奥より主税之助出て來り

主税　ハツ、岩淵さまへ親ども申しつけましたるは、只今奥にて竹刀の稽古。あなた様にもお越しあつてよろしからんと、お迎ひながら、伺候仕つてござりまする。

袖助　折角御子息のお使ひ。然らば參上いたすでござらう。

水右　卽ち源吾は稽古場へ、岩淵さまを御案内。

袖助　月の戸どの
月の　萬五郎さま。
水右　萬事はゆるりと
袖助　源吾、案内。
水右　斯うお出でなされませ。

ト唄になり、主税之助附き、袖助は奥へ、水右衞門は平舞臺より下手の方へ入る。月の戸殘り、思ひ入れあつて

月の　指まで切つた岩淵どの、その指尖も何やら曲事。認め渡せしこの文の

ト文の封を切り、よく〳〵見て

さてこそ夫へ願ひの文言。證據は誓ひの

ト指を見て、こなし。奥、バタ〳〵と人音するゆゑ、ちやつと二品を懷中する。合ひ方になり、奥より、うつ野、葛籠を押して出てくる。これにお松附き、出て來り、うつ野を留めて

まつ　これはしたり、うつ野どの、わたしが葛籠を、どこへ持つてござんすぞいな。
うつ　お前の荷物は存じて居るがナ、今この中で、何やらガサ〳〵音のするは、大方鼠が入つてゐやん

せう。わたしが爰で追ひ出して、ぶち殺さうと思うてナ

ト何心なく蓋を明けるを、お松とめて

まつ　これはしたり、鼠が入つてゐやうがまゝ、生き物を滅相な。

うつ　そんなら捕へて猫にやるわいな。

ト立ちかゝるを、お松とめる。月の戸、この中へ入り

月の　コレ、うつ野、何をマア滅相な。よし鼠がゐやうが、命を取つてよいものか。常から云ひつけて置くのに。サヽ、其まゝにして、其方は奥へ行きや〳〵。

うつ　ハイ〳〵、左樣なら葛籠の蓋は明けますまい。モシ、月の戸さまえ、鼠とは申すものゝ、どうやら内にはガサ〳〵と

月の　ハテ、行きやらぬかいの。

うつ　ハイ〳〵、參じますわいな。

ト合ひ方になり、うつ野、ツン〳〵して入る。兩人殘つて

まつ　御覽じませ、月の戸さま、あのうつ野どのゝやうでもない事を、下賤な物の云ひやう。

月の　つけどなう云やるには、わしも大抵心遣ひしてゐるわいの……ほんに、それはさうと、いよ〳〵

其方は頼母どのに、奉公しやる事にきめたかいな。

まつ　ハイ、左様でござりまする。最前、私しが奉公人の請け状も、旦那様が御覧じて、御承知の上からは、随分お家に御奉公いたすでござりませう。

月の　そりやマア、身分が極まつて、わしも喜びまする。それについて此方の屋敷へ、今日はじめてござんした、あの岩淵さまを、其方は知らぬかや。

まつ　イエ／＼、左様なお方は存じませぬわいな。

月の　そのマア岩淵さまがいたづらな、わしへ附け文。殊に添へたるこの小指、この月の戸へ無體の心中。

まつ　エヽ、アノ、あなたへ文を

月の　下さんしたいたづら男。この文言を讀んで見や。

ト書き物を差出す。お松、取つて

まつ　左様なら、この文の文言を

ト見ようとする。

月の　アイヤ、夫へ見せたる其方の證文、その文言をアノわたしに

まつ　只今奥で旦那樣、印形せいと私しへ、お戻しなされたこの手形。御覽なさるゝお望みならば

月の　その附け文も、目立たぬやうに

まつ　畏まりました。

ト合ひ方になり、兩人、書き物を取替へ、月の戸は水右衞門の反古、お松は袖助の手紙を取つて、兩人思ひ入れあつて、讀む事あつて

月の　さてこそ最前夫の手より、出たるを怪しむあの男子、これぞ手蹟は本目流。

まつ　この附け文は心中に、切つた小指もお家へお願ひ。

月の　其方の荷物か知らねども、慥かに隱まふ葛籠の內は。

まつ　アヽモシ、これは形見の

ト葛籠へ思ひ入れ。

月の　明石のお宿へ願うた懷紙、その詠草へ落書きの

ト前幕に與三が持ち歸りし懷紙を渡す。お松取つて、よく〳〵見て

まつ　「うつし植ゑん、露の惠みをかけてまし

月の　忘れがたみの撫子の花に

まつ　ヤヽ、貞林さまのこの御手蹟……葛籠の内の

月の　忘れがたみの撫子に、お逢ひなされて

ト葛籠の紐を解かんとする。後にうつ野、窺ひゐて

うつ　何か内には

トつか〳〵と葛籠へかゝるを、お松捕へる立廻り。月の戸、有りあふ手水鉢を取つて、うつ野へかぶせる。途端に八ツの時計にかぶせて唄。うつ野、時計の身振り、兩人よろしく書き物を懐中するこなし。この唄をかり、道具鷹揚に廻る。

本舞臺、緣側附き高足の屋體。上の方に障子をたてたる中二階、下手に登り木の松、萩垣、技折り門。舞臺前に浪板、すべて奥座敷稽古場の體。袖助、郷助、莨盆を扣へ、見物してゐる。主税之助、竹刀、權平、槍を構へ、白囃子にて、兩人立廻り、下の方に水右衞門、扣へゐる。矢張り彈き流しの唄にて道具とまる。

ト主税之助、權平立廻り。袖助、これに目を附け

袖助　一眼二足、山本流の長柄落しの竹刀の構へ。こなたも後れぬ門人權平、一足引いてそくい附け。

それが鳥羽流。踏みこんで、合點か。

權平　心得ました。

水右　憚りながら若旦那、向つて待つは七分の後れ。嵩にかゝつていま一手。

袖助　一刀流の五輪くだれ。あまして矢張り柳の竹刀……それ〳〵、開いて右手へ突ッかけて

水右　油斷大敵、下段と見せて眞向透かさず

袖助　默れ、下郎め、いらざるおのれ、助言いたすか。

水右　アイヤ、お手筋を感心いたして。

袖助　それで思はず

ト權平、負け色になる。

コリヤ〳〵、權平、足が浮いたワ。一刀流の極意の一手。ほぐして直ぐに、附入れ〳〵。

ト權平、附入つて突いて行く。主稅之助、タヂ〳〵となりしが、また立直つて手許へ附け入り、權平が槍を打ち落し、足を搔いて打ち据ゑる。袖助堪らず、權平を突きのけ、落ちたる槍を取つて主稅之助へ突いてかゝる。水右衞門、主稅之助を圍つてキツとなる。袖助、槍を取り直して

赤堀源吾、わりや萬五郎が相手になるか。

水右　アイヤ、なか／＼あなたのお相手に、なるべき下郎でござらねど、まだ若年の主税さま、門弟中
　を打たれしを、御立腹にか、大人氣なくも

袖助　どうしたと。

水右　アイヤ、義を見てせざるは勇みなし。武術の本意も爰らでござる。

　　トこれにて正面の障子を明け、賴母窺ふ。

袖助　すりや其方が、見事身共の

鄕助　相手になつて打勝ちなば、自身出世は目のあたり。赤堀源吾、願うてもなき岩淵どのゝ

賴母　イヤ、あなたのお相手とは、その身を知らぬ。赤堀、扣へい。

　　ト合ひ方になり、賴母、よき所へ出る。袖助見て

袖助　こりや其許は大岸どの。

賴母　鵜の丸の一卷を御所持召さるゝ、岩淵どのはお客人、慮外あつては推擧の大岸、御前の手前相濟
　まぬ。悴は小兒の戯れ同然。矢張り捨て置き、あなたの御手練、太刀筋覺える好き幸ひ。

主税　願うてもなきこの身の仕合せ。稽古の後に、矢張り其まゝ。

水右　サヽ、左やう存じて源吾めが、且はあなたの御手練を、拜見願ふその爲に、憚りながらお相手に。

賴母　ナニ小差出た。其方が及ばぬお相手は、扣へて居らう。

水右　へイ。

袖助　アヽ、イヤ／＼、大岸どの、お待ちなされい。承ればあれなる源吾、身が手の内を殊の外賞美いたし、相手になつて見たいと申すが、して、其方が覺えた流儀は。

水右　ナニ私し等が、流儀も師匠もござらねば、誠に猿が人眞似の、見やう見眞似の無敵無法。へイ、私しは我流でござります。

袖助　アヽ、わりや我流か……コリヤヤイ、流儀を存ぜぬ者どもは、力や早速で行かうと思ふか。そこが譬へに云ふ通り、生兵法は大疵を受ける基だぞ。奥儀を極めた一刀流、この岩淵が手練の程、敎へてやらう。無明圓でも用意して、身共が相手にそこへ直れ。

主稅　某が名代に、岩淵さまのお相手に

賴母　源吾、然らば急いで支度いたせ。

水右　ハツ。

袖助　ドリヤ、腰骨へ敎へてくれうか。

ト白囃子になり、權平、竹刀をよき所へ置く。兩人、思ひ入れあつて、これより三味線入り白囃子に

て、袖助、水右衛門、よろしく立廻り。この試合ひを頼母、脇目もふらず、よく〳〵見極めゐる事。

兩人、立廻りよろしく、水右衛門危ふくなる。袖助、附け入つて竹刀を打ち落し、水右衛門をさんざんに打ち据ゑ、キッとなつて

手練の程、なんと骨身に覺えたか。

ト水右衛門、面目なき思ひ入れにて

水右　恐れ入り奉つてござりまする。

鄕助　よもやこれほど赤堀が、不覺もなか〳〵取るまいと、思ふに違ふこの體は

權平　流石は先生岩淵さま、手なみの程を鄕助さま、よく御覽じて置きなさい。

鄕助　エヽ、いま〳〵しい。

トしよげる思ひ入れ。

頼母　そりや最初より申さずとも、なんで源吾が岩淵どのに。一刀流の奥儀を極め、鵜の丸の一卷を、御所持なさるゝあなた樣、どうして手練に及びもなき事。この上ともに、隨分稽古に心を附け、上達なして又ぞろや、あなたのお相手……サ、重ねて不覺を取らぬやう、心を附けて、ナ、合點がいたか。

ト思ひ入れ。水右衛門、俯向く。頼母、こなしあつて

左様なれば郷助どのには、一巻所持の岩淵どの、殿へお目見得。役人中まで、御苦勞ながら

袖助　然らば拙者がこの身の有つき。雲津氏には、何分よろしう。

郷助　お屆け申して遣はさう。

ト門口へ來て

併し身共が世話いたす、赤堀源吾も今一度、立合つたなら今度はよもや

袖助　どうしました。

郷助　アイヤ……ドリヤ、お屆けに上がらうか。

ト合ひ方になり、思ひ入れあつて向うへ入る。袖助、水右衛門が面體に心を附けるこなしあつて

袖助　イヤモウ、申さずとも侍ひは、常々心掛けが大事でござる。劍術槍術諸流にわたり、一刀流の奥儀を極めた拙者でござれば、足輕づれが、何として〳〵。ハヽヽヽ。源吾とやら、さぞかし身内が痛むであらうな。

頼母　誠に貴殿の只今の御手練、太刀筋拜見いたす上は、お上へ推參。その節いよ〳〵御所持なさるゝ

袖助　鵜の丸の一巻は、卽ちこれに。

ト懐中より出し

頼母　城主へ差上げ、仕官の望み。

袖助　次手に居合す、これなる忰へ、拝ませたう存じまする。

主税　心易い儀でござる。内見いたさせませう。主税どの、身が側へ寄らつしやい。

袖助　有り難う存じまする。

ト側へ寄る。袖助、一巻を開かうとして

頼母　イヤ、身共は殊の外咽喉が渇いて参つた。大岸どの、お茶を一つ仰せつけられい。

まつ　差上げませう……新参の女子、お客人へお茶を持て。

ト奥にて

袖助　畏まりました。

ト合ひ方になり、お松、腰高の茶臺に蓋附きの茶碗を載せ、持ち出て來り

ハイ、お茶差上げませう。

ト差出する。袖助、取らんとして、お松の顔を見て、兩人思ひ入れあり

袖助　ア、コレ、身共は城主へ、ナ、仕官の望みの浪人者、名は岩淵萬五郎。ハテ、思ひがけない……

賴母　大岸どの、この女は、お召仕への腰元でござるかな。

袖助　左樣でござる。この程手前が召抱へましたる、手廻りの女子でござります。

すりや、この女子がアノ、噂ござつたお妾か。それに致せ大岸どの、御存じないかは存ぜぬが、ハテ、不吉の相ある女でござるな。たとへて申さば、憂ひの絶えぬ生れ性、云はゞ連れそふ亭主なぞが、遠國他國へ立越えて、男はあつても寡同然、始終は男ものたれ死。思ひの絶えぬ女の人相。

まつ　エヽ。

ト茶碗を取り落し、袖助が持つたる一卷へかゝる。袖助、急いでお松を引附け

袖助　不作法千萬、動きやアがるな、身が所持したる大切なこの一卷、すんでの事に煮茶をざツぷり、危ない事。掛替へもなき一卷へ、鈍相をひろいで濟まうと思ふか。女ながらも武家の奉公、心を附けろ、氣を附けろ。

ト扇にてさんぐに打ち

土性骨に、われもしつかり應へてゐろ。

ト突き放す。お松、思ひ入れあつて

まつ　只今あなたのお詞に、男はあつてもあり寡、後は夫に別れうと、仰しやつたその仰せ、それが悲しう身にしみ〴〵、情ないやら無念なやら、涙ばかりが先立つて

ト愁ひのうち、水右衛門、下よりお松が顔を見上げゐる。袖助賴母は水右衛門が素振りを窺ふ思ひ入れ。

賴母　これはしたり、あなたのお側で無禮の上、何が無念で不吉の涙。成る程、只今仰しやつた、これなる女子は愁ひの相。ハテ、爭はれぬ……サ、下がらぬか。

まつ　ハツ。

トつか〳〵と平舞臺へ下りる。袖助、思ひ入れあつて

袖助　女は不吉と云はれたら、こりやハヤ左様も思はうが、あれに扣へた赤堀源吾、身が面體をヂロヂロと、見守り詰めたる面がまへ。ハテ、誰れやらによう似た面差し。

水右　そりや何者に似ましたな。

袖助　慥か似寄りは近江なる、膳所の町醫の卜庵に。

水右　ヤ。

袖助　ハテ、其方はよく似たわえ。

水右　すりや、私しが、その醫者どのに。

袖助　瓜を二つに割らずと其まゝ。ハテ、世間には、これ程までに

ト思ひ入れあつて

して、其方は、なんで身共を

水右　アイヤ、あなたの御所持のその一巻、拝みたう存ずるゆゑ。

袖助　拝ませくれう。

ト懐中の一巻を出し、袱紗を取つて

「勝つとても高きをひすな古へも、勝つて兜の、緒をぞ締めける」……袱紗のうちに記せし詠み歌。

ト水右衞門、思ひ入れあつて

水右　その袱紗こそ先つ頃、沖津の驛にて失ひし

袖助　ヤ、覺えがあるか。

ト目を附ける。

水右　アイヤ、慥かに左様な一首の歌が

袖助　袱紗にあるのが何より正銘。

頼母　法臺院の門前にて、鞠ケ瀬流の手練の曲者、

水右　さてはその夜の

頼母　ヤ。

袖助　近く差寄れ。

ト差出す。

水右　有り難うござりまする。

ト縁下より差寄つて見上げる。お松は水右衛門に目を附け、窺ふ。袖助、一卷をサツと開き、見せる。この時、誂らへの合ひ方。皆々引ツ張りよろしく、水右衛門、一卷の筆法、親卜庵の筆蹟を見極める事。

袖助　どうだ、赤堀。わいらが見たとて正眞の、云はゞ盲目の垣覗き。文字が讀めるか。

水右　隨分讀めます。拙者が見覺え。殊にゆかしき親人の

頼母　アノ一卷の文字の筆法。

まつ　證據と思ふ一卷は

袖助　二つともなき誠の一卷。それにてとつくり拜いたせ。

ト思ひ入れ。薄ドロ〳〵にて、白蛇一疋現はれ、水右衛門が懷へかゝる。水右衛門これを知らず、袖助が一卷を見詰める。賴母、蛇の不思議を見て

賴母　ハテ、心得ぬ小蛇の不思議。一刀流の奥儀の祕書、鵜の丸の一卷こそ、鵜戸權現の神勅にて、白蛇來つて守護なすと、聞きしに違ふ岩淵どのゝ、所持の品には危ふげなく、側に居合す源吾が懷中、立去らずして這ひまとふ

水袖　ヤ。

ト兩人恟りして、袖助は手早く一卷を懷中する。水右衛門は白蛇をキッと捕へて

水右　流石は蟲けら、門違へ。

ト袖助へ打ちつけるを、キッと捕へて

袖助　ハテ、爭はれぬ白蛇の不思議。

賴母　聞きしに違はぬ上からは

袖助　よも疑ひはござるまい。

水右　誠に御所持は

袖助　正眞正銘。
まつ　すりや、一巻に
頼母　よもや相違も
水右　アノ、それが
　　ト立ちかゝるを、袖助、白蛇を後へ投げすて
袖助　取捨てろ。
水右　ハツ。
頼母　お客人。
袖助　案内さつしやい。
　　ト唄になり、思ひ入れあつて、主税之助お松は水右衛門へ心を殘し、下手へ、權平、めい〳〵思ひ入れあつて入る。頼母、水右衛門殘る。合ひ方。水右衛門思ひ入れあつて、奥の方へ走り行くを、頼母、ツカ〳〵と下りて來て立廻る。
頼母　氣色を變へて、源吾、いづれへ。
水右　眼前後れを取つたる赤堀、岩淵どのと今一應、眞劍勝負の御免を請けて

賴母　許しを受けて眞劍の、勝負と申す稽古に事よせ、岩淵討たんの心よな。
水右　アイヤ、全く以て。
賴母　イヽヤ隱すな、其方が働き、流儀を包めど岩淵と、稽古のうちに手覺えある、流儀は慥かに鞠ケ瀨流。奥儀を極めありながら、わざと打たれし太刀筋は、願ひある身か一通り、包まず隱さず、その敵

ト水右衞門、思ひ入れあつて

水右　ハツ。

ト平伏する。これより誂らへの合ひ方、こなしあつて

流石は勢州龜山の執權、大岸さまのお詞。いかにも拙者は大切な、この身に願ひござる者。されども旦那の御推擧にて、當お館へ有つく岩淵。それも所持する鵜の丸の
賴母　あの一卷は眞赤な似せ物。
水右　エヽヽ。して、誠の一卷を

トこの時、賴母、近く差寄り、小聲になつて

賴母　其方が所持して居らうがな。

水右　ナヽ、なんと。

頼母　隠せどその座に顯はるゝ、今の小蛇は汝が懐中。現在一巻持參の岩淵、怪しみなきはいよ〳〵似せ物。城主を僞はる不敵の曲者。それに引替へ赤堀が、正しく一巻持ちつらん。然らば殿へ推擧いたさん。返答あられよ、赤堀どの。

水右　さとくもお察しなされし上は、包み隠さんやうもなし。いかにも當家で御詮議ある、鵜の丸の一巻は、赤堀守護し奉る。さりながら、歌を記せし袱紗は正銘。沖津を立退くその砌り

頼母　ヤ。

ト思ひ入れ。

水右　誠の一巻、即ちこれに。

ト懐より一巻を差出す。

頼母　さてこそ違はぬその一巻、所持なす貴殿の人相骨柄、由ある武士と存ずる上、身に大望を抱きし樣子。口外なさねど、慥かに願ひも

水右　察しの通り拙者めは、敵を尋ぬる赤堀源吾。

頼母　さこそと存ぜしその身の大望。して仇討は主人の敵、又は兄弟、親の敵か。

水右　即ち拙者が實の親、烏滸がましく候へども、以前の家名は

頼母　ア丶コレ、姓名聞かぬその前方、他言いたさぬ

ト金打して

誓詞の金打。

水右　それにて安堵。して、一卷を差上げなば、この身の有つき。

ト水右衞門、思ひ入れあつて

頼母　及ばずながら御前へ取持ち。して、其許の本國家名は。

水右　拙者は即ち奥州棚倉、親ども事は藤田卜庵、江州膳所に町醫の世渡り。然るに同國守山の合の宿たる、馬淵繩手の並木に於て、親卜庵を殺害なし、鵜の丸の寫しの祕書、誠と心得奪ひしが、されどもまだしもその場にて、殘し置いたる血汐の文言。

ト懷中より前幕の果し狀を出し、腰に附けたる提灯を出し

家名はそれと記さねど、この文言に似寄りの手蹟。これを便りに詮議なし、仇討なさん拙者が胸中。正しく最前入り來る岩淵、父の手蹟の似せ一卷、所持せしからは、疑ひもなきその夜の曲者。

この提灯が手前の定紋。

ト開き見せる。頼母、思ひ入れあつて

頼母　紋は即ち藤の丸、内に田の字を記せしは、さては貴殿は

水右　同苗藤田

ト云はんとする。頼母、思ひ入れあつて

頼母　アイヤ、それにて最早拙者も承知。

水右　必らず御他言ござつては

頼母　他言せまじき今の金打。殊に最前岩淵が、座輿のあまり扇面へ、記せし手蹟も、どうやら似寄りの

ト引合せ見る事あつて

水右　さてこそ親の敵は岩淵。

ト立上がるをキッと留めて

頼母　アヽコレ、急く所でない。あの曲者は上を僞はり、似せ一巻を城主へ差上げ、仕官の願ひ。拙者も身晴れは今この時、誠の一巻御所持の其許、密かにお上へ推擧なさん。さすれば當家の御知行頂戴、事荒立てず岩淵を、館へ留め置き仇討の、願ひを立つるは近きにあり。氣遣ひ召さるな、

赤堀どの。

ト これにて暮れ六ツの時計鳴る。

水右　ありやモウ暮れ六ツ。

ト奥にて

月の　殿へお目見得、赤堀氏、衣服の用意は月の戸が

ト仁王三郎の袋の一腰を携へ、片手に手燭を持ち、月の戸出る。主税之助、廣蓋に衣服上下を載せ、

これを持つて出てくる。

水右　こりや御内室、御子息まで

月の　持參いたさす上下衣服。

賴母　召替へあつて、領主へお目見得。

主税　父が寸志のこの衣服

月の　まつた、これなる一腰は、この程求めし仁王三郎、これを帶して誰れ憚らず、即ち劍のこれ折紙

ト劍の預かり手形を渡す。

水右　もしや最前見掛けし刀屋、あの町人に。

ト云ひさま、書き物を見る。この時、上の中二階の障子を明け、お松、源次郎、窺ひゐる。門口へは
袖助、庭下駄にて出かゝり、窺ふ。水右衛門、思ひ入れあつて

こりやコレいつぞや江州にて、劍を預けて金子の借用。

月の　その書き物がめぐり〳〵て、此方の手に入つたれば、あなたのお恥辱

賴母　この場の者より外に存じた

水右　過分に存ずる。さはさりながら、正しくこれは良藥を

月賴　ヤ。

ト思ひ入れ、水右衛門、書き物を引裂き

水右　これにて安堵。

トこの時、時の鐘。

月の　遠寺の鐘は、お客のお立ち。

水右　然らば明朝、目見得の願ひ。

賴母　御前よしなに、後して敵の

袖助　ヤ。

ト切り戸を越さんとする。頼母押へて

頼母　こりや岩淵どの、いつの間にやら

袖助　お庭傳ひに切り戸口。すりや、あの者が

ト水右衛門へかゝるを

頼母　アイヤ、彼れはあなたを

月の　お見送りの役。

袖助　イヽヤ、それには及ばねど、お内方には最前の、文の返事を

月の　お聞き申すも、添へし小指の

ト出しかけて、頼母へちよつと見せる。水右衛門は袖助が右の指の疵へ思ひ入れあつて

水右　割符を合はす右の方、慥かに證據の血汐の文言。

袖助　何がどうした。

頼母　夜に入りました。源吾、灯の

水右　疾より用意も

ト血汐の文言貫きし提灯へ灯をつける。この灯にてお松源次郎は、水右衛門が面體を見覺える思ひ入

れあつて
まつ流れの影は、慥かに水右。
賴母　アヽコレ、水へ寫るは松ヶ枝に、泊り定めぬ
ト思ひ入れ。
月の塒の烏。
ト押へる。
袖助　アコレ、阿房烏の、うか〳〵物を、ナ
賴母　サ、源吾、あなたの
水右　イザ、お見送り。
ト提灯を差出す。袖助、キツと見て
袖助　ヤ、血汐の書き物、紋もその時
水右　覺えがござるか。
ト詰めよる。
賴母　アヽコレ。

ト押へろ。水右衛門、提灯を差出す。袖助、扇にて打ち落す。

月の烈しい風も

水右　ヤ。

ト思ひ入れ。お松源次郎、障子をシヤンと閉す。主税之助、袋入りの刀を水右衛門に差出す。途端、一度の仕組み。これを木の頭。

袖助　儘にしろ。

トこれをキザミにて、ひやうし獅子の太鼓にてツナギ、引返し。

幕

大詰　龜山城下仇討の場

役名‖大岸頼母。大岸主税之助。赤堀源五右衛門實ハ藤田水右衛門。雲津郷助。作助娘、お松。石井源次郎。岩淵萬五郎實ハ石井下部袖助。

本舞臺、三間の間、向う遠見に龜山の城。正面、石垣に土手構へ、並木の松。舞臺左右殘らず竹矢來打ちまはし、曾我八幡祭禮の當日、城主上覽の體。上の方に大名乘り物一挺、行列の供廻り大勢侍きゐる。賴母、上下大小にて、三方に鵜の丸の一卷を載せ、これを携へ、水右衞門、麻上下、大小、鄕助、主稅之助、上下にて引添ひゐる。行列三重に獅子の太鼓を打込み、引返して幕明く。

ト主稅之助、乘り物に向ひ

主稅　若殿樣へ申しあげ奉ります。今日は取分けて天氣快晴にて、御祭禮首尾よく調ひまするを申すは、お家御武運長久のじるし。おめでたう存じまする。

ト此うち始終、獅子の太鼓聞える。

賴母　若殿樣には、大手に於て兩社の神輿、御拜あるべき旨、仰せ出され、好き折柄、俄に推擧仕りし、お館の足輕赤堀源吾、鵜の丸の一卷殿へ差上げ、仕官の願ひ。さるによつて改名いたさせ、これへ召連れましてござりまする。

水右　一昨日より大岸どのゝ俄の推擧。拙者持ち傳へましたる鵜の丸の一卷、御城主御懇望と承り、差上げたく、願ひ御伺ひを立てしところ、お聞濟みあつて、御直參となし下され、家名も卽ち赤堀源五右衞門と、お指圖あり、高祿を賜はる段、拙者身にとり、いかばかりか、有り難き仕合せに

存じ奉りまする。この上は若殿様へ御師範の儀、仰せつけ下さりませう。

郷助　その儀は氣遣ひ召さるな。鞠ヶ瀬流の貴殿の御手練、御賞美あつて立身出世、御知行頂戴、おめでたう存ずる。

ト思ひ入れ。この時、向うバタ〳〵にて、袖助、剃立て鬘、大小にて、三方に鵜の丸の一巻を載せ、走り出て來り、人々に向ひ

袖助　待つた〳〵、大岸どの、暫くお扣へ下さりませう。

頼母　貴殿は先達て、拙者推擧いたせし岩淵どの。

郷助　お乗り物へ近附いても、最早遅まき、氣の毒千萬。この郷助が取持ちの、御足輕の赤堀源吾、所持いたしたる一巻が、正眞正銘。

袖助　イヤ〳〵、暫らく扣へさつしやい。この岩淵は先祖より、持ち傳へたる鵜の丸の一巻、差上げよとの御沙汰あつたも、大岸どのゝ詞を便りに、病中ながら月代剃つて、推してお目見得。是非とも身共がこの一巻、差上げまして御知行頂戴。して其許の御所持の品は、いよ〳〵誠の一巻か。

水右　お尋ねなうても誠の一巻、差上げましてこの身の有つき。

油助　イヽヤ誠の一巻は、身共が方より外にはない。それこそ眞赤な似せ物だワ。

賴母　然らば御兩所御持參の、その一卷は某が、とくと改め、その上にて

袖助　御不念なきやう、改めさつしやい。

ト賴母へ渡す。賴母、袖助が持り來りし一卷を開き、水右衞門も近寄つて見る事あつて

水右　さてこそこの程お屋敷にて、見極めしその一卷。拙者が親ども某へ、隱して内々寫せし筆法。

袖助　何がどうした。

賴母　いよ〳〵貴殿の親御の手蹟か。

水右　相違ござらぬ、親どもが、手蹟の一卷所持といひ、いつぞや手に入る血汐の文言。

ト果し狀を出す。

賴母　昨日屋敷で引渡せし、この扇面の手蹟と同筆。

ト前幕の扇を出して合はせて見せる。

水右　かゝる證據の出る上は、親の敵に違はぬ其方、サア尋常に、名乘つた〳〵。

袖助　待て〳〵。その一卷を似せ物と、吐かすばかりか身共まで、敵呼はり、何が敵だ。

水右　吐かすな其方、覺えぞあらん。親人藤田卜庵を、討つて立退き懷中の、一卷までも奪ひ取り、それを囮に身の有つき、願ふの其方。似せと知らざるうつけ者。誠といふは赤堀が、差上げたるが

正眞正銘。

袖助　そんならこれなる一巻は、おのれが親の手蹟にて、寫し置いたる似せ物とや。さは知らずして今日まで、城主へ差上げ立身と、思ふに違ふ似せ一巻、察しの上は包むに詮なし、いかにも汝が親卜庵、馬淵縄手で討ち果したは、斯くいふ岩淵萬五郎だワ。

水右　さてこそな……親人の仇敵、立上がつて勝負なせ。

頼母　討つ討たるゝは天運次第。

郷助　似せを誠と僞はる岩淵。者ども、彼れを取逃がすな。

侍皆　ハッ……動くな。

ト袖助を六尺棒にて圍む。

頼母　一巻似せと相極まり、赤堀氏の差上げし、誠の一巻、若殿へ、悴、急いで御覽に入れよ。

主稅　然らばこれこそ誠の一巻。

ト乘り物に差寄り

これこそ誠の鵜の丸の一巻。イザ

ト乘り物を細目に明け、中へ差入れろ。

頼母　御家來赤堀源五右衛門、若殿樣へお目見得、お詞下し置かれませう。

ト乘り物の内にて

源次　大殿懇望なされたる、劍術の秘書、鵜の丸の一卷、慥かに落手いたしたぞ。

水右　有り難う存じ奉りまする。

袖助　思へば大岸、表裏の武士。

ト頼母へ立ちかゝらんとする。侍ひ取り卷く。

侍皆　動くな。

頼母　お目見得首尾よく相濟めば、赤堀岩淵、この場に於て敵討。御兩所、左樣心得られよ。

水右　親卜庵が仇討御免、これも偏へに大岸どの

頼母　殿より賜はるお墨附。

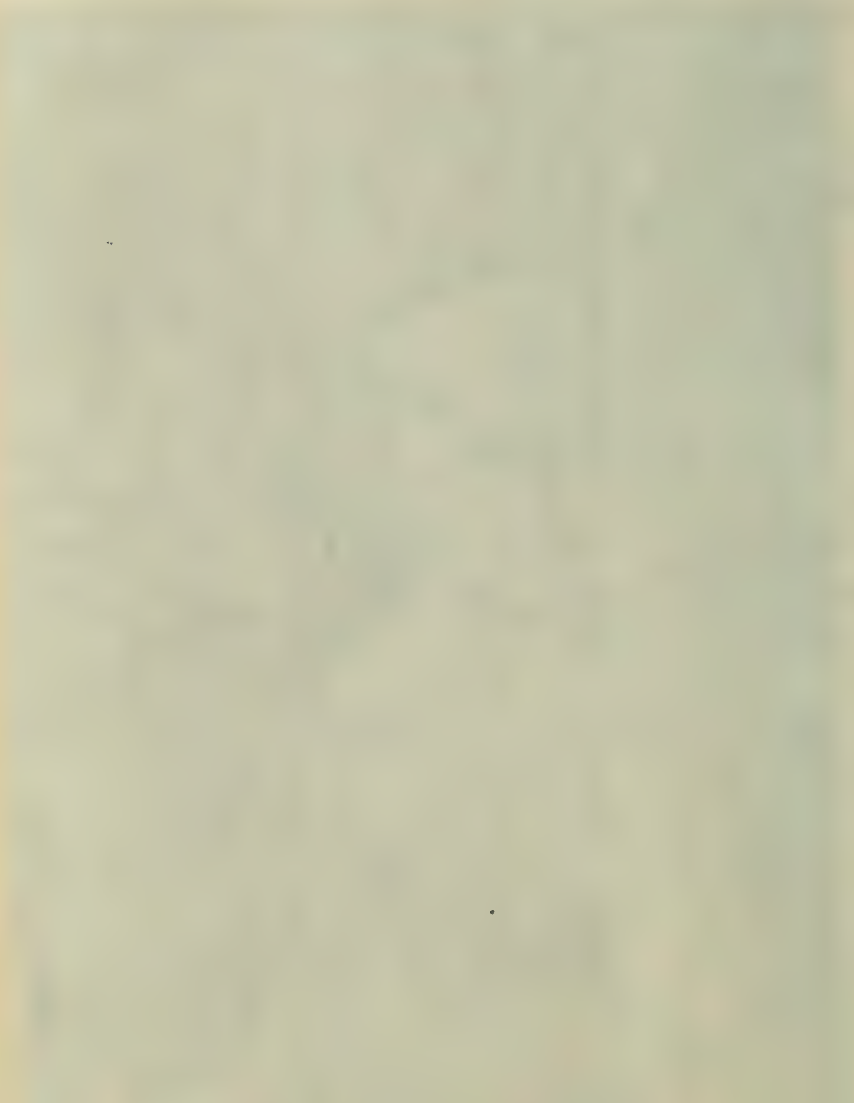
ト懷中より立て文を出す。

水右　冥加至極もなき仕合せ。

主税　イザ、お目通りに。

水右　ハッ。


松本幸四郎
市川團十郎
豊国画



ト主税、思ひ入れあつて、乗り物の戸をサツと明ける。内より源次郎、蝙千鳥を交ぜたる裾模様、丸に井筒の紋付きの振り袖、裾を高く括り、襷、白鉢巻き、大小にて、件の一巻を持ち、ツカ〳〵と出て

源次　石井に傳はるこの一巻、再び戻らせ給ひしか。忝い。

ト これにて水右衛門、郷助、悔りして

郷助　ヤ、若殿なりと思ひの外

水右　丸に井筒の紋附きにて、石井に傳はる一巻とは、合點のゆかぬ今の一言。

頼母　尋ねに及ばぬこの幼子、腹を貸したる母親は、疾よりこれへ呼びよせ置いたり。急いでこれへ。

ト物蔭にて

まつ　ハア。

ト鼓の合ひ方になり、お松、紅絹の鉢巻き襷、凛々しく、千壽院の刀を差し、走り寄つて

石井一家に仇なす藤田水右衛門、この繪姿に面體恰好、寸分違はぬ上からは、名乗り合はして勝負なせ。

ト繪姿を出して引合はせる。

水右　ヤヽヽヽ、女はこの程大岸どの、召抱へたる新參者。殊に駕籠にて若殿と、名乘りし小兒も共共に、我れを目がけて敵呼はり。心得違ひか。石井一家の者どもを、討ちたる覺え、曾てない。

まつ　ヤア、卑怯未練の水右衞門、いつぞや鏡の宿に於て、父さんに毒を與へて立去りし、跡に殘りし受取書。恨みの鮫鞘渡せしに、いよ〳〵違はぬ其方の素性。身は賤しくも源之丞さまの、お情うけし明石のお松。夫の敵、親の仇、實名名乘つて勝負いたせ。

水右　ヤア、又しても敵呼はり。身共が親の敵は岩淵。それゆゑ賜はるこの墨附。

ト出す。

賴母　それも素性を探らん墨附。

水右　何がなんと。

ト開き、恟りして

こりやコレいつぞや沖津にて、後家白綾が色香に迷ひ

賴母　その時渡せし御免の御書。石井右内は師弟のよしみ、大岸これにて檢使の役。誠の武士の魂ひあらば、名乘り合はして勝負なせ。

水右　すりや大岸は某が、親卜庵の敵討、斯樣々々と僞はつて、爰まで誘き寄せたるよな。よし名乘

るとも前方に、身が親討つたる、岩淵、おのれ。

ト立ちかゝる。

鄕助 身共が助太刀。

ト袖助へかゝる。白囃子になり、立廻りよろしく、居合はす侍ひ、兩方より袖助へかゝるを、これと見事に立廻つて、左右へ投げる。この途端に袖助、上下衣裳すつぼり脫げて、奴の形。立ちかゝる鄕助を引敷き、キツとなる。

水右 ヤ、岩淵と吐かせしは、下部姿の二合半。さてはおのれも

袖助 播州明石の石井家に、草履摑みの折助へ、斯う〳〵せよと御夫婦の、お指圖受けて身のまはり、衣服上下大小まで、大岸さまの召し下ろし。借り着の袂行丈も、身巾も狹き捻切りの、袖助といふ奴らさ。馬淵繩手の非人小屋、似せ物持參の卜庵が、敵となつて惡人の、我が子の命を助けん爲、わざと討たれし老人が、面體源吾に生寫し、さてこそ尋ぬる藤田ぞと、月の戸さまへ內々にて、願うて入れ置く妹のお松、鏡の宿にて死せしと僞り、荷物に忍ぶ若旦那。夜は劍術竹刀の稽古。その大恩ある御方へ、附け文なりと見せたるは、この身のあらまし記せし願書。その上いつぞや沖津にて、拾ひし袱紗を見ると其まゝ、合點ゆかざるその顏色、いよ〳〵敵に違ひはあるまい。只この上は大岸

さま、女子供の助太刀を、お許しなされて下るやう、ネイ〳〵、仰せ附けられ下さりませ。

トきつとなる。

頼母　天晴れ忠義の下部袖助、その心底を推量なし、女子供の助太刀は、身共が許す、急いで支度。

袖助　すりや、下郎めに助太刀を……妹、聞いたか。若旦那、もうこれからは千人力だぞ。

トきつとなる。

水右　さては我が親卜庵を、討つて立退き果し狀、殘し置いたも計略にて、この赤堀に敵を覘はせ、龜山領地へ誘きよせ、實名聞いたその上にて、石井が敵を討たせんと、淺き手立に落入つたか。思へば思へば、エヽ、口惜しい。斯くなる上は包むに詮なし。いかにも藤田水右衞門とは、おれが事だワ。

皆々　さてこそなア。

水右　大人氣なくも根を絶つて、枝葉を枯らす。覺悟なせ。

袖助　何を小癪な。曾我八幡も、力を添へて易々と

源次　討たいで置かうか、水右衞門。

頼母　急いで本望。

三人　ハツ。

水右　うぬら、寄つたら

ト拔打ちに切りつける。袖助、立廻つてキツとゝまる。これより祇園囃子になり、並木の向うを花車幟、練り物の笠鉾、長柄、その外いろ／＼の造り物、東の方より南の方へ引取る。尤も此うち、祭りの鳴り物よろしく、源次郎お松、水右衛門と花やかなるタテ。鄕助は水右衛門に目を附けゐる。侍ひ大勢、棒にて圍ひ、竹矢來の向うは見物の仕出し黑山の如く押合ひゐる。立廻りよろしく、お松、手を負ひ、水右衛門、源次郎を引ツ提げ、既に危ふくなる。袖助、飛んで入り、水右衛門へ切りつける。兩人、早めたる鳴り物にて、よろしくあつて、水右衛門を一太刀切る。タヂ／＼となるを、源次郎、お松、走り寄つて白刃を振りあげる。袖助、詰めよる。鄕助、立ちかゝるを、主稅之助引附ける

袖助　石井のお家へ仇する藤田。

まつ　今ぞ本望。

三人　覺えたか。

水右　エヽ、殘念な。

賴母　天晴れ手柄。

主税　めでたい〳〵。
三人　エヽ、忝い。
郷助　うぬを。
　　　トかゝるを袖助、キッと引附け
袖助　先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し

鬼若根元台（おにわかこんげんぶたい）

鬼若根元臺

美濃國關川の場

役名――源の牛若丸。鬼界ヶ島の海女、千鳥。龜王丸。關原與市。晒屋、次郎八。鏡の宿の長九郎。庄屋、高右衛門。鏡の宿の遊女、染川。鬼門の喜兵衛。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、松の吊り枝。下の方に新關を見せ、境木の傍示、これに東横關西横關と記し、正面には在郷宿の火の番屋、藁葺きに仕立て、左右掛け稻。番小屋の前に蓆を敷き、繩を張り、高札を立て、心中の男女見せしめの仕置き場。すべて美濃の國海道端の景色。馬士唄、念佛太鼓にて幕明く。

ト爰に喜兵衛、廣袖の小袖、五十日鬘。側に染川、宿場女郎の拵らへ。兩人とも一つ着にて素肌、腰繩にて、蓆の上に坐りゐる。上の方に與市、野袴、ぶッ裂き羽織、大小、檢使の役、床几にかゝり、高右衛門、庄屋の拵らへ。二人の側に仁太、非人の親分。非人二人、黑羽織の侍ひ三人、突棒、刺

又を持ち、扣へゐる體。左右より思ひ／＼の仕出し旅人、ワヤ／＼と出て來り、件の二人を捨ぜりにて見物する體。此うちに次郎八、お光の子役の手を引き、おづ／＼と出る。

侍ひ　何者ぢや、囚人へ近寄るな／＼。

次郎　ヘイ／＼、私しは、お願ひの者でござりまする。

高右　コレ／＼、貴樣は次郎八どのではないか。

仁太　何の御用でござりますか。今のうちは叶ひませぬ。片寄つてござりませ／＼。

與市　イヤ、苦しうない……コリヤ町人、この者は喜兵衛と申し、無職暮らしの町人、鏡の宿の買ひ女染川と相對死の科によつて、斯くの如く諸人に面を晒させ、非人の手下に下さる二人。願ひの筋は何事ぢや。コレ、申せ／＼。

次郎　ハイ／＼、外の儀でもござりませぬ。」これに居りまする二人の者、今日お引渡しとの事。この者二人の仲へ、出來ましたるこの娘を、私し里へ引取りましたる、その里親にござりまするが、どうぞ相成りませうなら、あの喜兵衛に面談仕りたうござりまする。何卒その儀を、ヘイ／＼、お願ひ申しあげまする。

與市　すりや、あの者の娘を預かる里親とな。聞き届けた。あれへ參つて面談いたせ。

次郎　へイ〱、それは有り難うござりまする。御免下さりませ。

ト仁太、世話して次郎八を二人の側へ連れゆく。次郎八、喜兵衛に向ひ

コレ、喜兵衛どの、こなたは〱、この染川に馴れなじみ、女郎を姙ませ、産み落したこのお光は、藁の上から、わしがこれ程に育てたぞや。それに貴様は、里扶持もろく〱寄越さず。その上爰にゐる染川と二人、死なうとして此やうに、世間の人に面を晒し、揚句の果は非人になるとの事。それでは里扶持は、どこから寄越しますよ〱。イヤサ、誰れが里扶持を寄越しますよ。

ト腹立てゝ云ふ。二人は氣の毒なる思ひ入れにて

喜兵　イヤモウ、わしが不埒でお前にまで、苦勞を掛けましたて。

染川　云ひ譯もない事ばかり。それにお前は、よくマアお光を連れて、逢ひに來て下さんした。コレ、お光、てまへの爲には母さんだよ。爰へ來て、顏を見せや〱。

トだん〱と近寄る。お光怖がり、次郎八に縋る。

喜兵　成る程、お光は、大きくなつたな。

次郎　コレ〱、そんな事を云ふと、お光が怖がるわな。コレ、二人ながらよく聞くがよい。どうでこの後里扶持は、寄越すまいと思ふから、コレ、斯ういふ話しだ。あの百姓の久作どのが、拾ひ子

の久松と、お光と、後々は夫婦にしてやりたいとの事。どうで貴様達は非人になる身分、云ひ分ないとは思へども、實の親ゆゑ聞合せに來た。サ、善いか惡いか、いま返事をさつしやい。

ト問ひかける。兩人、思ひ入れあつて

喜兵　イカサマ、わし等は二人ながら、遠國非人になる身を以て、子があつたとて、足手まといにこそなれ、末々なんの

染川　それだといつて、どこに住まうが、娘だもの。ならう事なら、わたしが育てゝ

次郎　コレ／＼、可哀さうに、子供のうちから乞食にする心か。エヽ、こなた衆はの。

染川　サ、さうではないが、實の娘を、どうも他人に

喜兵　これサ、どうするものだ。てまへもおれも若い同士、娘の二人や三人は、この上出來るワ。欲しがる人があらば、やつてしまへ／＼。云はゞお光が爲だワ。

ト云はれ、染川、思ひ入れ。

次郎　アヽ、そんならアノ久作が子、久松が嫁にやりますぞ。よしか／＼。それでお光も、浮みあがるといふものだ。ヤレ／＼、われは仕合せ／＼。てまへばかりは、乞食にはせぬぞよ。

トお光の手を引き、出て來る。

與市　然らば用事は相濟んだか。

次郎　へイ〳〵、有り難うござりまする。解りましてござりまする。

仁太　アヽ、そんならその子は、あの二人の娘かえ。いゝ子だね。このやうな子があるのに、死なうといふは、誠に死神の見込みでござります。

高右　コレ〳〵、必ず親の眞似をしまいぞ。ハテサテ、いゝ子でござるわいの。

次郎　イヤ、庄屋樣、お前にも少々用事がござる。モシ、いゝ相談、耳を出しなさい。

ト高右衞門に囁く。思ひ入れあつて

高右　イヤ、それは奇妙々々。藤八藥も及ばぬ話し。此方も奉公人の欲しい最中。貴樣、賴みます。

次郎　よし〳〵。今に連れて參りますから、その奉公人を賴みます……サ、お光、內へ行くぞ。

みつ　もう歸るのかえ。

次郎　オヽ、歸るのだ〳〵。

ト　お光の手を取り

ハイ〳〵、お役人樣、有り難うござります。お世話になりました。

トお光を連れ、行かうとして、思ひ入れあつて

コレ〳〵、喜兵衞、今のやうに貴樣と、お役人樣の前で約束したから、もう〳〵間違ひはないと思はつしやい。お光を連れて行くと、久作どのゝ方へ養子合せ、久松の末は女房。てまへも喜べほんの二人は乞食になるワ。併し、この子が出世したら、大方その時は、ほんの親だなんぞと云うて、無心合力に必らず來さつしやるなよ。きつと斷わりました。ハイ、御免なされませ。

ト馬士唄になり、お光の手を引き、息せきと向うへ入る。バタ〳〵になり、向うより長九郎、女郎屋の亭主にて、尻からげ、鉢卷をしめ、直ぐに舞臺へ來る。

仁太　コレ〳〵、お役人樣の御用廻り。扣へさつしやい〳〵。

長九　ハイ〳〵。

ト鉢卷を取り

そのお役人樣のお出でと存じ、お知らせに參りました。ヘイ〳〵、大變が出來ました〳〵。

トうろたへる。皆々驚ろき

與市　コリヤ〳〵、其方はこの海道の遊女屋、美濃赤坂の長九郎ではないか。

長九　左樣でござりまする。お訴へ申しまするは、私し抱への青墓太夫が、家内の女郎を皆引揚げ、鏡山の巖窟へ、女郎ばかりが閉ぢ籠り。それを此方へ引返すは、この者ならではあるまいと、薪屋

安六と申す男、女房も共に呼びよせて、その安六に申し含め、鏡山へ遣はさんと、その者の女房を、安六が手柄次第、その一件のお役人、大部さまへ差上げまして、あなたの方で女房は人質、この方へ留め置けと、大部さまの計らひにて、私し方へ差置き、その相談の最中に、今朝未明にその安六を、何者やら揚げ玉に致しました。これも大方青墓太夫が、致した業と存じられます。

與市　すりや、その安六もろともに

長九　サア〳〵、まだござります。抱への女郎は殘らず鏡山へ閉ぢ籠り、誠に跡はどうせうと存じたところ、モシ〳〵、お聞きなされませ、鏡山の巖窟に、住居いたした盗人が、一人も殘らず私しが宅へ仕掛けまして、女郎と盗人入替へに仕ると、私しが内は盗人の、寄せ場と罷りなりまする。ヘイ〳〵、この儀をお願ひ申しまする。

仁太　イヤ、それは大變でござりまするな。併し、お前の見世を、盗人にお讓りなされましたか。……いよ〳〵それなれば、御祝儀をお貰ひ申さねばなりませぬぞ。

長九　置きやァがれ、まだ仕切りどころではないワ。

高右　その上平家のお侍ひ、永井大部さまが、惡源太とやらを討手のお役で、鏡山の宿内に、御逗留でござりまする。

與市　コリヤ、長九郎、其方は旅籠屋に於て、遊女を抱へ置くはよいが、盗人を抱へ置くは言語同斷、
アヽ、不埒であらうぞ。

長九　ヘイ〳〵、私しも左やう存じまする……イヤ、まだ申しあげる儀がござりまする。コレ〳〵、

ト懐中より袱紗包みの印を出し

彼の青墓の太夫が住居、夜な〳〵光りがさしますゆゑ、これは不思議と、土を穿つて尋ねました
ところ、此やうな物がござりました。

ト雲龍の印、白木の箱入りのまゝ差出す。與市取つて、思ひ入れあり

與市　こりやコレ正しく源家の重寶、無くて叶はぬ雲龍の印、察するところ、討死なしたる太夫之進朝
長が最期の砌り、隱し置いたに極まつた。こりや好い物を其方、掘り出したな。

長九　左樣でござりますか。成る程、只の品ではござりませぬて。

高右　して、この者どもは、いよ〳〵今日、非人の手下に。

與市　これにて卽ち非人どもへ相渡す。宿役人、左やう心得てよからう。

高右　畏まりました。

ト仁太手傳ひ、喜兵衞と染川を、よき所へ引出し、繩を解く。

與市　其方どもゝ存じの通り、源氏の餘類を詮議のため、新たにしつらふこの新關。もと怪しき者と見たなれば、吟味の上にて通しくれん。迂闊に通路は叶はぬぞ……コリヤ、兩人の囚人、この上ともに、心得違ひのなきやうに、非人の交はり致してよからう。

喜兵　エヽ、有り難うござりまする。

與市　長九郎、其方には用がある。奥へ參れ……者ども。關所を堅く警固いたせ。

侍ひ　ハア。

ト時の太鼓になり、與市、侍ひ、長九郎、高右衛門、思ひ入れあつて關所の内へ入る。仁太と喜兵衛染川殘つて

仁太　ヤレ〳〵。喜兵衛どの、相濟みまして、めでたい〳〵。併し、これからは仲間、二人ながら、隨分ともに稼ぐがいゝぞえ。

喜兵　そりやモウ、合點でござりますが、誠に藝なし猿のこの喜兵衛、古木か紙屑を拾ひに歩くが精々だて。

染川　わたしも三味線は少つとは彈けど、肝腎の聲が惡いから、流しても歩かれまいし、なんぞ女の手輕い仕事はあるまいかえ。

仁太　これサ〳〵、聲が惡いといつて、三味線さへ出來れば、隨分いゝぢやァねえか。マア、何にしろ外の頭手合ひにも引合せよう。

喜兵　さうして下さい。わしも染川も、當分はお前方の見習ひだ。何かとお世話になりやす。

染川　お前方の仲間へ入つて、商賣に取りついたら、喜兵衞さん、先刻の娘のお光を、お前、貰うて來なさいな。

喜兵　エヽ、打ッちやつて置け。娘の事より、此方の納まりが肝腎だワ。

仁太　さうサ、その氣で稼ぐがいゝ……ドリヤ、番小屋を片附けて

ト小屋の菰垂れを下ろす。

染川　そんならお前、今から二人を

喜兵　頭、賴みますよ。

ト四つ竹の合ひ方、三人、捨ぜりふにて關所の内へ入る。直ぐにてんつゝになり、向うより次郎八、海女千鳥の手を引ッ張り、出て來り、花道にて

千鳥　コレ〳〵、こなたは何と云ひめすぞ。わしが逢ひたう思ひ申す、少將さまの所へ送りこんでくれめすかよ。

次郎 オヽ、くれめす〳〵。その上で、その少將にも逢はせて、それから又おまへを、結構な所へ御奉公にやつて、結構な着物を着せて、よい身の上にするワ。嬉しいか〳〵。

千鳥 やアれ〳〵、そんな身になり申すかえ。それより少將さまに、行逢ひたうござり申すよ。

次郎 承知ぢや〳〵。誰れが何と云はうとも、私しはあの次郎八さまが伯父樣でござりまする、と云ふものぢやぞ。サア〳〵、來やれ〳〵。

と鳴り物にて舞臺へ來る。關所より與市、家來、出て來り、關所へかゝるを留めて

與市 コリヤ〳〵、其方は最前の町人、女を連れて新關へ、身許が知れねば通す事は、叶はぬぞ〳〵。

次郎 ヘイ〳〵、この女は、なんでござります。これは私しの娘でござります。私しは伯父でござります。

與市 左樣か……コリヤ、女、それに相違ないか。

次郎 ヘイ〳〵、それに相違ないさうにござりまする。

與市 ヤイ〳〵、おのれ、何を申す。此奴、怪しい事を申すな。

千鳥 アヽモシ、そな殿樣、わしさァ遠國から參つて、船さァ着いたで上がりめすとて、はぐれ申した少將さまなう、逢はさつしやい〳〵。

ト與市とせちがふ。悄りして

與市　ヤイ〳〵、此奴、器量はよいが、申す事は解らぬワ。少將とは何の事ぢや。ヤイ町人、少將とは何の事ぢや〳〵。

次郎　サア〳〵、私しも解りませぬが、少將とは、大方酒の好きな、赤い河童の事でござりませう。

與市　たはけ面めが。それは猩々の事だワ。して、女は、われが身寄りに相違ないか。

次郎　ハイ〳〵、左樣でござります。殊にこの女が私しに、宿場の勤めを頼みますゆゑ、その相談を、旅籠屋衆へ。

與市　コリヤ〳〵、女、左樣か〳〵。

千鳥　少將さまなう、逢はさつしやりませ〳〵。

トばかり云うてゐるゆゑ

與市　これはしたり、少將々々とばかり申して、一向に解らぬわえ。こりやどうでも怪しいわえ。二人とも留め置いて、吟味せねばならぬ。サ、係りあひの町人、これへ來い〳〵。

次郎　ハイ〳〵、參りは參りませうが、私し毛頭この女を賣りまして、あの庄屋どのと山分けに致しませうとは存じませねども、あの庄屋どのが

ト解らぬ事を云ふ。

與市　ヤイ〳〵、誰れが左やう申した。

次郎　へイ〳〵、慥かあなた様が

與市　たはけ面め。此奴、どうでも怪しいわえ。家來ども、召連れ参れ〳〵。

侍ひ　サア〳〵町人、参れ〳〵。

次郎　イエ、私しは

侍ひ　サア〳〵、参れ〳〵。

次郎　イエ、私しは

ト花道の方へ跡すさりに行くを、家來追ひ廻すゆゑ「イエ私しは〳〵」と向うへそれなりに入る。

與市　イヤ、彼奴狂人ぢやも知れぬ……コリヤ、女、わりや少將とは何の事ぢや。

千鳥　少將さまなう、逢はせてくれ〳〵。

ト與市、やう〳〵解りし思ひ入れ。

與市　アヽ聞えた。女が物ごし、薩摩訛り。少將と申すからは、いつぞや流罪の丹波の少將、それを尋ねる島の女か。さうか〳〵。

ト これにて千鳥うなづく。

さうであらう／＼。やう／＼知れた島の海女、それにしては綺麗な生れ。われが頼みの少将に逢はせるほどに、コレ／＼、身共にも少と、逢はせてくれ／＼。

ト千鳥が手を取り、しなだれる。千鳥、手荒く振り切り、腹立ちし思ひ入れ。爰にて雨の音、烈しく聞える。

南無三、降り出したな。併し、濡れるといふは縁喜がよい。少将がはりに少々ばかり。

ト逃げる千鳥を追ひ廻すとて、懐中の雲龍の印を落す。千鳥取って

千鳥　こりや何といふ貝だなア。

與市　コレ／＼、それは貝ではない。源氏方にて大切に致す、雲龍の印といふ物だワ。

千鳥　くれめすかや。

與市　イヤ、どうして／＼。併し、それが欲しくば身共に爰で、コリヤ、少々ばかり／＼。

千鳥　少将さまに

與市　逢はするほどに、少々ばかり

ト寄るゆゑ千鳥、件の印を投げんとする。

アヽ、コレ〱、それを必らず麁末にするな。
ト藁小家の前に引附け
印が欲しくば、この藁家で
ト千鳥に抱きつく。この時、菰垂れの内より白刃出て、二人を一度に突き貫く。兩人「ワッ」と苦しみ、與市倒れる。千鳥、逃げんとするを、菰垂れの内より手を出して、千鳥を引附けて引込む。これにて鳴り物變り、時の鐘、凄き合ひ方、この見得にて、ヂリ〱と靜かに道具廻る。
本舞臺、件の小家の後を見たる道具、矢張り掛け稻、杉の吊り枝。爰に牛若丸（千鳥と早變り）振袖を帶に挾み、件の印を咬へ、吹替への千鳥を抉りゐる見得にて、道具とまる。
ト雨の音烈しく、牛若丸、思ひ入れあつて
牛若 志賀の里より近江路まで、人目忍びて間道を、窺ひ來りしこのあたり、俄の時雨をいとはんと、藁小家破つて雨宿り、源家に傳はる雲龍の、印を爭ふ樣子と聞き、所持する曲者貫きしに、居合す女がこの樣子。思はぬ殺生。南無阿彌陀佛々々々々々々々。
ト回向の思ひ入れ、この時、手負ひの與市、よろぼひ出て牛若丸を見附け

與市　ヤ、おのれは正しく

牛若　其方は關原

與市　與市が手柄に

ト寄るを、牛若丸立廻つて、與市を見事に切る。この時、咬へし印を落す。血汐かゝりし穢れにて、薄ドロ〳〵。鳴り物變り、上の方、掛け稻を引切り、龜王丸、旅虚無僧の形、鼠繻子やうに仕立て、草鞋にて、綺麗なる包みを擔ぎ、尺八を持ち、天蓋をあげて顏を出し、思ひ入れあつて舞臺へ出て、件の印を取上げる。牛若丸、窺ひよつて手をかけ、立廻り。この時又も牛若丸、懷より虎の卷を落し、件の印は二人して奪ひ合ひ、正面にて差上げ、キツとなる。この時、後の小家より、喜兵衞、顏を出し、窺つて、件の印を奪ひ取る。牛若丸、龜王丸、探り寄つて、虎の卷に兩人手をかけ、左右へ引くゆゑ、バラ〳〵とほぐれる事よろしく、眞中にて引切り、兩人の手へ半分づゝ納まる。喜兵衞、印を取つて花道の方へ行く。よき時分、染川、後より出かゝり、この中へ交らずに喜兵衞を尋ねる心にて花道へ行き、喜兵衞に行きあたり

染川　オヤ

トこの聲に舞臺の兩人、一巻のちぎれを懷中する、途端一度に木の頭。染川、窺ひ見て

エヽ、來なさいな。

ト喜兵衞の手を取る。三方見合つて、本釣り鐘の音きこえ、キザミよろしく、ひやうし、　幕

幕の外、染川、せり立て〳〵、兩人向うへ入る。

三圍土手の場

淨瑠璃　道行浮塒鷗　清元連中

役名――油屋娘、お染。同丁稚、久松。同番頭、善六。庵崎の百姓、久作。手代、庄八。飯炊き、ます〳〵權兵衞。久松云ひ號け、お光。猿廻し、山谷の桃太。紙屑拾ひ、鬼門の喜兵衞。

知らせにつき、向う揚げ幕の内にて、迷ひ子の鉦太鼓聞え。直ぐに雨車、佃節になり、揚げ幕より庄八、町人、股引、油屋と書いたる弓張りを持ち、町人二人、鉦太鼓を叩き、棒を持つて出てくる。東の口より軍兵三人、陣太鼓を打つて出て來り

軍兵　迷子の〳〵のお大將樣ア。

庄八　お染さま、久松やアい。

ト双方呼びながら出て來り

庄八 モシ〳〵、あなた方は、爰へお出でなさる道で、娘と若衆の二人連れを、見掛けはなさりませぬか。

軍一 イヤ〳〵、其やうな者は見掛けぬぞ。此方でも貴樣達に尋ねたいは、爰へ來る道で、立派な大將樣に逢ひはせぬか。

庄八 イヤ〳〵、其やうなお方は見かけませぬが。

軍二 イヤ〳〵、別の儀ではないか、此方どもは北條時政の幕下。この度賴朝さま、石橋山にて御旗揚げありしところ、勝利なく、安房上總へ渡り味方を集め、この武藏の隅田川邊へござつたとの事。

軍三 そこで此方どもゝ、毎日此やうに、迷子の賴朝さまとも呼ばれず、お大將樣と云うて尋ねるのぢや。

庄八 ハテ、それは珍らしい迷子でござります。私しどもが尋ねに出ましたのは、內の娘御と、久松といふ丁稚が、二人連れでの駈落ち。

町一 それといふのも、番頭の善六どのを聟になされたゆゑ、此やうな事が出來たといふものぢや。

軍一 それ〳〵、兎角世間には、いろ〳〵樣々な事もあるものだ。夜の明けぬうち此方も

大立目　二番目序幕





軍二　手分けをなして土手傳ひ、千住の方を尋ねよう。

庄八　此方もこれから四ツ木の方へ……お染さま、久松やァい〳〵。

軍兵　迷子の〳〵お大將樣ァ。

ト双方呼びながら、軍兵は花道、若い者は東の口へ入る。矢張り佃節になり、幕明く。

本舞臺、三間の間、高足の草土手、正面に鳥居の笠木ばかり見せたる三圍裏手のかゝり。日覆より松、紅葉打交ぜたる吊り枝を下ろし、上手の方に稻村、松の立ち樹、この前に出茶屋の床几積み重ね、葭簀立てかけあり、すべて向島、夜の景色、この道具に納まる。

ト直ぐに雨車、佃節になり、向うより善六、麻上下の形にて、油屋と書いたる番傘をさし、棒を突いて出てくる。これに權兵衞、若い者、股引、紙合羽、菅笠にて、油屋と書いたる弓張りを持ち、出て來り、兩人花道にて

善六　コレ〳〵、われは大分足が遲いが、夜の明けぬうち少つとも早く、お染が行くへを尋ねにやならぬ。急げ〳〵。

權兵　ハイ〳〵、畏まりました。これは〳〵、ます〳〵手も足も寒い事だワ。

ト云ひながら兩人とも本舞臺へ來り

時に番頭樣え。內を出るから此やうに步きづめ、ます〳〵寒くなつては來ましたが、直ぐにこれから千住に行くと仰しやるゆゑ、此やうに紙合羽で、支度をして來ましたが、ます〳〵酒も飲まずに、どうして素面では

善六　オヽヨ、それはおれも承知だが、肝腎のお染さへ捕へれば、褒美はその時しつかり遣るワ。

權兵　そんならアノ、お染さまを尋ねた上でなければ、御酒下さりませぬか。ヤレ〳〵、情ない。よくぞ出がけに自腹できめて來たばつかりに、爰までは來ましたが、もう〳〵一足も、步かれませぬ步かれませぬ。

善六　コレ〳〵、そんな事を云はずとも、おれはこの川端を尋ねるから、われは元の道へ歸り、淺草の方か、又は千住板橋、出口々々を尋ねるがよからう。

權兵　モシ〳〵、それでは滅法界もない道でござります。ます〳〵飲まずには行かれませぬ。その上、餘ほど路銀がいりませうぞえ。

善六　成る程、それでは小遣ひもいるだらう。ドレ〳〵、そんなら貸してやらう。

ト紙入れの中を尋ね、富の札を出して

コレ〳〵、權兵衞、爰に持合せの金は無いが、富の札が一枚ある。今にも當れば百兩になるワ。その時は、しつかりと遣るワ。

ト出して見せる。

權兵　こいつは少つと詰まらねえ話しだ。もしその札が一に出ぬと、私しは骨折り損でござりまする。道理でお染さまが、お前を嫌つて駈落ちをなさる筈だ。

トこれにて善六、ムッとしたる思ひ入れにて

善六　コレ〳〵、權兵衞、われは番頭の善六を安くするな。

權兵　また高くもない男だ。其やうな人に使はれる、ます〳〵ではないぞ。

ト力味まはる思ひ入れ。善六も思ひ入れあつて

善六　此奴が〳〵、番頭に向つて口答へをする。われがやうな奴は

ト權兵衞の首筋を捕へる。この時、懐より以前の富の札を落す。

うぬ、憎い奴だ。宿を呼びにやつて、早く引渡さねばならぬ。サア〳〵、出て行け〳〵。

權兵　アヽ、コレ〳〵、そんなに手荒くせずと、氣に入らざァいらねえやうに、どうともさつしやるがよい。

善六　うぬ、飯炊きの分として、サア、たつた今、宿へ行け〳〵。

　　ト追ひやる。これにて權兵衞、口小言を云ひながら花道へ行き

權兵　アヽ、わしも國ぢやァ庄屋株の家だ。江戸へ出て奉公もしたが、こんな番頭に使はれるは、此方がます〳〵いま〳〵しい。ソレ、紙合羽も笠も返しますぞ。

　　トそこへ出して、花道の附け際へ置き

　　サア、今からわしは國へ行きます。さて〳〵人使ひの惡い番頭めだ。

　　ト佃節になり、權兵衞、呟き〳〵向うへ入る。

善六　うぬ、憎い奴だ。おれが獨りでお染を尋ねるワ。勝手にしをれ。

　　ト茶屋の床几に腰をかけて、摺火打ちを出し、莨をのんでゐる。時の鐘、向うバタ〳〵になり、お光在郷娘の拵らへにて、走り出てくる。跡より久作、老けたる百姓にて、赤子を抱へ、小提灯を下げ、出て來り、花道にて

久作　コレ〳〵、お光、聞分けのない。マア〳〵、わしと一緒に

　　ト引戻さうとするを

みつ　イエ〳〵、なんぼ父さんの云はしやんす事でも、これぱつかりは

ト振り放して、舞臺へ來る。久作、跡追うて來て、お光を捕へ

久作　ヤイ〳〵、いかにおのれは年端もゆかぬ者ぢやとて、短氣も事による。大事の〳〵其方を殺して この久作は何とせう。われが死んだとて二人の衆が、歸るといふのでもなし。マア〳〵、とつくりと親が云ふ事、聞き分けてくれ。

ト、お光を捕へて思ひ入れ。

みつ　そりや父さんの云はしやんす事ぢやが、久松さまに嫌はれたは、わたしが因果その上に、お二人さんは死ぬるというて、書置まで殘してお出でなされたと聞いては、猶々わたしも共に死なねばならぬ身の上。いつそ此まゝ

ト思ひ入れあつて、また行きかゝるを

久作　ハテマア、わしが云ふ事、とつくりと聞いた上

トお光を無理やりに下に置く。この時善六、この體を見て

善六　最前から聞いたが、夜更けさ更けに女の聲。そんならこの娘御は

ト獨り言云ふを、久作この聲に思ひ入れあつて

久作　ヤ、あなたのお聲は、どうやら聞いたやうな。

トよく〳〵見て

善六　ほんに、善六さま。いま時分あなたは、どうして爰へ。

久作　イヤ、わしよりは貴様達、どうして爰へ。

善六　サア、お聞きなされて下さりませ。私しがあなたのお見世へ、御奉公に遣はしました、あの久松めが、この頃の悪い噂、聞くと娘めも久松とは、小さい時分から云ひ號けの事なれば、生きてはゐられぬと云うて内を駈け出し、憎くい奴は久松。大事の〳〵お娘御の、お染さまと二人連れにて、家出をしたとの噂。それゆゑお光めも、お二人ながらもしもの事があつた時、娘も死にますと云うて爰へ來たのを、追ひかけて參りましたが、どうぞあなたもお光めに、得心の行くやうに云ひ聞かせてやつて下さりませ。

トほろ〳〵泣いて思ひ入れ。

久作　オヽ、尤も〳〵。久松と云ひ號けの娘ならその筈。おれもお染と祝言の夜に駈落ちされた、この善六が心の内も、推量して見やれ。

ト泣き出す。久作、いろ〳〵思ひ入れあつて

善六　アヽ、御尤も〳〵。あなたもさぞや久松めを、憎い奴ぢやと思し召して下さりませうが、コレ〳〵

私しが抱いてゐるこの幼子は、お染さまと久松が仲に出來たお子を、私しと乳母と内々にてお育て申す、その始末を娘が聞いて、身も世もあられず今の體裁。

みつ　サア、そのお二人のその仲に、お子の出來たを、どう見てわしらが……それゆゑこの身も、いつそ死んでなりと、今の思ひを

トまた行かうとする。久作とめて

久松　コリヤ〳〵、お光、わが身は惡い料簡。おぬしが死ぬる〳〵と云へば、跡に殘つた親のわしも、どうそれを見て生きてゐられう。その時はこの久作も

ト有りあふ繩を見附けて

オヽ、あるぞ〳〵。コレ〳〵、此やうに繩をつるして、首を〆めて死なにやならぬ。

ト松の枝へ繩を縛りつけて見せる。

みつ　イエ〳〵、なんの勿體ない。わたしこそ生きてゐては、後々のお邪魔。それゆゑ淵川へなと身を沈めて死にまする。父さん、免して下さんせ。

トまた行かうとするを、久作とめる立廻り。お光は振り切つて、逸散に下座へ入る。

久作　コリヤ〳〵、娘、聞分けない。お光やアい〳〵。

ト跡追うて下座へ入る。善六殘り、跡見送つて

善六　ヤレ〳〵、可哀や。お光は久松ゆゑ、この善六はお染ゆゑ、娘が死なうと云へば親仁まで………彼奴ら二人が親子の心中も、大笑ひだ。ドリヤ、お染が行くへを

ト行きかゝる時、足に何やら觸るを取上げ

こりやア爰に何か落ちてあるワ。

ト書き物を開き見て

アヽ、なんだ、淨瑠璃名題

ト口上觸れを讀んで

その爲口上、左やうに……こりやア淨瑠璃の觸れ書とやらだ。お江戸の勝手の知れぬは、いづれも樣、眞平御免なされませ。

ト佃節になり、善六、思ひ入れあつて下座へ入る。向うバタ〳〵にて、お染、袖頭巾にて走り出て來て、花道にてちよつと爪づく。久松、跡より駈けて來り、お染を介抱して、兩人互ひに顏見合せ

久松　ヤ、あなたはお染さま。

そめ　久松か。

久松　アヽモシ

ト思ひ入れ、ゴンと時の鐘。途端に上の方、打返しにて、草土手の上に淸元連中居並び、前彈きなしに直ぐに淨瑠璃になる。

〽今も昔は瓦町、名代娘のたゞ一人、おくれ道なる久松も、まだ咲きかゝる室の梅、蕾の花の振り袖も、内を忍びてやう〳〵と、爰で互ひの約束は、心もほんに隅田川、曇りある身は胸の闇、我が足音も都鳥、ぱつと立つ名の嬉しうて、もしや追手も如何ぞと、人目つゝみの川岸を、空まだ寒き星あかり、西へ行く身の向島、落葉を分けてやう〳〵と、たどり〳〵て來りける。

トこの文句にて兩人よろしくあつて、本舞臺へ來る。

久松　イヤ申し、お染さま、あなたのお志しで、お跡から爰までは參りましたが、いかに深い御縁とはいひながら、お主の娘御を連れまして、死なうなぞとは勿體ない道知らず、いはゞ現在主殺しも同然。

そめ　これいなア、久松、またお主と云やるかいの。互ひに死なうと覺悟して、内を出たのはそれも何ゆゑ、みんなアノ善六づらが、わしを捕へてさま〴〵な事云やるゆゑ、此やうに二人一緒に遠慮

なう居れば、こんな嬉しい事はないわいの。

久松 イエ〳〵、今になつて、この身をいとふのではござりませぬが、あなたとは子までなしたる仲なれど、私しと一緒にお果てなされては、内の子飼と娘御が、心中したと口の端にかゝつては、第一お家へ疵の附く事。どうぞあなたは、これから直ぐに

そめ そんならわしに、歸れと云やるか。

久松 今も申しまする通り、どうぞあなたは長らへて

そめ それぢやというて、互ひの約束。

久松 夜の明けぬ間に内方へ、お歸りなされて下さりませ。

トこなし。これより淨瑠璃になる。

〽我が手枕に梅ヶ香の、まだ床馴れぬ鶯も、子飼のうちから御恩を受け、大事の〳〵お主樣、月雪花の詠めにも、思ひは同じいつとても、余所の見る目を遠慮して、側へ寄るさへどうせうと、二世の固めのその先に、勿體ないが家來の身〽お染はヂッと顏を見て、あれ又あんな無理云うて、そんなそのよな云ひ譯を、それよりわしが否ならば、一人未來へ行つて見や男心はさうしたものか〽小さい時から生中に、手習ひまでも一つ所、あの云ひ號けのお光

さん、何やら双紙へ書いたのを、其方に見せて問うたれば、戀といふ字と云うたのを、初めて知つたいたづら事、さはる手と手も机の上、お師匠樣はなけれども、ついした事から惡緣の、結び始めの殿御ぢやと、思うてゐるに其やうな、樣と云やるが憎らしい、晴れてお染と呼ばれたさ、恨みつらみも何からと、袖に縋りて涙ぐむ、娘心ぞ可愛らし　〽久松今さら返答も、濡れてもつるゝ枯れ柳、詮方なくも置く霜の、消ゆる二人が身の上と、思ひ暮らして明暮れの、願ひも叶ふ妹脊鳥、じつと締めたる懷の、內ぞゆかしき戀草は、枯野の中の宵闇に、せめて名殘と抱き合ひ、互ひに胸の下紐も、分けて命となりぬらん。

トこの文句よろしくあつて、兩人抱きつく。この時、長命寺の勤めの半鐘、ジャン〱と打つ。これにて兩人、恟り飛びのき

そめ　エヽ、ありや何ぢやぞいなア。

久松　慥か、長命寺の勤めの鐘。

そめ　二人が命も

久松　最期を急ぐ

兩人　死出の旅。

トこの時、向うにて人音する。

久松　アレ〳〵、向うに慥か人影。

そめ　見咎められぬ其うちに

〽いざと二人はあたりなる、木蔭にしばし立ち忍ぶ。

ト兩人こなしあつて稻村の蔭へ忍ぶ。

〽朝湖が筆を寫し繪に、眞似て三升の彩色も、三筋は足らぬ猿曳きが。

ト草笛入り、誂らへの合ひ方になり、向うより桃太、縞の輕衫、布子、山岡頭巾、風呂敷包みに小猿を脊負ひ、猿廻しの道具を持ち、出て來り、花道にとまる。淨瑠璃になる。

〽得意廻りの口祝ひ、宿のお庇にや嗅衆とさしで、ぐつと熱燗引ッかけた、顔は太夫と花紅葉、まさるめでたやまつかいな、赤かんべい〳〵、ごまぢやなけれども、くるりくる〳〵野良廻り、くるりと廻つて菜種の蝶よ、色の利き肩よいとまりどこ　〽夜さの泊りはどこが泊りぞ、なばか杓子が行きあたり、流れ渡りの隅田堤、機嫌上戸の氣も輕く、浮れ拍子に來りける。

トよろしく振りあつて、舞臺へ來る。この時、稻村の蔭より久松、お染の手を引き、拔き足にて出て

くろ。桃太、見て

桃太　ヤア、じよなめくな〳〵。見れば男と女の二人。ハア、聞えた。こりやアてつきり、この三圍のれこさが、おれを化かしに出たな。よし〳〵、お狐ならば、太夫が爪で正體を

ト猿を下ろさうとするを

久松　ア、コレ、滅相な。

そめ　其やうなものぢやないわいな。

桃太　そんなら、こなさん達は人間か。それにしては、どれも〳〵、ハテ美しいな。して又なんで、夜深にこの邊へ。

久松　サア、これはナ……オヽ、それ〳〵、この三圍の稻荷樣へ、年參りに來ましたわいな。

桃太　それは御奇特。成る程、明日は大晦日だな。

久松　待たぬ月日の經つは、早いものぢやといひまする。

桃太　早い筈サ、この狂言も一番目から二番目の間は、幕の內に十年經つてしまつたのサ。ハヽヽヽ。

そめ　コレ久松、もうやがて夜明け。

久松　ドレ、そろ〳〵と參りませうか。

桃太　オット待つたり。二人の身の上よりは、肝腎の頼まれた身の上を、いづれも樣へお引合せを。東西、東西。

ト爰にて清元榮壽太夫引合せの口上あつて

兩人　エ。

アヽ、そんならお前方の身の上も、前髮といひ、このお娘が、いま久松と云つたからは、いよいよこの頃噂のある

桃太　コレ、醉興らしいがこなさん達へ、わしがちよつと、云つて聞かせる事がある。

兩人　そりや、どのやうな

桃太　ハテ、なんであらうと、マア、聞かつしやりませ。

トこれより四つ竹の合ひ方になり、桃太、こなしあつて

〽爰に東の町の名も、聞いて鬼門の門屋敷、瓦町とや油屋の、一人娘にお染とて、年も二八の細眉に、內の子飼ひの久松と、忍び〳〵の寐油を、親たちや夢にも白絞り、絞りかねたる振りの袖、梅花の露の玉の緒の、やがて消えゆく有明も、心の燈心添へたなら、末は二人が吉丁子、これは我れらが御祈念と、意見まじりに興じける。

ト桃太、四つ竹を打つ事あつて、兩人思ひ入れ。

久松 すりや、世間では其やうに

そめ お染久松とやらが身の上を

桃太 門附け又は唄祭文、浮名の立つをうたてく思ひ、ひよんな心にならつしやらぬやうに

兩人 エ。

桃太 春を取越すお猿萬歳、御壽命長久、芝居繁昌、祝うて爰で

ト風呂敷より包みを取出し

囃しませうか。

〽猿若に御萬歳とは、櫓も榮えてましんます、青陽新玉の年立ちかへる周の春、愛嬌ありけるぼつとり者、西王母が桃の花を、口に咬へて當年の、惠方から舞ひこむなんどは、まさるめでたう候ひける 〽二八十六諸人の引張る色娘、お染と云つたら立つたりしよ〽よやよめ〳〵召したるものは何々、綾が千疋、錦が千反、緋紗綾緋緞子緋鹿子の、大振り袖を着飾つて、榮えて參る〳〵、これ又參る 〽山王の櫻の木を見てあれば、太夫が三萬三千三百三十三疋づらりやづッとましらこに、ましらこ〳〵さりとはさんな又あろかいな、お若衆どのもお娘

御も、揃ひも揃うて好い女夫ぢやえなう、斯様申す才藏なんぞは、むつくり〳〵むくむく〳〵、むつくりくるりと廻りて立つたりな、あろうかいなさんな又あろかいな、お猿はめでたやな〳〵百萬年の壽と、祝ひ、祝うて猿曳きは、里ある方へと走り行く。

ト桃太、よろしくあつて下座へ入る。兩人、思ひ入れあつて

久松　モシヽお染さま、見ず知らずの人も、今のやうに深切に云うてくれるものゝ、浮名の立つた二人が仲。

その　それぢやによつて、わたしや覺悟を

久松　すりや、どうあつても

その　二人一緒に。

ト此の時、善六、窺ひ出て

善六　ドツコイ見附けた。久松めは死んでしまふが此方の勝手。お染さまは、殺さぬ〳〵。

トお染を捕へる。

その　エヽ、アタ嫌らしい。なんの其方と

善六　否でも應でも、この善六が女房ども。これからお染善六といふ道行ぢや。モシ、榮壽さん、頼み

ます。サア、きり／＼わしと、ござらつしやい。

ト引ッ張るな久松、引放して

久松　イヤ、お染さまは、この久松が遣る事ならぬ。

善六　何をこの素丁稚め、おれが爲には戀の敵。エヽ、けたいの悪い。うぬ、どうするか、見をれ。

〽かよわき二人を善六が、襟髪摑んで引寄せるを、どつこいさせぬと久松が、引戻してもいつかないかな、浪に揉まるゝ浮寐鳥、立つ足もなくよろ／＼／＼、こけつまろびつ。

トこの場にて三人立廻り。善六、脇差を拔かうとするを、お染、拔かせまいと爭ふ事。トヾ善六床几の上へあがり、お染を引附ける。久松、これを除けんと、臺を向うの方へ突きやる。此はずみに久作が掛けし繩へ思はず首を引ッかけ、ハア、と苦しみ、首を縊る。兩人この體を見て「ワツ」と飛びのき、お染は久松に縋り、慄へてゐる。

久松　ヤヽ、善六どのが思はぬ最期。

そめ　こりやマア久松、どうせうぞいなア。

久松　怪我とはいへど久松が、善六どのを殺した同然。

そめ　これにつけても、所詮生きては居られぬ身の上。

久松　この久松は、オヽ、さうぢや。

　ト善六が捨てし脇差にて死なうとするを、お染とめて

そめ　コレ久松、其方より先この染を、殺して死んでたもいなう。わしやなんぼでも、其方を先へは、殺しやせぬ。

久松　ぢやと云うて、養父久作が大恩ある主人の娘御。どうマアわたしが

そめ　アレ又あのやうな水くさい。二世と交した女房のわたしを

久松　是非に及ばぬ。そんなら二人、手に手を取つて

そめ　淵川へなと身を沈め

久松　せめては死恥かゝぬやう

そめ　そんなら爰で

久松　未來の曠れ着。

そめ　二人が支度。

〽脱ぎ捨つる、上着に物を思へとや、帶から先へ解けかゝる、心は解けぬ厚氷、肌寒風も身に浸みて、この世の緣も淺草の

ト時の鐘。此うち兩人、袖を脱ぎかける思ひ入れ。下座バタ〳〵にて、人音するゆゑ

久松　又も人音、夜の明けぬ間に。

そめ　そんなら久松。

久松　お染さま。

〽顏見合はせて目は涙、今は二人も束の間に、彌陀の御國に隅田川、蓮の臺の新世帶、いざ事とはん都鳥、足と橋場の明け近き、はや長命寺の鐘の聲、爰に浮名や流すらん。

ト打返しにて清元連中を隱す。兩人、思ひ入れあつて、下の方へ行く。掠めたる禪のツトメになり、向うより喜兵衞、紙屑拾ひにて、籠と箸を持ち、出てくる。跡より、犬附いて出るを、追ひのけ〳〵舞臺へ來るうち、久松はお染が手を引き、兩人、袖をかざし、摺れちがうて花道の方へ行く。この時喜兵衞、善六が落せし富の札を、何心なく籠の中へ挾みこむ事あつて、善六が首縊りを見附けて

喜兵　ハヽア、縊つたな〳〵。

トこの時、ドンと水音する。

ヤ、身投げがあるわえ……そんならこいつも

兩人　ヤ。

喜兵　心中かも知れねえ。

トこれにて兩人、花道に捨てある紙合羽を取りあげる。犬「ワン」と喜兵衛へ喰ひつく。

エヽ、畜生め。

ト竹箒にて犬を打つ。兩人、紙合羽を着る。双方、思ひ入れ。木の頭。

イヨ、大和屋。

ト兩人、菅笠をかざす。これをキザミ、よろしく、ひやうし幕の外、雨車、時の鐘にて、兩人向うへ入る。知らせにつき、シヤギリ。

幕

本所源平橋の場

役名――順禮、淸兵衛實ハ越中前司盛次。同女房、根曳。右兵衛之佐源頼朝。家主、山家屋左四郎お六母、うつみ。船頭、晒屋次郎八、庵崎の百姓、久作。女乞食、お捨。百姓、みと八。乞食、竹六、同、豆藏實ハ千葉五郎胤久。同、閻魔小兵衛實ハ赤井藤太重宗。同、三助實ハ葛西六郎重淸。同はね七實ハ榛谷四郎則氏。油屋番頭、善六。油屋娘、お染。喜兵衛女房、お六。油屋丁稚、久松。非人頭、鬼門の喜兵衛實ハ江田源三廣綱。

本舞臺、正面、誂らへの乞食小家、綺麗に注連を張り、門松を飾り、柱に白膏赤膏の看板を掛け、上の方、梅の立ち樹、橋の横を見せ、その下に苫船、川の流れ。下の方に高足の土手、その上に火の番小屋、燒芋の看板行燈。その際に早桶を直し、葭簀張りの小家。行倒れを晒しある體。爰にお捨、女非人、前垂れがけにて、大根人蔘の皮を剝いてゐる。みと八、田舍船頭にて、船より菜をあげてゐる。左四郎、家主、羽織、踏んごみ、樽の上にあがり、川端にて薩摩芋を洗つてゐる。すべて本所源平堀のあたり、大晦日の體。四つ竹節。摺り鉦入りの太神樂をかぶせて幕明く。

みと　モシ〳〵、大家さん、菜は揚げて置きましたぜ。

左四　そりやア〳〵、大きに……、して掃除代はどうした。

みと　そりやア先貸しに行つて居ります。

左四　それは承知だが、來年のを借りたいものだが、いつもの次郎八はどうした。

みと　小松立場で一杯やらかしたから、よく寐てゐます。

左四　アヽ、さうか。コレ〳〵、お捨、てめえ、もう雜煮の支度か。

すて　モシ、大家さん、聞きなさい。今夜この小家へ、嫁が來やすわな。

左四　ナニ、嫁が來る、そりやア大變だ。して、嚊アのお六は、どうした。

すて　なんだか、ちよつとした事がごてつきになつてネ、阿母も小家を出て、今ぢやァ山谷の三婦六頭の小家に居やすとサ。

左四　そりやァとんだ話しだ。根太一重隣だが、さつぱりと知らなんだ。

すて　ナニ、あの衆は面はよし、明日から鳥追に出ても、二本や三本は持つて歸りやすわな。

みと　それはとんだ者だが、定住この河岸を借りるから、氣の毒なもんだ」と云つて只の人ぢやァなし口出しが仕憎いて。

左四　そりやァそんなものだよ」して、その嫁は、どこから來る、

すて　それかえ。あの渡し場の小家頭が親分で、今度心中して引渡しになつた、油屋の娘サ。

左四　ア丶さうか」それだといつて、相手の若衆は、この小家にゐるぢやァねえか。

すて　それで宿六が、あの丁稚を出ろがしに、酷くしてね、出來もしねえものを直しに出しやす。なんぼ時世といつても可哀さうサ。そりやァさうと大家さん、なぜお前、番太郎になりなすつた。

左四　おれも地代のたゝまりで、退役するところを、組合手合ひが骨を折つて、やう／＼と濟んだところが、爰の番太めは金を拵へて、國へ隨徳寺よ。その跡を預かつて、大家と番太を兼帯に勤めるワ。

すて　アヽ、左様かね。モシ、大家さん、ありやァ何だえ。
左四　ありやァ佛よ。この河岸へ着いたゆゑ、檢分の上で千住へやるのだが、ツイソノ、町入用を遣ひこんでしまつた。
すて　そんなら、川流れの佛だね。
左四　川流れも〳〵、首を縊つて身投げだ。死目ちやんぽんに張つた佛だ。併しなんぼ町入用を遣ひこんだといつて、元日早々やられもしまい。今夜は是非ともやらざァなるめえが、宿六はいつ歸るの。
すて　今に歸りやすわな。
　　　トこの話しのうち喜八、組合の家主にて、盆へ鹽を入れて、走り出て來り、左四郎を見て
喜八　コレ、左四郎どの〳〵、貴樣は行事だが、今あそこへ立派な倒れものがあるゆゑ、知らせに來た知らせに來た。
左四　なんだ、倒れものがある。そりやァどこへ倒れた。
喜八　イヤ、まだ倒れはしねえが、どうか今にも倒れさうだから、知らせに來たのだ。
すて　アヽ、それでお前さんが倒れねえやうに、鹽花を蒔きなさる氣で、持つてお出でなすつたのかえ

喜八　ナニ、この鹽は、伊勢屋の御用が屆けたのだ。

左四　そりやァ菜漬の鹽だ。

ト盆のまゝ取つて側に置く。この時、向うより頼朝、甲冑の上へ軍兵の絆纏を着、白旗を頬かむりにして、菰を着て出て來り、花道へ倒れる。

なんにしろ厄介ものだ。倒れさうなら、脇へ行つて倒れてもらはう。

喜八　なんにしても、早く來さつしやい〳〵。

ト喜八先に左四郎、花道へ來り、頼朝を見て

左四　コレ〳〵、てめえは病人か、生醉か。爰へは置かれぬ。

喜八　立つて行け〳〵。

ト兩人して引起す。

頼朝　ヤイ〳〵、何奴なれば、我れへ對して卒爾千萬な。

左四　此奴、大分大風な事を云ふ倒れものだ。

ト顔を見て

イヤア、あなたは

頼朝　ヤ、其方は

喜八　こなた、近附きか。

左四　イヽヤ、知らねえ〳〵。存じませぬ、知りませぬぞ……どうしてこんな行倒れに、近附きがあつて堪るものか。併し、隨分氣は慥かなやうだ。わしが隣り町へ出るから、お前は用を足してござりませ。

喜八　そんなら、おれは地主へ勘定に行かねばならぬから、頼みますぞ。イヤ、勘定といへば、貴樣の舊借も、組合で償なうて置くから、双六か十六むさし、寶船扇箱のやうな物を賣りに出て、さうして組合へも力を附けるがよい。賣り物は、わしが問屋を引いて置いたから、隨分稼ぐがよい

左四　そりやア大きにお世話樣でござります。

喜八　そんなら爰は、貴樣に頼みますぞや。ドレ、行つて來ようか。

ト矢張り右の鳴り物にて、喜八、足早に揚げ幕へ入る。

左四　思ひがけない頼朝公、どうして爰へ。

頼朝　イヤモウ、身も石橋山にて旗揚げなせしに、ツイその戰にだりむくり、伏木隱れと隱れたところ、大場といふ奴が、木の洞へ刀を突ッ込んで搔き廻し居つた。その時、左の肩先を突かれて、そ

の金瘡が今以て。それからこの地へ參つて、又ぞろ味方を集むる氣ぢや。これから其方、力となつて、源氏の旗揚げ、頼む〳〵。

左四　お氣遣ひなされますな。この家主が呑みこみました。あなたのお側で、お草履取りを致した私し今では大家を勤めまする。及ばずながらお力になりませう。マア、なんにしろ、番屋へお出でなされまし。

ト頼朝の手を引き立てる

頼朝　アイタヽヽヽヽ。

左四　そんなに痛みますか。

頼朝　痛むとも〳〵、身もさま〴〵と醫療を盡せど、この金瘡を癒やすには、男女、互ひの得心にて、相對死を致せし者の、その生血が稀代の良藥。併し、これぱかりは

左四　そこは、江戸は廣うございます。それも探しましたらございませう。その疵の癒るまで、番屋に隱れておいでなされまし。

頼朝　其方、よきやうに計らへ〳〵。それにしても、久しく兵粮を遣はぬゆゑ、空腹ぢや。その用意を致せ〳〵。

左四　それも、いま炊いてあげます。マア其うち、燒芋でもあがつて

賴朝　然らば左樣いたさう。

ト立上がらうとして、ヨロ〳〵となる。

左四　お危なうござります。疵口を御用心なされまし。

賴朝　ナニこれしきに氣後れ致す、兵衞之佐にあらねども、何を申すも空腹ゆゑ。

ト又よろ〳〵とする。

左四　芋はよく燒けて居ります。あそこまで御辛抱なされまし。

賴朝　早う案内いたせ〳〵。

左四　モシ〳〵、其やうに大風に仰しやりますると、平家方の者に感づかれます。大風をやめて、モシ人が聞いたら。番太郎だと仰しやりませ。さうして夜になると、御苦勞でも、割り竹を引いて、町内を廻らねばなりませぬぜ。

賴朝　承知いたした〳〵。

左四　サア〳〵、そろ〳〵お出でなされまし。

ト賴朝、左四郞の肩に取りつき、兩人舞臺へ來り、番屋へ入る。このうち、みと八、菜を洗ひあげ

て

みと　ォヽ、冷たい〳〵。指が切れるやうだ。こりやァ又、雪だわえ。

すて　さうさね。今にも知れねえ空だ。松にかゝると、七度降るとサ。

みと　わしは降らねえうちに、仕切りを取つて來よう。船を頼みます。

すて　アイ〳〵。

トみと八、船の中に向つて

次郎八どん、わしは問屋へ行くから、跡を頼みますぞ……ドレ、行つて來よう。

ト矢張り右の鳴り物にて、みと八は下の方を橋を渡つて奥へ入る。向うより久松、手拭をかむり、着流しの上へ絆纏を着、雪駄直しの籠をかたげ出る。跡より喜兵衞、これも手拭をかむり、着流し、尻からげ、三尺帯を締め、二升樽に竹の皮包みと、へぎを結ひつけ、藁草履にて出て來り、花道にて

喜兵　これエヽ、この餓鬼ァ、江戸中歩いたといつて、默つて歩いて仕事があるものか。なぜ呼んで歩かねえ。

久松　サア、呼んで見ようとは思ひますれど。

ト呼ばれぬ思ひ入れ。

喜兵　エヽ、呼べといふに。

　　　ト云はれ、モヂ〳〵しながら

久松　デッディ。

喜兵　ざまァ見やァがれ。不器用な餓鬼だ、さうぢやァねえワ。

　　　ト不器用に呼ぶ。

　　　ト呼んで見せる。

久松　私しも、其やうにとは思へども、どうもなぜにか

喜兵　べら坊め、呼べねえといふがあるものか。法華坊主と雪駄直しは、咽喉から血の出るほど吹切ら

　　ねえと、本職にはなれねえワ。

久松　ハイ〳〵、そんなら只今から

喜兵　寒聲でも遣へ。

　　　ト兩人、舞臺へ來る。お捨、見て

すて　頭、歸んなすつたか。大分遲かつたねえ。

喜兵　寺の仕切りで、小梅まで行つた。

すて　アヽ、弔ひかえ。
喜兵　なんだか、しみつたれな弔ひだ。したが、强飯と酒は貰つて來たから、こいつで今日の婚禮は、間に合はせて置かう。
すて　そりやア丁度よかつた、赤い强飯かえ。
喜兵　なアに、娘ださうで、矢ッ張り白いのよ。
ト そこらへ置き、懷より小錢二百文出して
サア、これを遣つてゐや。
すて　オヤ、これぱかりかえ。
喜兵　その上に燒場もなしよ……アヽ、剛氣に寒くなつた。ヤイ、その絆纏を取つて寄越せ。
久松　ハイ〳〵。
ト 掛け竿にある絆纏を取つて來て
どうやら雪でも降りさうでござりまする。
喜兵　降るといへば、てめえ、屋根代はどうした。
久松　サア、さう思うて、いくら步きましても

喜兵　屋根代が一つ取れねえか。コレ、よく聞け。僅かな屋根代を拂はねえほどな態で、よくわりやア娘と色事を。いゝ穀つぶしだぜ。それで商賣が成るものかえ。

久松　でも、何も存じませぬ私し。心がらとて、此やうな苦しみを

喜兵　ナニ苦しみだ。この餓鬼は、ふざけた事を云やアがる。コレ、うぬはナ、身を投げたを引揚げられて、その上で、晒されるところを油屋で、だん／＼と骨を折つて、直にこの小屋へ來たのだ。まだしも晒されぬのが、有り難えたア思はねえで、非人の手にかゝつて苦しみだも凄まじい。口巧者な事を吐かしやアがると、うぬ、どうするか見ろ。

ト立ちかゝる。この以前より左四郎、上の番屋の間戸より半身出して、米を洗ひ、水を流すとて、誤まつて桶ともに喜兵衛の居るあたりへ落す。兩人、この水を浴びる。恟りして

エヽ、冷てえ。誰れだ／＼。

すて　きつと大家の番太郎だ。丁度いゝ。米も無かつた。

トこぼれし米を掻きあつめ、桶の中へ入れる。此うち左四郎、下りて來て

左四　コレ／＼、いま爰へ米を入れた桶を落したが、どこにある／＼。

トあちこちを尋ね、桶を見附け

ア、、爰にあつた。

ト持つて行かうとするを、お捨とめる。

すて　モシ／＼、大家さん、お前、乞食のこぼれた物を

喜兵　さうサ、ナニ旦那衆の方で食はれるものか。

左四　洗へば素人になられるワ。米も洗つて炊くものだ。

すて　なんでも小家へ落ちちやア、さうはゆきませぬわな。

左四　なにもさう、吟味がましく云はつしやるな。遣る物は常に遣つて置くワ。

喜兵　モシ、いつ遣つて置きなすつた。あんまり出放題な事を云ひなさんな。先々月もわしを頼んで、地代のたゝまり、その上に、わしが小家の女まで。何もかもわしやア云はねえが、お前の方からさう云ひなさりやア、云はにやアならねえ。ヤイ、お捨、われも又、どうかしてもらやな。

すて　モシ、大家さん、わしらが旦那衆と色事をするにやア、慾得だわね。下さる時にやア下さるだらうと、今までお門へ参つた事はござりやせんよ。多くのお願ひぢやアなし、サア、いま分け道を附けておくれ／＼。

喜兵　大家さん、お前も猪を食つた報ひだ。遣るものなら早く遣つて、仕切りを張つてもらひなさい。

左四　それだといつて、今はきなかもねえ。頭、そこをいゝやうに、頼む〳〵。
　　　ト手を合はせて頼む。
喜兵　無けりやァ質でも置きなさい。
左四　サア、その質草がある位なら
喜兵　そんならわしが、質草に取る物があるが、承知かね。
左四　そりやァ何を。
喜兵　何も無けりやァ仕方がねえから、大家樣の樣といふ字を質に取つてあげます。その代りにやァ請
けねえうちは、大家々々と呼捨てにしやすぜ。
左四　併し、大家が非人に呼捨てにされちやァ、マア第一町内へ
喜兵　濟まざァ此方も濟まねえよ。
すて　そんなら早く手切れを出して、仕切りを張んなさいまし。
左四　サヽ、いゝ〳〵、そんならさうよ。
　　　ト左四郎、桶を持つて、番屋の際へ來り
オイ、菜漬を漬けるなら、あすこに鹽があるぜ。よしか〳〵。

ト上の番屋の後より橋を渡つて入る。久松、あたりを拭く。

喜兵　エヽ、そんな事はお捨がするワ。わりやァ屋根代をどうするのだ。

久松　サア、どうも私しには

喜兵　出來ねえなら、置かれるものか。紙屑を拾つても、二百や三百は持つて歸るワ。

久松　ぢやと申しまして。

喜兵　うぢ〳〵せずと稼いで來い。それが出來ざァ、出て行きやァがれ。

ト門口へ突出す。久松、思ひ入れあつて

久松　どこをどうして歩いたとて、わしがやうなこの非人に、誰れが仕事を

喜兵　まだ行かねえか。

久松　行きますわいな。

ト唄になり、久松思ひ入れあつて向うへ入る。

喜兵　彼奴もあの位にいぢつたら、よもやモウ歸つちやァ來まい。すて中年者の落ちて來たのは、仕方がねえの。飯が一つ炊けれえわな。

喜兵　てめえ、そりやァ何を拵らへるのだ。

すて　お節なり、婚禮なり、身祝ひながら、鮭の頭を入れてごつた煮サ。

喜兵　さうか。そんなら膳を出すところだが、その煮染を附けて、これにせう。

ト持ち來りし強飯を、へぎへ盛り分ける。掠めたる太神樂になり、向うより、喜八先に、清兵衞、菅笠へ木綿やつし脚絆、小さき千ヶ寺參りの葛籠を脊負ひ、この葛籠の中より、前幕のお染と久松の心中に着たる小袖の裾、振り袖の端出てゐるを脊負ひ、出て來り、花道にて

清兵　左樣なれば、その拾うたお人の内は、あれでござりまするか。

喜八　サア、拾ひ手は彼處の小家頭ぢやが、置き主はおれぢやによつて、疾から非人のあの喜兵衞、請ける事は出來まいと思つてゐたところが、貴樣が見たいと云ふゆゑ見せたのぢや。

清兵　サア、先は非人の事なり、殊には拾うたもの。この品は、是非ともわしに下さりませ。

喜八　マア、なんにしろ、月の切れぬ代物ゆゑ、また後日にゴテつかれてはならぬから、一通りはこたへねばならぬ。それはさうと、貴樣はどこの人だ。

清兵　わしは遠國者の夫婦順禮、この間、女房めが病氣ゆゑ、小梅の尼寺を借りまして、逗留いたして居りまする。今日は淺草へ參りましたゆゑ、又と云うては面倒、ならう事なら今日のうち

喜八　サア、持つてござれぢやが、おれも口錢を取らねばならず、またその代物は、大根荷主の次郎八

生中貴様がゐると、足許を見て話しがくどい。知らぬ顔で門口にござれ。小家頭へは、おれが掛合ふほどに、も係りあひゆゑ、これにも歩きをやらねばならぬて。

清兵　イヤモウ、何分よろしう頼みます。

喜八　サヽ、ござれ〳〵。

ト矢張り鳴り物になり、舞臺へ來る。

喜兵　こりやア大家さん、あわたゞしい、なんでござります。

喜八　外の事でもないが、先度おれが置いてやつた、根附の事よ。

喜兵　それがどうしました。

喜八　斯うぢやて。

トこの時、外に清兵衞、立聞きゐる。

清兵　順禮に御報謝。

すて　通んな。手がふさがつてゐるよ。

喜八　あの根附を、外に欲しがる者があるゆゑ

喜兵　それをどうなさるのでござります。

喜八　斯うするのぢやて。
清兵　順禮に御報謝。
喜兵　エヽ、うるさい。手がふさがつてゐるといふに。
　　ト門口へ來て
カウ、此方の内は貰ふが渡世だ。通らつしやい〳〵。
清兵　ハイ〳〵。
　　ト云ひながら、矢張り立つてゐる。
喜兵　お家主樣、欲しがるといふお人は、そりやどこのお人だね。
喜八　外の人でもない、あそこにゐる順禮サ。
喜兵　ナニ順禮が。
　　ト思ひ入れあつて、清兵衛が側へ來り
そんなら、あの代物を、欲しいといふのはお前か。
清兵　左樣でござります。あの品は、お前が頼んで
　　ト喜兵衛の顔を見詰めて思ひ入れ。

喜兵　置いてもらつたのよ。同様、物貰ひのこなさんが

清兵　珍らしい品ゆゑに。

ト喜兵衛、脊負ひし葛籠の着物を見て

喜兵　順禮どのゝ葛籠の內から、派手な小袖の

ト立寄つて見ようとする。

清兵　エヽ。

ト思ひ入れあつて

順禮に御報謝。

ト通り神樂になり、下より小家の後を通り、橋を渡つて入る。喜兵衛、思ひ入れあつて

喜兵　モシ、大家さん、どうしてもわしが請けます。

喜八　イヤ〳〵、おれも金のいる事があつて、今の順禮から金を取つて、請けてやつた。

喜兵　とんだ事を云ひなさる。置き主はお前でも、代物はわしが物だ。

喜八　それだといつて、渡してしまつた。

ト喜八、そこ〳〵に云ひ捨てゝ、足早へ向うへ入る。喜兵衛、跡を追うて

喜兵　さうはなりませぬ。イヤハヤ、とんだ大家だ。

ト摺り鉦入りの太神樂になり、向うより竹六、節季候の形、雪駄の革を編み、鰑と見せたるを持つて出て來り、舞臺へ來て

竹六　今日は口柄もよろしうござりますれば、只今嫁御がお出でござります。

喜兵　ナニ、もう來るのか。まだ支度も出來ねえ。こいつは大變だ〳〵。

ト喜兵衞、奥へ入る。お捨、捨ぜりふにて、いろ〳〵と支度をする。矢張り右の鳴り物をかり、掠めて鐃鉢入りの寺に鳴り物になり、向うよりはれ七、木綿やつし、股引、袢纏、腰に曲馬を結びつけ、騎射笠にて先乘りの心。豆藏、着流し、厄拂ひ、大杯を持ち、お辰、鳥追の形にて、お染の手を引き、後より小兵衞、赤塗り、閻魔の形、股引からげ、擂粉木を笏となし、三助、地藏菩薩にて、好みの錫杖を突き、出て來り、皆々花道に居並び

はね　コレ〳〵、正九ツの輿入れのつもりだが、どうして遲くなつた。

豆藏　晩にやア物日だ。おいらは厄拂ひに出にやアならねえ。

たつ　お染さん、もう彼處ぢやわいな。

そめ　さうでござんすか。早うわたしは行きたうござんす。

小兵　エヽ、畜生め。

　　トお染の脊中を叩き

頭さんの小家はもう爰サ。わしや恥かしい。

三助　おきやアがれ。道理で顔が赤くなつた。

皆々　サア、行かう〳〵。

　　トこの人數、皆々舞臺へ來る。お捨見て

すて　頭、來たよ〳〵。

　　ト呼び立てる。奥より喜兵衞、着替へて出る。

喜兵　これはみんなも御苦勞々々々。マア〳〵、此方へ〳〵。

皆々　まづ今日は、おめでたうござります。

豆藏　私しは添へ聟の役。頭の云はれますには、夫婦揃はねばならぬと云はれまするゆゑ、鳥追の太夫を連れて來ました。

はね　馬にやァ乘つて見ろ、人にやァ添つて見ろと申すゆゑ、渡世の曲馬で、花嫁を送つて來ました。

竹六　わしは又、雪駄革のこの鯣、滅多に切れぬの思ひつき、わざ〳〵とお祝ひ申します。

小兵　閻魔いなもの味なもの、地藏と閻魔は尉と姥、赤いと白いは源平橋の、頭の事ゆゑこの顏で

三助　地藏の顏も三々九度、この鳥追の大杯で、わしらが今日の取結び。

皆々　頭、おめでたうござります。

喜兵　こりやァ御叮寧に、よく來てくんなすつた。コレ、お捨、支度がよくば

すて　アイ〳〵。

ト へぎに載せたる强飯を、めい〳〵に出し並べる。

そんなら御祝儀のお杯は、よいやうにお賴み申します。

ト 片口へ酒を入れ、杯を豆藏の前へ出す。豆藏取つて

豆藏　さしづめ、お前から花聟さんへ。

ト お染の前へ出す。お染、合點のゆかぬ思ひ入れ。

そめ　モシ〳〵、この久松は、どこに居りまする。

喜兵　どこに居やうともまゝよ。聟といふなア、この鬼門喜兵衛だ。

そめ　エヽ。

ト 愕りして

そんならわたしは……さうとは知らず、久松と夫婦になる事ぢやと、嬉しう思うて來たものを、非人の妻になる事は、わたしや否々、否ぢやわいなア。

ト泣き落す。これにて喜兵衛、豆藏を脇へ招き

喜兵　コレ、貴樣も又どういふもんだ。あれぢやアまんざら聟のおれに、天井を見せるやうなものだ。

豆藏　マヽ、ようござります。

喜兵　それだといつて、あれぢやア納まらねえ。

豆藏　ハテ、わしが呑みこんで居りやす。

ト お染の側へ來て

これサ、惡い合點だ。久松もお前も、乞食の手下へ入つたからは、とても夫婦になる事は御法度だ。それで兩方へ引分けて置くのだ。したが、頭の女房にさへなりやア、又お前の、ソレ、彼の久松にも

ト小聲で云ふ。

たつ　たゞ何事も諦めて、いとしと思ふ久松さんの、爲を思うて杯を

喜兵　こいつはまづい話しだが、併し、そりやアおれが胸にもあるて。

豆藏　ハテ、頭も通り者だわな。

四人　サア〳〵、早く杯を、しなさい〳〵。

そめ　そんなら、杯さへしたなれば、久松に逢はれるとかえ。

喜兵　逢はせるとも〳〵。

皆々　サア〳〵早く、祝言の杯。

ト通り神樂になり、向うよりお六、布子の上へ絆纏を着、女房の拵らへ、平括け、前垂れ、下駄がけにて、早足に來る。うつみ、母親の拵らへ、綿厚なる木綿羽織、布子、前垂れにて、山下駄を穿き、お六を留めながら出て來り、花道にて

うつ　コレ〳〵、お六や、云ふ事はいつでも云はれるから、マア〳〵、よく聞き糺して云ふがいゝよ。

ろく　これナ、母さん、お前のやうに氣を弱くすると、いゝ事だと思つて、とつけもねえ事をするわな女房のわたしを親の内へ預けて、その跡へ旦那衆の娘を嫁にもらはれちやア、嬶アの面がどこで立つわな。

うつ　サア、さう云つちやア、てまへの云ふのが皆尤もだが、そこをなんどりと和らに云ふがいゝわな何をいつても、人樣の物を貰ふ乞食と違つて、向うが施しをさつしやる旦那衆の事だから、さう

ろく　いつても人が惡い。マア〳〵、おれに任せて、靜かに云ふがいゝよ。

すて　それだといつて、あんまり達引がねえわな。

　　ト矢張り鳴り物になり、兩人、舞臺へ來り、外にて窺ふ。内ではこれを知らず

小兵　サア〳〵、早く祝言を始めるがいゝわな。どうやら天蓋がばれさうだ。

はね　大晦日に降られると難儀だ。併し、乞食の嫁入りを聞いて、町内の大家手合ひが、御祝儀を取りに來やうぜ。

三助　そんなら早く此方から持たせてやつて、月行事の仕切り札を貼らせるがよい。

豆藏　さう云つても、今夜は厄拂ひに出にやァならぬが、さつさと祝儀を始めねえか。

皆々　さうだ〳〵。さつさとなされや

竹六　さうだワ祝言。

小兵　乞食のお家は青山赤坂、田圃にござれば田圃にめでたい、さうだワめでたい。嫁御も刎ねこめ。曲馬も乘りこむ。

　　閻魔も地藏も、さつさと飛びこめ。さうだワ、めでたい〳〵。

　　ト皆々竹を叩いて踊る。喜兵衞、こなしあつて

喜兵　コレ〳〵、そんなに騷ぐと、小家の根太を踏み拔くわな。おとなしくして、祝言らしく、謠でも謳はねえか。

豆藏　成る程、謠がねえと極まりが附きやせぬ。厄拂ひが謠がはりに、めでたく拂ひやせう。

皆々　拂はッし〳〵。

豆藏　サア、めでたいな〳〵、當年歲暮の御祝儀に、古き女房を追ひ出して、また嫁取つてよい時分、雜物ぬかして追ひ出す。これも頭の御祝儀と、惡婆女房の手を切つて、西の小家へ、さらり〳〵。

皆々　エヽ、おめでたうござりやす。古いかみさん、さらり〳〵。ハヽヽヽ。

ト門口にてお六、うつみ、これを聞き、思ひ入れあつて

うつ　コレ〳〵、厄拂ひ〳〵。

ト呼ぶ。

豆藏　アイ、拂ひますかな。

ト出て來り、二人を見て膽を潰し

イヤア、來た〳〵〳〵。

皆々　何が來た〳〵。

ろく　コレ、古い女房の外道嬶アが來たのだわな。
皆々　イヤア。
うつ　サア〳〵、今のやうにもう一遍、拂はつしやいな〳〵。
ろく　西の海へ行きたいよ。サ、拂つてもらはう〳〵。
　ト二人ながらドッサリと坐る。
喜兵　コレエヽ、嬶ア、われは何しに來たのだ。
ろく　何しに來るものか。わつちが內だから來たが、それがどうしたえ。
うつ　コレ、喜兵衞どん、こなたはこのお六を、春まで預かつてくれろと、親の小家へ寄越して、その跡で、旦那衆から嫁をもらつて、祝言もすさまじい。その又來る嫁も嫁サ。來る所もあらうのに、乞食の小家へ。あんまり不自由な嫁御だの。
　トお染に當て〻云ふ。
ろく　コレ、さう云つても、嫁御さんはどこにゐなさるえ……アヽ、お前がお染さんといふ姐さんか。モシ、憚りながら小家頭の女房、おかみさんといふのはわたしだよ。コレ、喜兵衞さん、お前も昨日今日の馴染ぢやァねえよ。中仙道の鏡の宿で稼いでゐるうちから、夫婦約束したお前。殊に

娘もある仲だよ。その上二人が詰まらぬだらけ、心中までもしかゝつて、三日晒しのその上で、二人が二人非人の手下。いま斯ういふ身になつたのは、みんなお前がした事だよ。まんざらわたしも侍ひの娘、立派な武士のお姫様のあがりだよ。

うつ コレサ、いゝよ、解つてゐるワ。わしも娘が乞食になれば、よんどころなう母さんで小家へ來て御祝儀取りの乞食の婆ア。今更娘を追ひ出され、そりやモウ、譬へも云ふ、女は氏なうて玉の輿といふが、わたしらには氏も系圖も隨分あるよ。併し、そりやァ今この態だけ云はねえが、お六をば歸して下さい。女房なればたつた一人、親が附くのでたつた二人、大勢ではござりやせぬ、親子二人だ。元の鞘へ納めてやつて下さりやせう。

ト聲高にしやべる

喜兵 やかましいワ、こりやァなにか、親子相談づくで、亭主を凹ませに來たのか。コレ、ナニ凹むものか。うぬらァ出て行け。出てうしやァがれ。

ト莨盆を取つて打ちつける。

皆々 コレ〳〵、頭、年越しだわな〳〵。

ト縋つて留める。

ろく　なんだな。お前、投打ちをするの。

うつ　さうだ〳〵。その投打ちはお六にするのか、姑のわしにするのかよ。

喜兵　エヽ、二人にするのだワ。

　　ト又あたりの物を投げる。

皆々　これサ、近所へ外聞が惡いわな。

喜兵　外聞も當分も、年越しも正月も頓着ねえ。

ろく　わつちらも明いた口だから、云ひたい事を云ふわな。云ふよ〳〵。

喜兵　云つて見やァがれ。

　　トあたりを見て、紙屑拾ひの籠を取つて投げる。お六取つて又投げ返す。あちこちして、中より紙屑散亂する。皆々縋つて

すて　モシ〳〵、お六さん、とても氣の紛れた親方、モウ〳〵、元の鞘へは納まりやすまい。殊に嫁御の親許でも、祝言の晩に、乞食の女房になりそくなつては、外聞が惡いと云ひますから、マア〳〵、あの子は親分の女房にして、お前は外に何とか、形を附けてゐてはどうだえ。

　　ト挨拶を云ふ。

ろく　コレ〳〵、よしねえな。わつちも乞食の妾めかけと云はれちやア、猶々外聞が悪いよ。

うつ　コレ〳〵、お六、そんなら斯うしちやアどうだ。小家の嚊アに、お染と云ふもをかしいから、てめえの顔を立てゝ、あの嫁御の名を今から、替へてお六と

ろく　それぢやア、わたしも矢ッ張りお六かえ。

うつ　イヤ〳〵、てめえの名はお染と替へてノ、あの二人が仲の、おぬしは娘分になるがよい。

皆々　こいつは思ひ附きだ。

うつ　コレ、喜兵衛どの、それぢやア一つ小家に三人、懐で寐られさうなものだの。

喜兵　成る程、それぢやア嚊アなり娘なりだ。

うつ　サア〳〵、それで極つたら、〆めさつしやい〳〵。

皆々　〆めさつしやい〳〵。アヽ、よい〳〵〳〵。

ト手を打つて

アヽ、おめでたうござります。

ト納まる。お辰、お染の側へ寄り

たつ　モシ、お染さん、さぞお前も御苦労でござんせうが、もう極まりが附いたといふから、落ちつい

て居なさるがよい。

そめ　アイ、そりやお嬉しう存じまする。わたしや又、どうなる事かと、大抵氣を病んだ事ぢやござりませぬ。どうぞこの内にゐられまするやうに、お頼み申しまする。

うつ　オヽ、隨分ゐられるのサ。油屋の娘御が、乞食の小家にゐたいとは、お前も餘ッほどな茶人だの。

ト此うちお捨、こぼれたる紙屑の中より富の札を拾ひ

すて　オヤ〳〵、爰に富の札があつた。まだ突かねえのだ。いゝ物を拾つたわな〳〵。

喜兵　コレサ、そりやア大方紙屑の中から出たのであらう。矢ッ張りおれがのだ。

ろく　ドレ、見せな……二千五百七十番か……しかも藏前の札だの。

うつ　こりやア爰にあつたから、もし一と出たら、みんなが面附けに割るがよい。

皆々　母さん、さうしなさい〳〵。

喜兵　マア、何にしろ、おれが預かつて置かう。

ト懷中へ入れる。

すて　オヤ、暗くなつた。燈明でもともさう……コレ、今のお六さん、爰に行燈があるよ。爰に火打箱、よく覺えて置きなせえ。

そめ　アイ〳〵。もうともしませうか。
喜兵　ともさつし。晩にはおれが
ろく　エヽ、おめでたいの。

ト つんとする。お捨、指圖して、お染、行燈をともす。お捨、燈明をあげる。通り神樂になり、向うより番六、富の出番を持ち

番六　今日のお話しが四文。誠に珍らしき今日のお話しが四文。

ト 賣つてくる。皆々聞きつけ

皆々　オイ〳〵、話し屋さん〳〵。
番六　アイ、あけますか。
皆々　オイ、話しは何だえ。
番六　そこが今日のお話し、四文が買つて見なさいな。
喜兵　ドレ〳〵、買はう。一枚くんな。

ト 錢を出して買ふ。

番六　サア〳〵、今日のお話し〳〵。

ト向うへ足早に入る。皆々寄つて見て

ろく　オヤ〳〵、二千五百七十番が當り札だよ。

ト喜兵衛見て

喜兵　イヤア、こいつは當りだ〳〵。

皆々　當つたら頭割りだよ。そのマア札を、貸しなさい〳〵。

ト喜兵衛に取りつく。

喜兵　イヤ〳〵、おれが當りだ〳〵。

皆々　ハテ、山割りだよ〳〵。

トわや〳〵云ふ。この時、下座にて通り神樂、豆を打つ聲、厄拂ひの聲する。これにて皆々心づく。

すて　アレ〳〵、豆を蒔くよ〳〵。

皆々　エヽ、こいつは忙しない〳〵。

ト通り神樂に豆を打つ聲を聞いて、皆々うろたへ、お捨もこの中へ紛れこみ、捨ぜりふにて、ワヤワヤ

ト云うて向うへ一くるみに入る。喜兵衛、跡を見送り

喜兵　さて騒々しい奴等だ。誠に乞食小家へ富が落ちたを、初めて見たわえ。

うつ　ほんに、おれは又願掛けながら、白髭様へお參り申して來よう。

ろく　コレ、母さん、歸りがけに寄つて、新女房に鳥追の、稽古をしてやつて下さりませ。

うつ　成る程、明日は六月だの。さう云つても、月日の經つのは早いものだ。ドレ、歸りがけに鳥追の稽古してやりませう。お前、明日から連れ立つて出なよ。

そめ　その鳥追の稽古も致しませうが、それにしても、なぜに爰には

ト久松に逢ひたき思ひ入れ。

ろく　コレ、新女房のお六さん、今からお前は、わつちが爲には母さんだよ。

そめ　ハイ、よろしうお賴み申しまする。

ト手を突いて思ひ入れ。

ろく　オヤ、わつちはお前の娘のお染だわな。その三ツ指は御免だの。

喜兵　コレ、新女房のお六や。てめえアノ奥で……イヤ、奥といつても橋の下、うつかり立つと頭をぶつよ。

たつ　そんなら明日

そめ　アイ、よろしう稽古を

うつ　ドリヤ、參つて來ようか。

ト四つ竹節になり、うつみ、お辰、連れ立つて、橋を渡つて入る。お染、奥へ入る。兩人殘つて

ろく　サア、これからは、わたしやお前の娘のお染。お父さん、可愛がつておくれよ。

喜兵　そりやァ新女房のお六と、蒲團一つが玉の床だ。

ろく　わつちはお前をお父さんにするきまりに、コレ、乳を吞ませな。

喜兵　おきやァがれ。男に乳があるものか。

ろく　そんなら少つと抱いてくんな。

喜兵　エヽ、大きな形をして

ろく　エヽ、昔馴染だ。いゝぢやァねえか。

ト抱きつく。

喜兵　イヤ、くされはねえな。

ト思ひ入れ。通り神樂になり、向うより久作、小提灯を下げ、赤子を懷へ入れ、出て來り、花道にて

久作　源平橋の乞食小家……アヽ、向うだ〳〵。

ト門口へ來り

頼みませう〳〵。

ト云はれ、兩人悄りして

喜兵 アイ、油藥かえ。赤膏か白膏か、どちらをあげやす。

久作 イエ〳〵、赤子も抱いてゐますが、白い子ではござりませぬ。矢ッ張り赤子でござりまする。

ト お六見て

ろく なんだか、よい〳〵のやうな人が、子を抱いて來たよ。

喜兵 モシ、お前、なんで爰へござりましたえ。

久作 ちと頼みがあつて來ました。免さつしやりませ。

ト内へ入り

イヤ、わしを今からこなた衆の、仲間にして下され。それを頼みに來ました。

兩人 エ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、久作こなしあつて

久作 わしはこの小家へ來てゐると聞いた、久松が親の、庵崎の久作といふ者。以前は近江の在所の百姓、仕合せが惡さに、二人の子供を連れてお江戸へ參り、その悴の久松は、小さい時に瀬田の橋

の西詰めの袂で、拾うた久松。同じその夜に江戸の町人、油屋の太郎兵衛さまといふお方も、東詰めの橋際で、女の子を拾ひあげ、育てゝござる其うちに、鏡の宿の女郎の腹に出來た、娘のお光といふを貰ひましたが、その兩親は心中を仕損なつた科で、二人ながら非人の手下となり、もう十年も跡の事、近所の人の世話で、そのお光を貰ひうけ、久松と養子合せと思ふうち、江戸へ下つて縁でがな、同じ捨て子のお染さまの內へ丁稚奉公。主の娘御をちよろまかし、大それた二人が仲に、コレ〳〵、此やうな子まで產ませた久松め。油屋のお乳母どのと相談して、わしが方で產み落し、育てゝはゐるものゝ、その事が旦那へ聞え、二人は駈落ち、身投げの心中。お光は聞いて、久松が事を思ひつめ、此奴も可哀や井戸へはまつて死にました。まだも仕合せはお染さまと久松、命に別條なけれども、今日もやう〳〵お光が葬ひ、そこ〳〵に致しました。憎い奴でも、幼ないうちから拾うた久松、可愛うござる。それゆゑわしも非人になつて、彼奴が側に居たうござります。お頭どの、どうぞわしを、こなたの仲間へ入れて下されまし。

トこの事を賴む。よき時分より、上の方の苫船には次郎八、十年經つて老けたる體にて、出かゝつて、これを聞いてゐる。兩人思ひ入れあつて

喜兵　アヽ、そんなら今日の葬ひは、お前の貰はしつた娘の葬禮か。そんなら現在おれが

ト心附いたる思ひ入れ。

ろく　鏡の宿で里にやつた、娘であつたか。知らぬ事とて

ト喜兵衛と顔見合せて思ひ入れ。

久作　ア、、お前、知つてござりますか。

ろく　イエ〱、知らぬながらも、悲しい話し。

喜兵　數へて見れば十年跡。不思議な緣で

ト船の内なる次郎八、思ひ入れあつて

次郎　久作どの、養子娘の、お光が敵は久松か。

トこの聲に久作こなしあつて

久作　ヤ、わしを知つたは。

次郎　美濃で女の世話をした、次郎八でござる。久しぶりだ、忘れさしつたか。

ト合ひ方變り、船より出てくる。喜兵衛見て

喜兵　ほんに貴樣は、娘のお光の世話をした

次郎　晒屋の次郎八サ。江戸へ下つて大根の荷主……今聞いてゐれば、久松もこの小家へ來てゐるのか。

久作　サ、さう聞いたゆゑ、悴に逢ひに。

喜兵　イヽヤ、さうはならねえの。

久作　そりや又なんで。

喜兵　貴樣の口から聞いたが始めて。實の娘のあのお光、十年あとにおぬしの世話で

ろく　養子合せの久松が

喜兵　お染と心中、それゆゑに、悋氣半分身投げのお光、實の娘の敵は久松。今にも、うせれば、只は置かねえ。

次郎　こりやさう云ふが當り前。その又親の久作どの、この小家では置くまいし、貴樣も爰には居られまい。

久作　さういふ譯なら居ますまいが、したが、不便なあの悴。モシ、久松に、どうぞ一目逢はせて

喜兵　ならねえの。何よりはマア、久松は死にました。

久作　エ、アノ、悴めは

ろく　死んだといふには

ト思ひ入れ。

喜兵　ハテ、死んだな。死んだにしやれ。よし又生きてるやうと儘、身状の悪いあの丁稚、どうして爰に置くものか。

ろく　さう云はんすりや有やうは、お光が死んだも久松ゆゑ。元の起りは油屋の

喜兵　お染があるから娘も死んだ。云はゞお染もお光の敵。もうさう聞いては色戀も、捨てゝしまつてあのお染、いつそ彼奴を

ト側にある出刃を取つて、奥の方を見やり、腹の立つたる思ひ入れ。お六、こなしあつて

ろく　そんならお前は、娘の敵を。

喜兵　サ、武士なら討たうが情ない、そこが非人のやら腹立ち。思つたばかりに、まんざらさうも

ト出刃を捨てる。お六見てさてはトこなし。

次郎　あの油屋に質入れの、名前は道具屋作助でも、元は貴様が置立てと、聞いたる品は美濃路にて、朝長が失なうた、雲龍の印とやら。源氏の武士が厳しい詮議。

喜兵　ヤ。

次郎　その又印を非人のおぬしが、どうして手には

喜兵　イヽヤ知らねえ、知りやせぬ。乞食のわしが、なんで其やうな

次郎　よもや知るとは云はれまい。知つたと云へば源氏の身寄り、それを欲しがる西國順禮、夫婦者だが、此奴も詮議の

喜兵　その詮議よりお前の世話で、やつた娘は種なしに、今々思へばお前が恨みだ。

次郎　それも間抜けな久作が、あまく育てたあの丁稚。

久作　その久松が殘した幼子。

次郎　いはゞこなたの首枷だ。きり〳〵ござれ。

ト久作を外へ突き出す。

久作　歸りまするから、もし爰へアノ久松が

喜兵　居ませぬよ……ア、お前も後世が

久作　悪いも子ゆゑに

ろく　迷ふも道理、身につまさるゝ

喜兵　恨みはお染。

ト思ひ入れ。

次郎　質はいよ〳〵

喜兵　存じませぬ。

ト唄、時の鐘になり、久作は子を抱いて向うへ、次郎八はあたりを見廻し、船の内へ入る。喜兵衛、

あと見送り

コレ、嚊アや、いま次郎八が、をかしらしいあのせりふ。白を切つたが有やうは、おれが出世の手蔓はあの品。今からちよつと様子を聞きに

ろく　行つて來なさんせ。どうやら雪に

喜兵　傘を持つて行かう。

ト下駄を穿き、番傘をさげて、外へ出て、思ひ入れあつて

十六にまでなつた娘、水死したのも思へばお染。彼奴もあの世の道連れに

トきつと思ひ入れ。

ろく　すりや、どうでも

喜兵　嚊ア、まだ豆も蒔かなんだ。

ト唄、かすめて通り神樂、思ひ入れあつて向うへ入る。お六殘つて

ろく　主とわしとがその仲に、出來た一人のお光ぢやもの、腹の立つのも尤もながら、何にも知らぬお

染どの、もしもの事がある時は
　　ト思ひ入れ。この時、上の番屋の内にて
賴朝　アヽ、あの河岸の家か。心得た〳〵。
　　ト合ひ方になり、絆纏を引ツ張りたる形にて、賴朝出て來り、下手へ來り、お六を見て
　コリヤ〳〵、女子、其方が館に、盆に入りし鹽があらう。少しも早う、これへ持て〳〵。
　　トお六、悄りして
ろく　オヤ〳〵、大風を極めるの。なんだお前、十二座に出るのか。そしてお前、どこから來たのだ。
賴朝　予はあの陣屋から參つたが、鹽は無いか。
ろく　ナニ陣屋だえ。コレ、番屋の事ぢやアねえか。
賴朝　慥か左樣にも申した。
ろく　そしてお前は、あの番屋の、何だえ。
賴朝　予は今日參つた番次郎ぢや。
ろく　ナニ、番次郎とは、何の事だえ。
賴朝　イヤ〳〵、次郎ではない、太郎ぢや〳〵。

ろく　アヽ、番太郎さんか。
賴朝　その太郎々々……コレ、女、そこらに鹽は無いか。
ろく　わつちは知らないが、そこらを見な。
賴朝　爰らに置いたと申して

トあたりを尋ねて鹽を見附け

オヽ、あるぞ〳〵。爰にあつた……コリヤ、女、爰に彼の芋を洗うた桶があると申したが、これかく〳〵。

ト早桶へ手をかける。

ろく　アヽコレ、そりやァお前、死人の晒してあるのだわな。
賴朝　アヽ、左樣か。番屋の主の申すには、菜漬とやらを致すゆゑ、桶が入用と申すゆゑに
ろく　その桶なればそこにありやす。コレ、お前、番太の見習ひなら、附木を一把持つて來な。
賴朝　附木とは、暗夜を照らす品か。
ろく　ナニ按摩だ。そいつは幸ひだ。爰へ來て揉んでくんな。
賴朝　揉めとは、肩を揉むのか。

ろく　さうよ。ちよつと揉んでくんな。

頼朝　これはしたり、番太といふものは、さま〴〵な事を致すて。

ト お六の後へ廻り、肩を揉む。

ろく　コレ〳〵、お前、わつちやァ癪氣だから、胸のあたりを撫で下げてくんな。

頼朝　胸とは、このあたりかな。

ト 手をやる。

ろく　もつと下だよ。

頼朝　然らば、この腹を打通つて

ろく　ぐつと下だよ。

頼朝　まだ下か。

ろく　エヽ、氣のきかねえ按摩だの。

ト 突きとばす。頼朝、早桶の際へこけかゝり、桶は倒れる。内より經帷子、胡麻鹽あてし善六の死骸ころげ出る。兩人これに心附かず

見たところが、兜人形の賣れ殘りのやうな人だが、まんざらでもない男前。乞食小家へ鶴だの。

頼朝　コレ、お前、わつちときみあつて見な。

頼朝　成る程、出陣いたしてより、婦人に遠きは戰の習ひ。この所にて女子を捕へて、組附くと致さうか。

ろく　エヽ、少し洒落るの。亭主は留守だよ。爰へ來な〳〵。

頼朝　併し、急な働きはちと致し憎い。物の具に身を固めて居るゆゑ

ろく　エヽ、憎い口だの。

ト頼朝の口の端を抓る。

頼朝　アイタヽヽ……組附きも致さぬうち、無念や後れを取つたわえ。

トこの時、頼朝、懐より平家追討の綸旨を落す。お六、取つて

ろく　こりやア文かえ。

ト云ふを

頼朝　アヽコレ、それは

ト取らうとする。お六、見ようとするゆゑ、頼朝、追ひ廻して取らうとする。お六逃げて歩く。トヾ二人して思はず善六を踏む。急所を踏まれ、善六、氣の附きし思ひ入れ。これを知らず、あちこち追

ひ歩くを見て、善六、羨やましげに見惚れ

善六　イヨ〳〵、うまいな〳〵。

トこれにて兩人見附け、恟りして

頼朝　ヤ、ありや何ぢや〳〵。

ろく　コレ……、お前は何だ〳〵。

善六　ナニ、おれか。おりや油屋の番頭ぢやが、さう云へば我が身ながら、おれもこの形が合點がゆかぬ。

ト思案する。

ろく　コレナ、合點のゆかぬ事はねえ。お前は死んでノ、その桶へ入つて、今まで爰に晒してあつたのだが、お前、蘇生つて來たのだよ。

善六　ア、さうか。そんならお染と久松を、尋ねに出て死んだのか。イヤ、そいつは大變〳〵。

ト立騒ぐ。

頼朝　コリヤ〳〵、女子、今の書き物を、返してくれ〳〵。

ろく　イエ〳〵、何か面白さうなこの文、ちつと讀ませな。

頼朝　イヤ〳〵、それは決して左樣な

善六　女の文なら、久松からお染へやるのか。ドレ〳〵、おれも

ト お六の持つてゐる綸旨を手早く取る。

ろく　エヽ、よしねえな。

ト 云ふを拂つて、件の綸旨を取つて

善六　そんならこれが、女の文か。

ト 灯にかざし、思ひ入れあつて

ヤヽ、こりやコレなんだ。兵衞の佐へ、法皇と

ト 思はず讀むを、頼朝、拔討ちに切る。善六、ワツと倒れる。お六、飛びのき、慄ふ。

頼朝　大事ない〳〵。予が大切のその御綸旨。下郎の身として

ト 切りつける。善六、よろぼひ寄つて

善六　ヤ、おのれ、切つたな〳〵。人殺し。

ト 通り神樂になり、有りあふ物を持つて頼朝へ打つてかゝる。兩人、意氣地なき立廻り。お六、側より件の鹽を取つて

ろく　鬼は外……。

ト善六に打ちつける。善六の疵口へ、鹽のかゝりし思ひ入れ。

善六　人殺し。切つた〳〵。

ト聲立てんとて、疵口痛む思ひ入れにて、五體をいろ〳〵と怪しき身振りをして、べつたりと倒れる

頼朝　そりや〳〵、爰らで

ろく　止めの鹽かえ。

トまた鹽を浴びせる。綸旨落ちてある。頼朝、死骸を早桶へ入れようとしても入らぬゆゑ

頼朝　このマア死骸を、爰らの川へ

ろく　手傳ひやせう。

ト二人して、上の方、川の中へ死骸を轉がしこむ。

頼朝　亡者め、二度死を致し居つた。

トこの時、唄、通り神樂、捨て鐘。向うより喜兵衛歸り來り、花道にて

喜兵　あの油屋へ預けた品を、質取つたるは夫婦の順禮。二人の者を詮議して

トすた〳〵と來て

いま帰つたぞ。

　　　　　　　　　ト これにてお六、悔りして

ろく　喜兵衛さん、早かつたの。

　　　　　　　　　ト 思ひ入れ。喜兵衛、目を附け

喜兵　コレ、嬶ア……ではないお染、おれが留守にあの人は、どこからござつた。

ろく　サア、あのお人は、アノ、火の番屋から

頼朝　コレ、予は番太郎ぢや〳〵。

喜兵　ナニ、番太郎だ。ハテ、番太には

　　　　　　　　　ト 思ひ入れあつて院宣を見附け、手早く取つて思ひ入れ。

　　　ヤ、こりやコレ平家追討の

　　　　　　　　　ト 頼朝、ちやつと取つて

頼朝　綸旨と讀みし匹夫の人相。只者ならぬ

　　　　　　　　　ト 思ひ入れ。

喜兵　乞食小家でも主の留守に、わしが嬶アと差向ひ。公卿でも武士でも間男と、云つたら貴樣は

頼朝　隨分よろしい。見所のある主の面體、女房とあらば猶以て、たとはゞ非人乞食なりと

喜兵　アノ間男に

頼朝　なつて得させう。

喜兵　ハテ、只人ならぬ。

ろく　そのお方ゆゑ此方から、仕掛けて見てもこなさんの、今ではわたしは娘のお染。

喜兵　成る程、それでは間男に

頼朝　よし成らいでも娘とあらば、陣所へ連れゆき、徒然の憂を

喜兵　晴らすあなたは大方に、牛田若宮隅田川、陣取りありし、慥かに源家の

頼朝　その落ちぶれし落武者も、石橋山の不覺の戰ひ。

喜兵　兵衞之佐どの金瘡と、聞いて用意の、コレ

　　ト油藥の看板を取つて

非人が家傳のこの良藥。

　　ト出す。

ろく　文字は變れど源平橋の、その橋下は住み馴れし、毛生え藥の蝙蝠も

頼朝　福の機緣で牡丹花の、花ぞ咲きけり軒端の白梅。

喜兵　爰で名代の梅ヶ香や、乞食の小家も覗かるゝ、その紅白の白膏赤膏、どちらなりとも

ト看板を出す。

頼朝　その赤膏の平家にも、まだも劣りし長田が身内。

トお六に目を附ける。

ろく　さてはわたしを、長田の身寄りと

頼朝　長田ぶるひも寒明けの、ちらつく雪に一しほの

ト赤膏の看板を火鉢へ打込む。

ろく　白きは今に降りける雪の

喜兵　雇ひの番太。

頼朝　乞食のお頭。

ろく　また來る春に

喜兵　あうてめでたき

トこの時、件の火鉢より、看板燃え立つ。お六、手早く有りあふ手桶より柄杓を取つて燃え火へかけ

ろ。賴朝、思ひ入れあつて

賴朝　火の用心、さつしやりませう。

ト唄、時の鐘になり、雪降つてくる。賴朝、有りあふ割り竹を引いて向うへ、お六、思ひ入れあつて白膏の看板を持つて、奥の方へ入る。喜兵衛殘つて思ひ入れ。

喜兵　綸旨を所持するあの御方、それと云はねど、慥かに兵衛の

ト思ひ入れあつて

石橋山にて受けたる金瘡、平癒あるのは

トこなしあつて、有りあふ出刃を取つて口に咬へ、キツと思ひ入れ。時の鐘を打込み、奥を見やつて行燈を吹き消し、小聲になつて

コレ、お染。今の女房の、お染〱。

ト呼ぶ。爰にて忍び三重になり、奥よりお六、やつしの上にお染の振り袖上着を引ツかけ、下着形のお染、袖頭巾に顔を隠したるを手を引き、いま持つて入りし白膏の看板に、書置と書きしを持ち、探り〱出て來り、外へ逃げんとするを、喜兵衛、探り寄つて袖を捕へるゆゑ、是非なく、あたりなる早桶を探り、思ひ入れあつてお染へ手早く件の桶をかぶせる。喜兵衛、心附かず

中幕



大切



コレ〳〵、お染、知つての通り女房が燒餅で、內へはどうも置き憎いによつて、遠いあの世に

ト振り袖をたぐつて、お六をお染と思ひ、出刃にてしたゝかに切る。これにて「ワツ」と苦しみ、あちこちするうち、喜兵衞はお六を突いて廻り、立廻りのうち、お六、持つたる白膏の看板を喜兵衞へ打ちつけ、タヂ〳〵として、上の方、川の方へ行く。喜兵衞、件の看板に心附かず、追ひかけ〳〵川の端まで行く。この時、後の橋の方にて

左四　心中だ〳〵。

ト大音に呼ぶゆゑ、喜兵衞あわてゝ振り返り、思ひ入れあつてお六の首を切り、こなし。左四郎は

爰ではならぬ〳〵。

ト喚くゆゑ、喜兵衞うろたへ、死骸を川へはめ、首を有りあふ火消し壺へ入れる。左四郎、月行事といふ弓張り、六尺棒を持ち、矢張り喚き〳〵、根引、順禮の女房にて、前幕にお染の着たる振り袖を上に着て、清兵衞、やつしの上へ、久松が心中のとき着てゐたる小袖を引ッかけ、兩人とも派手なる姿。左四郎、せり立て〳〵、連れてくる。喜兵衞、我が家の取散らしたるを片附けて

喜兵　モシ〳〵、また心中があるのかえ。

左四　さうサ、聞かつしやい。この二人は、この頃このあたりを修行の順禮。お祭に出るやうな對の形

で、すんでの事に橋の上で、心中と見た。コレ、貴様達も、大晦日だといふに、爰らで死なれて堪るものか。一夜越して春長に死ぬがよい。サア〳〵、外にござれ〳〵。

ト二人を「外へ〳〵」と突きやる。爰にて雪降つてくる。

根曳　左様なら、このあたりで死ぬ事は叶ひませぬかえ。コレ、こちの人、とても死ぬなら、爰のあたりで

清兵　サア〳〵、おれもさう思ふから、二人着替へたこの形も、どうぞ爰らで死にたい願ひ。

左四　爰で死なれては、町役の難儀。節季師走、心中とは、好い機嫌の手合ひだ。

喜兵　さうサ〳〵、よく見附けなすつた。さう云つても、心中が流行りものだよ……モシ、灯をお貸しなさい。

ト提灯の灯を行燈へ移す。

左四　コレ〳〵、この二人は渡したから、隣り町へ送り出してくりやれ。おれは又、店賃も集めねばならぬ。

ト行かうとする。

喜兵　アヽ、申し〳〵、大家さんの役だ。この心中は、外へ連れて行きなさいな。

左四　ハテ、大晦日だわな。心中どころか。好い機嫌な手合ひだ。

ト通り神樂になり、弓張りを持ち、向うへかゝる。この時、揚げ幕より久松、以前の道具をかたげ、雪を防ぎ、歸り來り、左四郎と摺れ違ひ、舞臺へ來る。左四郎は向うへ入る。久松、二人の形を外より見附け、我が心中の形ゆゑ、心得ぬ思ひ入れにて、外より窺ふ。

喜兵　コレ〳〵、心中の衆、町役人もあのやうに云ふゆゑ、この近所で心中は出來ねえほどに、さう思つて、外へござれ〳〵。

根曳　そりや後々の御難儀、御尤もではござりますれど、ならう事なら、わたしら二人が

清兵　どうでも爰では死なれませぬか。

根曳　こちの人

清兵　女房……ハテ、殘り多い事ぢやわいの。

トさし俯向いて思ひ入れ。久松、これを聞いて

久松　すりや、この二人は心中に、お染さまと久松が、死出の晴れ着を

清兵　ヤ。

ト思ひ入れ。久松も心得ぬこなし。

喜兵　コレ〳〵、久松、歸つたか。どうで仕事は役に立たず、丁度よい役が出來た。コレ、この二人はいま爰で、此やうな形で既に心中。家主が見附けて、預けて行つたが、此まゝに置いたら、また死なうも知れぬほどに、てめえに預けるから、もし死なうとしたら、呼び立てろ〳〵。コレ、われにきつと二人を、預けたぞ〳〵。

久松　左樣なら、この二人の衆が、いよ〳〵心中。殊に小袖も、あの時殘せし

ト目を附けて思ひ入れ。

ハイ、きつと番を致すでござりませう。

喜兵　その代り、寒くば、コレ〳〵、火鉢は爰に。古木を焚いて、あたれ〳〵。おれは又、每年の仕切りを先に、今夜のうちに調べて置かうか。

ト雪下ろしになり、あたりより帳を出し、これを開き見る事。兩人は久松を見て、囁きて思ひ入れ。久松、眞中に坐り、火鉢にて火を焚く事よろしく、何心なう二人を見て

久松　お前方は、どこの人かは知らねども、死ないでもよい事なら、見す〳〵若い身でもなし、殊に二人が着てござる、派手な小袖は、そりやア大方、三圍の

清兵　よう知つてござるの。この間、女房と二人連れで、通りかゝつた庵崎の、土手の樹木にかゝつて

あつた二人の小袖。

根曳　わたしら二人も有やうは、死ぬる心の川傳ひ、枝にかゝりし男女の小袖は、こりや二人ともこれを着て、爰で死ねとの天道の、敎へと思うて持ち歸り、今また夫婦が假に着て

久松　それで二人の夫婦の衆、どうでも死ぬか。

喜兵　その又仔細は。

淸兵　生きてゐられぬわしらが身の上。

根曳　恥かしながら

兩人　聞いて下さりませ。

ト望みの合ひ方。喜兵衞はよき所より、線香と、件の香爐を取つて來り、火消壺の前へ置いて、蔭ながら回向の思ひ入れ。

淸兵　もと私しは武州の浪人、樣子ござつて上方商人、この女房は大津なる、柴屋町に藝子の勤め。互ひに變るな變らじと、云ひ約束の二人が仲。

喜兵　コレ〳〵、心中さん、素敵に受けさせるの。

根曳　藝子勤めの其うちに、いつしかわたしも姙娠の、只ならぬ身をやう〳〵と、產み落したる双子の

初産。廓の手前、世間の聞え。女子の小兒は瀬田の西詰め、男子の方は東の橋際、西と東へ引分けて、捨てる程なる心でも、拾うて下さるその人の、もしやあるかとあたりを去らず

清兵　小蔭に忍び窺へば、江戸の商人油屋の、太郎兵衛といふお人、通りかゝつて女子の方を拾ひあげ、また男の子の方は、近所の百姓久作といふお人、子供の納まり知れての安堵。それから二人はお江戸めぐり。所は淺草瓦町、油屋の太郎兵衛どのを尋ね

根曳　我が子の身の上如何ぞと、近所のお方に樣子を聞けば、旅で拾うて養育し、その名もお染と兩親の、眞身の子よりもいつくしみ、深い惠みと御夫婦を、朝夕拜んで居ります。

清兵　その御近所のお方の話し、子飼ひの丁稚と譯ある仲と、よく／＼聞けばその昔、久作といふ百姓が、拾うて育てし捨兒の久松。さすれば親身の双子の同胞。

根曳　二人の子供は生きながら、畜生道へ落ちたも同然。それゆゑ二人の命に代つて、わたしら夫婦が

喜兵　ヤヽ、それでは二人は

久松　そんなら丁稚久松と、お染さまとは誠の同胞。

喜兵　その畜生がこの小家へ。

久松　思へば惡緣。

ト喜兵衛と顔見合せ、二人の親々を見て「ハツ」と泣き伏す。此うち根曳、目を附け
ト思ひ入れあつて

根曳　身につまされてかお前の嘆き、思うて見れば似寄りの年配。まだその上に大それた、お主の娘を連れての駈落ち、身を投げ死んだとあるゆゑに、枝にかゝりし子供の小袖、形見と思うて肌身に添へて。

清兵　まだしも死ぬ子は恥もなう。それに引かへ助けられ、乞食の手下へ下るとは、命があつて恥の上塗り。殊に可哀や久作どのゝ、養子合せの娘のお光、二人が心中聞くにつけ、身を投げて死ぬその葬禮、寺の門で聞いてゐたが、憎い相手の丁稚ぢやと、世間の人の口の端に、かゝる譏りを知り居らぬかいやい。

トきつと思ひ入れ。よき時分、うつみ、件の赤子を抱へ、橋を渡つて出て來り、小家の外に立つて、この話しを聞きゐたりしが、この時

うつ　コレ〳〵、喜兵衛どの、いま爰へ來た久作どのといふ人が、身に迫つたる事あつて、この幼子を川端へ殘し置き、いとしや身を投げ、死んだわいの。

久松　ヤヽ、アノ父様が

清兵　ナニ、父様とは。

根曳　お前の親御か。

久松　アイヤ、全く左様な

ト思ひ入れ。

喜兵　よもやそれとも云はれまい。云はうやうなき、その惡人の久松お染。誠の魂ひあるなれば、よもや生きてはゐられまい。

清兵　それゆゑにこそ兩親は、恥を思うて死ぬ覺悟。その上又も久作どの、捨てゝ死なれし幼子は

根曳　お染久松その仲に、出來たその子を、モシ

兩人　現在孫の

、ト兩人、赤子を抱きあげ、キツと顔を見て

よう面ざしが

ト久松の顔と見くらべ、こなしあつて

かゝる因果もあるかいやい。

ト泣き落す。皆々思ひ入れ。

うつ　他人のわたしも因果の話し。十年あとの心中に、一人の娘も喜兵衛ゆゑ、非人となつて親子三人、思へばこれも皆約束、天の御罰は情なき、遂にその身を尾張の國、主人は美濃の

喜兵　アヽコレ、それゆゑ連れそふ女房の、縁に引かれて御勘當。

うつ　縁が切れゝば、こなたは以前の

ト火消し壺へ思ひ入れ。

根曳　して、久作さんの、水死の場所は。

うつ　この川筋の鐘が淵。

根曳　せめてその地へ尋ね行き、回向なりとも。

清兵　男の餓鬼めが恩あるお人。其方は密かに……併し、これなる幼子は

うつ　そりやこの婆が拾うたからは、娘が小家で育てゝやる。喜兵衛どの、親は無うても、お六に、この子を

ト喜兵衛へ赤子を頼む。

喜兵　他人のいらぬ世話ながら、そこが非人の皆役目。兎角近所に事なかれ。

清兵　そんなら、その子は

喜兵　親は乞食へ渡つた二人。その子は爰へ、殘してわしが
根曳　囘向の次手、二人の小袖も、流れは淸き宮戸川。
淸兵　あの川筋へ直ぐに水葬。
久松　水の流れと人の身は
うつ　浮き沈みたるこの姿も、昔思へば、名におふ長田の
喜兵　アヽコレ。こなさん、案內。
うつ　サ、女中さん。
淸兵　囘向して來やれ。

ト唄、時の鐘になり、根曳、心中の小袖二つを持ち、うつみ先に立ち、向うへ。淸兵衞は橋の方へ、渡りて入る。喜兵衞・久松殘り、赤子この時頻りに泣く。久松駈けより、いぶりつける。雪、頻りに降つてくる。

久松　オヽ、この雪風に冷えるであらう。この上可哀や親のない幼子。親はあつても、ある甲斐なき
喜兵　若衆の父樣、その上に、その畜生が非人の小家へ

ト白膏の看板落ちてあるを、喜兵衞、取上げて見て

「親と一つにあらざる云ひ譯、未來ばかりは」……ヤ、お六が手蹟。さては長田が娘ゆゑ、その身の納まり

久松　ヤ。

ト思ひ入れ。最前より火鉢の燃え火、早桶の箍へ燃えつきゐたりしが、この時、箍焼け切れて、ポンと竹の焼ける音して、桶はバラ／＼と毀れ、中よりお染、袖頭巾を持つたるまゝ、思はず出るとて、こけかゝりし途端に、火消し壺砕けて、お六の切り首出る。久松お染、顔見合せ

久松　お染か。

そめ　久松、そこにか。

喜兵　ヤ、さてはお六は

兩人　エ。

ト振りむく。喜兵衛は切り首を隠す。二人は顔を隠す。喜兵衛は屋體の内にてホッと思ひ入れ。これをキッカケに獨吟になり、屋體軒口より簾下りて、喜兵衛を隠す。兩人殘りて、手を取りかはし、泣き落す。お染、桶の内にて委細を聞き、癪の起りし體。久松いたはる事。赤子泣く。お染苦しむ。久松、兩方をいたはり、あちこちするうち、唄一くさり切れる。兩人、思ひ入れあつて

そめ　お六さんの情にて、あの桶の内に忍びゐて、この身の素性は聞いたれど、よし眞實の同胞にせよ、
離るゝ事は、わしや否ぢやわいの。

久松　そりや私しも同じ事。世にも稀れなる因果の二人、氷の地獄阿鼻焦熱、劍の山の苦しみも、なん
のいとはう、お染さま。

そめ　素性を聞いて久松さん、わたしも變る心はない。死なばもろとも二世三世。未來かけての

久松　さるにてもこの幼子、冥土へ道連れ、死ぬる刃物は、コレ

ト直しの籠より庖丁を二本出し

この刃物にて畜生の、かはきる刃物が身に幸ひ。お前もこれで

ト渡す。

そめ　嬉しうござんす。この世からなる畜生の、身の成る果は乞食の使ふ

久松　刃物が相應、いさぎよう。

そめ　とても二人は穢れたる

久松　未來へ道連れ

そめ　共にあの世へ

兩人 南無阿彌陀佛。

ト獨吟の上げ。久松は赤子を刺し通し、腹へ突ッ込む。お染も咽喉を突く。この時、簾の内にて

喜兵 死神誘ふ二人の者。水死の難は遁がれても、遁がれがたなき劍難に、同胞不義のお染久松、流石は武士の胤ほどあつて、忠死の有樣。お役に立つぞ。兩人 喜べ。

そめ ヤヽ、賤しき二人を武士の胤

久松 忠死なしたを、お役に立つとは

兩人 何ゆゑに。

トきつと思ひ入れ。

喜兵 健氣な二人。我が本心も

トよき時分、笘船より次郎八出かゝりゐて

次郎 さてこそそこなたは源氏の身内。この旨早く

ト駈け行かんとする時、件の簾を破り、喜兵衛、結構なる形にて飛んで出て、次郎八を投げのけ、頭巾脱ぎすて、キッとなる。

兩人 ヤヽ、主のお方の、この體は。

清兵　その疑ひは前司盛次、それへ參つて云ひ聞かさん。苦痛ながらも、兩人しばし。

ト鼓の合ひ方になり、清兵衞、上下衣裳に改め、ツカ〳〵と出て、小家の入り口へ來る。兩人見て

久松　ヤヽ、最前お出での親人樣。

そめ　お顏はそれと拜まねど、お聲ばかりを聞きつるが、さてはあなたが

清兵　其方達二人を捨てたりし、邪慳な親の身共こそ、平家の侍ひ、越中の前司盛次。氏も系圖も正しき二人。

喜兵　我れも名乘れば義朝公の近臣、江田の源三廣綱。御勘氣うけしその砌り、長田の太郎が妾腹たる、お六と知らず婦妻となし、娘一人儲けしは、未來にまします御主君へ、申し譯なき身の誤まり。一つの功をと思ふうち、心を察して女房お六、お染に代つて我が手にかゝり、武士道立てさす天晴れ貞女。くど〳〵書かぬ心のうち、書置とのみ記せし掛け板。

ト件の看板を出す。

清兵　この盛次は我が君の、襲はれ給ふ恐怖の病ひ、用ふるところの良藥こそ、廿歳滿たざる男女同性得道なして死したる生血、取り得ん爲に女房もろとも、瀬田に捨てたる双子の行くへ、尋ね求めて東路へ、下り來るも御主君の、御惱みを治さんが爲。

喜兵　廣綱とても頼朝公、手疵の悩みも男女の生血、それを取り得ん心より、お染久松手許へ引入れ、血汐のお役に立てんず計略、それと明かさば禍ひあらんと、お光が敵は久松お染、死したる娘へ手向けんと、申せし事ども聞きたる女房。お染に代つて覺悟の心底。さは知らずして殺せしは、これぞ長田が血筋の報ひ。

清兵　然らば御身も兵衞之佐どの

喜兵　貴殿も主君の御悩に用ゆる

清兵　その良藥は源平兩家。

喜兵　源平橋の乞食小家。

そめ　添ふに添はれぬ因果な二人。

久松　血汐お役に立つなれば、死ぬる今際にこの身の喜び。只悲しきは

兩人　これなる幼子。

ト兩人苦痛のうちにて赤子へ思ひ入れ。次郎八、心附いて

次郎　いよ／＼喜兵衞は源氏の武士。注進なして

ト行かんとする。喜兵衞引留める。立廻つて次郎八を見事に切り捨てる。この時早め、ドン／＼、

貝鐘に合せ、「エイ、〳〵オイ」と鬨をあげる。

喜兵　あの人聲は。

ト揚げ幕にて

頼朝　源平兩家の武士へ、兵衛之佐が見參々々。

トかけり、ドン〳〵になり、向うより頼朝、甲冑の形凛々しく、金の采を持ち、跡より小兵衛、豆藏、三助、はれ七、いづれも陣羽織、胴丸、手甲臑當て、凛々しき形にて弓矢を持ち、陣笠の軍兵大勢、笹龍膽の弓張りを照らし、一散に出て來り、頼朝は上の方へ、皆々よろしく屯ろする。

軍兵　ドツコイ。

ト極まる。

清兵　さては御身は兵衛之佐どの。

頼朝　武藏の國に陣取りして、近きに平家追討の

小兵　御旗揚げの御大將、味方に下りし某は、顔の赤いを幸ひに、乞食の閻魔と樣を變へ、入込む我れは源氏の武士、赤井の藤太重宗。

豆藏　我れも名乘れば源家の忠臣、千葉の五郎胤久。

三助　喜兵衛といふは只者ならずと、君へ言上いたせしは、葛西の六郎重清。
はね　榛谷四郎則氏も、賤しき非人の物貰ひ、姿を變へて近郷近在
小兵　隅田川原に出陣なし、直さま都へ
皆々　出馬の我が君。
喜兵　されども手疵の御惱み。今こそ手に入るこの生血。
頼朝　命の恩は何に譬へん。禮は未來で
久松　汚名を清むる
そめ　二人が願ひ。
兩人　この行く先は

ト兩人思ひ入れ。

清兵　冥土の旅の一里塚。
喜兵　それも妹背の門松立て

トこれにて明六ツの鐘。鷄の聲。橋の向うへ朝日を引上げる。皆々見て

頼朝　末期の際の初日の出。

清兵　弘誓の船も長き世の

喜兵　とうの眠りの夢覺めて

久染　やがてあの世で

ト兩人手を取つて思ひ入れ。この時、下座にて

呼び扇々。

ト通り神樂。

賴朝　あの呼び聲も未來の土產……不便な二人が

清兵　最期に愛でゝ某が、源氏へ年玉

ト件の印を打ちつける。喜兵衞、手早く取つて

喜兵　こりや某より、外手へ渡せし

四人　これぞ正しく雲龍の

喜兵　御判は君へ。

ト賴朝へ渡す。

清兵　初日まばゆき平家の榮え。

賴朝　やがて明けゆく源氏の榮え。
喜兵　そのうらゝかに堺町。また春永に
三人　逢ひませう。
軍兵　お立ち。
皆々　さらば。
喜兵　先づ今日はこれぎり。

めでたく　打出し

昭和二年二月八日印刷
昭和二年二月十一日發行

『大南北全集第十一巻』

非賣品

校訂 坪内逍遙

編纂者 渥美清太郎

發行者 東京市日本橋區通四丁目五番地 和田利彦

印刷者 東京市小石川區諏訪町五十六番地 堀江關武

印刷所 東京市小石川區諏訪町五十六番地 常磐印刷所

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 春陽堂

